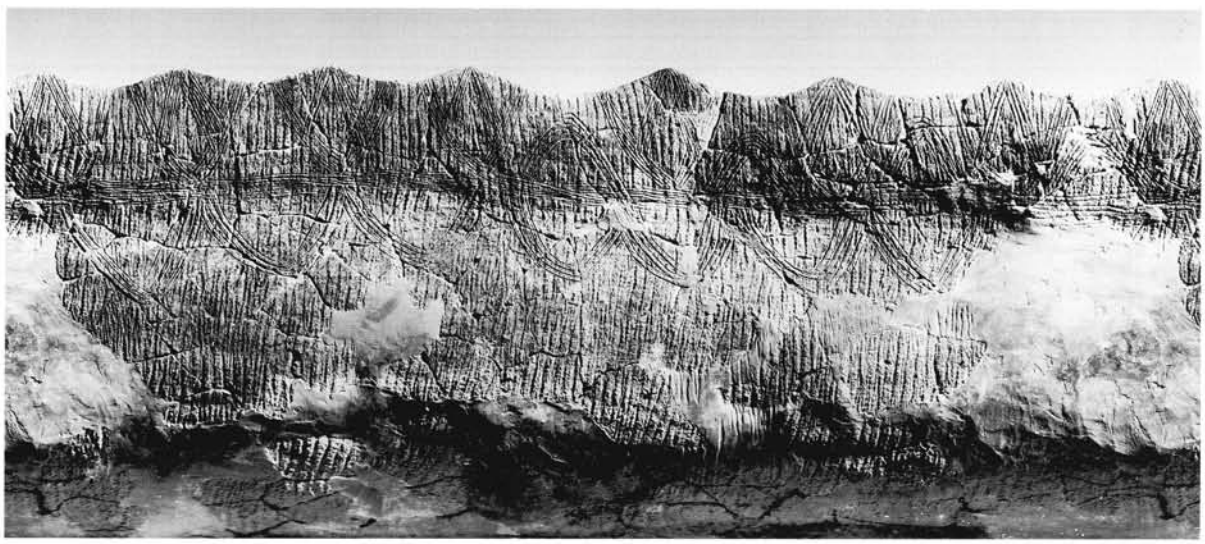
昭和61年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告 I

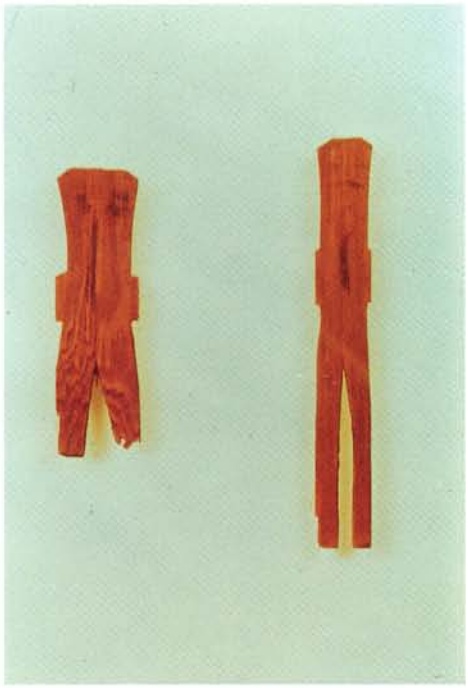
—本 文 編—

1989・3

三 重 県 教 育 委 員 会



辻垣内遺跡　縄文土器　深鉢　　展開写真



杉垣内遺跡　人形木製品（1:2）

深長古墳　二重口縁壺（1:3）

序

地方の時代といわれる今日、地方文化の見直し、育成は、地域の活性化をはかる重要な施策のひとつであります。各地方に根ざした文化には、悠久の太古から先人が大地にその歴史を刻んできた埋蔵文化財があります。現代の開発は、この大地に新たな歩跡を刻むのではなく、根こそぎ破壊する危険性を孕んでおり、埋蔵文化財の保護には、あらゆる開発との調整が必要になっています。

ここに報告する10件の遺跡は、農業生産性の向上および水田利用再編対策の目的のために実施されている農業基盤整備事業により、再々その保護協議がなされて、最終的には発掘調査により記録保存をはかったものであります。これらは各々の地域におけるだけでなく全国的にみても重要な遺跡であり、その成果の活用を広く求めるものであります。

今回の調査に際しまして、終始、協力を惜しまれなかった県農林水産部の各関係機関、また現地にあっては、各土地改良区をはじめ地元の多くの方々の暖かいご理解とご援助を得ましたことは誠に感謝に堪えないものであります。

三重県教育委員会

教育長　中林　博

例　　言

1．本報告書は、昭和61年度農業基盤整備事業地内にかかる埋蔵文化発掘調査の結果をまとめたものである。

2．発掘調査経費は、農家負担分を三重県教育委員会が昭和61年度国庫補助金の交付を受け、その他については三重県農林水産部が負担した。

3．調査のうち、試掘調査は、三重県農林水産部の関係農林水産事務所が文化課職員の立合いのもとに実施した。

4．発掘調査は、次の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会事務局文化課

調査協力　三重県農林水産部、各農林水産事務所、各土地改良区、各教育事務所、各市町村教育委員会

5．遺物整理・報告書作成は、調査担当者があたり、全体を駒田が編集し、各項目の文末に文責を明記した。

中戸遺跡・辻垣内遺跡の縄文土器の整理には、千葉豊（京都大学埋蔵文化財センター）、川崎保・穂積裕昌（同志社大学学生）各氏の協力を得た。

また、杉垣内遺跡・堂ノ後遺跡・深長古墳の遺物実測には、平子弘・豊岡勇・小高昌久・小林秀・江尻健・堀田隆長（昭和63年度埋蔵文化財技術者研修員）、和気清章（津市教育委員会　調査補助員）、服部芳人・中島千年・伊藤裕偉（文化課　主事）、油田秀紀（文化課　調査補助員）垣内眞佐江諸氏の協力を得た。

遺物写真は、駒田・田村陽一・田中久生が担当し、遺物整理には、市川嘉子・藤井羨子があたった。

6．本報告書には、千葉豊氏の“名張市赤目町辻垣内遺跡出土の縄文土器”及び“近畿地方出土の埋設土器について”の論考を付篇として掲載させていただいた。

7．巻頭写真「辻垣内遺跡の縄文土器展開写真」は小川忠博氏の撮影による。

8．本書に用いた遺構標示の略記号は次による。

ＳＢ：竪穴住居・掘立柱建物　ＳＥ：井戸

ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＸ：その他

9．本報告書に用いた方位は、磁北である。

10. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

前　　言 …… 1

Ⅰ　鈴鹿市三宅町　橋門遺跡 …… 7

Ⅱ　一志郡白山町　算所遺跡 …… 27

Ⅲ　一志郡嬉野町　東野遺跡 …… 39

Ⅳ　松阪市深長町　杉垣内遺跡 …… 53

Ⅴ　松阪市深長町　深長古墳 …… 135

Ⅵ　松阪市深長町　本堂遺跡 …… 169

Ⅶ　松阪市深長町　堂ノ後遺跡 …… 175

Ⅷ　松阪市野村町　赤城遺跡 …… 211

Ⅸ　名張市赤目町　中戸遺跡 …… 217

Ⅹ　名張市赤目町　下垣内遺跡 …… 246

付　　篇

1．近畿地方出土の埋設土器について

2．名張市赤目町　辻垣内遺跡の縄文土器

挿　　図　　目　　次

第１－１図	橋門遺跡	遺跡位置図
第１－２図	〃	遺跡地形図
第１－３図	〃	調査区位置図
第１－４図	〃	Ａ地区遺構平面図
第１－５図	〃	ＳＥ３実測図
第１－６図	〃	Ｂ地区遺構平面図
第１－７図	〃	ＳＢ15・16・17・18・25実測図
第１－８図	〃	ＳＢ26・27・35実測図
第１－９図	〃	ＳＥ22実測図
第１－10図	〃	Ｃ地区遺構平面図
第１－11図	〃	Ａ地区遺物実測図
第１－12図	〃	Ｂ・Ｃ地区遺物実測図
第１－13図	〃	ＳＥ22井戸縦板実測図
第１－14図	〃	ＳＥ22井戸横桟・縦木実測図
第２－１図	算所遺跡	遺跡位置図
第２－２図	〃	遺跡地形図
第２－３図	〃	調査区位置図
第２－４図	〃	遺構平面図
第２－５図	〃	縄文土器・鉄鏃実測図
第２－６図	〃	遺物実測図
第２－７図	〃	周辺遺跡の遺物実測図
第３－１図	東野遺跡	遺跡位置図
第３－２図	〃	遺跡地形図
第３－３図	〃	第１次調査遺構平面図
第３－４図	〃	第２次調査遺構平面図
第３－５図	〃	ＳＢ３、ＳＸ13・14、ＳＥ17実測図
第３－６図	〃	第１次調査遺物実測図
第３－７図	〃	第２次調査平安・鎌倉時代遺物実測図
第３－８図	〃	第２次調査室町時代遺物実測図
第３－９図	〃	石製品実測図
第４－１図	杉垣内遺跡	遺跡位置図
第４－２図	〃	遺跡地形図
第４－３図	〃	字切図
第４－４図	〃	発掘調査区地区割図
第４－５図	〃	調査区位置図
第４－６図	杉垣内遺跡	主要遺構配置図
第４－７図	〃	Ａ・Ｂ地区遺構平面図
第４－８図	〃	ＳＢ１～３・14～17実測図
第４－９図	〃	ＳＢ４・13・18～22実測図
第４－10図	〃	ＳＥ23実測図
第４－11図	〃	ＳＥ24・25実測図
第４－12図	〃	旧河道祭祀遺物分布図
第４－13図	〃	Ｃ地区遺構平面図
第４－14図	〃	ＳＢ28～31実測図
第４－15図	〃	ＳＢ38～40・49～51・53，ＳＫ37・48実測図
第４－16図	〃	ＳＢ53・54実測図
第４－17図	〃	ＳＤ46実測図
第４－18図	〃	ＳＤ43～45実測図
第４－19図	〃	古代の道復元図
第４－20図	〃	Ｄ・Ｅ地区遺構平面図
第４－21図	〃	ＳＢ１～３・13・15～17・20～23遺物実測図
第４－22図	〃	ＳＫ６・８～10，ＳＥ23～25，Ｐ１・２遺物実測図
第４－23図	〃	Ａ地区弥生土器実測図
第４－24図	〃	Ａ地区古墳時代土師器実測図
第４－25図	〃	Ａ地区古墳時代須恵器実測図
第４－26図	〃	Ａ地区飛鳥・奈良・平安時代土師器実測図（１）
第４－27図	〃	Ａ地区飛鳥・奈良・平安時代土師器実測図（２）
第４－28図	〃	Ａ地区飛鳥・奈良・平安時代土師器実測図（３）
第４－29図	〃	Ａ地区飛鳥・奈良・平安時代須恵器実測図
第４－30図	〃	Ａ地区旧河道祭祀用土製品実測図
第４－31図	〃	ＳＢ30・31，ＳＫ32，ＳＤ34遺物実測図
第４－32図	〃	ＳＢ39・49・50，ＳＤ44・45・55・56，ＳＸ41遺物実測図
第４－33図	〃	Ｃ地区縄文土器拓影・実測図
第４－34図	〃	Ｃ地区弥生土器実測図

第４－35図　杉垣内遺跡　Ｃ地区弥生土器拓影・実測図
第４－36図　〃　Ｃ地区石製品実測図
第４－37図　〃　Ｃ地区古墳～平安時代遺物実測図
第４－38図　〃　Ｄ・Ｅ地区遺物実測図
第４－39図　〃　ＳＥ23・24木製品実測図（１）
第４－40図　〃　ＳＥ23・24木製品実測図（２）
第４－41図　〃　旧河道斎串実測図（１）
第４－42図　〃　旧河道斎串実測図（２）
第４－43図　〃　旧河道斎串実測図（３）
第４－44図　〃　旧河道祭祀用木製品実測図
第４－45図　〃　旧河道木簡実測図
第４－46図　〃　旧河道容器実測図（１）
第４－47図　〃　旧河道容器実測図（２）
第４－48図　〃　旧河道農具実測図
第４－49図　〃　旧河道その他木製品実測図
第４－50図　〃　ＳＥ24井戸模式図
第４－51図　〃　ＳＥ24井戸材実測図（１）
第４－52図　〃　ＳＥ24井戸材実測図（２）
第４－53図　〃　ＳＥ24井戸材実測図（３）
第４－54図　〃　ＳＥ24井戸材実測図（４）
第５－１図　深長古墳　墳丘実測図
第５－２図　〃　土層断面図
第５－３図　〃　Ａトレンチ遺物出土状況
第５－４図　〃　北東拡張区遺物出土状況
第５－５図　〃　西拡張区北半遺物出土状況
第５－６図　〃　西拡張区南半遺物出土状況
第５－７図　〃　南側周溝遺物出土状況
第５－８図　〃　南西拡張区遺物出土状況
第５－９図　〃　南区拡張区遺物出土状況
第５－10図　〃　南東拡張区遺物出土状況
第５－11図　〃　遺物器種分類図
第５－12図　〃　北拡張区遺物実測図
第５－13図　〃　Ａトレンチ遺物実測図
第５－14図　〃　西拡張区遺物実測図（１）
第５－15図　〃　西拡張区遺物実測図（２）
第５－16図　〃　南西拡張区遺物実測図（１）
第５－17図　〃　南西拡張区遺物実測図（２）
第５－18図　〃　南東・南西拡張区遺物実測図
第５－19図　〃　南東拡張区・Ｂトレンチ遺物実測図
第５－20図　深長古墳　Ｄトレンチ・東拡張区イセ遺物実測図
第６－１図　本堂遺跡　遺跡地形図
第６－２図　〃　Ａ地区遺構平面図
第６－３図　〃　ＳＢ６・７・８実測図
第６－４図　〃　ＳＫ５・７実測図
第６－５図　〃　縄文土器拓影・実測図
第６－６図　〃　ＳＢ７、ＳＫ９遺物実測図
第６－７図　〃　ＳＫ５遺物実測図
第７－１図　堂ノ後遺跡　調査区位置図
第７－２図　〃　主要遺構配置図
第７－３図　〃　西拡張区・Ａ地区遺構平面図
第７－４図　〃　ＳＫ29実測図
第７－５図　〃　Ｂ地区遺構平面図
第７－６図　〃　ＳＢ１・２・４・12・28・30・31・34、ＳＫ13実測図
第７－７図　〃　ＳＢ３・14・16・21・26・27・35・36実測図
第７－８図　〃　ＳＢ35遺物出土状況・カマド断面図
第７－９図　〃　ＳＢ30・37～41実測図
第７－10図　〃　ＳＢ40カマド実測図
第７－11図　〃　ＳＢ５・25、ＳＥ19、ＳＫ６実測図
第７－12図　〃　縄文土器拓影実器実測図（１）
第７－13図　〃　縄文土器拓影実器実測図（２）
第７－14図　〃　縄文土器拓影実器実測図（３）
第７－15図　〃　縄文土器拓影実器実測図（４）
第７－16図　〃　縄文土器拓影実器実測図（５）
第７－17図　〃　縄文土器拓影実器実測図（６）
第７－18図　〃　縄文土器拓影実器実測図（７）
第７－19図　〃　弥生土器実測図
第７－20図　〃　古墳時代土器実測図（１）
第７－21図　〃　古墳時代土器実測図（２）
第７－22図　〃　古墳時代・奈良時代土器実測図
第７－23図　〃　平安時代、包含層土器実測図
第７－24図　〃　弥生土器拓影・実測図
第７－25図　〃　石器実測図
第７－26図　〃　平安時代～鎌倉時代、包含層遺物実測図

第７－27図　堂ノ後遺跡　江戸時代土器実測図
第７－28図　〃　縄文土器出土分布図
第８－１図　赤城遺跡　遺跡地形図
第８－２図　〃　遺構平面図
第８－３図　〃　ＳＢ２・４・５実測図
第８－４図　〃　遺物実測図
第９－１図　中ノ下遺跡　遺跡位置図
第９－２図　〃　中ノ下遺跡・下垣内遺跡地形図
第９－３図　〃　発掘調査区位置図
第９－４図　〃　遺構平面図・土層断面図
第９－５図　〃　ＳＢ25実測図
第９－６図　〃　ＳＫ３・18・24・27・29実測図
第９－７図　〃　ＳＫ６・23・26・28実測図
第９－８図　〃　ＳＸ14実測図
第９－９図　〃　遺構出土の縄文土器（１）
第９－10図　中ノ下遺跡　遺構出土遺構の縄文土器（２）
第９－11図　〃　遺構出土遺構の縄文土器（３）
第９－12図　〃　遺構出土遺構の縄文土器（４）
第９－13図　〃　遺構出土遺構の縄文土器（５）
第９－14図　〃　遺構出土遺構の縄文土器（６）
第９－15図　〃　包含層出土の縄文土器（１）
第９－16図　〃　包含層出土の縄文土器（２）
第９－17図　〃　包含層出土の縄文土器（３）
第９－18図　〃　包含層出土の縄文土器（４）
第９－19図　〃　包含層出土の縄文土器（５）
第９－20図　〃　弥生土器・石器実測図
第10－１図　下垣内遺跡　調査区位置図
第10－２図　〃　遺構平面図
第10－３図　〃　ＳＢ２・３・４・５実測図
第10－４図　〃　遺物実測図

表　目　次

第１表　昭和61年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財一覧表
第２表　昭和61年度農業基盤整備事業関係発掘調査遺跡一覧表
第３表　現地説明会開催一覧表
第２－１表　算所遺跡　土錘観察表
第３－１表　県内フイゴ羽口・鉄滓出土遺跡一覧表
第４－１表　県内斎串出土遺跡一覧表
第４－２表　県内土馬出土遺跡一覧表

巻　頭　目　次

巻頭図版１．　辻垣内遺跡　縄文土器　深鉢　　展開写真
巻頭図版２．　杉垣内遺跡　人形木製品　　深長古墳　二重口縁壺

前　　言

1．分布調査

昭和61年度農業基盤整備事業については、昭和60年10月に農林水産部各課あてに事業照会を行ない、昭和60年11月にその回答を得た。そこで、早速、文化課では同年11月から12月にかけて、事業計画図面をもとに全県下の事業実施予定地全域についての現地分布調査を、昭和60年度の本調査と併行して実施した。

その結果の詳細は第1表のとおりであるが、圃場整備事業については事業計画面積693haのうちで63件、面積にして約523,000㎡もの遺物散布地、古墳等を確認した。その他、県営畜産経営環境整備事業の度会地区で1遺跡、県営かんがい排水整備事業の津田地区で1遺跡の所在が判明した。

これらの分布調査の結果については、事業の主管課である耕地第一課を通して各々耕地事務所に連絡、報告するとともに、遺跡の保護に支障のないように工事の設計変更等をはかられるよう通知文書を提出した。

2．試掘調査

分布調査で所在が確認された65遺跡については、遺構・遺物の保存状況・遺跡の拡がりをより明確化するために試掘調査を実施し、設計変更により遺跡を保護するよう努めた。

一方、遺跡の所在が明確化した段階で、鈴鹿市長法寺4号墳、安濃町連部城跡、松阪市深長古墳、名張市滝野氏城跡、名張市宮城1号墳・4号墳・5号墳は、地区除外という形で遺跡が保護されることとなった。

試掘調査によって得られた各々の遺跡の実態に応じて、遺物包含層以下に影響を及ぼさない様切り盛りの設計変更を行い、遺跡の保護につとめるよう再度農村整備課に連絡するとともに、各農林水産事務所を加えて計画図面の具体的な設計協議を重ねた。しかし、近年の圃場整備事業が、傾斜度の大きい山間部で実施されているため切り盛りの度合いが大きく、盛土による遺構の保存も困難をきわめたが、農村整備課・各事務所の協力を得て、遺物包含層上面15cm以下を削平しないように設計変更を行い、やむおえず削平される部分及び道路・排水路の約50,300㎡について発掘調査を実施することになった。

しかし、遺跡の立地などから工事計画との協議が難行した東野B・C遺跡のように調査面積が7,900㎡にも達し、単年度で調査対応が不可能な遺跡については、工事計画の年度変更を計り調査年度を2ケ年とした例もある。

また、遺構・遺物の拡がりが約200,000㎡にも及ぶ広大な菰野町下江平遺跡も確認された。この遺跡では、地形の傾斜も大きく、切り盛りの設計変更が難行した。遺構・遺物の実態を更に細かく観察する必要が生じたため、排水路部分の調査を先行させ、その結果と試掘調査結果を併せて検討し、再度協議することとし、7月～10月に排水路D2の調査を菰野町教育委員会の協力を得て実施し、排水路D3の調査を10月～11月まで実施し、この結果に基づき、農村整備課・四日市農林水産事務所・地元土地改良区と協議を重ね、昭和61年度の発掘調査面積2,400㎡を菰野町教育委員会が担当することとし、設計変更により遺跡の保護が困難な10,000㎡について発掘調査を実施することとなった。

事業名	農林事務所	地区	事業面積(ha)	遺跡名	所在地	遺跡面積(㎡)	措置
	桑名	藤原東部	12	−	員弁郡藤原町川合	6,000	試堀・工事可
				観成寺遺跡	〃 〃 上相馬	200	〃 立合調査
		員弁	28	奥田A遺跡	〃 員弁町東一色	10,000	試堀
				奥田B遺跡	〃 〃 〃	14,000	〃 本調査
				大谷遺跡	〃 〃 〃	36,700	〃 〃
				半之木遺跡	〃 〃 半之木	7,700	〃
				岡山遺跡	〃 〃 岡山	7,000	〃 本調査
				−	〃 〃 上笠田	−	
				−	〃 〃 岡・丁田	−	
	桑名	大安東部	7	−	員弁郡大安町平塚梅戸	−	事業変更
				大貝戸遺跡	〃 〃 門前	14,000	試堀・立合調査
				薬師前遺跡	〃 〃 門前	5,600	〃 〃
		大安西部	35	社護地塚	〃 〃 石榑東	10	〃 〃
	四日市	八風	52	下江平遺跡	三重郡菰野町江平	200,000	試堀・本調査
				−	〃 〃 竹成	−	〃 本調査
		合川下之庄	20	橋門遺跡	鈴鹿市三宅町	13,000	〃 本調査
				長法寺4号墳	〃 〃		地区除外
	津	穴倉川沿岸	5	連部城跡	安芸郡安濃町連部	−	〃
県				今徳A遺跡	〃 〃 今徳	−	試堀
				今徳B遺跡	〃 〃 〃	3,000	〃 立合調査
				今徳C遺跡	〃 〃 〃	1,000	〃 〃
営		美里中南部	24	向出遺跡	〃 美里村家所	4,000	〃 工事可
				神ノ宅遺跡	〃 〃 〃	4,000	試堀・立合調査
				上原ケ遺跡	〃 〃 南長野	10,000	〃 本調査
		久居	14	稲葉遺跡	久居市稲葉町	9,000	〃 立合調査
圃		久居二期	9	−	〃 一色町	−	立合調査
		白山西部	19	算所遺跡	一志郡白山町算所	3,600	試堀・本調査
				−	〃 〃 山田野	−	〃
				上出遺跡	〃 〃	4,000	試堀・立合調査
場		中郷	9	東野A遺跡	〃 嬉野町森本	2,300	〃 工事可
				東野B遺跡	〃 〃 〃	5,700	〃 62年度本調査
				東野C遺跡	〃 〃 〃	8,500	〃 本調査
				東野D遺跡	〃 〃 〃	4,200	〃 工事可
整				屋敷田遺跡	〃 〃 〃	6,000	〃 立合調査
		芸濃南部	11	大屋垣内遺跡	安芸郡芸濃町萩野	20,000	〃 〃
	松阪	堀坂川沿岸	12	杉垣内遺跡	松阪市深長町	37,000	試堀・本調査
				深長古墳	〃 〃	2,100	〃 現状保存
備				堂ノ後遺跡	〃 〃	6,000	〃 本調査
	松阪	堀坂川沿岸	12	本堂遺跡	〃 〃	2,100	試堀・本調査
				西沖遺跡	〃 野村町	13,600	〃 立合調査
				赤城遺跡	〃 〃	6,600	試堀・本調査
事		斎宮	16	寺垣内遺跡	多気郡明和町金剛坂	8,500	〃 〃
		上御糸	11	−	〃 〃 上御糸	−	
		東黒部	16	柿木原遺跡	松阪市柿木原町	16,000	条里溝60年度立合調査
		明星	11	東野遺跡	多気郡明和町東野	−	試堀・工事可
業	伊勢	伊勢南部	10	北垣内遺跡	伊勢市津村町	3,000	〃 〃
		村松	15	−	〃 村松町	−	〃 〃
		度会	8	−	度会郡度会町一之瀬	−	〃 〃
	上野	上野南部第二	17	北裏遺跡	上野市沖	2,700	〃 〃
		上野南部第三	14	森小場遺跡	〃 下神戸	3,000	
		上野東部	23	安田氏館跡	〃 界外	2,500	試堀・本調査
				塚本館跡	〃 〃	3,900	〃 〃
				四ノ坪遺跡	〃 上友生	2,000	試堀・立合調査
		大山田第二	11	元町遺跡	阿山郡大山田村上阿坂	2,300	試堀・工事可
		河合	18	北中溝遺跡	〃 阿山町円徳院	2,500	〃 〃
				新田遺跡	〃 〃 〃	2,500	〃 〃
		赤目	21	中戸遺跡	名張市赤目町相楽	3,000	〃 本調査
				下垣内遺跡	〃 〃 星川	3,200	〃 〃
				滝野氏城跡	〃 〃 相原	1,000	地区除外
				横山5号墳	〃 〃 〃		消滅・工事可
				宮城1号墳	〃 〃 〃		地区除外
				宮城4号墳	〃 〃 〃		〃
				宮城5号墳	〃 〃 〃		〃

第1表　昭和61年度　農業基盤整備事業地区内埋蔵文化財一覧表

事業名	農林事務所	地区	事業内容	遺跡名	所在地	遺跡面積(㎡)	措置
県営畜産経営環境整備事業	伊勢	度会		竹野鼻遺跡	度会郡大宮町	12,000	試掘・立合調査
県営かんがい排水整備事業	伊勢				多気郡多気町瀧田		試掘・工事可
県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業	上野	大山田南部二期		向山6号墳	阿山郡大山田村平田	横穴式石室古墳1基	本調査
	〃	〃		下中島古墳群	〃 〃	古墳	〃
	〃	友田第二期		菊永氏城跡	〃 阿山町上友田	7,700	本調査
広域営農団地基幹農道整備事業	四日市	(フラワーロード)北勢南部			鈴鹿市伊船町		試掘・工事可
		〃		—	鈴鹿市三宅町		〃 〃

3．調査経過

1．第1次調査

4月から5月にかけては、各遺跡にかかる保護協議が継続され、当課の調査対応時期、予算とのからみで農村整備課あるいは、各農林水産事務所との最終調整の段階にあった。

5月19日を期に鈴鹿市橋門遺跡・明和町寺垣内遺跡、上野市安田氏館跡の調査を第一次調査として開始した。寺垣内遺跡では、野菜等の作付の問題もあり、調査地区も6ヶ所に分かれ点在した調査となり、また昭和60年度事業を繰り越した地区の面調査を継続して2月まで調査をおこなった。上半期は、埋蔵文化財発掘技術者研修員を三重県斎宮跡調査事務所が指導するといった体制で臨み、下半期の調査は、明和町斎宮保存対策室の協力を得て実施した。

2．第2次調査

7月からは、中勢地区の調査に着手し、縄文土器片が表採され、雲出川の縄文文化を知るうえで、調査が期待された長田遺跡・寺平尾遺跡の調査を久居市教育委員会の協力を得て開始し、試掘調査で比較的遺構密度がうすいと判断された南長野遺跡と、雲出川右岸の河岸段丘の傾斜地に立地する算所遺跡の調査を県文化財調査員の協力を得て七月末から着手した。

また、遺跡面積が広大で設計変更に数度の協議を重ねた松阪市堀坂川沿岸工区の杉垣内遺跡では、幹線道路と排水路部分の調査で約4,300㎡、堂ノ後遺跡で幹線道路と削平部分4,000㎡、赤城遺跡で削平部分500㎡の調査のうち工事との関係で杉垣内遺跡から調査に着手した。

また、菰野町の下江平遺跡では、排水路D2の調査に着手した。

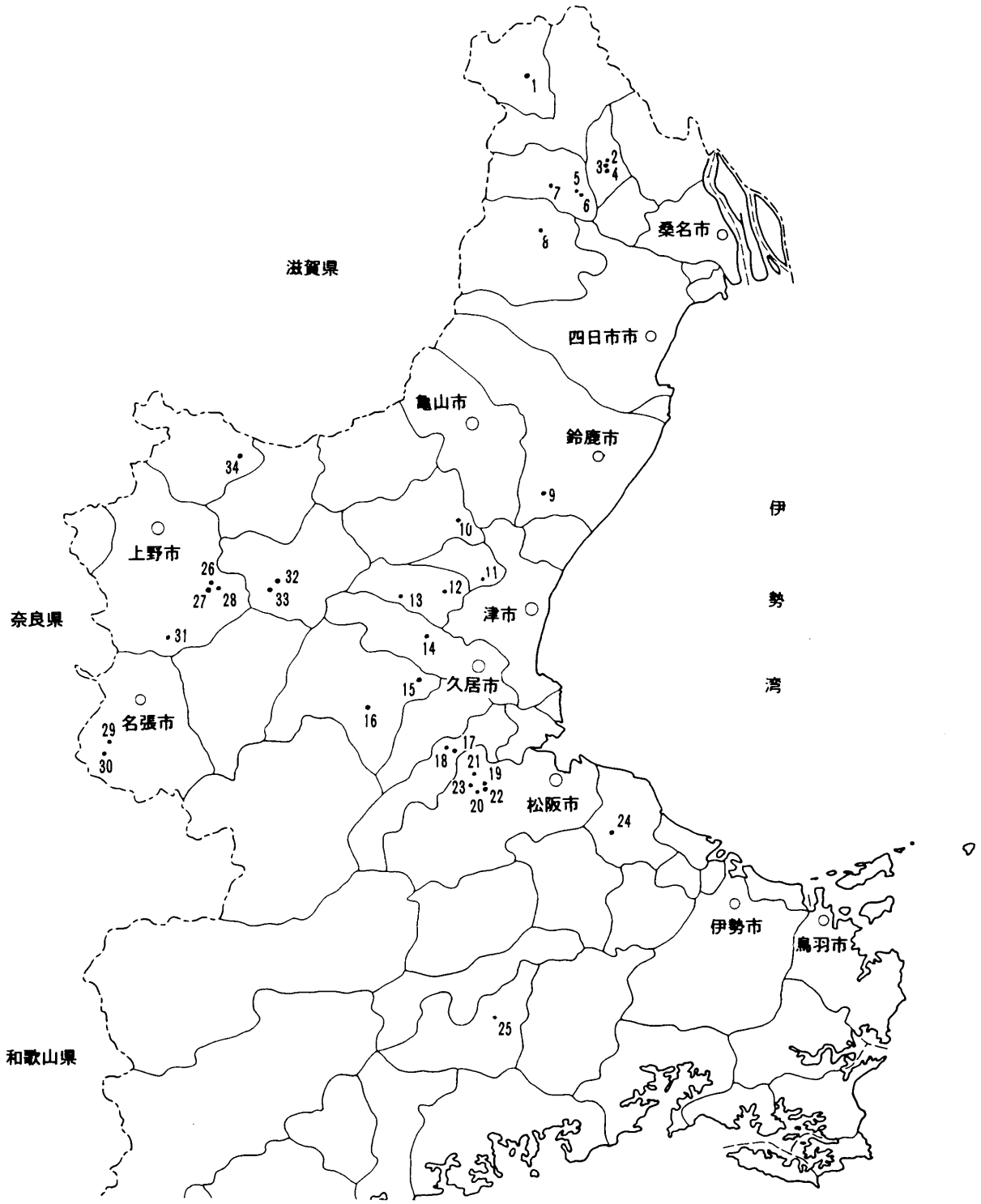
更に、夏季施行地区の工事も間近かにせまり、藤原町の観成寺遺跡、上野市の四ノ坪遺跡の立合い調査を併せて実施した。

3．第3次調査

第1次・第2次調査が継続されている最中、10月に入って、圃場整備の工事も本格的になり昭和60年度に員弁地域でこれまでに調査例を見ない古墳時代の集落が確認された員弁町大谷遺跡と一連のものと考えられた奥田遺跡や、岡古墳の丘陵裾に位置する岡山遺跡の調査、名張市赤目地区の標高217mの丘陵上に位置する下垣内遺跡とその丘陵裾に位置し、縄文土器片が確認されてはいるものの試掘調査では、遺構の実態が今一つ不分明であった中戸遺跡の調査、傾斜度の大きい丘陵上に位置し設計変更による遺跡の保存が不可能となり、調査を61・62年度の継続とした嬉野町東野遺跡の調査に着手するとともに、大

	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者
1	観成寺遺跡	員弁郡藤原町上相場	3900	昭和61年6月24・25・30日、8月26日～30日	主事　久志本鉄也
2	奥田B遺跡	員弁郡員弁町東一色	380	昭和61年11月14日～18日、12月1日	主事　久志本鉄也
3	大谷遺跡	員弁郡員弁町東一色	3120	昭和61年10月9日～11月14日、11月19日～11月29日	主事　久志本鉄也
4	岡山遺跡	員弁郡員弁町岡山	1400	昭和61年10月6日～8日・27日～29日、11月8・12日	主事　久志本鉄也
5	大貝戸遺跡	員弁郡大安町門前	290	昭和61年9月24日～10月6日	主事　久志本鉄也
6	薬師前遺跡	員弁郡大安町門前	40	昭和61年9月27日	主事　久志本鉄也
7	社護地塚	員弁郡大安町石榑東	10	昭和61年10月22日	主事　久志本鉄也
8	下江平遺跡	三重郡菰野町江平	6300	昭和61年7月7日～昭和62年1月8日	主事　駒田　利治 主事　稲垣　良二
	下江平遺跡	三重郡菰野町江平	2400	昭和62年2月4日～3月16日	菰野町遺跡調査会
9	橋門遺跡	鈴鹿市三宅町	3520	昭和61年5月21日～9月12日	主事　倉田　守 調査補助員　田中　久生
10	大屋垣内遺跡	安芸郡芸濃町萩野	250	昭和62年3月2日～3月16日	主事　上村　安生
11	今徳B遺跡	安芸郡芸濃町今徳	230	昭和61年9月25日～10月6日	主事　駒田　利治
	今徳C遺跡	安芸郡芸濃町今徳	160	昭和61年9月25日～10月6日	主事　駒田　利治
12	神ノ宅遺跡	安芸郡美里村家所	630	昭和61年10月27日～11月3日	主事　駒田　利治
13	上原遺跡	安芸郡美里村南長野	1100	昭和61年7月28日～8月9日	主事　上村　安生 調査協力員　本堂　弘之
14	稲葉遺跡	久居市稲葉町	3640		久居市教育委員会
15	算所遺跡	一志郡白山町算所	1000	昭和61年7月26日～9月25日	主事　上村　安生 調査協力員　服部　久士
16	上出遺跡	一志郡白山町山田野	890		主事　倉田　守
17	東野遺跡	一志郡嬉野町森本	2200	昭和61年10月20日～12月7日	主事　増田　安生 主事　倉田　守 主事　小林　直人 研修生　山田　芳昭
18	屋敷田遺跡	一志郡嬉野町森本	400	昭和61年12月5日～12月26日	主事　上村　安生
19	杉垣内遺跡	松阪市深長町	4330	昭和61年7月1日～11月4日	主事　河瀬　信幸 主事　小林　直人
20	本堂遺跡	松阪市深長町	1060	昭和62年1月6日～1月16日	主事　小林　直人
21	赤城遺跡	松阪市野村町	500	昭和61年11月17日～11月18日	主事　増田　安生
22	深長古墳	松阪市深長町	1500	昭和51年11月21日～12月20日	主事　増田　安生
23	堂ノ後遺跡	松阪市深長町	4000	昭和61年10月20日～12月20日	主事　増田　安生
24	寺垣内遺跡	多気郡明和町金剛坂	7600	昭和61年10月23日～昭和62年2月6日	三重県斎宮跡調査事務所 明和町斎宮保存対策室 調査補助員　田中　久生 研修生　森川　常厚 研修生　広岡　貞之
25	竹野鼻遺跡	度会郡大宮町	570	昭和61年10月20日～10月25日	主事　河瀬　信幸
26	安田氏館跡	上野市界外	2000	昭和61年5月19日～8月30日	主事　稲垣　良二 研修生　山田　芳昭
27	塚本館跡	上野市界外	3000	昭和61年7月1日～8月31日	主事　増田　安生
28	四ノ坪遺跡	上野市上友生	480	昭和61年8月8日～8月15日	主事　稲垣　良二
29	中戸遺跡	名張市赤目町相楽	1600	昭和61年10月22日～11月30日	主事　仁保　晋作 主事　河瀬　信幸
30	下垣内遺跡	名張市赤目町屋川	1000	昭和61年10月2日～10月21日	主事　仁保　晋作
31	近代古墳	上野市上神戸	1000	昭和61年12月6日～昭和62年1月13日	主事　仁保　晋作
32	向山6号墳	阿山郡大山田村平田	250	昭和61年4月1日～6月3日	主事　上村　安生 主事　仁保　晋作 調査補助員　田中　久生
33	下中島古墳群	阿山郡大山田村平田	600	昭和61年8月1日～9月13日	三重大学人文学部教授　八賀　晋 主事　仁保　晋作
34	菊永氏城跡	阿山郡阿山町上友田	7700	昭和61年5月16日～11月7日	阿山町教育委員会
合計			69370		

第2表　昭和61年度　農業基盤整備事業関係発掘調査一覧表


滋賀県
奈良県
和歌山県
伊
勢
湾
桑名市
四日市市
亀山市
鈴鹿市
上野市
津市
久居市
名張市
松阪市
伊勢市
鳥羽市
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

発掘調査遺跡位置図

安町薬師前遺跡他、安濃町今徳遺跡、白山町上出遺跡、美里村神ノ宅遺跡などの立合い調査も各々1週間前後の調査期間を設定し断続的に実施していった。

4．第4次調査

県内各地の調査も終息しつつ、また次年度の分布調査の計画準備段階にあったころ、当該年度の公共事業推進施策により大幅な補正予算が計上され、その結果圃場整備事業も拡大され、その為の分布調査・試掘調査も併せて実施し、遺跡保護のための協議を重ねたが上野市近代古墳、松阪市本堂遺跡の幹線道路の調査を余議なくされた。

更に次年度の試掘調査も一段落した年度末には、芸濃町大屋垣内遺跡の道路及び排水路部分の一部が新規事業として採択され6月の工事完了との期限が示され、排水路部分300㎡の調査も実施した。

4．遺跡の保存と文化財啓蒙

昭和61年度農業基盤整備事業地域内における埋蔵文化財の発掘調査は計20件となった。試掘調査はほぼ全事業地区に及び、その他工事中の立合い調査も14件総面積14,150㎡にも及び、その調査に要する期間と経費は、文化課の事業の中で大きな比重を占めている。

遺跡は、現状保存されることが最も望ましいが、様々の土地改良事業においては工法的になかなかこうした保護策は難しい。盛土保存という方策もあるが、遺跡を含めた歴史的な環境保全という意味においては決して良策とは言えないであろう。遺跡は、単に地下に残されておればよいというのではなく、十分に将来の活用に期する状況を作った上での現状保存策が講じられなければならない。

また、調査期間中にできるだけ多くの人々に各遺跡の発掘の成果や埋蔵文化財について理解を深めていただくため現地説明会を開催したところ、第3表のように多数の方々の参加を得た。　（駒田利治）

遺跡名	開催日	参加人数	遺跡名	開催日	参加人数
安田氏館跡・塚本館跡	61. 8. 30	80名	堂ノ後遺跡・深長古墳	61. 12. 7	70名
橋門遺跡	61. 8. 31	70名	中戸遺跡	61. 12. 29	30名
下中島古墳群	61. 9. 20	60名	寺垣内遺跡	62. 2. 1	130名
杉垣内遺跡	61. 10. 5	80名			

第3表　現地説明会開催一覧表

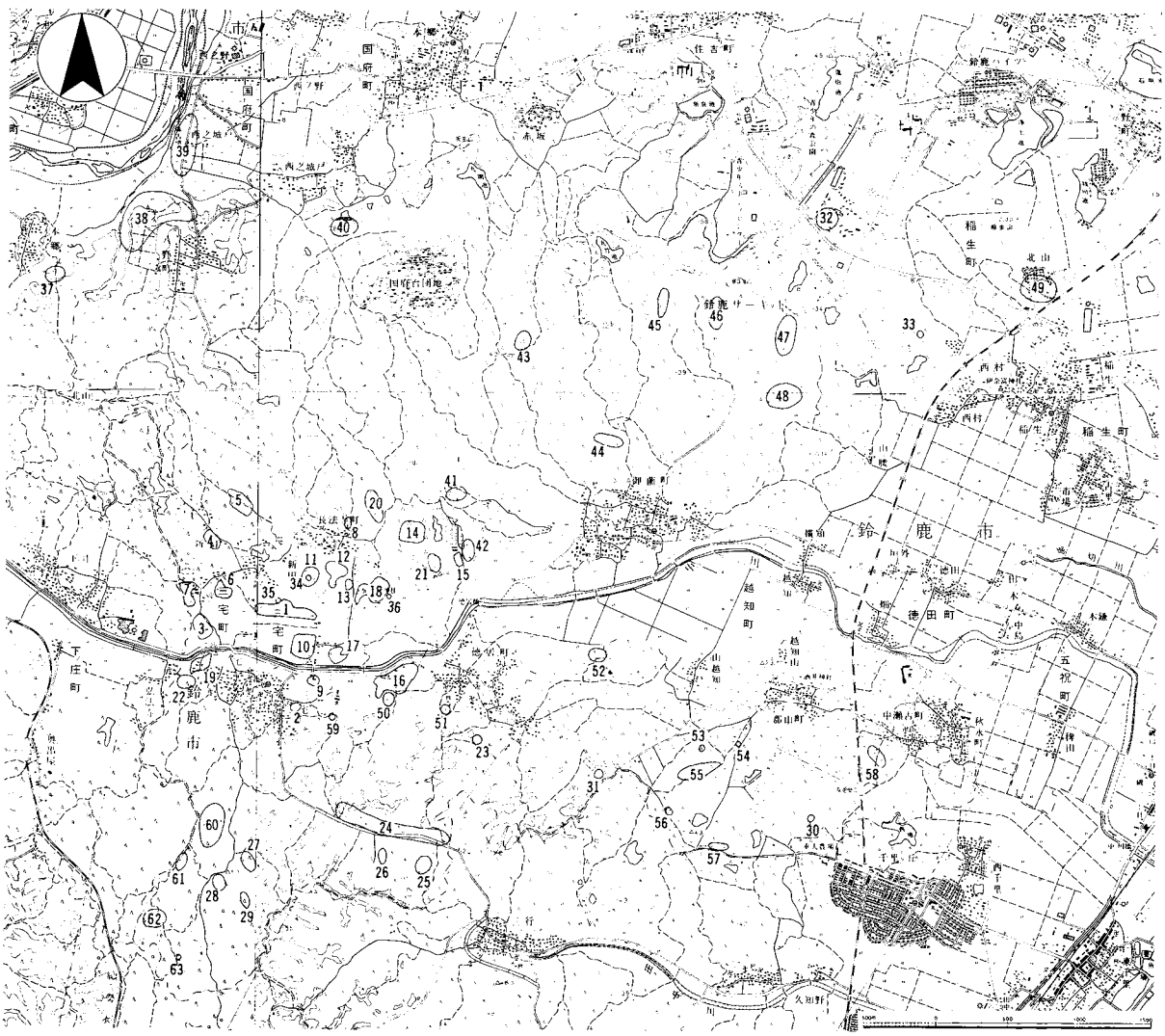
Ⅰ．鈴鹿市三宅町　橋門（はしかど）遺跡

1．位置と環境

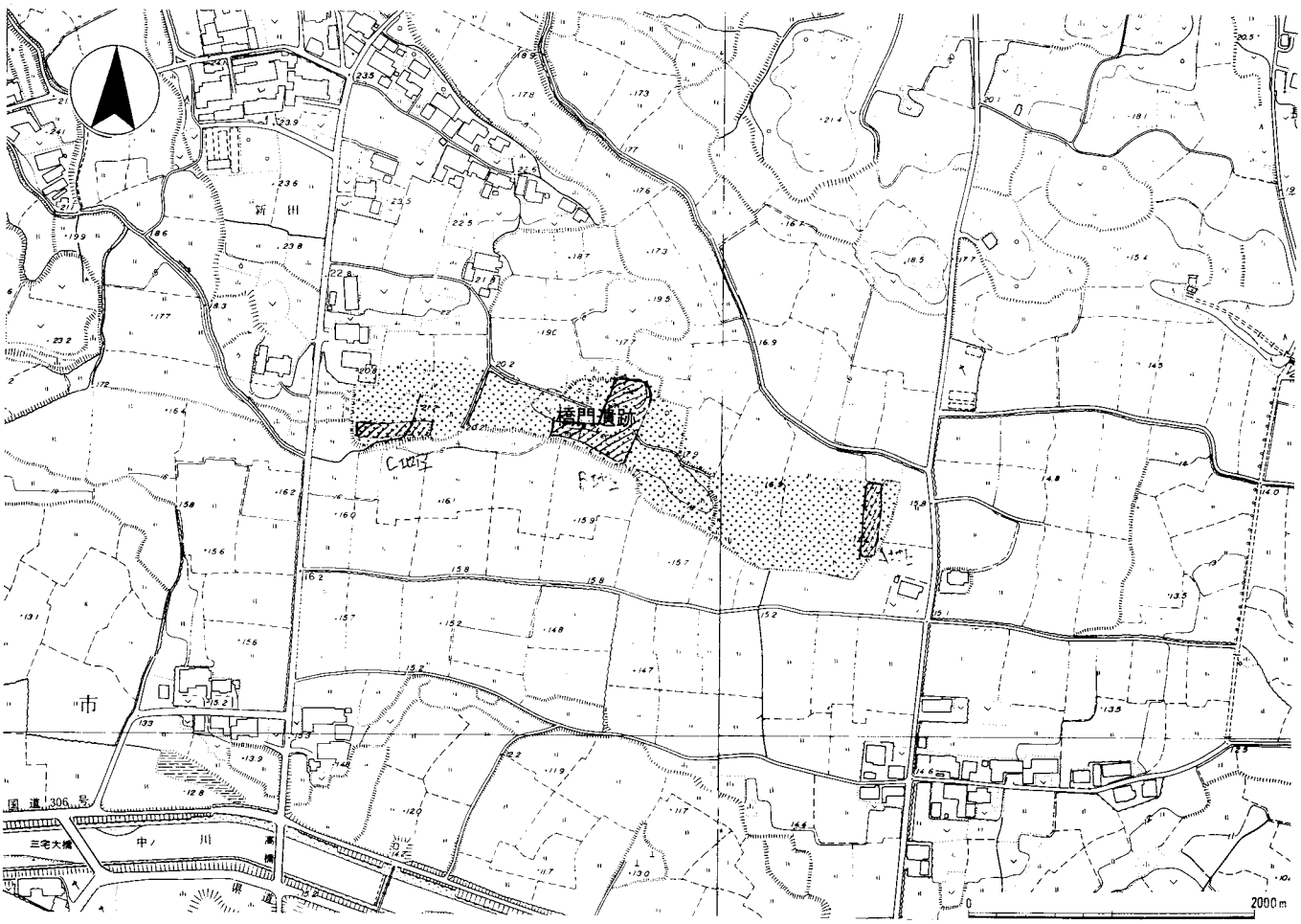
橋門遺跡は鈴鹿市の南西部、三宅町字橋門に所在する。鈴鹿山系より東流して伊勢湾に注ぐ中ノ川の下流域左岸にあり、標高16～21ｍの東西にのびる河岸段丘上に位置する。北側水田面との比高は１～３ｍ、南側水田面との比高は２～４ｍである。

当遺跡（１）周辺には数多くの遺跡が確認されているが、ごく周辺においても弥生時代の小山遺跡（２）、弥生～古墳時代の西川原遺跡（３）、古墳時代の新池Ａ・Ｂ遺跡（４・５）、一色Ａ・Ｂ遺跡（６・７）、帰虎遺跡（８）、金堤遺跡（９）がある。橋門遺跡の南には古墳～鎌倉時代の寺門遺跡（10）があり、北には西垣内遺跡（11）、桑名垣内遺跡（12）、藤塚遺跡（13）、長法寺遺跡（14）、奥北代遺跡（15）の各遺跡がある。また鎌倉時代以降では、別所遺跡（16）、大川原遺跡（17）、加和良神社遺跡（18）、西条遺跡（19）の各遺跡があり、とくに中世の城跡として長法寺城跡（20）、三宅城跡（21）、三宅西城跡（22）が当遺跡の南北に存在する。

このように各時代を通じてごく周辺のみにおいても多数の遺跡が確認されているが、とくにこの地域



第１－１図　遺跡位置図（１：50,000）



第１－２図　遺跡地形図（１：5,000）

第１－３図　調査区位置図（１：2,000）

における特徴的な遺跡は古墳時代の窯跡であろう。東西に連なる丘陵を利用して、橋門遺跡の北側には稲生古窯跡群（32・33）、南側には徳居古窯跡群（23～31）がある。この古窯跡群は三重県下においても有数のものであるが、その規模・性格等については明らかにされていない。一方、この須恵器供給源とともに古墳群の存在も注目される。橋門遺跡の北には長法寺1号墳（34）、当遺跡と隣接して長法寺4号墳（35）[1]、東に加和良古墳群（36）がある。また当遺跡を取り巻く古墳群として、北にお経松古墳群（37）、八野古墳群（38），西ノ野古墳群（39）、愛宕山古墳群（40）の古墳群、北東に上広古墳群（41）、奥北代古墳群（42）、七路谷古墳群（43）、池ノ杭古墳群（44）、鎌谷古墳群（45）、一本松古墳群（46）、蛇谷古墳群（47）、野田口古墳群（48）、北山古墳群（49）の古墳群が存在する。これらは中ノ川流域の左岸にあたるが、右岸においては、南東に別所古墳群（50）、徳居古墳群（51・52）、西川古墳群（53・54）、大野古墳群（55）、西高山古墳群（56・57）、松山古墳群（58）の古墳群が、南には奈良木古墳群（59）、宮間口古墳群（60）、八谷古墳群（61）、西川毛古墳群（62・63）の古墳群が存在する。

以上のような古墳群の存在は、現水田面との比高1～4mの台地上にある橋門遺跡内においても古墳があった可能性のつよいことを示唆している。一方、中ノ川は中流では亀山市南部を流れ、当遺跡のやや下流付近より屈曲しつつ沖積平野をうるおしており、北方を流れる鈴鹿川に比べて流域も狭く、当遺跡のある三宅町付近が古墳分布の上限とされ、同時に条里遺構の上限とほぼ一致するともいわれている。近年の圃場整備以前まで条里地割も残っていた。遺跡東付近には大寺院が存在したとの伝承もありこの地域周辺の開発の古さを物語っている。　（倉田　守）

2．遺　　構

橋門遺跡の調査は3地区に分けて行われ、東よりA地区・B地区・C地区とした。以下、A地区よりそれぞれ地区ごとに述べたい。

1．A地区

A地区の土層の基本的層序は第Ⅰ層；暗灰褐色砂質土（表土）、第Ⅱ層；暗褐色砂質土（床土）、第Ⅲ層；暗茶褐色砂質土（遺物包含層）、第Ⅳ層；黄褐色粘質土（地山）である。地山までの深さは場所によって異なり、浅い所で約20cm、深い所で約1mであった。発掘区は南北に細長いが、地山面は中央部付近で段状に高くなり，再びゆるやかに低くなっている。遺物包含層中には土師器鍋・土師器羽釜・常滑甕など中世の遺物が大部分を占める。しかし、前述の段状に高くなっている部分より南の遺物包含層中からは弥生時代から古墳時代にかけての土器片が出土しており、ここにこの時期の遺構が存在したと考えられる。

以下、検出された主な遺構について概述する。

1．井戸

ＳＥ３　発掘区東側の壁付近より検出された。長径1.6m、短径1.4mの南北に長い楕円形で深さ1.8mの掘形をもつ。井戸底に常滑甕の胴部から底部にかけて2分の1程を欠いたものが、口縁部を井戸底につけた逆の形で検出された。口径60cm、胴部割れ口径88cm、高さ38.5cmの甕（16）である。井戸底にあたる甕口縁部の周囲には川原石が支えとして置かれていた。甕の上端周囲には川原石が積み上げられていたものと思われるが、遺構検出時には西側に一部残っていたのみで大部分は崩壊していた。（第1－5図）。井戸埋土中からはタイプの異なる土師器羽釜片（10・12・13）や常滑甕片が出土している。

ＳＥ４　ＳＥ３と並んで発掘区東側の壁付近で検出された。長径推定3.5m、短径2.2mの東西に長い楕円形で、検出面からの深さは1.2mである。井戸東部分は発掘区外に続き未掘である。素掘りの状態であるが、作りが極めて雑であり、元来不用物の捨て場所かあるいは未完成のまま放棄された井戸であった可能性もある。埋土中には多量のこぶし大の石とともに山皿片（2）、青磁椀片（8）、常滑甕片や土師器片など多量の中世遺物が混合して投げ込まれたような状態で出土している。遺構検出時において、

ＳＥ３には湧水がみられたがＳＥ４には湧水は認められなかった。

2．土坑

ＳＫ６　直径約2.5ｍの円形に近い形状で、深さは約20㎝と浅い。埋土中からは土師器鍋片（11）が多量に出土しており、数個体分のものと思われる。

ＳＫ７　長径約３ｍ、短径約1.5ｍの楕円形を呈し、東端はＳＤ５によって、西端は発掘区によって切られている。深さは30～40㎝あり、ほぼ垂直に掘られている。埋土中からは青磁椀片（７）や常滑甕片（15）などが出土している。

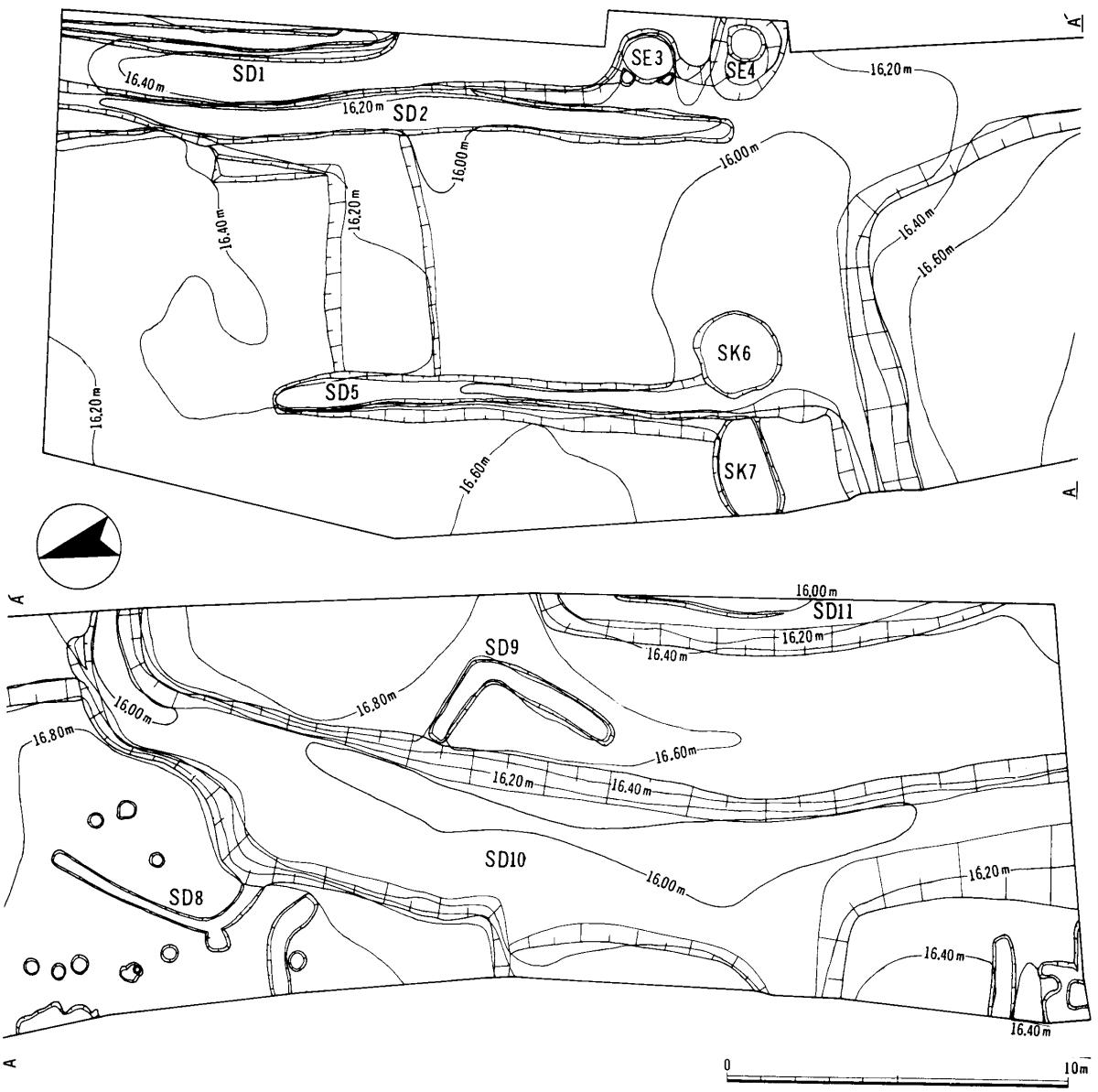
3．溝

ＳＤ１　幅約１ｍ、深さ約50㎝で調査区北東隅で検出された。ほぼ南北に走る。垂直に近い形で掘られており、埋土中からは土師器鍋片が数点出土している。

ＳＤ２　幅約１ｍ、深さ30～40㎝でＳＤ１と平行にほぼ南北に走る。ほぼ垂直に掘られ、南端のＳＥ３、ＳＥ４付近ではやや浅くなっている。埋土中からは多量の土師器鍋片や土師器羽釜片が出土している。

ＳＤ５　幅１～1.5ｍ、深さ約50㎝でほぼ南北に走る。溝の西壁は部分的にテラス状になっているが、全体としてはほぼ垂直な形で掘られている。南端のＳＫ６付近で自然に窪地へと続く。埋土中からは常滑甕片（14）や土師器鍋片、土師器羽釜片が出土している。前述のＳＤ１・ＳＤ２の溝の形状や埋土中の遺物から判断して同時期のものと考えられる。

ＳＤ８　幅約50㎝、深さ約20㎝で「Ｌ」字型に曲が



第１－４図　A地区 遺構平面図（１：200）

りＳＤ10によって切られる。埋土は暗赤褐色粘質土でよく締まっている。埋土中からは弥生土器片が出土している。またこの溝の東西両側に点在する柱穴の埋土も同一のものであり時期的に差はないと考えられる。

ＳＤ９　幅約50㎝、深さ40～50㎝で「Ｌ」字型に曲がる。埋土はＳＤ８と同様暗赤褐色粘質土でよく締まっている。埋土中からは弥生土器壺片（１）が出土している。ＳＤ８と同時期のものと考えられるがその性格は不明である。

ＳＤ10　幅は広い所で約５ｍ、狭い所で約1.5ｍである。深さも場所によって異なり40～80㎝である。概ね南北に走るが北端でほぼ直角に東に曲がる。南端はそのまま発掘区外にのびている。埋土は暗灰褐色砂質土１層であり、何らかの作用によって一時期に埋まった感がある。埋土中からは山茶椀片（３・４）や灰釉壺片（９）、土師器片が多量に出土している。

ＳＤ11　発掘区南東隅付近から検出されたが、溝状のものか土坑状のものか不明であるがここでは溝として扱う。深さ約60㎝でＳＤ10とほぼ平行に南北に走る。埋土中からは常滑甕片（17）や軒丸瓦片（５・６）とともに平瓦片が多量に出土している。この瓦片には二次焼成を受けたとおもわれるものがかなりあり、多量のこぶし大の石とともに埋没していた。出土状況から判断して、不用な土器片や瓦片を一括廃棄した可能性が大きい。

２．Ｂ地区

Ｂ地区土層の基本的層序は第Ⅰ層；暗黄褐色砂質土（表土）、第Ⅱ層；黄褐色砂質土（床土）、第Ⅲ層；暗灰褐色砂質土（遺物包含層）、第Ⅳ層；暗褐色砂質土（地山）である。地山までの深さは浅く、40～60㎝程度で、地山面はＢ地区全体では南側部分がやや低くなっている。遺物包含層からは山茶椀・山皿・常滑壺または甕など中世の遺物が出土しているが、部分的に弥生時代から古墳時代の遺物も出土している。とくに古墳時代須恵器の出土地点は集中しており、後述する溝の存在などから考えて古墳の痕跡と思われる。

この古墳の痕跡については第１－６図にスクリーントーンで示したが、発掘区北端付近に径15～16ｍの円墳、発掘区西端付近に一辺15ｍ前後の方墳がそれぞれ１基ずつあったと推定される。２基ともに墳丘部などにかなりの削平を受けており、40㎝程の盛り上がり部分が認められる程度である。とくに西側の方墳については、墳丘部を削平した土で周辺を整地した痕跡がみられる。

確認された掘立柱建物は10棟あり、建物の向きは概ね２種類に分けられる。

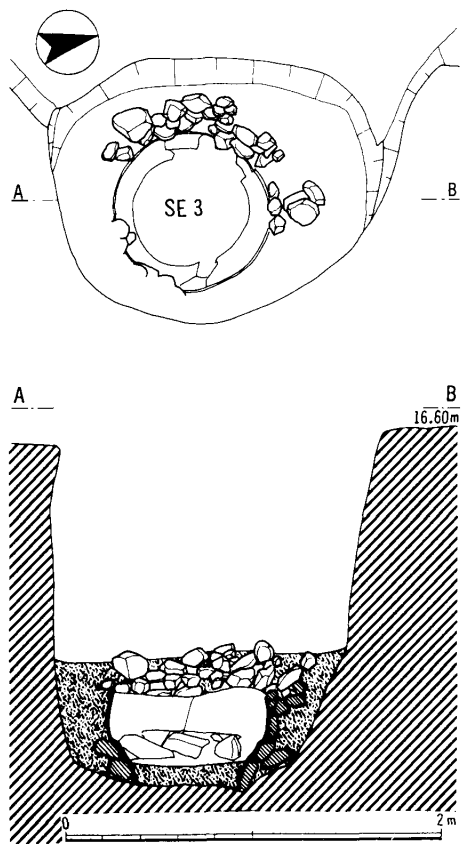
以下、検出された主な遺構について概述する。

１．掘立柱建物

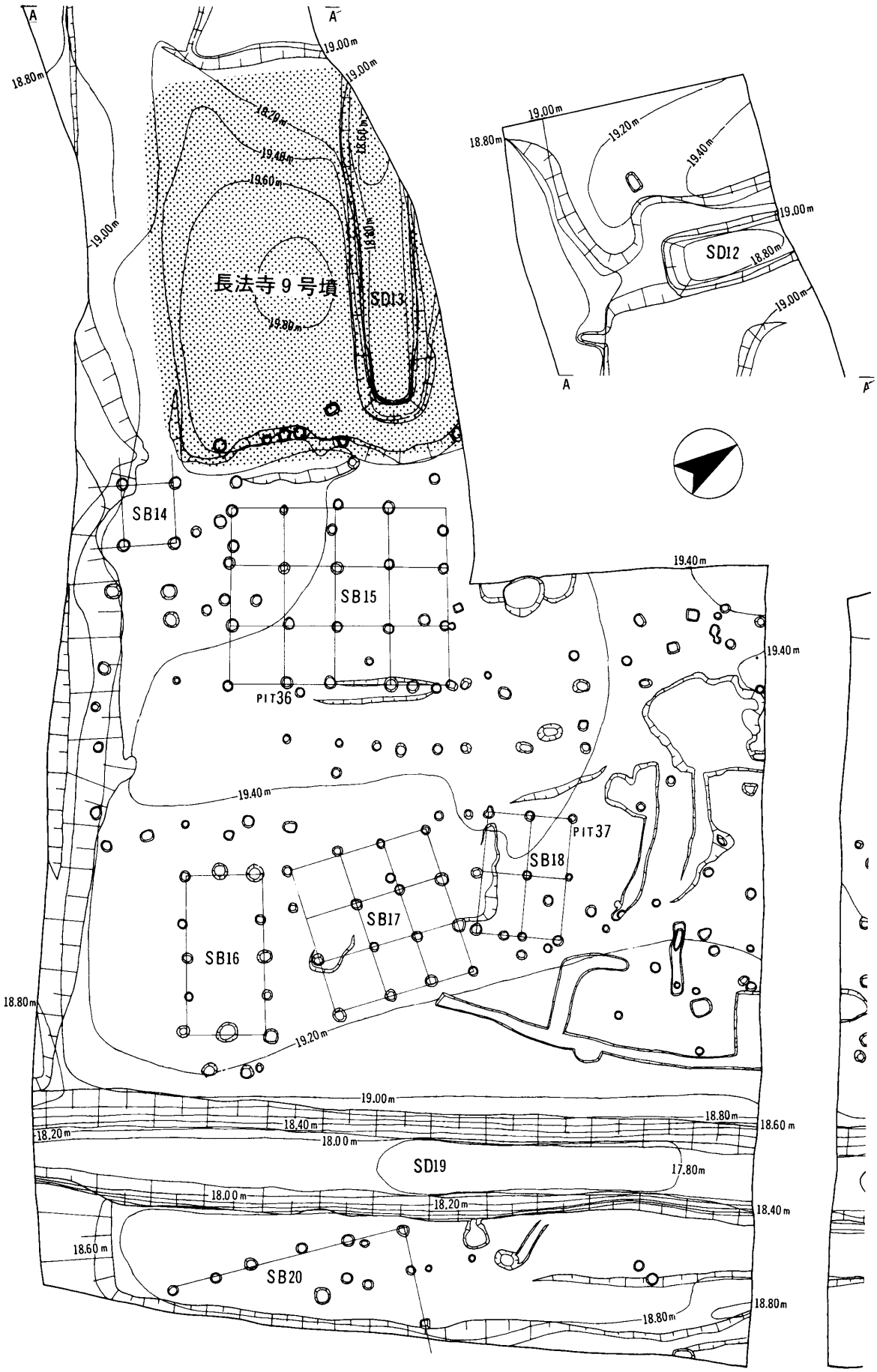
ＳＢ14　棟方向は不明。１間×１間分が検出された。南側と西側にのびるが後世の削平及び撹乱により柱穴が消滅したと思われる。建物柱穴内からの遺物は出土していない。

ＳＢ15　南北棟。４間×３間で柱間は、桁行で2.0ｍ＋1.8ｍ＋1.8ｍ＋2.0ｍであり、梁行は2.1ｍの等間である。建物北西隅の柱穴は検出できなかった。建物東側柱穴のひとつ（PIT36）から山茶椀の底部（27）が出土している。

ＳＢ16　東西棟。４間×２間で柱間は、桁行で1.6ｍ＋1.3ｍ＋1.4ｍ＋1.4ｍと不揃いであり、梁行は1.4



第１－５図　SE３ 実測図（１：40）



第1－6図　B地区 遺構平面図（1：200）

mの等間である。建物柱穴内からの遺物は出土していない。

ＳＢ17　東西棟。３間×３間で柱間は、桁行で1.8mの等間であり、梁行は1.6m＋1.6m＋1.8mである。建物柱穴内から遺物は出土していない。後述のＳＢ20とともに他の掘立柱建物とは方向が異なっており、時期差が考えられる。

ＳＢ18　東西棟。２間×２間で柱間は、桁行で2.1mの等間、梁行は1.4m＋1.6mである。建物北西隅の柱穴（PIT37）から山皿（40）が出土している。

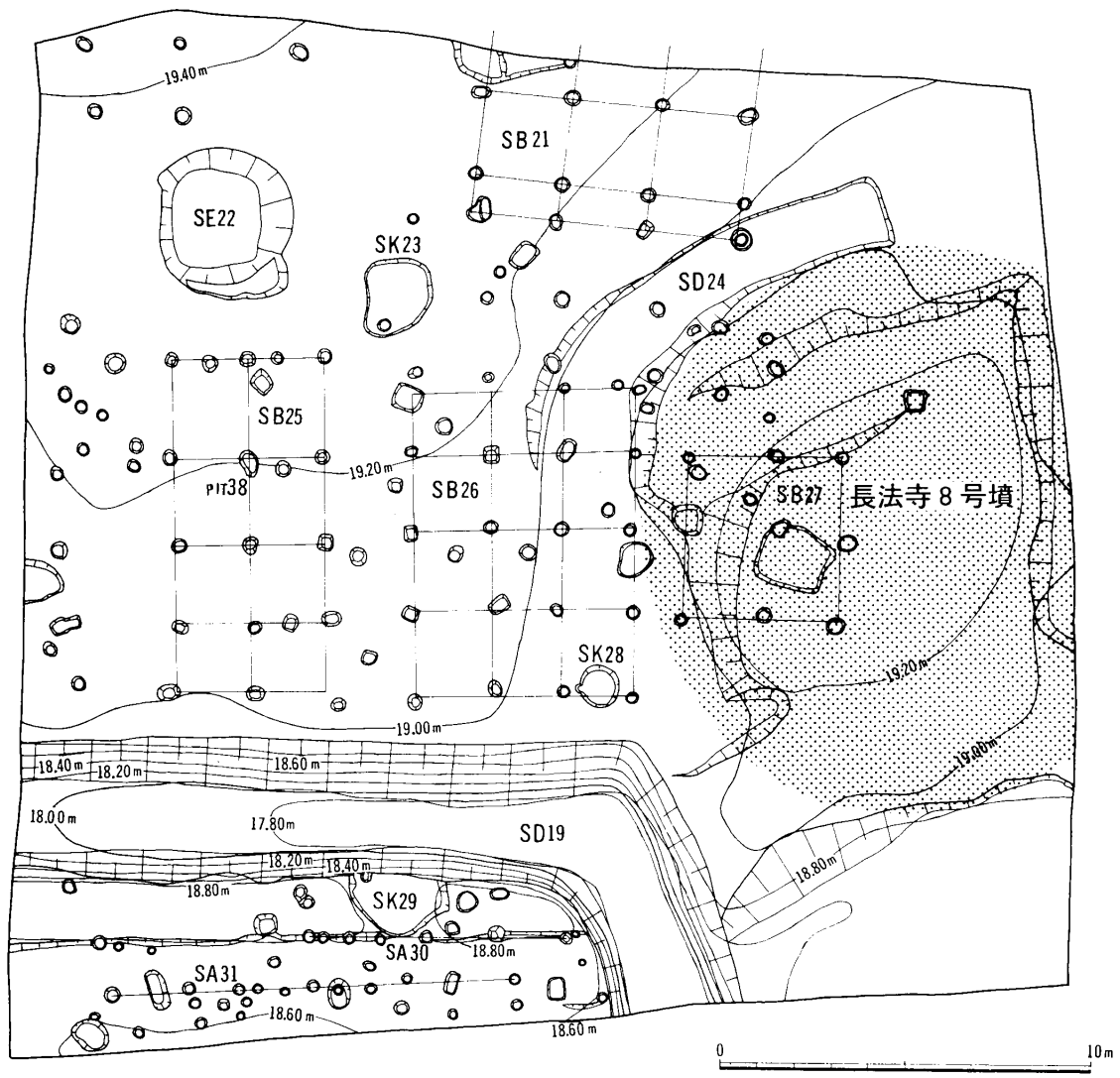
ＳＢ20　南北棟。５間×２間分まで検出された。柱間は桁行で2.0m＋1.8m＋1.8m＋1.4m＋1.6mと不揃いであり、梁行で1.5m＋2.0mである。建物柱穴内からの遺物は出土していない。

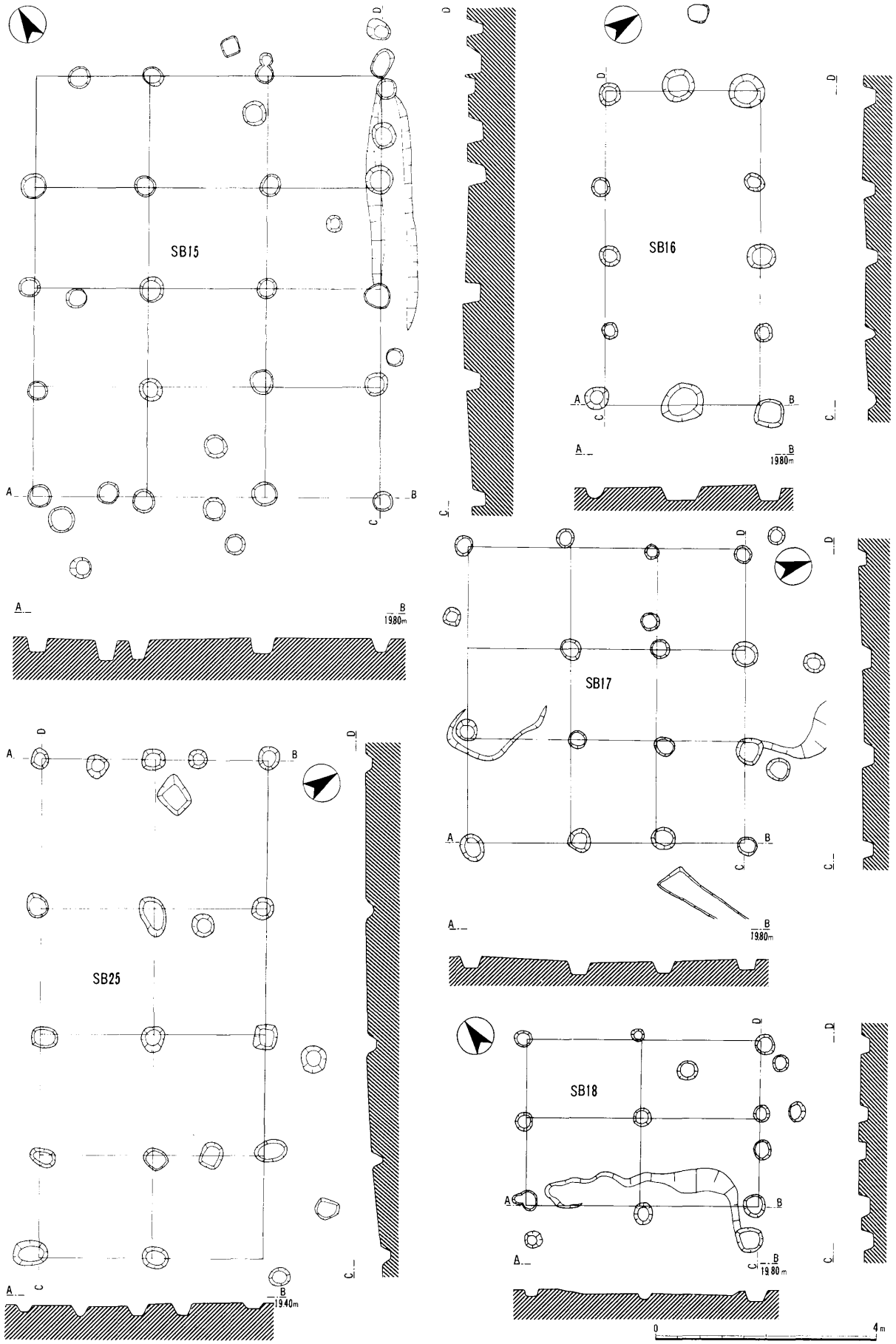
ＳＢ21　南北棟。３間×２間分まで検出された。東側に廂をもつ。柱間は、桁行で2.4mの等間、梁行でも2.4mで東廂の出は1.0mである。建物柱穴内からの遺物は出土していない。

ＳＢ25　東西棟。４間×２間で柱間は、桁行で2.7m＋2.2m＋2.2m＋1.8mと西側１間分が長い。梁行は2.1mで等間である。柱穴検出面はゆるく傾斜して東側が低く、また北東隅の柱穴は検出できなかった。建物柱穴のうち中央西側の柱穴（PIT38）から山茶椀（30）が出土している。

ＳＢ26　東西棟。４間×３間で柱間は、桁行で1.8m＋2.1m＋2.1m＋2.2mであり、梁行は1.9m＋1.9m＋2.2mである。建物柱穴内からの遺物は出土していないが、建物北東隅にある土坑（ＳＫ28）はこの建物に取り込まれており、後述するようにこの土坑からは多量の中世遺物が検出されている。

ＳＢ27　東西棟。２間×２間で柱間は、桁行で2.2mで等間、梁行は2.1mで等間である。建物柱穴内





第1－7図　SB15・16・17・18・25 実測図（1：100）

からの遺物は出土していない。

2．柵

ＳＡ30・31　ＳＤ19の東側に並行してほぼ南北に約２m間隔でたてられ、長さは７mと11mを測る。

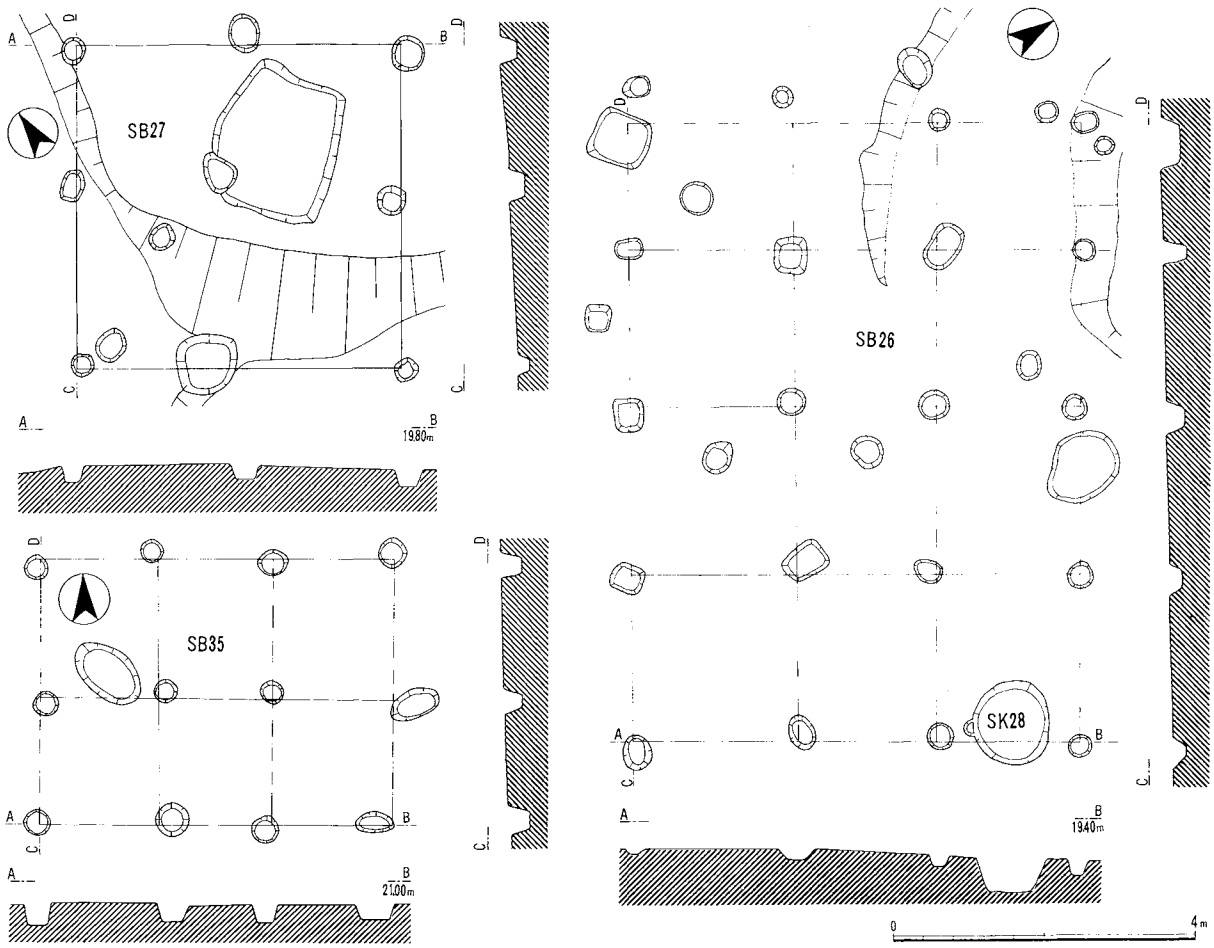
3．井　戸

ＳＥ22　発掘区中央部よりやや西で検出された。東西４m、南北3.5mの隅丸長方形の掘形をもち、遺構検出面からの深さは4.8mを測る。掘形の底に10～20cm大の自然石を一辺1.1mの方形に敷き並べた[2]基礎の上に木組方形桟支柱型[3]の井側を据えている。外法で一辺約１mの正方形をなしており、幅30cm前後の縦板を東西南北各４枚ずつ合計16枚で囲む。さらに約８cm角の角材を内枠とし、その内枠を支えるものとして四隅に柱を有し、井戸を強固なものにしている。最下段の四隅の柱の基礎部分には10cm大の扁平な自然石を配している。内枠は井戸の最下端とその上方約80cmの場所にあり、組み方は北と南の角材の両端は凸状に、東と西は凹状になっており、北と南の材が東と西の材にはめこむようになっている。縦板の継目には外側に厚さ１cm前後のさまざまな添板をあて、土砂や汚水の流入を防ぐ工夫をしている[4]。

井戸埋土は検出面より第Ⅰ層；暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土、第Ⅱ層；暗褐色砂質土（礫混入）、第Ⅲ層；暗灰黄褐色粘質土・暗青灰色粘質土、第Ⅳ層；青灰色砂質土に区分される。このうち還元されているのは第Ⅱ層以下であり、同時に第Ⅲ層以下は比較的強固な砂岩層であり、これを掘削して井戸が掘られている。埋土中からは多量の山茶椀が出土しているが、第Ⅰ層から29・34が、第Ⅱ層から35・37が、第Ⅳ層底付近から28がそれぞれ出土した。他に第Ⅲ層から土師器皿（38）、山皿（41）、片口鉢（44）、常滑甕口頸部（46）が、掘形埋土下層から山茶椀（33）も出土している。

4．土　坑

ＳＫ23　２m×1.5mで不定形、深さ15cm前後である。埋土中から青磁椀片（43）、山茶椀片などが出土している。



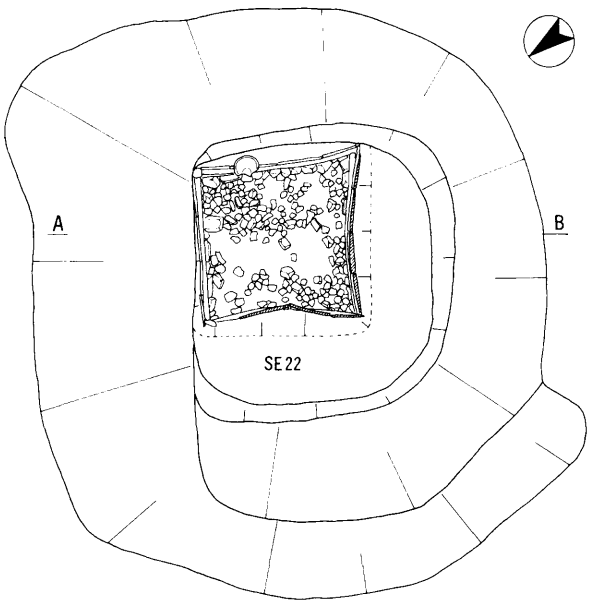
第１－８図　SB26・27・35 実測図（１：100）

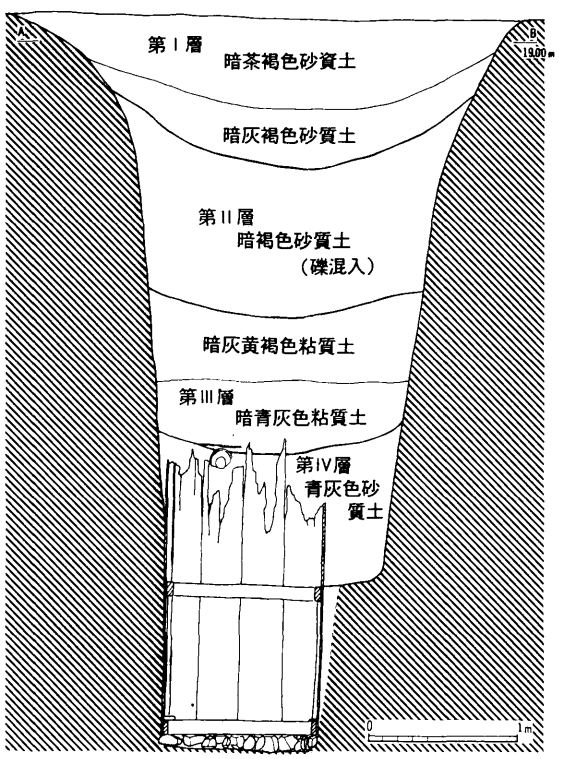
ＳＫ28　径１ｍ程の円形で、深さは約60㎝である。前述したＳＢ26に取り込まれており、同一時期のものと考える。埋土中より山茶椀（36）が多量に出土している。

ＳＫ29　深さ約20㎝で、径２ｍ程の円形を呈すると思われるが土坑西部分がＳＤ19によって切られている。埋土中より弥生土器台付甕脚部（18）が出土している。

５．溝

ＳＤ12　幅約２ｍ、深さ約60㎝で発掘区西端付近で検出された。埋土は暗赤褐色砂質土で、これは東に隣接する古墳の痕跡と考えられる墳丘の土層と一致する。埋土中からは弥生土器台付甕の脚部（19）や土師器片、須恵器片が出土しており、墳丘削平後の整地作業の中で埋没した溝と考えられる。





第１－９図　SB22 実測図（１：50）

ＳＤ13　幅約2.5m、深さ１ｍ前後で発掘区西にある古墳の痕跡と考えられる墳丘を掘り込んで東西に走る。埋土中からは須恵器杯蓋片（20）や山茶椀底部（26）、灰釉広口瓶口頸部（45）、甕片、土師器片など多量に出土している。また須恵器片を除く他の遺物の大部分が溝の底付近から出土しており、埋土中上層からの出土量は極めて少ない。

ＳＤ19　幅４ｍ前後、深さ１ｍ前後の形の整った溝であるが、溝というよりも中世城館の堀を思わせる。発掘区の東端付近をほぼ南北に走り、途中で直角に東に曲がり発掘区外へのびる。埋土は３層からなり、それぞれの層には小石が多量に含まれていたが、埋土中から出土した遺物は極めて少なく、山茶椀片や土師器片がわずかにあるのみである。この溝の検出面は掘立柱建物と同一面である。この溝を堀と仮定するならばその堀内部の状況調査が必要であるが、内部にあたる発掘区東の隣接地は後世の開墾によって２ｍ以上切り取られているため、性格は不明確である。

ＳＤ24　幅２～3.5m、深さ10cm程度で弧を描きながら走る。古墳の周溝の削平を受けた底部分の痕跡であり、隣接する40㎝程の墳丘の痕跡とともに１基の円墳であったと考えられる。埋土中より須恵器杯身片（21）、須恵器長頸壺片（22）、須恵器甕片（23・24）、灰釉甕片（25）、土師器片など出土している。

3．C地区

C地区土層の基本的層序は第Ⅰ層；暗灰色砂質土（耕作土）、第Ⅱ層；暗灰褐色砂質土（床土）、第Ⅲ層；褐色粘質土（遺物包含層）、第Ⅳ層；暗赤褐色砂質土（地山）である。地山までの深さは場所によって異なり、浅い所で約20cm、深い所で約130cmであった。地山面は東から西にゆるく傾斜しており、発掘区東端は西端よりも約50cm高い。遺物包含層中には山皿を中心とする中世の遺物が大部分を占め、ごくわずかに須恵器片が含まれている。発掘区中央部付近には人工的な平坦面があり、その両側に掘立柱建物が1棟ずつ検出された。この平坦面上では若干の近世陶器片が出土しており、近世の削平面と考えられる。また発掘区西側地山面は部分的に焼土化している。

以下、検出された主な遺構について概述する。

1．掘立柱建物

SB34　東西棟。3間×2間で柱間は、桁行で1.3m＋1.6m＋1.6mであり、梁行は1.9mの等間である。建物柱穴内からの遺物は出土していない。

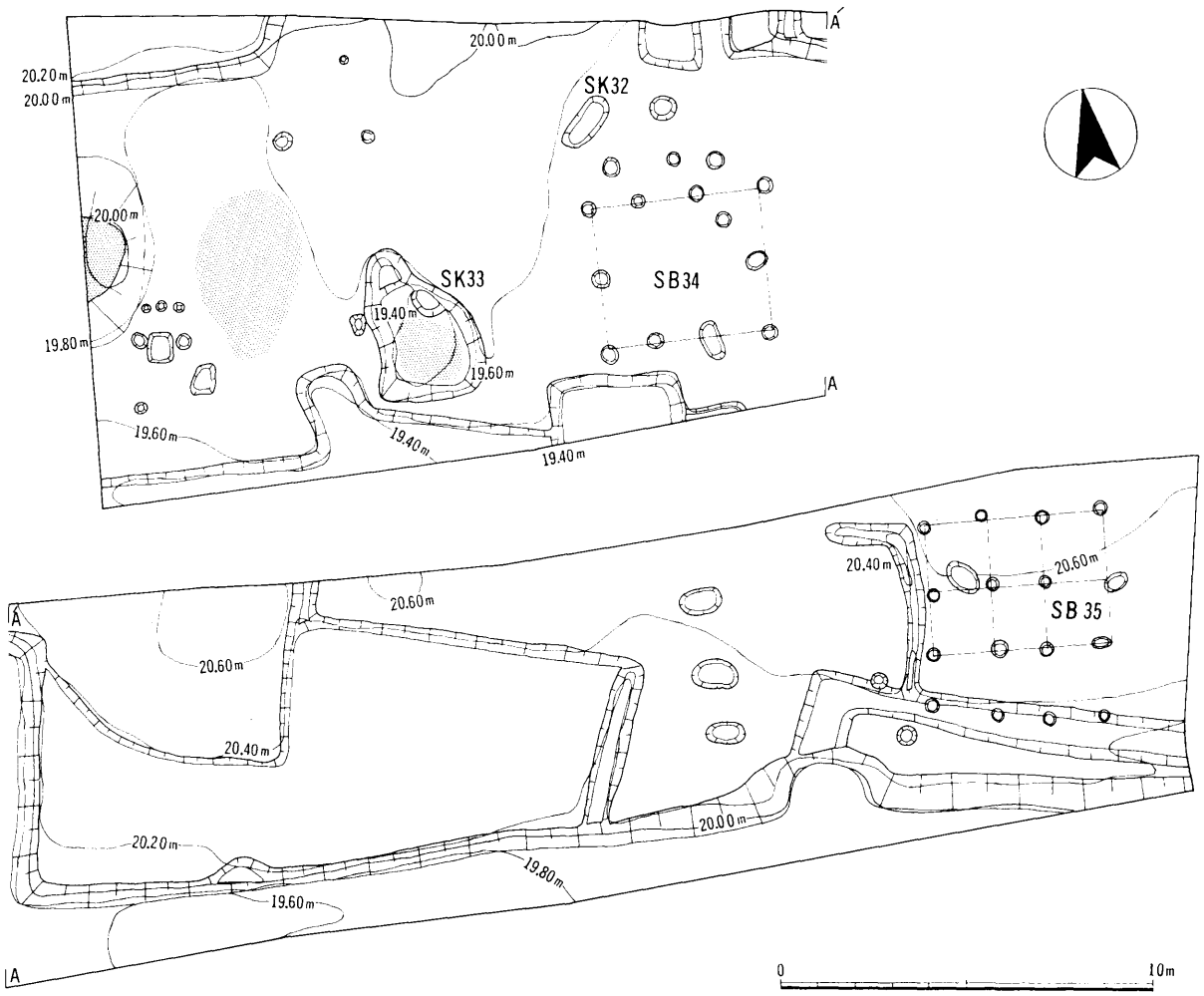
SB35　東西棟。3間×2間で柱間は、桁行で1.7m＋1.4m＋1.7mであり、梁行は1.7mの等間である。建物内西側に深さ約60cmの土坑も検出されたが、建物柱穴内とともに遺物は出土しなかった。

2．土　坑

SK32　長さ1.6m、幅70cm、深さ30cmほどの細長い土坑である。埋土中から山茶椀（31・32）と土師器片が出土している。

SK33　南北に4.5m、深さ40cmほどの不定形な土坑である。埋土中からは山茶椀とともに山皿（42）が多量に出土した。土坑南側底面は焼土化している。

（倉田　守）



第1－10図　C地区 遺構平面図（1：200）

3．遺　　物

当遺跡の出土遺物については出土遺物観察表（第１－１表，第１－２表）に示したとおりである。遺跡は３地区に分けられそれぞれ時期・性格は異なるが全体的に中世の遺物が主流を占めている。同時にそれ以前に弥生及び古墳時代の遺跡が存在したことを裏付けるごとくこの時期の遺物も出土している。ここでは中世の遺物に焦点をあてながら、遺構の性格を知るうえで重要なポイントとなる出土遺物の時期についての考察を行いたい[5]。

１．Ａ地区

１．土師鍋

鍋（11）　口径32.6cmで体部から「く」の字状に外反し、口縁端部を三角形状につまみ出す。口縁部には二条の凹線がめぐる。体部外面上方はハケメ調整を施し、体部下方はヘラケズリ、内面はヨコナデされている。極めて淡い褐色を呈し、ススの付着はみとめられない。16世紀中頃の産と考えられる。

羽釜（10・12・13）　Ａ類（10）とＢ類（12・13）に分けられる。10は口径22cmと小型であり、鍔部は短く、体部に対してほぼ直角につく。体部は丸い。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、体部外面には斜位の荒いハケメ、内面は横位の細かいハケメがみられる。12・13は口径25cm程度で鍔部は上方につき出し、端部に一条の凹線がめぐる。口縁端部は外につまみ出される。体部外面はハケメにより、内面はヨコナデにより調整されている。12の内面鍔部付近にはユビオサエによる調整がみられる。これらは他の一括出土遺物（16）の常滑甕片の時期から判断して15世紀後半のものと考えたい。

２．陶磁器

山皿（２）　底径5.2cmのもので、底部から体部が直線的に外反する。底部外面に回転糸切痕、底部内面中央はユビオサエによる。体部外面にはヌタ痕がみられる。14世紀前半のものと考える。

山茶椀（３・４）　３は底部のみである。底径８cmで断面長方形の高台を貼付ける。底部外面に回転糸切痕があり、高台周辺のみナデ消されている。胎土は密であり全体的にていねいな仕上げである。４は底径10.4cmの大型のものであり、貼付け高台は低くつぶれている。体部は直線的に外開しており、内面見込み中央部付近は著しく凹んでいる。底部外面には静止糸切痕が残る。３は藤澤氏の編年によると第３型式に相当し12世紀前半、４は同様に第７型式に相当し13世紀中頃と考えられる。

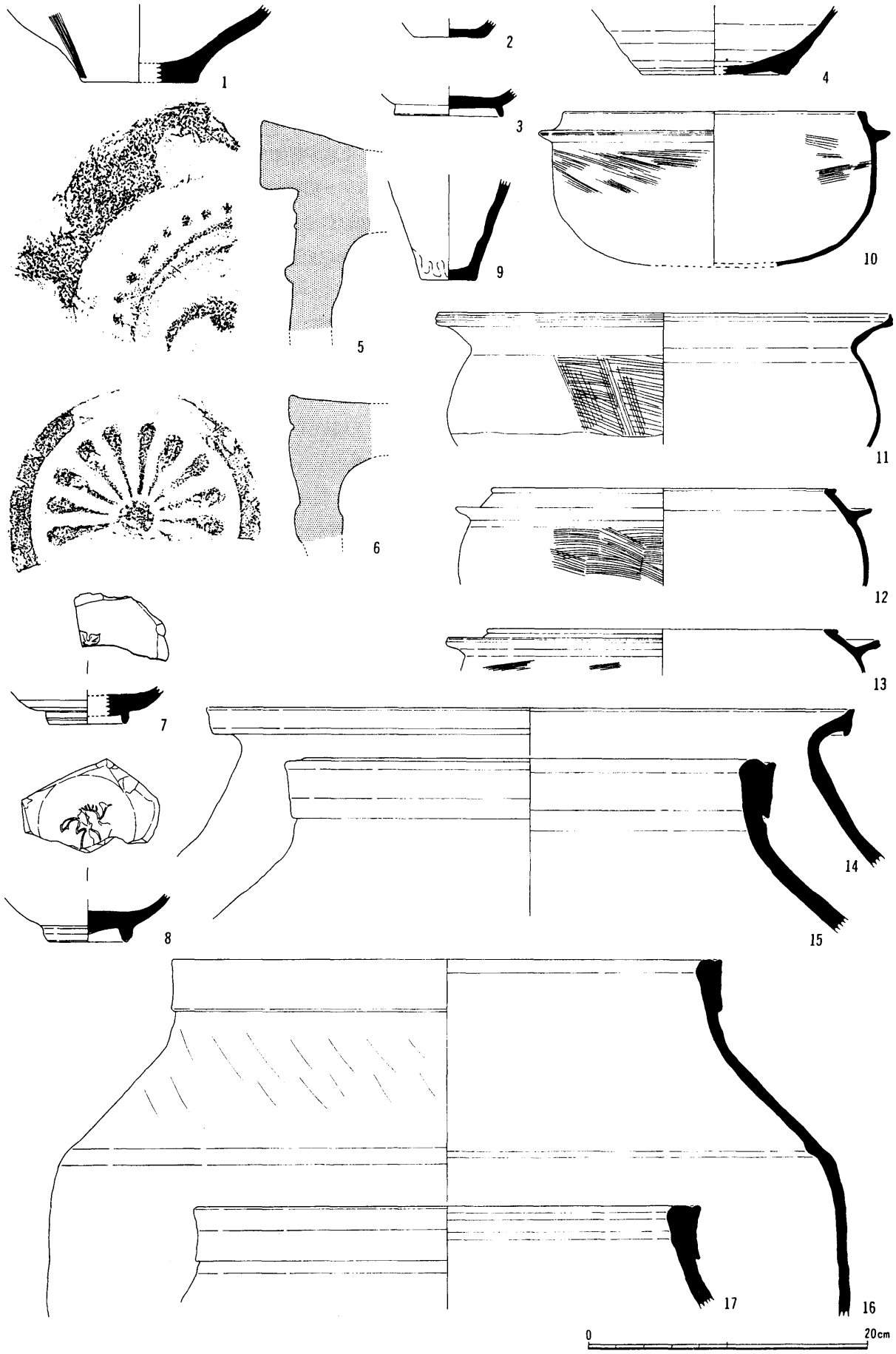
青磁椀（７・８）　７は高台が直立し、外側に面取りを施す。底部は厚い。底部外面はヘラケズリを行い、高台外側面取り部分まで施釉。釉は薄く透明感があり、全体的にシャープなつくりである。内面見込みに木ノ葉状のスタンプを施す。８は器壁が厚く、特に底部中央付近において著しい。全体にやや緑色がかった釉が畳付を越えて高台内側まで厚く施される。底部外面露胎部分にトチン跡が見られる。内面見込みには花文スタンプを施す。７は14世紀後半から15世紀にかけて、８は15世紀前後から中頃にかけての時期と考える。

甕（14～17）　すべて常滑産と思われる。14は口径47cmで、頸部から口縁部が強く外反し、口縁端部は直下に垂下する。内面に輪積痕を明瞭に残し、茶褐色を呈する。内面口縁部には自然釉が認められる。14世紀後半のものと考えられる。15～17は同タイプのもので、口縁部縁帯は頸部に密着したいわゆる「Ｎ」字状口縁部のつぶれた形である。15と17の口径はそれぞれ32cmと34cmであるが、16の口径は60cmと大型である。16は、井戸ＳＥ３底に埋設されていたもので、体部下半部分を取り除いた状態で使用されていたものと思われる。体部外面に引っかき痕がみられる。15～17は15世紀後半のものと考えられる。

２．Ｂ地区

１．陶磁器

山皿（39～41）　台形高台がつくタイプ（39）と高台を意識して底部がやや突出したタイプ（40・41）がある。39は口径９cm、器高3.1cmで体部がやや丸味を帯びる。貼付け高台の端部にはモミガラ痕が認められる。内面はていねいなナデ調整が施されている。



第１－11図　A地区 遺物実測図（５・６は１：２,16は１：６,他は１：４）

灰褐色を呈す。40・41は口径8.2cm、器高2cm余で体部はほぼ直線的に外開する。糸切痕ナデ消しを行い、内面はていねいなナデ調整を施している。灰褐色または灰白色を呈する。41の底部外面に墨書が認められるが、薄くなっているため明瞭ではないが2～3文字が書かれており、下の字は「久」と読める。藤澤氏の編年によると、39は第3型式に相当し12世紀前半、40・41は第5型式に相当し12世紀後半のものと考えられる。

山茶椀（26～37）　時期区分の上では5時期に分けられる。26が最も古く、灰釉椀とも考えられるが底部のみが残存しており、ここでは山茶椀として扱う。底径7cm、高台は高く、断面は三角形に近い。底部外面には回転糸切痕がみられ、高台周辺はていねいなナデ消しを施す。内面見込みはハケメ調整を行い、胎土は極めて緻密である。藤澤氏の編年では第2型式に相当し、11世紀後半と考えられる。27・33は体部丸味を帯び口縁部は外反する。底部は厚く断面台形の高台がつく。33は口径16cm、器高5cm、底径7.6cmで完形、27は底部のみで底径7cmである。27の高台端部には砂痕が付着し、内面見込み部分には底径7cm程の山茶椀と思われる重ね焼き痕が明瞭に残る。この重ね焼き痕より外側の内面全体に自然釉が見られる。33は底部糸切痕ナデ消し、高台端部にはモミガラ痕が付着し、内面見込みにはていねいなナデ調整が施される。藤澤氏編年の第4型式に相当し、12世紀中頃のものと考えられる。28は底部の一部のみ残存しているが、底径7.4cmと推定される。体部は丸味を帯び、高台は低くつぶれて台形をなし、端部にはモミガラ痕が多量に付着する。30は口径15.4cm、器高5cm、底径7.4cmで体部はやや直線的であり、口縁部に至りやや外反する。内面底部と体部との境は比較的明瞭である。高台端部には多量のモミガラ痕が付着する。ともに12世紀後半のものと考えられる。35・37は、体部が丸味を帯び、口縁部は外反し端部は肥厚する。低い高台は台形を呈し、35は一部剥離している。高台端部にはモミガラ痕が多量に付着する。35は内面見込み中央部は凹み、底部外面には静止糸切痕がみられる。37は器高の低いタイプであり内面底部と体部との境の稜は明瞭である。ともに藤澤氏編年の第6型式に相当し、13世紀前半のものと考える。36は体部はやや直線的、口縁直下で若干凹み、端部は尖る。台形高台端部にはモミガラ痕が付着、13世紀中頃のものと考える。34は体部丸味を帯び、台形の高台端部にはモミガラ痕が付着する。底部内面と体部との境の稜は明瞭であり、内面見込み中央部の周囲は凹んでいる。内外面ともにていねいなナデ調整が施され見込みには指圧痕がみられる。29は口径14cm、器高5cm、底径6.6cmで小型のもの。体部は直線的であり、高台は低くつぶれ一部で剥離している。底部外面には回転糸切痕がみられ、高台端部にはモミガラ痕が付着する。全体的に粗雑なつくりである。藤澤氏の編年では34は第6型式に、29は第8型式に相当するが、ともに井戸SE22埋土上層の同一層中から出土しており、他に同一層中から出土した山茶椀のタイプはほとんど前述の36の型式に相当することから、29・34も13世紀中頃のものと考えたい。

青磁椀（43）　底部厚く、畳付及び高台内部は露胎。外面体部に幅広い片切彫の鎬蓮弁文を施す。13世紀中頃の産。

片口鉢（44）　体部はやや丸味を帯び、口縁端部は面取りされている。体部は内外面ともにヨコナデされる。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものと考えられる。

広口瓶（45）　肩部と口頸部の境に段をもつ。口縁端部は外上方につまみあげられる。灰釉。12世紀前半の産。

壺・甕（46・47）　46は甕であり口頸部は外反し、口縁端部は外上方につまみあげられる。肩部に押印がみられる。12世紀後半のもの。47は壺であり肩部から胴部にかけて丸味を帯びる。口縁端部は面取りされる。13世紀前半のもの。ともに常滑産と思われる。

（倉田　守）

2．SE22出土　井戸枠

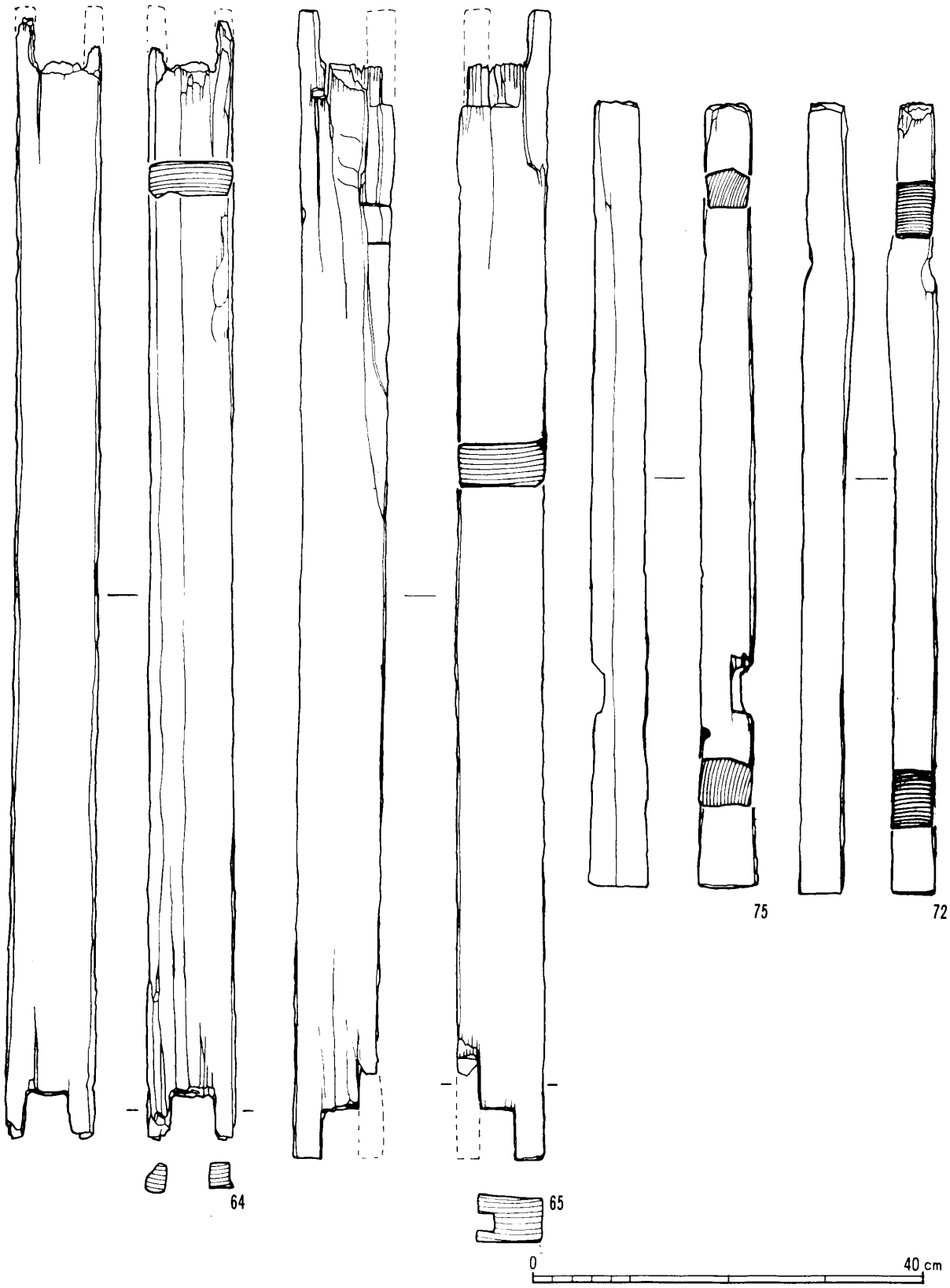
井戸枠の構造については、遺構の章で述べられているが、再び簡単に触れてみたい。井戸枠は、まず三段の横桟をつくり各段の四隅にそれぞれ支柱を置く。そして、その外側に、各辺に四枚ずつの縦板をならべる。さらに裏込め板をあてる部分も認められる。

縦板－東側（48～51）

東側の縦板は最も遺存状況がよく、全ての板が

第１－12図　B・C地区 遺物実測図（１：４）

第１－13図　SE22 井戸縦板実測図（１：８）



第１－14図　SE22井戸横桟・縦木 実測図（１：６）

180cm以上を測る。木取りは全て板目取りである。手斧による加工は、内面が五列から三列整然と加工されているのに対し、外面は一部が未加工であったり、縦半分のみで残りは未加工のまま、あるいは中央部分は縦⅓が未加工のものなどがある。内外面を逆転したものもある。これは、内面の加工が雑然としており下部では不十分なのに対し、外面の加工は四列に整然となされている。側面は手斧による加工が全面に施されているが、下部から40cm程度未加工部分を残すものもある。木口は斧状の工具に依って切断されたと思われる。

縦板－南側（52～55）

南側は全体に遺存状況が悪く腐蝕が進んでいる。木取りは全て板目取りである。手斧による加工は腐蝕のために不明瞭であるが、内面には三～四列に整然と施しているのに対し、外面は雑然としている。また55は内外面を逆転している可能性が高い。側面は手斧による加工を全面に施す。木口は斧状工具に依って切断されたと思われる。

縦板－西側（56～59）

西側も全体に遺存状況が悪く、下から120cm程度で欠損しているものが多い。木取りは全て板目取りである。手斧による加工は、内面には三～四列に整然と施しているのに対し、外面は雑然としている。また58は内外面を逆転している可能性が高い。側面には手斧による加工を施す。木口は斧状工具に依って切断されたと思われる。

縦板－北側（61～63）

四面の内で最も遺存状況の悪い面である。西端のものはその中でも最もひどく図版掲載に耐えないものである。木取りは全て板目取りである。手斧による加工は、内面には三～五列に整然と施しているのに対し、外面は雑然としている。側面には手斧による加工を施す。木口は斧状工具に依って切断されたと思われる。

横桟（64　東－上）

両端に目違いほぞの凹ほぞが施される。土圧による歪みが認められる。全体に腐蝕しており加工痕は不明瞭である。

横桟（65　東－下）

両端に目違いほぞの凹ほぞが施されるが、両端とも同じ側を欠損する。土圧によりヒビが入っており、折れている。加工は不明瞭である。

横桟（66　南－上）

両端に目違いほぞの凸ほぞが施される。全体に腐蝕が著しい。

横桟（67　南－下）

両端に目違いほぞの凸ほぞが施される。ほぞは鋸による切り込みの後割っている。手斧による加工を内外面は二列、側面は一列施す。

横桟（68　西－上）

両端に目違いほぞの凹ほぞが施される。全体に腐蝕著しく加工痕は不明瞭。

横桟（69　西－下）

両端に目違いほぞの凹ほぞが施される。手斧による加工を四面に施す。

横桟（70　北－上）

両端に目違いほぞの凸ほぞが施されるが、一方を欠損する。全体に腐蝕著しい。

横桟（71　北－下）

両端に目違いほぞの凸ほぞが施される。手斧による加工を内外面は二列、側面は一列施す。

支柱（75　北東隅）

両端の接触部分は腐蝕が進む。下半部に一ケ所ほぞ穴をもつ。転用材か。

支柱（72　南東隅）

両端の接触部分は腐蝕が進む。上半部に節穴と思われる抉りがある。

支柱（73　南西隅）

両端の接触部分は腐蝕が進むが、側面には手斧による加工が施される。

支柱（74　北西隅）

両端の接触部分は腐蝕が進むが、側面には手斧による加工が施される。　（田中久生）

3．C地区

1．陶磁器

山皿（42）　体部直線的で器壁は厚く、底部内面に指圧痕、底部外面に「大」の墨書がみられる。13世紀後半。

山茶椀（31・32）　体部丸味を帯び口縁部は外反。高台端部には砂痕・モミガラ痕付着。31は糸切痕ナデ消し、32は回転糸切痕が残る。ともに藤澤氏編年の第6型式に相当し13世紀前半のものと考えられる。

4．結　　語

橋門遺跡は3地区に分れそれぞれに時期・性格が異なるため，各地区ごとに遺構の内容を考察することによって本報告のまとめとしたい。

1．A地区

弥生時代の遺跡を破壊して中世の溝、井戸がつくられたと考える。この地区の主たる時期はＳＥ3の底に埋設された常滑大甕（16）の時期すなわち15世紀後半とする。また廃絶はＳＫ6の土師器鍋（11）の16世紀中頃とする。この付近には以前「長徳寺」があったという伝説[6]と永禄年間のこの地を含む織田信長の伊勢侵入、二次焼成を受けた多数の瓦片の出土などを考えると、この地区に何らかの寺院施設が存在したとも思われるが史料的根拠はなく推測の域を出ない。

2．B地区

弥生時代の遺構及び古墳を破壊し、一部では整地したうえに中世の建物群が形成されている。これらの掘立柱建物は10棟であるが、これらは建物方向からほぼ南北を軸として建てられたⅠ群（ＳＢ17・ＳＢ20）、やや東寄りに軸をもつⅡ群（ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ25・ＳＢ26・ＳＢ27）、さらに東寄りに軸をもつⅢ群（ＳＢ18・ＳＢ21）の3群に区別される。これらは建て替えによる時期差の表われとしてとらえられるが、それぞれの掘立柱建物の建てられた時期の前後関係は明確でない。ただＳＢ16とＳＢ17、ＳＢ18のように方向の異なる建物が極めて接近していることから、この3棟が同時期に存在していたとは考えられない。

少なくともⅡ群の6棟は同一時期に存在していたとするならば、1基の井戸ＳＥ22をもつまとまったひとつの施設と考えられる。またＳＢ26の北東隅にある土坑ＳＫ28からは廃棄されたと思われる多量の山茶椀とともにやや湿気を帯びた腐植土も出土しており、この建物が生活の場であったことをうかがわせる。土坑ＳＫ28は径1ｍの円形でほぼ垂直に約60㎝堀り下げられており、底は平坦であったことから、当初から屋内での不用物の廃棄場所であった可能性が強い。

これらの建物群の時期は、井戸掘形埋土下層から出土した山茶椀（33）が12世紀中頃に比定されるため、この時期にＳＥ22の成立を考える。（また廃絶については埋土中層から出土した山茶椀（35・37）の時期13世紀中頃まで廃棄場所として使用されていた。）（埋土上層から出土した山茶椀の時期による。）井戸埋土最下層出土の山茶椀（28）、埋土下層出土の山皿（41）、片口鉢（44）、常滑甕（46）に示されるように12世紀後半がもっともよく利用された時期であろう。井戸の南側にある掘立柱建物ＳＢ15の柱穴PIT36埋土から出土した山茶椀（27）の時期が12世紀中頃であること、その東側にある掘立柱建物ＳＢ18の柱穴PIT37埋土から出土した山皿（40）や井戸の東側に隣接する掘立柱建物ＳＢ25の柱穴PIT38埋土から出土した山茶椀（30）の時期が12世紀後半であることなどから、Ｂ地区の遺構の時期を12世紀中頃以降とし、掘立柱建物ＳＢ26に付属する土坑ＳＫ28埋土中の山茶椀（36）や井戸埋土上層出土の山茶椀（29・34）の時期である13世紀中頃まで存続したと考える。またこの地区は「彌勒堂」と呼ばれているところから寺院関係の施設が存在したことも考えられる[7]。

3．C地区

西側にある土坑ＳＫ32埋土から出土した山茶椀（32・33）の時期である13世紀前半から、その南にある土坑ＳＫ33埋土から出土した山皿（42）の時期である13世紀後半にかけての遺跡と考えられる。

以上、3地区に分けてそれぞれの遺構の時期について述べてきたが、橋門遺跡としてとらえるならばそれは弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、とくに鎌倉時代から室町時代に及ぶ文化がこの河岸段丘上に連綿と続いていたとみるべきであろう。

（倉田　守）

（註）

①鈴木敏雄は「河藝郡合川村大字長法寺遺跡」（『三重県考古誌考雑報32』）の中で「大字長法寺の西南字塚越と稱する所には之亦相當大形の圓塚を多數現存し、既に發堀せられたるもの亦甚多し。」と述べており、橋門遺跡を含む周辺一帯には長法寺古墳群が形成されていたものと考えられる。

②平城京右京四条二坊二坪で検出された井戸（ＳＥ02）の底部分の構造と類似する。奈良時代後半。（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和56年度』，1982）

③宇野孝夫「井戸考」の分類によれば、「ＢⅢ類縦板組横桟どめ井戸」で「（ａ）目違い枘で組むもの」でかつ「（２）横桟の間に支柱を入れて補強したもの」となり従ってＢⅢ・ａ２類と表記される。（「史林」65巻５号，1982）。また井戸の型式年代についてＢⅢ類は古代後期（10世紀～12世紀初め）に主流を占めるが次の中世前期（12世紀中頃～14世紀）にもかなり残るとしており、型式的には12世紀初めから後半にかけての所産と考えられる。

④草戸千軒町遺跡第７区木組み井戸と類似する。鎌倉時代。（広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1968年度発掘調査概報』，1969）

⑤この時期決定に際しては以下の文献を参考にした。

常滑市教育委員会『高坂古窯址群』，1981

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（日本貿易陶磁研究会「貿易陶磁研究」２，1982）

藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（瀬戸市歴史民俗資料館『研究紀要Ⅰ』，1982）

樽崎彰一「猿投窯の編年について」（愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』，1983）

赤羽一郎『常滑焼』（1984）

愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅴ）』，1986）

⑥合川地区『郷土史』（1983）

文禄３年の「勢州安芸郡内三宅村検地帳」には「長徳寺」の小字名がみえる。（鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第４巻，1985に収録）。また河芸郡史編纂会『河芸郡史』（１９７３復刊）には「廃福壽寺跡」が当地に存在したが位置等詳細は不明とある。

⑦前掲文禄３年の検地帳には「みろくとう」「みろくとう下」の小字名がみえる。（鈴鹿市教育委員会前掲書に収録）。

Ⅱ．一志郡白山町　算所（さんじょ）遺跡

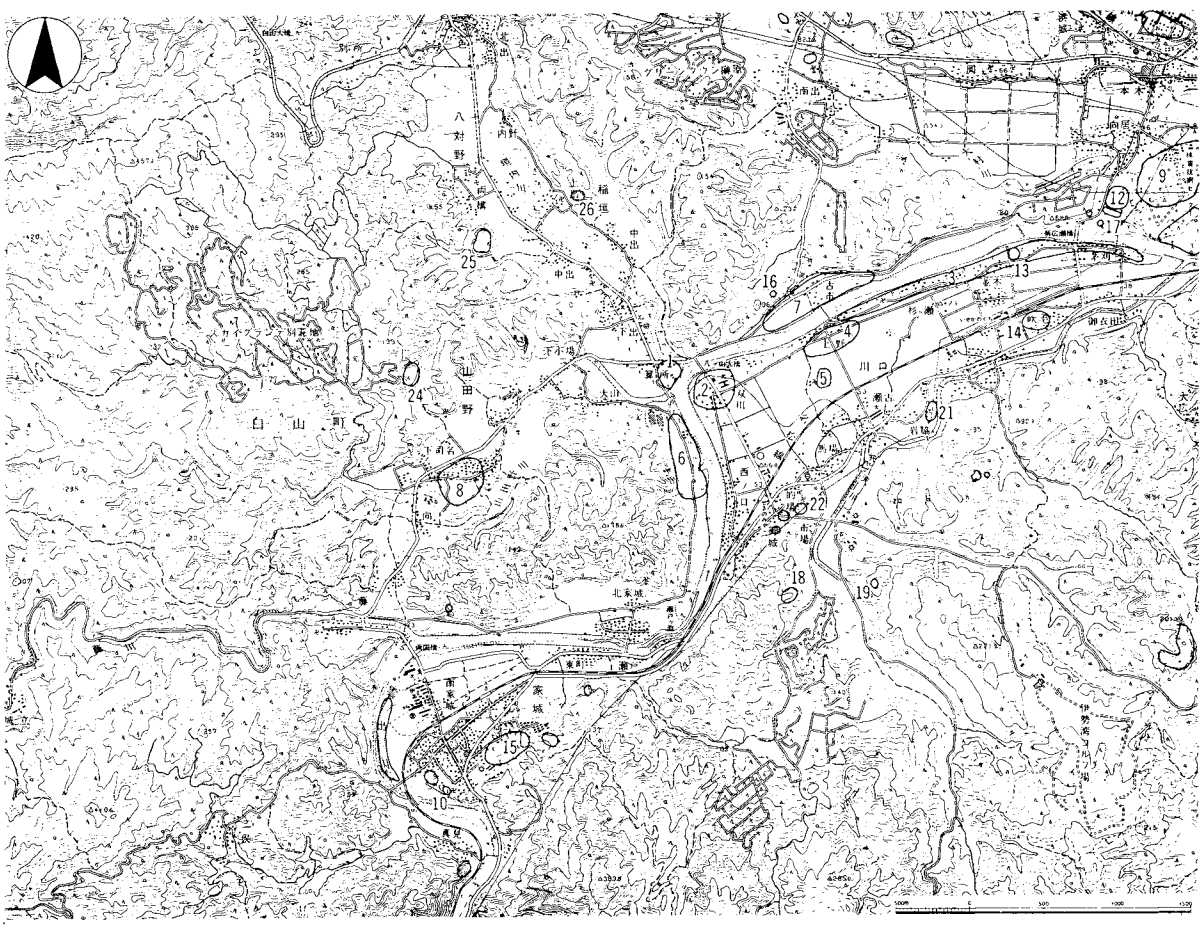
1．位置と環境

伊勢平野の西側を南北にのびる布引山地は、かつて伊勢国と伊賀国との境界線であり笠取山（845m）以南は隆起準平原が形成されて、青山高原と称されている。一方、奈良県境の三峯山（1,235m）に源を発する雲出川は布引山地に沿うように北流し、白山町に入ってから流れを東に変え、伊勢平野の中央部に肥沃な沖積地を形成して伊勢湾に注ぎこんでいる。

算所（さんじょ）遺跡（1）は、雲出川が白山町に入り家城（いえき）ラインと呼ばれる渓谷を過ぎて北流し、大きく東へ向きを変換する左岸の標高52m前後の河岸段丘上に位置する。当遺跡の南北で支流の山田野川と垣内川が雲出川に合流している。河床との比高は約14mであり、三方に急峻な段丘崖が形成されている。行政区画上は、一志郡白山町八対野（はったいの）字算所に所在し、縄文・弥生時代の遺物散布地として周知[1]の遺跡であった。

当遺跡周辺の歴史的環境を概述すると、雲出川の対岸には、縄文時代以降の遺物が散布し、弥生時代や奈良・平安時代の遺構が検出された大角（おおすみ）遺跡[2]（2）をはじめ、川口北方遺跡（3）や上野西遺跡（4）、台付無頸壺の出土した野田浦遺跡[3]（5）など弥生時代の遺跡が集中する。一方、雲出川左岸や支流の山田野川流域には、北家城遺跡（6）や、古市遺跡[4]（7）、田中名（たなかみょう）遺跡[5]（8）が散在する。

この地域で最も古い遺跡は、縄文時代早期まで遡ることができる。和遅野（わちの）遺跡[6]（9）やその少し下



第2－1図　遺跡位置図（1：50,000）

流にある亀ケ広遺跡では、早期の押型文土器が表面採集されており、大角遺跡でも早期の縄文土器片が見つかっている。さらに、南出遺跡（10）、西出遺跡（11）においても押型文土器が散布していることが明らかとなっている[7]。中・後期以降の縄文土器の散布地は、上記遺跡に加え、岩井戸遺跡（12）、馬乗岩遺跡（13）、吹毛遺跡（14）、古市遺跡、田中名遺跡、ミドダニ遺跡（15）が知られている。なお、青山高原西側の青山町種生の八王子遺跡で早期押型文土器が出土している他、西青山駅付近の滑石（なめりいし）遺跡や布引開拓地遺跡などの高原地帯で縄文土器片が見つかっており[8]、古くから文化交流のルートの一つ[9]として青山峠が利用されていたことを物語っている。

この青山峠を越えて雲出川沿いに伊勢平野へ下るコースは縄文時代以降も連綿として使われており、弥生時代に県下で最も早く弥生文化の足跡を残した中ノ庄遺跡[10]や古墳時代において県下でも古い時代に築造された向山古墳、西山古墳などの前方後方墳が雲出川の下流域に展開している。

しかしながら、当遺跡の周辺で発見されている古墳は少なく、古市古墳（16）、岩井古墳群（17）、馬廻古墳群（18）、コメンド山古墳（19）、ガガフタ古墳群（20）などで、横穴式石室を有する径10m内外の後期円墳がほとんどである。

奈良・平安時代になると、藤原広嗣の乱を避けた聖武天皇が「川口頓宮」で10日間滞在していた記事[11]や、平城宮出土の木簡[12]の中にも「川口関」の名がみられる。また、平安時代には、斎王の退下の際に青山峠を越える交通路が使われ、川口に頓宮が置かれており、交通の要衝としての環境は続いている。頓宮の所在地や、具体的な青山峠を越えるルートの比定については不明な所が多い。

古代末期から中世には、「山田野荘」「川口荘」などの貴族や寺社の荘園が成立していた。岩脇C遺跡[13]（21）、古市遺跡、田中名遺跡など近年の発掘調査により、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構や遺物が明らかとなってきている。

中世後期にいたると、雲出川の上流の美杉村多気に拠点を置く伊勢国司北畠家の支配するところとな

第２－２図　遺跡地形図（１：5,000）

り、家臣団の城館が交通路を見おろす丘陵を中心に築かれていく。川口城(22)、家城城(23)、山田野城(24)、八対野城(25)、稲垣城(26) などである。

以上、当遺跡の周辺の歴史的環境を概述してきたが、この地域は原始・古代より伊勢平野と畿内・伊賀とを結ぶ交通路が開かれており、文化交流の要衝であったことをうかがい知ることができる。今後、更に調査が進むことによって詳細な古代の環境が復元されていくであろう。

2．遺　構

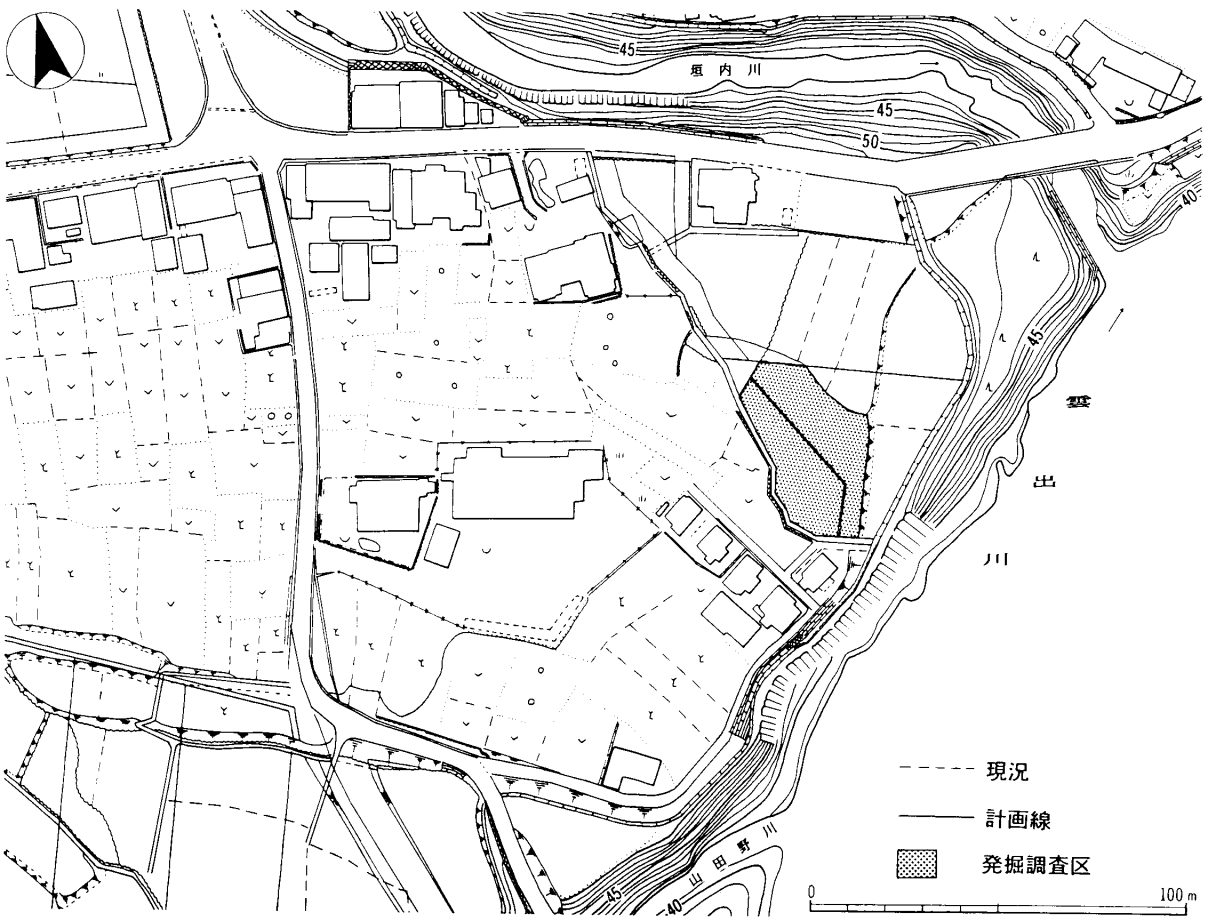
調査は4ｍ×4ｍの地区を設定し、北から南にアルファベット、東から西に番号を与えて行なった。

当遺跡の土層の基本的層序は、第1層：耕作土、第2層：灰茶褐色土、第3層：黒灰色粘質土、第4層：黒褐色粘質土、第5層：灰黄褐色砂質土、第6層：黄褐色粘質土（地山）である。第4層は部分的に薄く堆積し、第5層は東側部分で堆積がみられる。遺物包含層は、第3層・第4層・第5層であり、第6層直上で遺構を検出した。地表面から地山面までの深さは0.2～1.2ｍであり、西端部が一番浅くなっている。地山面は東へ向かって傾斜し最も高い南西端と北東端の比高は1.6ｍである。傾斜地のためか不定形な土坑が多く、竪穴住居とした1棟も東側が撹乱をうけている。小穴も幾つか検出したが建物等としてまとまるものはなかった。

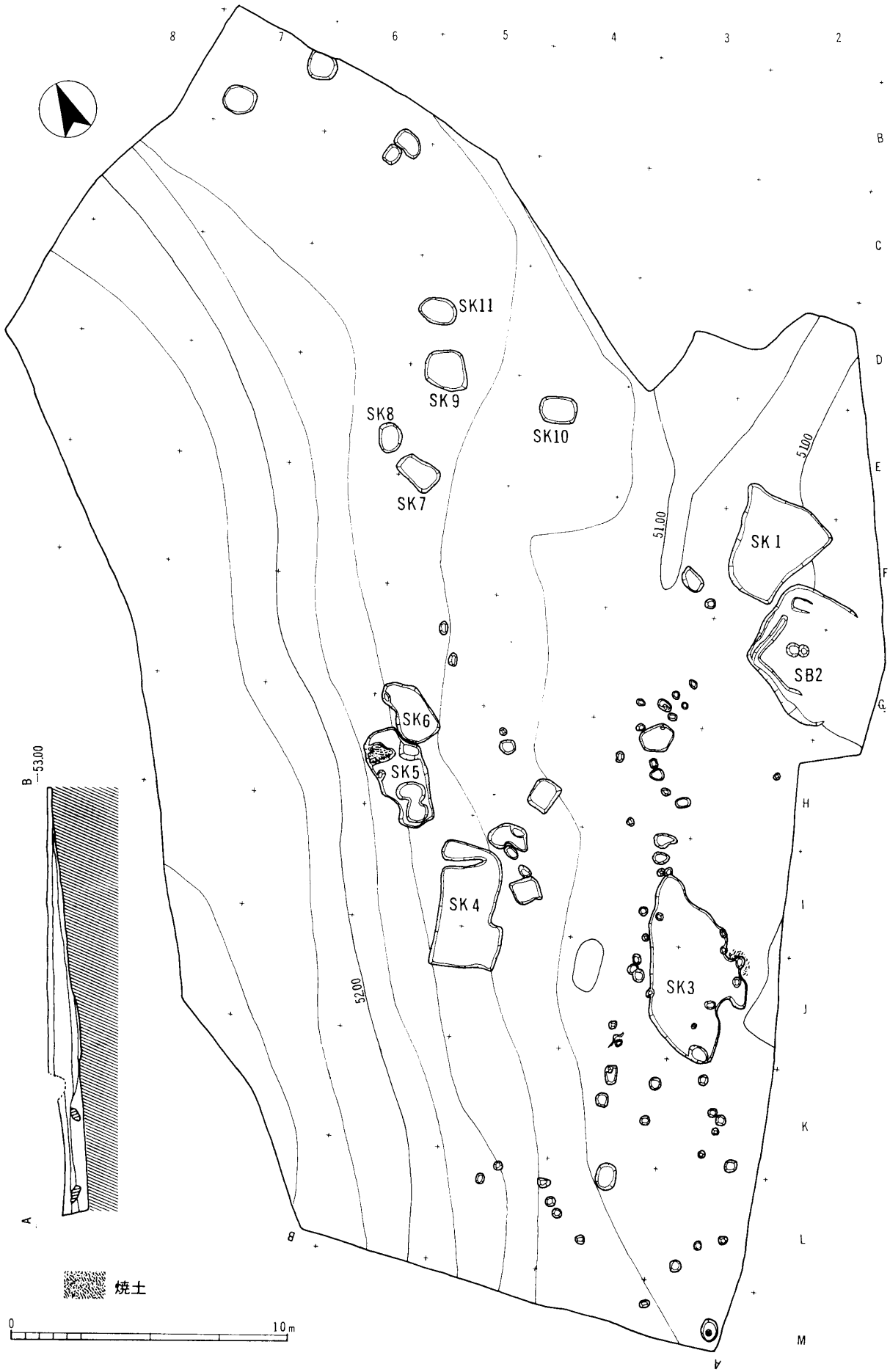
1．飛鳥時代

ＳＢ2　発掘区の北東に位置する。一辺3.8ｍの正方形のプランをもつが、東側は撹乱をうけ歪な形となっている。深さは0.3m前後である。西側と南側に「L」字状の幅0.4m、深さ0.1ｍの周溝をもつ。柱穴は検出されなかった。西壁に垂直につくように完形の須恵器（19）が出土した。

ＳＫ1　南北軸は3.7ｍをはかるが、東側部分が不



第2－3図　調査区位置図（1：2,000）



第２－４図　遺構平面図（１：200）

定形である。深さは0.2m前後で、埋土は固くしまって黄褐色土の下に灰茶褐色土がみられた。

ＳＫ３　北東に「コ」の字状の焼土があり、付近に甕片が多く散在していた。深さは0.1～0.3mだが、かなり歪な形をしており、出土遺物も縄文から飛鳥時代にわたっている。切り合い関係は確認できなかったが、複数の遺構が重なっている可能性もある。

ＳＫ４　南北3.7m、東西２～2.5mと方形に近い土坑である比高0.2mの斜面に浅く掘られている。

ＳＫ５　北西部に焼土と炭がブロック状に混じっており、深さは0.15mと浅く、南北3.3m、東西２～2.3mの不定形な土坑である。

ＳＫ６　南北２m前後、東西1.4m、深さ数cmの浅い不定形な土坑である。

２．室町時代

ＳＫ７～ＳＫ11　長径１～1.5mの楕円形の掘形をもつ土坑。深さは0.15～0.3m。埋土は炭混りの茶褐色土であり。ＳＫ７・ＳＫ９・ＳＫ10は特に炭を多く含む。出土遺物は土師器の小片がほとんどで、量も少ない。中世墓の可能性もある。

３．遺　　物

出土遺物としては、縄文時代早期～晩期の縄文土器、飛鳥～奈良時代の土師器片や須恵器、室町時代の土師器・陶器に大別できる。整理箱にして約20箱程度であり、細片が多く、遺構に伴うものは少量である。

以下、時代別に概述するが、併せて周辺の遺跡出土の遺物として、南出遺跡、西出遺跡、大角遺跡の表面採集遺物についても紹介しておく。

１．縄文時代

１．早期末葉の土器（１）

深鉢の体部片が１点出土している。内外に二枚貝によると思われる条痕をやや右下がりに施している。外面には小さい突帯を貼付し、この両裾はナデている。この突帯下に沿って竹管文を１列配している。器壁は４～５㎜と薄く、暗茶褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好である。

２．後期の土器（２～９）

２～４は深鉢の同一体と思われる。２は水平口縁部片であり、太いヘラ描沈線によって横長の区画が設けられている。区画内は集合条線が施されている。３～４は体部片であり、沈線による区画は「Ｊ」字状に縦位にみられる。胎土は細かい小石を若干含み、色調は淡黄白色を呈する。

第２－５図　縄文土器・石鏃 実測図（１：２）

5は深鉢の体部片で、曲線的で太いヘラ描沈線による区画内に集合条線を施している。胎土・焼成とも良好で、色調は、茶褐色を呈する。2～4とは別個体である。

6・7は波状口縁となる深鉢の口縁部片である。6は円棒状具による沈線で区画したのちに単節ＬＲの縄文も施している。口唇部は波頂部に行くほど厚く肥厚する。胎土は小石を含むが焼成は良好であり、色調は黄白色を呈する。7は、細かい凹凸のある工具による沈線で三角状に区画を施している。区画内に文様がなく、胎土・焼成とも不良で色調は茶褐色を呈し、やや粗雑な土器である。

8は深鉢の体部片であり、半截竹管による平行沈線が2単位分施されている。微細な小石を多数含み、胎土・焼成は不良であり、色調は茶灰色を呈する。

9は鉢の体部であり、「く」の字状に屈曲する部分に2条の沈線が施される。器壁は薄く、胎土には多数の小石を含み、焼成はやや軟であり、色調は黄褐色を呈する。

2～7は、後期初頭の中津式・称名寺式に並行するものである。

3．晩期の土器（10）

二条突帯をもつ深鉢の肩部片と思われる。断面が丸味を帯びた三角形の突帯に貝殻状具による「D」字形の刻目がわずかに残る。突帯から下はケズリが施されている。胎土は粗く、焼成は軟であり、色調は黄褐色を呈する。晩期末葉のものであろう。

4．石器

凹基無茎式の石鏃（11）である。乳白色のチャート製で、周縁の調整はされているが、片面の剥離はされておらず、未製品と思われる。長さ・最大幅共に1.3cmを測り、重量は0.6ｇ余りである。

2．飛鳥時代

1．ＳＢ2出土の土器

須恵器杯（19）が西壁に底をつけるように出土した他は、細片が多く図上復元できるものは僅少であった。遺物は整理箱1箱分あるが、数量的には土師器が圧倒的に多い。

（1）土師器（12～17）

器種としては、杯・甕・甑であり、甕片が最も量が多い。

杯　底部未調整のものと底部にヘラケズリを施すやや厚手で暗文を施すもの（14）がある。前者はさらに口縁部を強くヨコナデしやや椀に近いタイプ（12）と水平な底部から口縁部が内弯して立ち上がる杯（13）がある。

甕　いずれも遺存度が不良であるが、体部内外面ともハケメを施すものや内面をヘラケズリするものがある。口縁部はいずれも強く「く」の字状に外反し端部を丸くおさめるものが多い。また台付甕の脚台部片も数点出土している。15はいわゆるＳ字状口縁の退化した厚手の短い口縁をもつものである。

甑　口縁部片（16）と体部下半部片（17）が出土しているが、調整や色調・焼成の違いから別個体と考えられる。17は底部に幅5cmと推定される帯で区切られた半月状の蒸気孔が2つあいていたものであろう。

（2）須恵器（18・19）

図示したものを含め点数は数点であり、器種は杯身と杯蓋、タタキ目のある甕の体部片である

杯身　立ち上がりがあり受部をもつものと立ち上がりがなくなり、口縁部が外上方へ直線的にのび蓋から杯身へ変換した直後のものがある。18は陶邑編年[14]でいうＴＫ209型式に類型を求めることができ7世紀初頭に比定できる。19は前述した完形品だが、同編年によるＴＫ217型式に相当し、7世紀前半の所産であろう。

2．ＳＫ1出土の土器

出土量は少なく、ほとんどが土師器片である。21は土坑内で底を上にして出土したもので、口縁部は欠損していたが、図上復元したものである。小型甕で平底の様相を呈しており、底部外面に葉脈痕がみられる。

3．ＳＫ3出土の土器

当遺跡の中では最も出土量の多い土坑である。縄文土器片や古い時期の須恵器も出土しているが、ＳＢ2と同様な土師器が量的にも多数を占める。特に北東部の焼土付近からは比較的大きな甕片が何点か出土している。

（1）．土師器（22～27）

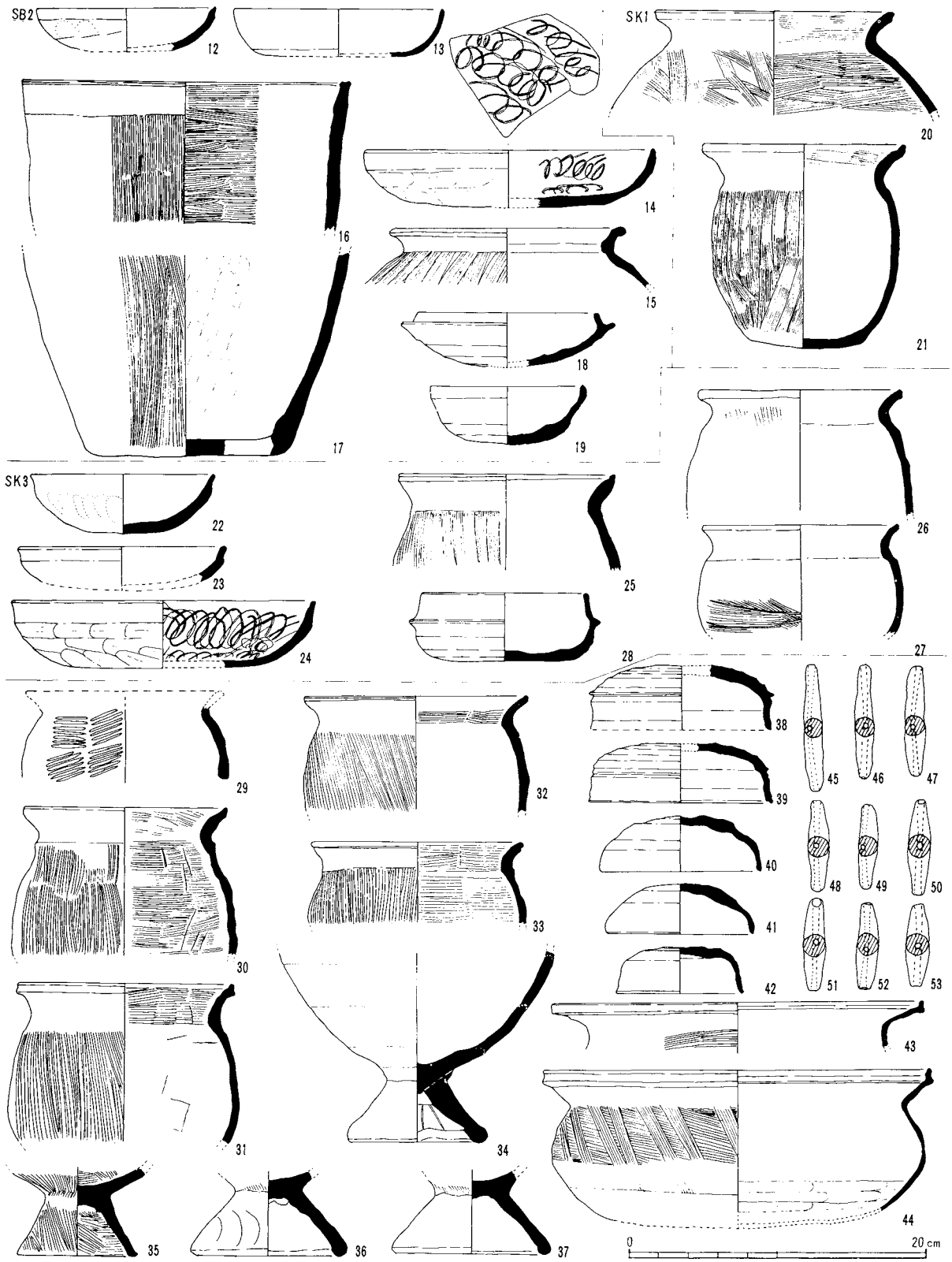
杯　タイプは全くＳＢ2と同じである。22は完形品であり、指頭痕が強くつけられている。24は14と

よく似ており、内面にもラセン状の暗文がみられる。

甕　口径13～14cmの小型甕が多いが、ＳＢ２やＳＫ１ではみられないものもある。26は乳茶褐色を呈し、体部内外面にハケメの見られないものである。27は器高の浅い甕と思われ、体部外面の一部にハケと沈線による調整が施されている他は、丁寧にナデられている。

（２）．須恵器（28）

杯身　28は立ち上がりが長く内傾し、端部は丸くおわる。胎土は緻密であり、外面は紫褐色を呈する。



第２－６図　遺物 実測図（１：４）

直上の包含層出土の小片と接合できるが、６世紀前半の所産と考えられ、まぎれこみか、重複した遺構の遺物の可能性もある。

３．その他の遺物

１．土師器

甕（29～37）　29は体部片であるが、外面に左下りのタタキを施す古墳時代初頭のもので、畿内、伊賀地方からの搬入品であろう。30～33は小型甕で端部の丸くおさまるものと上方につまみ上げられるものがある。34は台付甕の上半部を欠損するが、体部外面はナデられているのみで、粘土紐の痕跡がはっきりと残っている。脚台部はわずかに折り返され肥厚し、尖った底部にねじこむようにつけられ、内面にしぼり込みがある体部と脚部の境は粘土を貼り付けてナデている。胎土には３～８㎜の黒色の小石を含む。

35～37はＳ字状口縁あるいはその退化した甕の脚台部である。

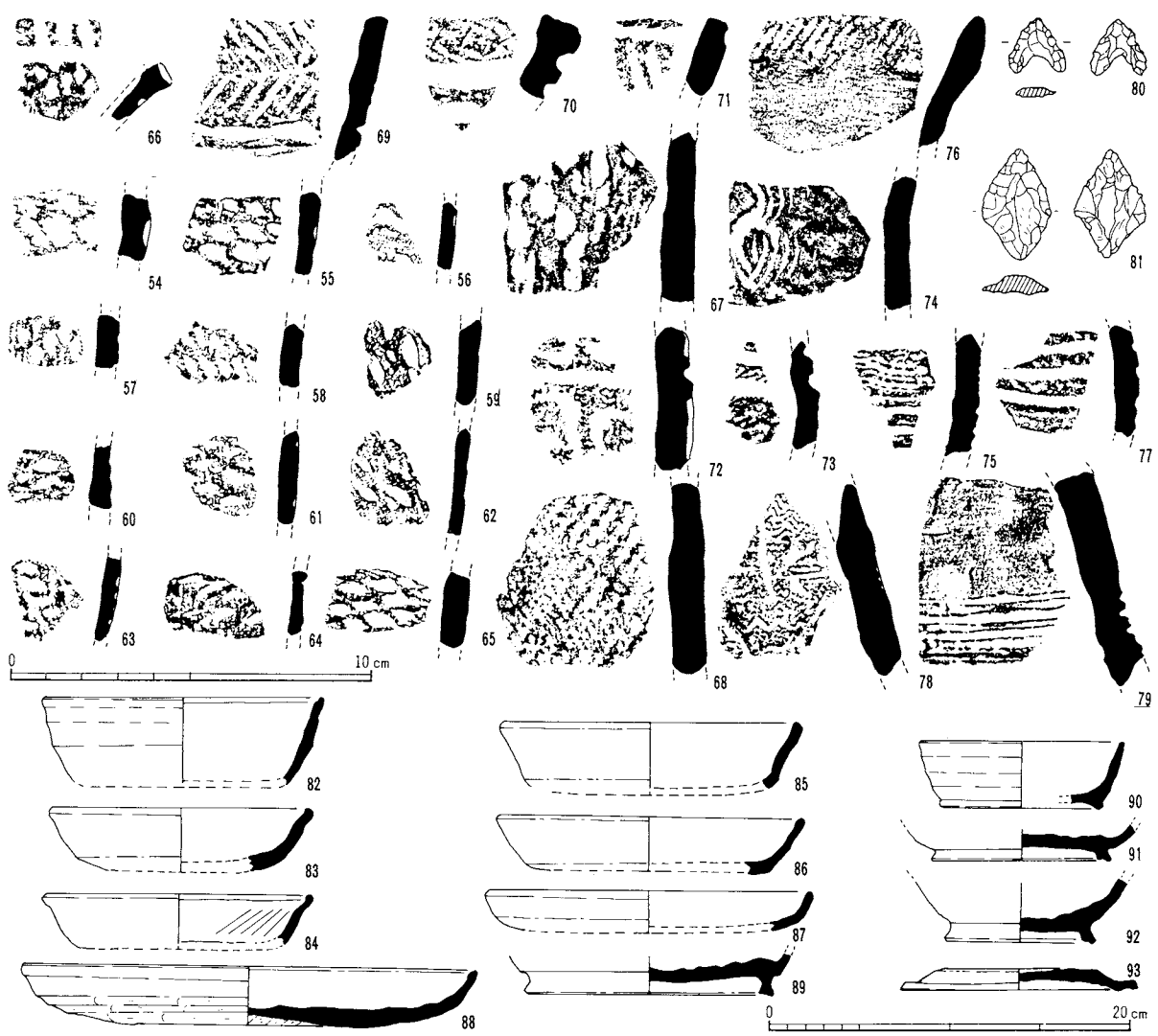
鍋（43・44）　口縁部は外反しつつ斜め上方に立ち上がり、その端部は上方に引き上げられる。すぐ東の古市遺跡でも同様な鍋が出土しており、16世紀代の所産であろう。

２．須恵器

杯蓋（38～42）　38・39は天井部と口縁部をわける短い稜をもち、天井部は⅔以上ヘラケズリを施す。口縁端部は内傾して、内側に明瞭な稜線をもつ。陶邑編年のＴＫ10型式にあたり、６世紀前半のものであろう。

40・41は口径10～11cmと小型化し天井部と口縁部の稜は全く認められない。天井部はやや丸味をもち未調整であり、口縁部のみヨコナデされる。41はＳＢ２直上の包含層出土であり、杯身の可能性もある。７世紀前半のものである。

42は口径8.4cmといっそう小型化している。短頸



第２－７図　遺跡周辺の（54～65南出遺跡,66～79西山遺跡,82～93大角遺跡）遺物実測図
（54～81は１；２，82～93は１；４）

壺の蓋になるものであろうか。

3．土製品

土錘（45～53）　合計23点出土している。すべて胴部がふくらみをもつ紡錘状のもので、長さは5.4～8.5cm、径1.2～1.4cmである。重量は9.1～14.5ｇを測る。穴は両側から穿たれている。ほとんどが包含層出土であり土坑から出土のものには中世の土師器鍋の体部片を伴うが、時期は断定しがたい。

4．周辺遺跡出土の遺物

ここで紹介するのは、算所遺跡の周辺の遺跡で、近年表面採集された南出遺跡，西出遺跡の遺物と今回の発掘調査中に表面採集した対岸の大角遺跡の遺物である。

南出遺跡・西出遺跡は「位置と環境」の項でも述べたように、算所遺跡の上流約５kmの雲出川右岸の河岸段丘上に位置する。南出遺跡は20ｍ四方の狭い範囲で縄文時代早期の押型文土器を中心に散布しており、現況は畑地である。西出遺跡はわずかに下流へ行った果樹園の付近に縄文時代早期から弥生時代にかけての土器や鎌倉時代の山茶椀片が散布している。

大角遺跡は算所遺跡の対岸で「河口頓宮」に比定されている所のひとつで、白山中学校の武道館建設に伴う発掘調査では弥生時代の竪穴住居や中世の掘立柱建物が検出されている。また、以前から縄文土器片や多数の石器類、奈良時代の軒丸瓦[18]が表面採集されている。今回紹介する遺物は、先の中学校武道館の西方約100ｍの雲出川の河岸に近い所で出土したもので、遺跡全体の中では西南部分に位置する。

1．南出遺跡

（1）縄文時代早期の押型文土器（54～65）

いずれも体部の小片ばかりであり、原体の長さや径は不明である。

54は器壁が厚く、大小二種類の原体による深くて粗大な市松文が上から下に施される。茶褐色を呈し、胎土には雲母・長石が含まれる。大鼻遺跡[17]や鐘突遺跡[18]で類例のみられるもので、早期の押型文土器の中では最も古い大鼻式に比定[19]されるものであろうか。

55は長径８㎜、短径５㎜のネガティブな楕円文をやや深めに縦位施文する。右端の施文は別原体による浅いものである。

56は山形文を施す唯一のものである。山形文はあまり大きくなく、口縁部付近の可能性もある。下端に刺突文を持つかと思われる。色調は淡褐色で、焼成は良好である。56は大川式の新しい時期のものかと思われるが、神宮式並行期の可能性もある。　57～65はネガティブな楕円文や格子文を浅く回転施文したもので、器壁は薄手で、焼成も良好な例が多い。57は市松様に径４㎜の円文を左から右に向かって横位に施す。58は長径８㎜、短径２㎜の細長い楕円文をやや深く施文する。59は長径10㎜、短径４㎜の大粒な楕円文を左から右へ施す。60～64はやや細長の楕円文を縦位に施している。60・63は器面の磨耗が著しい。64は施文の浅さが顕著である。65は平行四辺形状の斜格子文を浅く施文する。57～65は神宮寺式に類似したもので、63～65は中でも新しい時期のものであろう。

遺物番号（図版番号）	出土遺構 位置	全長 cm	胴径 cm	孔径 cm	重量 g	備　考
45	包含層　K・2	8.5	1.2	0.25	14.5	完形
46	〃　〃	7.7	1.3	0.30	13.1	〃
47	〃　〃	7.4	1.4	0.30	13.7	〃
48	〃　I・5	6.0	1.4	0.35	11.2	〃
49	〃　〃	5.6	1.3	0.38	9.1	〃
50	〃　J・6	6.4	1.4	0.32	12.7	〃
51	〃　I・3	6.2	1.4	0.30	11.3	〃
52	〃　I・5	5.7	1.5	0.30	12.0	〃
53	〃　I・3	5.5	1.5	0.32	10.5	〃
(94)	〃　J・2	5.3	1.4	0.30	10.4	〃
(95)	〃	7.2	1.3	0.30	11.5	〃
(96)	〃　I・5	6.4	1.3	0.35	12.0	〃
(97)	〃　〃	6.0	1.4	0.35	11.3	〃
(98)	〃　〃	6.6	1.4	0.32	11.8	〃
(99)	〃　〃	5.8	1.4	0.30	11.8	〃
(100)	〃　K・2	6.8	1.4	0.28	11.7	端部欠損
(101)	〃　〃	6.2	1.4	0.30	11.0	4／5残存
(102)	〃　〃	4.9	1.3	0.32	9.0	2／3　〃
(103)	〃　〃	6.1	1.3	0.30	10.8	4／5　〃
(104)	表採	7.0	1.3	0.32	9.6	端部欠損
(105)	ＳＫ　I・4	5.0	1.4	0.30	10.2	3／4残存
(106)	包含層　I・3	3.9	1.4	0.32	6.6	1／2　〃
(107)	〃　〃	2.5	1.2	0.36	2.7	1／4　〃

第２－１表　土錘観察表

2．西出遺跡

（1）縄文時代早期の土器（66・67）

66は強く外反する口縁部片とおもわれるが内面は剥離している。端面には円棒状具の柱状部を押した刻目文が端部に対し直角に施される。外面には、凹部の一辺が2㎜という小粒の市松文が間隔をおいて施文される。茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。早期前半の押型文土器で大川式でも古い時期のものに類似する。

67は厚手の体部片である。大粒のネガティブな楕円文を施するものと思われるが、縄の尖端刺突の可能性もある。

（2）縄文時代中期の土器（68）

体部片である。硬い繊維のために条が判然としない撚糸文を外面に施す。胎土は砂粒を多く含み粗く、焼成も軟であり茶褐色を定する。中期前半の船元式に類似する。

（3）縄文時代中期末葉～後期の土器（69～77）

69～71は口縁部片であり、72～75は体部片である。69は、ヘラガキ沈線を綾杉条に施し、その直下に沈線を一条めぐらしている。胎土には細砂を含み、焼成は硬く茶褐色を呈する。一見綾杉条の文様が押型文のようでもあるが、ヘラガキであり、沈線をめぐらすなどの特徴から後期前葉のものであろう。

70は口縁直下に2条の太い沈線をめぐらす。肥厚する端面には櫛状工具による刺突文を施す。胎土には2～3㎜の小石を含み、器壁は厚手で橙褐色を呈する。

70～71は中期末葉から後期初頭にかけてのものであろう。

72は沈線による区画をしたのち、沈線に挟まれた「J」字状の部分に縄文を施すが、器面の摩耗が著しい。胎土は砂粒を多く含み、乳褐色を呈する。後期初頭の中津・称名寺式並行のものである。

73は並行する沈線の間に単節の縄文を施している。黒褐色を呈し、胎土には細砂を若干含む。74は沈線による集合状線風文様の施されるもので、胎土は細砂を含み粗く、乳褐色を呈する。73～75は後期前葉の中津式から堀之内式に相当する。

76は口縁部の肥厚した部分に単節斜縄文を施し、端縁内面や口縁部直下は、ていねいにミガキを施す。胎土は雲母、長石を含み、色調は黒褐色を呈する。77は縄文施文後に凹線文を施しており、縄文をすり消した区画もある。胎土は細砂を含むが良好であり、焼成も硬く、淡茶褐色を呈する。76・77は北白川上層式に類似しており、後期後半と思われる。

（4）弥生時代の土器（78・79）

いずれも体部片であり、78は櫛描横線の上下に櫛描波状文を施している。胎土は小石を若干含むが緻密であり、橙褐色を呈する。79は平行沈線が4条施されており、胎土、焼成とも良好で淡橙褐色を呈する。ともに弥時代中期のものであろう。

（5）石器品（80・81）

サヌカイト製の石鏃である。80は凹基無茎式であり長さ1.6㎝、最大幅1.5㎝、厚さ0.3㎝を測る。基部の凹みは深い。縄文時代早期のものであろうか。81は凸基有茎式である。長さ3.0㎝、幅2.0㎝、厚さ0.5㎝を測る。弥生時代のものであろうか。

3．大角遺跡

（1）土師器（82～87）

いずれも橙褐色を呈する口縁部の小片である。遺存度は1/6～1/8であり、82～86が杯、87が皿である。82は器高5.0㎝と深めで口縁部にはヨコナデを施す。83～86は口径15～17㎝を測る。84の内面には暗文を斜放射状に一段疎らに施す。

87は口縁部をヨコナデし、底部をヘラケズリするもので、胎土は緻密であり、淡褐色を呈する。

（2）須恵器（88～93）

88は口径25.3㎝器高3.2㎝を測る皿であり、1/4程度残存するものである。内弯する口縁部は、端部に面をもつ。底部はロクロケズリを施すが、やや窪む底部の中央はヘラ状具による一方向のケズリが施される。ロクロの回転方法は右回りである。胎土は緻密であるが、焼成はやや軟であり、灰白色を呈する。高蔵寺2号窯式に類似するものがあり、8世紀半ばのものである。

89～92は貼付高台をもつ杯である。89は高台が底部のやや内側に付けられ、面下端部は拡張ぎみである。高台径は13.6㎝を測る。底部外面と体部下半はロクロケズリされる。ロクロの回転方向は右回りである。半分程度残存するもので、他の杯よりはやや古い様相をもつ。90は口縁部～底部が1/8残存するも

ので、口縁部はロクロナデされる。高台は体部直下につき四角い断面をもち、わずかに外方へ張る。91・92は高台が外方へ拡張するものである。91は口縁部の内外面をロクロナデするが、92は口縁部外面と底部をロクロケズリしている。1/3～1/4残存している。色調は、90～91が青灰色であり、89は灰褐色、92は紫褐色を呈する。いずれも8～9世紀のものであろう。

93は宝珠つまみの付かない杯蓋である。天井部はふくらみがなく未調整であり、口縁部近くは屈曲して低くなる。端部は外側へ開き気味である。口径は13cmを測り、青灰色を呈する。8世紀後葉から9世紀に属するものであろう。

4．結　　語

今回の調査の結果、算所遺跡では縄文時代に始まり、飛鳥時代、室町時代と断続的に生活が営まれている。しかし、遺構は全体的に希薄であり、傾斜地のために削平を受けている土坑等もある。また遺跡の中心は、今回の調査区の西のやや小高い所に広がっているものと思われ、遺跡の全容や性格を論ずることは難しい。以下に遺構、遺物について若干の考察を加えて結語としたい。

1．ＳＢ2について

一辺3.8ｍと規模の小さな方形プランをもつ飛鳥時代の竪穴住居である。東側は撹乱をうけている。一部周溝を有するが、主柱穴は検出されていない。この時期のものには斎宮跡[21]、鳥居本遺跡[22]をはじめ主柱穴が明確でない類例も多くみられる。一般的には壁に接してカマドを有するが、撹乱部分で既に消失しているのであろう。

出土遺物は、土師器の杯・甕・甑や須恵器の杯であり、ＳＫ3と似た器種構成である。土師器杯では、くすんだ褐色を呈する杯が多い。しかし、内面には暗文をもち、底部外面をヘラケズリし、胎土の良好な橙褐色を呈するものもある。雲出川下流の平生遺跡[23]や鳥居本遺跡では、整美な暗文をもち、明褐色で焼成良好な飛鳥時代の杯が数多く出土している。当地方は大和と伊勢神宮とを結ぶ交通の要衝地でもあり、こうした土師器類の出現と分布の背景が注目される。

土師器甕では、口径14cm前後のやや小型のものが多く、体部外面にはハケメを施すが、内面には横方向のハケメを施すものとナデだけのものがある。ＳＫ3出土の中には外部にもハケメを施さないものがあり、胎土、焼成とも不良で灰茶色を呈しており、在地色の強いものと思われる。

2．縄文土器について

縄文時代後期初頭を中心に、早期末葉と晩期のものが少量だが出土している。

早期末葉の土器は、内外面とも貝殻状痕を施し、隆帯と円形竹管文を配している。類似のものは、近畿では京都府一乗寺向町遺跡南部地区（一乗寺南地点）、兵庫県芦屋市山芦屋遺跡、和歌山県伊都郡船岡山遺跡の3遺跡で出土しているにすぎない[24]。一乗寺南地点では条痕文土器がまとまって出土しており、4型式に細分している[25]。当遺物出土のものは、「条痕調整の後、幾何学的に微隆帯を貼りつけ、隆帯上をきざんだり、竹管文を施す。」ものに相当する。時期としては、羽島下層Ⅱ式以前と推定し早期末葉に位置付けている。

三重県下では当遺跡の対岸にある大角遺跡[26]でも繊維を含んだ早期末葉の土器が表面採集されているが早期末葉の条痕文土器の出土例は、向井遺跡[27]、曽根・釜ノ平遺跡[28]、百合遺跡[29]、上ノ広遺跡[30]、藪ノ下遺跡[31]等と現在のところわずかである。

後期の土器は、口縁部に沈線による区画をもつものや、胴部文様として「Ｊ」字状文を施していると思われる初頭の時期を中心としたものが数点出土している。中部地方西部から近畿地方においては、中期後半に関東の加曽利Ｅ式の影響のもとに、区画文と貼付け凸帯の渦文の文様をもつ土器がみられる[32]。中期末葉にはその影響が薄れ、地域色の強い土器が分立し、やがて、中津式の特徴である磨消縄文をもつ土器の出現によって後期に入るとされてい

る[33]。前述の土器片は、区画内が集合状線の施されるものと、磨消縄文を施すものや無文のものがある。集合条線を施するものは、藪ノ下遺跡で類似のものが出土している[34]。後期初頭を中心とした遺跡は東庄内A遺跡[35]をはじめとして、下川原遺跡[36]、中戸遺跡、堂ノ後遺跡等があり、近年調査事例も増加してきており、地域色や編年がより明らかとなってくると思われる。

また、当遺跡周辺で後期の土器を出土した遺跡としては、古市遺跡、田中名遺跡、大角遺跡などがある。いずれも河岸段丘上に位置し、数百mの間隔で存在する。当時の集落立地を考える上で興味深い。

（服部久士）

〈註〉

①色井秀譲他　『白山町文化誌』　白山町教育委員会　1975
②本堂弘之　『大角遺跡発掘調査報告』　白山町教育委員会　1983
③小玉道明、下村登良男　『野田浦遺跡発掘調査報告』　白山町教育委員会　1971
④増田安生・田村陽一　「古市遺跡」　『昭和59年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1985
⑤河瀬信幸　「田中名遺跡」『三重県埋蔵文化財年報17』　1987
⑥稲生進一　『和遅野遺跡発掘調査報告』　白山町教育委員会　19756
⑦竹田憲治他　『学校周辺の遺跡』　白山高校郷土史研究クラブ　1986
⑧中貞夫　『青山町史』　青山町役場　1979
⑨鈴木敏雄　「考古学からみた一志郡」『一志郡史下巻』　一志郡町村会　1955
⑩谷本鋭次　『中ノ庄遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1972
⑪『続日本紀』　天平12年の条に見られ、「関ノ宮」とも記されている
⑫「平城宮木簡一　解説」『平城宮発掘調査報告Ⅴ』奈良国立文化財研究所
⑬本堂弘之　「岩脇C遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会1983
⑭田辺昭三　「陶邑古窯址群Ⅰ」　平安学園考古学クラブ　1966
⑮前掲②
⑯鈴木敏雄　『三重県古瓦図録』　楽山文庫　1933
⑰山田猛他　『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡』　三重県教育委員会　1987
⑱下村登良男他　『鐘突遺跡発掘調査報告書』　松阪市教育委員会　1981
⑲山田猛　「押型文土器群の形式学的再検討」『三重県史研究』第4号　三重県県史編纂室　1988
⑳中期以降の縄文土器については奥義次氏の御教示による。
㉑「第36次調査」『三重県斎宮跡調査事務所年報1981』三重県斎宮跡調査事務所　1982
㉒稲生進一・吉村利男『鳥居本遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会　1975
㉓服部貞蔵　『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団　1976
㉔泉拓良氏の御教示による
㉕宮本一夫　「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター　1987
㉖前掲①
㉗田崎通雅他　『向井遺跡発掘調査報告』尾鷲市遺跡調査会　1981
㉘嶋正央　『奥野野の縄文式文化』尾鷲市・熊野市教育委員会　1959
㉙奥義次　「通史（原始）」　『飯高町郷土史』三重県飯南郡飯高町　1986
㉚田村陽一　野原宏司　「上ノ広遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』　三重県教育委員会　1986
㉛田村陽一　「藪ノ下遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　三重県教育委員会　1987
㉜泉拓良　「西日本縄文土器再考－近畿地方縄文中期後半を中心に」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　1972
㉝泉拓良　「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成・後期』講談社　1981
㉞前掲31
㉟小玉道明他「東庄内A遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会　1970
㊱門田了三　『下川原遺跡』　名張市遺跡調査会　1986

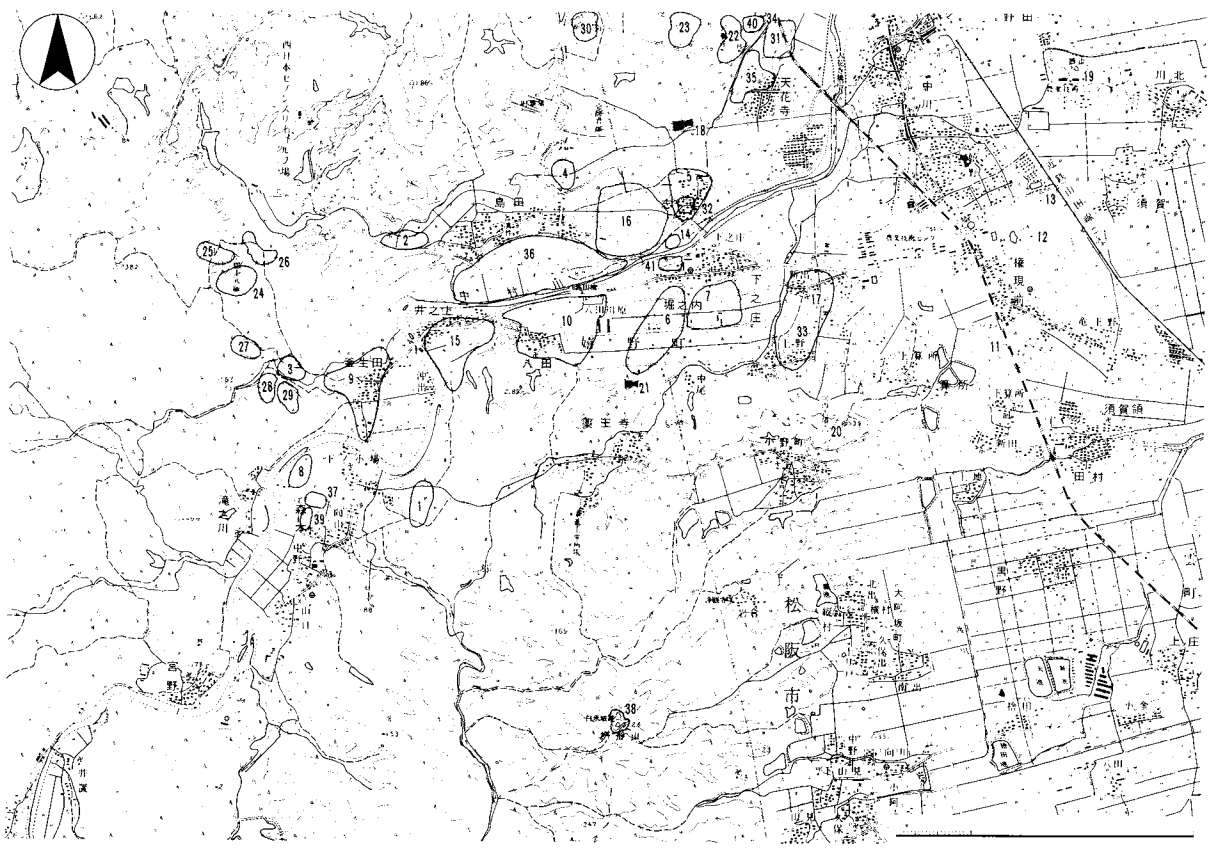
Ⅲ．一志郡嬉野町　東野（ひがしの）遺跡

1．位置と環境

東野遺跡（1）は行政区画上、一志郡嬉野町大字森本字東野に所在している。

三重県のほぼ中央部を雄走する一級河川雲出川の一支流中村川は大字小原の北方に位置する標高723mの矢頭山と、松阪市、一志郡の境に位置する標高757mの堀坂山の両山からなる谷間に源を発し、蛇行を重ねながら、両岸に肥沃な河岸段丘をもつ中流域へと達し、流れを直線上に変え、久居市との境界で雲出川と合流して伊勢湾へと注いでいる。

東野遺跡はこの中村川中流域右岸の河岸段丘上に立地し、南から北へと緩やかに傾斜する段丘は圃場整備以前は、大部分が水田となっていた。両端付近は、畑と宅地となっている。現標高は36～37m前後である。



第3－1図　遺跡位置図（1：50,000）

1．東野遺跡　2．島田遺跡　3．井ノ廣遺跡　4．蛇亀橋遺跡　5．薬師寺北裏遺跡　6．堀之内遺跡　7．下之庄遺跡
8．午前坊遺跡　9．釜生田遺跡　10．八田遺跡　11．山神田遺跡　12．高くね遺跡　13．荒野遺跡　14．郡一遺跡
15．閉垣内遺跡　16．天保遺跡　17．新出廃寺　18．筒野古墳　19．西山古墳　20．向山古墳　21．錆山古墳　22．小谷古墳群
23．赤坂古墳群　24．釜生田古墳群　25．ウツノ古墳群　26．駒返Ａ古墳群　27．見行谷古墳群　28．上尾戸Ａ古墳群
29．上尾戸Ｂ古墳群　30．西野古墳群　31．天花寺廃寺　32．一志廃寺　33．上野廃寺　34．天花寺瓦窯跡　35．北瀬古遺跡
36．上野垣内遺跡　37．屋敷田遺跡　38．阿坂城跡　39．森本城跡　40．天花寺城跡　41．堀之内城跡

中村川の形成する河岸段丘上、及び、中流から下流に拡がる沖積平野一帯は多種多様な遺跡が各時代にわたり密集している地域として確認されている。

ここで流域の主な遺跡を時代順に概観すると、縄文時代としては島田遺跡（2）、蛇亀橋遺跡（4）等がみられるが、縄文を遡る先土器時代の遺跡は発見されていない。弥生～古墳時代にかけての遺跡は数多く、広大な面積を占める釜生田遺跡（9）をはじめ、閉垣内遺跡（15）、郡一遺跡（14）等、中村川全流域にわたって点在している。群集化する段階の後期古墳は流域左岸の丘陵上に偏在する傾向をもっている。飛鳥、奈良時代では、天花寺廃寺（31）等で畿内的要素の濃厚な良質の土師器の出土が知られている。また、白鳳、天平期に比定し得る寺跡として、天花寺廃寺（31）、一志廃寺（32）、土野廃寺（33）等の集中所在とも関わり、畿内と一志郡との結びつきの強さがあったのではないかと考えられる。

中世に至っては、南北朝時代以降、この地域は伊勢国司家としての北畠氏の支配下にあったが、こうした時期に関わる城跡も多く発見されている。白米城伝説で有名な阿坂城跡（38）をはじめ、堀之内城跡（41）天花寺城跡（40）があり、当遺跡に近接する森本城跡（39）などがよく知られている。

（山田芳昭）

2．遺　　構

1．第1次調査

事業地内における削平部分の面調査に先立ち、工事との関係上排水路部分約300㎡の第1次調査を6月16日から6月25日まで実施し、10月20日から12月7日まで面調査1,900㎡の第2次調査を実施した。

調査区は、南から北へ緩く傾斜する河岸段丘上にあたり、調査区における基本的層序は、第Ⅰ層に水田耕作土（表土）が厚さ6cm程あり、第Ⅱ層に暗茶褐色粘質土、第Ⅲ層に暗黄褐色粘質土、第Ⅳ層に

第3－2図　遺跡地形図（1：2,000）

暗灰褐色粘質土（包含層Ⅰ）、第Ⅴ層に暗赤褐色粘質土（包含層Ⅱ）、第Ⅵ層に黒褐色砂質土（地山）である。

遺構は、調査区北側で12世紀代の土坑３基を検出し、標高の高い南側で15世紀代の土坑２基と溝２条を検出した。

１．平安・鎌倉時代

（１）土坑

ＳＫ１　東西2.3m×南北4.6mの平面が長方形を呈する。ＳＫ２と東辺を揃える。暗赤褐色粘質土を埋土とし土師器細片が出土した。

ＳＫ２　東西1.4m×南北2.4mの平面が長方形を呈する。ＳＫ１と方向を同じくし、東辺を揃える。暗赤褐色粘質土を埋土とし、土師器細片が出土した。

ＳＫ３　東西1.9～2.4m×南北4.1mの平面が長方形状を示し、南半分がやや広がる。深さは、0.3mである。土坑外側に２間（4.2m）×１間（2.2m）以上の覆屋を推定させる柱穴が確認できた。土坑中央部から東側には、拳大から人頭大の河原石の集石が認められ、一部には火を受けているものもある。埋土は、暗赤褐色粘質土に焼土・炭を含んでおり、土坑内で火を使用したことが推定される。土師器鍋（１～４）・羽釜（５）、山茶椀（６・７）が出土した。

２．室町時代

（１）土坑

ＳＫ６　調査区南の西壁近くで検出した土坑で、東西辺は不明であるが、南北２mの平面が長方形をなすものと考えられる。暗灰褐色粘質土を埋土とし、土師器羽釜（９）が出土した。

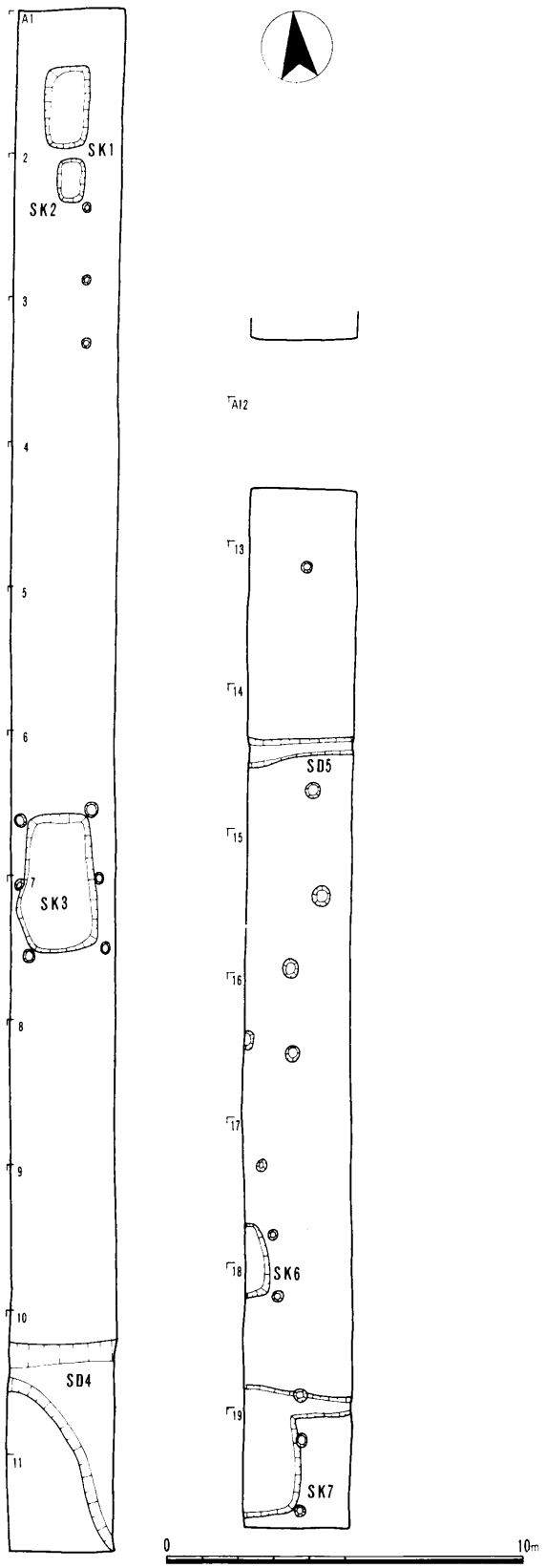
ＳＫ７　調査区南端の西壁近くで検出し、南北3.6m×東西1.6m以上の平面が長方形をなす土坑である。土坑は、深さ0.3mで、土坑内には拳大の河原石が認められた。また、東辺に沿って不等間ながら２間（3.2m）分の柱穴を確認しており、ＳＫ３と同じく覆屋を伴う施設かとも考えられる。暗灰褐色粘質土を埋土とし、土師器片が出土した。

（２）溝

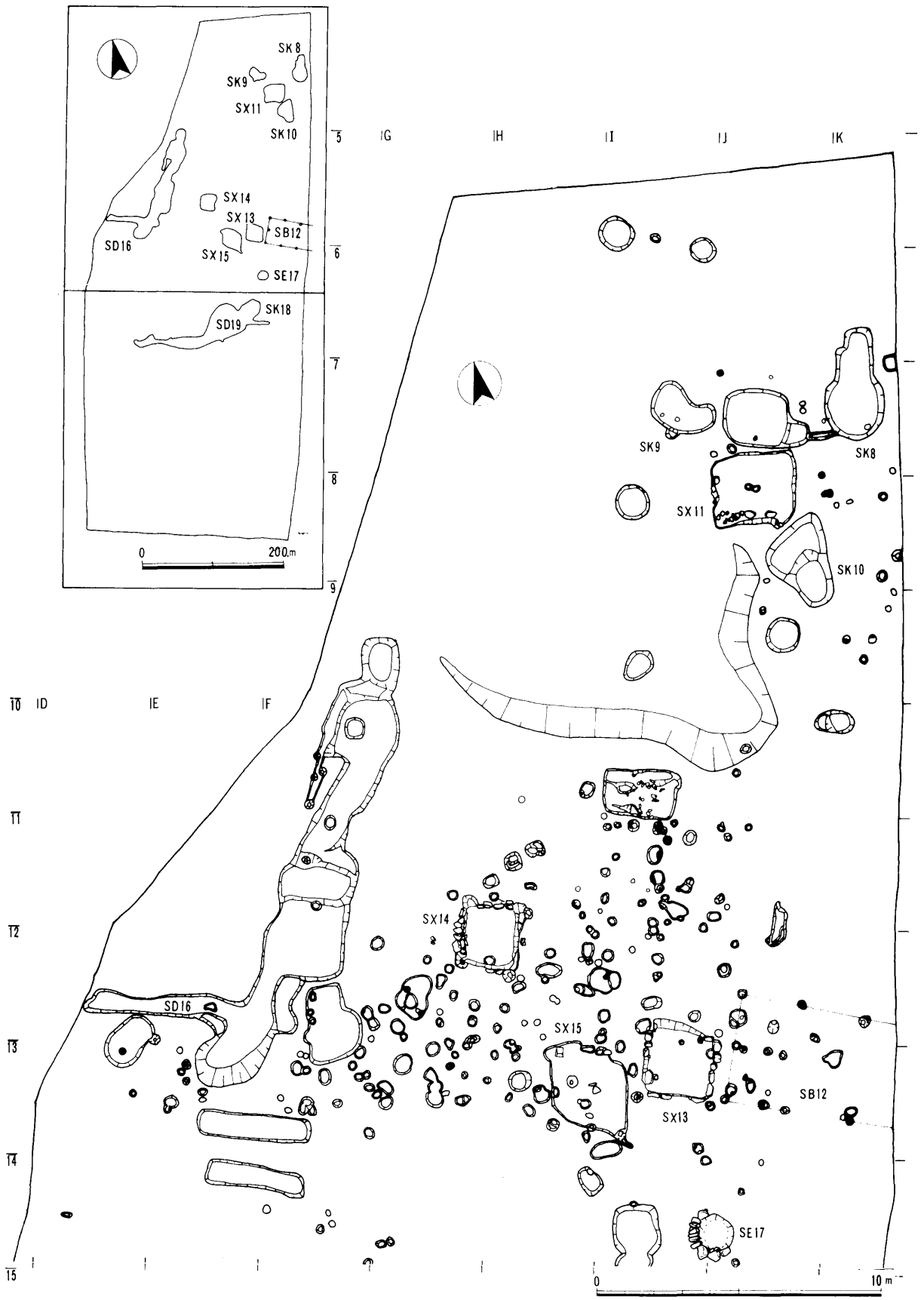
ＳＤ４　調査区中央で検出したもので、東側に幅広く広がっている。溝内に河原石が認められた他、土師器羽釜片、常滑窯擂鉢（10）が出土した。

ＳＤ５　調査区中央より南寄りで検出され、東西方向に流れる幅0.2～0.3mの小さな溝である

（増田安生）



第３－３図　第１次調査 遺構平面図（１：200）

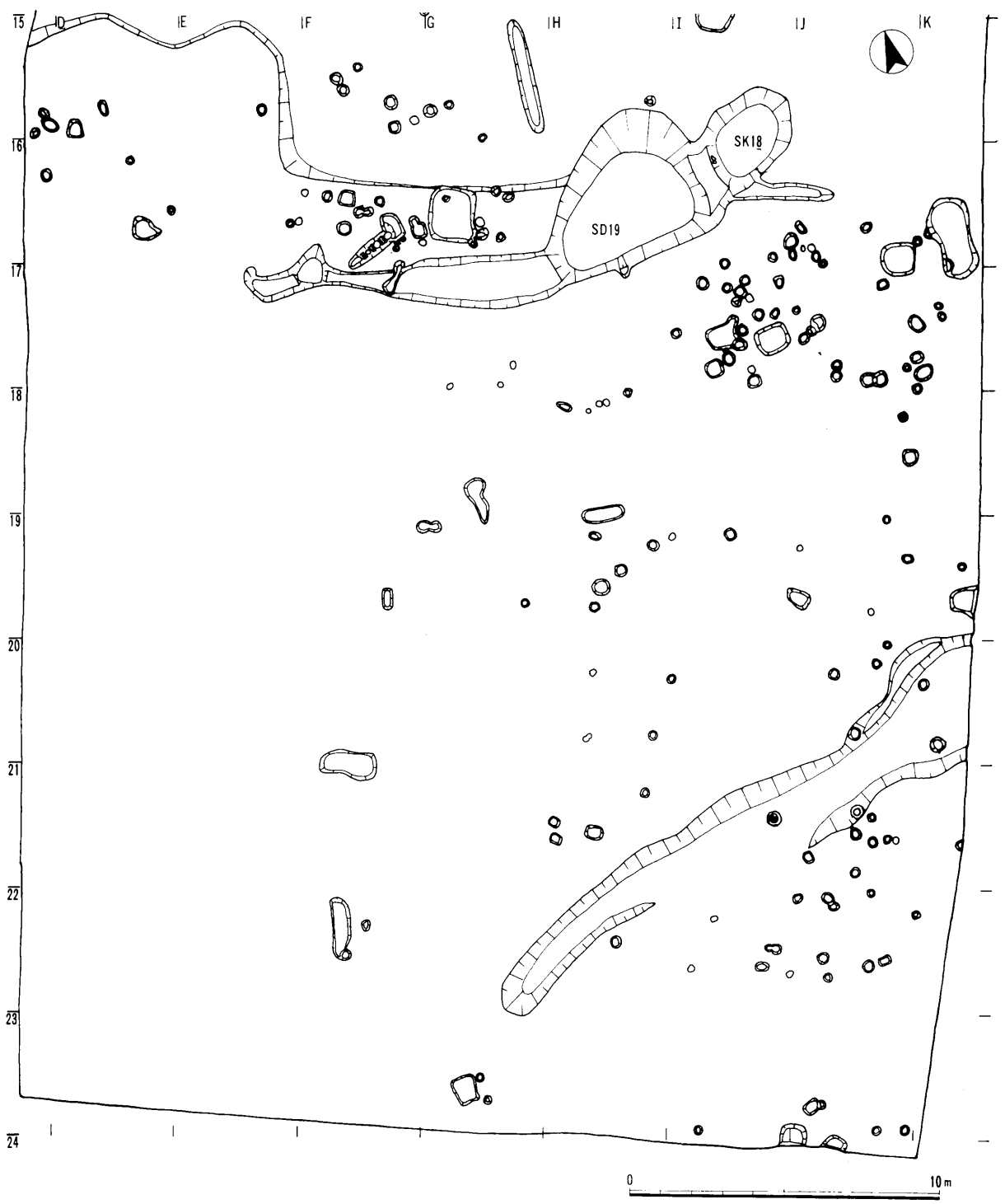


第３－４図　第２次調査 遺構平面図（１：200）

2．第２次調査

検出された遺構は、平安時代後期～鎌倉時代にかけての土坑３基（ＳＫ８～10）、室町時代の掘立柱建物１棟（ＳＢ12）、石組土坑４基（ＳＸ11．13～15）、井戸１基（ＳＥ17）、溝２条（ＳＤ16、19）、土坑１基（ＳＫ18）である。これらの遺構は発掘区のほぼ中央部で検出され、遺構密度も濃密となっている。遺構は中央部の東西へ広がり、さらに東へ伸びると考えられる。

発掘区は南東部が一番高く、標高は36～38m前後である。西は谷間を控え、急斜面になり、南から北へと緩やかに傾斜し、さらに中村川の低位段丘面で急傾斜する。現況はすべて水田である



1．平安時代末～鎌倉時代

（1）土坑

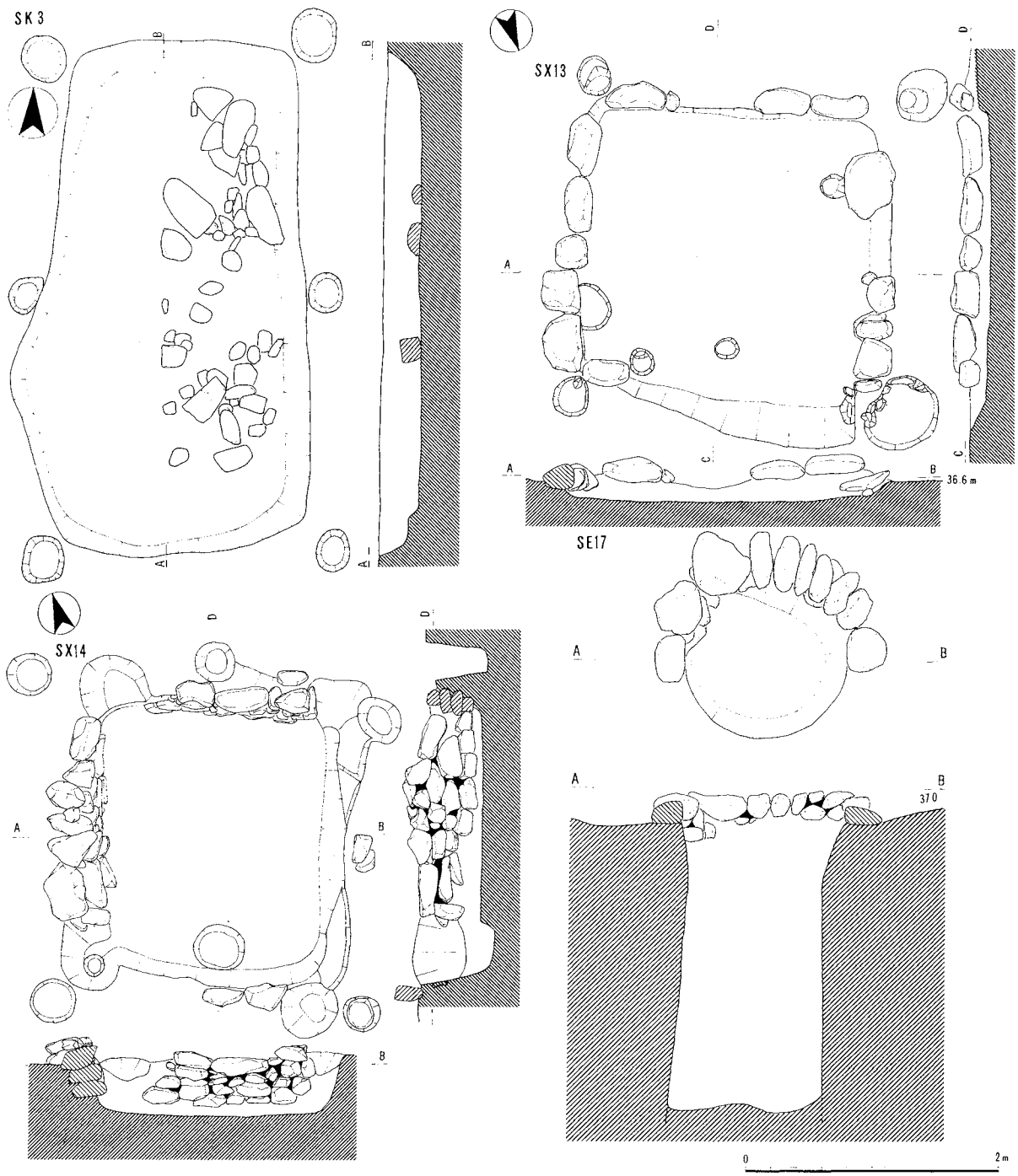
ＳＫ８　不定形ではあるが、４ｍ～２ｍ、深さは検出面から約10～20cmの方形状の堀形を持った土坑である。暗褐色粘質土（埋土）に混じって平安時代末から鎌倉時代にかけての土師器の小皿類が出土した。

ＳＫ９　１ｍ×２ｍの方形を呈し、深さは約30cm～40cmである。下層に２柱穴をもっている。出土遺物は土師器片はまったくなく、山茶椀、灰釉陶器片の２点である。

ＳＫ10　舌状の掘形をもち、深さ30cmを測る。鎌倉時代の土師器片２点が出土した。

2．室町時代

この時期の遺構は発掘区全体にみられ、掘立柱建物、石組土坑、井戸、溝が主な遺構であり、石組土坑については、大きさ、形態ともに類似点が多い。各所に散在するピットもこの時期のものと考えられるが、建物としては１棟しかまとまらない。



第３－５図　SB３,SX13・14,SE17 実測図（１：50）

（1）堀立柱建物

ＳＢ12　桁行２間以上×梁行２間（4.5m以上×3.8m）で東西棟であるが、発掘区東へ桁行部分が１間伸び、桁行３間の建物と考えられる。棟方向はＮ23°Ｅである。柱間は桁行では東から2.2m、2.3mとほぼ等間、梁行で1.8m等間となる。柱掘形は円形プランで径30～40cm程度でやや不揃いである。建物西部に石組土坑３基、南部に素掘りの井戸１基を検出しており、埋土中からも土師器鍋片、フイゴの羽口等が出土している。これらの遺構とは何らかの密接な関わりをもっていたと考えられ、建物規模からみて、倉庫もしくは作業場的な使用目的で建てられた可能性がある。

（2）井戸

ＳＥ17　ＳＢ12、ＳＸ13の南側に掘られたもので井戸平面四半分に河原石一段を残した径1.3mの素掘り井戸である。深さ1.7mより袋状になっており完掘していない。検出面より、井戸内には50～60cm程の赤灰色に焼焦した河原石が意識的に捨てられた形で詰まっており、石の間から遺物が出土している。出土遺物は常滑窯甕、灰釉椀、土師器羽釜、フイゴ羽口等である。

（3）土坑

ＳＸ11　発掘区北東部分で検出された。３ｍ×2.5m、深さ20cmを呈する方形の掘形をもった土坑である。掘形西、南壁には石列が残存している。石列は大部分が赤灰色に焦石しているが、焼土がなく、性格については不明と言わざるを得ない。床面中央で２柱穴を検出している。

ＳＸ13　ＳＢ12に近接して検出され、一辺2.5m、深さ10～20cmの方形の掘形をもった土坑である。東、西、南壁に一段の石列が「コ」の字型に並んでいる。掘形外の四隅には2.5m等間の径30～50cmの柱穴をもち、覆屋が架っていたと想定される。暗褐色粘質土の埋土には多量の炭を含み、鉄滓、土師器鍋片が多数出土した。

ＳＸ14　一辺2.3mの方形の掘形をもった土坑である。ＳＸ11・ＳＸ13が一段の石列に対して、北・西壁には、深さ40～50cmの床面から四段の石積みが残されていた。南、東壁検出面には抜き取り痕があり、一段の石列があったと考えられる。石組はＳＸ13とほぼ同様に赤灰色に焼焦しており、埋土中にも多量の炭片を含み、埋土一面が黒褐色となっている。焼土はない。出土遺物は土師器皿片、鍋である。掘形外の四隅には一辺2.4～2.5mと不等間ではあるが径30～40cmの柱穴を検出し、覆屋があったと想定される。

ＳＸ15　不定形ではあるが、一辺約2.5mの方形状を呈する掘形をもった土坑である。ＳＸ13に近接し、ほぼ同等の土坑と考えられる。石列はほとんど残存せず、北壁にわずかに残っている程度である。深さ10～20cmである。掘形中央部西壁寄りに径50cmのピットが検出され、床面は灰色砂からなっている。掘形外の二隅には2.5m等間で柱穴を検出し、他の土坑同様に覆屋が架っていたと想定される。

ＳＫ18　ＳＤ19の東側に接し東西約3.0m、南北約2.5m、深さ約50cmの丸底状の土坑である。埋土は検出面上部から暗褐色粘質土に多量の細破砕岩石、炭化物が混入されていた。土坑内には埋土上面から細かい土師器鍋片を中心とした土師器類を多量に出土した。

（4）溝

ＳＤ16　発掘区中央西端より東西に走り、西端寄りを縦断する南北溝と交差した溝である。幅60～80cm、深さ10cm前後で底は平坦である。出土遺物は常滑窯甕、土師器鍋、フイゴの羽口、鉄滓等である。

ＳＤ19　発掘区中央を東西に横切り、ＳＫ18と近接する溝である。ＳＫ18と接する溝部分は幅５m、深さ50cmの舌状掘形をもち、中央部に集石が認められる。多量の炭片を含んだ埋土中からは多量の土師器鍋片、常滑窯甕、灰釉皿等が出土している。

（山田芳昭）

3．遺　　物

1．第１次調査

第１次調査では、調査面積に比して比較的多くの遺物の出土がみられ、須恵器甕、土師器皿、鍋、山茶椀、捏鉢、常滑窯甕がある。古墳時代と考えられる須恵器片も少量出土しているが、遺構に伴うものではない。出土遺物の時期は大別して平安・鎌倉時代及び室町時代のものに大別できる。

１．平安・鎌倉時代

（１）ＳＫ３

土師器鍋（１～４）　丸味をもつ体部と、「く」の字状に外反する口縁部をもつ鍋であり、口縁端部の形態及び調整手法から二種類に区分できる。鍋Ａ（１・２）は、口縁端部がつまみ上げられ、比較的高く、丸味をもち、肩部内面にはヨコハケを施す。鍋Ｂ（３・４）は、外反する頸部がわずかに直立し、口縁端部の折り返しが強くおさえられ、肩部内面をナデ調整する。鍋Ａが先行する形態と考えられる。

土師器羽釜（５）　外反する口縁部が端部で折り返えされ、わずかな丸みをもち体部に水平な鍔をもつ。大和・伊賀地方に普遍的に認められるものである。

山茶椀（６・７）　６は、わずかに内弯する体部に薄く引き出され外反する口縁部をもつ。高台は、断面が逆台形をなし比較的高い。体部下半外面に「十」の墨書がある。７は、高台のみで断面が逆三角形をなし低い。６・７には、型式的な差が認められるが、藤澤編年による第Ⅱ段階の12世紀前半期のものと考えられる。

（２）その他の遺物

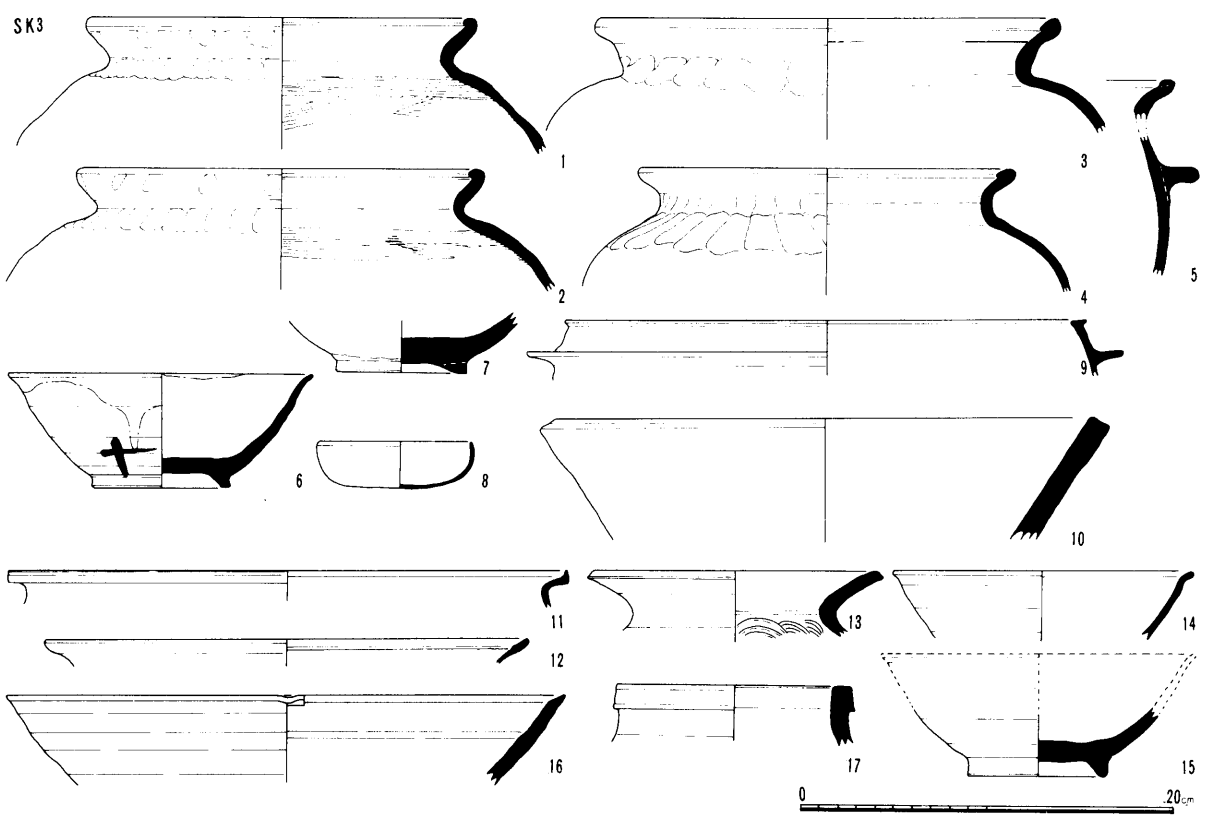
山茶椀（14・15）　推定口径16cm前後と考えられる。わずかに内弯する体部に、外反する口縁部が付くものと考えられ、高台は断面方形で比較的高い。

捏鉢（16）　推定口径30cm。体部は、直ぐ外開し口縁端部が内傾する面をもつ。口縁部の１ケ所には、指によるオサエを施し、片口鉢とする。

２．室町時代

（１）ＳＫ６

土師器羽釜（９）　内傾する口縁部の端部が肥厚し、



第３－６図　第１次調査 遺物実測図（１：４）　SK３

水平な面をもつ。体部上半に水平にのびる鍔をもつ。鍔上部に2孔一対の穿孔をもつと考えられる。

（2）ＳＤ4

常滑窯擂鉢（10）　直ぐ外開する口縁部は、端部でわずかに肥厚し、外上方に端面が凹む面をもつ。施釉が認められず、茶褐色を呈し、あるいは常滑窯以外の製品であるかもしれない。

（3）その他の遺物

土師器鍋Ｃ（11）　推定口径30cm。口縁部は、比較的短く外反し、口縁端部がつまみ上げられ断面が三角形をなす。

土師器鍋Ｄ（12）　推定口径30cm。外反する口縁部は、端部で内側に強く折り返えされ、わずかに内弯する面をもつ。

常滑窯甕（17）　推定口径12.6cm。直立する口頸部が端部で外側に折り返えされ、外側に縁帯をつくる。

（増田安生）

2．第2次調査

第2次調査で出土した遺物はすべて土器類で、調査面積に比して概して少量であった。土師器皿、鍋、土釜、フイゴ羽口、鉄滓、山茶椀、擂鉢、常滑窯甕、天目茶椀、青磁などに分けられ、その大半が土師器である。時代的には平安時代～鎌倉時代、室町時代に区分することができる。

1．平安時代・鎌倉時代

（1）ＳＫ8

土師器小皿（18～21）　口径7.7～8.5cm、器高1.8cm前後である。いずれも器壁は厚手で手づくねによる雑なつくりの皿である。底部内面はすべてナデ調整され、口縁部内外面はヨコナデされている。また、底部外面はすべて未調整、ユビオサエによる指圧痕が目立つ。色調は白橙色を呈し、胎土は粗い。

土師器皿（22～24）　口径13.6～16.4cm、器高2.5cmで、やや厚手の皿である。底部内面はナデ調整、口縁部内外面ともにヨコナデ調整されている。底部は、未調整でユビオサエによる凹凸、指圧痕がみられる。色調は、白橙色を呈し、やや粗い。

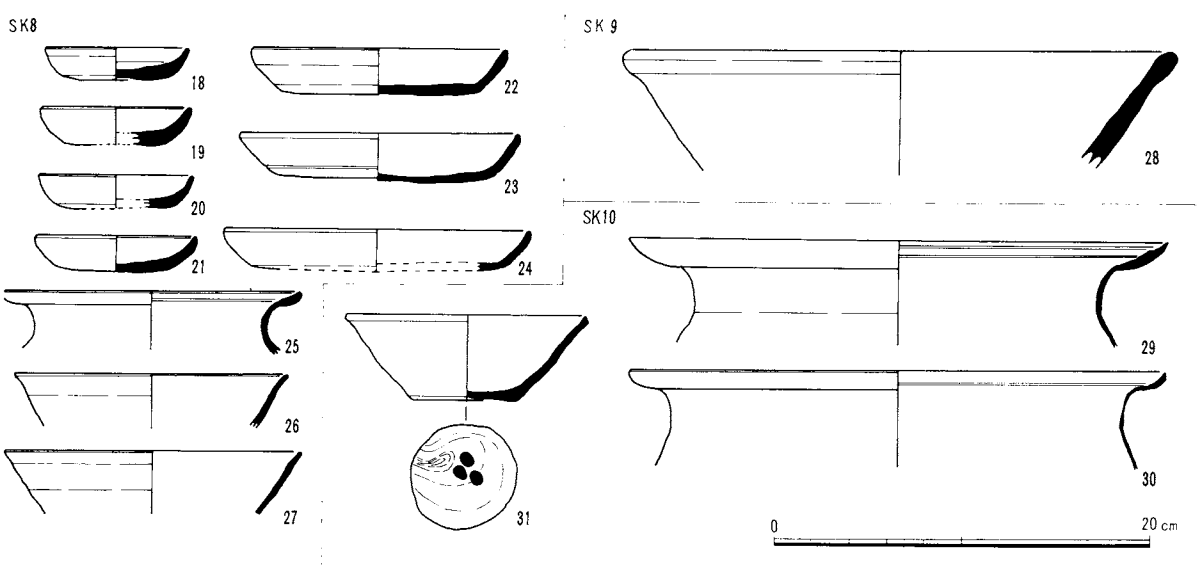
土師器鍋（25）　口径15.8cmで、鍋としては小型のタイプである。口縁部は折り返し口縁を呈し、端部上面は面をつくる。口縁部は内外面ともヨコナデされている。残りが悪いため体部以下は不明。器壁は薄く、胎土は比較的緻密である。色調は淡茶褐色。

山茶椀（26）　口縁部がゆるく外反する。灰色を呈し、胎土は細砂粒を含み、やや粗い。口径14.6cm。

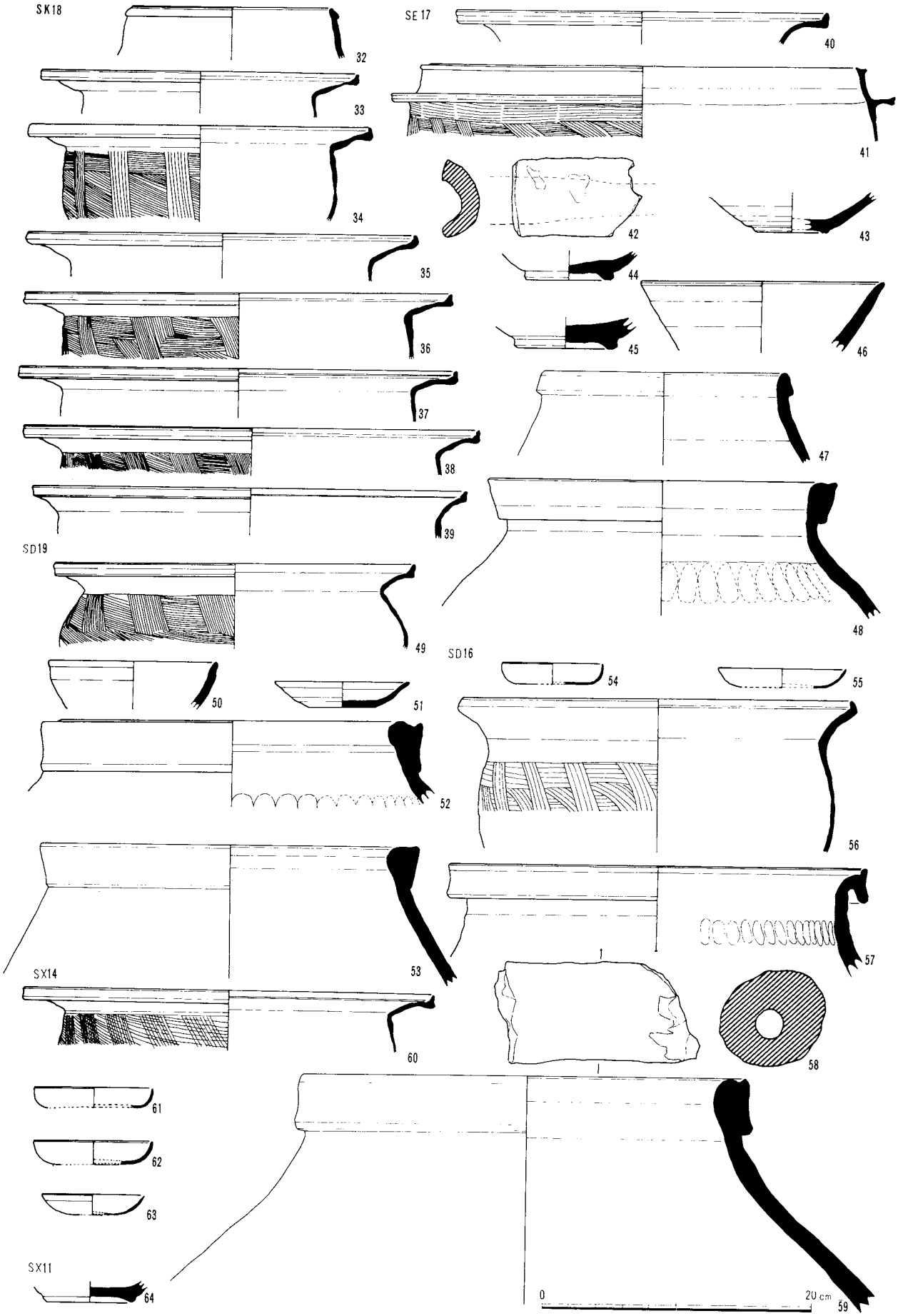
山茶椀（27）　直線的に体部がのび、口縁部は僅かに丸味をもつが尖り気味でおさめる。白灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。口径15.8cm。

（2）ＳＫ9

鉢（28）　底部は欠失し、直線的に体部がのび、口縁端部を肥厚させ丸くおさめる。ロクロ成形品である。灰色を呈し、胎土中粗砂を多く含む。



第3－7図　第2次調査 平安・鎌倉時代 遺物実測図（1：4）



第３－８図　第２次調査 室町時代 遺物実測図（１：４）

（3）ＳＫ10

土師器鍋（29～30）　口縁端部は内側に長く折り曲げられる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部は指オサエで成形される。橙褐色を呈し、胎土中粗砂を含む薄手の土器。

30は、口縁部端部は内側に長く折り曲げられ、さらに指オサエにより内反する。頸部はさらに薄く指オサエで成形される。淡橙白色を呈し、中粗砂を含む。

山茶椀（31）　底部より直線的に体部がのび、口縁端部はやや丸味をもつ。ロクロ水挽き成形によるもので、底分外面に糸切り痕をのこす。底部には「∴」の墨書がみられる。暗灰色を呈し、胎土中細砂を含み、やや粗い。

2．室町時代

（1）ＳＥ17

土師器鍋（40）　口縁部は断面三角形を呈し、端部は上方につまみ上げられる。端部外面にはヨコナデによる擬凹線が一条走る。橙褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。

土師器羽釜（41）　器壁は薄手で、胎土も比較的緻密である。口縁部外面にはヨコナデによる段状を形づくる。外面には粗いハケメが施されている。黄橙色を呈し、胎土は粗い。

フイゴ羽口（42）　羽口両端が欠失している。細砂粒を多く含み、明黄褐色を呈し、胎土は粗い。

灰釉椀（43・46）　口縁部は欠失し、体部内外面はロクロナデ調整である。体部下部より底部にかけてはヘラ削りによる高台である。灰白色を呈し、胎土は比較的精良で焼成は堅緻である。46は、体部下半から欠失し、口縁部分がわずかに残るだけである。口縁端部はわずかに外反し、丸味をおびるが尖り気味である。口縁部内外面ともにロクロ水挽き調整である。体部内面には灰釉がかかり、外面は二次焼成と思われる赤灰色を呈し、胎土は中砂粒を含むが、比較的緻密である。

山茶椀（44・45）　体部上半から口縁部にかけて欠失する。高台は逆台形状を呈する付高台である。灰色であるが、体部内外面ともに赤褐色で二次焼成かと考えられる。底部内面にはわずかに自然釉が見られる。胎土は細砂粒を含むが、緻密であり、焼成は堅い。

常滑窯壺（47）　胴部は欠失し、わずかに口縁部が残る。頸部から口縁部へと直線的にあがり、口縁部は折り返し、玉縁状口縁である。粘土輪積み成形で、器壁内面部分にはそのあとが残る。赤茶褐色を呈し、胎土は、緻密である。

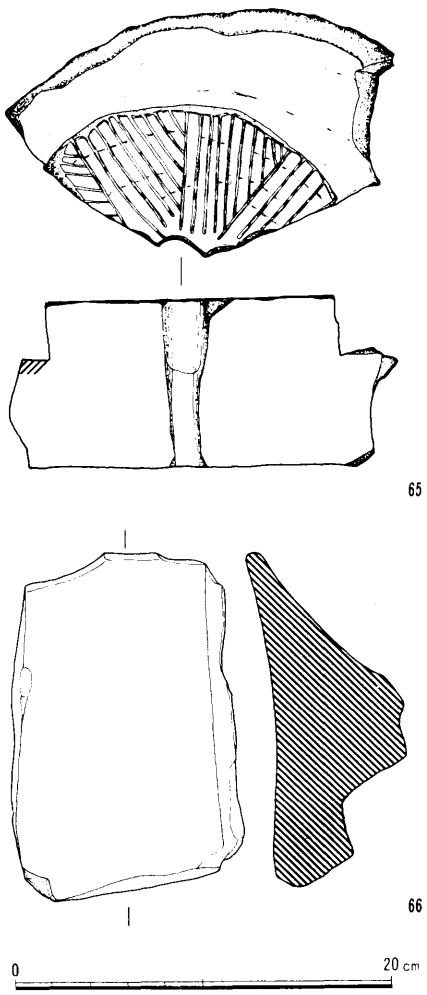
常滑窯甕（48）　口縁帯部は肥厚し、玉縁状にちかづく口縁部である。胴部大半は欠失し、頸部から胴部上部へ大きく張り出す。粘土輪積み成形で、器壁内面には指圧痕が残る。外面は赤褐色、内面は灰褐色を呈し、胎土は緻密である。

（2）ＳＸ11

山茶椀（64）　底部をわずかに残すのみ。高台はハリツケ後ナデ調整する。灰色を呈し、胎土は比較的緻密である。

（3）ＳＸ14

土師器小皿（61～63）　わずかに口縁部分が残る薄手の小皿である。内外面ともにナデ調整である。61、62の口縁部は内弯して立ち上がり、端部は尖り気味



第３－９図　石製品 実測図（１：４）

である。

土師器鍋（60）　「く」の字状に外反する口頸部で、口縁部断面は、三角形を呈し、端部は上方へつまみ上げられる。口縁部内外面ともヨコナデ調整され、胴部上面よりハケメ調整される。淡橙白色を呈し、胎土は比較的緻密である。

（4）ＳＫ18

土師器茶釜形鍋（32）　口縁端部は折り返し、つまみ上げ、丸みをもっている。口縁部内外面ともにヨコナデ、頸部内面はナデ調整である。橙褐色を呈し、胎土は細砂粒を含む。

土師器鍋（33～39）　体部より外反してのびる口縁部は比較的長く、端部は一般に断面三角形を呈する。体部は全体に丸底風の深鉢的な形態を有すると思われる。口縁部内外面はすべてヨコナデされ、体部上半にはやや緻密なハケメがある。頸部から体部にかけてはナデ調整となる。茶褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含むが、比較的緻密である。

（5）ＳＤ16

土師器小皿（54、55）　口径7.6cm（54）、9.6cm（55）で薄手の皿である。内面はすべてナデ調整され、54は口縁部全体がヨコナデされ、55は未調整である。

土師器鍋（56）　口縁部が比較的短く、端部は上方へ立ち、断面三角形を呈する。口縁内外面はすべてヨコナデされ、胴部外面には粗いハケメがある。黄橙色を呈し、胎土は砂粒を含むが比較的緻密である。

常滑窯甕（57）　口縁部が「N」字状のものである。縁帯は幅が狭く、傾きは垂下する。粘土輪積み成形により、胴部内面に指圧痕がある。内面は茶褐色外面は灰褐色を呈し、胎土は細砂を含むが緻密である。

フイゴ羽口（58）　羽口両端部分を欠失する。赤灰色を呈し、中砂粒を含み、やや粗い。

常滑窯甕（59）　口縁帯部は玉縁状である。粘土輪積み成形である。内面は赤褐色、外面は灰褐色を呈し、胎土は緻密である。

（6）ＳＤ19

土師器鍋（49）　体部から外反してのびる口縁部は比較的長く、端部断面は三角形を呈する。口縁内外面ともにヨコナデ調整され、頸部から体部内面はナデ、体部外面上部は細かいハケメで調整する。

天目茶碗（50）　光沢のある黒褐色を呈し、口縁部は直立しながら、口縁端部で外側にわずかにくびれる。

灰釉皿（51）　淡灰緑色の光沢のある釉が口縁部内外面に厚くかかる。口縁部が外反し、やや水平に折れ曲がる。ロクロ水挽き成形により底部外面には糸切り痕がある。胎土はやや黄味をおびた淡褐色を呈し、細砂粒を含むが緻密である。

常滑窯甕（52、53）　いずれも口縁部は、折り返えされる。粘土輪積み成形で、内面にそのあとが残る。52には、指圧痕がみられる。赤褐色を呈し緻密で、焼成は堅緻である。53は、焼成が悪く焼きぶくれている。

（7）その他の遺物

茶臼（65）　ＳＫ１～３土坑群と中央部ＳＸ６～８の間の包含層より出土。下面直径15.3cm、底面直径18.3cm、高さ9.0cm、芯木穴径2.3cmである。粉受け用の「皿」を有しているが、四部は破損して不明確である。臼面の溝は９～10条６分画と推定され、目の断面形状は「Ｖ」字状に近い丸溝で周縁まで切ってある。臼面は平滑に研磨されている。

（山田芳昭）

4．結　　語

東野遺跡は、中村川右岸標高37m前後の河岸段丘上に位置する。調査は、第1次と第2次にわけて実施し、ともに平安時代末～鎌倉時代初期の第Ⅰ期と室町時代の第Ⅱ期に区分できる遺構・遺物を検出した。

第Ⅰ期の遺構群は、調査区中央部から北側にかけて検出され、土坑6基が確認された。これらの土坑は、出土遺物も少なくその機能が不明なものが多い。ＳＫ3は土坑を覆うように2間×1間の掘立柱建物を伴う土坑であり、調査区が限定されているが掘立柱建物の一角をなす可能性もある。また、土坑内には火を受けた河原石が認められ、炭・焼土も確認されており、居住施設と考えられる。

第Ⅱ期の遺構群は、おおむね調査区中央部付近で検出され、掘立柱建物1棟、素掘り井戸1基、石組土坑4基のほか大小の土坑・溝などで構成される。

石組土坑4基は、その形態・構造に共通する部分が多い。平面形は、一辺2.3～2.5mの方形をなし、ＳＸ11を除いて四隅の土坑肩部に柱穴が認められ、覆屋を伴う建物であることが知られる。土坑は、深さ0.2m程度しか残らないが、ＳＸ14では0.5mと深い。形態がややくずれたＳＸ15以外では、2辺～4辺に河原石の石組が認められ、残存状況が良好なＳＸ14では4段の石組が確認されている。これらの石組は、かなり強く焼焦されており、土坑埋土から多量の炭、鉄滓が出土している。殊に壁に組まれた石組の焼焦は、一時的に火を受けたものとは考え難く、恒常的に火を受ける状況にあったことを示しており、また逆に火を受ける壁の保護を目的として設けられた施設として考えられる。

土坑内部には、大小のピットが検出される例があるが、特にその機能を明確に示す施設は確認されていない。一方、井戸、土坑あるいは包含層からフイゴ羽口が数点出土しており、多量の鉄滓の出土と考え合わせると小鍛冶が行われていたことが想定され、これらの石組土坑がその工房である可能性が強いと考えられる。

三重県内では、製鉄関係の遺物としてフイゴ羽口あるいは鉄滓を出土する遺跡は、現在22遺跡が知られている[1]。その年代は、5世紀から16世紀までと時期幅が広く、かつ直接的に鍛冶遺構と断定できる例はない。ただ、亀山市沢遺跡で室町時代の羽釜を出土する集石遺構と焼土坑が検出され鍛冶に関連する遺構と想定されている[2]。この焼土坑は、3.5m×3mのほぼ方形をなし、一辺に河原石列が認められ、床面が火を受けている。平面が3m前後の方形をなし河原石を伴うといった点では類似する。

また、国指定史跡上之国勝山館遺跡の第2号、第3号地割面で検出された3×1m程の細長い土坑は、隣接する1×2間の建物跡とともに鍛冶遺構（小鍛冶）の可能性が考えられている[3]。しかし、16世紀の小鍛冶遺構と想定し得るだけで、その形態・構造・類似点は認められない。

中世における、鉄製産をめぐる実態については、精錬・鍛冶遺構とも少数の例を除いて、必ずしも明らかにされているとは言い難い[4]。しかし、室町時代に至れば、手工業生産にも著しい発達がみられ、遺跡から発見される鉄滓、フイゴ羽口などは、小規模ながら鍛冶が行われていたことを示すものである。

東野遺跡の石組土坑を小鍛冶遺構（工房）と想定したが、今後の類例をもって検討すべき課題は多い。

（駒田利治・山田芳昭）

（註）

① 久志本鉄也氏（三重県教育委員会　主事）が、「三重県埋蔵文化財年報」及び調査報告書の検索により、1986年までの出土例として15ヶ所を報告している。「金属生産遺跡全国調査概報－第1報」東京工業大学人文論叢　1987年

② 亀山隆　『沢遺跡　Ⅰ』　亀山市教育委員会　1988

③ 上ノ国町教育委員会　『史跡上之国勝山館跡　Ⅵ』1985

④ 窪田蔵郎　『改訂　鉄の考古学』　1987
森浩一編　『日本古代文化の探究　鉄』　1974

遺跡名	所在地	推定年代	時期決定の根拠	出土遺物	発掘	発掘調査報告書名
南小山廃寺	桑名郡多度町大字小山字東塚原	白鳳（但し、遺跡の主たる年代）	出土遺跡	鉄滓、瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、常滑甕	1981	「南小山廃寺発掘調査報告」
西山遺跡（A地区）	員弁郡東員町中上	7世紀初、8世紀初	須恵器	フイゴ羽口（数個）、鉄滓（多数）、須恵器、土師器、土錘	1970	「西山・新野遺跡発掘調査報告」
西ケ広遺跡	四日市市市伊坂町字松山	6世紀後半（但し、フイゴ羽口を出土した遺構の年代）	須恵器	フイゴ羽口（10個）、須恵器、土師器	1969	「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」
西ケ広遺跡（D地区）	四日市市市伊坂町字松山	6世紀後半（但し、フイゴ羽口を出土した遺構の年代）	須恵器	フイゴ羽口（数個）、須恵器、土師器	1971	「西ケ広遺跡発掘調査報告－D地区－」
末野A遺跡	鈴鹿市郡山町西高山	古墳時代後半～奈良	須恵器	フイゴ羽口、土馬、鉄滓	1980	「三重県埋蔵文化財年報10」
大門遺跡	鈴鹿市秋永町大門	5世紀末～6世紀	須恵器	フイゴ羽口、鉄滓、須恵器、古式土師器、砥石	1980	「三重県埋蔵文化財年報11」
斎宮跡	多気郡明和町斎宮	鎌倉時代	出土遺物	フイゴ羽口（1個）、土師器、山茶椀	1974	「斎王宮跡発掘調査報告Ⅰ」
ミゾコ遺跡	多気郡多気町四神田	平安時代後期～室町時代	土師器皿	フイゴ羽口	1984	「ミゾコ遺跡発掘調査報告」
殿垣外遺跡	伊勢市西豊浜町字殿垣外	鎌倉時代前半	山茶椀	フイゴ羽口、鉄滓、土師器皿、山茶椀、青磁、土錘、砥石	1980	「殿垣外遺跡発掘調査報告」
下郡遺跡	上野市下郡	平安時代		フイゴ羽口、鉄滓、須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、志摩式製塩土器、土錘	1978	「三重県埋蔵文化財年報8」
下郡遺跡	上野市下郡	室町時代後期～江戸時代後期	周辺遺物包含層からの推定	フイゴ羽口（数個）、鉄滓（多量）、土師器、天目、染付、陶器、伊賀焼、青白磁	1982	「下郡遺跡昭和57年・58年度の発掘調査」
下郡遺跡	上野市下郡	室町時代後期～江戸時代後期	周辺遺物包含層からの推定	鉄滓	1983	「三重県埋蔵文化財年報14」
三谷遺跡	阿山郡大山田村広瀬	古墳時代～中世	出土遺物	フイゴ羽口、鉄滓、土師器、須恵器、製塩土器、鉄製紡錘車	1981	「三重県埋蔵文化財年報12」
原出遺跡	名張市蔵持町原出字原出	鎌倉時代～室町時代	瓦器	鉄滓、瓦器、土師器、青磁、陶器、天目、古銭	1981	「三重県埋蔵文化財年報12」
杉垣内遺跡	松阪市深長町杉垣内			フイゴ羽口（数個）	1986	「昭和61年度　農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告」
東野遺跡	一志郡嬉野町森本	室町時代		フイゴ羽口、鉄滓、山茶椀、土師器、常滑甕	1986	「昭和61年度　農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告」
下江平遺跡	三重郡菰野町大字田光字下江平	奈良時代	須恵器	フイゴ羽口、須恵器（「五十戸」「倭家」墨書）、土師器	1987	「下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ」
北山C遺跡	四日市市大鏡町	古墳時代		弥生土器、須恵器、土師器	1987	「三重県埋蔵文化財年報18」
西垣内遺跡	鈴鹿市長法寺町字西垣内	鎌倉時代～室町時代	山茶椀	フイゴ羽口、鉄滓（多量）、山茶椀	1987	「三重県埋蔵文化財年報18」
沢遺跡	亀山市山下町沢	15世紀	土師器	鉄滓、土師器	1987	「沢遺跡Ⅰ」
松山遺跡（G区）	安芸郡芸濃町大字萩野字松山	平安時代～鎌倉時代	出土遺物	フイゴ羽口、鉄滓、須恵器、灰釉、緑釉陶器、山茶椀他	1987	「三重県埋蔵文化財年報18」
中貝戸遺跡	員弁郡大安町丹生川	鎌倉時代	山茶椀	フイゴ羽口、鉄滓、山茶椀	1988	「三重県埋蔵文化財年報19」

第3－1表　県内フイゴ羽口・鉄滓　出土遺跡一覧表

Ⅳ．松阪市深長町　杉垣内（すがいと）遺跡

1．位置と環境

杉垣内遺跡、深長（ふこさ）古墳（1）・堂ノ後（どうしろ）遺跡（2）・本堂遺跡（3）は松阪市深長町、赤城（あかじょう）遺跡（4）は同市野村町に所在し、伊勢富士と称される堀坂山を西に望む標高18～25mのの堀坂川左岸の扇状地扇端部に前者は位置し、後者は岩内（ようち）川右岸に位置する。

松阪市西部は一志地塊と呼ばれる山地が連なり、その麓には洪積世の大洪水によって形成された複合扇状地が広がっている。その範囲は大阿坂から伊勢寺に及び、三渡川、岩内川、堀坂川などの中小河川が形成され現在に至っており、その地域は伊勢寺扇状地と総称されている。扇状地は大きく3段の段丘面に分けられるが、明瞭な段丘崖がみられず生活の場としては良好な立地条件を備えていると言えよう。生活に必要な水は扇状地特有の伏流水であるため、扇端部で湧水が多く比較的得やすい環境にあり多くの泉が見られ、またそこから流れ出た水が小河川を形成している場合もある。扇頂・扇央部も比較的水が得やすい所が多く、伏流水がさほど深くない可能性もある。

松阪市西部は県内でも屈指の遺跡密集地帯であり、それらの遺跡は主に扇状地段丘面・丘陵地・及びその縁辺部に多く立地し、沖積地微高地にも散在する。そこで以下に大まかではあるが松阪市西部を中心とする地域の遺跡の分布状況を概観してみたい。

先土器時代の遺跡は、伊勢寺扇状地付近には現在のところ確認されてはおらず、阪内川と金剛川にはさまれた丘陵地帯にはナイフ形石器が出土した長庄野遺跡（5）、上出遺跡（6）などがある。また伊勢寺扇状地から丘陵を一つ越えた地域には、せぎ遺跡（10）があり、ナイフ形石器類似の石器が出土している。その他、先土器時代末から縄文時代初頭にかけての遺跡としては、さんざい林遺跡（9）などが知られるが、全体としては先土器時代を中心とする遺跡の発見が少ないのが現状であり、今後の課題であろう。

縄文時代の遺跡もその数は少なく先土器時代と似通っている。立地としては阪内川流域の沖積地の微高地や川を望む丘陵端部に位置するようである。早期から前期にかけてと考えられる遺跡としては半林遺跡（11）が知られるが、土器についての詳細なことは確認されていない。前期～中期にかけては新田町遺跡（12）をはじめ、笠松遺跡（13）、貝造遺跡（15）などが沖積地の微高地に立地する。伊勢寺扇状地でも扇頂部付近に中期～後期にかけて生活が営まれていたようで、藪ノ下遺跡（16）や新田遺跡（17）がある①。しかし晩期になると良好な遺跡が現在のところほとんど確認されていないのが現状であり、弥生時代との接点を探るうえで問題を残している。

弥生時代になると、その立地が沖積地微高地、及び沖積地を見下ろす丘陵上、扇状地扇端部付近などに比較的まとまって分布するようになる。前期では丘陵地帯に上出遺跡や御殿山遺跡（24）があり、また文珠（もんじゅ）遺跡（22）、宮ノ越遺跡（23）が沖積地に張り出す低い丘陵上にある。そして低地性の前期弥生遺跡としては、三渡川右岸の中ノ庄遺跡（21）が知られる②。中期の分布は沖積地微高地上に顕著となる。中期前半では川井町遺跡（27）、鍋屋分（なべやぶ）遺跡（28）が、中期後半では田高（たこだ）田遺跡（26）、城垣内（しょうがいと）遺跡（25）などが沖積地微高地と似通った扇端部段丘面上にある。また少し距離があるが金剛川左岸の涌早崎（ゆはやざき）遺跡（30）も知られている。後期に入ると丘陵端部・頂部や台地上にも分布するようになり、その広がりはさらに拡大する。伊勢寺扇状地付近では下林遺跡（33）、わこ畑遺跡（34）、ケ所垣内遺跡（51）が、阪内川左岸では阿形（あがた）遺跡（35）、蛸（たこ）遺跡（39）がある。特に蛸遺跡ではパレススタイルと呼ばれる壺形土器が出土し注目される。さらに阪内川

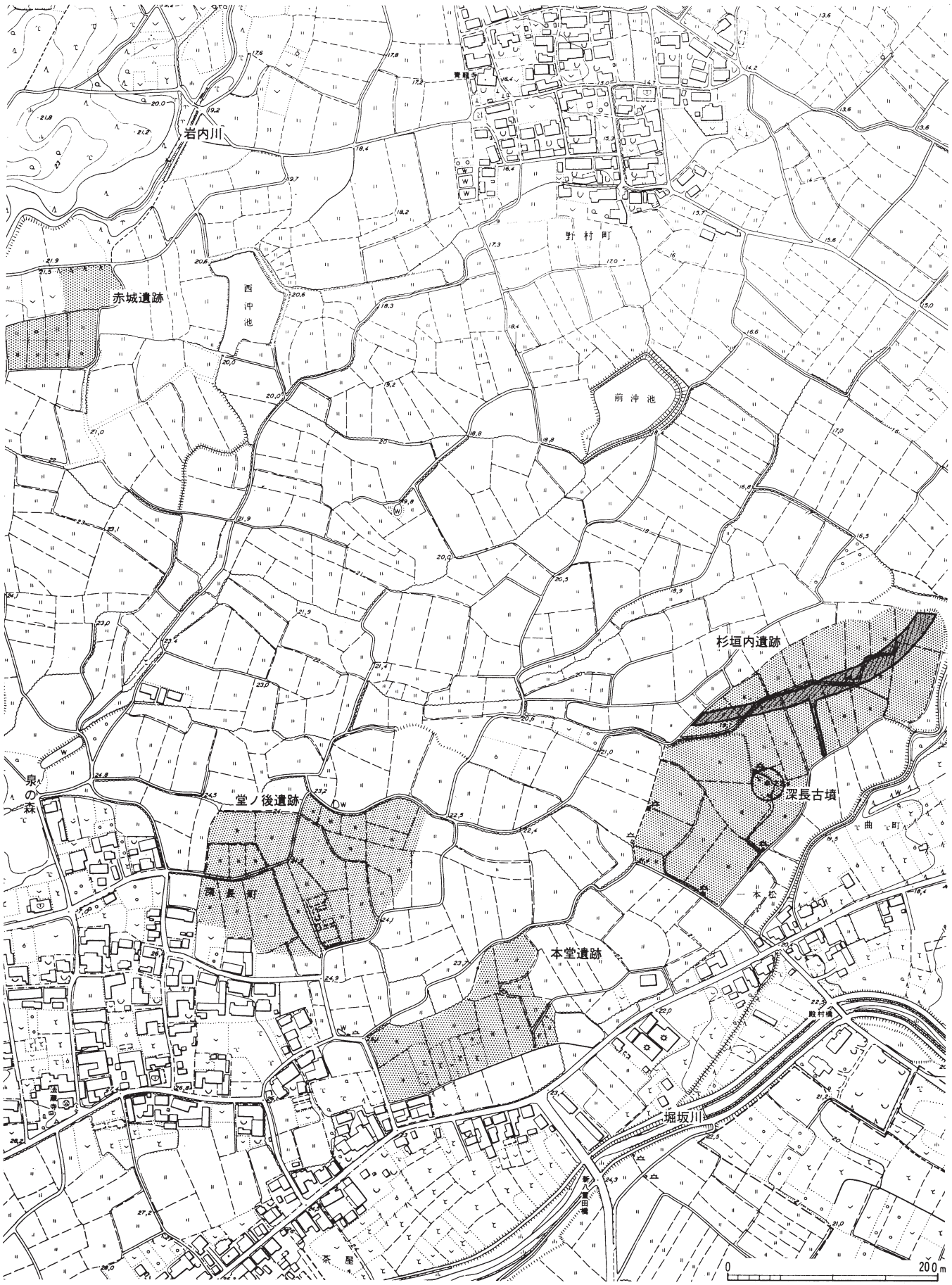
第４－１図　遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院：大仰・大河内・松阪港・松阪）

1　深長古墳　2　堂ノ後遺跡　3　本堂遺跡　4　赤城遺跡　5　長庄野遺跡　6　上出遺跡　7　宝塚遺跡　8　観音山遺跡
9　さんざい林遺跡　10　せぎ遺跡　11　平林遺跡　12　新田町遺跡　13　笠松遺跡　14　池田遺跡　15　貝造遺跡　16　藪ノ下遺跡
17　新田遺跡　18　小野東出遺跡　19　園遺跡　20　那知山遺跡　21　中ノ庄遺跡　22　文珠遺跡　23　宮ノ越遺跡　24　御殿山遺跡
25　城垣内遺跡　26　田高田遺跡　27　川井町遺跡　28　鍋屋分遺跡　29　杉垣外遺跡　30　涌早崎遺跡　31　中世古遺跡　32　久米貝塚
33　下林遺跡　34　わこ畑遺跡　35　阿形遺跡　36　内五曲遺跡　37　松阪城遺跡　38　権現角遺跡　39　蛸遺跡　40　粥鍋遺跡　41　大足遺跡
42　辻世古中遺跡　43　古野遺跡　44　藤ノ木岡崎山Ｂ遺跡　45　藤ノ木小野遺跡　46　草山遺跡　47　上村遺跡　48　神戸遺跡　49　小広遺跡
50　幸小学校遺跡　51　ケ所垣内遺跡　52　貝塚遺跡　53　天白遺跡　54　小野遺跡　55　広見遺跡　56　中野遺跡　57　下山見遺跡
58　大瀬古遺跡　59　新田Ｂ遺跡　60　新田Ｂ遺跡　Ｃ遺跡　61　墓垣内遺跡　62　上ノ庄遺跡　63　出口遺跡　64　鍛治屋垣内遺跡
65　茶屋前遺跡　66　北狭間遺跡　67　杉遺跡　68　中広遺跡　69　藤ノ木岡崎山Ａ遺跡　70　藤ノ木新畑遺跡　71　西野遺跡　72　川原表遺跡
73　はざま遺跡　74　東出遺跡　75　こうじ垣内遺跡　76　羽根遺跡　77　小久保遺跡　78　伊勢寺遺跡　79　小野瓦窯址　80　榎長遺跡
81　鳥戸遺跡　82　上相田遺跡　83　辻之前遺跡　84　辻墓垣内遺跡　85　大垣内遺跡　86　向王子Ｂ遺跡　87　王子遺跡　88　向王子Ａ遺跡
89　大坪遺跡　90　前沖遺跡　91　曲遺跡　92　出口遺跡　93　赤松遺跡　94　口南戸遺跡　95　山の神遺跡　96　市屋垣内遺跡　97　山見遺跡
98　藪ノ下遺跡　99　別当垣外遺跡　100　尾田遺跡　101　北小麦遺跡　102　門前遺跡　103　東浦遺跡　104　向山古墳　105　市谷古墳
106　宝塚１号墳　107　宝塚１号墳　２号墳　108　久保古墳　109　坊山古墳群　110　茶臼山古墳　111　分木山古墳群　112　八重田古墳群
113　高地蔵古墳群　114　宝塚古墳群　115　奥古墳　116　口南戸古墳　117　鈴ケ森神社古墳　118　八幡山古墳群　119　阿坂古墳群
120　垣内田古墳群　121　小田古墳群　122　美濃田古墳群　123　天神山古墳群　124　平林古墳群　125　五輪山古墳群　126　一越古墳群
127　横尾古墳群　128　白山古墳群　129　園古墳群　130　弥三郎新畑古墳群　131　すご山古墳群　132　辰ケ鼻古墳群　133　川原表古墳群
134　常光坊谷古墳群　135　狼谷古墳群　136　大分山古墳群　137　追上古墳群　138　浅間古墳群　139　立野古墳群　140　東山古墳群
141　田村古墳群　142　権現山古墳群　143　垣鼻古墳群　144　三ざい古墳群　145　八原古墳　146　伊勢寺廃寺　147　丹生寺廃寺
148　貴田寺廃寺　149　大蓮寺址　150　大行寺址　151　横尾墳墓群　152　高城城址　153　伊勢寺城址　154　松ケ島城址　155　荒神前遺跡

下流の沿岸には川井町遺跡や内五曲遺跡（36）などが、また、丘陵頂部には松阪城遺跡が位置する。そして古墳時代前期までも含むが粥鍋遺跡（40）がある③。水系は異なるが金剛川右岸の丘陵に草山遺跡（46）がある。草山遺跡は昭和59年から61年にかけて調査が行われ、その結果、弥生時代後期の竪穴住居などが多数検出され、その時代の遺物が大量に出土した④。なお、草山遺跡は断続的にではあるが中世まで続く大集落であることが確認されている。

一志郡一志町から度会郡玉城町へと続く山麓部分、丘陵地帯には、前期から後期にわたる古墳及び古墳群が集中・点在する。松阪市内では西部地区、とりわけ伊勢寺地区から松尾・花岡・神戸地区と続く地域に集中する。前期古墳に関しては、北から南へ概観すると、一志郡嬉野町と松阪市小野との境に松阪市では最も早い時期に位置づけられ、4世紀後半頃と考えられる前方後方墳の向山古墳（104）がある。向山古墳は全長71.4m、昭和50年国史跡に指定された。主体部は粘土槨で、鏡・石剣・車輪石などが出土し、中でも鏡は小形仿製鏡の重圏文鏡である⑤。現在その大半は東京国立博物館に所蔵されている。堀坂川と阪内川による沖積平野に突き出た形の丘陵上に八重田古墳群（112）が展開する。同古墳群は団地造成に伴い昭和48年に9基が発掘調査され、その結果4世紀後半から5世紀後半の約1世紀間の幅で営まれた古墳群であることが明らかになった⑥。出土遺物も豊富で、舶載の二神二獣鏡、鉄剣、ガラス丸玉、眉庇付冑及び短甲片などが出土し、墳麓からは円筒埴輪・形象埴輪などが出土している。古墳群の中で調査されなかった古墳の中では、径約40mの円墳である10号墳、全長約50mの前方後円墳である11号墳がその規模から注目される。その中で10号墳は古墳群の中でも沖積平野に突き出た丘陵の縁辺部に位置しているのが興味深い。八重田古墳群からさほど距離のない丘陵端部に高地蔵古墳群（113）が位置する。その中で中心を占めるのは、全長58mの帆立貝式古墳である1号墳であり、5世紀後半に属すると考えられている。1号墳はその規模から首長墓的性格をもつ可能性があるかも知れない。阪内川左岸の花岡地区の丘陵上には宝塚古墳群（114）が位置し、代表する古墳として宝塚1号墳（106）、2号墳（107）がある⑦。1号墳は全長95mの前方後円墳で、伊勢国最大の規模をもち、2号墳も全長72mの帆立貝式の前方後円墳であり、ともに昭和7年に国史跡指定を受けている。1号墳は5世紀前半に、2号墳は5世紀後半に築造されたと考えられる。宝塚古墳群から東、金剛川右岸の低台地南端部に久保古墳（108）が単独に位置し、県史跡に指定されている。久保古墳は全長52.5mの市内最大の円墳で、舶載の三角縁神獣鏡2面が出土している。この舶載の三角縁神獣鏡は京都府椿井大塚山古墳、岡山県湯迫車塚古墳、静岡県平川大塚古墳出土の鏡と同笵と言われ⑧、築造年代は4世紀後半頃と考えられている。久保古墳から東南へ約1kmの丘陵上に坊山古墳群（109）がある。その中で1号墳は径40mの円墳で規模が大きく、出土遺物としては仿製鏡の神獣鏡があり、築造年代は4世紀末頃に求められる。また東隣りには高田古墳群が位置し、1号墳は円墳で径33～36mと坊山1号墳に近い規模をもつ。出土遺物がなく築造年代は推定するのは難しいが、4世紀後半頃と考えても良い古墳である。なお、松阪駅付近に現在は宅地化されて消滅したが、茶臼山古墳（110）があったと言われ、その規模は径約55mの円墳であったと推定されている。以上、おおまかではあるが前期古墳の分布を見るといずれも或る程度の規模をもつ古墳であり、首長墓的性格を有していたと考えてもさしつかえなく、これらの古墳を持つ地域は相互に消長を繰り返していたのではないかと想定しうる。またこれらの事はこの地域一帯が南勢地方の広範囲にわたる支配権を確立していたとも考えられよう。

後期に入ると丘陵上・山麓部などに横穴式石室を主体とした小規模な円墳を中心とした群集墳が現われるようになる。伊勢寺扇状地付近では、低丘陵地に美濃田古墳群（122）など、山麓部には上文珠古墳群など、丘陵地帯には垣内田古墳群（120）⑨、天神山古墳群（123）、平林古墳群（124）⑩などが営まれている。また、阪内川両岸の丘陵地帯でも松尾地区に川原表古墳群（133）、常光坊谷古墳群（134）などが、花岡地区では立野古墳群（139）、東山古墳群（140）などが営まれている。これらの事は、この時期に入ると支配者層だけでなく、被支

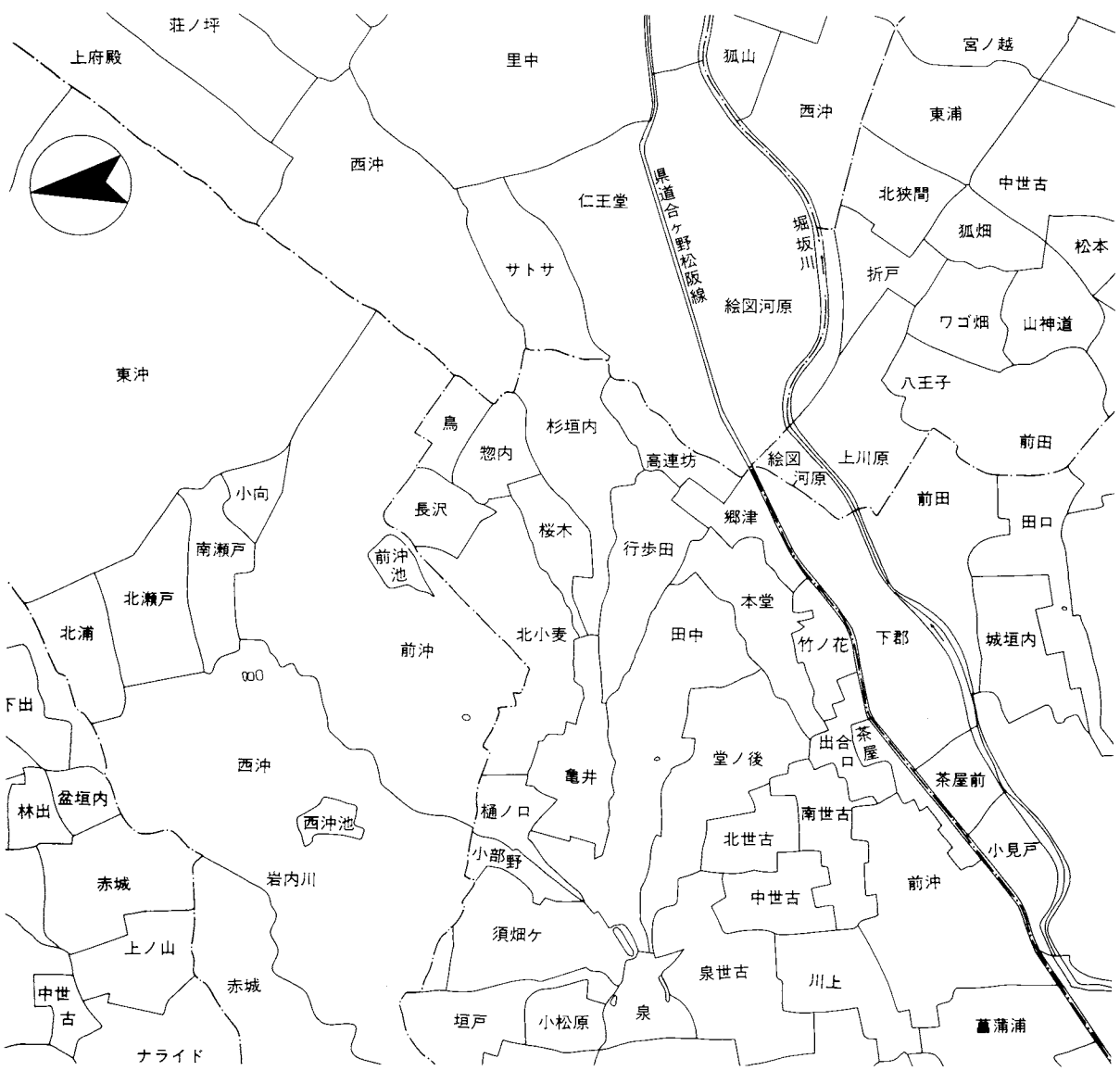


第４－２図　遺跡位置図（１：50,000）

配者層の間でも家族墓的で集団墓的な形で古墳を営む風習が広がった現れと解することが出来よう。

古墳時代の遺跡は主として扇状地上に立地し、また沖積地の微高地に立地しているものもある。そして古墳群の増加と相関関係をもち、その数は増加の傾向にある。扇状地上には北から広見遺跡（55）、出口遺跡（63）を中心とする地域、さらに南は中広遺跡（68）、茶屋前遺跡（65）などがあり、沖積地の微高地には阿形遺跡、北狭間遺跡（65）が、また丘陵の裾には川原表遺跡（72）などがある。中でも阿形遺跡は弥生土器片とともに古式土師器が比較的まとまって出土している。しかし、古墳群から見下ろせる地域には必ず古墳群を営んだ集落があるはずであり、その数は今後の調査次第ではさらに増加が期待される。

飛鳥～奈良時代以降を中心とした遺跡が集中するのが堀坂川沿岸地域であろう。堀坂川左岸の扇頂部付近から扇端部にかけて遺物が濃密に散布する箇所が多い。その中で特に目をひくのが扇央部を中心として広がる伊勢寺遺跡（78）である。伊勢寺遺跡の遺物散布は広大な地域に及んでおり、奈良・平安時代を中心とした須恵器・土師器・施釉陶器・山茶椀などが濃密に散布し、その面積は県内でも屈指の規模である。そして扇頂部付近には奈良～平安時代初頭の掘立柱建物などが検出された榎長遺跡（80）[10]が、扇端部と堀坂川が大きく北に向かって流れを変える沖積地の境に曲（まがり）遺跡（91）が位置する。曲遺跡は隣接する伊勢寺遺跡に匹敵する広大な面積を持ち、その一部は昭和59年に発掘調査され、奈良時代後半頃から平安時代全般にわたる掘立柱建物や井戸など



第４－３図　字切図（１：10,000）

が検出されている⑫。堀坂川よりに岩内川に近い扇端部に位置するのが前沖遺跡（90）である。前沖遺跡も昭和60年に発掘調査され、奈良時代末～平安時代初期にかけての堀立柱建物群などが検出されている⑬。湧水が多い地域であるが、排水対策を講ずれは比較的生活がしやすかったのかも知れない。これらは主に堀坂川左岸であるが、右岸の扇央部付近にもこの時期の遺跡が集中しており、大垣内遺跡（85）や大坪遺跡（89）などはそれらの代表格であり、その周辺も遺物散布が比較的多い箇所が数ケ所見受けられる。これらのことから伊勢寺遺跡を中心とするこの地域は、この時期の中心的地域ではなかったかと想定されるのである。

古代仏教の興隆にともない奈良時代を中心とする寺院跡も数ケ所点在する。広大な伊勢寺遺跡の南辺部分に位置するのが伊勢寺廃寺（146）である⑭。その寺域周辺は古瓦が多数採集されており、白鳳期と推定される軒平・軒丸瓦が若干見られ、創建が白鳳期に求められる可能性を持っている。また方形地割が残存し、その中軸線が真北をさすなど寺域の推定も可能な寺院跡である。伊勢寺廃寺の南約2.3kmの阪内川左岸の丘陵東麓部に丹生寺廃寺（147）がある⑮。創建はその出土する軒平・軒丸瓦からこれも白鳳期に求められ、奈良時代を通じ存立していたと考えられる。寺域と推定される区域には整地面や土塁状遺構の残存が見られるが、それらが寺の遺構と関連があるかどうかは不明である。

平安時代初期成立の『延喜式・神名帳』⑯記載の神社、いわゆる式内社も伊勢寺扇状地を中心とする地域には大神・物部・堀坂・阿射加（あざか）・敏太（びんた）神社などが知られている。大神・物部・堀坂の各神社は現在残ってはいないが、それぞれ故地があり、中でも大神はその故地が深長町の「泉の森」地内の大神（おおわ）社と同じであると考えられている。しかし、この地域に前述のような式内社が比較的まとまって集中しているのが興味深い。また同時期の成立と考えられる『和名抄』には現松阪市域の旧飯高郡に７つの郷名が見え⑰、上（かみ）・下牧（しもひら）は現田牧（たいら）町に、英太（あがた）は現阿形町に比定されている。飯高郡は奈良時代中頃から平安時代中頃までこの地域に強い勢力を誇り、君姓を与えられた飯高県造が主宰した地域であり、国郡制施行とともに郡司に任ぜられ、現阿形を中心とする地域に郡家が比定されている⑱。

古代における圃場整備である条里制も河川による沖積平野を中心に行われたようで、現在でもその名残りを見ることが出来る。北は阿坂地区から南は阪内川左岸地域まで広範囲に見られ、施行期については７世紀後半以降とも言われている⑲。そして、古代の道もまた条里制とは不可分の形で考えられており、大和から伊勢神宮への道、すなわちこの付近では一志頓宮から飯高駅家に至るルートが現在推定復元されており⑳、杉垣内遺跡と堂ノ後遺跡の中間を横切るように、条里と平行して走っているのが注目される。

平安時代末期以降、飯高郡は神八郡の一つ、度会郡・多気郡とともに神三郡となり、多くの御厨（みくりや）・御薗（みその）が神宮領として成立分布している。伊勢寺扇状付近では勾（まがり）御厨、深長御厨、英太御厨、御薗、岩内御園などが知られている㉑。

中世以降になると遺跡の分布はやや疎らになるがこの時期の遺跡は古代からの遺跡と重複するものが多く見られる。扇頂部付近には藪ノ下遺跡（98）㉒があり鎌倉時代と考えられる掘立柱建物などが検出されており、扇端部付近では別当垣外遺跡（99）、北小麦遺跡（101）などが点在している。

南北朝から室町時代にかけては当地域も伊勢国司家の北畠氏の支配下に組み込まれ、中心的な役割を果すようになる。特に山麓部や丘陵頂には、城が多く築かれ、白米城などをはじめとして堀坂山系には多くの中世城館が点在し、その栄枯盛衰を見ることが出来る㉓。そしてこの時代を知る手掛かりとして、堀坂山系の丘陵の一つをおおう形で展開する横尾墳墓群（151）の存在があげられる㉔。尾根上から頂上付近にかけて広がる石組遺構・土坑は数多く、その規模の大きさは全国的レベルのものであり、中世における葬送・墓制や信仰を知る手掛かりを与えてくれるものとして注目に値する。

（河瀬信幸）

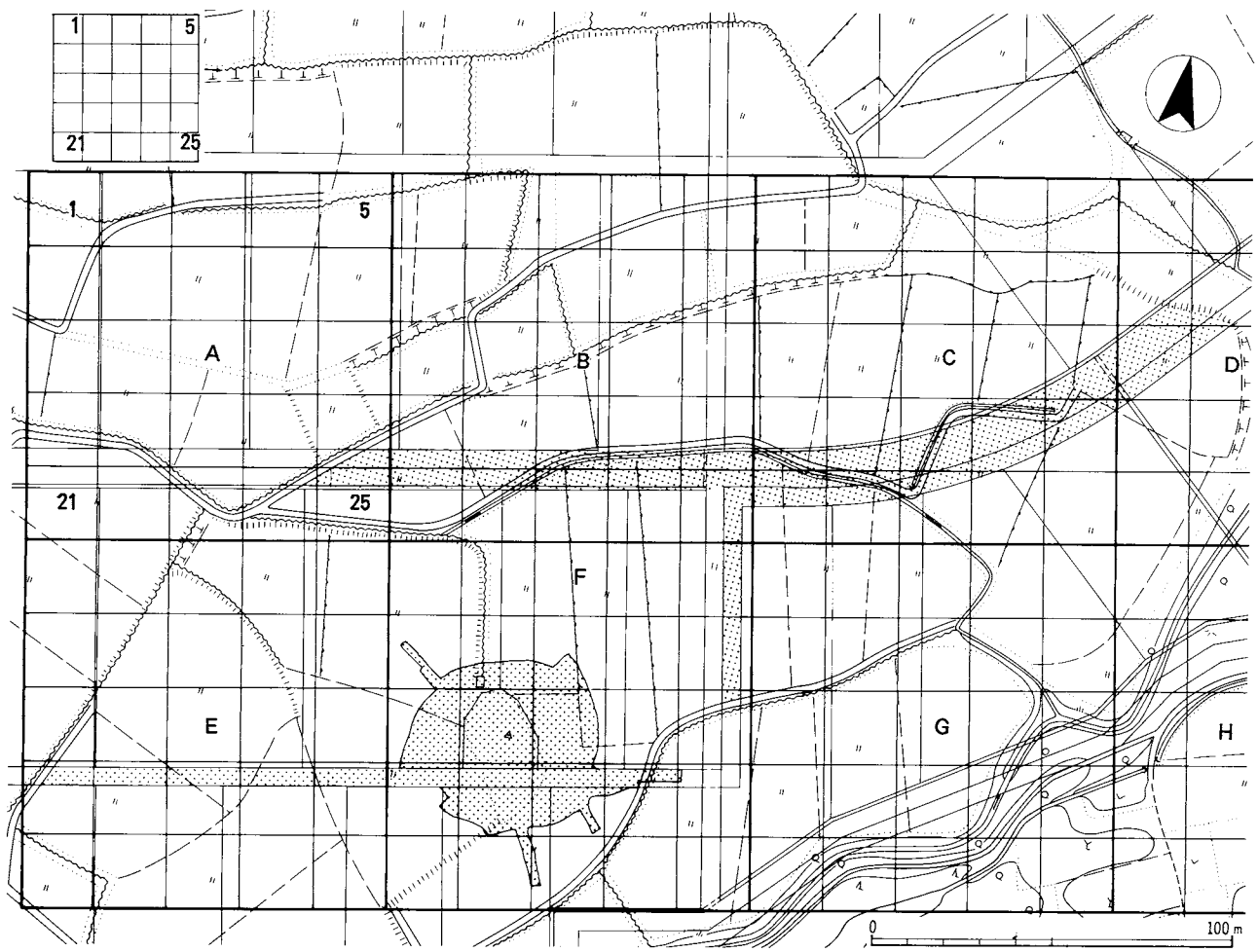
2．遺　　構

今回の調査は面的な調査がなく、圃場整備に伴う幹線道路と幹線排水路に限定された。しかし、道路と排水路であるため、遺跡内全域にトレンチを入れる形となり、地区設定も通常のものではなく大地区設定を遺跡内ほぼ全域に行うこととした。

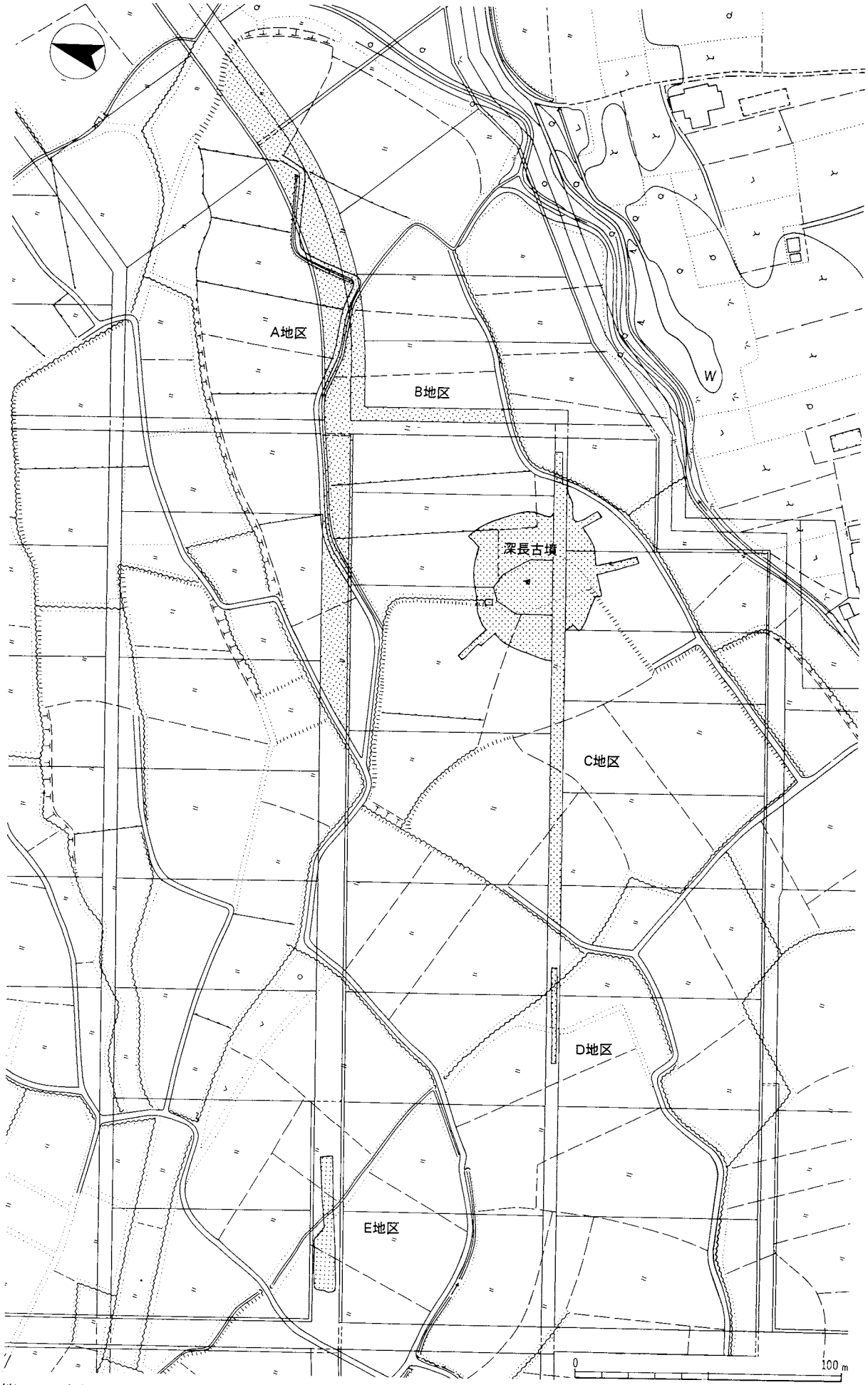
大地区設定は第４－５図に示すとおりであり、一辺100ｍの正方形の大地区Ａ～Ｈを設け、そしてその中を25地区に分け、さらに中地区を４ｍ×４ｍの正方形の25の小地区に分ける方法を取った。地区の名称は北西隅を基準とし、その呼称は、（例）Ａ－１－１とした。なお、方眼の基準は、幹線道路のセンター杭を使用した。

発掘区は５箇所に分かれるのでそれぞれにＡ～Ｅまでの地区名を与えた。東西に延びる幅10ｍ（その内約½は排水路部分と合わせ幅15ｍ）の幹線道路をＡ地区、Ａ地区とつながってはいるが、南北に延びる幅５ｍの排水路部分をＢ地区、東西に延び深長古墳下層も含めた排水路部分をＣ地区、さらに「古道」を確認するために東西に入れたトレンチをＤ地区、Ｅ地区とそれぞれ呼称した。

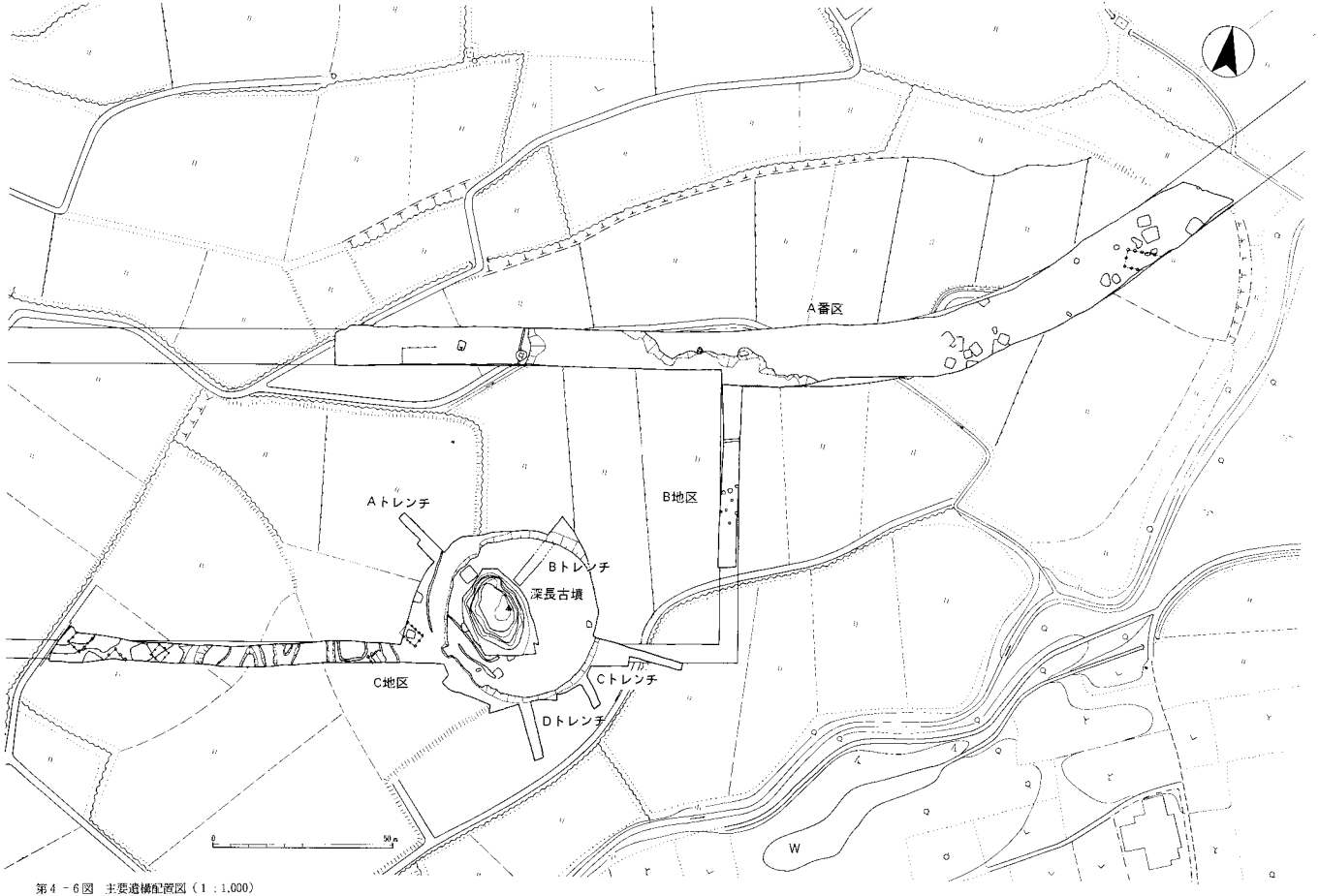
なお、調査区Ａ～Ｃ地区の北側には、一段低い水田が緩く東へ傾斜して区画され、また南側には畑として利用されている微高地との間に小河川が東流している。弥生時代から平安時代の当該地域は、Ｃ地区及び深長古墳周辺がわずかに高く、緩やかに東へ傾斜する比較的上面が平坦な微高地状の地形をなしていたと考えられる。また、Ｄ・Ｅ地区は、安定した微高地上に立地している。



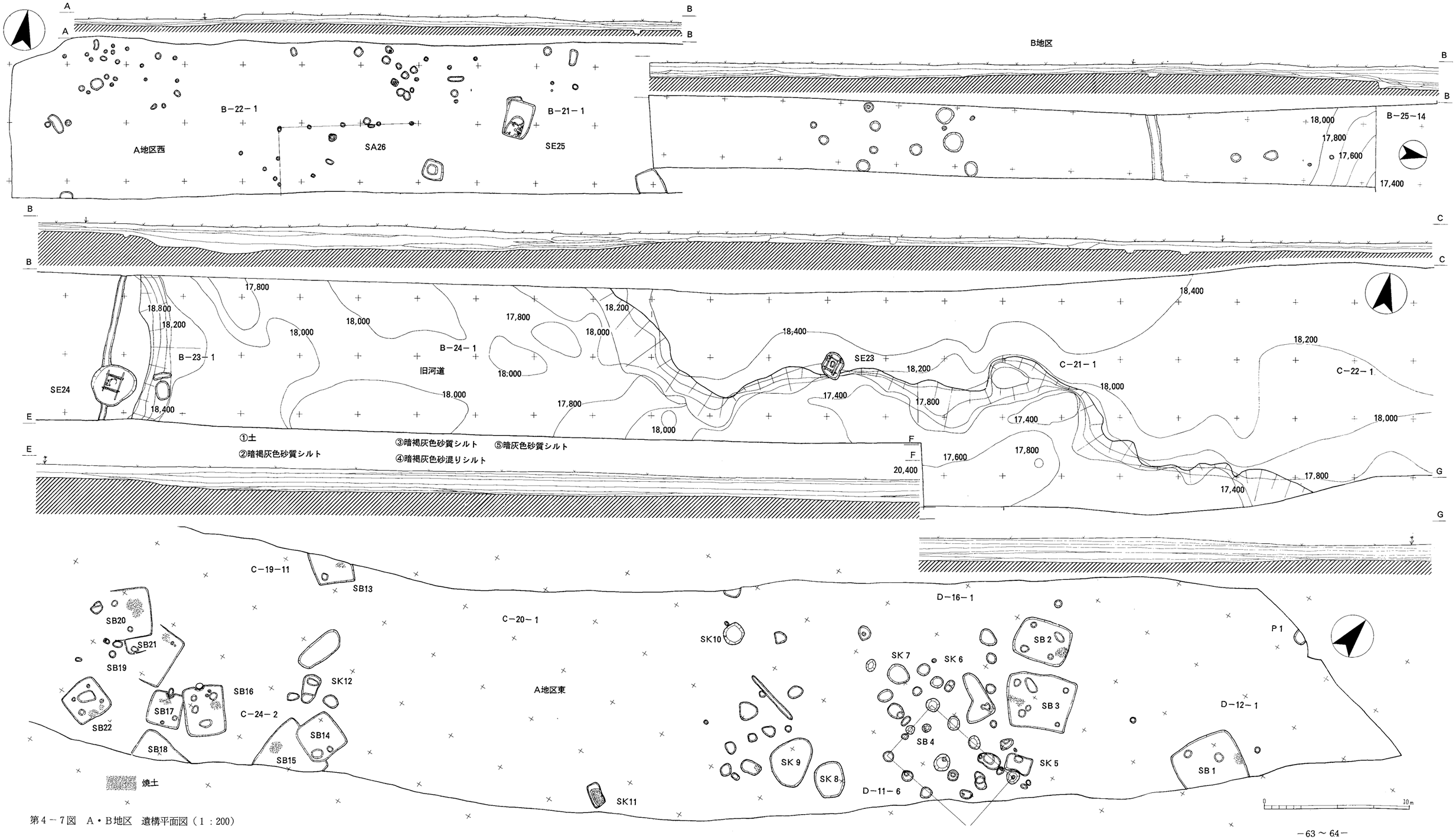
第４－５図　発掘調査区　地区割図（１:2,000）



第４－４図　調査区位置図（１:2,000）



第４－６図　主要遺構配置図（１：1,000）



第４－７図　A・B地区　遺構平面図（１：200）

1．A・B地区

A地区の調査面積は約3,100㎡で、その発掘区は弧状を呈する。基本的な層序は発掘区の東西でかなり異なり、西側の基本的層序は第1層が暗灰色の耕作土であり、第2層が暗褐色及び暗灰褐色土でこれが遺物包含層を形成している。しかし、第1層も第2層も何回かに亘る整地を受けたらしく薄い幾つかの層に分かれており、また撹乱も受けている。第3層は黄褐色シルト層で、これが遺構検出面である。それに対し、東側（旧河道より東）の基本的層序は第1層が暗灰色の耕作土であり、第2層が暗褐色及び暗灰褐色土であり、遺物包含層を形成するが、旧河道北岸では暗灰褐色粘質土の箇所もある。第3層は暗灰褐色砂質土で、これが遺構検出面であるが、発掘区が北東にカーブする箇所あたりから遺構埋土と遺構検出面の判別がやや困難になり、その質の違いによりかろうじて検出が可能になる。

B地区はA地区のほぼ中央から南へのびる排水路部分である。基本的層序は第1層から第2・3層まではA地区と同じであるが、第4層の遺構検出面は黒褐色砂質土及び暗灰褐色粘質土で、旧河道付近は黒褐色砂質土で、発掘区南側では暗灰褐色粘質土である。そして旧河道付近では包含層が数層に分かれている。

A地区で検出された主な遺構は古墳時代後期の竪穴住居11棟、奈良時代中期の竪穴住居1棟、後期の井戸1基、平安時代前期の竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、柱列1条、井戸2基、土坑8基などである。そして発掘区中央よりやや西側で旧河道が検出された。また、遺構ではないが、緑釉陶器の破片を含む多量の出土遺物があった落ちこみがある。

B地区では発掘区南側で比較的大きなピットを数ケ所検出したが、出土遺物がなく、またブロック状の粘質土がその埋土であり、その性格は不明である。また、包含層からの出土遺物も少量であった。

従ってこの項では遺構が集中し、また旧河道が検出されたA地区について述べて行くことにしたい。

1．古墳時代後期

1．竪穴住居

SB1　約⅓を発掘区南壁で切られるため全体規模は不明であるが、南北4.2mの長方形と推定され、深さは8～15cmである。主柱穴は確認出来なかったが、北辺中央部分にカマド跡と考えられる焼土がある。長軸方向はN24°Eと推定される。出土遺物には土師器高杯（2・3）、甕（1）などがある。

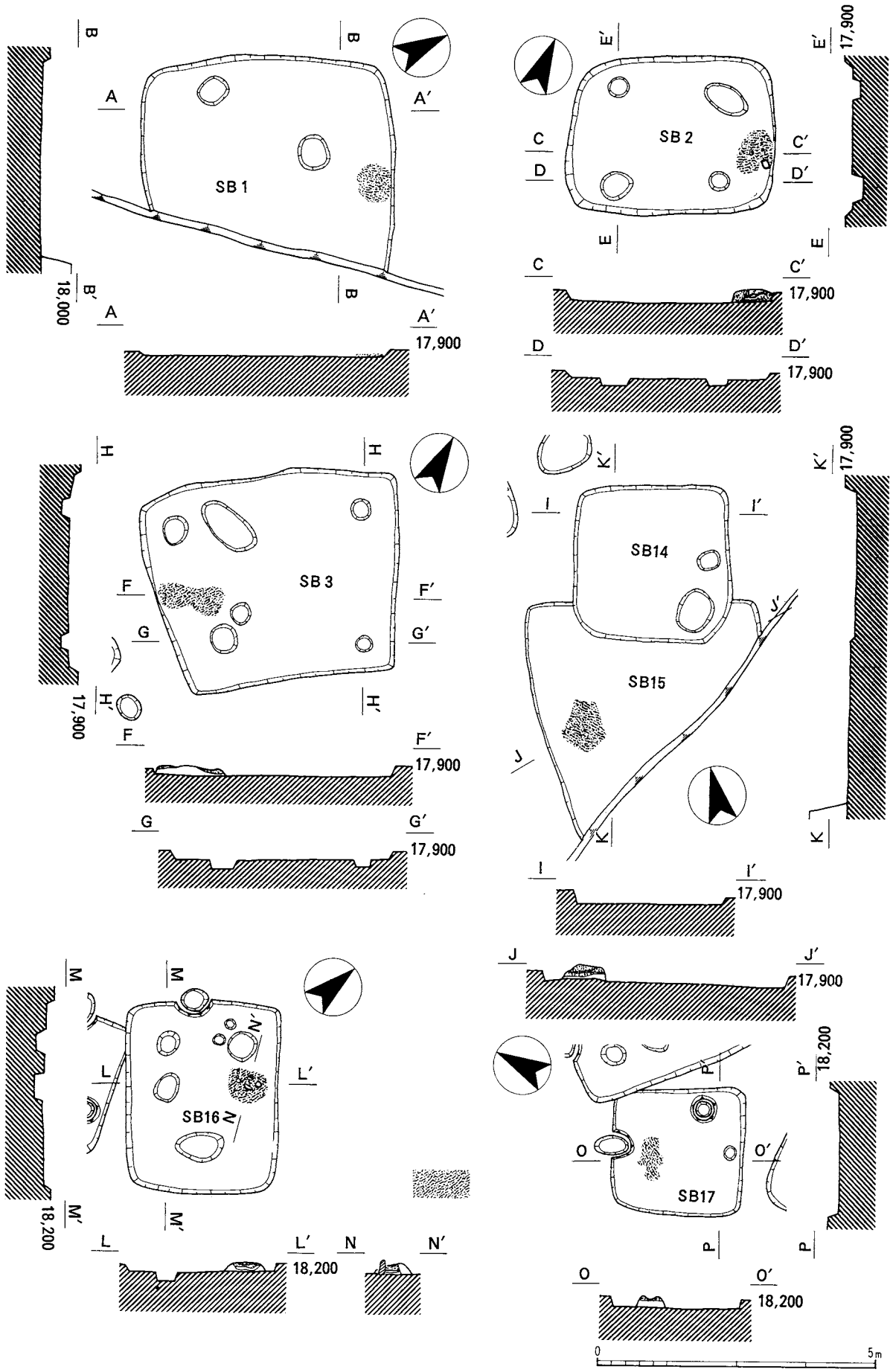
SB2　東西3.7m、南北2.9mの隅丸長方形を呈し深さは10～20cmである。主柱穴は4ケ所確認され、径35～85cmの円形及び楕円形で、深さは床面から10～20cmである。柱間は東西1.8m、南北1.6mであり、東辺にカマド跡があり、焼土中には遺物が含まれ、支石も残っていた。長軸方向はE21°Nである。S字状口縁をもつ土師器台付甕片（4・5）と須恵器杯蓋（6）などが出土している。

SB3　東西3.7～4.7m、南北3.6m、深さ15～20cmの長方形を呈する。主柱穴は4ケ所確認され、径0.3～1.1mの円形及び長円形で、深さは床面から平均15cmである。柱間は東西2.5m、南北2.3mあり、西辺にカマド跡の焼土があり、遺物を含んでいた。長軸方向はE18°Nである。出土遺物は焼土内から土師器甕片（11）があり、その他土師器高杯（7～10）などがある。

SB14　東西2.9m、南北2.9mの隅丸方形で、深さは15～25cmである。主柱穴もカマド跡も確認出来なかったが、南東隅に径1.2～1.6m程で、深さ15cmのピットがあり、貯蔵穴の可能性もある。長軸方向はN13°Eで、出土遺物は土師器甕片など少量である。

SB15　発掘区南壁で切られているため全体規模は不明であるが、東西4.2m、深さ12～15cmの長方形を呈すると推定される。主柱穴は確認出来なかったが、西辺付近に焼土が残りカマド跡と考えられる。SB14が一部を切っている。長軸方向はN14°E。土師器高杯（14～16）S字状口縁台付甕片（12）、土師器甕片（13）などが出土している。

SB16　東西2.8m、南北3.5m、深さ13～15cmの長方形を呈する。主柱穴らしき2ケ所のピットはあるが不明といわざるを得ない。東辺にカマド跡の焼土があり、土器を含み、支石も残っていた。長軸方向はE40°S。土師器高杯（19）、須恵器杯身（17）、



第4－8図　SB 1～3・14～17 実測図（1：100）

杯蓋（18）などが出土している。

ＳＢ17　東西2.3m、南北2.4m、深さ15～20cmの方形である。主柱穴は確認出来なかった。カマド跡と考えられる焼土が北辺近くにある。長軸方向はＮ29°Ｗ。出土遺物には須恵器甕（22）、土師器高杯（20）、甕（21）などがある。

ＳＢ18　発掘区南壁でその殆どを切られ全体規模は不明であり、主柱穴の一部も検出出来なかった。深さは10cmで、推定だが長軸方向はＥ8.5°Ｎと考えられる。出土遺物は少量だが、土師器甕片などがある。

ＳＢ19　遺構の残りが悪く一部しか検出出来なかったが、南北3.9m、深さ５～10cmの方形と考えられる。主柱穴は確認は出来なかったが、北辺にカマド跡と考えられる焼土が残り遺物を含んでいる。しかし、出土遺物のほとんどは小破片が多い。推定長軸方向はＮ12°Ｗである。

ＳＢ20・21　ＳＢ20も削平のため残りが悪く全体規模は不明であるが、北東辺3.4m、深さ５～８cmの方形と推定される。これも主柱穴は確認出来なかったが、北東辺近くにカマド跡と考えられる大きな焼土の塊りがあり多量の土器片が含まれている。土師器杯（23・24）などがあるが、その多くは小破片が多い。長軸方向はＮ43°Ｅと推定される。ＳＢ21はその切り合いからＳＢ20より若干古いと考えられるがごく一部を検出したのみで詳細は全く不明である。ＳＢ19～21は相互に切り合い関係にあると考えられる。

２．奈良時代中期～後期

ＳＢ22　東西2.7m、南北2.7m、深さ５～10cmのほぼ正方形に近い形を呈する竪穴住居である。主柱穴は４ケ所確認され、径20～45cmの円形及び楕円形で深さは10～20cmであり、柱間は東北・南北とも1.5mである。カマド跡は東辺にあり、焼土中には遺物を多く含んでいた。出土遺物は土師器杯（25）、皿（26）、甕（28～31）、盤（27）などが出土している。長軸方向はＮ10°Ｅである。

ＳＥ25　発掘区西側で検出された井戸である。井戸掘形は１段目東西1.85m、南北2.55mの長方形で、２段目は東西1.18m、南北1.20m、深さは井戸底部までは1.10mである。井戸側としての木組みを持っているが、かなり大きさの違う木材をうまく組み合わせていたようであり、縦板と横板の組み合わせが基本の様であるが残りが悪く、その詳細な組み合わせ方法は不明である。井戸内法は推定66cm程度であり、真子は不明で曲物の埋設はなかった。木組内側埋土中から土師器甕（55～57）などが出土している。

３　平安時代初期～前期・後期

１．竪穴住居・掘立柱建物・柱列

ＳＢ13　竪穴住居、発掘区北壁で切られ全体規模は不明だが南東辺2.6m、深さ10～20cmの方形と推定される。主柱穴は確認されなかった。北東辺付近に焼土があり、カマド跡と考えられる。長軸方向はＮ40°Ｅ。出土遺物は土師器杯（32）などがあるが少量である。

ＳＢ４　掘立柱建物。４×２間の東西棟と推定される。桁行7.4m、梁行4.6m、柱間は桁行1.85m、梁行は2.3mの等間である。柱掘形は径0.55～1.6mの円形及び楕円形で比較的大きく、深さは、35～55cmである。北桁行東端、南桁行西から２列目の柱掘形に柱痕跡が残る。棟方向はＥＷ０°。出土遺物は土師器杯・皿・甕片などがある。

ＳＡ26　Ｌ字形の柱列である。柱掘形は径20～40cmの円形及び楕円形で、深さは11～23cmと規模は小さい。柱間は東西2.1m＋2.3m＋2.4m＋2.3m、南北2.1m＋1.8mと不揃いである。出土遺物は土師器杯片などがあるが量としては少ない。

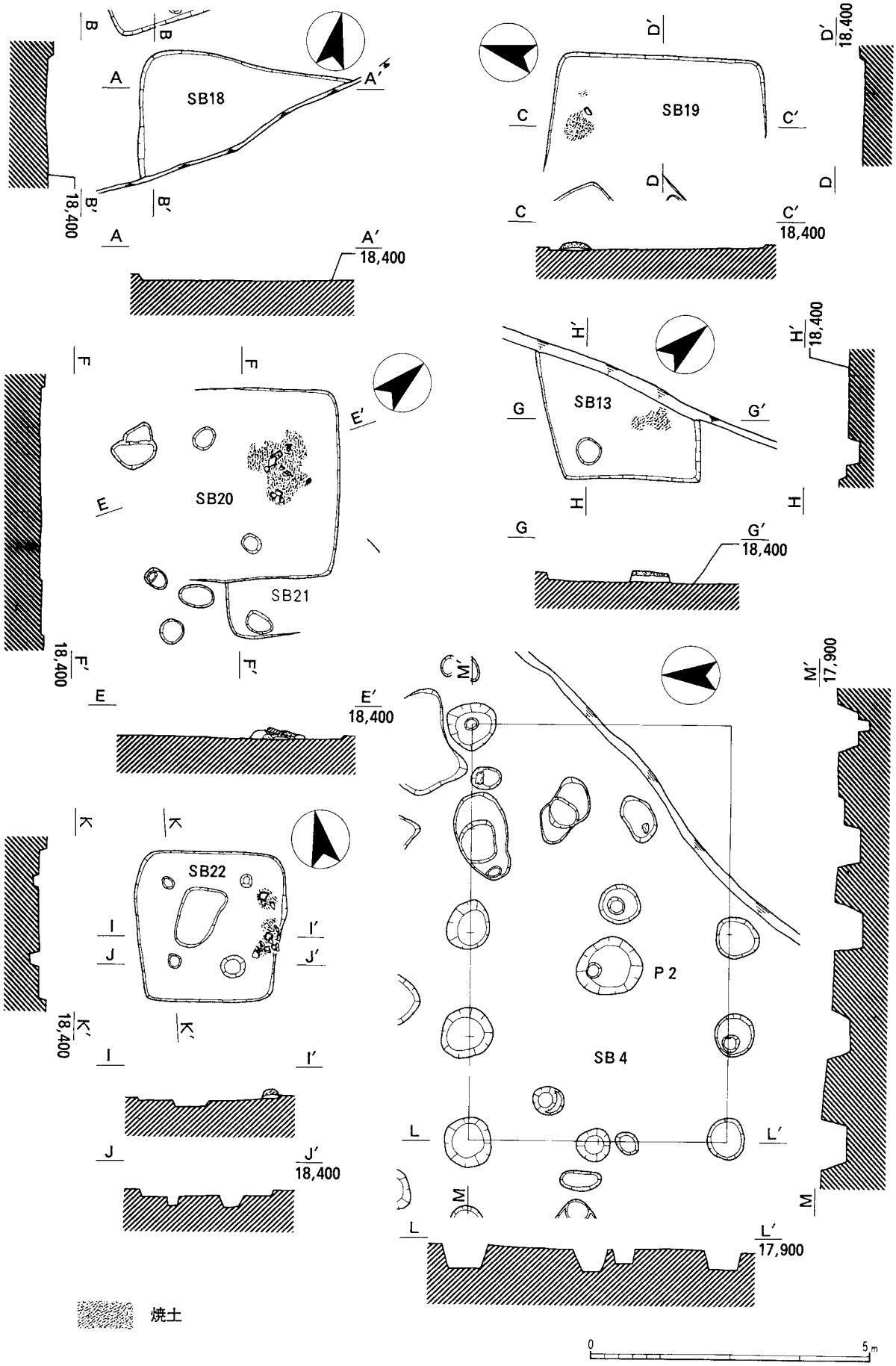
２．土坑

ＳＫ６　東西3.4m、南北2.1mの逆Ｌ形で深さは16～37cmである。東隅に焼土があり、その周辺から瓦片が少量出土した。その他土師器杯（33）が出土している。

ＳＫ８　一辺2.0～2.5mの丸味を帯びた方形を呈す。深さは18～25cmと浅い。埋土中から土師器杯（34・35）、甕片（36）を含む多量の土師器細片が出土している。

ＳＫ９　長径3.5m、短径2.1m、深さ10～20cmの楕円形を呈し浅い。ＳＫ８と同様に土師器杯（37）を含む多量の土師器細片が出土している。

ＳＫ11　一辺0.85～1.6mの長方形で深さは９～20cmと浅いが、焼土を多量に含んでいる。出土遺物は土師器甕片など少量である。



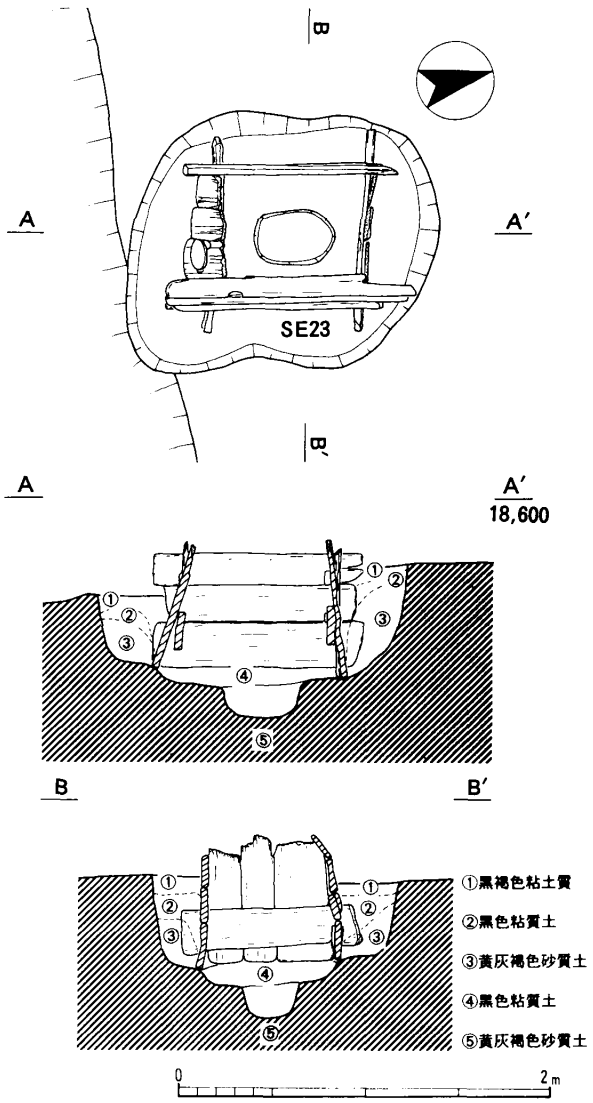
第4－9図　SB 4 ・13・18～22 実測図（1 ：100）

ＳＫ10　径1.4～1.6ｍの円形を呈し、深さは37～42cmである。埋土中に焼土を若干含み、軒平瓦（38）など多量の瓦片が出土している。後期と考えられる。

3．井戸

ＳＥ23　旧河道北畔で殆ど流れと接するのではないかと考えられる程の箇所で検出され、井戸としては小規模なものである。井戸掘形は東西1.38ｍ、南北1.64ｍで真子底までの深さは76cmと浅い。真子は長径44cm、短径30cm、深さは18cm、曲物の埋設はなかった。掘形内には井戸側としての木組みが比較的良好な形で残っていた。その構造であるが、掘形底部に相欠きによる板材を組み合わせ、その外側に南北に縦板を並べ、東西は横板を積み重ねている割合単純なものである。横板も縦板もやや内側に向かって傾いているためにややばらつきがあるが、東西70cm、南北76cm程度の内法と考えられる。井戸枠材として使用されている木材は様々で規格性がないのが特徴である。横板などは東側ではその幅や厚さもまちまちであるし、縦板も幅などにややばらつきがある。また転用材を多く使用してあり、横板・縦板とも建築部材が転用されたらしく所々にほぞ穴や切り込みが見られ、そして補強材として円形や長円形の曲物底などが使用されている。井戸掘形の埋土は下層から黄灰褐色砂質土（これは地山と似通っている）、黒色粘質土、黒褐色粘質土にわかれる。また井戸枠内の埋土は黒色粘質土で、ヘドロ状に近いものであり、廃棄時に一挙に埋まった可能性が強い。井戸枠内からの出土遺物には、約½弱の遺存しかないが「正」と外底面に墨書された土師器杯（45）をはじめ、土師器杯（42～44）、黒色土器（46）、さらに祭祀用木製品としての斎串（486～489）などをはじめ６点が出土している。

ＳＥ24　旧河道の西岸でＳＥ23と同じように川に接するような箇所で検出された井戸である。井戸掘形は径2.6～3.06ｍの不正な楕円形を呈し、真子底までの深さは1.5ｍである。真子は長径52cm、短径42cmの楕円形で深さは10cm程である。真子には曲物が埋設されてあり、井戸底には拳大の川原石が20個程度敷かれてあった。掘形内には井戸側としての木組みが中・下部を中心に比較的良好な状態で残っていた。その構造であるが、これもＳＥ23と同様に東西に横板、南北に縦板を組み合わせたものであるが、ＳＥ23とは異なり、横桟の補強によるさらに強い構造となっている。まず最下部であるが、東西の横板に穴を穿ち、そこに角材の横桟を入れ、さらに２段目・３段目の横板をつなぐ様な形で相互に相欠きを入れた箇所にやや幅の広い角材を入れて補強し１～３段までを構成する。そして、最下部の横桟の上に南北の縦板を乗せ、２・３段目をつなぐ横桟にそわせて立て、さらにその後にもう一枚の縦板を並べ補強するという形を取っている。横板は下から４段目までが残るが、前記の様な横板と横桟の組み合わせがあったかどうかは不明である。井戸枠材はこれもかなり転用材が使用されている。埋土は井戸掘形が黒褐色粘質土であり、殆ど上層、下層とも変化が見られない。さらに井戸枠内の埋土もヘドロ状の黒色

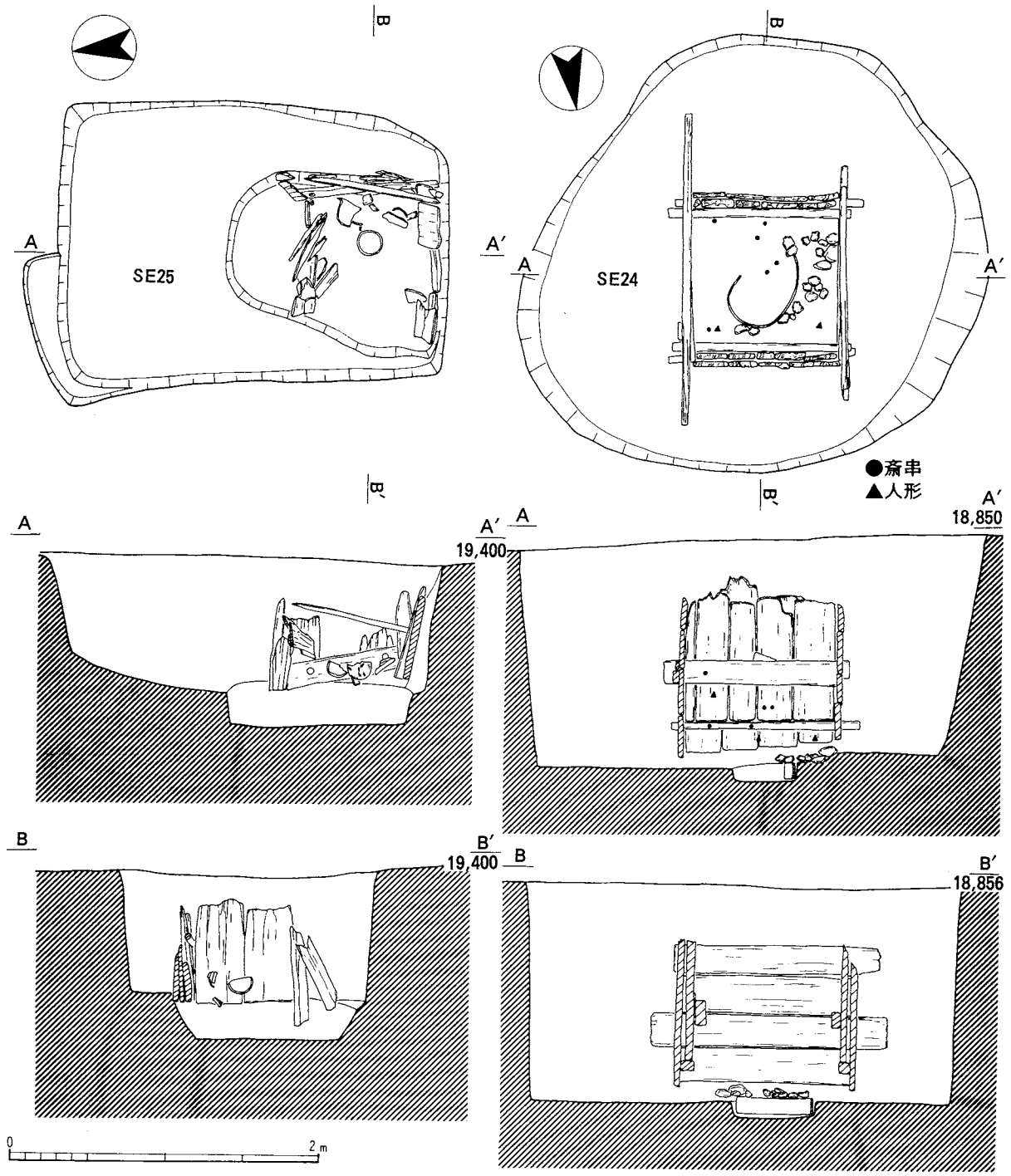


第４－10図　SE23 実測図（１：40）

土でやや粘質のものであり、これも上・下層とも余り変化は見られない。さらに井戸枠内の埋土もヘドロ状の黒色土でやや粘質のものであり、これも上・下層とも余り変化は認められない。埋土中には拳大の川原石や曲物底、丸木杭状木製品などが一括して入っており、廃棄は短時間に行われた可能性もある。出土遺物として、堀形内から土師器皿（48）、杯（49）などが、井戸枠内からは土師器杯（50）、灰釉陶器の底部（52・53）などが出土している。そして、祭祀用木製品である人形（466～467）が2点、また斎串が掘形内から（478～481）、井戸枠内から（468～477）など計14点が出土している。

4．旧河道

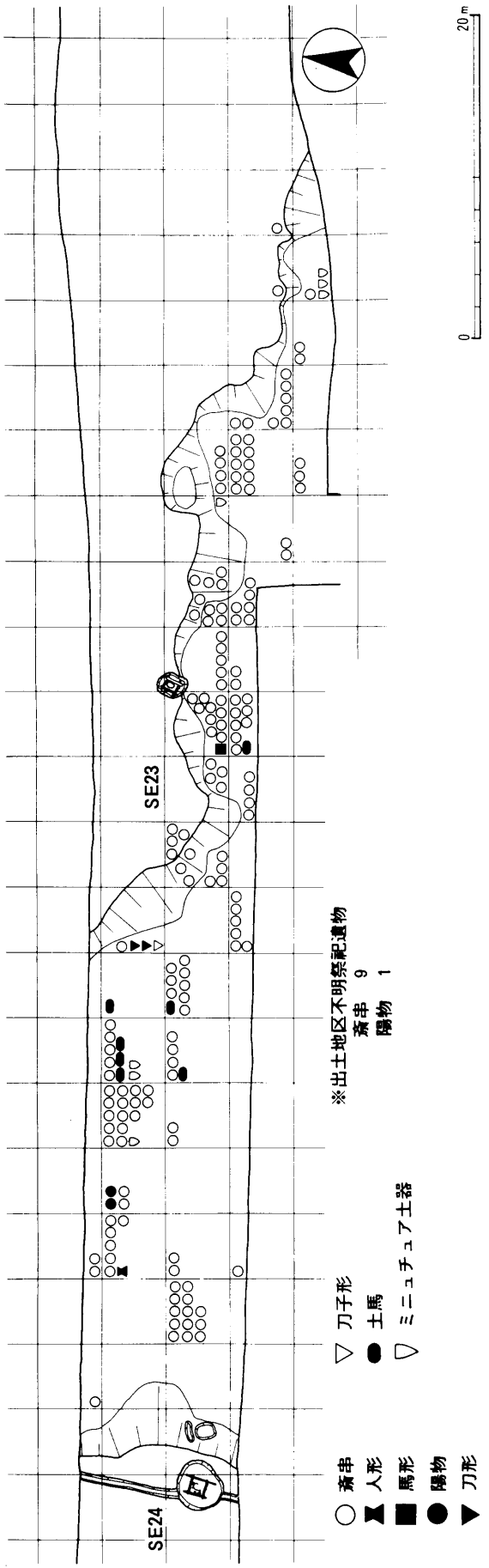
発掘区中央よりやや西でB地区と接する箇所周辺を中心に、西から東へ流れる旧河道が検出された。旧河道の規模は川幅がはっきりと解る程発掘区が広



第4－11図　SE24・25 実測図（1：40）

くはないため推定の域を出ないが、B地区とA地区との接点の箇所での広さから、川幅は5～7m程度と推定され、深さは遺構検出面から1～1.5mである。流れは井戸SE24から西へ8～10mの南壁にその痕跡が見られることから、そして河道内の様子などにより或る程度復元が可能である。流れが発掘区南壁に消えて行く箇所には多量の葉のついた木の枝などが検出されているが、単に流れにより溜まったものなのか、所謂護岸のための「しがらみ」なのかは不明といわざるを得ない。旧河道の埋土は凡そ耕作土も含め16層に分かれる。第5層のシルト質砂礫土から最下層の砂礫までの間には平安時代を含むそれ以前の遺物が大量に含まれ、第3層の砂質シルト、第4層の砂混りシルトには平安時代から中世に至る遺物が多量に含まれている。埋土の堆積状況とその質、そして含まれる木製品を含む大量の遺物などから考えれば、流れはそれほど急ではなく、比較的ゆっくりとした流れであった可能性が強い。従って旧河道の土砂の堆積はさほど大きな洪水などにより埋まったのではなく、時をかけて埋まったと考えられはしないだろうか。

旧河道からの出土遺物は大量である。殊に第3層から川床までの間には木製品や土器類がぎっしりと詰まっていたといっても過言ではない。土器類もその種類が豊富である。しかし、下層の砂礫層周辺は流れの具合によって新旧の土器が入り混っている場合もある。主なものを挙げれば、細片ではあるが縄文土器、弥生時代後期の壺、古墳時代の土師器甕（S字状口縁台付甕含む）、土師器椀、高杯のほか、須恵器杯、杯蓋、飛鳥時代から平安時代にわたる土師器甕・杯・皿・須恵器長頸壺、さらには墨書土器など枚挙にいとまがなく、その他、石鏃や勾玉なども埋土中から出土している。木製品も大量で、建築部材、曲物など日用雑器類、また紡織具、農具など道具類、横櫛など服飾具など実に豊富で種類も多い。この旧河道からの出土木製品で特筆すべきは多量の祭祀用木製品である。人形、斎串（全体で破片も含めば169点）、陽物、馬形、刀形、刀子形などと種類も多い。さらに祭祀用土製品も土馬、ミニチュア土器などがある。木簡もこれらの木製品や土器類と伴に1点ではあるが出土している。　（河瀬信幸）



第4－12図　旧河道 祭祀遺物分布図（1：400）

2．C地区

C地区は排水路部分が調査対象であったが、深長古墳の確認によりその下層地域も含めることとなった。C地区も東西に細長い発掘区のため所々土層にも変化が見られるが基本的には3層に分かれる。第1層は暗灰色の耕作土、第2層は、暗褐色粘質土でこれが遺物包含層を形成し、第3層が黄褐色シルト上の遺構検出面である。深長古墳周溝部周辺、特に西側部分は第1層と第2層の間は水田整地のためと考えられる土層が幾層にも分かれている。

検出された遺構の主なものは、弥生時代中期後半の竪穴住居4棟、土坑1基、古墳時代前期の方形周溝遺構1基、後期の溝1条、奈良時代前期の掘立柱建物1棟、後期の掘立柱建物1棟、竪穴住居1棟、平安時代初期の竪穴住居2棟、土坑1基、溝1条、前期の竪穴住居1棟、掘立柱建物3棟などがあり、そしてその他として時期が限定しがたい溝が6条ある。しかし、これらの溝は発掘区の幅が狭いためその性格をうかがい知ることは困難である。

1　弥生時代中期後半

1、竪穴住居

SB28　発掘区北壁で切られ全体規模は不明であるが、東西2.5m以上、南北1.7m以上で深さは5～10cmである。検出された範囲が狭いため詳細は不明である。出土遺物はごく少ない。

SB29　一辺2.55mの隅丸方形と推定される。深さは北東辺付近で約10cmと遺構としての残りは良くない。主柱穴は3ヶ所検出されたが、炉跡は確認出来なかった。長軸方向はE40°N、出土遺物には壺・甕片などがある。

SB30　発掘区東壁で切られ全体規模は不明だが南北2.6m、東西1.9m以上、深さ26～47cmの方形と推定されるがその規模としては比較的小さい。検出された範囲が狭いため詳細は不明であるが、長軸方向はE45°Nと推定される。出土遺物は少なく壺の小片などがあるにすぎない。

SB31　一辺3.75～3.95mのほぼ正方形を呈し、深さは5～15cmと浅い。主柱穴は確認出来なかったが南東辺やや北寄りに焼土があり、炉跡の可能性がある。また北隅付近に径0.8～1.2mの小土坑があり貯蔵穴かも知れない。長軸方向はE42°N。出土遺物は壺・甕片などがある。

2．土坑

SK32　長径1.3m、短径80cm、深さ10～20mの小土坑である。壺片などが比較的多く出土している。

2　古墳時代

SX41　発掘区北壁に切られ全体規模は不明であるが、溝の東西間の距離は、外側約8.0m、内側約6.8mの方形周溝と推定される。溝の幅は平均50cmで、深さは平均20cmである。溝の南西隅から二重口縁壺（268）が出土している。前期に属すると考えられる。

SD 56　SX41と同じく全体規模は不明であるが、幅40cm、深さ10～15cmの溝であり、北西に向かって伸びると考えられる。土師器高杯の杯部（269）が出土しており、後期に属すると考えられる。

3　奈良時代

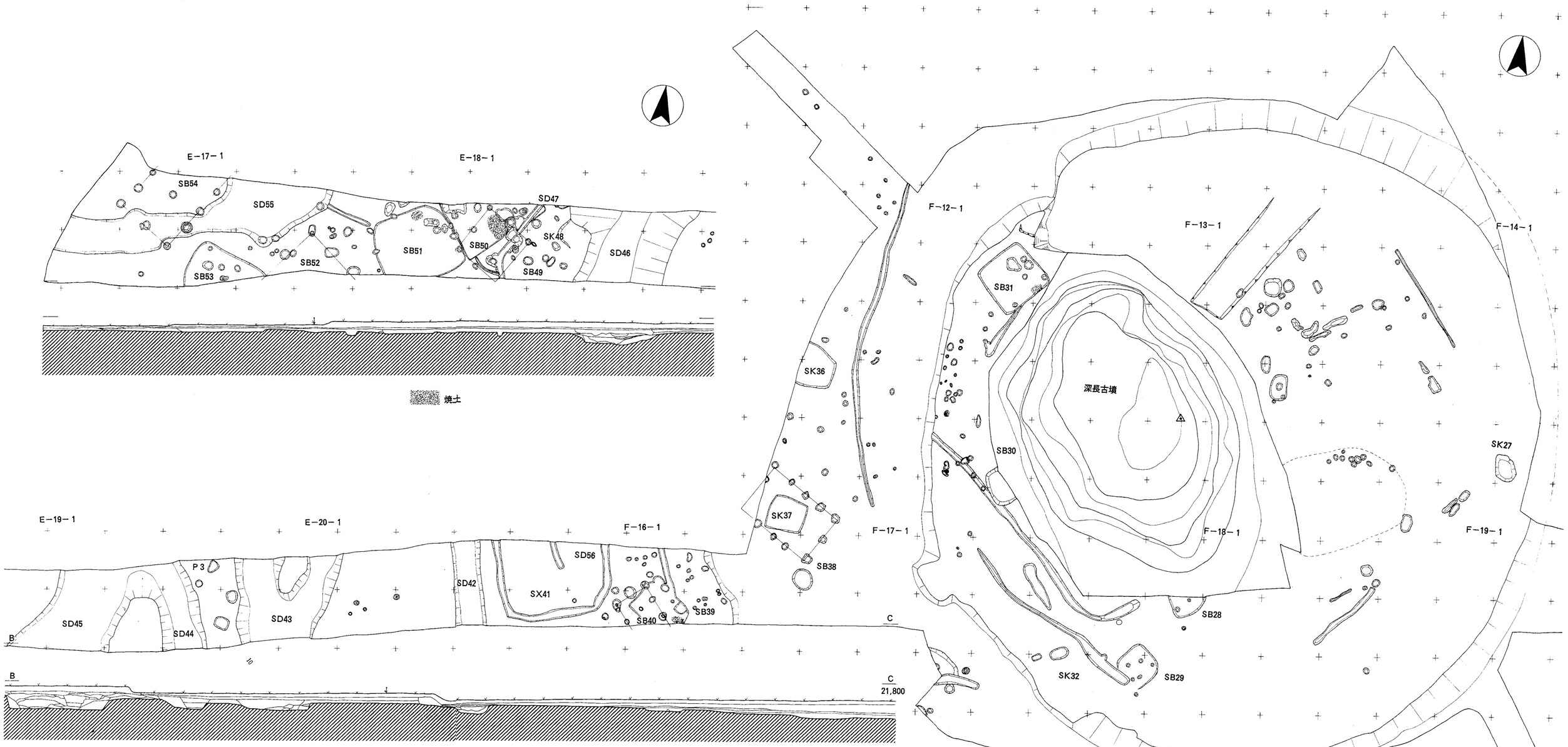
1．竪穴住居

SB50　発掘区北壁で切られ全体規模は不明であるが、南東辺は6.5mを測り、深さは10～15cmと浅い。主柱穴は確認されなかったが、南東辺にカマド跡と考えられる焼土がかなり広範囲に広がっていた。棟方向はN38°W。出土遺物には土師器皿（271）、甕（272～275）、須恵器杯（276）などがある。これも後半頃と考えられるが、掘立柱建物との関係はSB49→SB50と考えられる。

2．掘立柱建物

SB38　4×2間の東西棟の掘立柱建物。桁行5.6m、梁行3.6m、柱間は桁行1.5m＋1.3m＋1.3m＋1.5mの不等間で、梁行は1.8mの等間である。柱掘形は径40～60cmの楕円形、また一辺45～75cmの不整な方形で不揃いであり、深さは15～30cmである。棟方向はN31°E。出土遺物には土師器杯などがある。前期頃と考えられる。

SB49　2×2間の南北棟と考えられる掘立柱建物。桁行3.6m、梁行3.6m、柱間は桁行1.8m、梁行も1.8mの等間である。柱掘形は径25～45cmの円形



第４－13図　C地区　遺構平面図（１：200）

及び楕円形で深さは15～25cmである。棟方向はN31°E。土師器皿（49）などが出土しており、後半頃と考えられる。

4　平安時代初期～前期

1．竪穴住居

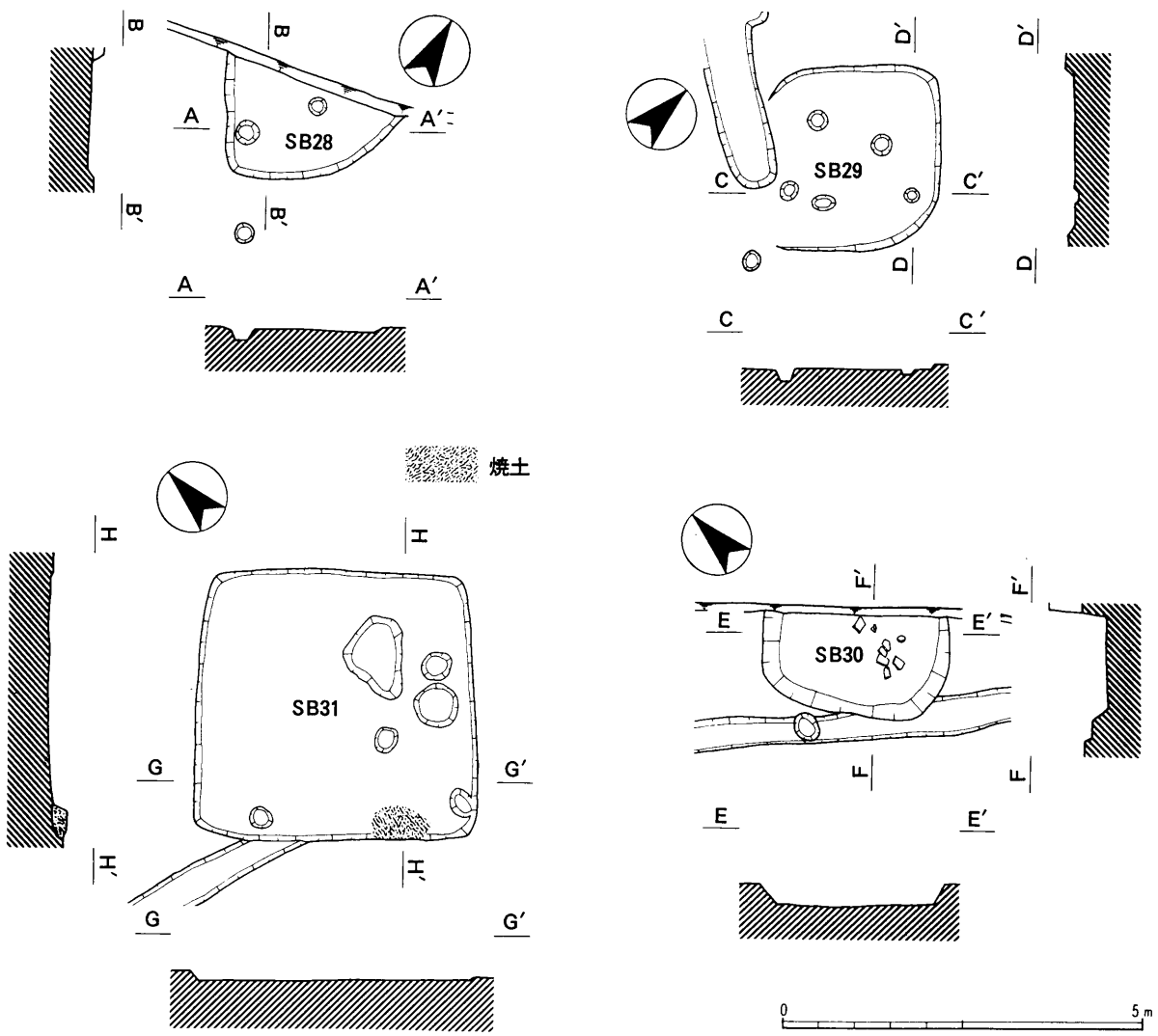
ＳＢ39　東西2.9m、南北3.5mの長方形と推定され、深さは14～17cmである。主柱穴の確認はなかったが、南辺に焼土がありカマド跡と考えられ遺物が多く含まれていた。また南東隅に一辺75cmで深さ床面から７cmの貯蔵穴らしきピットを伴う。長軸方向はN41°W。出土遺物には土師器杯（277・278）・高杯（279）・甕（280・281）、須恵器杯（282）などがある。

ＳＢ51　一辺5.0～5.5mのほぼ正方形に近い竪穴住居である。深さは５～10cmと浅く、ＳＢ50と同様にかなり削平を受けている。主柱穴は確認されなかったが、北西辺に焼土が残りカマド跡と考えられる。北隅付近に一辺0.4～1.05mの長方形のピットがあり、貯蔵穴かも知れない。長軸方向はN38°W。出土遺物は土師器片が多く、その殆どは細片である。

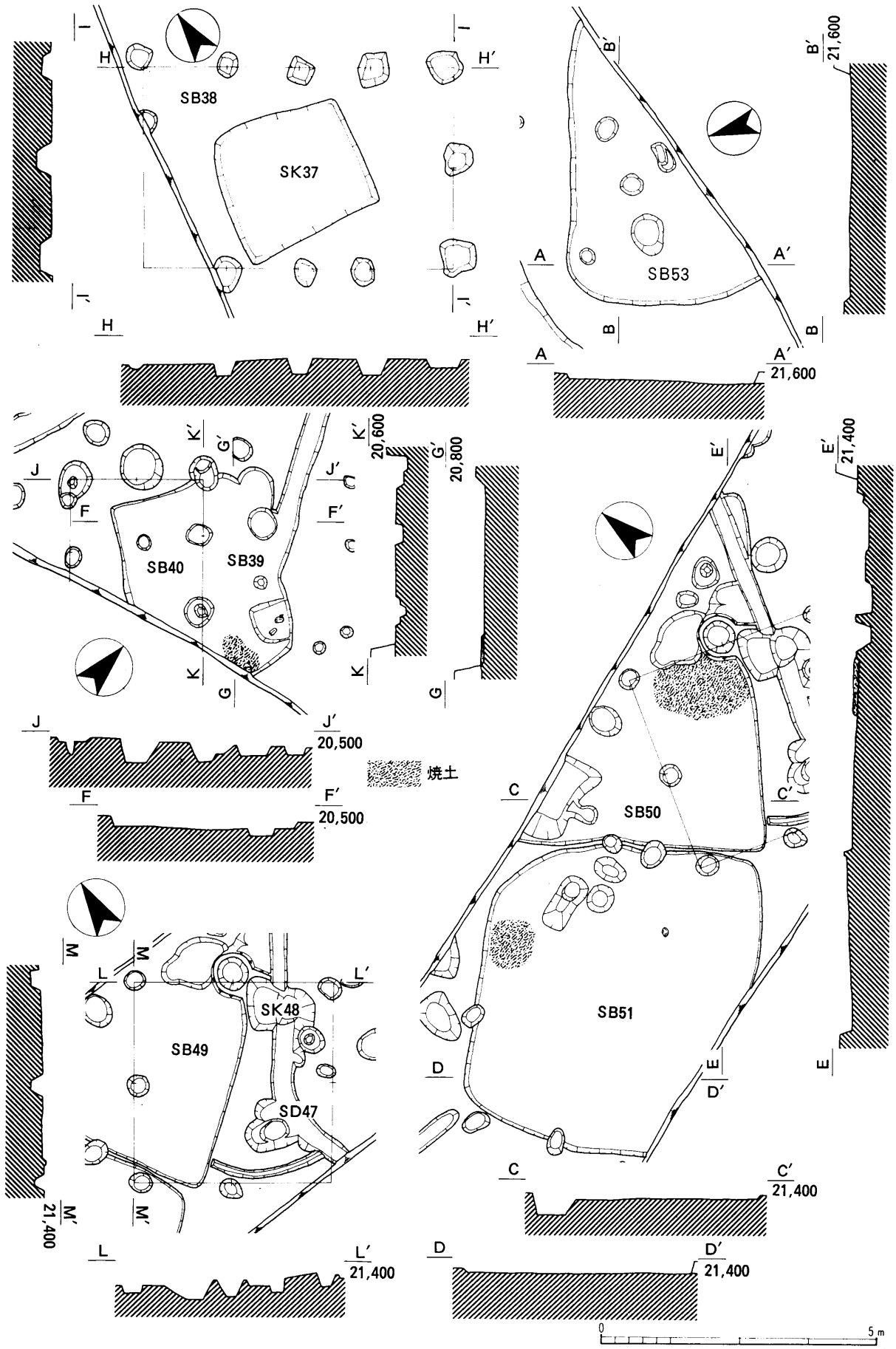
ＳＢ53　発掘区南壁に切られ全体規模は不明である。深さは10～15cmであるが、その他の詳細についても不明である。長軸方向はN20°E と推定される。出土遺物は土師器片だが量としては少ない。

2．掘立柱建物

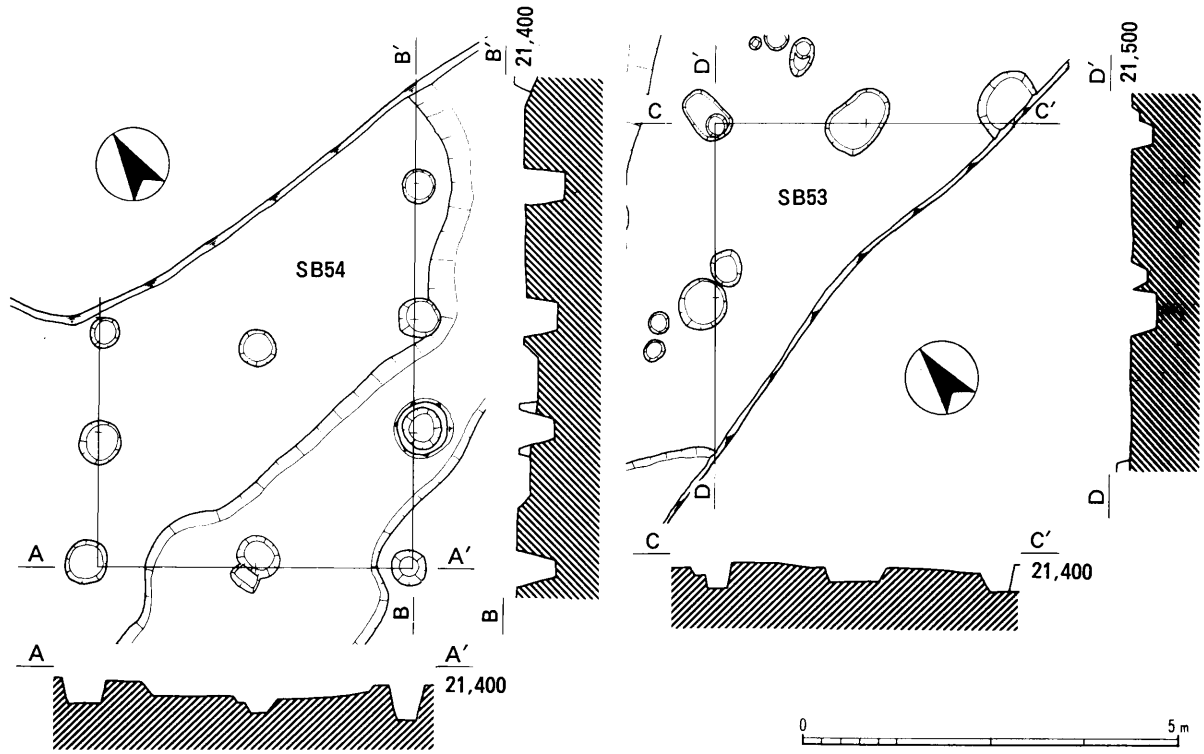
ＳＢ40　全体規模は不明だが、２間×２間以上の南北棟と推定される。桁行2.3m以上、梁行2.4mで柱間は東桁行1.0m＋1.3m以上、西桁行1.3mの不等間、北梁行は1.2m＋1.2mの等間である。柱掘形は径30～90cmの円形及び楕円形で深さは30～40cmである。そして北西隅、東桁行北から３列目の柱掘形に



第４－14図　SB28～31 実測図（１：100）



第4－15図　SB38～40・49～51・53, SK37・48 実測図（1：100）



第4－16図　SB53・54 実測図（1：100）

柱痕跡が残る。棟方向はN50°W。出土遺物には土師器細片があるのみである。竪穴住居ＳＢ39と重複するが、若干ＳＢ39が新しい。

ＳＢ52　これも全体規模は不明だが、2間以上×1間以上で桁行4.0m以上、梁行4.6m以上である。柱間は桁行2.0m、梁行2.3mの等間と推定される。柱掘形は0.45～1.0mの円形及び楕円形で深さは20～35cm、北隅に柱痕跡が残る。棟方向は東西棟と推定すればN38°W。土師器杯片などが若干出土している。

ＳＢ54　3間以上×2間の規模をもつ南北棟と推定される。桁行5.4m以上、梁行4.2mで、柱間は桁行1.8m、梁行2.1mの等間である。柱掘形は径40～60cmの円形で深さは35～50cmである。棟方向はN33°E。出土遺物は土師器片などでさほど多くはない。ＳＤ55と重複するが、ＳＢ54が新しい。

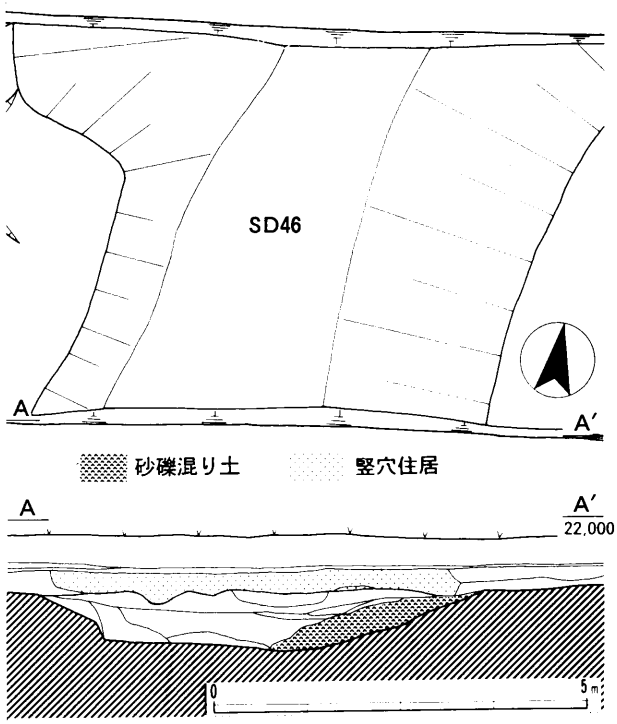
5　その他の遺構

溝が、それも比較的規模の大きいものが数条南北に走っている。出土遺物も時期差がかなりある。

ＳＤ42　幅平均2mで深さ30～45cmである。出土遺物は下層より弥生時代中期の土器片が、上層からは平安時代前期の土師器片が出土している。

ＳＤ43　幅平均6.0mで深さ40～70cm程度である。発掘区中央部で2つに分かれる。下層の砂質土から時期は不明だが縄文土器細片が出土しており、遺物は平安時代までである。

ＳＤ44・45　ＳＤ44は幅2.8m、深さ50～60cmで北東に流れる。ＳＤ45は幅平均5m、深さ0.8～1.0mで北へ流れる。ＳＤ44の埋土は砂礫混りであり、ＳＤ45は下層では砂礫や細かい砂で、弥生時代中期頃



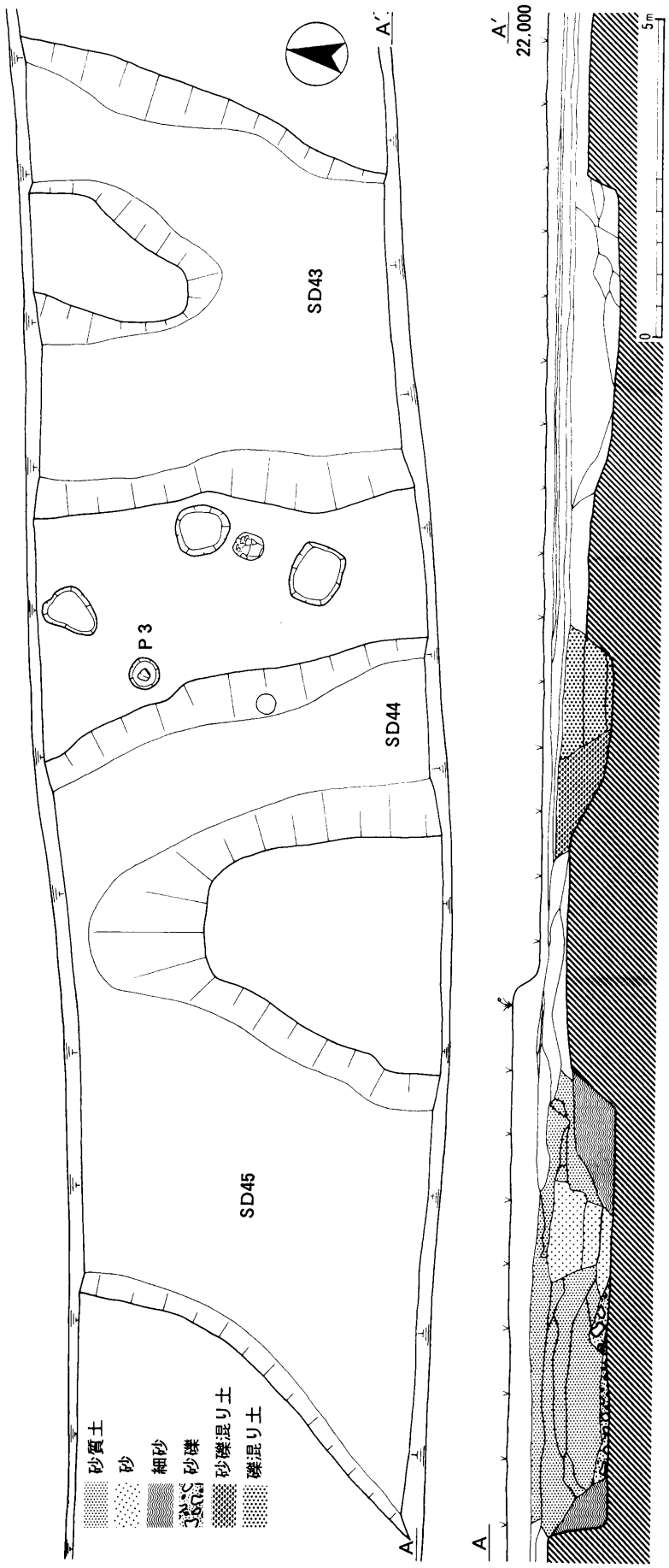
第4－17図　SD46 実測図（1：100）

の遺物が含まれており、ＳＤ44では砂礫混り土の中に古墳時代の遺物が混じっている。両者は自然流路と考えられ、ＳＤ45では流れの部分と考えられる箇所に砂が３層にわたって堆積している。ＳＤ44からは須恵器平瓶（285）、杯身（284）、土師器器台（283）などが、ＳＤ45からは弥生時代後期の壺片（286）、甕片（287）などが出土している。

ＳＤ46　幅5.6～7.7m、深さ60～90cmで北に走る。埋土には砂礫まじりなどもあり、自然流路とも考えられる。溝の上面の土層断面には竪穴住居と考えられる断面が検出され、焼土も一部に認められた。そうだとすれば、溝が埋まった後に竪穴住居が建てられたことになる。埋土からは古墳時代にわたる遺物が出土している。

ＳＤ55　幅1.3～7.3m、深さ20～30cmで西から東へ走る。ＳＢ54と重複するが、ＳＢ54の方が新しいため、ＳＢ54を 建てる以前に埋まったことになる。出土遺物は弥生時代中期の壺片（288）、後期の高杯脚部（289）、平安時代の土師器杯片などがある。

（河瀬信幸）



第４－18図　SD43～45 実測図（１：100）

3．D・E地区

古道確認のためのトレンチであり、明確な痕跡を検出することが出来なかったが、古墳時代前期、奈良時代中期、平安時代中期頃の遺構が検出された。

1　D地区の遺構

ＳＤ１　幅80cm、深さ20cmで北西～南東に走る溝である。出土遺物が殆どなく時期は不明であるが、遺跡北方に広がる条里方向とほぼ平行する。

ＳＫ２　全体規模は不明だが、深さは50～70cmであり、平安時代の中頃の土師器片が出土している。

2　E地区の遺構

1．竪穴住居

ＳＢ５　一辺6.0～6.3mのほぼ正方形の竪穴住居で、深さは10～15cmである。主柱穴は確認されなかったが、北辺やや東寄りに焼土がありカマド跡かと考えられる。長軸方向はE17°N。出土遺物にはＳ字状口縁台付甕などがある。ＳＢ５の下にＳＫ４が検出されている。古墳時代前期と考えられる。

2．掘立柱建物

ＳＢ７　全体規模は不明だが、２間以上×１間以上の東西棟と推定。桁行3.4m、梁行2.1m以上で、柱間は桁行1.7mの等間である。柱掘形は径60～70cmの円形、一辺60～70cmの方向で不揃いで、深さは20～30cmである。棟方向はE13°N。出土遺物は土師器杯片、須恵器杯蓋片などが少量出土している。奈良時代中頃と考えられる。

3．土坑

ＳＫ２　長径2.2m、短径1.8m、深さ20cmのピーナッ形を呈する。土師器甕片などが出土している。古墳時代前期と考えられる。

ＳＫ４　ＳＢ５の下から検出された。一辺2.6mのほぼ正方形で、深さは40～60cmである。Ｓ字状口縁台付甕片、土師器甕片などが出土している。古墳時代前期と考えられる。

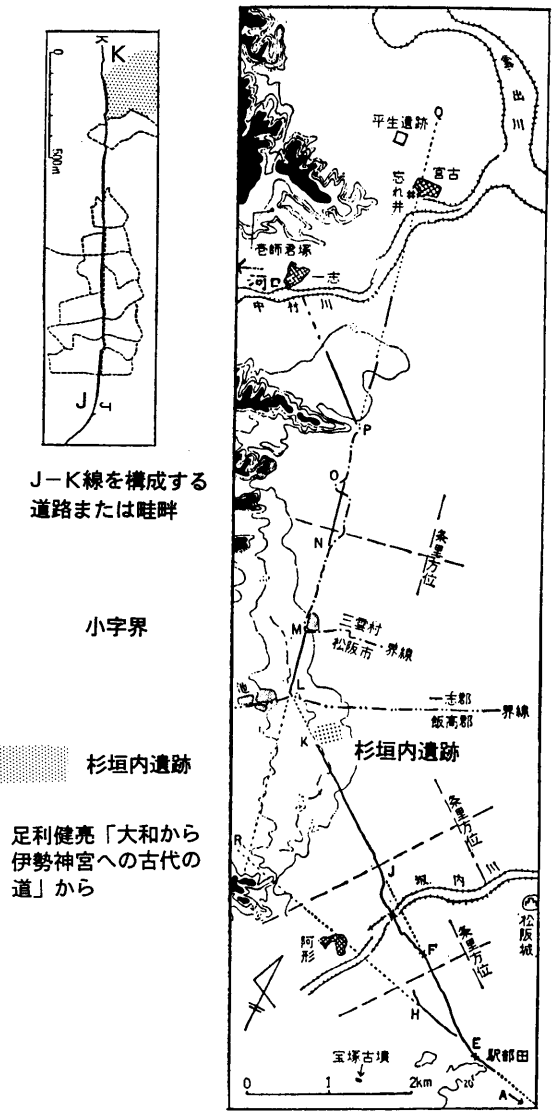
ＳＫ６　長径2.4m、短径1.2mの長円形を呈し、深さは20～40cmである。出土遺物にはＳ字状口縁台付甕片などがある。古墳時代前期と考えられる。

4．　溝

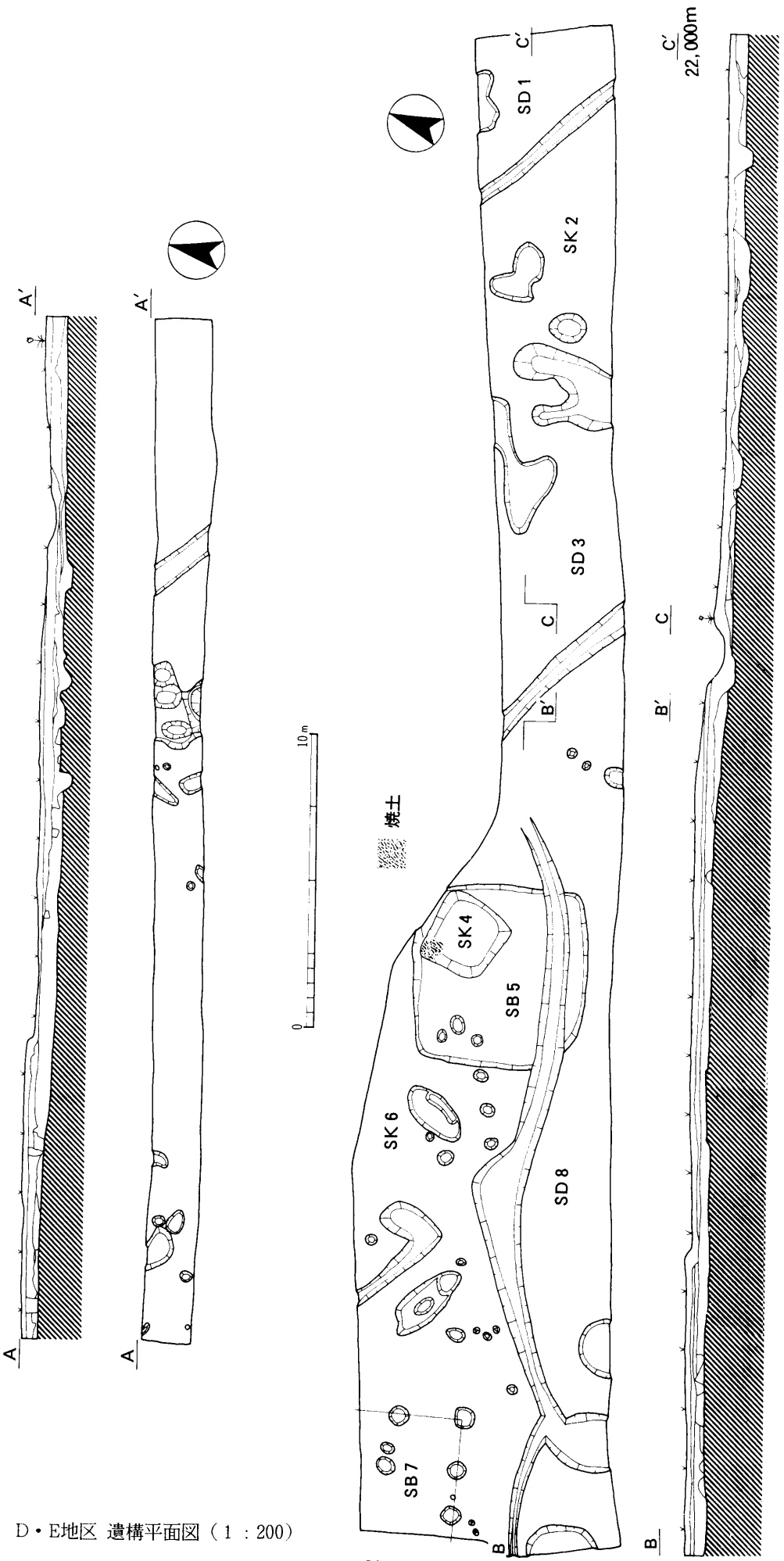
溝３条を検出したが、いずれも出土遺物が殆どなく、時期不明といわざるを得ない。

ＳＤ１・３　ＳＤ１は幅50～60cm、深さは25cmで北西から南東へ走る。ＳＤ３は幅50～90cm、深さは20cmでこれも北西から南東へ走る。ＳＤ３は現在の溝と殆ど重なっている。双方の溝ともほぼ平行に走っており、Ｄ地区ＳＤ１と同じく遺跡東方に広がる条里方向と溝方向はこれもほぼ平行する。

（河瀬信幸）



第４－19図　古代の道復元図



第4－20図　D・E地区 遺構平面図（1：200）

3．遺　　物

1．A 地 区

1、遺構の遺物

A地区の遺構にかかる主な出土土器は、古墳時代から平安時代までにわたるが、出土遺構は竪穴住居や井戸からが多く、比較的土坑からが少ない。

1．古墳時代の土器

（1）竪穴住居

SB1　土師器高杯（2・3）、甕（1）などが出土している。

高杯の杯部（2）は、直線的に外開し、脚部（3）は、裾部がほぼ水平に大きく開く。甕（1）は、「く」の字状に外反する口縁部で、端部が内傾する面をもつ。体部内面ともハケ調整する。

SB2　土師器台付甕（4・5）、須恵器杯蓋（6）などが出土している。

4・5は、同一個体と考えられる。S字状口縁台付甕の退化した形態を示し、安達分類のVA類に相当する[25]。（以下の記述中S字状口縁台付甕は、安達分類に従い○○類と示した。）　6は、器高が口径に対して比較的高く、稜は丸く短く、口縁端部に明瞭な段をもつことから、『陶邑』編年のI－5段階（TK47）に比定できる。（以下の記述中須恵器は、『陶邑』及び『陶邑古窯址群』に従いI－5段階（TK47）のように示した[26]。）

SB3　土師器高杯（7～10）、台付甕（11）などがある。

高杯の杯部は、ゆるく内弯して開き、脚部は裾部で大きく外反して開く。7の脚柱部は、他と比べ肉厚である。11は、S字状口縁台付甕のVB類に比定されるものである。

SB15　土師器高杯（14～16）、台付甕（12）、甕（13）なとが出土している。

高杯には、杯部が大きく内弯して開く杯部をもつもの（14）と杯部が口縁部と底部の境に稜をもって開くもの（15）があり、脚端部は大きく外反して開く（16）。12は、S字状口縁台付甕のVB類に比定される。13は、口縁部が「く」の字状に強く外反し、体部内外面に指圧痕が明瞭にのこる。

SB16　土師器高杯（19）、須恵器杯（17）、蓋（18）などが出土している。

19は、脚柱上部だけの破片であり、円孔が三方に穿される。17は、立ち上がりが比較的短く、内傾気味である。18は、天井部と口縁部の境にわずかな稜をのこし、直立する口縁部が端部で強く外反する。須恵器は、Ⅱ－3段階（TK10）に比定される。

SB17　土師器高杯（20）、甕（21）、須恵器𤭯（22）などが出土している。

20は、推定口径29cmの大形の高杯で、杯部は直線的に開く。21は、口縁部がゆるやかに外反する甕で、体部内外面を板状工具でナデる。𤭯（22）は、肩部がやや張り気味ではあるが球形に近い体部をもち、肩部付近に2条の沈線をめぐらしている。Ⅱ－5段階（TK10）に相当する。

SB20　土師器杯（23・24）などが出土している。

いずれも小片ではあるが、ともに体部が内弯する。23は、口縁端部がつまみ上げられ、内傾する面をもつ。24は、口縁部が垂直気味に立ち上がり、端部が内傾する面をもつ。

（2）その他の遺構

Pit1　土師器甕（39）が出土している。

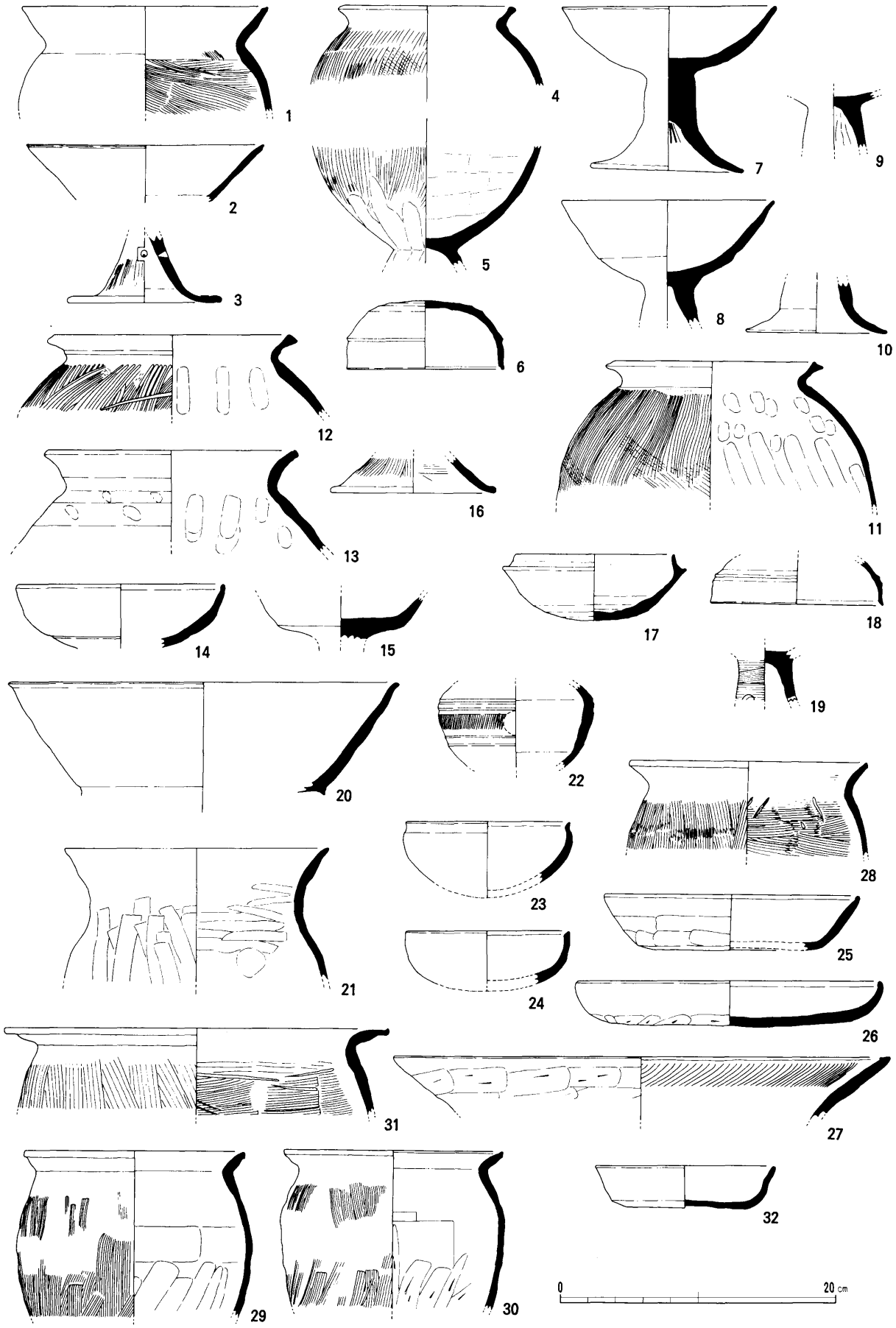
39は、大形品で「く」の字状に外反する口縁部は、端部が外傾する面をもち、体部内外面はハケ調整され、内面下半はヘラケズリされる。

2．奈良時代中期～後期

（1）竪穴住居

SB22　土師器杯（25）、皿（26）、盤（27）、甕（28～31）などが出土している。

25は、口縁部が直線的に外開し、端部がつまみ上げられる。26は、口縁部が内弯し、端部が丸い。ともに底部外面がヘラケズリされる。27は、盤と考えたもので、推定口径36cm。直線的に外開する口縁部は、端部が折り返えされる。外面をヘラケズリし、



第４－21図　SB１～３・13・15～17・20～23 遺物実測図（１：４）（１～３：SB１，２～４：SB２，７～11：SB３，12～16：SB15，17～19：SB16，20～22：SB17，23・24：SB20，25～31：SB22，32：SB13）

内面に斜放射状の暗文を施す。

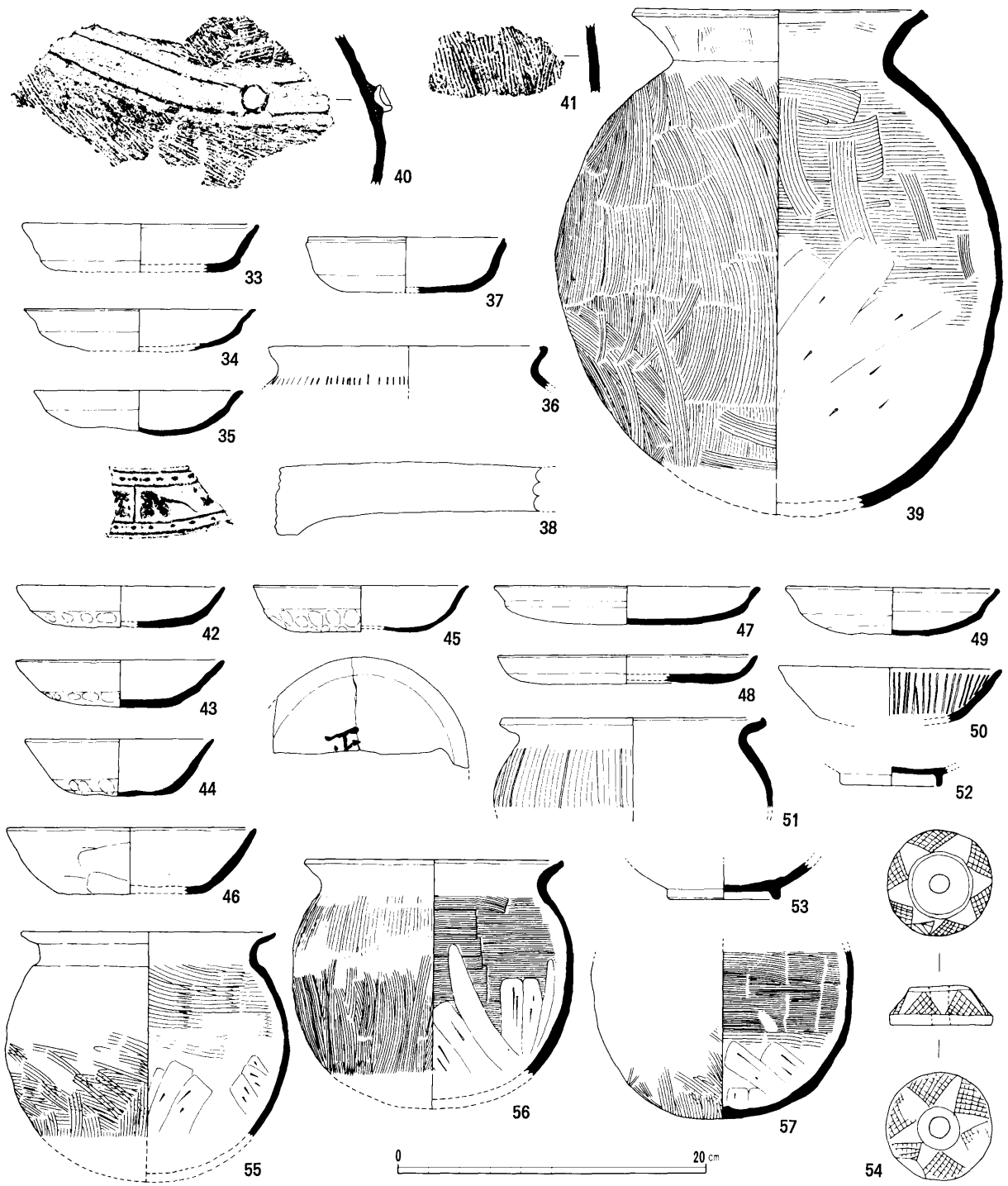
甕は、体部が球形に近いもの（28～30）と長胴甕（31）がある。28は、口縁部がゆるやかに外反し、体部内外面をハケ目調整する。29、30は、口縁部が「く」の字状に短く直線的に外反する。体部外面に縦方向のハケ目調整、内面は上半部を板状工具によるナデ、下半部をヘラケズリする。31は、口縁部を水平近くに外反させる。体部内外面とも、ハケ目調整する。

ＳＢ22出土の一括遺物は、奈良時代中期のものと考えられる。

（２）井戸

ＳＥ25　土師器甕（55～57）などが出土している。

55は、頸部が直立気味で、口縁部の外反は強い。56は、55と比べ器壁はやや厚く、口縁部はゆるく外反する。55・56の体部外面はハケ目調整され、内面



第４－22図　SK6・8～10,SE23～25,P1・2 遺物実測図（1:4）（33：SK，34～36：SK8，37：SK９，38：SK10，39：Ｐ１，40・41：Ｐ２，42～46：SE23，47～54：SE24，55～57：SE25）

は上半部に横方向のハケ、下半部をヘラケズリする。56の外面ハケ調整が、縦方向だけなのが他とは異なる。奈良時代後期に属するものと考えられる。

3．奈良時代末期～平安時代前期

出土土器としては、杯が多く多少の時期幅はあるもののいくつかの分類が可能である。杯は、いずれも口縁部がヨコナデされ、底部外面は未調整のままのものである。

（1）井戸

ＳＥ23　土師器杯（42～45）、黒色土器Ａ類杯（46）の他斎串（486～489）が5点出土している。

杯は、口縁部が直線的に外開するもの（42～44）と口縁部がゆるく内弯して端部で外反し、器壁が薄く底部がややいびつなもの（45）がある。45の底部外面には、「正」の墨書がある。

46は、口縁部が直線的に外開し、端部は丸い。無高台のものであろう。

ＳＥ24　掘形内から土師器杯（49）、皿（47）、の他石製紡錘車（54）、斎串（478～481）、井戸枠内から土師器杯（50）、皿（48）、甕（51）、灰釉陶器（52～53）の他人形木製品（466～467）、斎串（468～477）などが出土している。

49は、口縁部が強く外反し、端部はやや内弯気味の杯である。50は、口縁部がわずかに内弯し、口縁端部が外反する杯で、口縁内面に放射状の暗文を施す。皿には、外反する口縁部が端部で肥厚する47と、口端部が直線的に外開する48の2種類がある。

甕は、口縁部が「く」の字状に外反し、端部が上方につまみ上げられるもの（51）が出土している。また、底部の破片であるが、角高台をもち黒笹14窯式に比定される灰釉椀が2点（52・53）出土している[27]。

滑石製で線刻の鋸歯文をもつ紡錘車（54）は、隣接する曲遺跡からも出土している[28]。

（2）竪穴住居

ＳＢ13　口縁部が外反し、端部が内弯気味になる杯（32）が出土している。ＳＫ9出土の杯（37）に類似する。

（3）土坑

ＳＫ6　口縁部が直線的に外方にのび、口縁部と底部の境が明瞭な杯（33）が出土している。

ＳＫ8　土師器杯（34・35）が出土しており、ともに器壁が薄く、外開する口縁部が端部で外反する。ＳＥ23の杯（45）と同タイプである。

ＳＫ9　土師器杯（37）が出土しており、ＳＢ13出土の杯（32）に類似し、口縁部が外反し、端部が内弯気味である。37は、口縁端部がつまみ上げられる。

ＳＫ10　均整飛雲文軒平瓦（38）の破片が1点出土している。瓦当幅4.4cm。　（河瀬信幸）

2．包含層の遺物

1．縄文時代

（1）晩期の土器　条痕土器の破片2点（40・41）がＤ－16－12地区のピットから出土している。

ともに、外面に条痕を施す。40は、2条の素文突帯をめぐらし、ボタン条突起を配する。

2．弥生時代

（1）中期の土器（58～67）

全体に弥生時代中期の第Ⅲ様式を中心にした遺物がほとんどであるが、後期後半のものも含まれている。器種には、壺（58～64）と甕（65・66）、台付鉢（67）、高杯（68）がある。壺（58・59・64）は口縁を大きく外反させ、端部を上または下に拡張させる形態のものである。58は、口縁内面に円形突起をハリツケ、端面には縦方向にクシメ列を施す。59・64はともに口縁内面に2段斜方射のクシメ列を配し、端面に櫛描波状文を施す。弥生第Ⅲ様式の古い段階ものと思われる。

また、壺60～62は外反する口縁部が屈曲して上方に立ち上がり、受口状を呈するものである。この形態のものは、大小の2種があり大形のもの（60）は口縁外面に4条の凹線文を施し、内面に強いヨコナデを行っている。小形のもの（61・62）は、ともに口縁外面に2条の凹線文を施す。これらは弥生第Ⅲ様式の新しい段階に比定されるであろう。

甕65・66は、ともに口縁を外方に折り返した形態のもので端部に櫛状工具によるキザミ目を施している。台付鉢67は、口縁に8条の細かい凹線文を施し、2個一対の穿孔を行う。高杯68は、口縁が真直ぐ立ち上がり、端部を内側へ肥厚させた形態を呈する。

（2）後期（69）

高杯69は、口縁が短かく外反し端部に面取りを行

う。杯部内外面ともにヘラミガキを丁寧に施す。後期後半のものであろう。　　（服部芳人）

3、古墳時代

（1）土師器

壺（70～75）と甕（76～82）、台付鉢（83）、高杯（84～89）、杯（90～94）がある。壺（70～75）には、欠山式に含まれるもの（70～72）、元屋敷式に含まれるもの（73・74）、5世紀後半のもの（75）がある。

甕（76～82）はいわゆるS字状口縁台付甕である。76は口縁の立ち上がりが真直ぐで先端を尖らせ、屈曲部に櫛状工具による刺突文をめぐらす。内外面を粗いハケで調整し、ほぼ直立気味の脚部端部を内側へやや折り返すなど安達・木下分類[29]の第Ⅰ類に含まれるものと思われる。77・78は、ともに口縁を外方にひろげ屈曲部はS字状にゆるくカーブする。口縁部の刺突文はなく外面を粗いハケで調整する。また内面には、ユビオサエを施し、ⅢA類に含まれる。79も77・78と同様、ゆるくS字状に外反する口縁を呈するがやや厚手であり、ⅢB類に比定されると思われる。80は、口縁部の屈曲が弱く、端部が外側にやや肥厚する。器壁も厚くなり、外面のハケも粗い。口縁端部を指でおさえ凹みをもつなど ⅣB類 に含まれると思われる。81・82は、口縁部がほとんど真直ぐに外反するだけになり、S字状口縁の形態を呈しなくなっており、VA類に含まれる。

台付鉢（83）は、S字状口縁台付甕の上半分を欠いた形態を呈する。口縁はヨコナデを施しやや外反させておわる。脚部外面はハケを施さず、ナデ調整をし、脚端部は内側に折り返している。

高杯（84～89）には、杯部が直線的に外方へひらく形態のもの（86・87）と、杯部が内弯する形態のもの（88・89）がある。これらはともに脚部の裾をひろげた形態をなす。

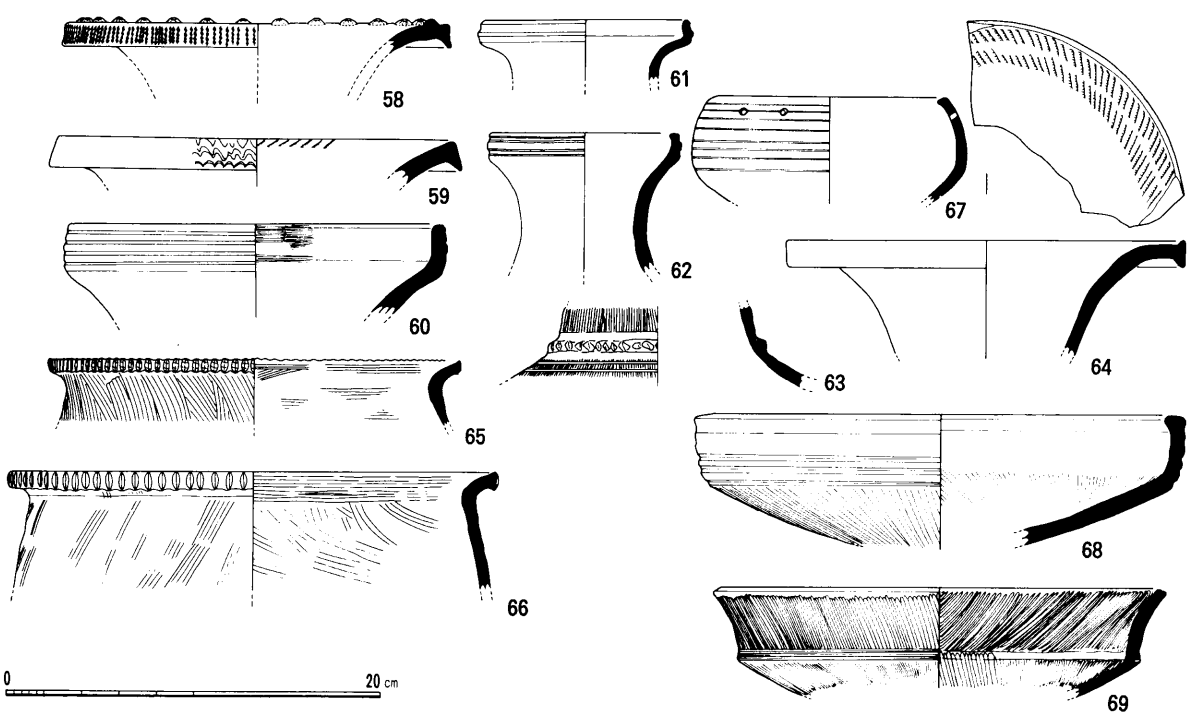
杯（90～94）には、平底のもの（90・91・93）と丸底のもの（92・94）があるが全体に丸味をもつ杯部で、口縁をヨコナデ調整し、内傾する面をもつ。

（服部芳人）

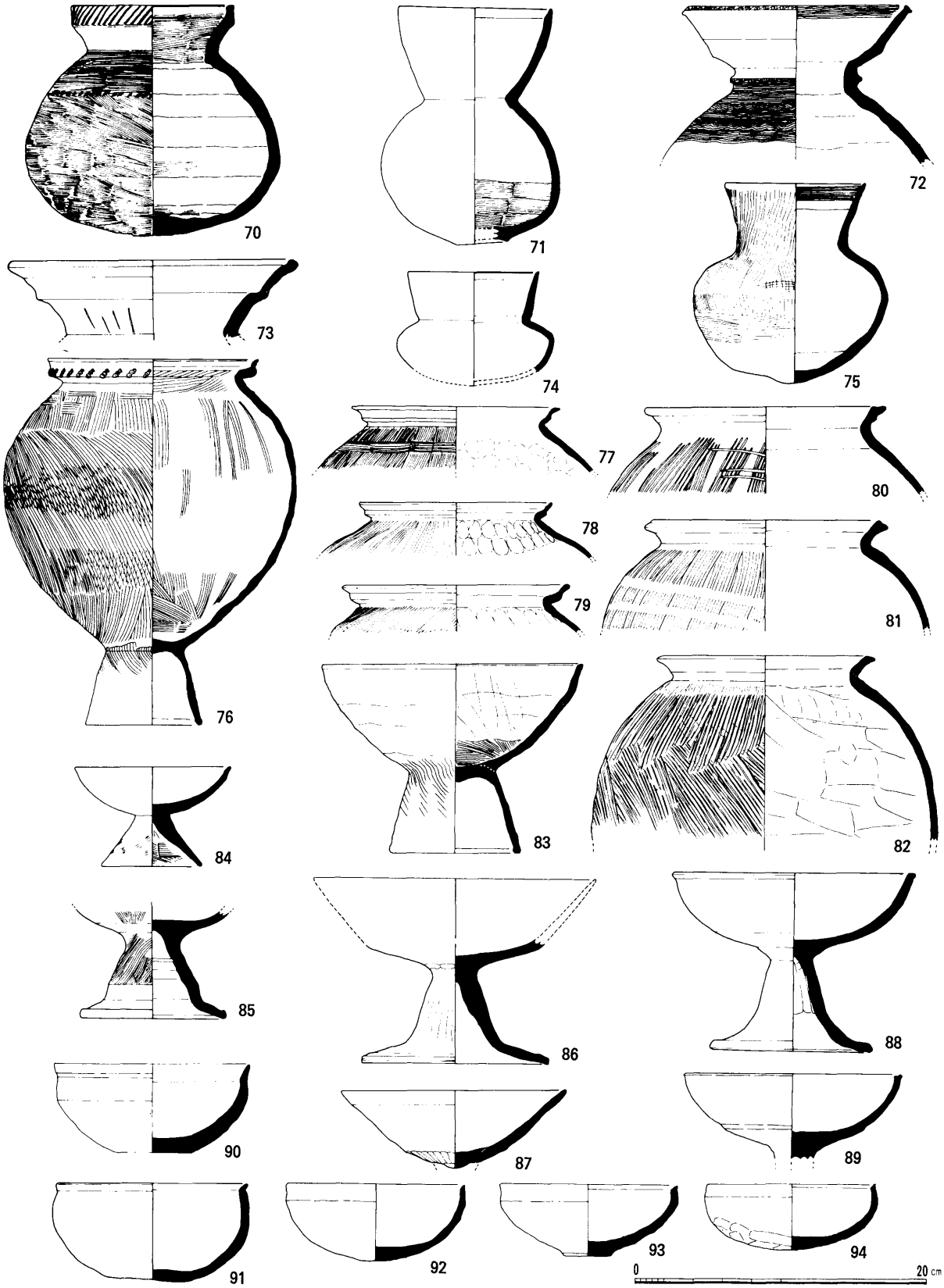
（2）須恵器

杯蓋（95～102）　ここでは無鈕のものを古墳時代の指標としておく。

95・96は天井部が比較的平らで、口縁は直線的に垂下、その界の稜も明瞭である。96は焼き脹れによる凹凸があり、いびつである。共に稜付近を除き、天井部は全面にロクロケズリが施されている。95については、Ⅰ－3段階に含めてよいかも知れない。97・98は、口縁部はまだ直線的であるがやや開き、稜も不明瞭である。天井部のロクロケズリは、3分



第4－23図　A地区 弥生土器実測図（1：4）



第４－24図　A地区 古墳時代土師器実測図（１：４）

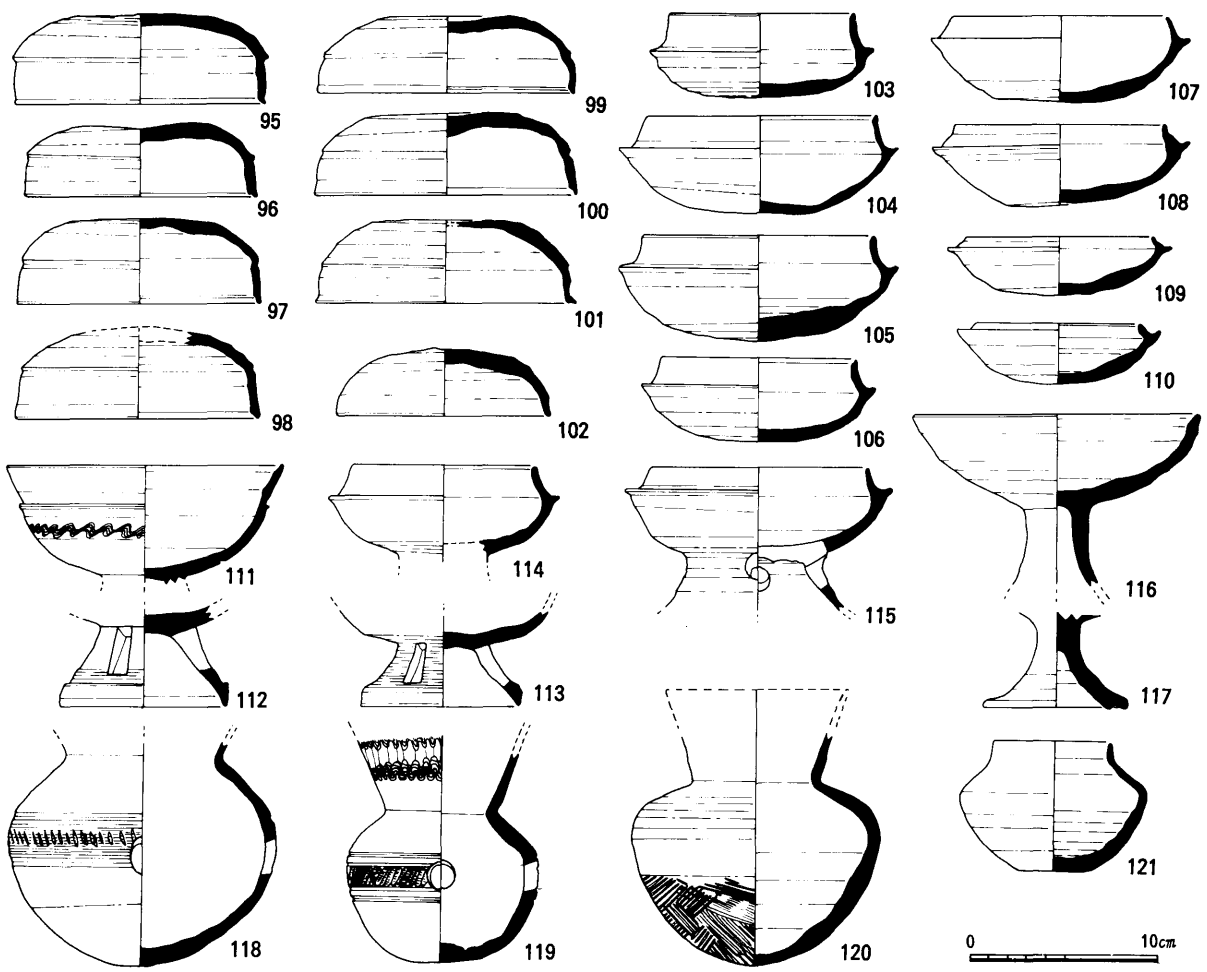
の2程度にしか施されていない。Ⅱ－1段階と思われる。99・100では稜はほとんど形骸化しており、100などは稜付近に沈線を施すことにより、相対的に稜を感じさせるに過ぎない。Ⅱ－2段階と思われる。101も同時期と思われるが、肩の張りを失っている。102は口径11.4cmに過ぎず、天井部はヘラキリ未調整、内面には一方向ナデが見られる。口縁端部は丸味をもち、内側の段は消滅している。Ⅱ－6段階と思われる。

杯身（103～110）　ここでは受け部を有するものを古墳時代の指標としておく。

103は口径が10cmに満たず、扁平な底部から直線的な立ち上がりを示す。底部はほぼ全面にロクロケズリが施される。Ⅰ－5段階であろう。ただし、口縁端部に段は見られない。104は底部は全体として丸味をもち、ロクロケズリは3分の2程度である。立ち上がりはなおしっかりしている。Ⅱ－1・2段階であろう。105・106は底部に丸味をもち、立ち上がりはやや内弯する。つまり、一旦内傾した後立ち上がるという印象を受ける。Ⅱ－3段階であろう。口径に差があるが、共に完形である。107は口縁部が内傾し、立ち上がりも弱くなっている。108は受け部と立ち上がりの中間が肥厚しており、立ち上がりを挽き出す途中で成形を止めた状態を示すと考えられる。底部はヘラキリ未調整である。Ⅱ－4段階に位置するのではなかろうか。109・110は器形も小さく、立ち上がりも短かく強く内傾している。底部はヘラキリ未調整である。それぞれⅡ－5・6段階と思われる。

高杯（111～117）　112・113・115は太くて短い脚をもつものである。112・113は長方形の透かしを3ケ所にもつ。杯部は不明であるが、Ⅰ－5段階に含まれると考えられる。115は器形からⅡ－4段階であろう。円形の透かしを1ケ所にもつ。114は脚部の径が小さく、長脚化していると考えられる。ロクロケズリも杯部外面の2分の1程度にしか施されておらず、Ⅱ－3段階であろう。

111・116・117は受け部をもたず、無蓋と思われ



第4－25図　A地区 古墳時代須恵器実測図（1：4）

ものである。111は、貼り付け痕から脚部径は比較的太く、長脚ではないと思われる。透かしが1ケ所は確認できる。Ⅰ－4段階であろう。116は長脚化していることからⅡ型式と思われるが、詳細は不明である。杯部の3分の2程度までロクロケズリが見られるので、早い段階であろう。117は脚の接合部がふさがっているので、時期的に下るものかも知れない。

鬶（118・119）　118は最大径14.4cmと大さく、器形は肩が張らず丸味をもつ。体部から頸部にかけてはロクロナデを施すが、最大径付近に沈線にはさまれた区画を設け、カキ目とヘラキザミ状圧痕で施文している。体部下半から底部にかけてはハケ状工具による不定方向のナデが施されている。一応大型**鬶**と考えられようし、施文帯をもつ事などからⅠ－3・4段階ではないだろうか。119は最大径が体部の⅓付近にあるが底部が平らなため張った印象は受けない。肩下に沈線にはさまれた圧痕による施文帯をもち、頸部には波状文が施される。器形・法量からはⅡ型式のようでもあるが、施文からはⅠ型式に含まれよう。

壺（120・121）　120は肩が張り、底部のやや尖った形状を示す。体部下半にタタキが行われており、肩とタタキとの間はロクロケズリが行われている。Ⅰ－4・5段階ではないだろうか。121は底部はヘラキリ未調整、体部下部はロクロケズリが施される。時期は不詳であるが、Ⅱ－5段階以降であろう。

（久志本鉄也）

4、奈良・平安時代

（1）土師器

器種には、杯、皿、高杯、甕、椀、ロクロ土師器の椀、皿、製塩土器がある。中でも杯、皿、甕の出土が多く型式分類が可能である。

杯A　口縁部から丸味をおびたまま底部に達している椀に近い形態のもの。口径によりさらにA_1～A_2に細分できる。

杯B　ほぼ平らで口径に比べ比較的大きな底部をもち、口縁部と底部の境が比較的明瞭なもの。口縁部の形態によりさらにB_1～B_4に細分できる。

杯C　高台を有するもの。

杯D　粗製のもので、いわゆる「いなか風椀」と呼ばれるものを含む。形態や口径によりさらにD_1～D_6に細分できる。

皿A　平らな底部よりやや丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部の形態によりさらにA_1～A_3に細分できる。

皿B　平らな底部より強く屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの。

皿C　高台を有するもの。

甕A　長球状の胴部に「く」の字状に屈曲する口縁部がつくもの。

甕B　球形に近い胴部に「く」の字状に屈曲する口縁部がつくもの。口縁端部の形態によりさらにB_1～B_2に細分できる。

甕C　形態は甕Bと似るが、口径19cm、器高31.5cmを測る大型のもの。

甕D　器高に比べ口径が大きい鍋に近い形態のもの。口径や把手の有無によりさらにD_1～D_3に細分できる。

甕E　いわゆる「長胴甕」と呼ばれるもの。胴部の形態によりさらにE_1～E_2に細分できる。

（i）飛鳥～奈良時代前期

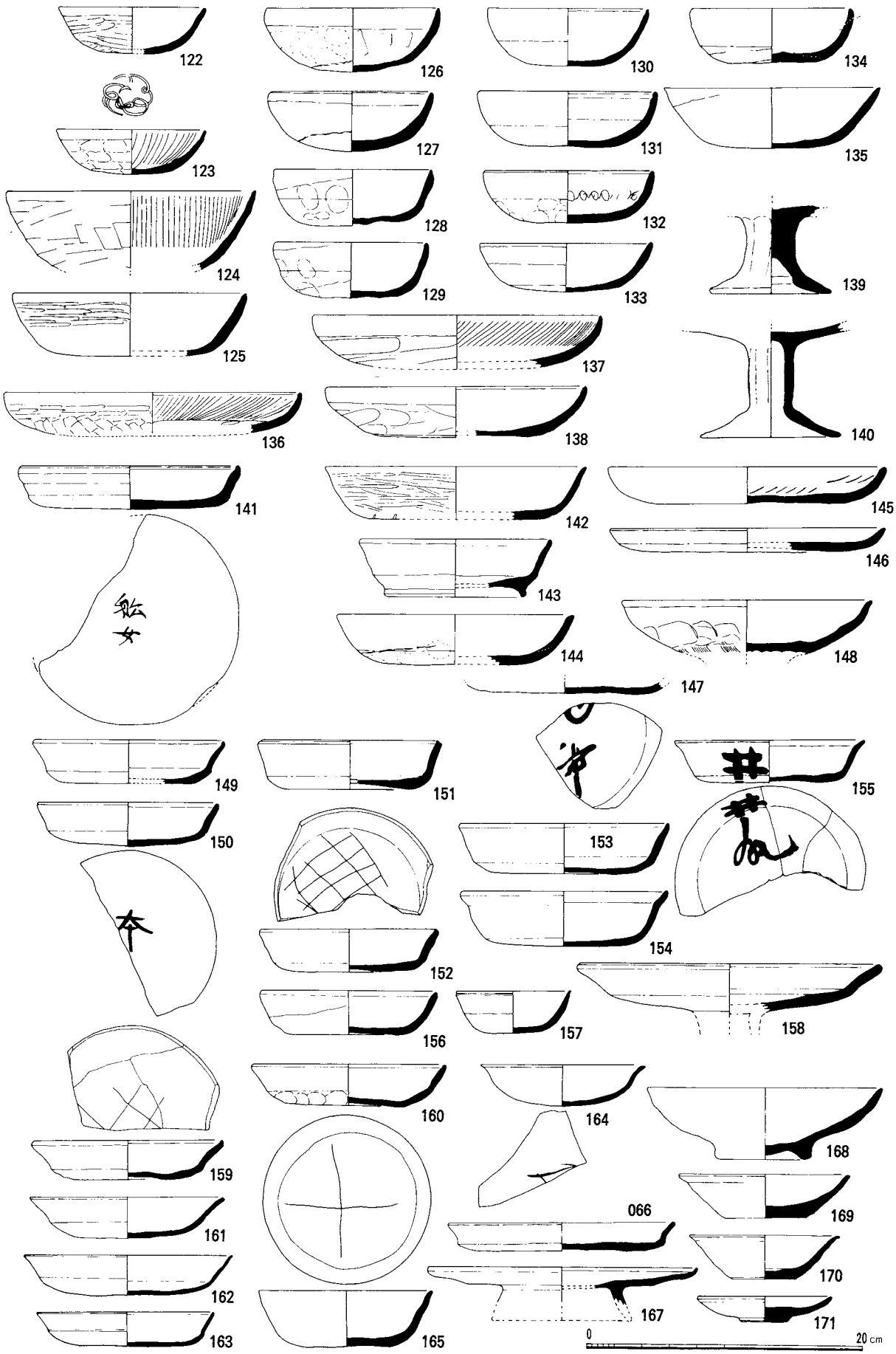
杯A_1（122・123）　口径11cm前後の小型のもの。外面はヘラミガキやヘラケズリで丁寧に調整し、内面には暗文をもつ。122は口縁端部がやや外反ぎみになる。

杯A_2（124）　口径18cmを測る大型のもの。調整は杯A_1と同じだが、底部欠損によりラセン暗文の有無は確認できない。

杯B_1（125）　口縁部は、まっすぐ外方へ立ち上がり、端部をそのまま丸くおさめるもの。調整は杯Aと同じだが、放射暗文は格子状に施している。

杯D_1（126・127）　丸味をもつ底部からそのまま内弯して立ち上がる口縁部で端部を丸くおさめるもの。むしろ椀と呼ぶべきかもしれない。飛鳥時代に属するものであろう。

杯D_2（128・129・132～134）　平らな底部より屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの。口径に対する器高によりさらに128・129・134と132・133に細分可能である。端部はいずれも丸くおさめるが128は軽くつまみ上げている。132の内面には文様的なヘラ記号がある。焼成後に鋭利な工具で刻んだもので



第４－26図　A地区 飛鳥・奈良・平安時代土師器実測図（1，1：4）

あろう。

杯D$_3$（130・131）　形態は杯D$_2$と似るが、口縁端部にヨコナデによる浅い沈線がはいるもの。130は飛鳥時代に属するものであろう。

杯D$_4$（135）　口径15cmを測る大型のもの。平らな底部より屈曲して外方へまっすぐ立ち上がる口縁部をもつ。

これら杯Dの多くには、煤が付着しており、燈明皿として利用されたものであろう。

皿A$_1$（136）　口縁端部が内側に肥厚するもの。外面をヘラミガキで調整するが、底部はヘラケズリで、内面に暗文をもつ。精製品である。

皿A$_2$（137・138）　口縁端部を丸くおさめるもの。137のラセン暗文と138の暗文は確認できない。

高杯（139・140）　共に杯部を欠損しており、全体の形態は不明である。脚部は両者とも指によって面取りしており、140は中空となっている。139は飛鳥時代に属するものであろう。

甕A（172～174）　口径13.5cm～16.4cm、器高18.6cm～19.2cmの中型の甕。口縁端部はいずれも上方につまみ上げられ外側に面をもつ。調整は胴部外面に縦方向に細かいハケ目を施すが、174はやや粗い。胴部内面は、172は上半を横方向のハケ目、下半を右下がりにヘラケズリし、173は下半を下から上へナデ上げている。それに対し174は内面全面をヘラケズリする。底部外面には172に「ℓ」173・174に「｜」のヘラ記号があり、いずれも焼成前に刻まれたものだろう。

甕B$_1$（175～181）　器高約12cm～14cmほどの小型の甕で、口縁端部をつまみ上げ、外側に面をもつもの。175～177は胴部下半を欠損しており、全体の形態は不明だが一応ここに入れておく。胴部外面の調整は、178が上半未調整、181が下半を不定方向のハケ目の他はすべて縦方向のハケ目で調整している。胴部内面は、176・179 は上半を横方向のハケ目、下半をヘラケズリで調整し、178は全面をヘラケズリ、181はナデ、180は上半をナデ、下半をヘラケズリという風に様々である。180の胴部内面にはヘラケズリの後、ヘラ状工具で掻き取ったような痕跡があり、181の底部外面には「｜」のヘラ記号がある。焼成前に刻まれたものだろう。

甕B$_2$（182・183）　器形はB$_1$とほぼ同じだが、口縁端部はつまみ上げておらず外の面も弱いもの。182は全体に粗い調整で、ハケ目も粗く口縁部には粘土紐巻上げ痕跡を残している。183は、胴部下半を欠損しているが、体部はおそらく球形になるものと思われる。182と比べて口縁部の外反が強く、比較的長い。胴部との接合は雑で指頭圧痕も多く残している。内面は煤が付着しており、わかりにくいが、おそらくナデであろう。

甕C（184）　大型の甕で、球形に近い胴部をもつが、底部はやや平らである。口縁端部は鋭くつまみ上げられ外側に面をもつ。胴部外面中央に「メ」のヘラ記号がある。焼成前に刻まれたものだろう。

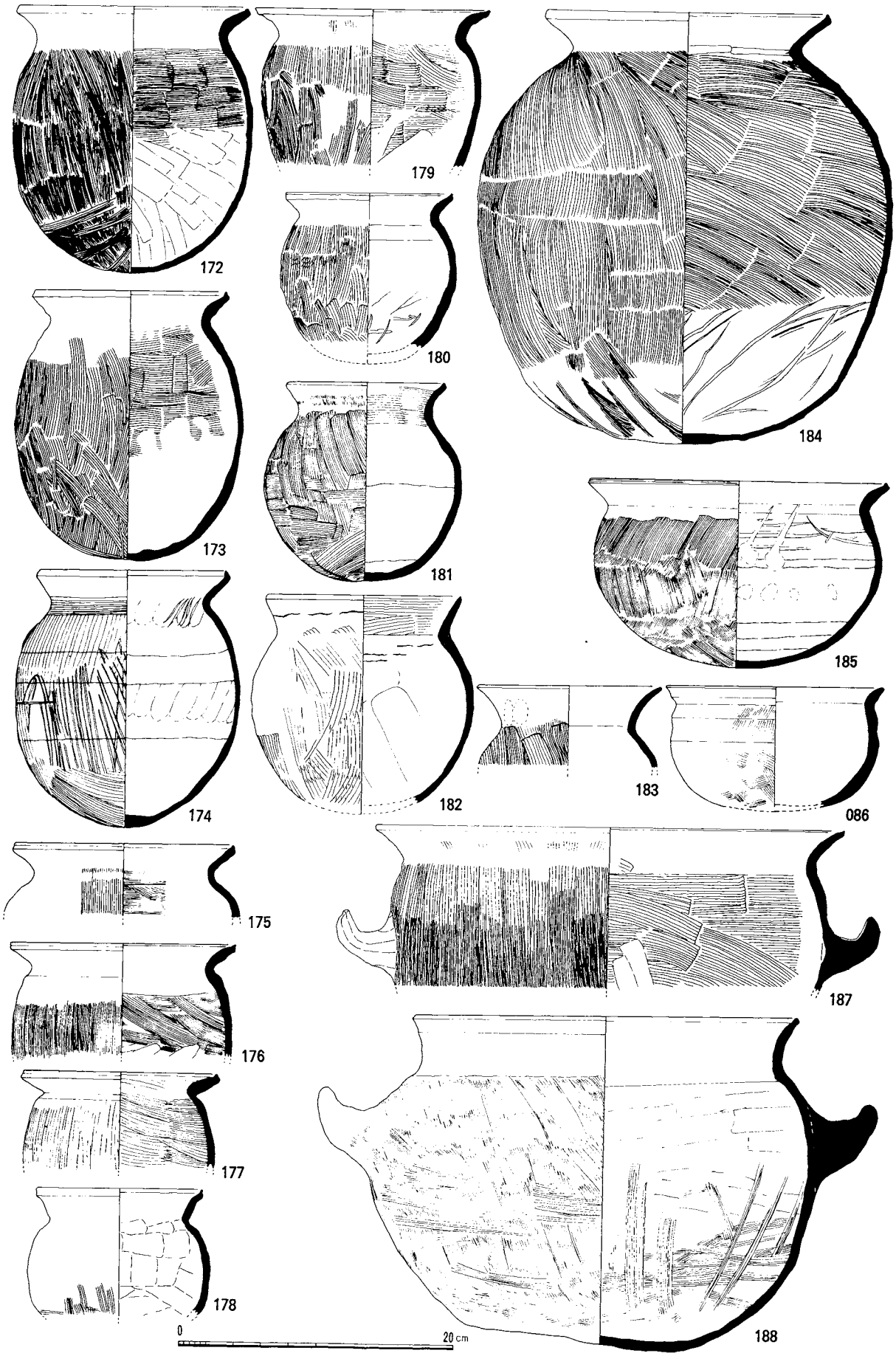
甕D$_1$（186）　口径15.8cmの小型のもの。口縁部は短かくそのまま丸くおさめる。

甕D$_2$（185）　口径21.7cmの中型のもの。口縁部は「く」の字状に外反し、端部はつまみ上げられ外に面をもつ。内面はヘラケズリの後一部を指によりナデ上げている。

甕D$_3$（187・188）　口径27.9cm～34cmの大型のもので把手をもつ。口縁部の形態は、187は大きく外反するのに対し188のそれは小さい。端部は両方とも外側に面をもつ。188の内面は板ナデにより調整するが、下半には不定方向のハケ目を施している。

甕E$_1$（189～192）　やや肩のはる胴部をもつもので「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部はつまみ上げられ外側に面をもつが、189はやや丸味をもつ。いずれも胴部下半を欠損しており調整のすべては不明であるが胴部内外面にハケ目を施している。190は、内面ハケ調整の後ヘラ状工具で掻取ったような痕跡があり、191はハケ調整の後指先でナデ上げている。

甕E$_2$（193～197）　肩がはらずに、まっすぐ下へのびる胴部に大きく水平近く外反する口縁部がつくもの。196・197の胴部は他のものと比べ、やや脹らみをもつと思われる。口縁端部はつまみ上げられ外側に面をもつが、193はつまみ上げられておらず、197は上下に肥厚している。ハケ目を中心に調整しているが、193、194は胴部内面下半のヘラケズリが確認できる。195の胴部内面には、ハケ調整の後ヘラ状工具による掻取痕がある。



第４－27図　A地区 飛鳥・奈良・平安時代土師器実測図（２，１：４）

（ii）奈良時代後期

杯B₁（142）　125と比べ器壁が若干薄くなり、器高も減じて皿に近い形態をもつ。内外面を粗くヘラミガキし、特に内面はラセン暗文状にヘラミガキしている。

杯B₂（141）　口縁部が底部より屈曲し外反しながら立ち上がり端部は内弯するもの。底部にはヘラケズリの後ヘラ状の鋭利な工具で掻取ったような痕跡があり、「舩女」と墨書されている。

杯C（143）　杯B₂に似た体部に高台をはり付け全体をナデにより丁寧に調整する。須恵器を模倣したものであろう。

杯D₅（144）　杯D₂と似た口縁部をもつが、口径が大きい割に器高が低く皿に近い形態をもつもの。

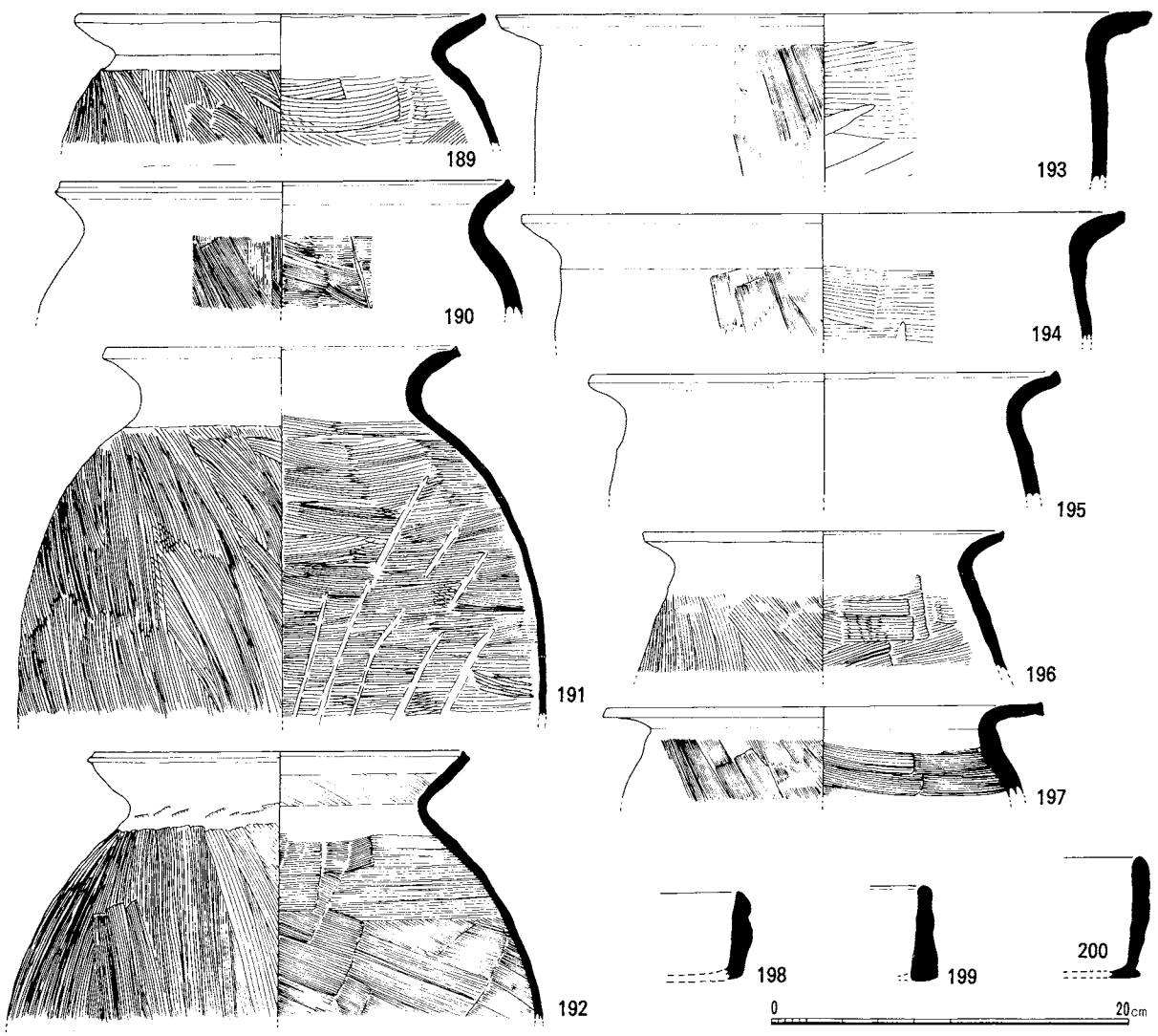
皿A₂（145・147）　145は、全体に雑なつくりで粘土紐巻上痕や指頭圧痕を若干残している。147は底部片のみなので器形は不明だが一応ここにいれておく。内面は丁寧にナデられラセン暗文が認められる。外面には「□市」と読める墨書がある。

皿A₃（146）　口縁部の立ち上がりが非常に短く浅いもの。

高杯（148）　脚部を欠損しているため全体の形態は不明である。杯部の下半を粗くヘラケズリし、脚部との接合部にはハケ目が残る。

（iii）平安時代初期

杯B₂（149～152）　141に比べ器壁は若干薄くなる。いずれも口縁部の⅔以上をヨコナデし、それ以下は未調整である。151は精製の土器であるが、口縁端部外側をヘラ状工具で強くヨコナデしており浅い沈線となっているのが特徴的である。150の底部外面には「本」と墨書されており、152の内面には格子状のヘラ記号がある。焼成後刻まれたものだろう。



第4－28図　A地区 飛鳥・奈良・平安時代土師器実測図（3，1：4）

杯B₃（153～155）　底部より屈曲して立ち上がる口縁部が端部近くで大きく外反するもの。153は外反が弱いのに対し、154・155は屈曲して外反する。端部は、153・154が内弯傾向にあるのに対し、155はそのまま丸くおさめている。また155の側面から底部外面にかけて「井尻」と墨書されている。

杯D₂（156）　奈良時代のものに比べ口径の割に器高が低くなる。

杯D₆（157）　杯D₄に似た器形だが、口径が8.2cmと小さく小型のもの。全体をナデにより調整しているが、ゆがみがはげしい。

これら156・157にも煤が付着しており、やはり燈明皿として利用されたものであろう。

高杯（158）　脚部を欠損しており、全体の形態は不明だが、長い脚がつくものと思われる。杯部の内面にはラセン暗文がわずかに認められる。

（ⅳ）平安時代前期

杯B₂（159・160）　前述の杯B₂に比べ口縁部の外反度は大きくなり、それにともなって器高は若干低くなる傾向にあるようだ。調整は口縁部の½以上をヨコナデし、それ以下は未調整である。159の底部内面には「井」と思われるヘラ記号がある。焼成後刻まれたものだろう。

杯B₄（161～164）　形態は杯B₂と似るが、口縁端部が内弯しないものを杯B₄とした。しかし器形はそれぞれ若干異なる。161・164の口縁端部は外反し特に164は強く屈曲ぎみであるが、162・163の外反は弱い。また164は丸味をもつ底部をもち他と異なる。その底部外面には墨書されているが小片のため判読不可能である。器壁は薄くなる傾向にあり、162・163は特に薄い。これらは平安時代中期とした方がよいかもしれない。

杯D₂（165）　底部内面に「＋」のヘラ記号が焼成後に刻まれている。

161～165は精製粗製を問わず煤が付着しており燈明皿として利用されたものであろう。

皿B（166）　強く屈曲して立ち上がる口縁部は、やや大きく外反する。内面は煤が付着しており、これも燈明皿として利用されたものらしい。

皿C（167）　非常に浅い皿に比較的高い高台がつくものと考えられる。口縁部は丁寧にヨコナデされ高台は貼付けている。

（ⅴ）平安時代後期

椀（168）　丸味をもつ底部よりやや内弯して立ち上がる口縁部をもち、低く外にふんばった高台を貼付ける。全体に磨滅がはげしく調整は不明であるが、ナデにより調整しているものと考える。

ロクロ土師器椀（169・170）　口縁部は底部よりまっすぐ外へ立ち上がるが、170の端部は外反する。ロクロナデにより調整されるが、底部には糸切り痕を残している。169の内面の一部には煤が付着しており、170の内面は全面黒斑となっている。

ロクロ土師器皿（171）　口径9.8cmほどの小型の皿で、底部は高台を意識してやや下で粘土塊から糸切りにより切り離されている。

製塩土器（198～200）　いわゆる志摩式製塩土器である。遺構出土でないこともあって詳しい時期は不明である。いずれも小片のため口径は不明であるが、器高は198・199の5cm～5.2cmに対し、200は6.6cmとやや高い。また前者は内面をナデにより調整しているのに対し、後者は簡単なハケ目を施している。

（森川常厚）

（2）須恵器

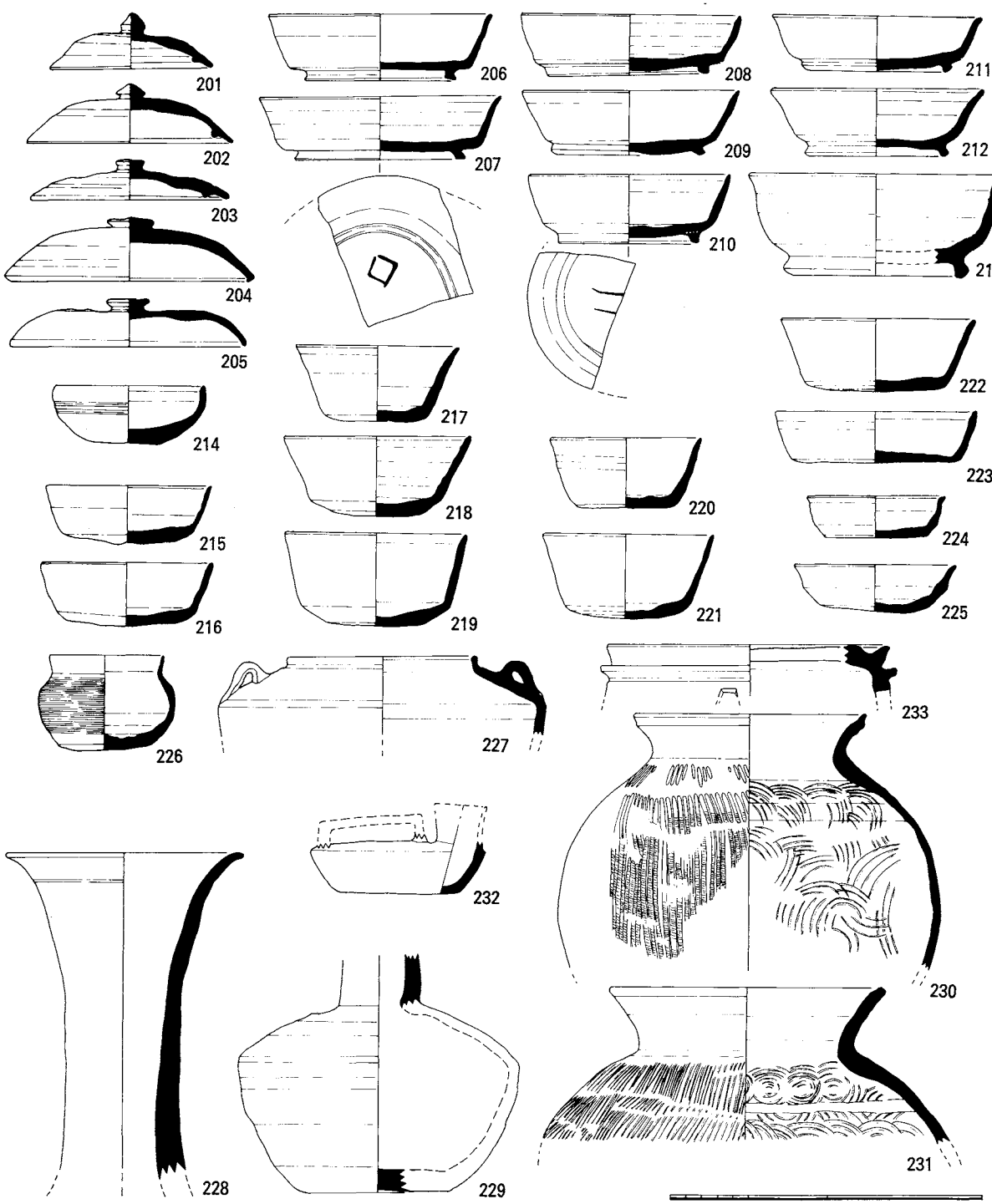
杯蓋（201～205）　内面に返りをもつもの（201～203）と、もたないもの（204～205）に分けられる。201・202は比較的宝珠の形状を残したつまみが付くが、203はつまみも器形も扁平であり、より退化した形状を示す。前者はⅢ－2、後者はⅢ－3段階あたりに位置づけられよう。204・205は返りが消えるばかりでなく、口径も大きくなっている。Ⅳ－1・2段階であろうと思われる。

杯身（206～225）　杯身は高台のつくもの（206～213）とつかないもの（214～225）がある。

206・207は、底部が水平で口縁にかけて直線的な立ち上がりを示し、高台も比較的内側につく。207は枡形の墨書をもつ。Ⅳ－1段階であろう。208～210は底部の水平が失われ、その分立ち上がりとの変換点が緩やかになっている。前者に対してやや小型である。Ⅳ－2段階と考える。211～213は腰がわずかに脹らみ、口縁部がやや外反するものである。213は大型である。Ⅲ－3段階にも似るが、高台の位置を考えるとⅣ－3段階以降か。

214は底部はヘラキリ未調整と考えられ、比較的平らである。体部下方にロクロケズリを残すが他はロクロナデで調整されており、口縁下方には櫛描横線が施される。Ⅲ－1段階か。215・216は底部外面がヘラキリ未調整のため起伏が残る。Ⅲ－2段階と考える。217～222は、215・216に比べて深い形状のものである。底部外面はヘラキリ未調整又はロクロケズリを行っている。Ⅳ型式以降であろう。223は高台付の杯から高台を除いた形状を示す。224は小型で、口縁端が外反肥厚する。底部外面はロクロケズリを行っている。225は、口縁部のロクロナデによって稜を形成し、底部外面はヘラキリ未調整である。やはりⅣ型式以降と考えられる。

壺（226～229）　226は体部底部共外面はロクロケズリが行われ、口縁はロクロナデが丁寧に行われている。Ⅳ型式であろうか。227は広口壺で、四耳壺



第4－29図　A地区 飛鳥・奈良・平安時代須恵器実測図（1：4）

と考えられる。ロクロナデ調整がおこなわれている。Ⅳ－３・４段階であろう。228は口径14.6cmの大型長頸瓶である。ゆるやかに外反し、長さに比し強度の反りではない。Ⅳ－２段階頃であろうか。229と底部外面はヘラキリ未調整、体部は丁寧にロクロケズリ。焼き脹れが多い。高台はつかない。肩の張りが弱く、腰にもやや丸味を感じさせる。Ⅳ－１段階であろう。

甕（230・231）　体部外面に平行タタキ、内面は青海波が明瞭であり、口縁部はロクロナデ調整である。Ⅳ－１段階と考えられる。

平瓶（232）　最大径11.2cmと小型であるが、断面方形の把手がつく。底部から体部にかけて丁寧なロクロケズリ、高台は付かない。Ⅳ型式であろう。

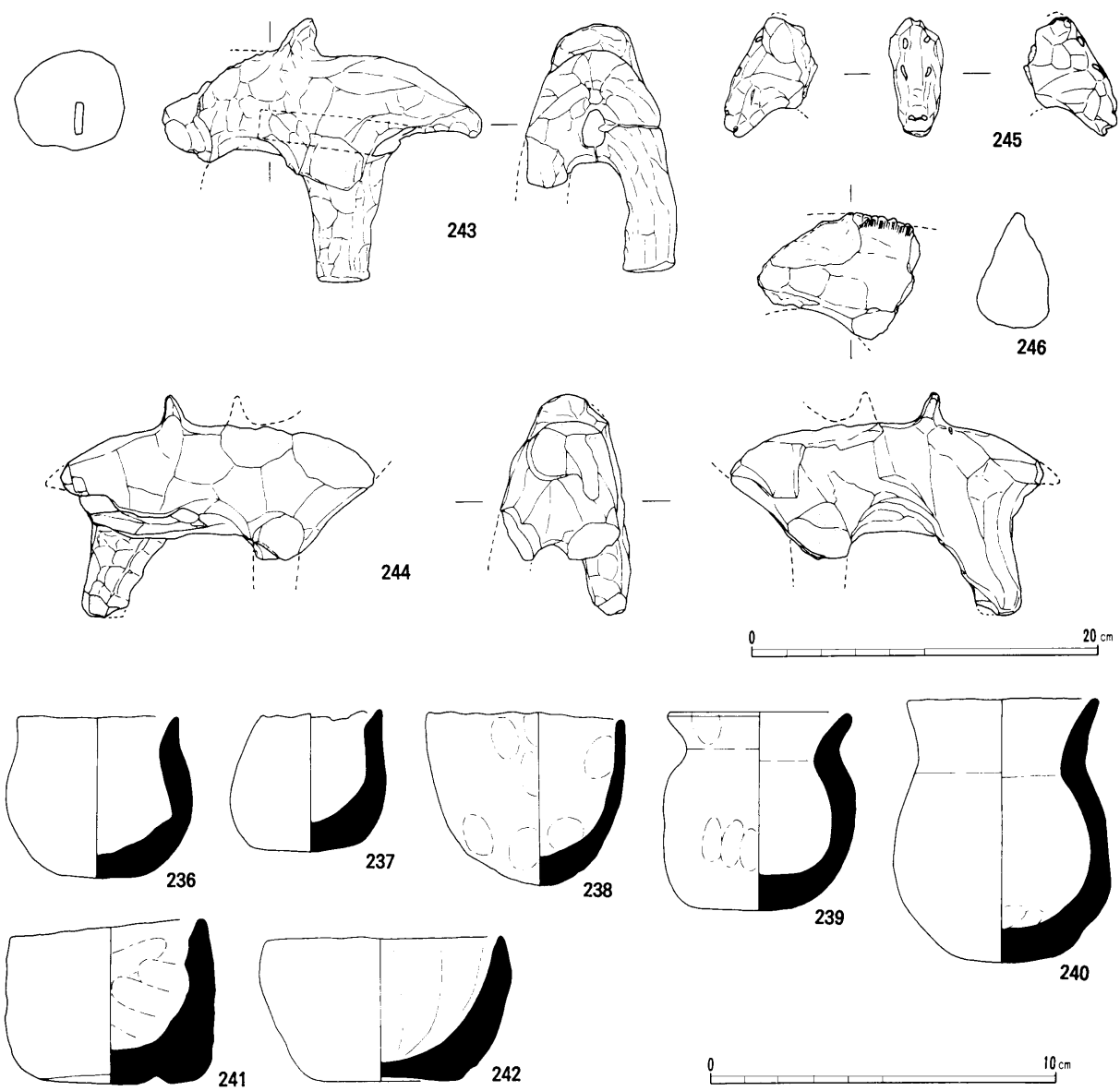
円面硯（233）　小片であるため詳細は不明であるが、透かし１ケ所は確認できる。Ⅳ－３・４段階である。

（久志本鉄也）

（３）祭祀用土製品

祭祀用土製品としてはミニチュア土器７点、土馬が破片を含めると７点出土した。土馬はその殆どが最下層の砂地内から出土しているものが多く、ミニチュア土器は土馬と同じ層や、やや上層などからの出土が多い。

ミニチュア土器（236～242）　いずれも手捏ねで作られており、口径は3.4～6.8cm、器高は3.2～7.6cmの中に収まる。それぞれ色々な器種を想定して作られたと考えられ、239・240 は甕形を意識している



第４－30図　A地区 旧河道祭用土製品実測図（243～246は１：４，236～242は１：２）

と考えられる。240は全体的に手捏ねであるが、口縁部がヨコナデされ、ゆるやかに外反している。成形時に何らかの工具の使用が認められるものに242があり、内面に工具痕が残っている。これらいずれの手捏ねの土器もそれぞれ若干の細砂粒を含むものの比較的胎土は良く、焼成も黒斑は残るが良好である。

土馬（243～246）　244は胴体と左後脚のみを残し、他は全て欠損しており、現存長は18.1cm、現高12.7cmである。鞍は粘土貼り付けにより成形され、前輪部は剥落し、後輪部のみ残る。尻尾部の下に最大径1.1cm、深さ9.5cmの穴が穿たれている。全体の調整は指によるナデと考えられる。胎土は細砂粒を含むが良く、焼成も良好で白黄褐色を呈する。243は、胴体と右後足・尻尾のみを残し他は全て欠損しており、現存長18.2cm、現高15.1cmである。鞍は粘土貼り付けにより成形され、後輪部のみが残る。調整は全体を指によるナデである。尻尾直下に径1.3～2.1cmの楕円形で深さ8.5cmの穴が穿たれている。胎土は細砂粒を若干含むが良好で、焼成も良い。色調は淡茶灰色を呈する。243・244両者とも胴体が太く全体的に量感がある。245は頭部のみ残っているもので、顔の現存長は7.2cmである。顔面には竹管状のもので耳・目・鼻が穿たれ、口も表現されている。調整は全体に指によるナデである。胎土は良く、焼成も良好で、色調は淡赤褐色を呈する。246は頸部のみ残るもので、断面三角形の頂部にはヘラ状工具による鬣が表現されている。調整は指によるナデで、胎土はやや粗く、焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。

以上、旧河道から出土の土馬はいずれも現状では、特に243・244は馬具の表現として、粘土を貼り付けた鞍の表現のみに限られることから小笠原編年のC型式[30]に相当するものと考えられる。

（河瀬信幸）

1．C　地　区

1．遺構の遺物

1　弥生時代の土器

弥生時代の遺物には、竪穴住居ＳＢ28～31、土坑ＳＫ32、溝ＳＤ34・45出土の弥生土器と深長古墳墳丘及び包含層から出土した土器片と石器類がある。

（1）竪穴住居

ＳＢ28　壺形土器の体部破片が2点（350・351）出土しており、ともに横線文をもつ。

ＳＢ29　壺形土器で体部最大径をもつ部分の破片があり（352）、上半部に3本1単位の櫛描横線文が2条施される。

ＳＢ30　甕形土器の蓋（261）、口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸くおさまる甕形土器Ｂ－ａ類（262）がある。

ＳＢ31　比較的多くの土器が出土したが、原形に復元し得るものはない。壺形土器・甕形土器があり、壺形土器には、細頸壺・広口壺・受口状口縁壺・無頸壺がある。

無頸壺（247）は、体部下半に最大径をもち体部に流水文を施す。受口状口縁壺は，口縁部に凹線をもつＡ類（248）と無文のＢ類（249）の2類がある。壺形土器には、口縁部が大きく開き、端部が上下に肥厚する壺Ａ類（250）と端部が上方に引き出される壺Ｂ類（251）及び無頸壺（347）がある。体部の文様は、横線文を施す（345・348）・波状文を施す（346）、及び簾状文を施す（344・347）がある。

甕形土器には、口縁部がゆるく外反するＢ類と口縁部が短く「く」の字状に外反するＥ類がある。Ｂ類は、口縁端部が丸くおさまるＢ－ａ類（256）と口縁端部が上下にやや肥厚するＢ－ｃ類（254）に細分できる。Ｅ類（255・257）は、口径に大小がある。また、口縁端部に刻み目をもつ甕形土器の蓋（253）も出土している。

（2）土坑

ＳＫ32　壺形土器の受口状口縁壺・細頸壺、甕形土器の破片が出土している。263は、体部中央部に最大径をもつ受口状口縁壺で、外面上半部をタテハケ、下半部を横方向にヘラミガキし、内面下半部をハケ目調整する。264は、口縁部外面に3条の凹線を施す受口状口縁壺Ａ類である。354は、上半部に4条の櫛描横線文を施し、外面をハケ目調整する壺形土器である。

細頸壺（265）は、頸部に2段の簾状文と竹管による連続円形刺突文、体部上半部に櫛描平行線が施される。

甕形土器（266・267）は、口縁部が「く」の字状に屈曲するE類で、ともに口縁端部が肥厚する。

（3）溝

SD34　壺形土器の受口状口縁壺、甕形土器が出土している。353は、体部上半部に4条1単位の櫛描横線文、その下に2本1単位の斜格子文を施す壺形土器である。259は、口縁部外面が無文で、口縁下端に刺突を施す受口状口縁壺C類である。

甕形土器は、平底の底部破片で、外面をハケ調整する。

SD45　壺（286）と甕（287）が出土している。

286は、ゆるく内弯して受口状となる口縁部をなし、端部は内傾する面をもつ。287は、受口状の口縁部をもつもので、口縁端面はわずかに凹面をなす。第V様式前半頃と考えられる[31]。

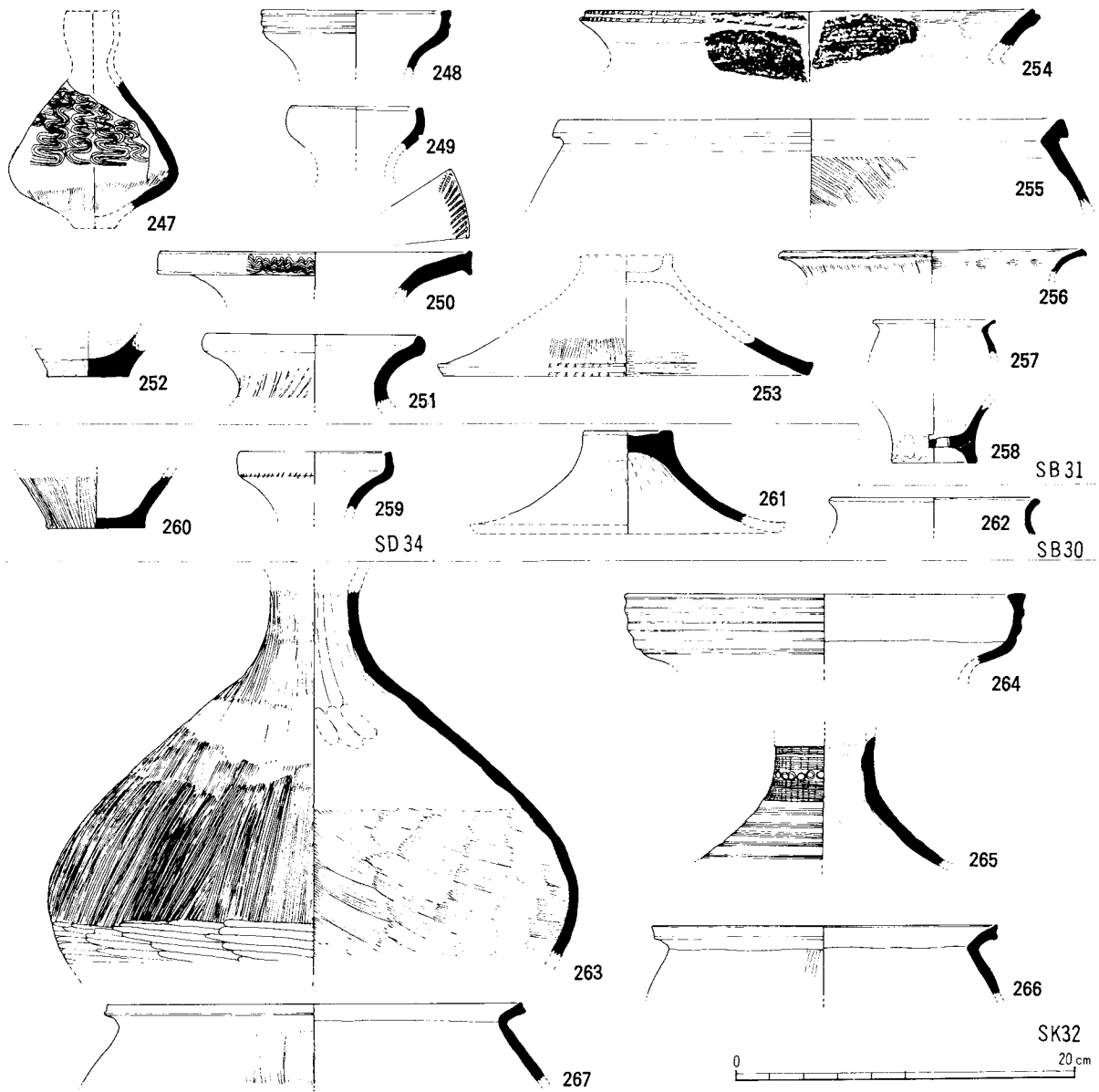
SD55　奈良時代の土器に混入して、第Ⅲ様式の壺（288）が出土している。288は、口縁部内面に刻み目をもつ突起と「ψ」形のヘラ記号をもつ。

2．古墳時代の土器

（1）溝

SD43　土師器のS字状口縁台付甕（293）が出土している。

口径14.5cm・器高31cmの完形である。体部外面をハケ目調整、内面上半部を板状工具によるナデを施す。安達分類のV－A類に比定される。



第4－31図　SB30・31，SK32，SD34 遺物実測図（1：4）

ＳＤ44　土師器器台（283）、須恵器杯（284）、平瓶（285）が出土している。

283は、受部の内外面にていねいなヘラミガキが施され、受部と脚部が貫通しない器台である。284はⅠ－４（ＴＫ23）、285はⅢ－２（ＴＫ217）時期に比定され、時期幅をもつ。

ＳＤ56　土師器高杯（269）が出土している。

269は、内弯する杯部をもち、口縁部をヨコナデする。

ＳＸ41　土師器二重口縁壺（268）が出土している。大きく二段に開く二重口縁壺であり、体部はやや扁平な球形をなす。頸部の立ち上がりがなく大きく外反するのは、津市坂本山古墳群に類例がある[38]。

（増田安生）

3．奈良時代の土器

（１）竪穴住居

ＳＢ49　土師器皿（270）が出土している。

270は、口縁部がわずかに内弯し、端部は丸い。底部は、上げ底となる。奈良前期のものである。

ＳＢ50　土師器皿（271）甕（272～275）、須恵器杯（276）が出土している。

271は、ゆるく内弯して開く口縁部が端部でわずかに肥厚する。272～275の甕は、口縁部が「く」の字状に大きく外反するもので、体部内外面ともハケ目調整するが、275の内面はナデて仕上げる。

須恵器の杯は、体部と底部の境が丸みをもち口縁部は直線的に外開する。

（２）溝

ＳＤ55　土師器杯（290～291）、須恵器杯（292）の他弥生土器（288）が混入する。

杯には、２種類ある。290は口縁部と底部の境に稜をもち、291は口縁部が内弯して丸みをもつ。291は奈良時代後期、290は平安前期のものと考えられる。

須恵器の杯は、口縁部と底部の境に明瞭な稜をもち、口縁部は直線的に外開する。

4．奈良時代末期～平安時代前期の土器

（１）竪穴住居

ＳＢ39　土師器杯（277・278）、高杯（279）、甕（280・281）、須恵器（282）が出土している。

杯（277・278）は、口縁部がわずかに外反し、端部がつまみ上げられる。高杯279は、杯部だけの残存であり、杯部は浅い。内面にはラセン状の暗文が施される。

須恵器の杯（282）は、口縁部と底部の境に明瞭な稜線をもち、口縁部が垂直気味に外開する。甕は、二種類ある。280は、口縁部が「く」の字状に外反し端部がつまみ上げられる。281は、口縁部の外反度が強く長胴甕である。ともに体部内外面をハケ目調整する。

（河瀬信幸）

2.包含層の遺物

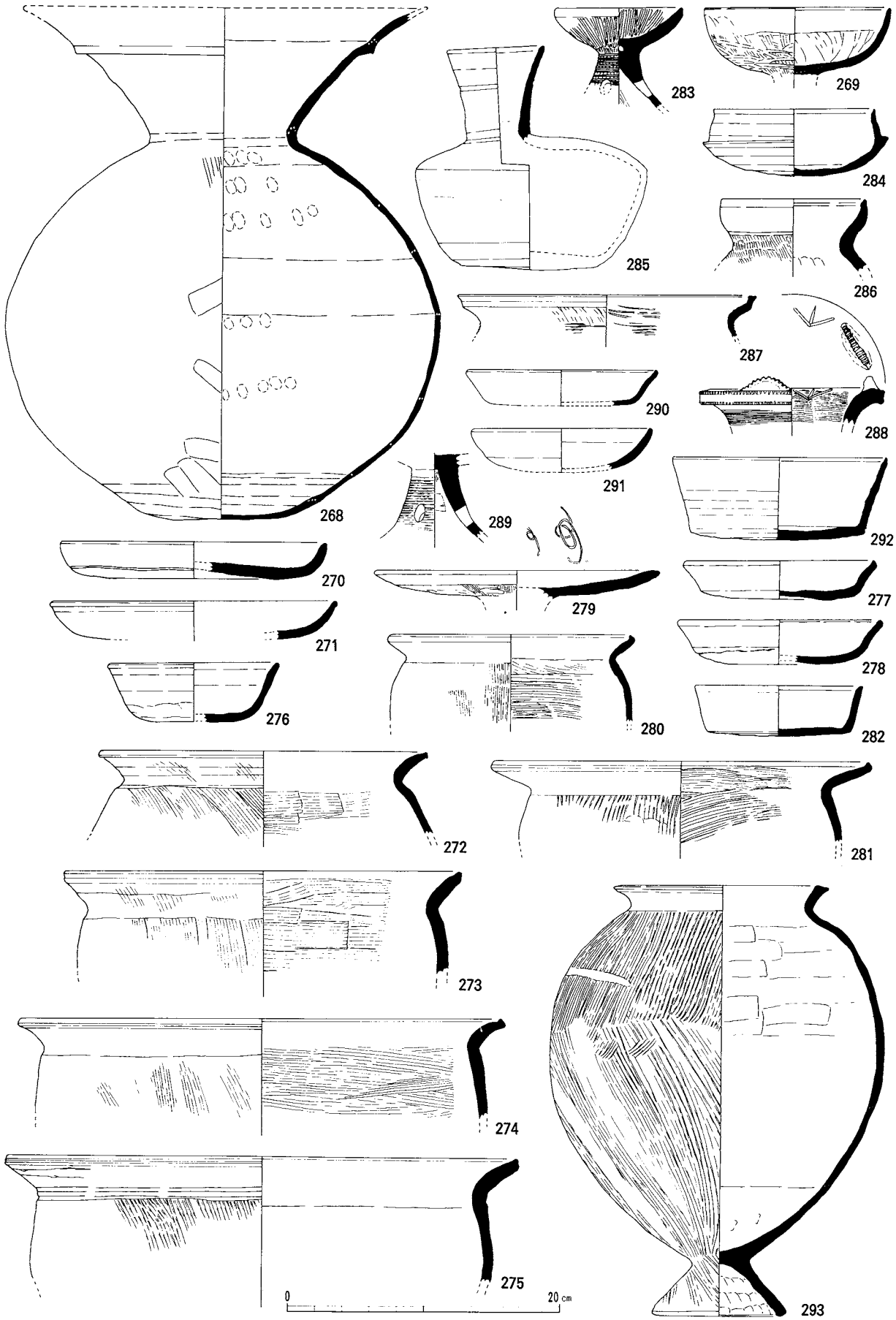
1．縄文時代

（１）後期の土器

294は、深鉢の体部である。茶褐色、外面縄文内面横位ミガキを施す。295は、深鉢の体部である。茶褐色。外面縄文内面ナデ。296は、口縁部をなす深鉢である。縁帯部を凹線と縄文により加飾する。外面は沈線による区画があり、中に縄文を施す。暗褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。炭化物が付着している。297は、粗製の深鉢である。淡褐色を呈する。内外ともナデ調整。298は、口縁部が外反する深鉢である。内外面とも横位繊維質原体による条痕を施す暗橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。299は粗製深鉢である。外面横位繊維条痕。内面ヨコナデ。暗褐色を呈する。300は、口縁部が強くヨコナデされ、内面に沈線を持つ粗製深鉢である。明赤褐色を呈し、胎土、焼成良好である。303は、凹底の鉢である。外面貝殻条痕。底部径6.0cm。茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良である。

（２）晩期の土器

301は、内外面繊維条痕の深鉢である。直立気味に立ち上がる体部にやや外反する口縁部を持つ。暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良である。胎土に長石、金雲母を含む。302は、薄手で口縁部が先細る。内外面とも貝殻条痕が施される。暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良である。305は口縁部が直立し、上端面を持つ深鉢である。内外面とも巻貝条痕が横位に施され、口縁部上端面には貝殻原体による押し引き文がみられる。304は、口縁部が外反し、端面が先細る。口縁端面に貝殻原体による押し引き文が施される。暗褐色。胎土・焼成ともに良である。306は、



第４－32図　SB39・49・50，SD44・45・55・56，SX41 遺物実測図（１：４）（268・269：SD56，270：SB49，271～276：SB50，277～282：SB39，283～285：SD44，286・287：SD45，288～292：SD55，293：SD43肩部）

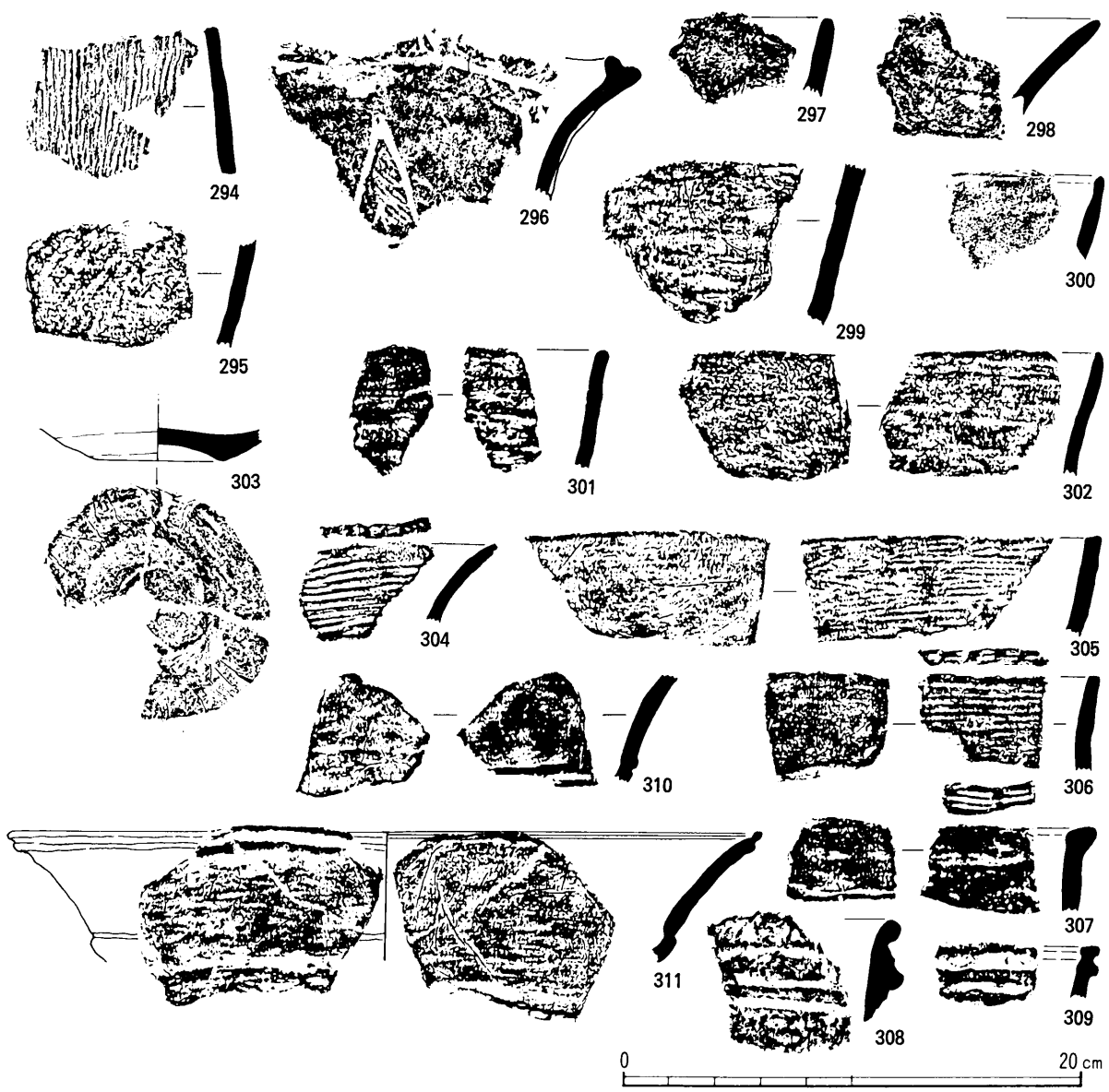
口縁部がやや外反し、口縁部が端面を持ち内外面とも貝殻条痕が横位に施される。暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良である。307は口縁部が肥厚し上端面を持つ深鉢である。条端面に二枚貝による押し引き条痕文が施される。暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良である。308は、短く外反する口縁部と無文の突帯を持つ深鉢である。突帯の上下に3条の凹線が施される。淡褐色を呈し、胎土・焼成ともに良である。309は、壺の口縁部と推定される。口縁部が強くヨコナデされ、上端面を持つ。貼り付け突帯の上下に1条ずつ凹線が施される。暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良である。310は、浅鉢である。鉢部上半が外反する。体部内外面を横方向にミガキ調整する。暗褐色。胎土は良好で長石、石英、金雲母を含む。311は、浅鉢である。外反した口縁部は、その先端部が上方に引き出される。体部面を横方向にミガキ調整する。暗褐色を呈する。

2．弥生時代

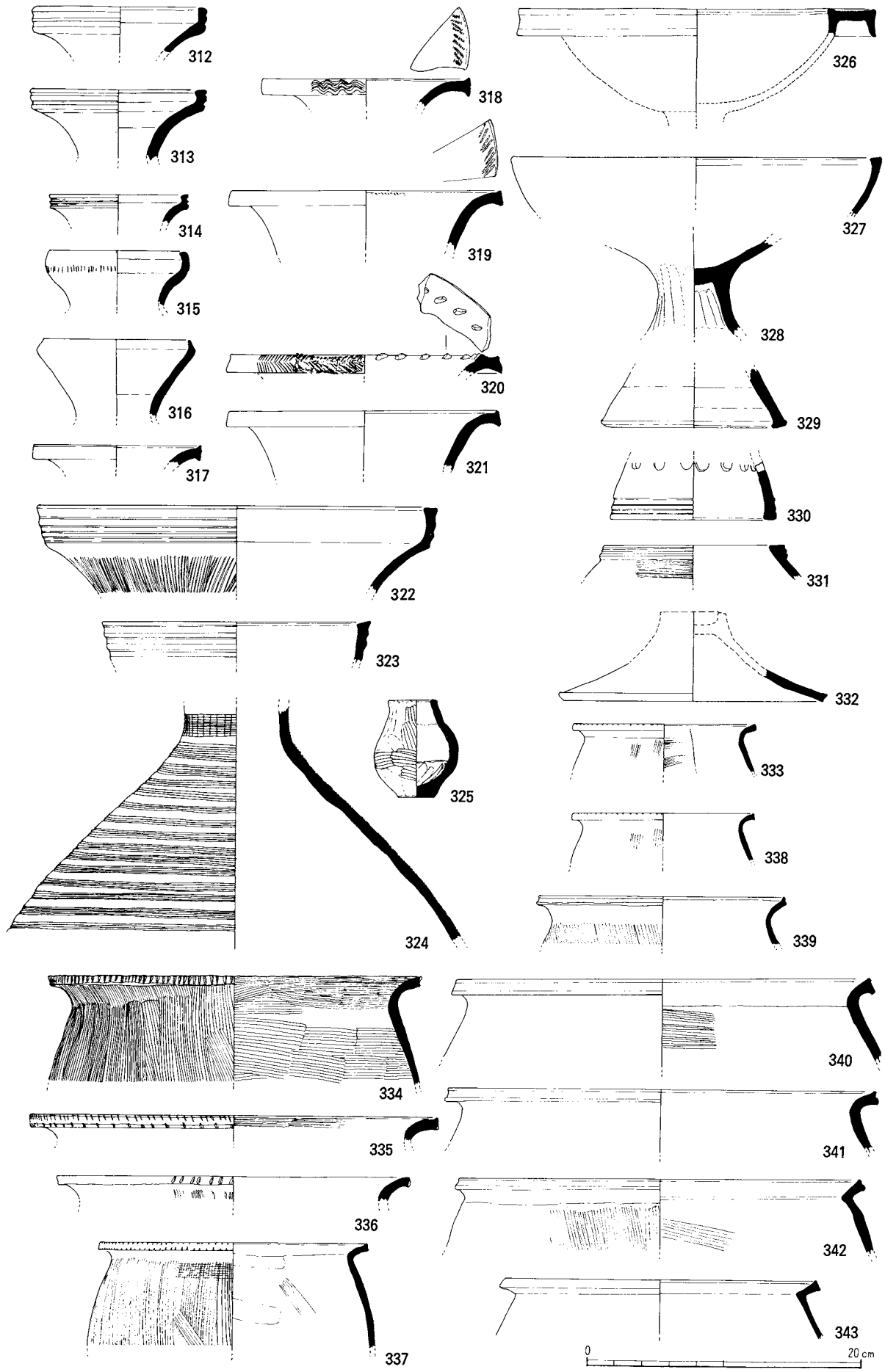
深長古墳周辺及びC地区の包含層から弥生時代中期以降の弥生土器が、相当量出土している。器形には、壺形土器・高杯形土器・甕形土器及びミニチュア土器等がある。

（1）壺形土器

受口状口縁壺（312～316・322・376）　口縁端部が垂直気味あるいは内弯して立ち上がる形態をなす。外面に凹線文を施すA類（312～314・322・376）と口縁部外面下半に刺突文を施すもの（315）がある他、口縁部の立ち上がりが短く端部が先細るもの（316）



第4－33図　C地区 縄文土器拓影・実測図（1：3）



第４－34図　C地区 弥生土器実測図（１：４）

がある。A類には、口径10～12cmで2条の凹線を施すもの（312～314）と、口径29.2cmで3条の凹線（322）あるいは4条の凹線を施す（376）の大型のものがある

壺A類（317～321）　口縁部が外反し、広口状となる形態の壺をA類とした。口縁部側縁及び上面が無文のもの（317）、口縁部側縁が無文で上面に櫛状工具で刺突文を施すもの（319・321）、口縁部側縁に波状文上面に刺突文を施す（318）、口縁部側縁上面ともに波状文を施すもの（356・357）、口縁部側縁に斜格子文を施すもの（355）、口縁部側縁に刺突文を施す（359）がある。

壺B類（320）　広口状口縁壺の中で、口縁部上面に貼付突起で加飾するものをB類とした。320は、口縁部側縁にヘラ状工具による綾杉文を施し、口縁部上面に1cm前後の間隔で低い貼付突起をもつ。

細頸壺（323・324・379）　323は、口径9.6cmの大型の口縁部の破片で、外面に3条の凹線文を施す。324は、頸部下半に簾状文、体部上半に4状1単位の櫛描横線文が施される。また、379は、頸部に簾状文を施す。

無頸壺（381）　口縁部が外側に折り返され、上端が水平な面をもつ。外面上部に8本1単位の簾状文を施す。

壺の文様　壺胴部の文様には、櫛描横線文が主体となり（361～363・365～369・371）、これに簾状文が組み合わされたもの（360）、あるいは斜格子文と組み合わされたもの（377・378）がある。また簾状文を施すもの（364）、波状文を施すもの（372～374）、流水文を施すもの（375）の他、外面をハケ調整したもの（370）がある。

ミニチュア壺（325）　口径3.4cm、器高7.0cm。口縁部は、わずかに内傾する。体部上半を縦方向に、下半を横方向にヘラミガキする。

（2）高杯形土器

口縁部が横に水平に引き出された後下垂するA類（326）と、口縁部が上方に立ち上がり端部で面をもつB類（327）がある。

高杯の脚には、太くて柱状になるもの（328）、脚が直線的に開き端部が肥厚するもの（329）、脚部中央に円孔を施し、わずかに内弯気味に脚部が開き、端部外面に凹線文を施し肥厚するもの（330）がある。

（3）甕形土器

蓋（332）　蓋部が、わずかに外弯気味に裾広がりとなり、端部が肥厚する。

甕B類（334～338）　頸部から口縁部が丸みをもって外反する甕をB類とし、口縁端部が丸くおさまるものをB－a類（336）、口縁上端に稜をもつものをB－b類（334）、口縁端部が上下に肥厚するものをB－c類（335・337・338）と細分できる。a～c類ともに口縁部に刻み目を施す。

甕D類（339）　薄手の口縁部が、頸部からゆるやかに立ち上がり、口縁端部が、上方に引き出される甕をD類とした。

甕E類（340～343）　口縁部が、短く「く」の字状に屈曲する甕をE類とした。口径は、30cm前後のものが多いが、22cmの小ぶりの343もある。ともに口縁端部が肥厚し、端面が外上方を向き中央部が凹む。

3．縄文・弥生時代の石製品

大部分が深長古墳周辺の包含層で出土しており、明確な時期決定はし難い。

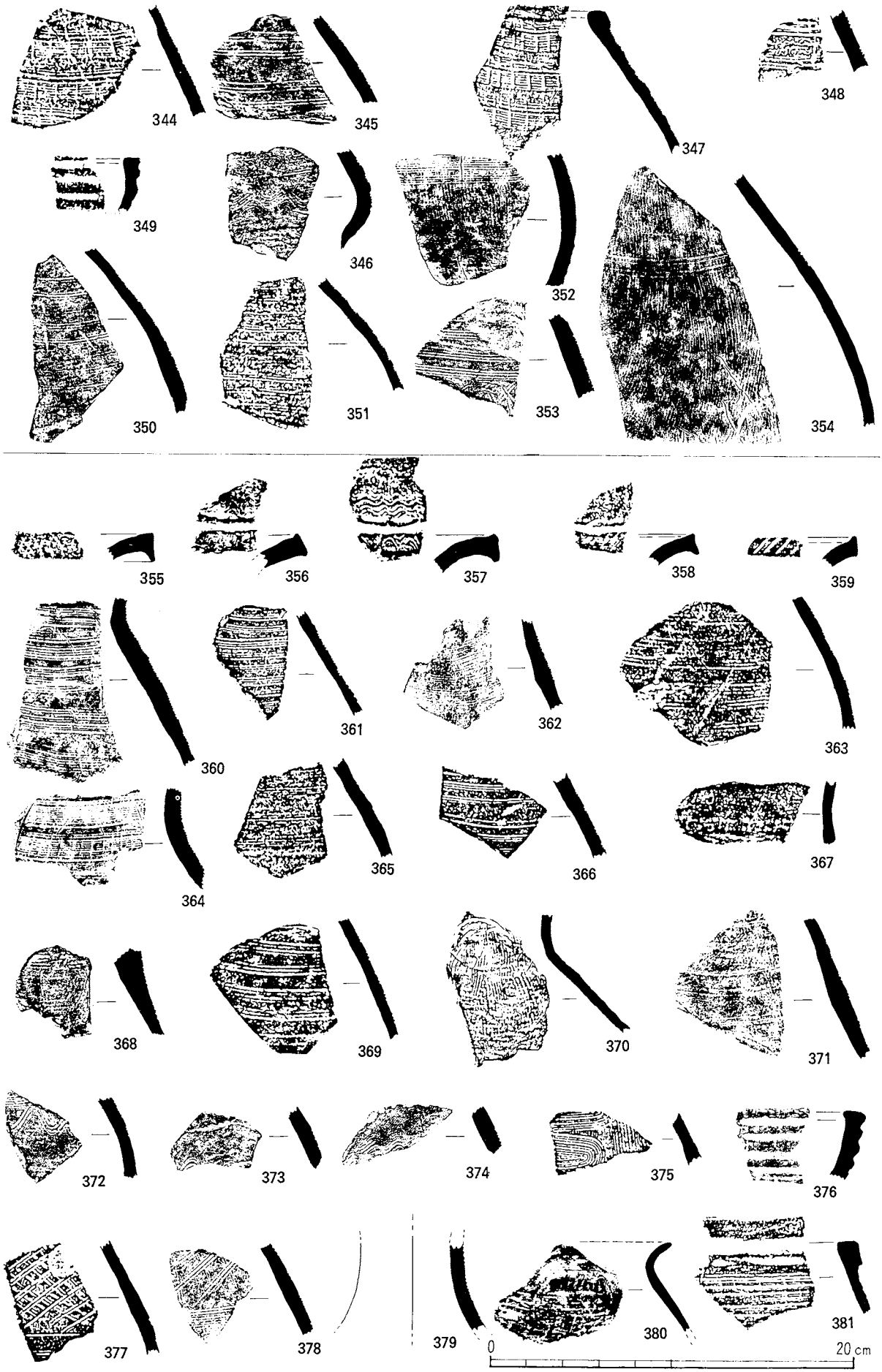
スクレーパー（382・383）　382は、刃部長10.9cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmである。刃部は、両面から剥離調整される。サヌカイト製。383は、刃部長7.4cm、幅4.0cm、厚さ1.1cmである。刃部は、両面から剥離調整されるが、裏面の調整は粗雑である。背面は、自然のままで未調整である。サヌカイト製。

石匙（384）　刃部長5.4cm、幅3.2cm、厚さ0.35cmの薄手のものである。凸部を剥離調整している。黒灰色を呈する。サヌカイト製。

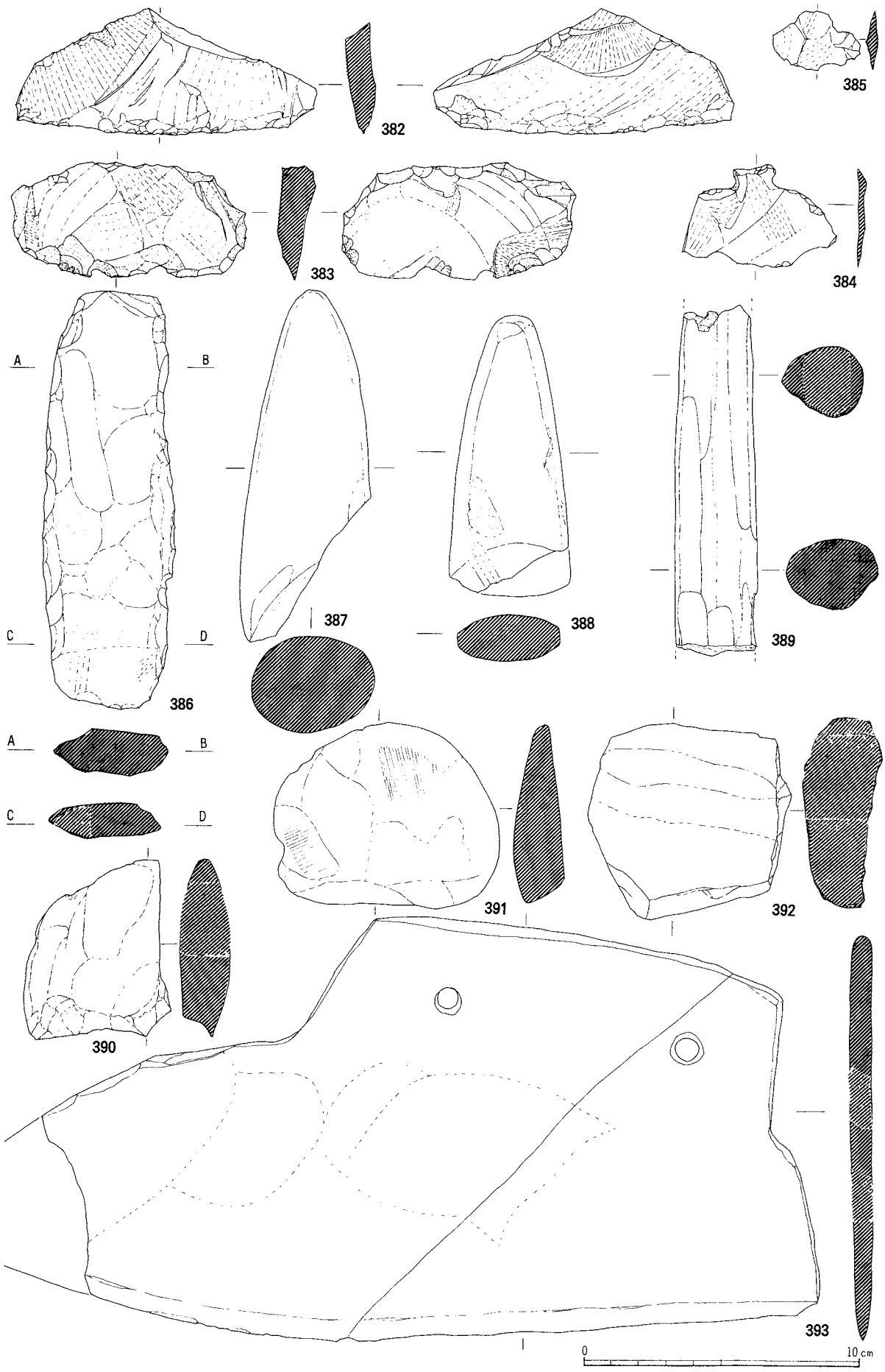
フレイク（385）　長さ3.0cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmある。凸基石鏃を意図した未製品と思われる。黒灰色を呈する。サヌカイト製。

打製石斧（386）　全長15.1cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm。側縁を粗く両面から打ち欠いている。裏面下半が、打ち欠かれて薄くなっており、その側縁に敲打痕が認められる。このことは、薄いまま使用したことを意味する。刃部は、幅3.8cm、長さ2.3cmにわたり研磨されている。裏面にも研磨痕が残る。土掘り具として用いられたものか。

磨製石斧（387・388）　387は、中央部の断面形が



第４－35図　C地区 縄文土器拓影・実測図（１：３）



第４－36図　C地区 石製品実測図（１：２）

円形をなし、全体の形が乳棒状をなすものである。長さ13.2cm、中央部幅4.8cm、厚さ3.5cmである。刃部は両面から研磨している。刃部の両側縁も研磨している。凝灰石製、388は、長さ9.8cm、幅4.6cm、厚さ1.6cm。中央部の断面形が扁平球状をなす。縦方向に研磨をして体部を薄く仕上げている。両側縁を研磨している。刃部は両面から研磨している。黒色を呈する。材質は、頁岩である。

棒状石製品（389）　残存長12.4cm、幅3.2cm、厚さ2.6cm。断面が楕円形をなし、9面にわたり縦方向に研磨する。緑灰色を呈し、材質は緑泥片岩である。

砥石（390・391）　390は、残存長9.4cm、残存幅8.0cm、厚さ2.5cm。表面、裏面とも研磨痕が残る。径15cm前後の円形の板石のうち約¼が残る。淡緑灰色を呈する。材質は、砂岩である。391は、長さ9.8cm、幅12.2cm、厚さ2.1cmの丸味を持つ板石である。表面、裏面に研磨痕が認められる。暗緑灰色を呈する。材質は花崗片麻岩である。

凹石（392）　残存長11.0cm、幅10.2cmの凹石である。上面に研磨痕がある。暗褐色を呈し、材質は砂岩である。

大型石庖丁（393）　刃部推定32.7cm、幅15.2cm、厚さ0.8cmである。体部を両面から研磨している。側縁は、打ち欠いた後、研磨している。紐用の穿孔が2個施されている。径1.1cm。色調緑灰色を呈する。材質は、緑泥片岩である。

4、古墳時代

（1）土師器

甕（394）　口縁部が外反し、端部が上方に引き出される。口径18.2cm。口縁部をヨコナデし、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ調整する。

（2）須恵器

杯（395・396）　395は、杯蓋で天井部と口縁部の境に稜をもつ。口径15.6cm。396は、杯身で口縁部が内傾し、受部は短く水平にのびる。

（3）鉄製品

袋状鉄斧（434）　全長13.4cm、幅4.9cmでほぼ長方形をなし、先端部は広がらない。断面は、楕円形をなす。

5、飛鳥時代

（1）須恵器

杯蓋（397）　宝珠つまみをもつ。口縁部内面にかえりをもつ。

6、奈良時代

（1）土師器

皿（398・399・402～405）　口縁部が内弯し、端部が先細るものをA類（398・399）、端部がつまみ上げられ内面に沈線をもつものをB類（402～405）に細分できる。B類は、口縁部をヨコナデし、底部外面をヘラケズリする。

杯（400・401）　口径に対して器高が高く、口縁部が内弯し、端部はまるい。

甕（406）　「く」の字状に開く口縁部は、わずかに内弯し、端部が角張る。

（2）須恵器

杯蓋（407）　平坦な天井部から直線的にのびる口縁部は、端部が下方に引き出される。

薬壺蓋（409）　宝珠つまみをもち、天井部は平坦で口縁部が直立する。

杯B類（408・410）　高台の付く杯を杯B類とする。408は、口縁部が外傾し、端部で外反する。高台は、低く垂直にハリツケられる。410は、口縁部が直線的に外傾し、高台は外方へふんばる。408は底部外面に「釋」と考えられる墨書がある。

杯A類（411・412）　無高台の杯を杯A類とする。口縁部が直線的に外傾し、底部が凹むもの（411）突出するもの（412）があるが、外面はともにヘラケズリされる。

皿（413）　底部が丸味をもち、口縁部は直線的に外傾する。底部外面ヘラケズリ。

円面硯（414）　推定口径18cm。脚部は、外反して開く。口縁部は、断面三角形で薄い。

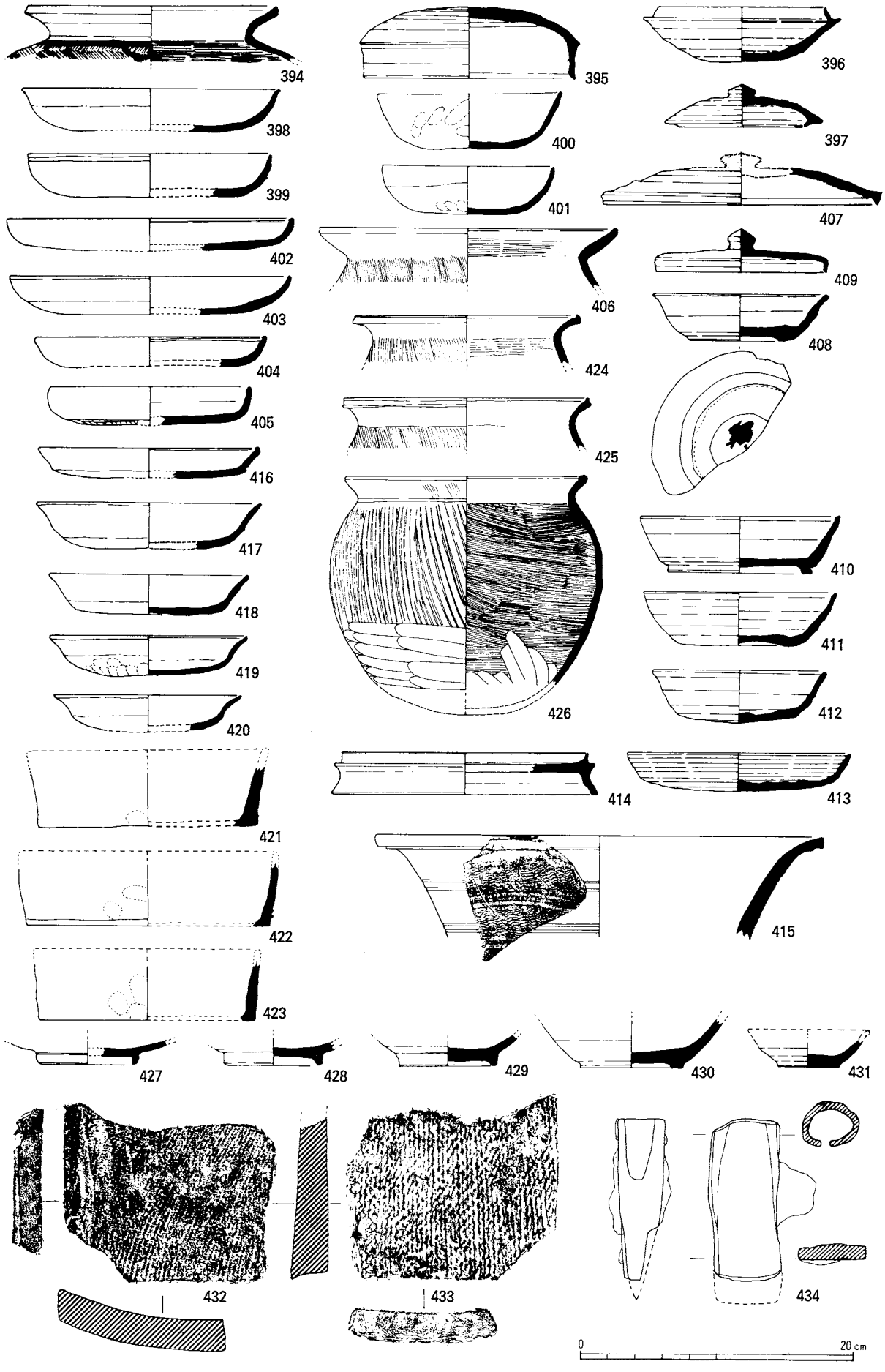
甕（415）　口縁部が直線的に外傾し、端部で外反し、端部が角張り外方に面をもつ。頸部に2条1単位の平行沈線と波状文を施す。

7、平安時代

（1）土師器

杯A（416）　口縁部が外傾し、端部が内側にまきこまれ、内面に沈線をもつ。口縁部ヨコナデ、底部外面乱ナデ。平安時代前半期。

杯B（417～420）　口径に対し器高が高く、口縁部が外反する杯を杯Bとする。口縁部をヨコナデし、



第４－37図　C地区 古墳～平安時代遺物実測図（１：４）

底部外面を乱ナデする。418は、内面に煤が付着する。

甕（424～426）　口縁部が大きく外反し、端部が上方につまみ上げられるもの（424・425）、口縁部が外反し、端部が内側に折り返され肥厚するもの（426）がある。前者は平安時代前期、後者は平安時代中期の所産であろう。

製塩土器（421～423）　平底の底部と、垂直気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内外面に指圧痕をのこす。口径16.8～18.0cm。橙褐色を呈し、砂粒を多く含む。平安時代前期。

（2）灰釉陶器

椀（427）　底部のみで、底径7.2cm。高台は、ハリツケ高台で、断面が三日月状となる。

（3）陶器

山茶椀（428～430）　底径7.2～7.6cm。高台は断面方形で、ハリツケられる。

山皿（431）　底径4.4cm。平底の小皿で、底部がわずかに段状となる。口縁部は、わずかに内弯して開くものと考えられる。

（4）その他

平瓦（432・433）　432は、推定幅24.4cm。厚さ2.4cm。凸面に平行縄目タタキ。凹面に布目痕が認められる。　（増田安生）

3　D・E地区

当地区は、杉垣内遺跡の西辺にあたり、堂ノ後遺跡に東隣する。堂ノ後遺跡の遺物出土様相と杉垣内遺跡A・B・C地区の遺物出土様相の間を埋める好資料を提供した。

1　遺構出土の遺物

1、縄文時代

後期深鉢（465）　口縁部が肥厚し、波状口縁となる。波頂部2条1単位の沈線による連弧状文が施される。調暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

2、弥生時代

（1）SK1

甕B－b（435・436）　甕の中で口縁部がゆるやかに外反し、口縁部端面に刻み目を持つものをB－b類とする。435は、口径16.0cmで、口縁部内面がヨコハケ、体部外面がタテハケ調整なされる。乳白色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。436は、口径17.6cm。口縁部内面をヨコハケ、口縁部外面と体部外面をタテハケ調整する。暗茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。胎土には長石等を含む。

壺C（437）　壺の中で、口縁部内面に突起を持つものをC類と呼称する。437は、口径17.2cmで口縁部が上下に引き出される。突起は3個1単位で4方向に施されていると推定される。1個の幅は8㎜で高さは5㎜である。口縁部端面には、10条1単位の櫛描波状文が施される。頸部には、10条1単位の櫛描横線が施される。口縁部は、ヨコナデされている。橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

2　包含層の遺物

受口状口縁壺A－a類（438）　受口状口縁をなす壺の中で口縁端部が丸味を持つものをA－a類とする。438は、口径9.6cmで、口縁部に2条1単位の凹線が施される。口縁部ヨコナデ、頸部外面をタテハケ目調整している。淡褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

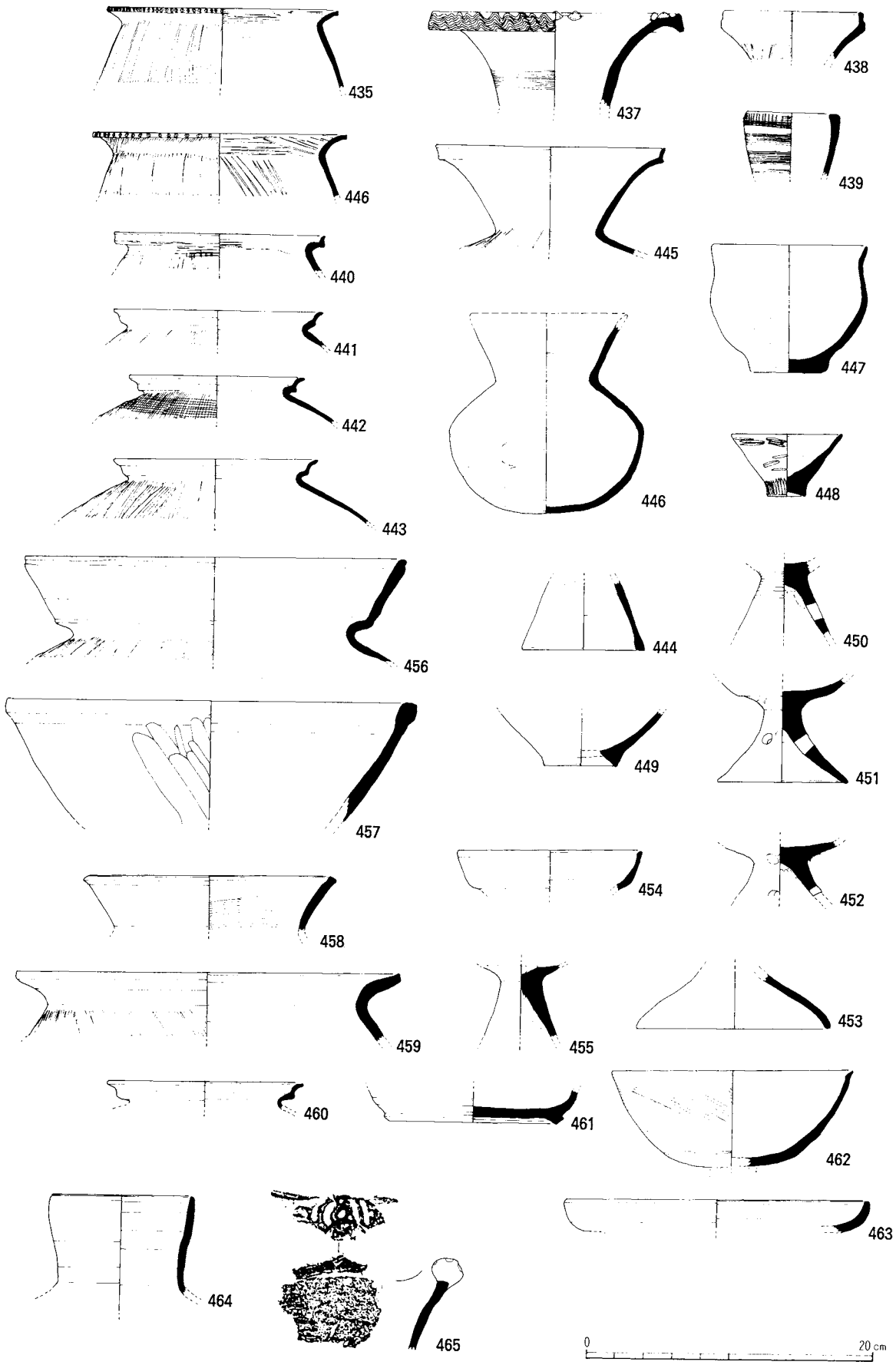
細頸壺（439）　口縁部端部が両側に拡張され、上端面を持つ。口縁部側縁に9条1単位の簾状文が施される。その下に5㎜間隔をあけ、9条1単位の櫛描横線が、3単位施される。淡褐色を呈し胎土・焼成ともに良好である。

3、古墳時代

（1）SK2

S字状口縁台付甕B類（440）　口縁部が上方に短く引き出され先細る。口縁部内面に櫛状工具によるヨコ方向の調整がなされる。体部外面は櫛状工具によるタテ方向の調整がなされ、頸部外面はヨコ方向に櫛状工具による調整がなされる。口径14.7cm。黒褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

鉢（447）　平底の底部から、ゆるやかに立ち上がる体部を持つ。口縁部は短く斜め上方に引き出され



第４－38図　D・E地区 遺物実測図（１：４）

る。口径10.7cm。器高8.8cm。淡褐色。

（2）ＳＫ３

Ｓ字状口縁台付甕Ｃ類（441・443・444）　頸部の屈曲が強く、口縁部が強く外反する類である。441は、口径14.6cm。頸部外面タテハケ。暗灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。443は、口径14.2cm頸部外面をタテハケ調整する。口縁部上段が長く引き出され外反する。暗灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。444は、脚台部である。外面は櫛状工具によるタテ方向調整される。底径8.3cm。淡茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

小型鉢（448）　口径7.7cm。器高4.3cmの小型の鉢である。上底の底部から体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。明褐色。胎土・焼成は、良好である。

高杯Ａ（450）　脚台部が細く、上部に櫛描横線を施すものをＡ類と呼称する。脚台部のみ残存。内面に指圧痕が残る。橙褐色を呈し、胎土・焼成は良好である。

高杯Ｂ（451）　脚裾部が大きく裾広がりになる類を高杯Ｂ呼称する。底部9.2cm。３方透孔を持つ。乳白褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

（3）ＳＫ４

Ｓ字状口縁甕Ｃ頸（442）　頸部の屈曲が強く、口縁上段も強く外反する。頸部外面は、タテハケ調整の後、ヨコ方向の櫛状工具による調整がなされている。口径12.2cm。白褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

２、包含層の遺物

壺（446）・鉢（449）・甕（454・458・460・463）・高杯（452・455・462）・須恵器壺（464）等の古墳時代のものと、奈良時代の土師器甕（459）・須恵器杯Ｂ（461）等がある。　（増田安生）

4　Ａ地区の木製品

今回Ａ地区で検出された旧河道は、幅５～７ｍ、深さ１～1.5ｍの規模をもつもので、その埋土中から土器・木製品が多量に出土した。それら木製品は埋土下層から最下層にかけて所によっては折り重なるように大小様々な形で出土している。

さて、その木製品の種類であるが、実に多種多様であり変化に富むものである。ちなみにその内容を見ると建築部材、容器類、祭祀用木製品、服飾用木製品、紡織用木製品、農具、木簡、その他用途は不明だが何等かの加工が施されているものなどがあり、その中で代表的なものを選び報告することにした。そこで、それらの中には祭祀具、服飾具、紡織具などは「木器集成図録－近畿編－」[33]で型式分類されているものもあり、一応それに従い分類記述した。中でも祭祀用木製品の一つである斎串は多量に出土し、いくつかの型式分類が可能であるので以下にその型式分類について前記に準拠し述べておくことにする。

斎串の分類

両端の形状によって４型式に分類する。

Ａ型式　両端をそれぞれ一側面から鋭く斜めに切り落としたもの。

Ｂ型式　両端を主頭状につくるもの。

Ｃ型式　両端を主頭状、下端を剣先状につくる。

Ｄ型式　上記の３型式に属さないもの。

側面からの切り込み方によって８型式に分類する。

Ⅰ式　切り込みを入れないもの。

Ⅱ式　側面を割裂くように上端木口から割目を入れるもの。

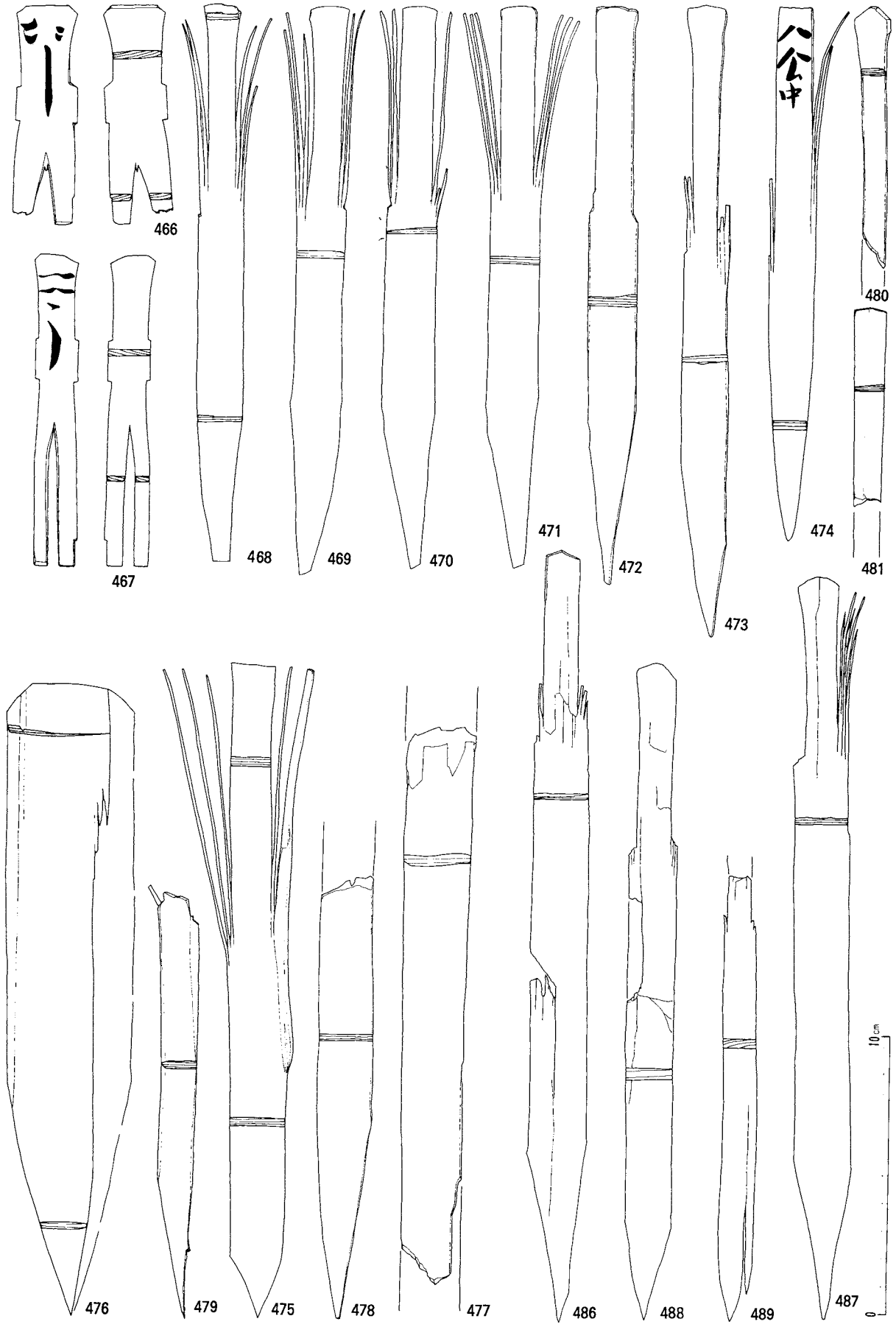
Ⅲ式　上端近くの側面の左右１個所に切り込みを入れるものを主とし、上端の斜面から切り込むものも含む。

Ⅳ式　上端近くの側面の左右２個所以上に切り込みを入れるもの。この場合１個所の切り込み回数は１回。

Ⅴ式　側面の左右２個所以上に切り込みを入れるもの。この場合１個所の切り込み回数が４～５回におよぶことがある。

Ⅵ式　両側面の左右対称位置を三角形に切欠くもの。

Ⅶ式　Ⅲ式とⅥ式が組合わさったもの。



第４－39図　SE23・24 木製品実測図（１，１：２）（SE23：486～489，SE24：466～481）

Ⅷ式　Ⅴ式とⅥ式が組合わさったもの。

以上が基本的なものであるが、さらにその中でいくつかの変化を３つに分けることが出来る。

a　側面の左右１個所を一辺が長く、一辺が短い切欠きを入れるもの。

b　基本的には圭頭状だが何等かのことで一側面から斜めに切り落とすことになったもの。

c　上端部が平らなもの。しかし、型式的にはＣ型式に含まれると考えられるもの。

１．井戸の木製品

ＳＥ23・24からは祭祀用木製品やその他木製品が出土しており注目される。特にＳＥ24からは祭祀用木製品として人形を２点をはじめ、まとまった形で斎串が出土している。

（１）ＳＥ23出土木製品

斎串（486～489）　井戸枠内から５本が出土しているが、型式が解るのは４点である。486～488は上端部が圭頭状、下端部がやや長めの圭頭状であり、切り込み箇所が同じことなどからＢⅢ型式に属し489は下端部が短めの剣先状を呈することからＣⅢ型式に相当するかもしれない。

（２）ＳＥ24出土木製品

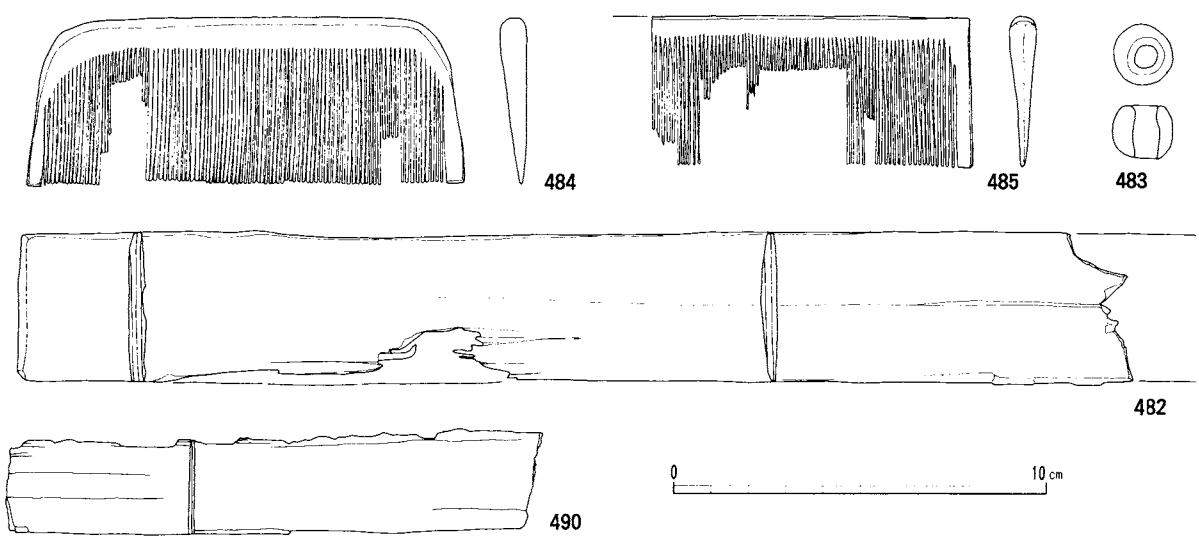
ＳＥ24からは祭祀用木製品として井戸枠内より人形２点、斎串が10点出土し、掘形内からも斎串が４点出土している。その他としては横櫛２点や薄板状の木製品などが出土している。

人形（466・467）いずれも頭部を台形状に作り、一辺が長く１辺が短い切欠きで頬がやせ細り怒り肩の表現をとり、脚はＶ字形の切り込みで表現するものである。ＢⅡａ型式に属すると考えられる。いずれも墨書によって目鼻や口が表現されている。466は長さ7.9cm、幅2.2cm、厚さ0.21～0.41cm。467は長さ11.2cm、幅1.6cm、厚さ0.17～0.23cmでいずれも杉材である。

斎串（468～477）468・473は上端部がやや平らであるが圭頭状を意識しており、下端部が剣先状であるところからＣⅢ式に相当すると考えられる。468～471は剣先状の下端先端部がカットされているのが特徴的である。474はＣⅢｃ型式と考えられるもので墨書で「八公中」と記されている。475は上端がやや平らであるが、明らかに圭頭状を意識しており、下端部も圭頭状でありＢⅢ型式に属するものであろう。476は上端が台形状に作られており、下端部も圭頭状に近い剣先状であるところからＤ型式に属するものではあるまいか。477～481はいずれも上下を欠損しており、型式分類は不明である。

その他木製品としては横櫛（484・485）と、板状木製品（482）、中央に孔のあいた小玉（483）が出土している。しかしこの小玉は木の実の可能性もある。横櫛（484・485）は２個体とも真名子曲物内から出土しており、484はＡⅡ型式、485はＡⅠ型式に属するものである。

以上の木製品のうち、人形、斎串（468～477）が井戸枠内出土、斎串（478～481）は掘形内から出土



第４－40図　SE23・24 木製品実測図（２，１：２）

している。

2．旧河道の木製品

1．斎串

旧河道からの出土斎串は完形、破片も含め、169点に達する。そしてその出土範囲は第4－12図を見て解るようにほぼ旧河道全域から出土したといっても過言ではない。以下、斎串の型式分類に従い述べることにしたい。

斎串ＡⅠ型式（491）　この型式については1本の出土例しか認められない。割材そのままの使用である。

斎串ＢⅠ型式（492・493）　いずれも両端が圭頭状の典型的なものであり、加工痕はよく残る。

斎串ＢⅢ型式（494～503）　両端を圭頭状にするのがＢ型式の特徴であるが、494を除けばその殆どの下端部がやや長い圭頭状を成している。497はその中心から割れ半分しか遺存しておらず496・499はいずれも上端部や下端部が欠損しているがこの型式と推定される。両側面からの切込みは各々1回づつで、割材のままのものと、加工痕がよく残るものがある。

斎串ＢⅢａ型式（504）　出土例は1点のみであるが、この型式の特徴は切り込み個所に一辺が長く一辺が短い切欠きが施されていることである。

斎串ＢⅦ型式（505・506）　506の他は上半部を欠損している。506は切込みについては不明だが、両側面の三角形の切欠きがよく残っている。

斎串ＣⅢ型式（508～529）　両端部が残るものもあれば、両端部のいずれかが欠損しているものもある。欠損しているものは推定である。508は上端部が圭頭状、下端部が剣先状を呈するこの型式の典型的なものであり、それぞれ両側面からの切込みは1～3回までである。513は下端部を片面から削り剣先状にしてあるものである。薄いものは両側面、平面とも加工痕がよく残るものがあるが、中には割材そのままのものも数点ある。

斎串ＣⅢａ型式（530・531）　いずれもＢⅢａ型式の下端部が剣先状になっているものである。530は側面の一部が破損してはいるが、両者とも明瞭な加工痕をもったもので残りの状態は良好である。

斎串ＣⅢｂ型式（532・533）　基本的に上端部を圭頭状にするべきものが、何等かの制作上の過程で一側面を斜めに切落としたものと考えられる。

斎串ＣⅢｃ型式（534）　ＳＥ24井戸枠内出土の斎串474と類似するもので、上端部は平らである。しかし、その他の形状及び成形方法は基本的にＣⅢ型式と同じであり、Ｃ型式の一部としてとらえられると考えるものである。

その他の斎串（535～539）　535を除きいずれも下半部を欠損するもので型式は不明といわざるを得ないものである。しかし、535はわずかに側面に三角形の切欠き風のものが見えるところからＢⅦ型式かも知れない。536～538もＢⅦ型式の可能性がある。539は一側面にだけ切込みを施している特異なものである。

2．祭祀用木製品

旧河道からは斎串の他に祭祀に使用されたとみられる木製品が数点出土しており、特に刀形・刀子形や、陽物などはまとまった形で各グリッドから出土している。

人形（540）　頭部を台形状に、脚部をＶ字形に表現したのみのもので、肩部の表現は見られない。Ｃａ型式とでもいえるかも知れない。

陽物（541～543）　541～542は割材の一部を利用して加工したもので、543は前者に比べ細く心持丸木を使ったものである。

馬形（544）　背を窪める表現だけの裸馬であり、頭部は欠損する。Ａ型式に相当すると思われる。

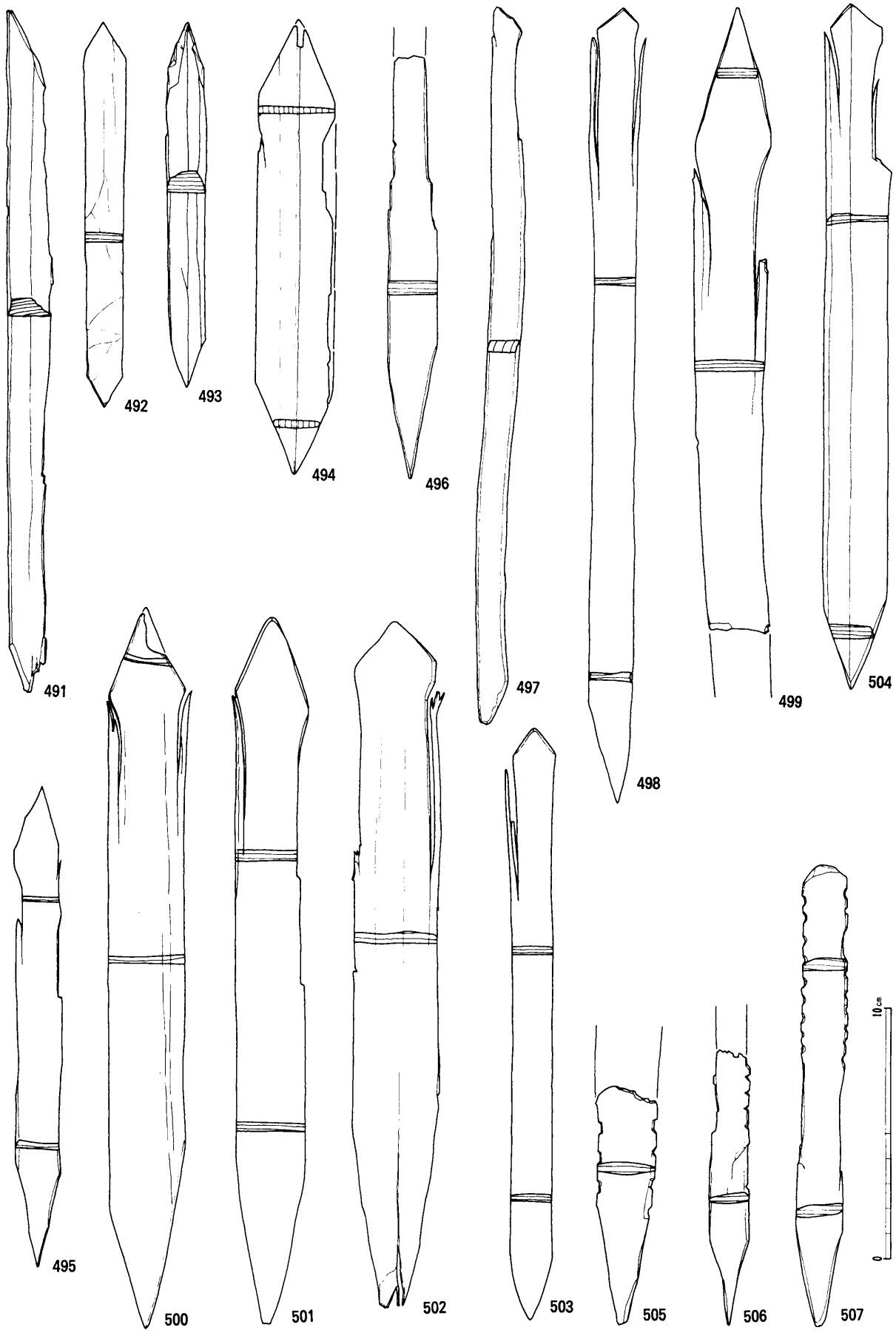
刀子形（545）　片面を比較的丁寧に削り刃を表現したものでＡ型式に属する。

刀形（547）　いずれも柄を表現せず、刀身と茎のみをかたどるもので、547は現代の包丁の形に似るものである。両者ともＢ型式に相当すると考えられる。

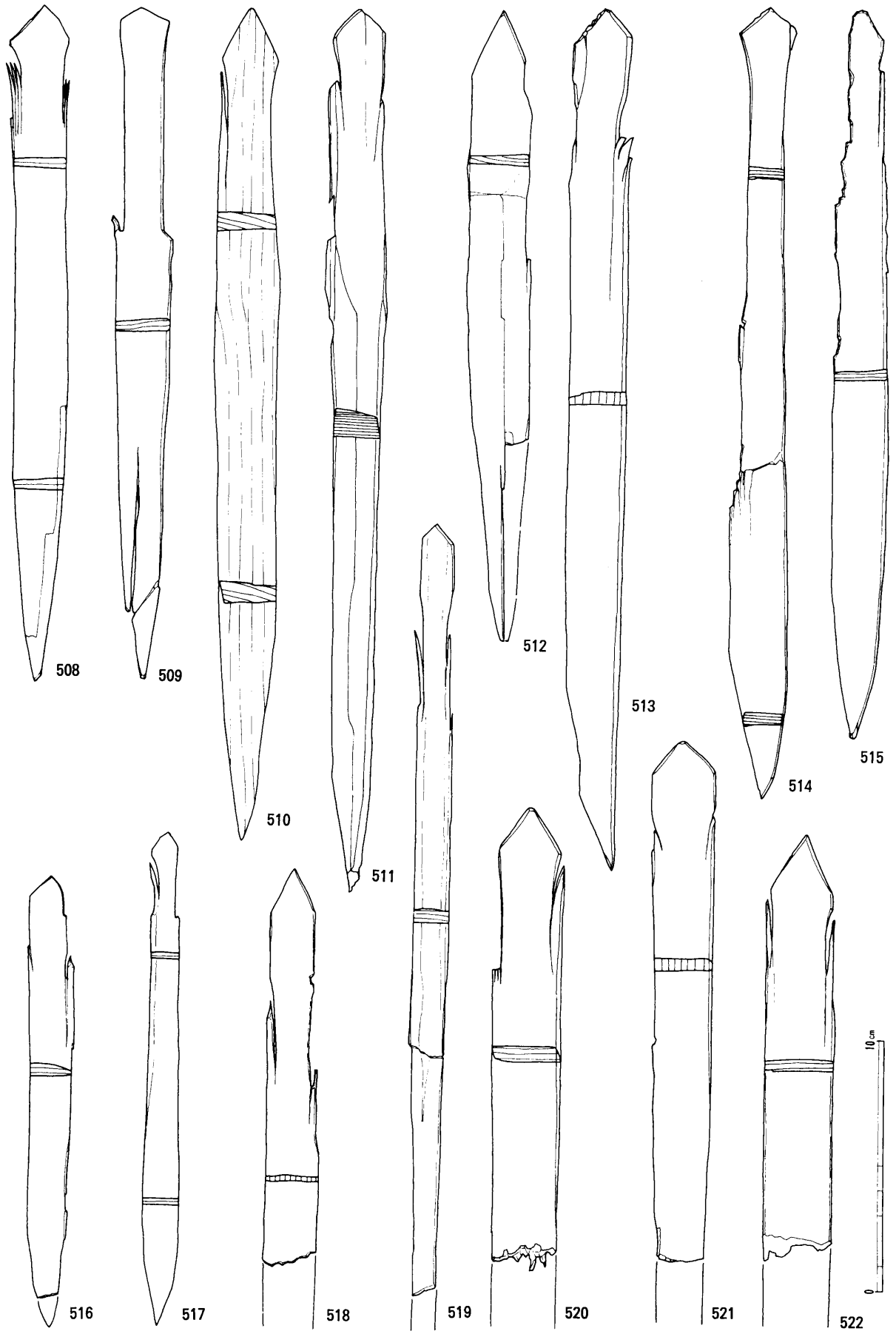
3．荷札・木簡

荷札として使用されたと考えられる板状の木製品、及び木簡が数点出土している。552には墨書が認められたが、548～551までについては文字が認められなかった。

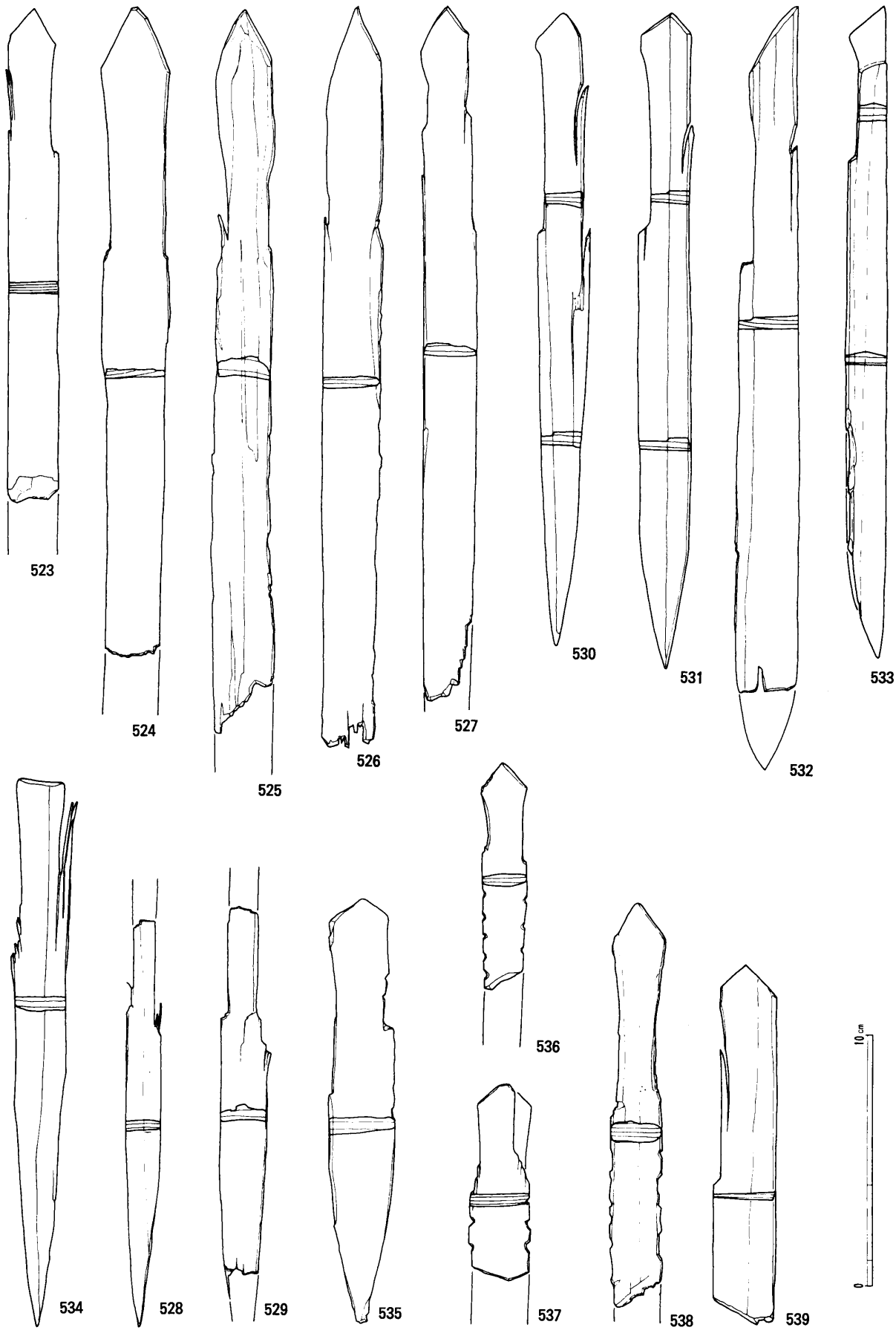
荷札（548～551）　いずれも基本的には頭部が台形状をなし、上端部に紐を巻いたであろう切り込みがある。549にはその紐の痕跡と思われるものが残っ



第４－41図　旧河道 斎串実測図（１，１：２）



第４－42図　旧河道 斎串実測図（２，１：２）



第４－43図　旧河道 斎串実測図（３，１：２）

ている。

木簡（552）　墨書痕が残るもので、肉眼での判読は「村」の一文字であるが、赤外線カメラによれば「□村七月廾」と判読出来る[34]。「□」については文字であることは確かであるが判読は不可能であった。

4．容　器

容器としては、材を直接刳り貫いて作る刳物と、薄板を円筒形に曲げ、両端の重ね合わせの部分を綴合わせて、これに蓋板や底板を接合させた曲物、それに、少量ではあるが、轆轤によって整形した挽物と考えられるものがある。

（1）挽物

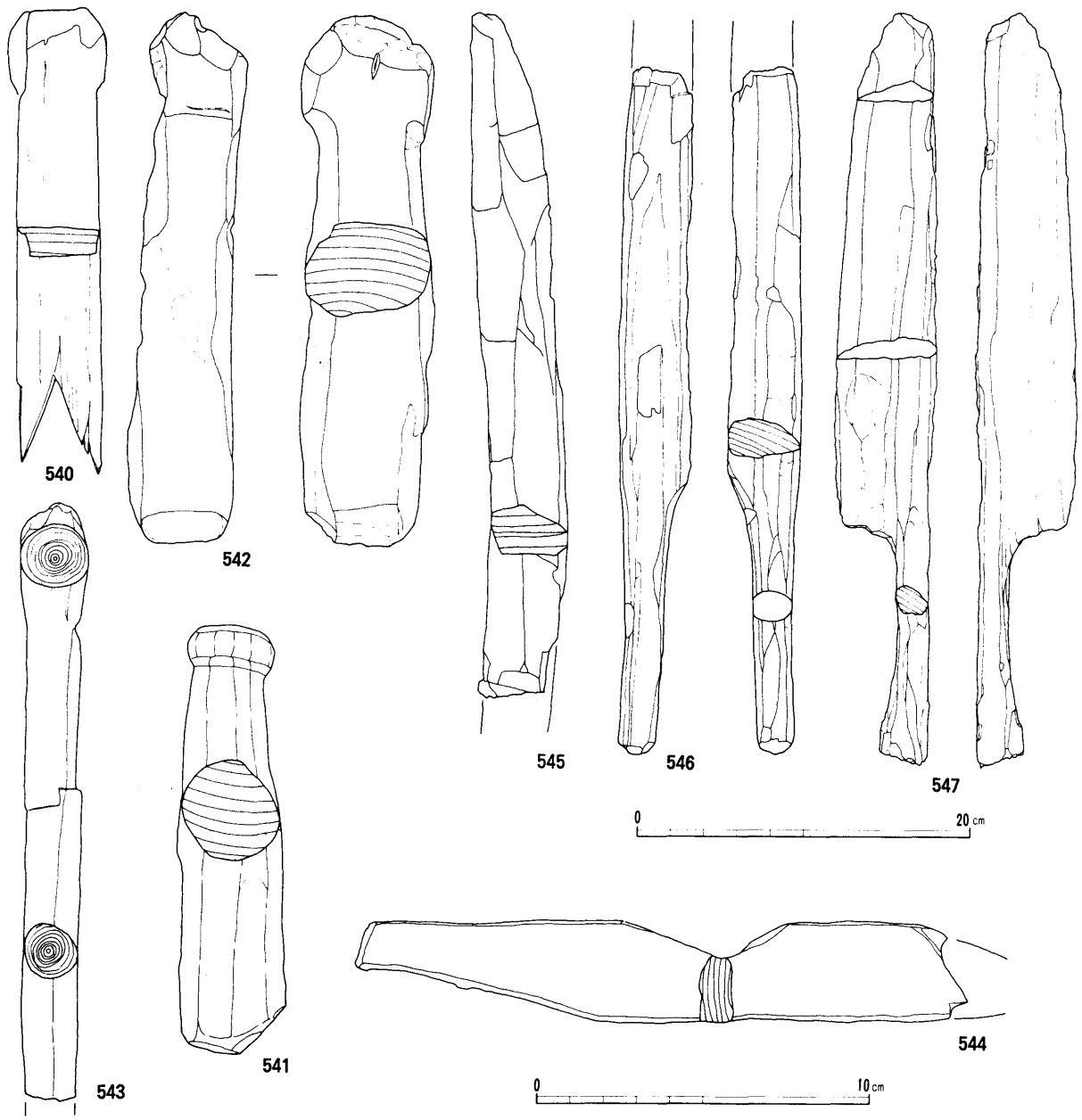
蓋板（554）　中央部に円孔をもつもので、さほど深く挽かれてはいない。

コップ状木製品（560）　芯取りされる完形のものである。挽かれたにしてはややいびつな円筒形をなすが一応挽物として考えた。

（2）刳物

蓋板（553）　一応刳物として考えたが、或いは挽物としての未完成品の可能性もある。削り痕跡が明瞭に残る。

杓子（559）　杓子としてはその刳り込み部分がやや中央部でなく偏っているのが特徴といえる。



第４－44図　旧河道 祭祀用木製品実測図（540～545は１：２，546・547は１：４）（540：人形，541～543：陽物，544：馬形，545：刀子形，546・549：刀形）

小形角鉢（561）　刳り込み部がきれいな台形状をなすもので残りは非常に良い。

長方形槽（555～558）　555・556はいずれも½及至は⅓が欠損するものであるが、555は短辺の口縁部が厚く、556は長辺・短辺ともにほぼ均一に近い厚さを持つ。両者とも表面は荒れており加工痕の残りは悪い。557～558は短辺の片面が面を成しているものである。558は槽内底部の磨滅がひどく、残りが非常に悪い。

（3）曲物底板

曲物の底板は図示したものの他、特に円形曲物の底板の出土は多い。楕円形のものは図示したものの他でもその数は非常に少ない。

円形曲物底板（562～566）　564はＳＥ23の井戸枠のあて材として使用されていたものである。562・563は底板内面の周縁を一段低く作ったものであり、ここに側板を立てるものである。いずれも桜樹皮を使用したと思われる痕跡が残る。566は釘で結合させる曲物の底板であり、竹釘が1ケ所残っている。

楕円形曲物底板（567～568）　いずれも底板内面の周縁を一段低く作ったもので、結合痕跡の小孔が明瞭に残る。568はＳＥ23のあて材である。

5．農　具

農具の出土量はさほど多くはないが、比較的良好な資料となるものが含まれている。

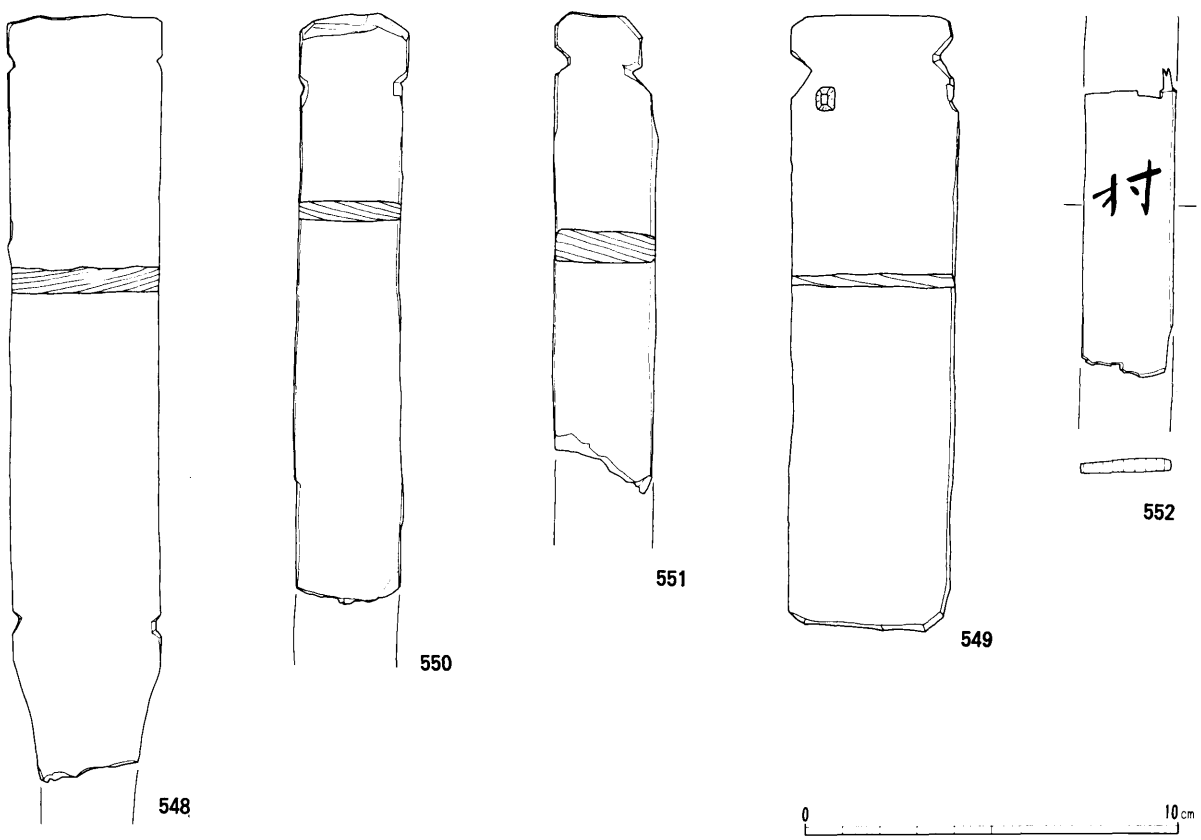
鋤身（569）　表面の腐蝕が激しく残りが悪いが、恐らく柄と一体となる鋤であろう。左右の肩幅が多少不均衡である。

ナスビ形二股着柄鋤（570・571）　いずれも片側だけ遺存したものであるが、いわゆるナスビ形を呈している。570は表面の残りの状態が良く、その加工痕跡は明瞭に残り、作りの良さがうかがえるものである。

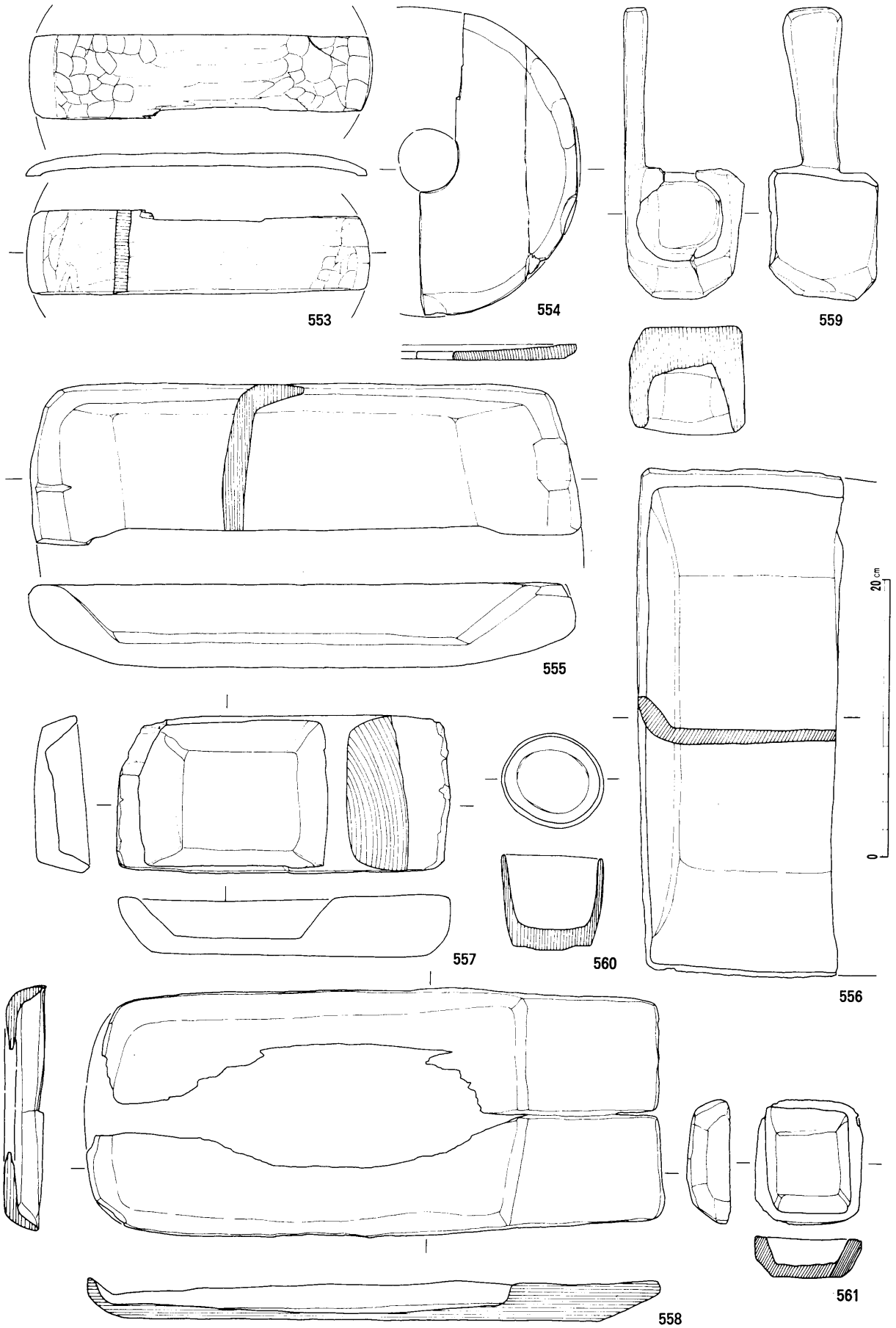
木錘（572）　材の一ケ所に孔をあけて紐を通すようにしたものであり、木錘として使いやすい形に加工してある。

田下駄（573・574）　いずれもいわゆる枠型（オオアシ）に属するものであろう。573は前壺が左に片寄るもので、前壺前方に横木などを縄でしばりつけて固定させるための小孔が2ケ所設けてある。

竪杵（575・576）　両者とも断片であり、576はさらにその半分の残りのみである。いずれも心持丸太



第4－45図　旧河道 木簡実測図（1：2）（548～550：荷札，552：木簡）



第４－46図　旧河道 容器実測図（1′，１：４）　（553・554：蓋板，555・556・558：長方形槽，557：小形槽，559：杓子形木製品，560：コップ状木製品，561：小形角鉢）

材でつくられ、576の掲部先端は丸い。

6．その他の木製品

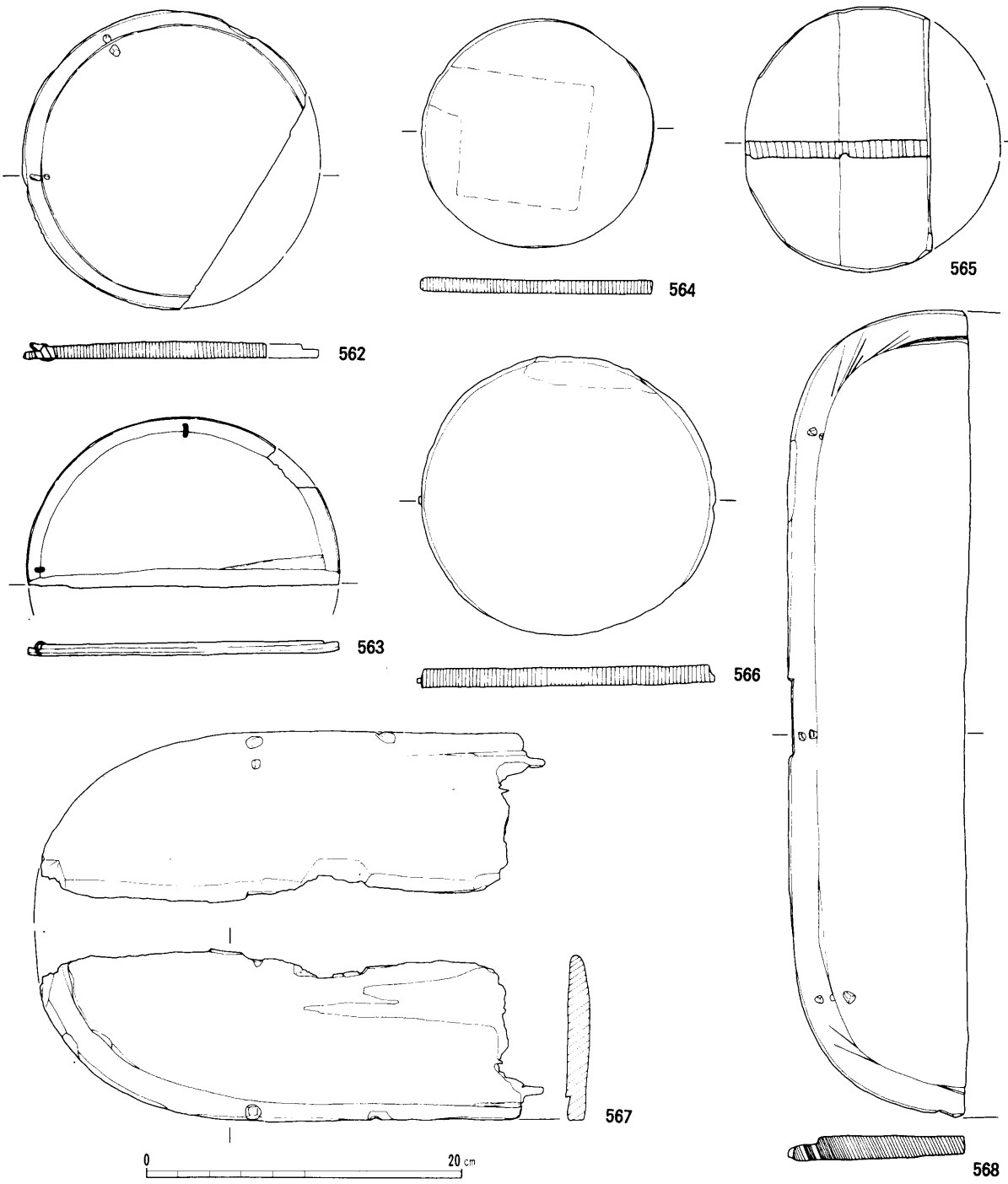
その他、名称や用途が明らかなものや、用途は不明であるが、その形状や加工が明瞭なものも数多く出土しており、以下に代表的なものを挙げることにする。

下駄（577）　台の前縁部及び後縁部ともに半円形で、前壺が左に片寄り、後壺が後歯の前にあけたものでＢⅡｄ型式に相当するものと考えられる。

糸巻（582・583）　糸巻の枠木である。４本の枠木のうちの個体は別々であるが１本である。いずれも２ケ所の結合部間に浅い刳形を入れるもので、ＡⅢ型式に属するものである。

横櫛（584・585）　584の肩部は角張るものでＡⅠ型式に、585は肩部に丸味を持つＡⅡ型式に属するものと考えられる。

その他、581は杓子型木器、580は用途不明だが何かの栓に用いたのであろうか。578・579はいずれも



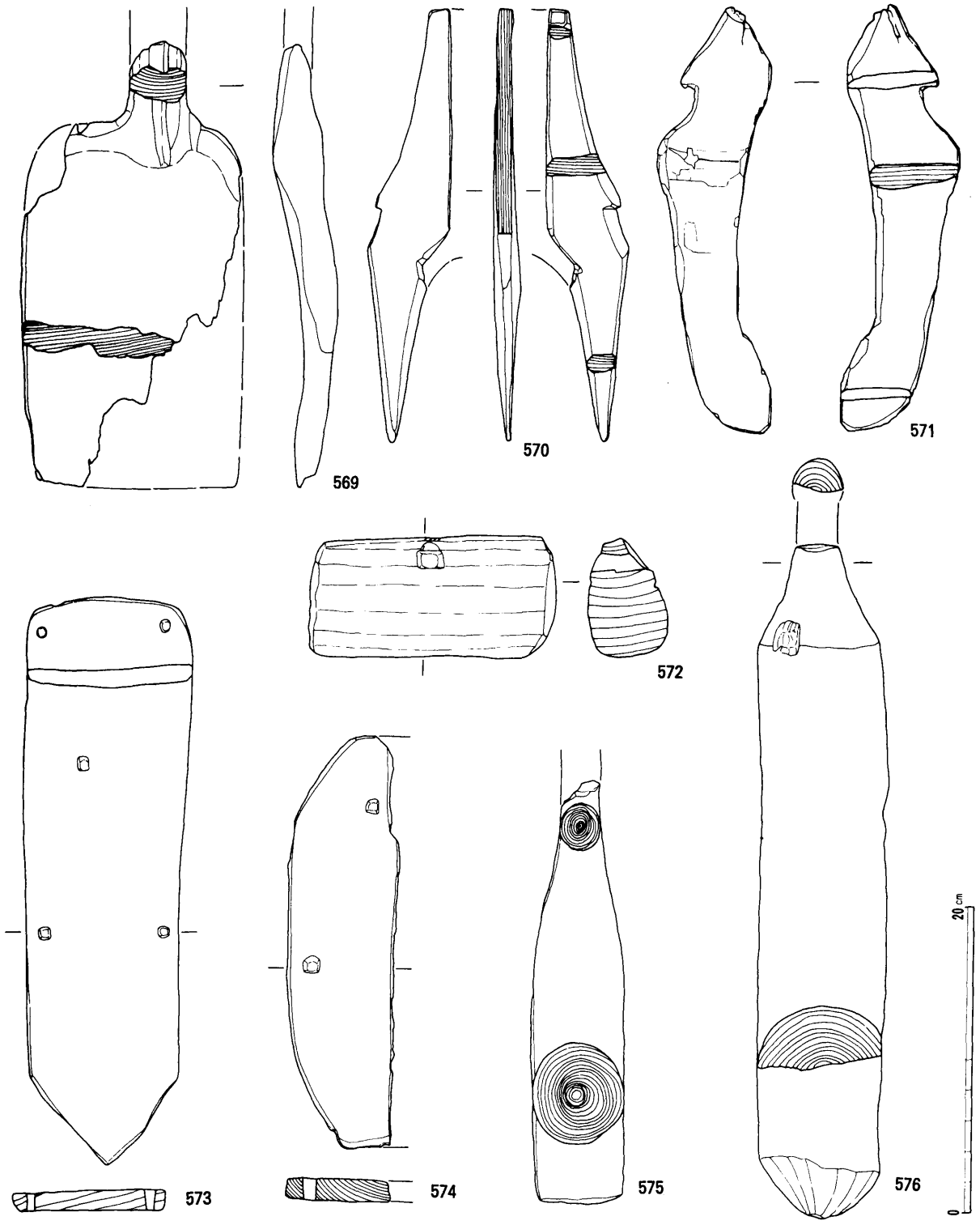
第４－47図　旧河道 容器実測図（２，１：４）（562～566：円形曲物底板，567・568：楕円形曲物底板）

用途不明であるが、579は紡織具の一部かも知れない。　（河瀬　信幸）

3．ＳＥ24　井戸枠材

井戸枠の構造については、遺構の章で述べられているが、ここでも簡単に触れておきたい。まず西面と東面に横板を四段置く。北面と南面には横桟を渡し縦板を置く。横桟は上下に二段あり、下の桟で縦板を支え上の桟を縦板の内側に当てる。横桟の両端は東西の横板で挟んで固定する。縦板は裏込め板を兼ねているのか二重になっている。

南面



第４－48図　旧河道 容器実測図（１：４）（569；鋤身，570・571：ナスビ形二股着柄鋤，572：木錘，573・574：田下駄，575・576：竪杵）

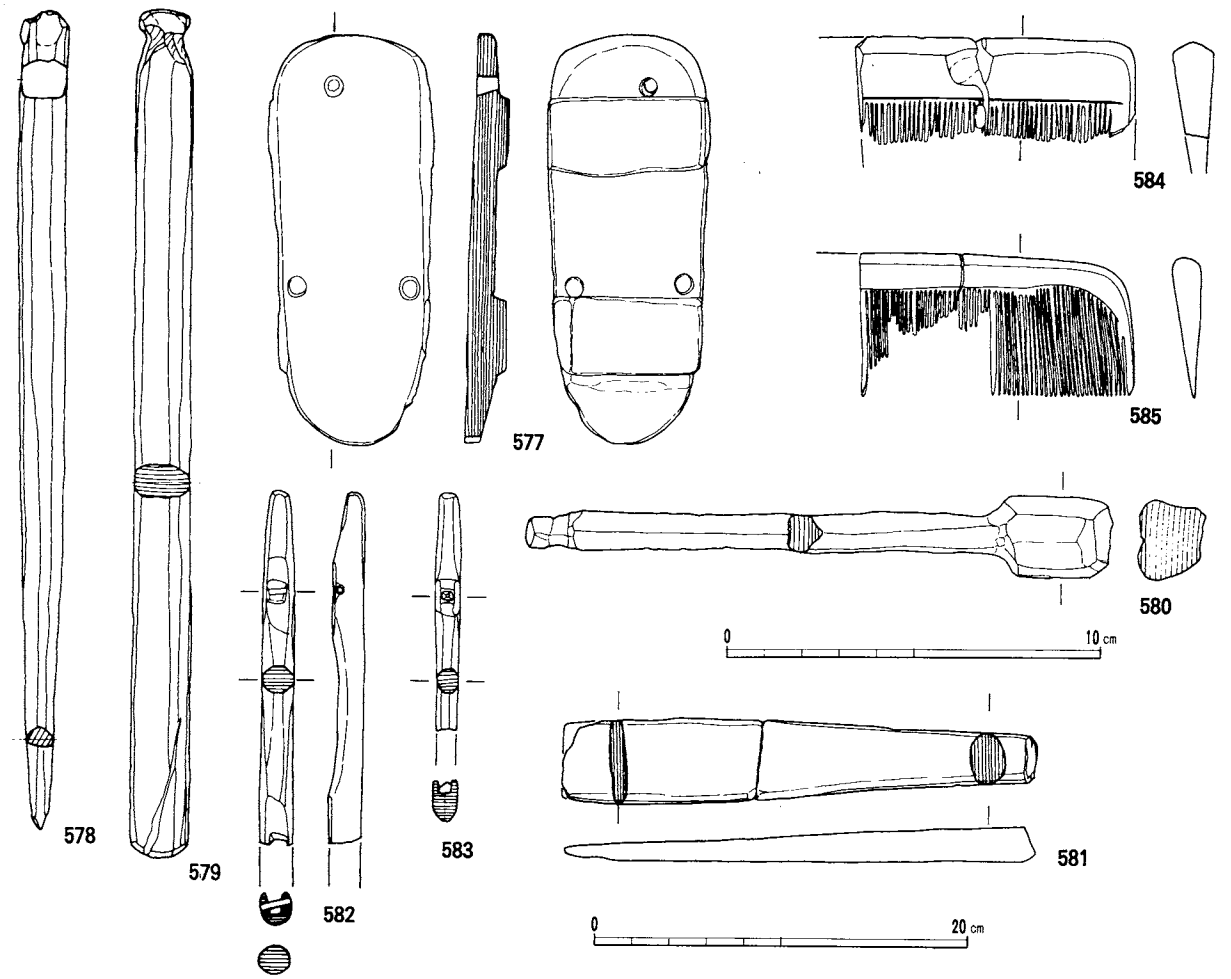
縦板は現存長73.4cm～104.0cm、幅17.0cm～31.6cm、厚4.6cm～6.8cmの板材を使用している。木取りは全て板目取りである。加工は大半が手斧によるハツリであるが、削り加工を施したと思われるものもある。3個体がほぞ穴を持っており転用されたものと思われる。横桟は上段が長さ122.4cm、幅17.0cm、厚さ7.2cmを測る。木取りは柾目取りである。手斧による加工が施されているが遺存状態が悪く不明瞭である。両端にはほぞをもつ。両方とも相欠きほぞであるが、一方には溝状の切り欠きがある。その間隔は94.5cmである。下段は長さ117.2cm、幅10.0cm、厚さ7.1cmを測る。心材を用いている。手斧による加工が施されている。両端に相欠きほぞをもつ。その間隔は97.5cmである。

北面

縦板は現存長56.0cm～90.0cm、幅15.0cm～36.0cm、厚2.5cm～6.5cmの板材を使用している。木取りは木口取りの一点の他は全て板目取りである。加工は大半が手斧によるハツリであるが未加工のものもある。4個体がほぞ穴を持つか、もしくは角を落としており転用されたものと思われる。横桟は上段が長さ122.0cm、幅7.5cm、厚7.0cm、下段が長さ119.0cm、幅7.7cm、厚7.0cmを測る。木取りは二点ともに柾目取りである。二点とも両端に相欠きほぞを持つ。その間隔は上段が94.0cm、下段が94.5cmである。

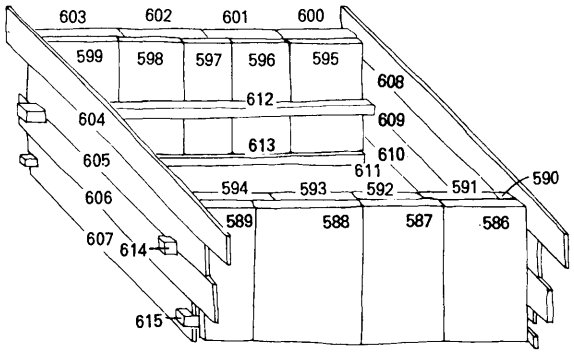
西面

横板四段が遺存している。長さ113.0cm～160.2cm、幅17.2cm～26.7cm、厚3.4cm～5.5cmを測る。長さに大きな差があることがわかる。木取りは、不明瞭な一点を除いては板目取りである。加工は手斧によるハツリが施されているが、下段のものほど遺存状態が良く、上段のものほど不明瞭である。最下段のものは両端に目違いほぞの凹ほぞを持ち、隣壁の横桟の相欠きほぞを受ける。下から二、三段のものは接する辺にそれぞれ溝状の切り込みを持ち、二枚で一個のほぞ穴を構成して隣壁の横桟の相欠きほぞを受



第4－49図　旧河道 その他木製品実測図（577～579・581～583は1：4、580・584・585は1：2）

（577：下駄，581：杓子，582・583；糸巻，584・585：横櫛，578～580：用途不明品，）



第４－50図　SE24 井戸模式図

ける。

東面

横板四段が遺存している。長さ115.0cm～199.5cm、幅19.0cm～30.5cm、厚2.6cm～5.2cmを測る。木取りは、追柾目の一点を除いては板目取りである。加工は手斧によるハツリが施されているが、下段のものほど遺存状態が良く、上段のものほど不明瞭である。最下段のものは両端に目違いほぞの凹ほぞを持ち、隣壁の横桟の相欠きほぞを受ける。下から二、三段のものは接する辺にそれぞれ溝状の切り込みを持ち、二枚で一個のほぞ穴を構成して隣壁の横桟の相欠きほぞを受ける。　（田中久生）

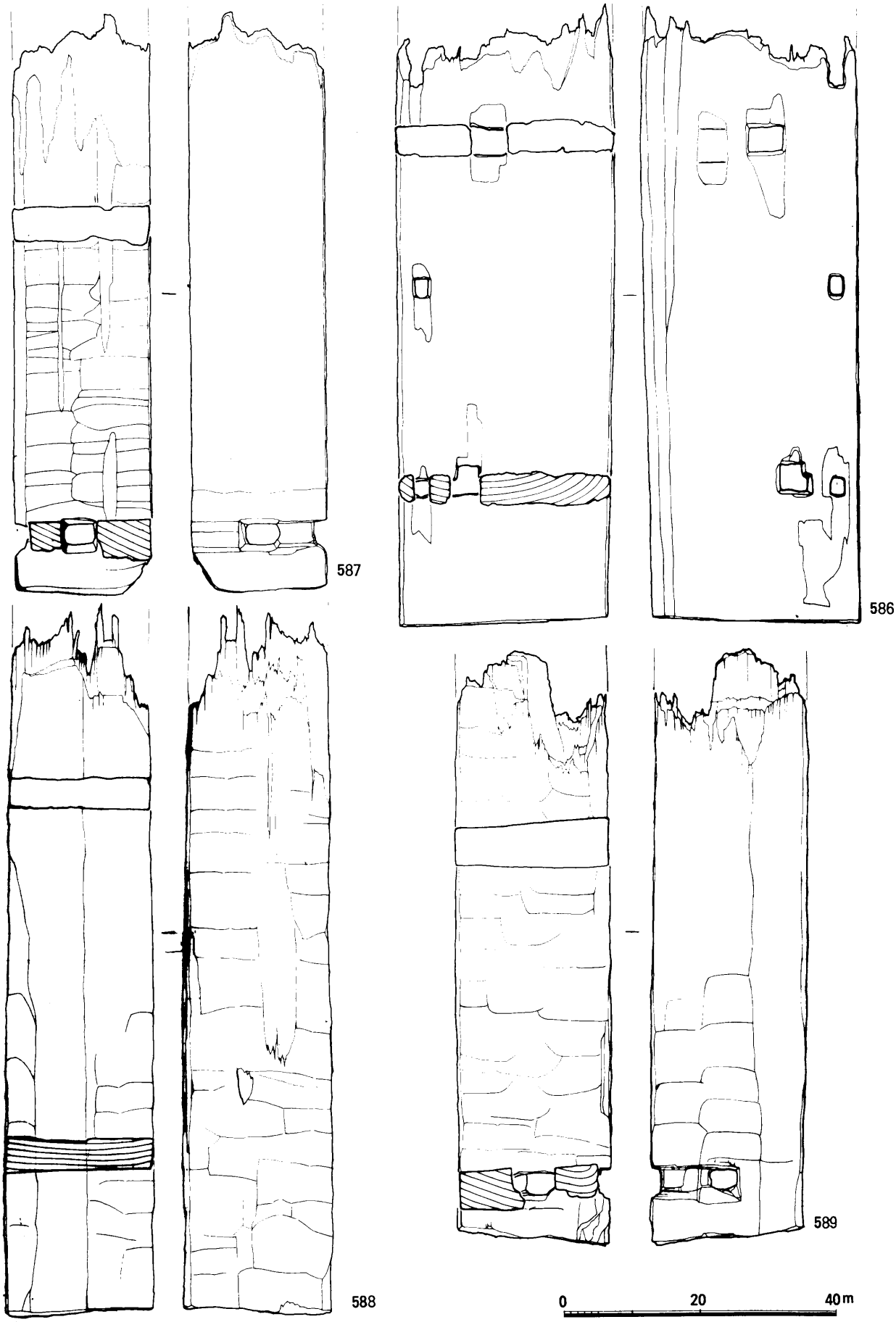
4．小　　結

1．遺構について

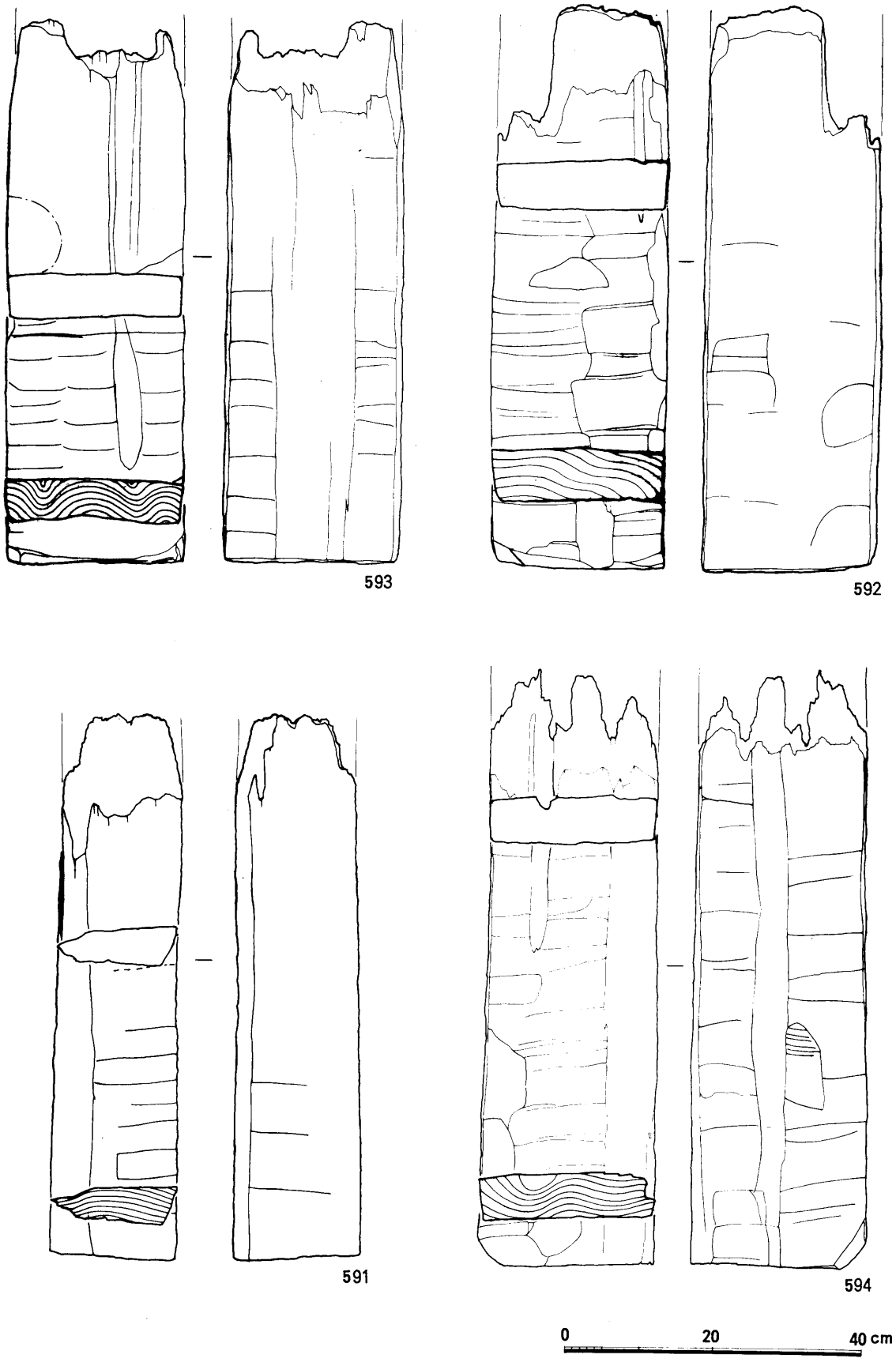
Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ地区いずれも線的な調査であり、広い範囲に広がるであろう杉垣内遺跡の一端を垣間見たに過ぎぬものであるが、一応の成果と呼べるようなものは得られたと考えたい。

Ａ地区については、その細長い調査範囲から見ると、旧河道に分けられた西側と東側では遺構の検出状況が違っている。西側では奈良時代後期の井戸や平安時代前期の井戸・柱列などが検出されたにすぎないが、東側では遺構の集中する箇所と疎らな箇所が見られるものの、古墳時代後期の竪穴住居群や奈良時代中期の竪穴住居、平安時代初期～前期・後期にかけての竪穴住居や掘立柱建物、土坑群などが検出されている。古墳時代の竪穴住居としては、伊勢寺扇状地を中心とする地域では現在まで検出された例がなく注目されるところである。杉垣内遺跡内には５世紀前半頃に築造されたと考えられる径45ｍを測る大型円墳である深長古墳があり、その周辺には前期から後期にわたる古墳及び古墳群が集中している地域であり、殊に後期に属する古墳群が山麓部や丘陵地帯に展開する。前期古墳も八重田古墳群や高地蔵１号墳などが点在する。従ってこれら古墳や古墳群を築造し営んできた人々の集落があったはずであり、そしてその規模は決して小規模のものではなかったであろう。今回の古墳時代、それも後期を中心とする竪穴住居の検出は古墳時代後期、つまり群集墳を営み始める人々の居住空間を知るうえで良好な資料といえる。しかし、前期の竪穴住居の検出例もない訳ではなく、Ｅ地区に１棟の検出があり、興味のあるところである。

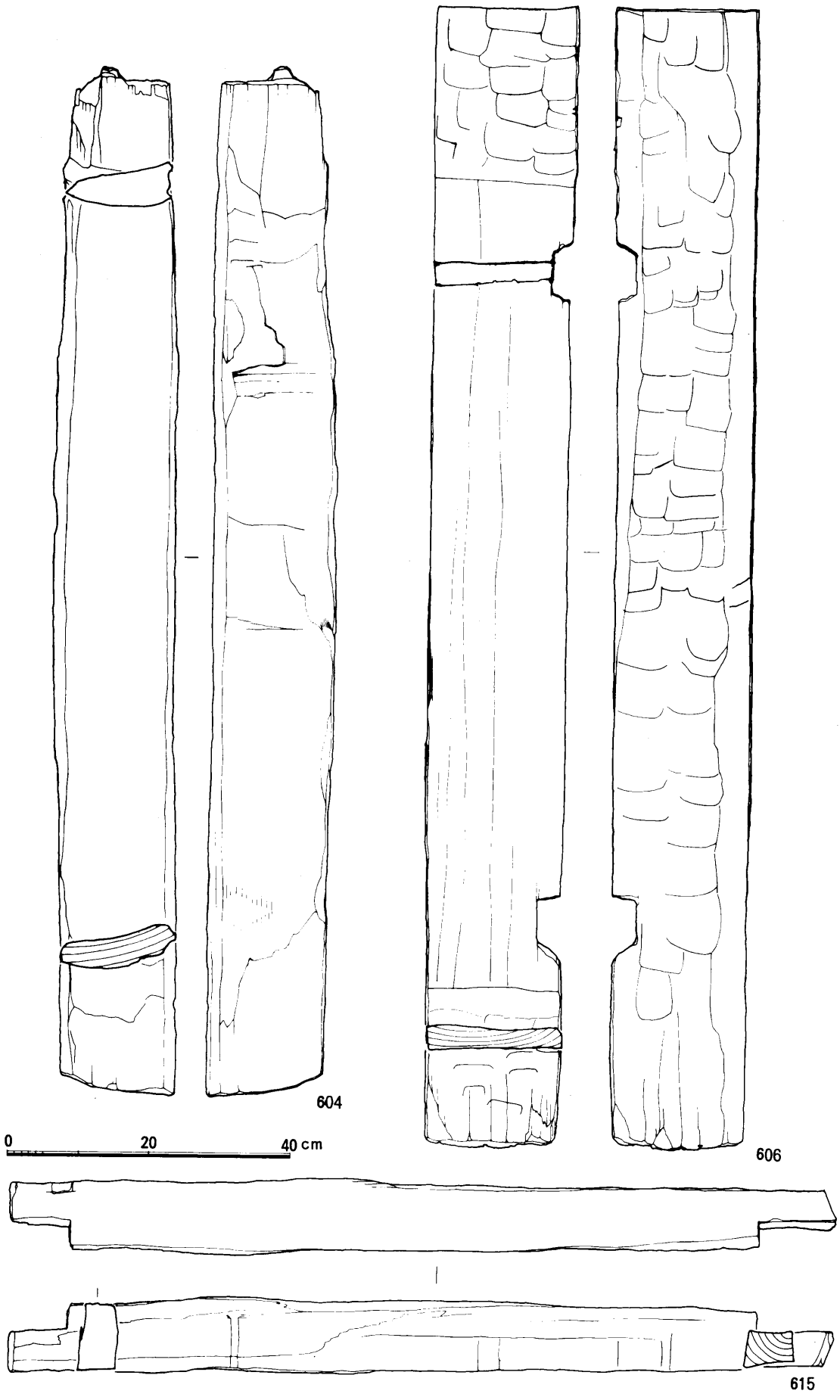
さて、Ａ地区旧河道の東側で検出された古墳時代後期の竪穴住居は11棟があり、各々２つのグループに分けられる程度の距離をもって検出されている。それは、一つはＳＢ１～３のグループであり、あと一つはＳＢ14～21のグループである。前者ではＳＢ３が他の２棟よりは少し新しいものの、古墳時代後期の居住空間の一つとしてとらえられようし、後者のグループも若干の時期差は認められるが、これも一つの居住空間として考えられる。さらに奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物や竪穴住居や土坑群もいずれかのグループに属しており、両者間にはわずかではあるが遺構の空白部分がある。これらの竪穴住居などの遺構が検出された地域は、南側を現在でも小川が流れており、北側も現在は水田ではあるが、その地形や水田の様子などからかっては明らかに流路であったと考えられる箇所であり、その両者に挟まれた一段高い場所に位置している。地盤もやや砂質ではあるが比較的安定しており集落を営む上で良好な場所であったに相違なく、複数の単位で古墳時代から平安時代まで断続的に生活が営まれていたと考えられる。



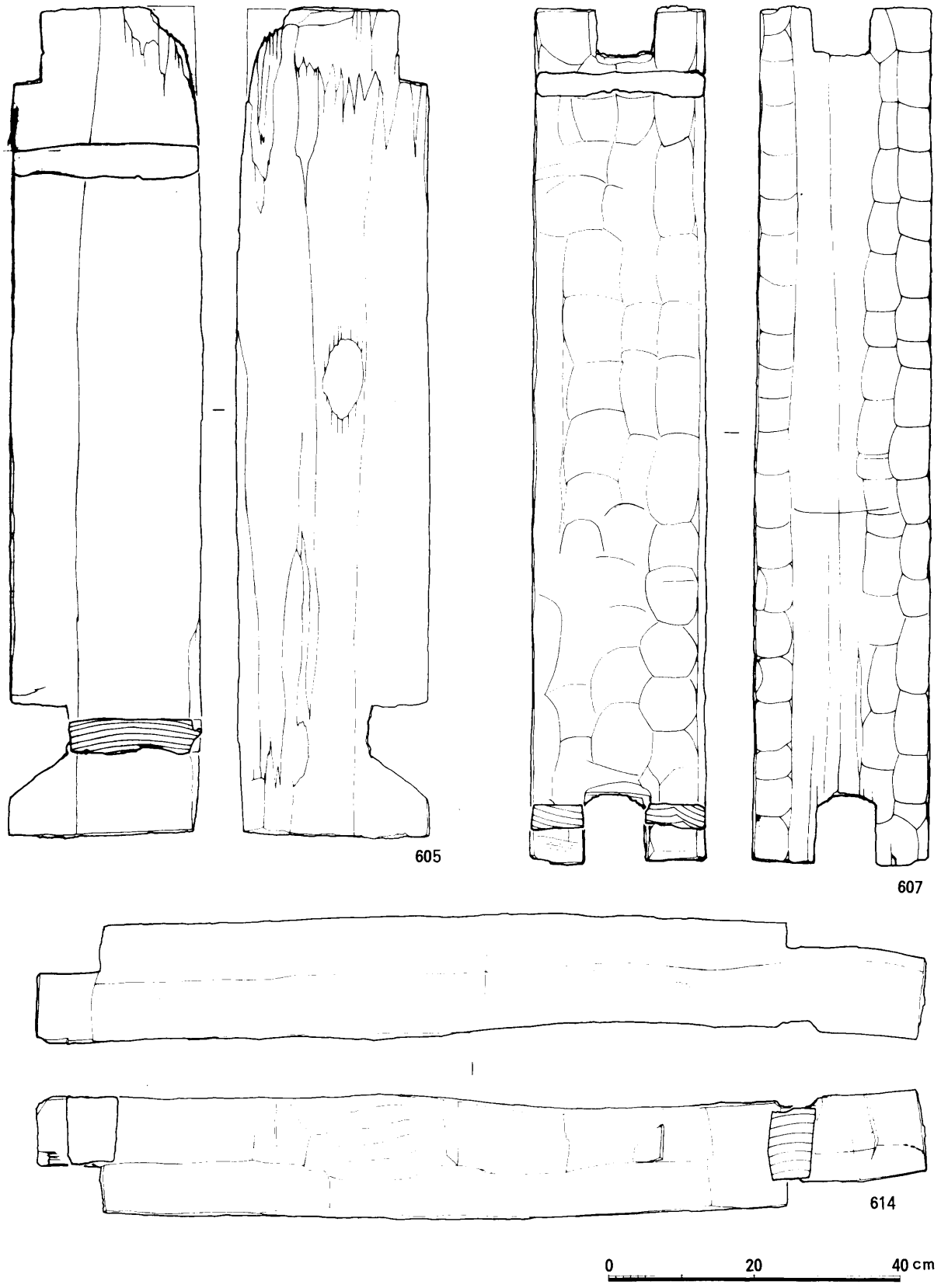
第４－51図　SE24 井戸材実測図（1，１：８）



第4－52図　SE24 井戸材実測図（2，1：8）



第４－53図　SE24 井戸材実測図（３，１：８）



第４－54図　SE24 井戸材実測図（４，１：８）

調査区中央やや西寄りに検出された旧河道はさして規模は大きくはないが、その特徴的な事はその埋土から実に多量の土器に混って、これも多量の木製品（自然木も含む）が出土したことである。旧河道はその最下層から若干の縄文土器片や弥生土器が出土し、下・中層からは古墳時代から平安時代にかけての土器が、上層からは平安時代末期から鎌倉時代にかけての土器が出土している。しかし、最下層でも奈良・平安時代の土器も若干含まれるところから場所によっては多少の攪乱もあったようであるが、いずれにしても旧河道の存続期間は弥生時代から平安時代にかけてであったと考えられる。出土した遺物で異彩を放つのは人形・陽物・刀形や多量の斎串などの祭祀用木製品、そして祭祀用土製品の土馬やミニチュア土器など、古代の祭祀に関わる祭祀用品の出土である。これら多量の祭祀用品が発見されたことは、旧河道を含む川岸周辺が祭祀に関わる特異な場所であった事を想定せしめるものである。

祭祀用木製品が出土しているのは他にＳＥ23・24と２基の井戸があり、いずれも井戸枠内から斎串が発見されている。これら井戸と斎串との関係については井戸鑿井時に何等かの意味で使用されたと考えられるが[35]、２基の井戸ともその発見箇所が井戸の底ではなくやや上層であり、鑿井時に使用されたとは考え難い。それにＳＥ24では人形２点が斎串と似通った深さから発見されており、人形のもつ性格からも、ＳＥ23・24では井戸を廃棄する時に斎串や人形を使用したのではないかと考えたい。しかし、これら２基の井戸が旧河道と隣接した箇所、殊にＳＥ23は旧河道と接する箇所で検出されており、平安時代前期には旧河道はその機能を失う程埋まっていたと考えられ、水の得やすい旧河道のすぐそばに井戸を鑿井したものと考えられる。ＳＥ23～25は（ＳＥ25は残りが悪いが）いずれも東西辺が横板、南北辺が縦板でそれも縦板を前後２枚ずつ並べるという特異なものである。県内では奈良～平安時代の井戸で、その木組みは、丸太刳り貫きを除けば縦板組か横板井籠組である。ＳＥ23～25はその２つの中間的な形態であり、この様な木組みの検出例は杉垣内遺跡が初例であり、井戸枠の構造を考える上で良好な資料となるものである[36]。ところで、市内草山遺跡では横板井籠組の内側に縦板組を重ね合わせた井戸が検出されており[37]、時代も平安時代前葉頃と考えられているところから、時期的にさほど差がない両者の構造的な面での比較検討が課題となるであろう。

Ｃ地区は深長古墳を含む地域であるが、西に延びる調査区は幅５ｍ程度のトレンチであり、検出された遺構も断片的なものが多い。しかし、中にはこの周辺地域を解明する上での良好な資料も提供してくれている。

深長古墳築造前の箇所からは弥生時代中期後半と考えられる竪穴住居が４棟程検出され、土坑も検出された。深長古墳は長年に亘る土取りのために墳丘の一部を残し削平を受けており、殊に東側ほど激しく、竪穴住居も削平前には何棟か残っていたのではあるまいか。堀坂川右岸の隣接地域では弥生時代中期を中心とする遺物が採集され、出土した遺跡も点在することから、この地域の弥生時代中期以降の集落を考える手掛りを与えてくれているのが今回の検出例であろう。

深長古墳から西に延びるトレンチ部分では古墳時代前期から平安時代に亘る遺構が検出された。古墳時代前期の遺構としてＳＸ41があり二重口縁壺(268)が出土しているのが注目される。一部のみ検出されただけであるのでその規模や性格などは不明であるが遺構としてはしっかりしている。トレンチ中央部には比較的規模のある溝が数条まとまって南北に走っているのが興味を引く。いずれも自然流路やその可能性をもつものであり、その中でもＳＤ45は明らかに流路を持っており、恐らくは北に向って流れていたと考えられる事から、Ａ地区の旧河道とは何等かの形で接していたのではあるまいか。しかし、その埋土は明らかに旧河道とは違っているのが気にかかるところである。

掘立柱建物や竪穴住居は奈良時代前期頃から見受けられ、平安時代前期までのものがあり、古墳時代のものは検出されていないものの、ＳＸ41やＳＤ56のような古墳時代前・後期の遺構も若干ある事から、検出されてはいないが周辺に存在する可能性もある。しかし、Ｃ地区はいずれにしても奈良時代前期から平安時代前期の集落を中心とした地域であると考えられる。遺構検出面もＡ地区東側と違い黄褐色のシ

ルト的な土質であり安定している。ＳＥ24・25、ＳＡ26が検出されたＡ地区西側も黄褐色のシルト的な土質をもつものが遺構検出面であることからＣ地区とＡ地区の西側とは同一の生活面と考えられうる。従ってこれら集落の人々が旧河道周辺での祭祀に関わっていた可能性が充分想定されるのである。

Ｄ・Ｅ地区はいわゆる「伊勢神宮への古代の道[38]」が通ると推定されている箇所に入れたトレンチである。いずれも明確な道路跡であるという痕跡は検出出来なかったものの、Ｅ地区では古墳時代前期の竪穴住居が検出された。これで当遺跡は弥生時代中期後半から平安時代後期に亘る各時代の遺構が検出された事になり、殊に古墳時代前～後期の竪穴住居検出は意義深いものがあろう。

2．遺物について

1．土　器

Ａ地区の遺構出土土器は土師器が多く、須恵器はさほど多くはない。土師器では６世紀前半頃を中心としたＳ字状口縁台付甕に特徴づけられる。ＳＢ２出土のＳ字状口縁台付甕と須恵器杯蓋は、両者の同時代性をよく現わしている例であろう。しかし、出土土器を見ると古墳時代後期とはいえ多少の幅はありそうである。

奈良時代の土器としてはＳＢ22が比較的よくまとまっており、特に土師器杯・皿が中期頃の形態と手法をもつものである[39]。甕（29・30）はその体部内面の板ナデとヘラケズリに特徴をもつ。

奈良時代末から平安時代前期にかけての土器は土師器杯と皿、甕が多いが、ＳＥ23出土の土師器の杯Ｃ類は前期頃の代表例と考えられる。

Ａ地区包含層から出土、特に旧河道からの出土土器は多量である。包含層出土土器として挙げてあるものはその殆どが旧河道出土のものといえる。時期としては弥生時代中期の第３様式から平安時代後期まで実に長い期間に亘るものである。

古墳時代の土器は前・後期を通じてあるが、土師器ではＳ字状口縁台付甕が前期のⅠ類から後期に入るⅤＢ類まであり、若干の断絶はあるものの、その変化がよく解る例である。須恵器も比較的まとまって出土しており、やはり６世紀前半頃を中心とするものが多い。

飛鳥・奈良・平安時代を通じての土器は、土師器では杯・皿・甕が多く、高杯などは少ない。飛鳥から奈良時代にかけては、いわゆる「いなか風椀」の他に胎土・焼成もよく、暗文もしっかりした杯・皿も若干混っているのが興味を引く。奈良～平安時代の土師器としては土師器杯・甕の出土が多く、本文で述べた様に幾つもの分類が可能なバリエーションを持っている。墨書土器やヘラ記号をもった土器も若干ではあるが出土している。土師器杯（141）は奈良時代後期と考えられるものであるが、底部外面に「舩（船）女」と墨書がある。この墨書が人物名を示すものか、集団を示すものか不明といわざるを得ないものの、平安時代初期に成立したと考えられる『新撰姓氏録』の右京諸蕃下・摂津国諸蕃に「船連」の記載が見えることから[40]、この地域周辺にも何等かのつながりを持つ人物か集団が存在したのであろうか、注目されるところである。

Ｃ地区遺構出土の土器は縄文時代後期から平安時代前期までに亘る。ＳＫ32出土の細頸壺（265）などは隣接する田高田遺跡にその類例が見られ[41]、堀坂川をはさんだこの地域に弥生時代中期後半頃を中心とした良好な資料が提供されたと考えたい。また、包含層出土の高杯（326）も南勢地方からの出土例は珍らしいもので注目される[42]。

古墳時代前期としてはＳＸ41出土の二重口縁壺（268）が深長古墳出土の二重口縁壺と合わせて見逃せないものである。

Ｃ地区出土の石器でとりわけ注目され、興味が引かれるのは大形の石包丁である。この様な大形の石包丁の出土は県内では初例である[43]。実用品なのか、何等かの形で祭祀的な場で使用されたのかは不明といわざるを得ないが、実際に何等かの形で使用されたらしく、体部上半の側縁でゆるく逆Ｌ字形にくぼんだ箇所には明らかに磨滅痕が見られる。

Ｄ・Ｅ地区の出土遺物、殊に古墳時代前期の土器は、弥生時代後期後半と古墳時代後期との空間を埋めるうえで欠かせぬものである。特にＳ字状口縁台付甕はⅠ類とⅢＡ類が遺構にかかり出土している。Ｓ字状口縁台付甕としては、Ⅱ類を除きⅠ～Ⅴ類まで出土した事になる。

以上、A～E地区までの出土土器を概観したが、古墳時代前期の土器は、かつては同じ堀坂川水系であったと考えられる下流域の粥鍋遺跡[14]からまとまった形で出土しているものと合わせて考えてみる必要もあるだろう。

2．木製品

（1）旧河道出土木製品

旧河道からは実に多くの、また幾種類にもわたる木製品が出土しているが、今回はその代表的なものに限り報告することにした。

まず注目されるのは木簡の出土である。木簡は県内各地から出土しており今回で7例目である[15]。肉眼で判読可能なのは「村」の一文字で、他は赤外線カメラに依らなければ判読出来なかった。「村」が地域での固有名詞を示すかどうかは不明であるが、可能性はあろう。奈良時代末から平安時代前期にかけてのものと推定される。

容器には刳物・挽物と曲物がある。刳物の中で槽には2種類の形態がある。一つは長方形の槽で脚台が付かないものであり、後一つは長方形の槽ではあるが、片側に面を成しているものであり、殊に後者は管見の範囲では他に出土例を見ないものである。この面を成す箇所のもつ性格は不明といわざるを得ないが、これからの出土例の増加を待って検討しなければならないだろう。杓子形木製品は未完成品ではあるが納所遺跡に類似した形を持つものがある。コップ形木製品と小形角鉢はいずれも完形品であり加工痕もシャープで良好な資料の一つである。挽物としては蓋板と考えられるものが2種類あるが、(553) は未完成品の可能性もある。

曲物で全体がうかがい知れるものは殆どなく、底板のみの出土が多く、円形と楕円形のものがある。円形の曲物底板には側板との接合を示す2種類のものが見られる。接合方法は、一つは樹皮による接合で、後一つは竹釘によるものである。楕円形曲物の底板も樹皮による接合の方法を取っている。

刳物の中で長方形槽は大形のものは古墳時代から出現すると考えられるが[16]、やや幅があるものの7世紀前半から8世紀中葉程度の中で収まるものであろう[17]。コップ形木製品、小形角鉢も同じ程度に収まるものではあるまいか。しかし、杓子形木製品は弥生時代にまで遡るとは考え難く、やはり同じ範囲内のものであろう。挽物・曲物底板も8世紀代のものと考えたい。

農具はその種類としては少ない。ナスビ形二股着柄鋤が2点出土しており、いずれも明確な傘状部をもつが、刃部がシャープに尖るものと、幅広でやや弧状になるものとがある[18]。その他、木錘、田下駄、竪杵などがあるが、いずれも古墳時代以降のものと考えられ、田下駄は8世紀代のものであろう。

その他の木製品では、下駄、紡織具、横櫛、杓子、など、そして明瞭な加工痕があるものの用途に関しては不明なものがある。横櫛はその型式から8～9世紀に属すると考えられ、用途不明品を除けばその他の木製品も概ね8世紀代を中心とするものであろうと考えられる。

以上の事から旧河道出土の木製品の多くは古墳時代に含まれる農具の一部を除けば、その殆どが奈良時代から平安時代にかけてのものであると考えられよう。

3．祭祀用品

（1）祭祀用土製品

旧河道から出土したものに土馬とミニチュア土器があるが、その中でも破損してはいるが土馬が数個体分出土しているのが注目される。

土馬のもつ性格は、従来先学によって緻密な研究が積み重ねられ、その性格・意味付けがなされて来ている[19]。中でも大場磐雄博士は土馬の製作目的を水霊祭祀、祈雨祭祀、峠神祭祀、墓前祭祀などに分類され[50]、現在もその中の水に関わる祭祀説が通説となっている。しかし、近年水野正好氏は、土馬が行疫神の乗り物であるという説を出された。それは、馬は行疫神・祟り神の乗り物であり、それらの神々を応和する意味で土馬を作るか、或いは逆に馬体、足などを損じさせる事などでその猛威を事前に防止させようとしたのではないかとされた[51]。

旧河道出土の土馬はいずれも小笠原編年のC型式に相当すると考えられる[52]。243・244は馬具の鞍が粘土の貼り付けによる表現だけであり、245は目鼻や耳などが細い竹管での刺突などで表現するものである。C型式の土馬は8世紀初頭頃に位置付けられているものである。

ミニチュア土器は、いずれも手捏ねの粗製品であり、時期の判明している土器と伴出していないので時期的な事は不明といわざるを得ない。

（2）祭祀用木製品

祭祀に使用されたと考えられる木製品（木製模造品）は5世紀に始まり8・9世紀におよぶといわれる[53]。そしてそれら木製品の成立時期は7世紀後半、いわゆる法体系としての律令が整備されてゆく時期に重なり、律令的祭祀と呼ばれるものと不可分の関係にあるとされている[54]。

さて、今回の調査で特筆されるのは人形の出土であろう。人形は人形代であり，人間の肉体的・精神的苦悩の解消や、さらには欲望を達成するための手段として使われたものと理解されているものである。

人形は3点出土しており、2点はＳＥ24からであり、あと1点は旧河道からである。いずれも今回の発見が三重県内の初例といえる。井戸からの出土例は平城宮や平城京などがあるが、意外と少ない。かって藤沢一夫氏は人形を井戸に投げ込むのは呪詛の一形態ではないかと論じられたことがあるが[55]、多少の疑問を投げかける向きもある[56]。しかし、いずれにしてもその性格の一つをうかがい知る事は出来る。

旧河道からの出土はわずか1点のみではあるが、この人形が祓に際し使用されたのではないかという可能性が旧河道、つまり流れの中での発見でいえるのではあるまいか。人形は8世紀の平城京では6月と12月の晦日に宮中で実修された大祓で、祓人形として使用されており[57]、それと相似通った性格をもつものといえよう。

人形の使用例としては他に病気治療などがあげら

遺跡名	所在地	遺構	時代	参考文献	備考
柚井遺跡	桑名郡多度町柚井	不明	奈良～平安	鈴木敏雄『三重県桑名郡多度町柚井貝塚誌考 正編』（『三重考古誌考』）三重県郷土資料刊行会1971復刻	
				梶本社人『三重考古図録』三重県、1954	
下郡遺跡	上野市下郡	井戸	平安	中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教委1978	
北堀池遺跡	〃 大内	井戸	奈良	駒田利治・山田猛『北堀池発掘調査概要』県教委1980	
五佐奈遺跡	多気郡多気町五佐奈	井戸	平安	『昭和52年度三重県埋蔵文化財年報』県教委1978	
カウジデン遺跡	〃 〃 河田	溝	奈良	谷本鋭次「カウジデン遺跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』）県教委1980	
斎宮跡	多気郡明和町斎宮	井戸	平安	『三重県斎宮跡調査事務所年報1981』県教委1982	
針箱遺跡	一志郡嬉野町中川・下之庄	井戸	奈良～平安	『針箱遺跡・下之庄東方遺跡－県道嬉野飯高線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概況』嬉野町教委・同調査会1987	
草山遺跡	松阪市久保町字草山	井戸	奈良		83年度調査
杉垣内遺跡	〃 深長町字杉垣内	井戸・旧河道	古墳（後）～平安	本調査報告書参照	
伊勢寺遺跡（深長町前沖地区）	〃 〃 字前沖・菖蒲原	井戸	平安	『伊勢寺遺跡現地説明会資料』県教委1987	87年度調査
〃（伊勢寺町寺北地区）	〃 伊勢寺町字寺北	旧河道	不明		88年度調査
森脇遺跡	上野市市部	井戸	奈良	『森脇遺跡現地説明会資料』県教委1988	88年度調査
〃	〃 〃	井戸	不明		89年度調査

第4－1表　県内斎串出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	参考文献	備考
天王平遺跡	多度町小山字西天王平	伊東春夫『天王平遺跡発掘調査報告』多度町教委1981	
御衣野遺跡	〃 御衣野字西谷	鈴木敏雄『三重の遺跡と遺物』1、1949	
大膳寺遺跡	四日市市南いかるが町	森悦郎『大膳寺跡』四日市市教委1982	
鳥居本遺跡	志郡一志町小山字鳥居本	吉村利男『鳥居本遺跡発掘調査報告書』嬉野町教委1975	
不詳	松阪市山室町	大場磐雄『祭祀遺跡』1970	
斎宮跡	多気郡明和町斎宮	山沢義貴『古里遺跡発掘調査報告－C地区－』県教委1973 『斎王宮跡資料－発掘調査・文献資料－』県教委1978 斎宮研究会編『斎王宮跡発掘』1978 『三重県斎宮跡調査事務所年報1979～81、83～85、87、88』県教委	89年度調査でも出土している。
		『史跡斎宮跡昭和59年現状変更緊急発掘調査報告』明和町、県教委1985	
大林遺跡	多気郡明和町上村字大林	『明和町史』明和町1972	
カウジデン遺跡	〃 多気町河田字カウジデン	谷本鋭次「カウジデン遺跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』）県教委1980	
国生神社	度会郡玉城町上田辺坂井国生神社	佐藤虎雄「神宮の土器」（『肇国記念論文集』）1941	
カリコ	〃 〃 世古字カリコ	世古官守・山沢義貴『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』玉城町教委1972	
蓮池代遺跡	上野市蓮池	森前稔「蓮池代遺跡」（『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』）県教委1982	
鴻之巣遺跡	名張市夏見		保管名張市教委
発シB遺跡	明和町有爾中字発シ		保管明和町
末野A遺跡	鈴鹿市郡山		
末野C遺跡	〃 〃		
不詳	志郡嬉野町川北		保管白山高校
結馬遺跡	名張市結馬	水口昌也『渓園』（赤目中学校PTA広報）1981	
菅生遺跡	松阪市清水町菅生		保管松阪市教委
歌野遺跡	阿山郡大山田村広瀬字歌野	中森英夫「歌野遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財掘調査報告』）県教委1983	
水池遺跡	多気郡明和町明星字水池	山沢義貴・谷本鋭次『斎王宮跡－広域市町村圏道路調査－』明和町教委1977	
粟垣内遺跡	〃 〃 馬之上字粟垣内		保管明和町教委
原古窯	度会郡玉城町原		
北ノ山古窯	多気郡多気町笠木	山沢義貴「三重の古代窯」（『日本やきもの集成』6近畿Ⅰ）1981	
南ノ山古窯	〃 〃		
徳居古窯址群	鈴鹿市郡山町	金丸但馬「徳居付近の古代製陶所遺跡に関する覚書」（『三重県史跡名勝天然記念物調査報告』）2 1920 〃 「伊勢徳居付近の古代製陶所遺跡」（『人類学雑誌』第31巻11号）1917	
杉垣内遺跡	松阪市深長町字杉垣内	本調査報告書参照	
堂ノ後遺跡	〃 〃 字堂ノ後		
伊勢寺遺跡（深長町前沖地区）	〃 〃 字前沖・菖蒲原	『昭和62年度三重県埋蔵文化財年報』県教委1988	
〃（伊勢寺町寺北地区）	〃 伊勢寺町字寺北		89年度調査

第4－2表　県内土馬出土遺跡一覧表

れているが、これらを司どるものとして呪禁師の存在があげられよう[58]。呪禁師はその当初に於ける性格は医学医療的なものであったが、やがて厭魅・蠱毒を操る傾向をもつようになるという[59]。

人形の出現は7世紀後半といわれ8・9世紀には盛んに人形による祭祀が行なわれていたようである[60]。SE24で出土した人形はその型式から9世紀以降に位置付けられ、平安時代前期と考えられる。前述した人形使用の際に於ける性格付けの中で、祓いの機能は別として、後2つの性格のいずれかとして使用されたと考えるなら、呪禁師とはいえぬかも知れないが、その役割をもつに近いものが存在した可能性はあるといえるだろう。

斎串の多量な出土も注目されるところである。斎串のもつ性格・機能は「神聖な木」の一種である串として祭祀にあたり様々な役割を付与されていたようである。それらは、神の招ぎ代、浄域を画するしるし、神への供物のしるし、御贖料としてのもの、など多様なものであるとされている[61]。斎串の出現の最も古い例は6世紀中頃、つまり古墳時代にあり、7世紀末～9世紀までの時期に出土例が多く見られるという[62]。旧河道・井戸出土の斎串は、その型式から見ると基本的型式のA～C型式（一部D型式もある）全てが含まれているのが特徴的である。各型式の時期的なものは、A型式は6世紀後半から出現し、B型式やC型式の一部は7世紀後半に現われ、C型式は8・9世紀に展開するといわれている[63]。出土斎串の中心を成すものはB型式・C型式であり、最も使用された時期を7世紀後半から9世紀までを想定する事が出来る。しかし、SE23・24出土の斎串の中にはB型式のものが若干含まれており、C型式が盛行する時期にB型式も少しではあるが残るようである。A型式の斎串が1点出土しているが、古墳時代後期の竪穴住居の検出をみている事から、斎串を使用した祭祀が三重県内に於て古墳時代後期にまで遡る可能性が考えられる例として注目されて良いであろう。なお、県内出土の斎串は管見の範囲ではその殆どがB・C型式の中に含まれるものであり、A型式の今後の出土例が待たれるところである。

その他の祭祀用木製品としては刀形・刀子形・陽物・馬形がある。一般的にこれらも刀形は若干古く6世紀代まで成立が遡る可能性があるものの[64]、その他はいずれも7世紀後半から9世紀にかけて存続したものと考えられており[65]、旧河道出土の前述のものも、8世紀を中心としたものと考えて差しつかえないものと考えられる。前述の祭祀用木製品の性格であるが、刀形と馬形は人形と深い関わりを持ったようで、人形に罪穢を移す場面で使われ、祓の場の罪悪・悪気を打断ち遮ったものであったようである[66]。それは、石上神宮の神宝である神剣「韴霊」が悪気を断つ呪力をもつ刀剣であったことなどからも、古代に於ける刀剣のもつ呪術的性格と深いつながりがあるのであろう[67]。馬形は罪穢を負った人形を根国底之国に運ぶために人形の傍に立てられたと想定されており[68]、いずれも人形祭祀に欠かせないものであった可能性が強い。陽物は井戸やその他の水の祭祀に使用されたと考えられるものである[69]。

3．結　語

杉垣内遺跡は、弥生時代中期後半頃から平安時代後期まで断続的にではあるが存続した集落であり、その中心は、一つは古墳時代を通じてのものであり、あと一つは奈良時代～平安時代前期を中心としたものである。

古墳時代の遺構は後期のものが中心ではあるが、集落としては全般を通じて存続し、その最盛期は深長古墳築造当時であり、背後に群集墳を営む後期頃であったであろう。殊に深長古墳はその規模から当地域の象徴的な存在であったと考えられる。

奈良時代～平安時代前期の集落は、古墳時代に比べかなりの広がりを見せていたと考えられ、奈良時代から平安時代にかけての集落が曲遺跡[70]、前沖遺跡[71]からもうかがい知れ、この杉垣内遺跡を含める当地域は集落が相互に近接して一つのまとまりをもった大きな集落であったことを想定させるのである。そして、その中で杉垣内遺跡は他の集落とは違う性格を与えられていた可能性があるのではあるまいか。それは旧河道の検出と、旧河道や井戸から多量に出土した祭祀用品を合わせて考えてみる時、この検出された旧河道とその周辺は「水辺のまつり」が行われていたと考えられるのである[72]。そしてそれは奈良時代から平安時代前期のみならず、古墳時代後期

を中心とする時期から継続されていたといっても過言ではあるまい。つまり、杉垣内遺跡は当遺跡を含む周辺地域の「祓所（はらえど）」としての機能をもっていたものと理解してよいと考えられるのである。

（河瀬信幸）

〔註〕

① 「藪ノ下遺跡」・「新田遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 三重県教育委員会 1986

② 谷本鋭次 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1972

③ 前川嘉宏 『粥鍋遺跡発掘調査報告』 松阪市教育委員会 1987

④ 『草山遺跡発掘調査月報No.1～10』 松阪市教育委員会 1982～1985

⑤ 「一志郡向山前方後方墳について－三重県主要古墳調査」『ふびと27号』 三重大学歴史研究会原始古代史部会 1967
後藤守一 「伊勢一志郡豊地村の二古式古墳」 『考古学雑誌14－3』 1923
樋本亀次郎 『三重考古図録』 三重県教育委員会 1954

⑥ 下村登良男 『八重田古墳群発掘調査報告』 松阪市教育委員会 1981

⑦ 「松阪地区における埋蔵文化財の調査－その1 松尾・花岡・神戸地区」 『ふびと31号』 1970 「松阪市・宝塚2号墳測量調査」 『ふびと32号』 1975 以上、三重大学歴史研究会原始古代史部会

⑧ 小林行雄 「鏡・大刀・玉のなぞ」 『古墳の謎を探る』 帝塚山大学考古学研究室 1981

⑨ 注① 「垣内田古墳群」

⑩ 「天神山古墳群」・「平林古墳群」 『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』 三重県教育委員会 1987

⑪ 注① 「榎長遺跡」

⑫ 新田洋・河北秀実ほか 「曲遺跡」 『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1985

⑬ 増田安生・河瀬信幸 『前沖遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1986

⑭ 鈴木敏雄 『三重県古瓦図録』 楽山文庫 1933

⑮ 注⑭ 参照

⑯ 『延喜式・前篇』 新訂増補国史大系本 吉川弘文館 1981

⑰ 池辺彌 『増訂版和名類聚抄郷名考證』 吉川弘文館 1970

⑱ 倉田康夫 「伊勢湾西岸地域における条里制の歴史地理学的研究」 『条里制と荘園』 東京堂出版 1976

⑲ 注⑱ 参照

⑳ 足利健亮 「大和から伊勢神宮への古代の道」 『環境文化－特集・歴史の道－No.45』 1980 （『日本古代地理研究』 大明堂 再録 1985

㉑ 『神宮雑例集』・『神鳳抄』 止編群書類従・第1巻－神祇部 続群書類従完成会 1986

㉒ 中村信裕 「藪ノ下遺跡」 『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1984

㉓ 『三重の中世城館』 1976 『三重の中世城館補遺』 三重県教育委員会 1981

㉔ 注① 「横尾墳墓群」

㉕ 安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」 『考古学雑誌』第60巻2号 1974

㉖ 中村浩 『陶邑』Ⅲ・Ⅳ 1978～1979 大阪府文化財センター及び、田辺昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966 平安学園考古クラブ 同氏 『須恵器大成』 1981 角川書店 以下、須恵器の時期についてはこれらに依る。

㉗ 『愛知県猿投山西南麓古窯群分布調査報告』（Ⅲ） 愛知県教育委員会 1983

㉘ 注⑫ 参照。曲遺跡の報告によれば、時期的な問題については明確な時期決定はしがたいとしながら、古墳時代後期に求めている。

㉙ 注㉕ 参照

㉚ 小笠原好彦 「土馬考」『物質文化』25号 1975

㉛ 下村登良男・村上喜雄 『おばたけ遺跡発掘調査報告－第4次－』 鳥羽市教育委員会 1972 で報告されている中に、良く似た形態のものがある。

㉜ 小玉道明編 『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』 津市教育委員会 1970

㉝ 『木器集成図録・近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所 1985

㉞ 墨書の判読については奈良国立文化財研究所の金子裕之氏・加藤優氏・綾村宏氏他の方々に御世話になった。記して謝意を表したい。『木簡研究』10号 1988

㉟ 兼康保明 「井戸における斎串使用の一例－滋賀県高島郡高島町鴨遺跡の井戸－」『古代研究』第19号 1980 同氏は民俗例をあげて井戸鎮井時に清めの祭祀に斎串が使用されたのではないかとその可能性を示唆しておられる。

㊱ 宇野隆夫 「井戸考」『史林』第65巻5号 1982 同氏は井戸の型式分類をされ、A類：素掘り井戸、B類：木組井戸、C類：石組井戸、D類：土器・土製品組井戸に大別し、さらにその構造的な特徴によって細かな分類を各型式の中でされた。木組井戸B類もさらに細かく分類されている訳であるが、その中で横板と縦板の組み合わせの分類の項はなく、今回の杉垣内遺跡の検出例は興味を引くところである。

㊲ 『草山遺跡発掘調査月報』No.10 松阪市教育委員会 1985

㊳ 注⑳ 参照

㊴ 飛鳥時代から平安時代にかけての土師器は、斎宮跡出土の土師器の範疇の中でとらえられる。従って前述の時期的なものについては 「斎宮跡の土師器」 『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』 三重県教育委員会 1985 による。

㊵ 佐伯有清 『新撰姓氏録の研究・本文篇』 1974 吉川弘文館

㊶ 『松阪市史第2巻史料篇考古』 松阪市 1978

㊷ 類似した器形をもつものに津市の亀井遺跡から出土しているものがあるが、中勢地方までの出土にとどまっている。谷本鋭次 「亀井遺跡」 『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1973

㊸ 金関恕・佐原真編　『弥生文化の研究』　1985　雄山閣　の中で山口県辻遺跡の刃部34.7cmの大形石包丁が紹介されている。

㊹ 注③　参照

㊺ 現在までで報告されているのは、『柚井遺跡』（多度町）、『小判田遺跡』・『赤堀城跡』（四日市市）、『下郡遺跡』・『木津氏館跡』（上野市）、『西冲遺跡』（大山田村）、である。

㊻ 吉水康夫・山田猛・駒田利治　『北堀池遺跡発掘調査報告－第1分冊－』　1981　三重県教育委員会　その中で古墳時代前期を中心として、初頭から後期前葉に及ぶ大溝内出土の槽が報告されている。

㊼ 注㉝　参照。以下、木製品全般に関しては注32を参考にする。

㊽ 注㊻　では杉垣内遺跡出土の形態と類似するものは報告されていない。

㊾ 例えば、大場磐雄　「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』第27巻4号　1937　「上代馬形遺物再考」『国学院雑誌』第67巻1号　1966　　上井実　「大和土製馬考」『古代学』第4巻2号　1956　　前田豊邦　「土製馬に関する試論」『古代学研究』53号　1970　　小田富士雄　「古代形代馬考」『史淵』105・106合併号　1971　　泉森皎　「大和の土馬」『橿原考古学研究所論集』　1975　吉川弘文館　注㉚　の小笠原論文など。

㊿ 注㊾　大場論文参照

(51) 水野正好　「馬・馬・馬－その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2集　1983

(52) 注㉚　参照

(53) 金子裕之　「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所・研究論集』Ⅵ　1980

(54) 注(53)　参照

(55) 藤沢一夫　「古代の呪咀とその遺物」『帝塚山考古学』1号　1968

(56) 金子裕之　「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集（本篇）　1985

(57) 「神祇令・大祓条」『律令』岩波日本思想大系3　1976　岩波書店

(58) 呪禁（じゅごん）とは、まじないをして物怪（もののけ）などを祓う事であり、呪禁師とはそれを司どる人々であり、律令制下の典薬寮におかれていた。呪禁と呪禁師に関しては、下出積与「呪禁師」『日本古代の神祇と道教』所収（1972　吉川弘文館）に詳しい。

(59) 厭魅（えんみ）とは妖術で人をのろう事であり、蠱毒（こどく）とは毒薬などで人を害することをいう。

(60) 『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』8　1978　奈良国立文化財研究所。　『伊場遺跡遺物篇・Ⅰ』（伊場遺跡発掘調査報告第3冊）　1978　浜松市立郷土資料館篇

(61) 黒崎直　「斎串考」『古代研究』　1976

(62) 注(60)　参照

(63) 注㉝　参照

(64) 注(60)　『伊場遺跡遺物篇・Ⅰ』参照

(65) 注(53)　参照

(66) 注(53)　参照

(67) 池田源太　「刀剣の呪術的性格」『考古学論攷』第9冊　橿原考古学研究所紀要　1983

(68) 注(51)　参照

(69) 水野正好氏の御教示による。

(70) 注(12)　参照

(71) 注㉝　参照

(72) 向坂鋼二　「考古資料にみる水辺のまつり」『生活文化史』第8号　1985　（後に『日本考古学論集』第3巻に再録　1986　吉川弘文館）で同氏は、木製模造品を用いる祭祀を類型Ⅰとし、人形・馬形・刀形・斎串を基本とするものをD型とした上で、この類型段階を律令的祭祀の投影と理解し、使用されているのが水辺であることなどからこれらを水辺祭祀遺物と考えられ、「水辺のまつり」としてとらえられている。

〔参考文献〕

① 吉村利男　「小野遺跡」　『昭和50度年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1976

② 伊藤克幸　「貝塚遺跡」　『昭和51年度県営圃場整備事業地域発掘調査報告』　三重県教育委員会　1977

③ 吉田東伍　『大日本地名辞書・上方篇』（増補版）　富山房　1972

④ 『三重県の地名』　日本歴史地名大系24　平凡社　1983

⑤ 『角川日本地名大辞典・24　三重県』　角川書店　1983

⑥ 山本威　「松阪市の地形」、荒木慶雄・北村治郎　「松阪市の地質」　『松阪市史　第1巻　史料篇　自然』　松阪市　1977

⑦ 『松阪市史　第2巻　史料篇　考古』　松阪市　1978

⑧ 藤堂元甫　『三国地誌・上』　大日本地誌大系第8冊　大日本地誌大系刊行会　1916

V．松阪市深長町　深長古墳

1．位置と地形

深長古墳は、行政上松阪市深長町字行歩田に属し「狐山」と通称されている。堀坂川が形成した扇状地の扇端部に位置する。堀坂川の北側には、杉垣内遺跡の旧流水路が東流しており、南側にも現代の小川がある。深長古墳は、この２つの谷の間の小段丘の先端部を占めている。この丘陵は、深長の集落の東から続き、後述の堂ノ後遺跡もこの丘陵上に営まれている。堂ノ後遺跡付近で標高24～25ｍを測る。深長古墳付近では標高20ｍ前後となる。

深長古墳は、この丘陵端に盛土して構築されたもので、現況は四周から削平を受け、水田・畑地・竹林となっている。墳丘の約$\frac{3}{5}$が竹林及び畑地として残っており、墳頂に三角点があり、標高22.90ｍである。

深長古墳の北側は、現在水田面であるが、近年発掘された前沖遺跡の発掘成果からも明らかなように谷地形と低丘陵が複雑に入り組んでいる①。こうした丘陵上に、ある程度間隔を置いて集落が営まれていたと推定される。谷地形の部分は、黒色の有機物混じりの土壌であり、扇端部の湧水地帯であるという条件と合せて水田可耕地として適地である。

深長古墳付近の小河川は坂内川に流水する。巨視的には坂内川水系に属する。深長古墳の北500ｍに八重田古墳群があり②、この間には谷地形と丘陵が複雑に入り組む地形が見られる。深長古墳の北300ｍに弥生時代の集落跡田高田遺跡があり③、深長古墳下層の弥生時代竪穴住居群と同時期の中期後半の土器が表採されている。

八重田古墳の中には、４～５世紀の円墳・方墳・前方後円墳がある。深長古墳と合せて松阪西部における前期古墳の形成とその占地状況を探るうえで看過できない古墳群である。

2．墳　　丘

深長古墳は、前述のようにあい次ぐ削平によりその形状は、著しく変化している。当初杉垣内遺跡Ｃ地区の排水路部分の発掘時には、残存する墳丘の大きさは旧状をとどめると考え、径約20ｍクラスの円墳を想定していたが、周溝内で転落状態のほぼ完形の二重口縁壺が出土するに及び、周溝基底部の直径は、予想以上に大きいことが次第に判明してきた。深長古墳周溝部の西半分は、上段水田部で周溝基底部の遺存度も良好であった。これに比べ東側下段水田部分は削平を受けていたが基底部の痕跡は、わずかに残っていた。南北径45ｍ、東西径44ｍの円墳と判断することができた。排水路発掘調査時に南西部分でくびれ部状の高まりを確認したため、前方後円墳あるいは前方後方墳の可能性が考えられたが、周溝部の状況から円墳と断定するに至った。前述のように、丘陵の端部に立地するため墳丘築造時に、東側周溝基底部と、西側周溝基底部を掘削していく時に、西側が若干高い状態で残ったと考えられる。周溝西側において、基底部の等高線が18.2ｍ程度になるのに比べ、東側では17.8～17.9ｍになっている。なお東側において標高18.00ｍの等高線が西側に入り込むのは、近世以降の水田開発と小さな池が掘られていたためである。また北側における方形の凹みは下段水田西端に野小屋が建てられていたことによる。

深長古墳の墳頂には、三角点があり標高22.90ｍである。やや北西に偏って墳丘が残存しており、北辺のＡトレンチに向って傾斜する北斜面の残りが最も良い。上段水田との比高は3.9ｍ、下段水田との比高は5.1ｍ、西側周溝基底部との比高は、4.6ｍである。

深長古墳墳丘下では、弥生時代遺構が検出されている。これらについては、杉垣内遺跡C地区の遺構とともに前述した。弥生時代遺構は、黄褐色粘土層で検出される。その下には、灰褐色粗砂層があり、南側・西側周溝は、この黄褐色粘土層、灰褐色粗砂層を掘り込んで造られている。また現存墳丘西セクションにおいて弥生時代の包含層が確認されており、包含層上面の標高は、19.00mである。従って古墳築造時には、この包含層の上に約4mの盛り土をしたことになる。

3．遺　　構

弥生時代の遺物包含層が確認されているが、この包含層及び地山の黄褐色シルト層が東へ向って緩斜面をなしており、これらをも削平していることがわかる。

1．Aトレンチ

Aトレンチは、墳形確認のため北側に伸ばした発掘区であり、幅4m、全長27mである。基本的層序は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層床土、Ⅲ層旧水田耕土1、Ⅳ層旧水田床土1、Ⅴ層旧水田耕土2、Ⅵ層旧水田床土2、Ⅶ層旧水田耕土3、Ⅷ層旧水田床土3、Ⅸ層暗褐色砂質土、X層暗褐色土、XⅠ層灰茶褐色砂質土、XⅡ層褐色砂質土、XⅢ層暗灰褐色砂質土、XⅣ層地山となり、XⅠ～XⅢ層を周溝埋土と考えている。Aトレンチの南端から5m程が削平された盛土部である。この盛土下で1辺4.0mの弥生時代の竪穴住居SB31が検出された。墳丘裾部で完形の二重口縁壺（15）が転落状態で発見された。また西壁でXⅠ層において二重口縁壺が出土している。

Aトレンチの削平を受けた盛土部の標高は18.70mであり、墳丘裾付近の周溝の標高は18.2mである。なお東壁断面で墳丘裾から約17mのところで周堤の立ち上り部が確認されている。

2．Bトレンチ

Bトレンチは、北東部の周溝確認のために設定したトレンチである。標高18.3mの水田面に幅3m、全長32mを設定した。基本的層序は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層黄褐色床土、Ⅲ層暗灰褐色土、Ⅳ層黄茶褐色床土、Ⅴ層暗灰茶褐色土、Ⅵ層暗灰黄褐色土、Ⅶ層淡黄褐シルトである。但し残存する墳丘に近い南側は、盛土を削平しており、耕土下ですぐに淡黄褐色シルト層となる。トレンチの南16mで周溝の底になっている。地山は淡黄褐色シルト層である。この付近においてわずかに残る埋土から二重口縁壺の細片が出土している。南端の標高は、18.10mである。周溝底の標高は、17.80mである。墳丘西の標高18.60mで

3．Cトレンチ

Cトレンチは、墳形確認のため南側に設けたトレンチである。幅3mで長さは16mである。基本的層序は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層灰色砂層、Ⅲ層灰茶褐色シルト、Ⅳ層灰茶褐色シルト、Ⅴ層灰茶褐色シルト、Ⅵ層黄褐色シルト層である。Cトレンチでは、北部分でわずかに二重口縁壺の小片が出土している。北側の排水路の発掘調査時に大量に出土したのに比べて対照的である。Ⅴ層を周溝埋土と考えている。南側においては、Ⅳ層とⅤ層の間に奈良、平安時代の包含層があり、遺物が多く出土した。これはⅣ層淡黄灰色土である。

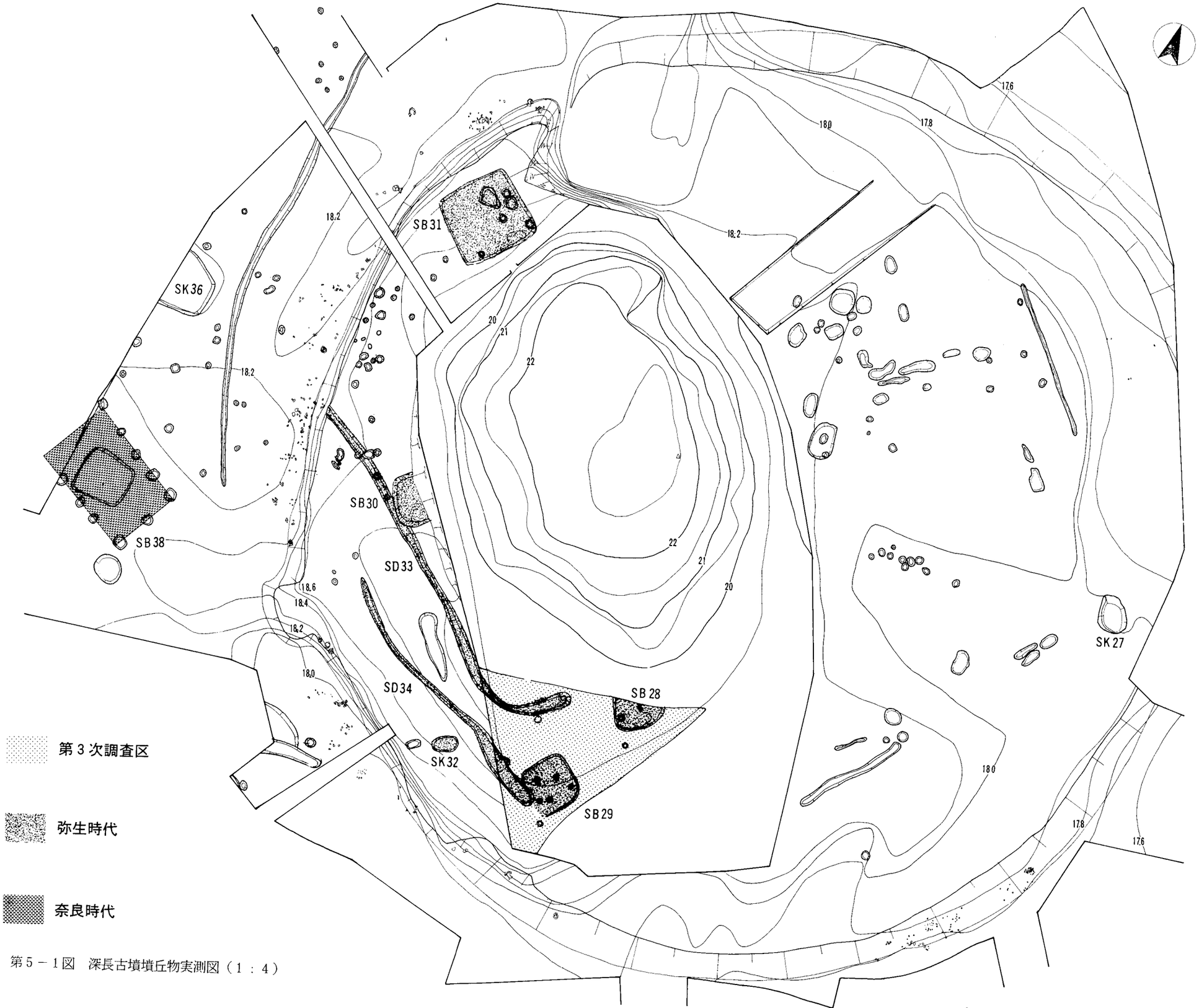
標高は、北側で17.90m、南側で17.28mである。

4．Dトレンチ

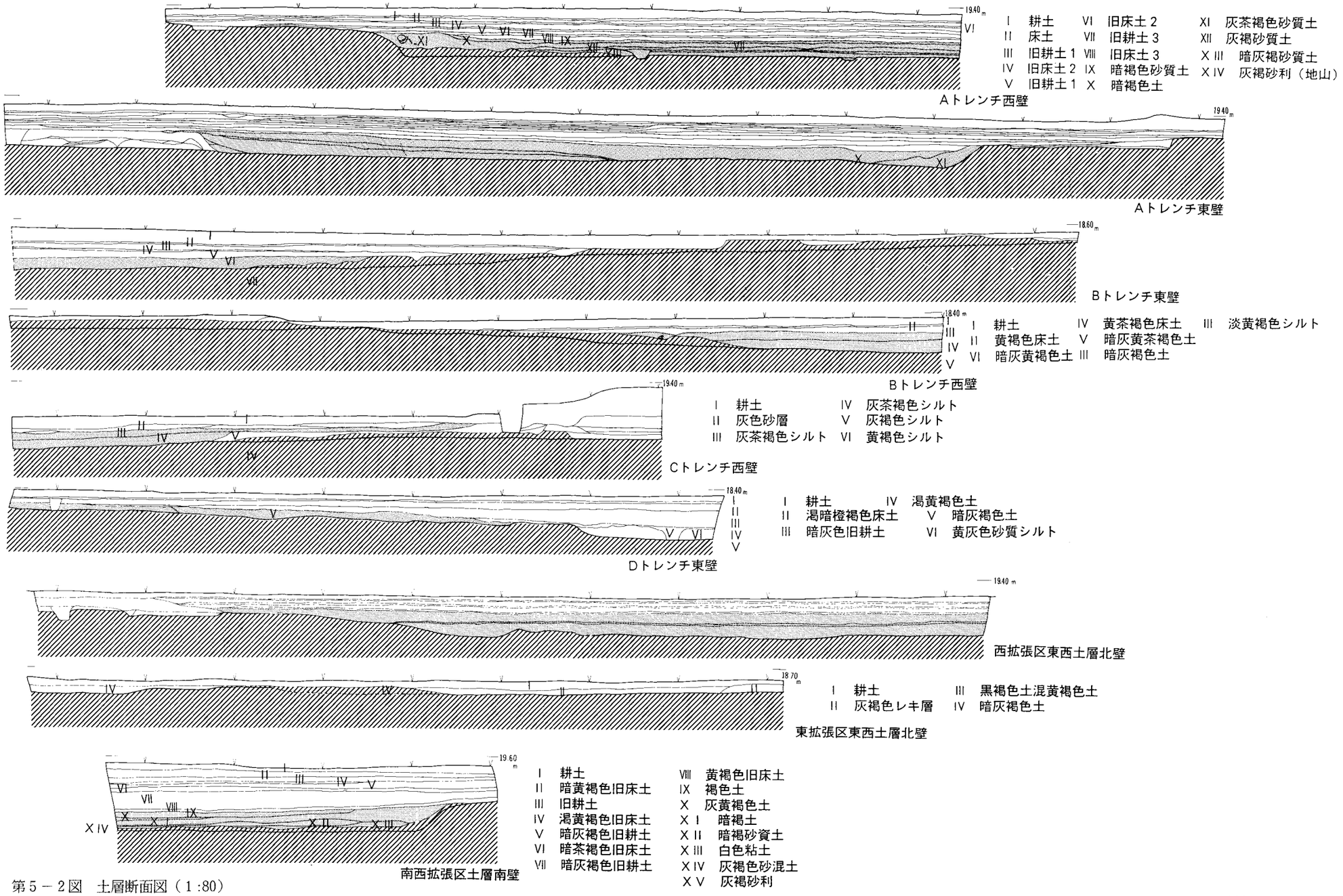
南東側の墳形確認のために、Cトレンチの東側15mのところに、幅3m、長さ9mのトレンチを設定した。基本的層序は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層濁暗橙褐色床土、Ⅲ層旧耕土（暗灰褐色）、Ⅳ層濁暗黄褐色土、Ⅴ層暗灰褐色土、Ⅵ層黄灰色砂質シルト層である。トレンチ北端で二重口縁壺小片が若干検出された。Cトレンチより量は多い。トレンチ北での標高は、17.80mである。

5．北拡張区

北側のAトレンチとBトレンチの間の部分を便宜上北拡張区とする。標高19.17mを測る。上段水田と標高18.3mを測る水田及び土堤があったところで



第５－１図　深長古墳墳丘物実測図（１：４）



第５－２図　土層断面図（１:80）

ある。またポンプ小屋が墳丘の裾部を掘って建てられていた箇所もある。上段水田下は、盛土及び二重口縁壺の残存状態が良好である。残存する盛土の標高が18.60m、周溝底標高17.80mである。比高差80cmである。二重口縁壺（8）が盛土から約9m離れた周溝底で検出された。8から北へ約3mの周溝底で二重口縁壺（4・5・9・10）等が検出された。5は薄手で口縁部が外反し先細る。赤褐色である。深長古墳の二重口縁壺の中では、このタイプは少数である。さらに3m程東側で3012・3013・3014が転落状態で発見された。

6．西拡張区

Aトレンチと、杉垣内遺跡C地区排水路部分調査との間を、周溝確認のため拡張し調査を行った。これを西拡張区と称する。C地区排水路がクランク状に曲がる部分の北側で、西拡張区の南断面を観察すると、深長古墳の墳丘の西端が確認できる。基本的層序は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層床土、Ⅲ層暗褐色砂質土包含層、Ⅳ層黄褐色シルト層である。包含層は、墳丘側から4m程確認されており、これより西側は、漸次水田の拡張により削平されている。そのため周溝部分における土層断面では、旧耕土が3面、それに伴う床土が3面みられる。なお、包含層はみられない。墳丘裾部3～4mの幅は、水田拡張による削平以前に本来テラス状をなしていた可能性が高い。Aトレンチ・北拡張区と同様に盛土は削平されているものの裾部の残存状態は良好であった。削平された盛土の標高は、18.80m～18.60mであり、周溝の底が18.20mである。残存比高は、約40cmである。墳丘は、包含層の上に土盛して築造されている。

遺物の出土状況は、第5－5・6図に示したように大量に出土した。Aトレンチに近い北端では二重口縁壺（56・57・59）が転落状態で検出された。南へ1.8mの箇所で46・55が、さらに南1.2mに45が転落状態で検出された。43・44が同地点から、42はその西側に、また44・41が前者の東から検出された。いずれも周溝部からの出土である。53・36は、周溝内の墳裾で転落状態で検出された。35は、散乱状態で検出された。69・76は、橙褐色を呈し、胎土も類似しており同一個体と思われる。また体部の破片も少なからず見つかっている。76は、底部を穿孔しておらず、底部内面に朱が付着していることは、特筆される。72は、厚手の二重口縁壺で一点のみ出土した。70・71は、西拡張区南端で周溝埋土中から検出された。2034は、70・71の南で周溝埋土中から転落状態で検出された。

7．南西発掘区

西拡張区の南側からCトレンチの北側の杉垣内遺跡C地区排水路発掘調査区の当該区及び、排水路のクランク状になった箇所の南西拡張部を合せて南西発掘区と呼称する。

杉垣内遺跡C地区発掘時にF19－6地区において3個体の二重口縁壺が墳丘裾の高い部分あるいは、テラスの下端部とも考え得る箇所で、第5－8図に図示したような状態で出土した。発掘区の高い部分は8.80m、二重口縁壺が検出した地点の標高は、18.55m前後である。周溝底の標高は、18.00mである。検出された個体は、南から、77・84・86である。77は倒立状態で検出された。86は、横に倒れた状態で検出された。

杉垣内遺跡C地区発掘時にF17－19地区において4個体の二重口縁壺が、墳丘裾に転落状態で検出された。これが、当古墳の発掘調査の中で最初に転落状態を確認し得たものである。79は、壺口縁部が倒置状態で検出された。81は、79の東約1mの箇所で転落状態で検出された。81の東約3mの箇所で周溝内の横位転落状態で検出された。87は、80の東約4mの所で逆位で検出された。なおこの4個体が検出された地点は、上段水田と下段水田の境の土堤であり、墳丘の形状は、削平等を受け変形している。

二重口縁壺が良好の状態で出土した前2地点の間は、未確認であったので、後に拡張した。この拡張時に残した南西方向の土堤の南面の土層をもって南西拡張区の基本的層序とする。Ⅰ層耕土、Ⅱ層暗黄褐色旧床土、Ⅲ層旧耕土、Ⅳ層濁黄褐色旧床土、Ⅴ層暗灰褐色旧耕土、Ⅵ層暗茶褐色旧床土、Ⅶ層暗灰褐色旧耕土、Ⅷ層黄褐色旧床土、Ⅸ層褐色土、Ⅹ層灰黄褐色土、ⅩⅠ層暗褐色土、ⅩⅡ層暗褐色砂質土、ⅩⅢ層白色粘土（ブロック状に幅1.2m程度入る）。ⅩⅣ層暗灰褐色砂混土、ⅩⅤ層灰褐色砂礫である。

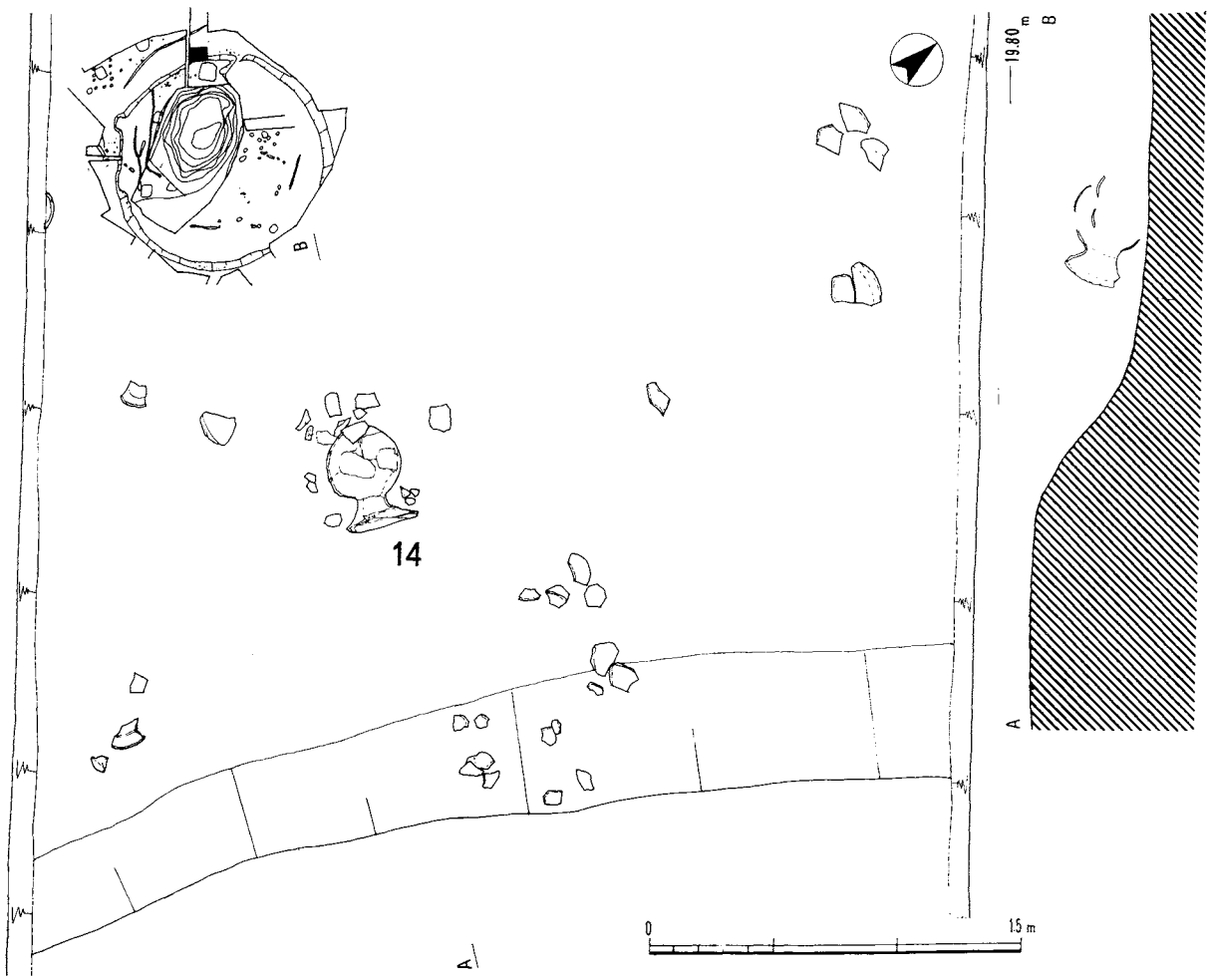
Ⅷ層～XIV層が周溝埋土である。XⅢ層白色粘土は、周溝底にはりついていた。この箇所の遺物出土状況は第５－８図に図示した。122、西端で発見された二重口縁壺の口縁部である。北東約60cmに破片が散乱状態で検出された。これを4002として取り上げた。細片のため図化はできなかった。二重口縁壺（114）は、口縁部から上胴部までが周溝内でつぶれた状態で出土した。123は114の北隣で検出された。周溝部に白色粘土が、東西幅３m、南北長2.4m厚さ10cm検出された。その東端の上に130が散乱状態で検出された。119は、130の東80cmで検出された。115は、赤褐色の胎土をもつ二重口縁壺の下胴部である。115の南１mでは、121が単体で発見された。120は、115の南0.7mの所で単体で発見された。122は、120の東約1.2mで散乱状態で発見された。

８．南東発掘区

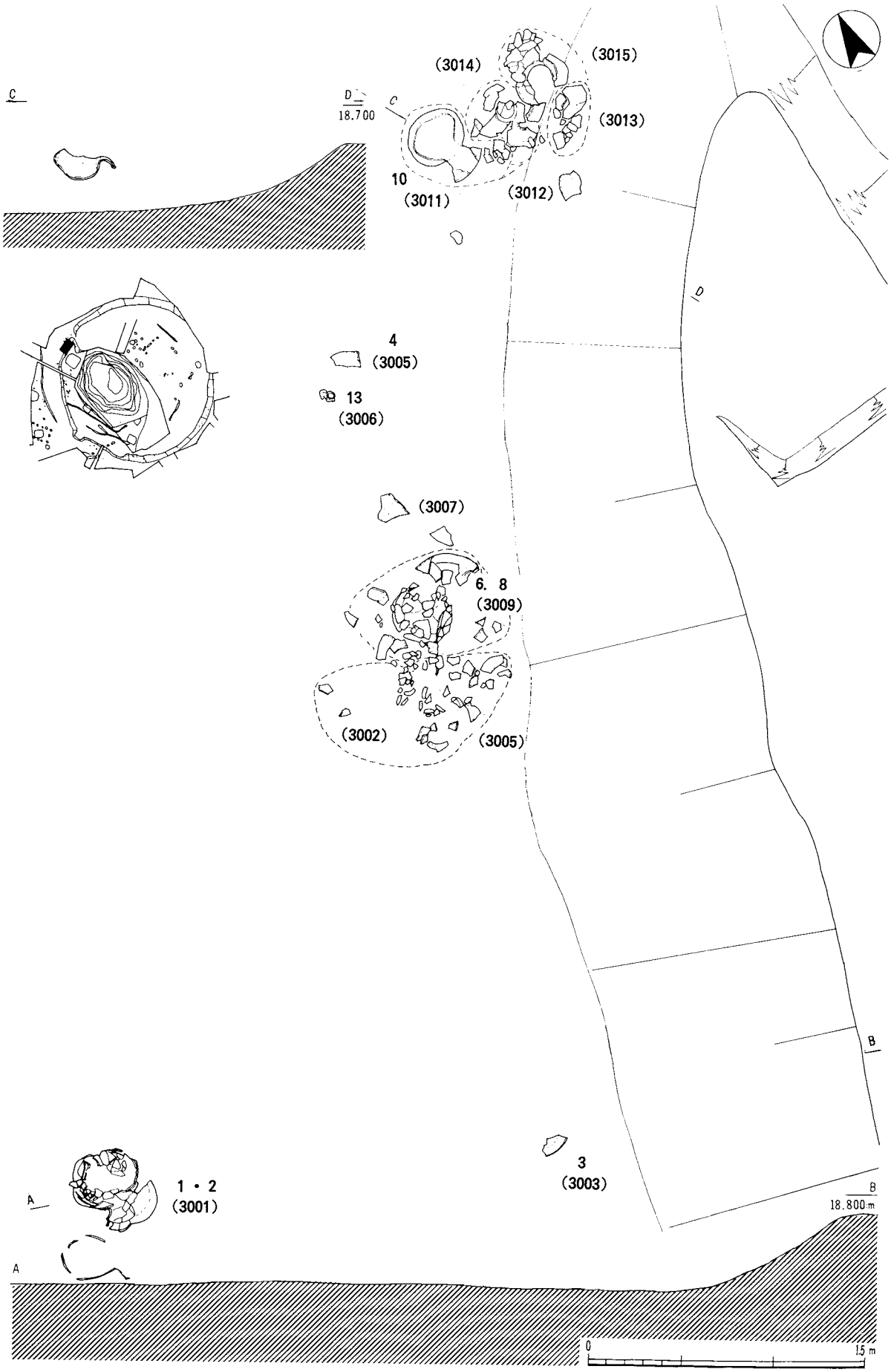
Cトレンチより東側で、当初杉垣内遺跡C地区排水路部分のクランク状になった部分及び、東三角拡張区として孤状に拡張し土器の転落状態を（第５－10）図に図示した発掘区を合せて南東発掘区と呼称する。標高は、18.00m前後で、南及び東へ緩斜面となっている。この地区は、排水路部分調査時に最初に二重口縁壺が出土したところである。東三角拡張区では、遺物の出土地点を図示して取り上げた。二重口縁壺（126、134）は、この中でも東北端で検出された。124は、126北西1.3mでつぶれた状態で検出された。ほぼ完形の個体である。127、135は、当該区の中央部分墳丘裾で検出された。127の南0.7mでは、125・129・136が転落状態で検出された。また西端では、131・132・133・137が検出された。

９．東拡張区

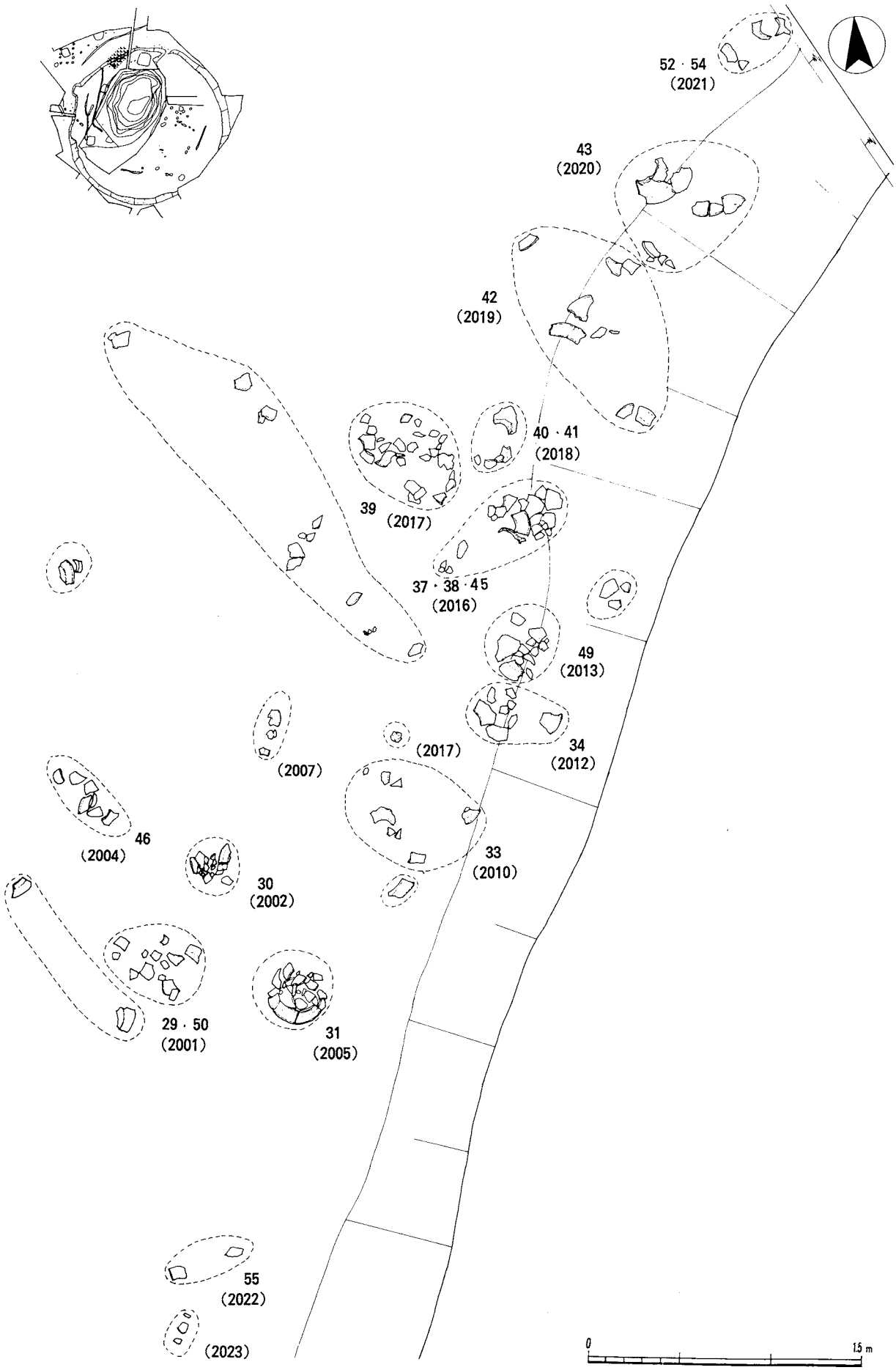
Bトレンチの南から、南東発掘区までを呼称する。今日まで徐々に墳丘部が削平を受け、墳丘の東側約10m程が欠けている。また当発掘区内で標高18.00mの等高線が大きく凹むのは、近年まで池が作られていたためである。なおSK27から江戸時代の瀬戸



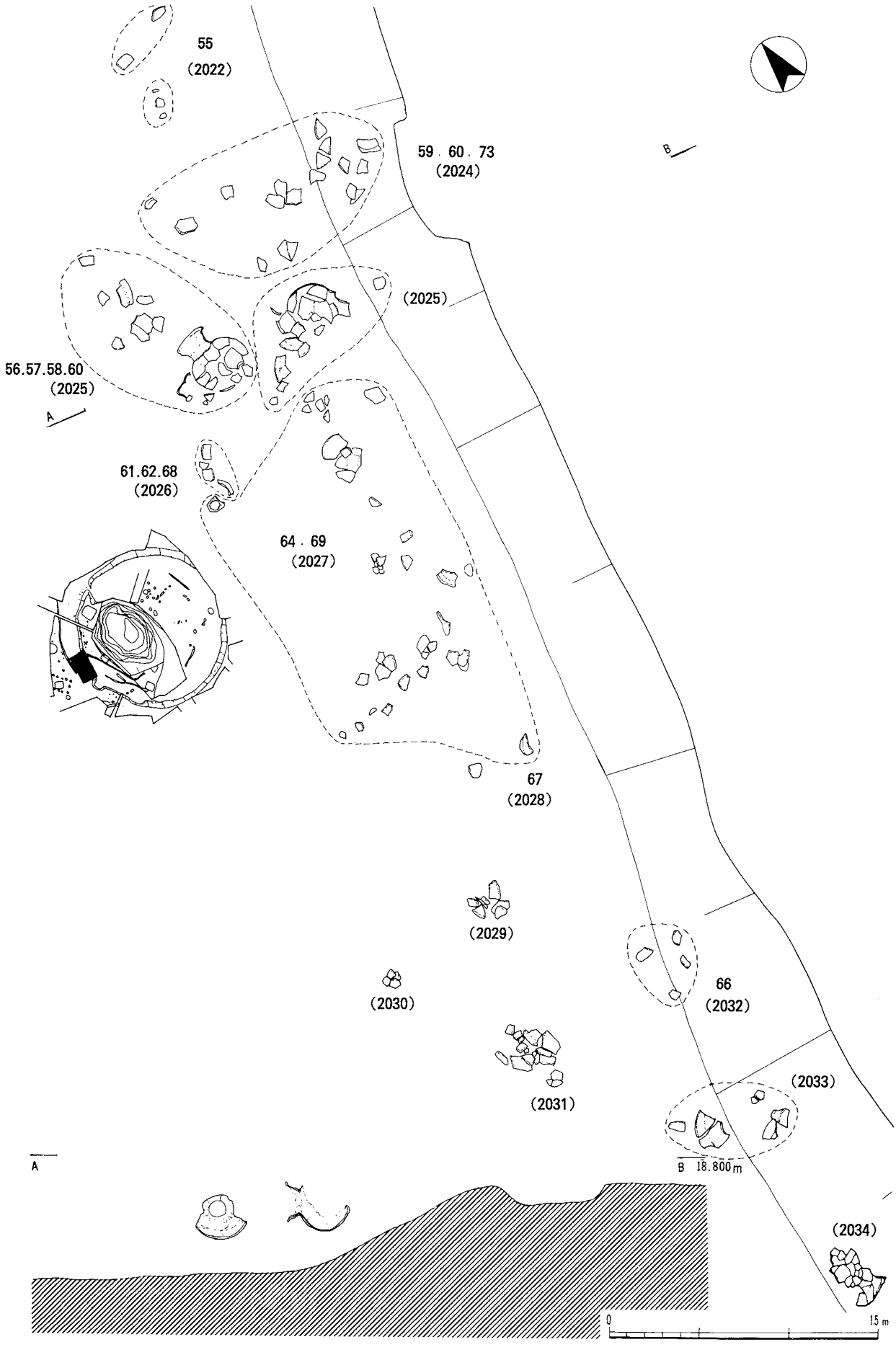
第５－３図　Aトレンチ遺物出土状況図（１：36）



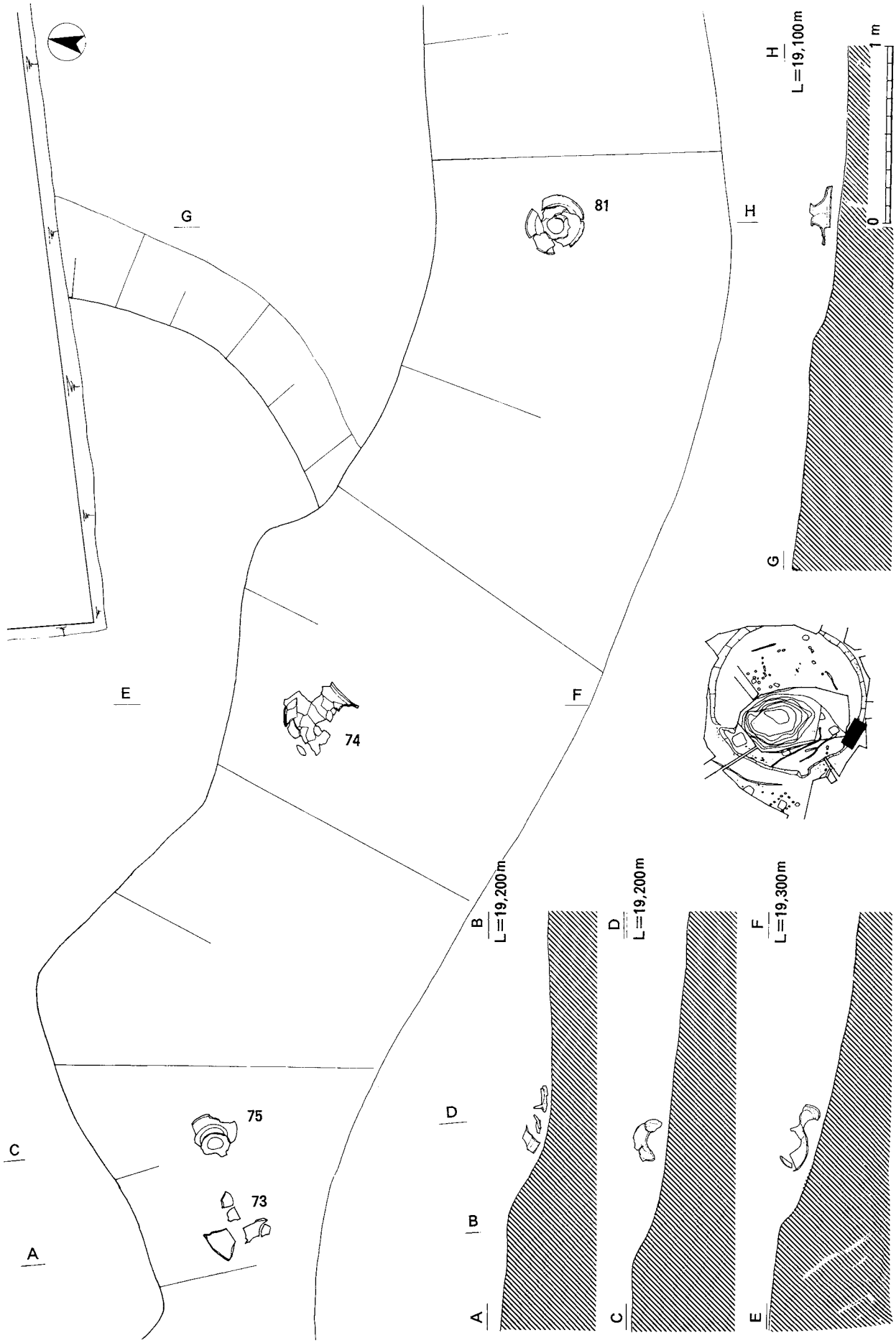
第５－４図　北東拡張区遺物出土状況図（１：30）



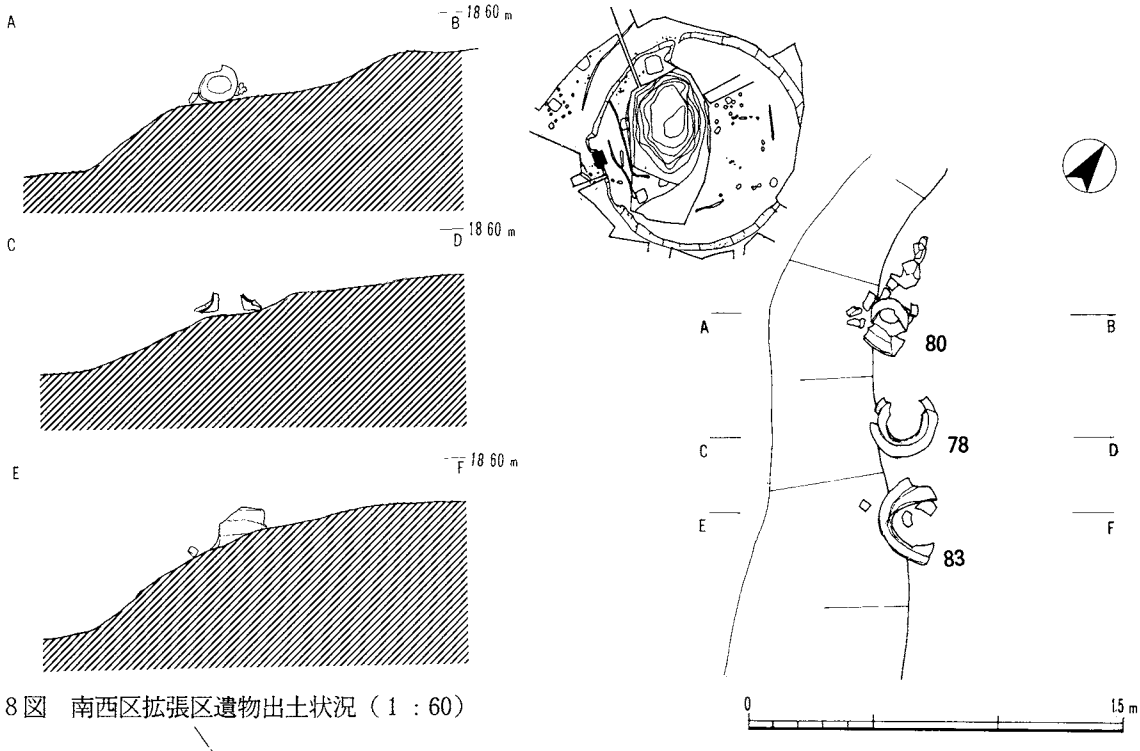
第５－５図　西拡張区北半遺物出土状況（１：30）



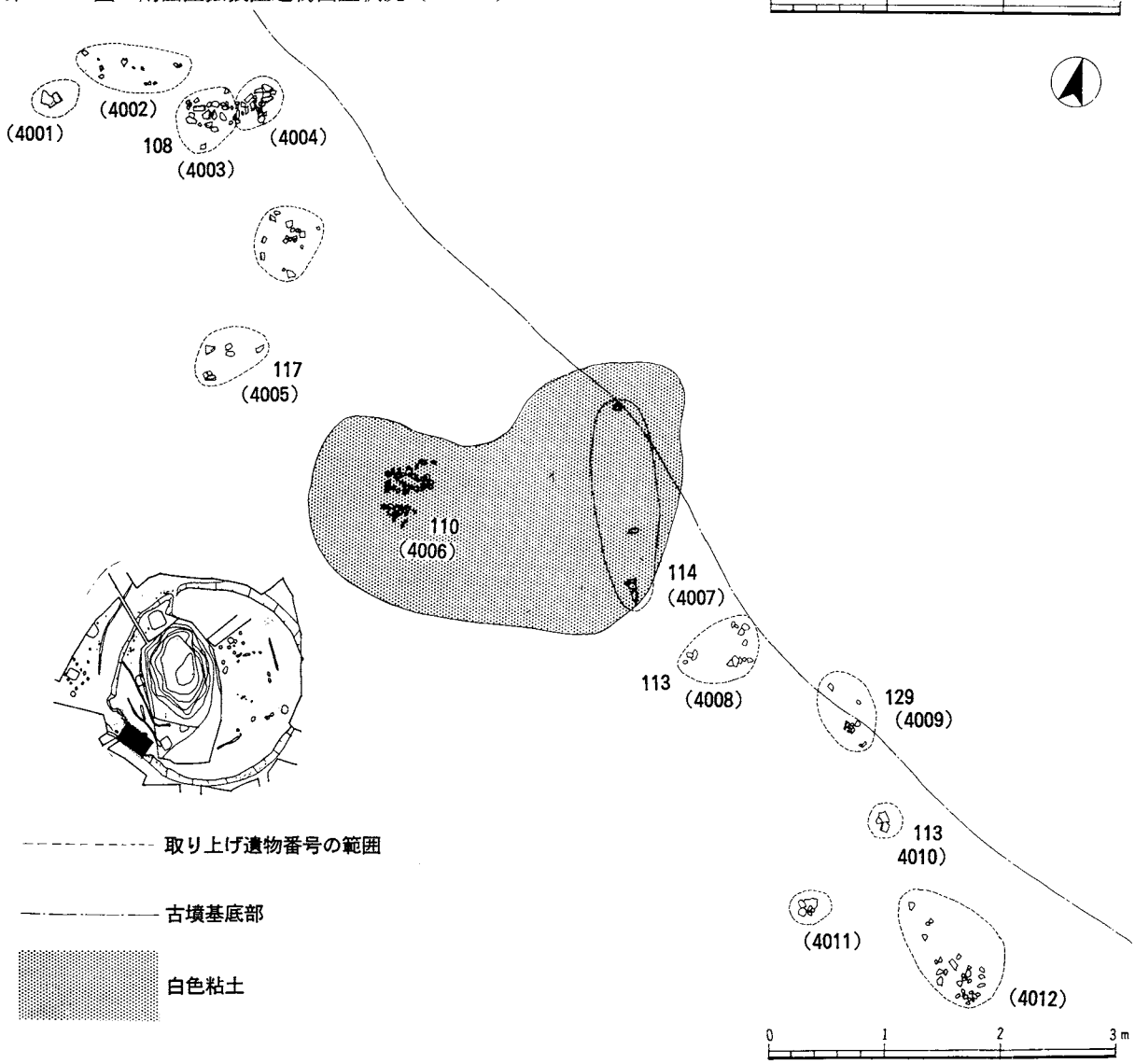
第５－６図　西拡張区南半遺物出土状況（１：30）



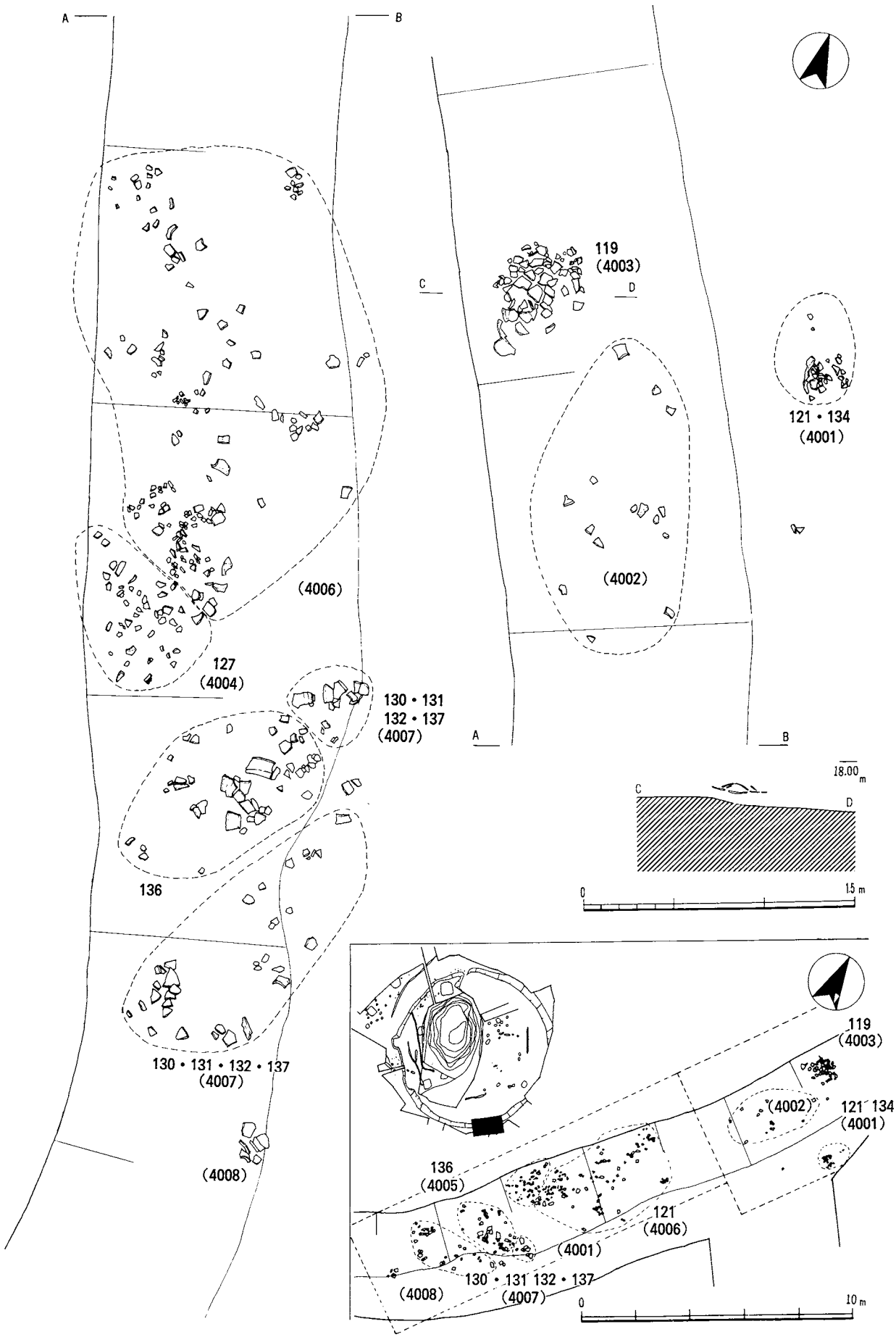
第５－７図　南側周溝遺物出土状況（１：60）



第５－８図　南西区拡張区遺物出土状況（１：60）



第５－９図　南区拡張区遺物出土状況（１：60）



第５－10図　南東拡張区遺物出土状況（上段１：30）（下段１：100）

土師窯擂鉢が出土している。耕土下すぐ灰褐色砂層（地山）となる。周溝埋土は、Bトレンチと同じく暗灰褐色粘土である。周溝自体も中世以降の削平を受けており、わずかな二重口縁壺が散布すること、標高17.80mの等高線が回ることをもって墳丘裾を判定した。173・174・175は、当発掘区で出土した。

10. 排水路直線化に伴う発掘区

当初クランク状になって排水路部分が、用水の運ぶ土砂、田草等がつまりやすいとの要望があり、協議の結果、直線に工事変更することになった。調査は、2月26日に実施した。水路部分と墳丘の削平を受ける部分について発掘調査した結果、現況の畑地の耕土下に弥生時代の暗褐色砂質土の包含層があり地山は黄褐色砂混りシルト層で弥生時代中期後葉の竪穴住居ＳＢ28、ＳＢ29を検出した。詳細は、杉垣内遺跡Ｃ地区として報告している。なお当該発掘区からは、二重口縁壺は出土していない。

11. 墳丘部の保存について

残存する墳丘部に関しては地元改良区の御協力により保存されることとなった。西拡張区、南西拡張区は、ブルドーザーにより土を埋め戻した。またＡトレンチ西セクション、南西拡張区セクションは、取りはずさないままに埋め戻した。

4．遺　　物

遺物は、コンテナ箱約70箱である。遺物の時期は縄文時代後期～近世に及ぶが、本稿では、ナンバリングして取り上げた深長古墳周溝出土の二重口縁壺、甕その他の古墳時代前期遺物に限り報告したい。深長古墳の遺物中特筆できるのは、周溝に転落状態で検出された二重口縁壺である。実測したものは約200点、本文に掲載したのは175点である。完形復元できたものは６個である。口縁部及び頸部内面と外面全体を丹塗している。底部は焼成前に穿孔されている。色調は淡褐色を呈し、胎土に石英・長石・金雲母を含む。橙褐色を呈するものが数点ある。

第５－10図に深長古墳出土の遺物器種分類を示した。

二重口縁壺Ａ類……一段目の口縁部が横に強く引き出され、二重口縁部が強く外反して口唇部が上を向く。口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ調整。体部外面ハケ調整＋ナデ消し。底部焼成前穿孔。

二重口縁壺Ｂ類……一段目の口縁部が斜め上方に立ち上り上下に拡張される。二重口縁部は外反した後斜めに引き出される。Ａ類に比して一重目口縁部の屈曲が弱く直線的である。体部はややたて長で、胴部最大径は、中央部にある。口縁部ヨコナデ、体部内外面、板ナデ＋ナデ。底部焼成前穿孔で、底部が厚みを持つため二段にケズられている。平底である。

二重口縁壺Ｃ類……一段目の口縁部が斜め上方にゆるやかに外反する。口唇部は、上方に引き出される。口縁部ヨコナデ。体部内外面板ナデ＋ナデ。底部焼成前穿孔。穿孔が底部の側縁近くまでおよんでいる。

二重口縁壺Ｄ類……二重口縁部が外反し、先が細くなって終る。口縁部ヨコナデ、体部内外面ともヨコナデ。平底のものをD_1類、丸底のものをD_2類とする。D_2類は当古墳に完形品が無いので、杉垣内遺跡Ｃ地区ＳＸ41周溝出土の壺をもって典型とする。

小型二重口縁壺Ｅ類……底部のみ残存しているが、二重口縁壺と推定されるので、Ｅ類として設定した。平底で、底部は焼成前穿孔である。坂本山６号墳出土の小型壺を典型とする。

壺Ｆ類……赤褐色で薄手である。口縁部が斜め上方に立ち上がり、口唇部がヨコナデされ上下に拡張される。体部内外面ヨコナデ。Ｄ類の中で薄手で胎土が赤褐色のものと近似する。

壺Ｇ類……体部が球形で口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がるものである。

壺Ｈ類……口縁が外反した後上下に拡張される。口縁部側線に櫛状工具による山形刺突文が、内面に櫛状工具による刺突文が施される。

壺Ｉ類……厚手で口縁部が外反、外面タケハケ、内面ヨコハケ。

高杯Ａ類……脚部は厚手で外反する。外面タテハケ。（弥生中期と思われるが、周溝遺物として取り上げ

たので正確さを期するため掲載した。）

高杯Ｂ類……薄手で脚部は斜め下方に直線的に作られる。

高杯Ｃ類……脚部上部に２条の平行沈線がある。厚手で脚裾部が外反する。三方透し孔を有する。

高杯Ｄ類……厚手で脚部が裾広がりになる。

Ｓ字状口縁台付甕……脚部のみ残存。薄手で外面タテハケ。

船型土製品……手づくね製。たて長で、底部は平たい。

出土遺物について以下、発掘区ごとに概述したい。

１．北拡張区

二重口縁壺Ａ類（８）、Ｂ類（11）、Ｃ類（９）、Ｄ類（５）が出土している。

いずれも口径30cm前後で、淡褐色を呈する。１は一重目口縁が横に拡張するＡ類で、２は、屈折の少ないＣ類の特徴を持つ。７は、二重口縁のみで判別できない。色調は、いずれも淡褐色で、内外面丹塗である。12は、底部のみ残存する。底径8.2cmで、底部焼成前穿孔である。内面は刷毛調整される。13は、底径8.2cmである。３は、一重目口縁が外反するＡ類である。色調淡褐色を呈し、内外面丹塗である。

４は、口縁部は、ヨコナデ、頸部内外面をハケとナデで調整する。口径は、30.0cm。口縁部が鋭く引き出されるＢ類の特徴を持つ。

14は、Ｃ類の典型である。Ａトレンチ出土。二重目口縁部先端が上下に肥厚する24がある。二重口縁壺Ｄ類（25）は、墳丘部から出土した。橙褐色を呈し、胎土は精良である。28・29は、二重口縁壺底部でいずれも焼成前穿孔である。28は、Ｓ字状口縁台付甕の脚台である。薄手で、脚部外面に細いハケ調整がなされる。内面には指圧痕が残る。

２．西拡張区

西拡張区では多数の二重口縁壺が転落状態で検出された。29～50は、西拡張区の北半で出土した遺物で出土状況は、第５－５図に示した。29は、Ｃ類である。34・36・38もＣ類と考えられる。Ａ類は、33・37・39である。47は、橙褐色を呈する底部で、上底で焼成前穿孔である。底部内面にハケ調整がなされる。高杯Ｂ類（50）も出土している。

51～69は、西拡張区南半で出土した遺物で出土状況は、第５－６図に示した。Ａ類は、52、57、60、63である。○は底径9.2cmで、上底状の底部は、焼成前穿孔されている。他の個体に比べ底径が大きい。66は、壺Ｅ類である。一重口縁で終っており、口縁部端が上方を向く。扁平球状の体部を持ち、底部は上底で、穿孔は無い。底部内面に丹が付着していた。橙褐色を呈し、胎土は精良である。

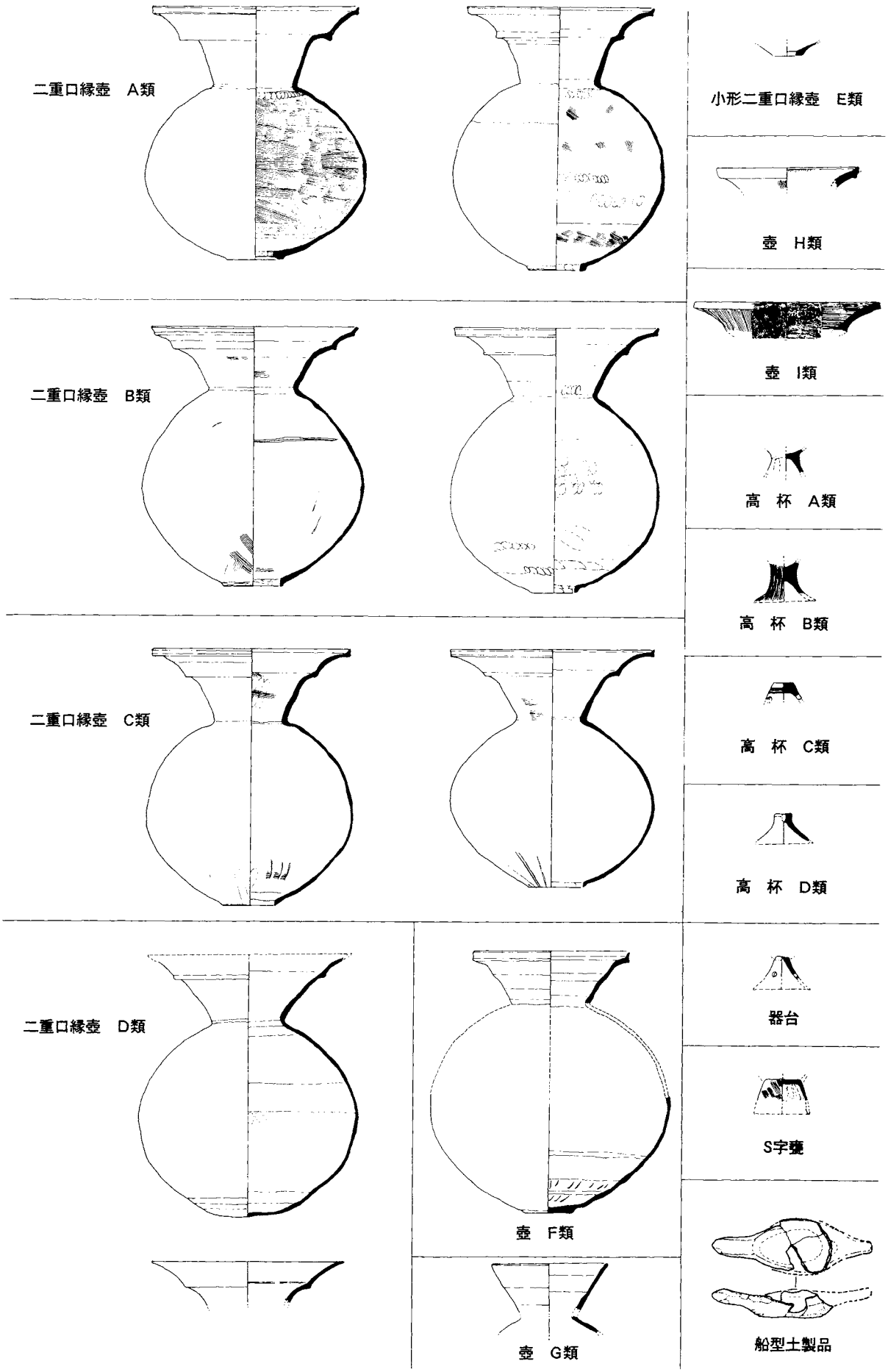
67は、壺Ｉ類である。厚手で、外面タテハケ、内面ヨコハケ調整される。壺Ｉ類はこの１点のみ出土している。

この西拡張区では、約33個体前後の二重口縁壺が出土した。

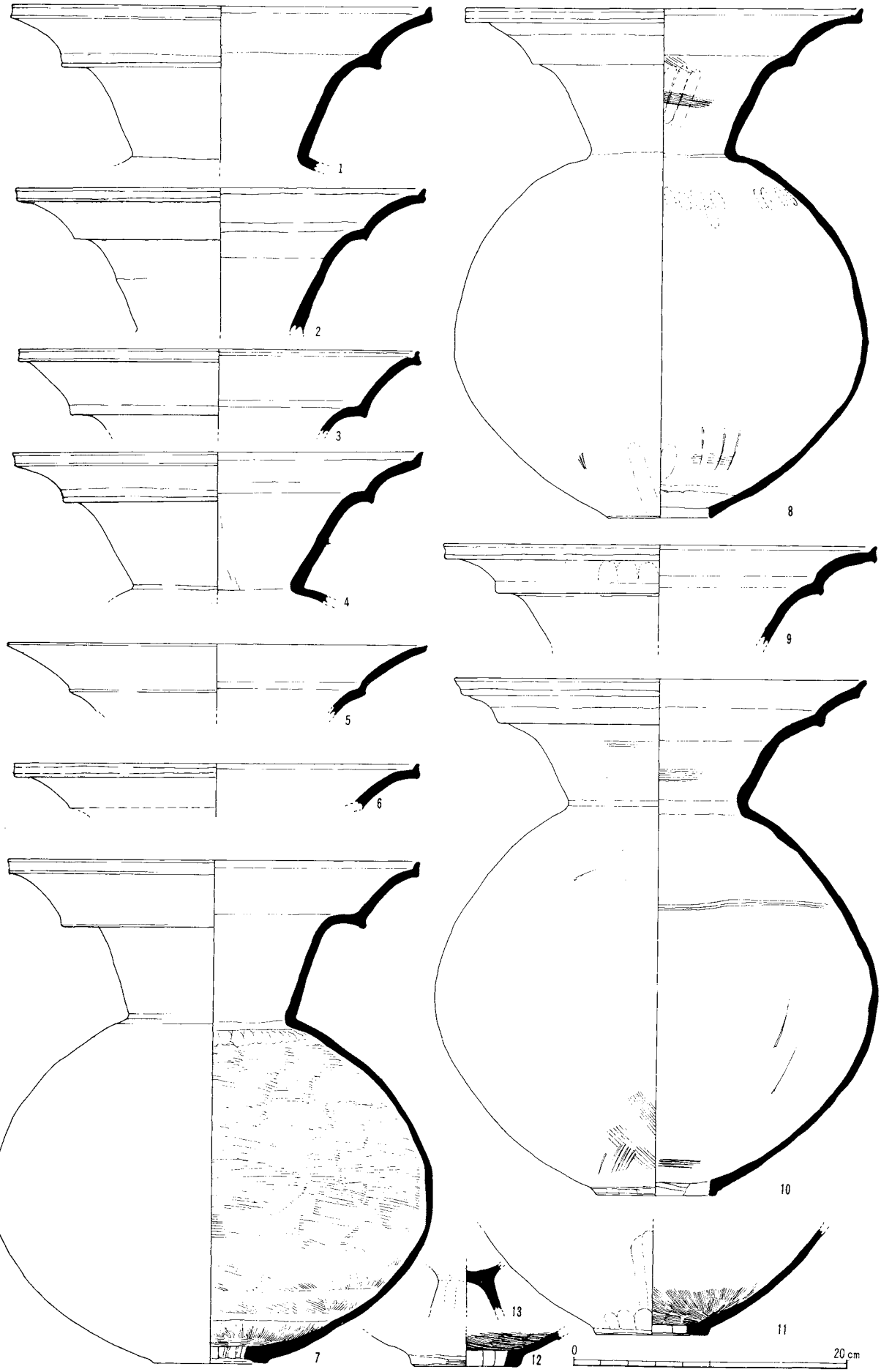
３．南西拡張区

当初杉垣内遺跡Ｃ地区の排水路発掘調査時にクランク状に水路が曲がる部分。西端でテラス部分の端部と思われる地点で78・79・81の３個体の二重口縁壺が列をなして検出された。78・79はＣ類、81はＡ類である。遺物出土状況は、第５－７図に示した。またこの水路部分発掘調査時に、南側周溝を確認しており、転落状態で74・76・75・82の４個の比較的残りの良い個体が確認された。74・75は共にＢ類である。76・82はＡ類である。

南西拡張区の中で前記の二地点の間を西側に拡張した。この部分では、墳裾に転落状態で、15個体前後の二重口縁壺及び壺Ｇ類が出土した。遺物出土状況は、第５－８図に示した。出土遺物は、108～117である。108は、Ａ類であり、他にＡ類と考えられるものは、110・115・116がある。110は、底部で棒状工具により粗雑な焼成前穿孔がなされる。111・115は、頸部のみ残存する。Ｃ類は、113・114である。113は、口縁部が残っており、114は、頸部のみ残っている。橙褐色の胎土が精良な109が１点出土しており、109は、薄手の器壁を持ち、外面板ナデ、内面大半にハケ調整が残る。二重口縁壺Ｄ類もしくは、壺Ｆ類であろう。壺Ｇ類も１点出土した。117は、橙褐色を呈し、口縁部が斜め上方に直線的に立ち上る。



第５－11図　遺物器種分類図



第５－12図　北拡張区遺物実測図（１：４）

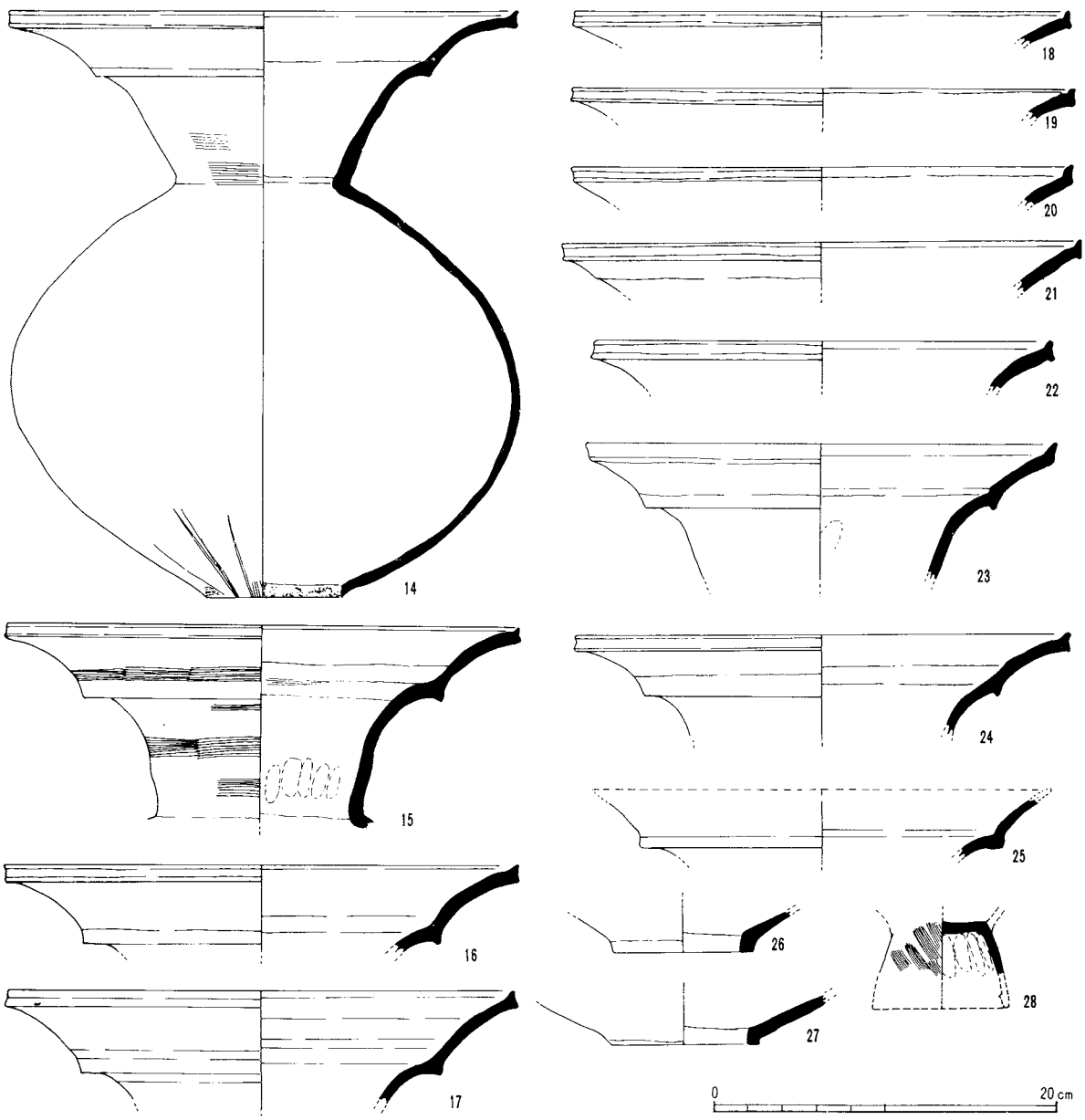
4．南東拡張区

南東拡張区では、墳形を確認するためDトレンチの両側を拡張した部分で、転落状態の二重口縁壺を14個体前後確認した。出土状況は、第5－10図に示した。出土遺物は118～132である。118は、A類である。ほぼ完形であり、墳裾につぶれた状態で出土した。他にA類は、120、128、129、130、131である。120、128は、口縁のみ残り、128、129、130は、平底で、底部焼成前穿孔である。129は、棒状工具による穿孔痕がみられる。C類は、124、125、127、131である。

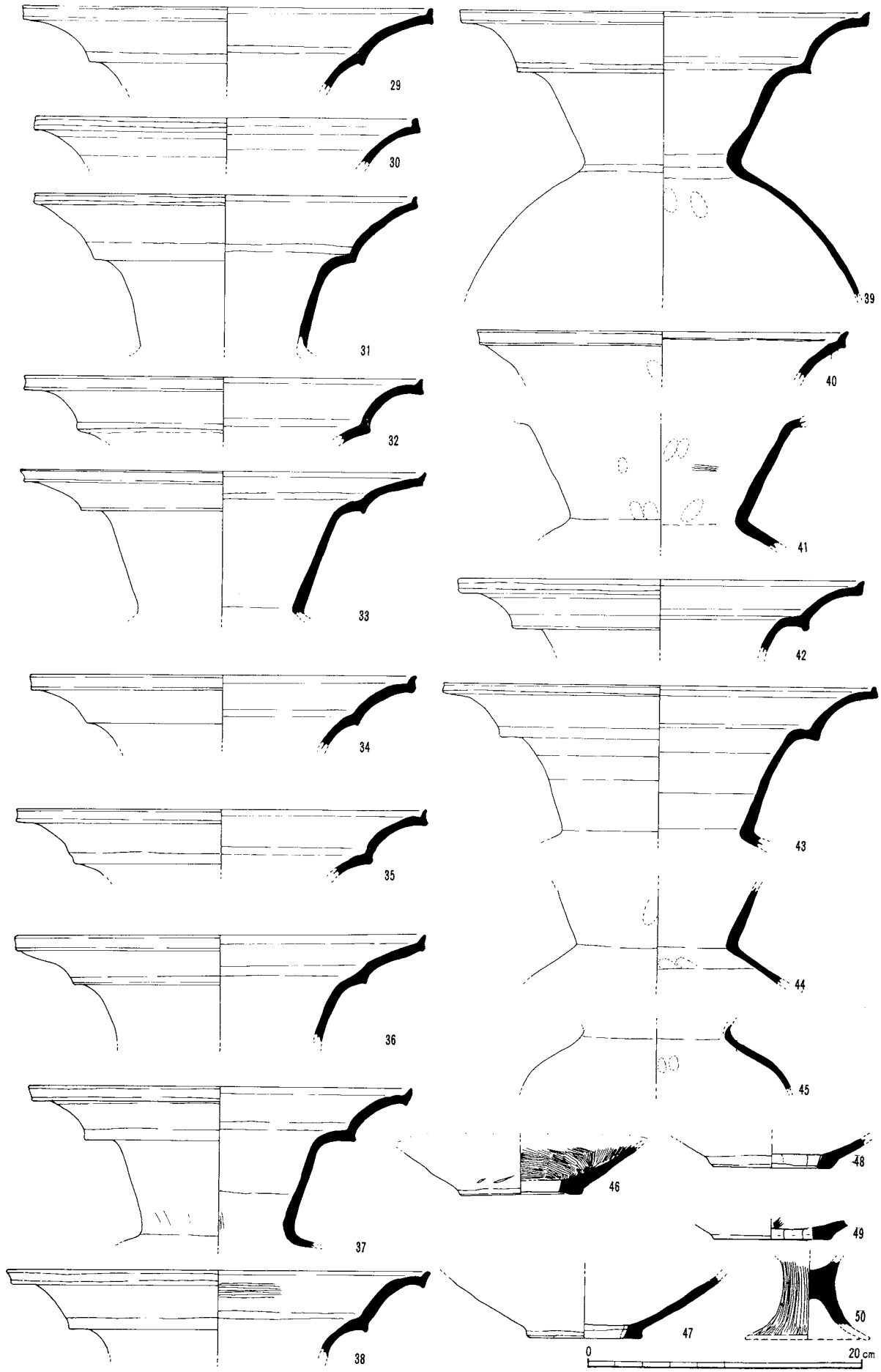
排水路にあたるF19－2地区の遺物は、当初墳丘裾と確認できないまま発掘したが、この地区を補う意味で出土している二重口縁壺を第5－18図に示した。132～141がそれである。137・141は、A類である。137は口縁部のみ残存し、141は、平底の底部である。133・139は、C類である。これらの出土遺物と識別の困難な遺物を合せると7個体前後の二重口縁壺を確認し得た。

5．Bトレンチ

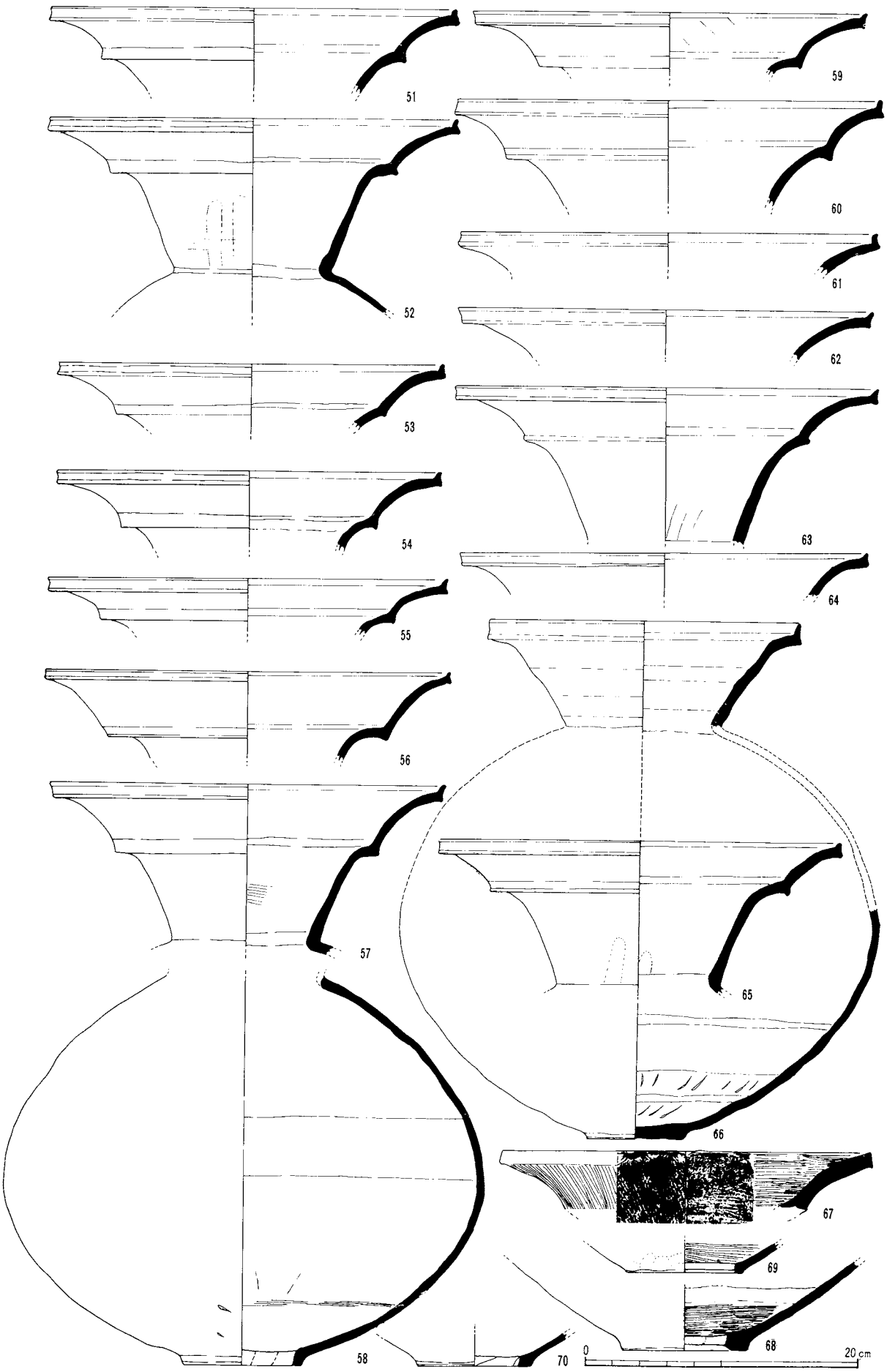
Bトレンチでは、鎌倉時代以降近代までの開田により墳丘が削平され、かつ墳裾まで水田の影響を受けており、わずかに周溝底の確認ができたのみである。従って二重口縁壺の出土数も少ない。淡褐色を呈する壺の一重目口縁部が2点出土しているが、同一個体と思われるので1点のみ図化した。147は、口縁部端が上方につまみ出される。橙褐色を呈し、



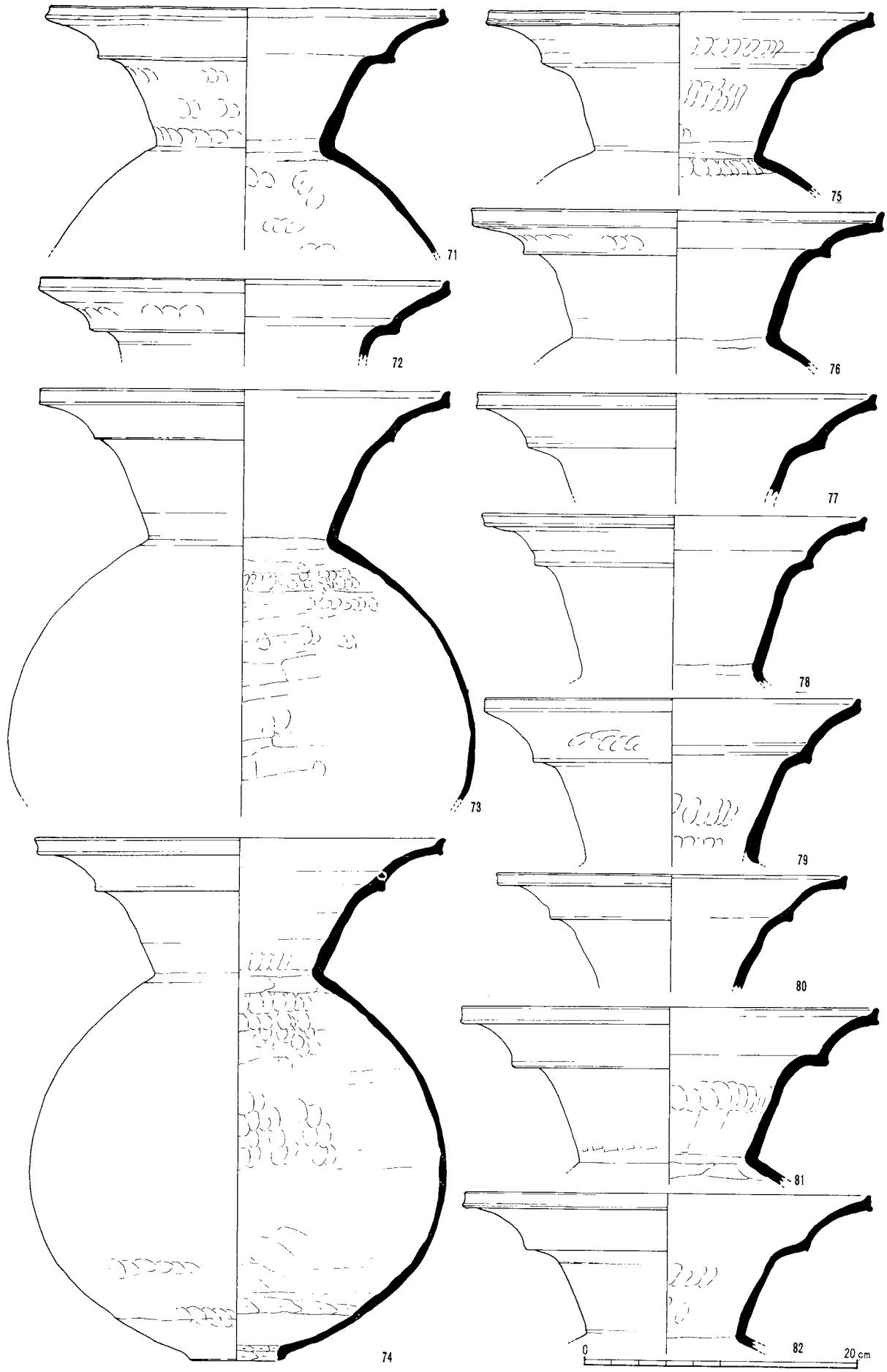
第5－13図　Aトレンチ遺物実測図（1：4）



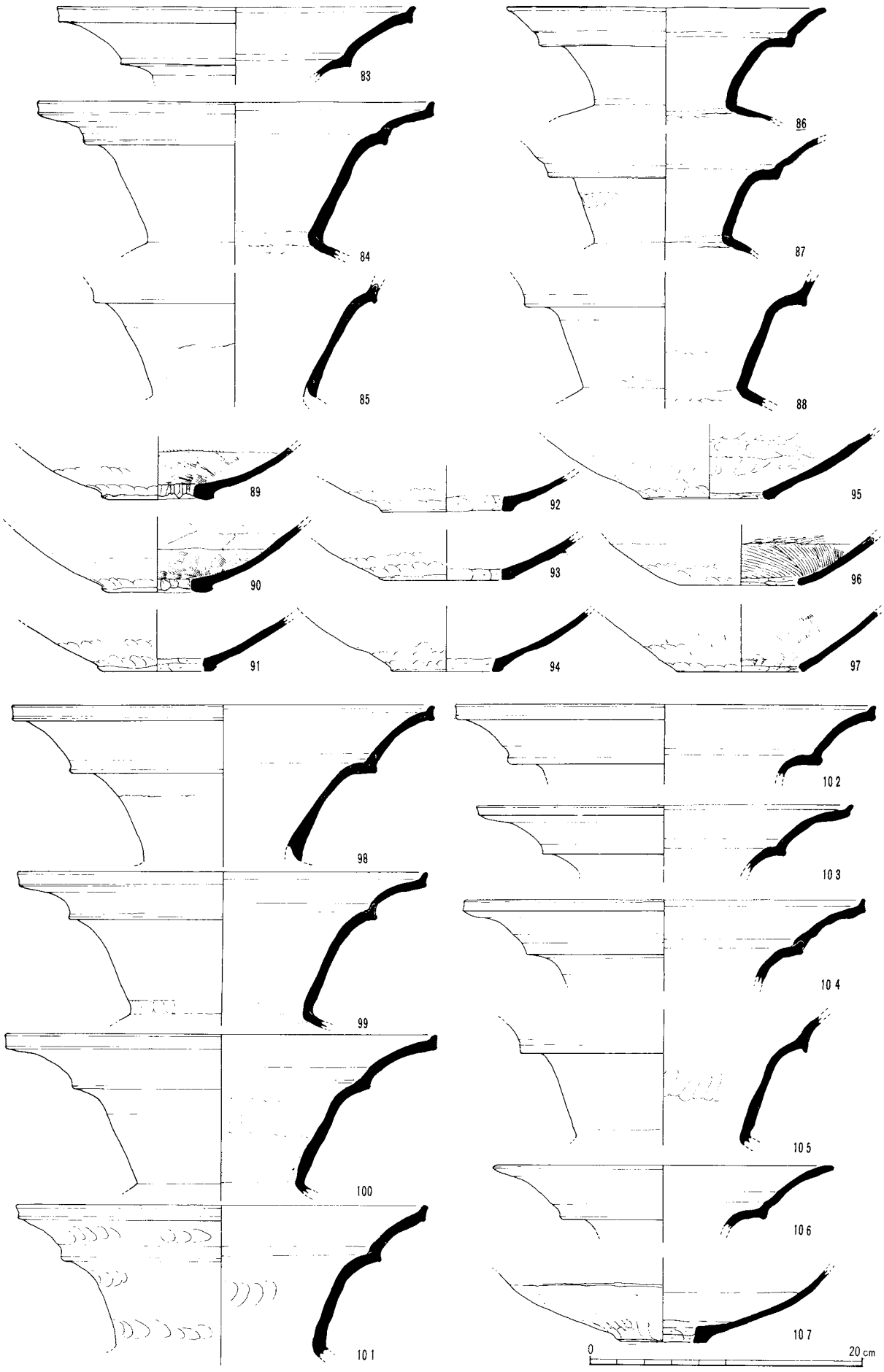
第５－14図　西拡張区遺物実測図（１，１：４）



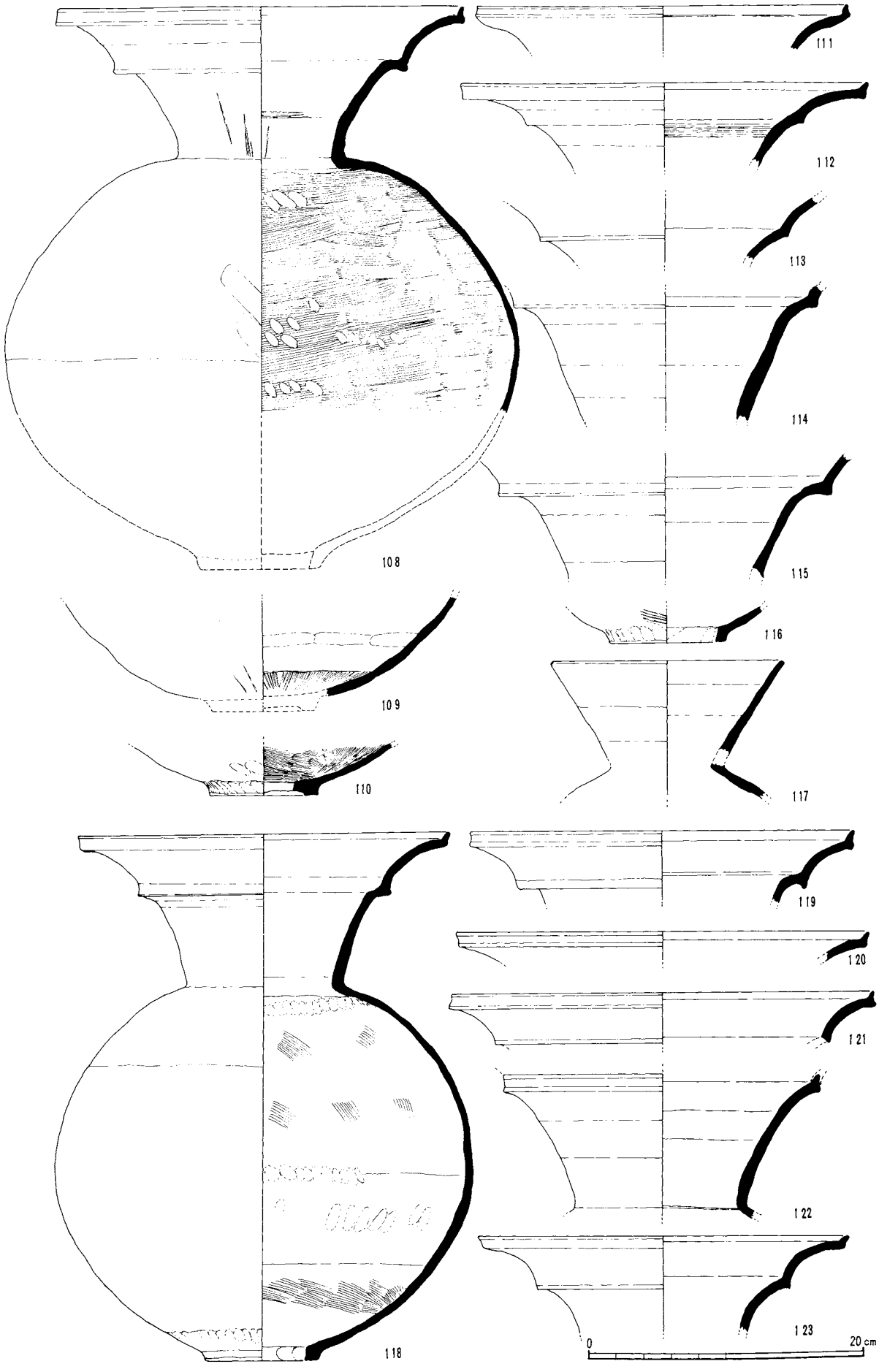
第５－15図　西拡張区遺物実測図（２，１：４）



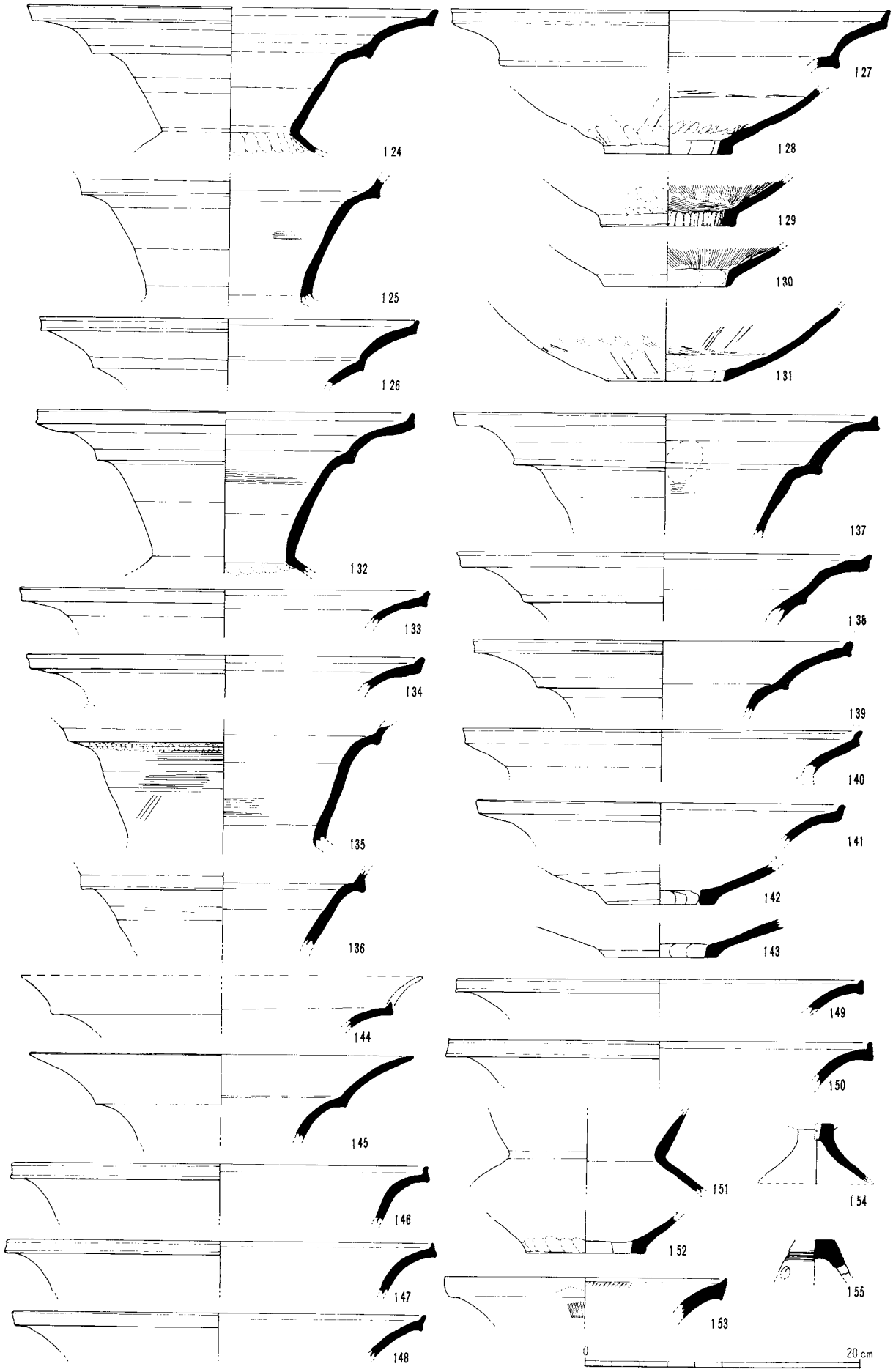
第５－16図　南西拡張区遺物実測図（１，１：４）



第５－17図　南西拡張区遺物実測図（２，１：４）



第５－18図　南東・南西拡張区遺物実測図（１：４）



第５－19図　南東拡張区・Ｂトレンチ遺物実測図（１：４）

二重口縁部が外反するD類144・145も出土している。高杯C類155も出土した。

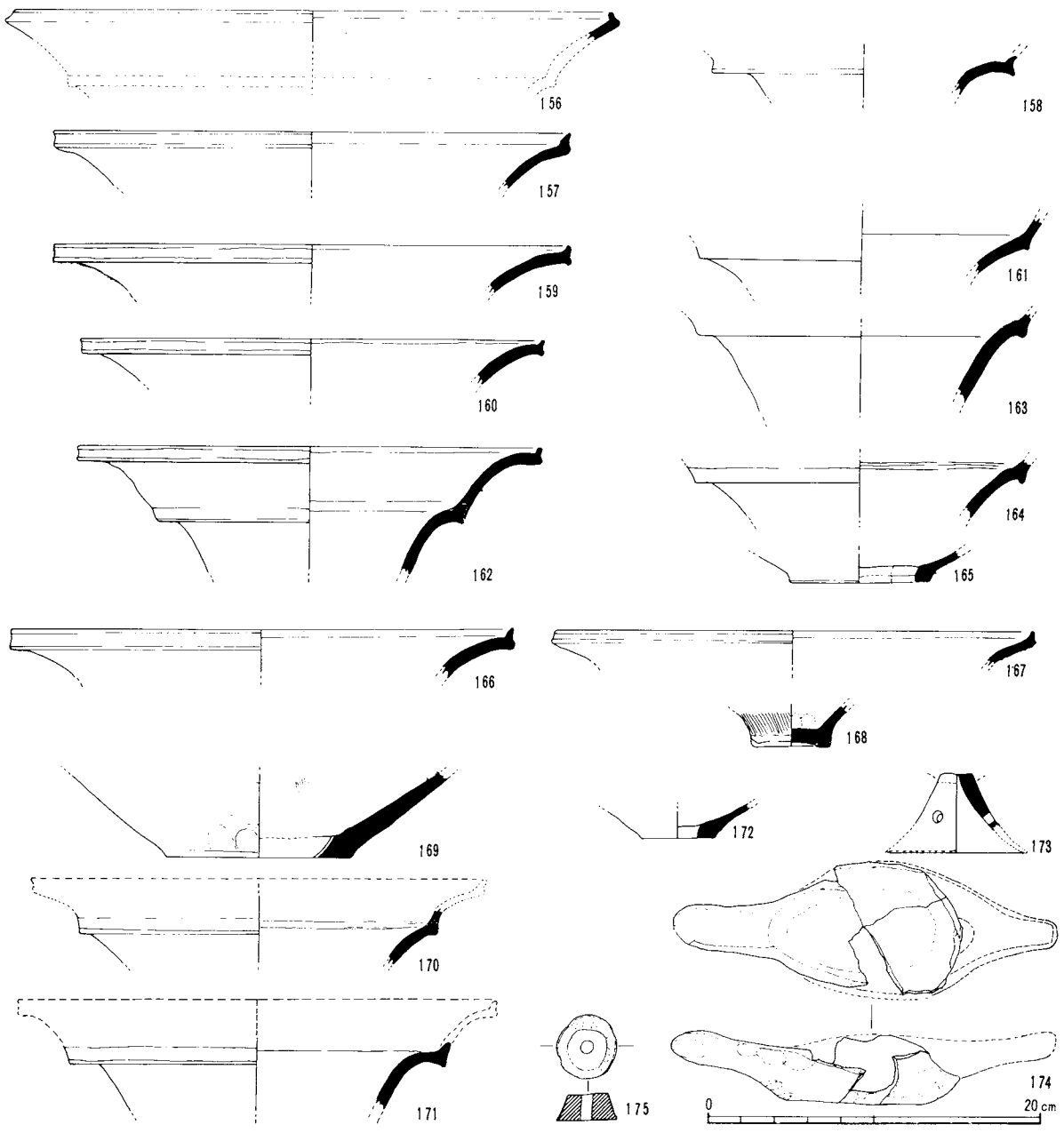
6．Dトレンチ

Dトレンチでは、北端の部分で153・154・155が出土した。いずれも小片である。Dトレンチの南側では二重口縁壺は出土していない。南側に傾斜しており、古墳時代後期以降の遺物が包含層から多数出土した。これらは、杉垣内遺跡C地区で報告する。

7．東拡張区他

開田により墳丘が削平されている。周溝もBトレンチと同様に削平されているので、出土した二重口縁壺は少量である。162は、平底の底部で焼成前穿孔がなされる。174、171は、口縁部のみ残存する。

東北拡張区と南東拡張区のナンバリング取り上げ以外の遺物の一部を156以下に示した。東北拡張区で注目されるものが数点ある。165は、底径11.0cmで焼成前穿孔がなされる。169は、二重口縁壺E類である。底径4.4cmで小型のものである。E類は、この一点のみである。173は、器台である。三方透孔が穿孔されている。丹塗の痕跡が認められる。174は、船型土製品である。推定長25.4cm、幅8.0cm、高さ4.0cmである。手づくねにより成形されており、船首部を指圧により細長く作り出している。船首部の下端に仕上げ時の板状工具のアタリ痕が残る。内



第5－20図　Dトレンチ・東拡張区他遺物実測図（1：4）

面にも一部板ナデ痕が残る。船底部及び、船体内面に黒斑が残っている。内外面とも丹塗が施される。

5．結　　語

1．遺構について

1．墳形

深長古墳は、四周から削平を受けており、特に東側は、後世の開田によりわずかに周溝の残存が確認できる程度である。しかしながら、北拡張区及び西拡張区、南西拡張区は、周溝が確認でき、二重口縁壺が転落状態で多数発見された。南東拡張区の一部で比較的良好な遺物の出土状況が認められた。これらから深長古墳は、直径約45mの円墳と想定できよう。墳丘の上に三角点があり標高22.90mである。残存墳丘標高は、22.70m前後である。西側周溝の標高は、18.00m～18.10mであり、南及び東側周溝の標高は、17.80～17.90mである。したがって比高は、4.6m～4.9mとなり墳丘の高さは約5m前後と考えられる。西拡張区の土層で墳丘築造前の弥生時代の遺物包含層が認められ、後世の開田により削平を受けているが、残存部上面の標高は、19.10mである。この弥生時代の遺物包含層は、後に排水路直線化に伴う発掘調査時でも確認され、東側にゆるやかな傾斜を持つ。深長古墳は、この包含層の上に盛土して築造されている。南西部で周溝内でなく、テラス状になった墳丘裾部から3個体の二重口縁壺が列をなして検出された。この出土状況から、墳丘裾と溝の間に0.8m～1.0m程度のテラス部があったと推定される。

古墳の規模は、墳丘裾までの直径43.0m、テラス部1m弱、周溝内内径45m、周溝底と墳頂の比高約6mである。三国の鼻1号墳④の発掘成果を援用すると、墳裾までの直径45mの部分を中心に地表をはぎ、緩斜面になっているの西側を若干削り、盛土する部分の面をある程度平らにしたと考えられる。この段階でテラスの高さを決定し、次の段階では、二段目の円墳部分（底部直径41m）から約5mの高さに盛土をしつつ、途中で主体部（未掘であり不明）を設定していった。推定墳丘半径20.5m、上部半径10.25m、推定高5m、墳丘の傾斜角を30°、斜辺と円墳中心軸との交点の距離（高さ）を10.4mとする。円錐の面積計算を行い推定盛土土量を求めた。

$\frac{1}{3}\times 20.5^2\times 3.14\times 10.4-\frac{1}{3}\times 10.25^2\times 3.14\times 5.0=4024.74m^3$

推定盛土土量は、4025m³である。但し、前述のように微傾斜地であるので墳丘裾まで平均深さ0.2mの削平、整地を行っていたとする。$22.5^2\times 3.14\times 0.2=318m^2$

これらの計算から約4000m³程度の土量が運搬されたと推定される。Aトレンチ東壁の土層観察から、墳丘裾部から外側約17mに周提状の立ち上りがみられる。この事実から、直径45mの円墳の周囲に17m幅の周溝を深さ1.2m掘削したと推定する。この時の土量は、以下の計算により求めることができる。

$(22.5+17.0)^2\times\pi\times 1.2-(22.5)^2\times\pi\times 1.2=3971.47m^3$となる。

整地は周溝掘削前に標高の高い所から低い所へ移動し、その後、墳丘の盛土は、周溝の土を用いたといえよう。1人1日1m²の土量を周溝から墳丘築造に掘削運搬できるとすると50人が80日、整地等を含めると90日程度かかる計算になる。

なお、南西部で二重口縁壺が列になって検出された部分の北側は、やや高くなっており、陸橋状の墓道の高まりと推定している。杉垣内遺跡C地区SX41出土の二重口縁壺（268）が南西コーナーに供献されていたことがこれを示唆している。

2．内部主体

墳丘中心部は、保存されることになり未発掘である。ただし墳丘も南及び東からの削平が著しく、主体部も半壊状態で残っていると思われる。南西発掘区拡張の際周溝底部で白色粘土が検出されていること、地元の人が、昔墳丘で白い粘土を取って遊んだと話していることから、粘土槨を推定している。

3．南勢地方の前期古墳と深長古墳

深長古墳は、松阪市西部域に所在し、坂内川水系

に属する。この流域で看過できないのは、八重田古墳群である。深長古墳の南1.2kmに位置し、全24基の古墳群である。団地開発に伴い9基が発掘された前期～後期の古墳群である。前方後円墳1基と1・8・10号の3基の円墳が注目される。1号墳が独立丘陵状に孤立する支尾根に1基その北120mの南北に長い尾根に11号墳、この北100mに8号墳が築かれている。標高はいづれも46m前後で、東にひろがる水田面との比高差は約26mである。この3基は、占地状況から、相前後して築造されたと考えられる。また10号墳は、11号墳の北600mの低丘陵先端部に位置する。墳丘裾の標高24mである。深長古墳の立地状況、墳丘の規模とも酷似している。なお深長古墳は、10号墳の北約600mにある。10・11号墳は、当地域における首長級の古墳と推定され、深長古墳も今回の成果から首長層の古墳であると考え、築造年代をともに4世紀後半と推定している。

北東部の低地に立地する松阪市清生町茶臼山古墳は、既に消滅したが、円墳あるいは前方後円墳と考えられ、粘土槨、内行花文鏡、三角縁神獣鏡、石釧が出土した[5]。直径55mの円墳部、高さ6m、南側を前方部と仮定すると前方部36mとなる。八重田古墳群に比べて副葬品の豪華さが目立つ。

金剛川水系では、独立丘陵の頂上に久保古墳がある[6]。同じくこの水系の古墳に坊山1号墳[7]、高田1号墳、2号墳があり、4世紀末の築造と考えられている[8]。

同時期に、雲出川の支流である中村川流域では、首長居の古墳として前方後方墳が採用されている。向山古墳[9]、筒野古墳[10]、錆山古墳[11]、庵ノ門古墳[12]等がそれである。西山古墳[13]→向山古墳→筒野古墳の順に築造されたと考えられており、これらは中村川が北東流する低地を囲むように約2kmの距離を置いて位置する。小地域における首長の墓域が点在しているのは、その絆帯の不安定さを示すものであろうか。近年、筒野古墳のある天華寺丘陵で、西野7号墳、西野8号墳、西野3号墳が発掘された[14]。これらの成果から前方後方墳と大型円墳の同時性が明かになってきた。なお向山古墳の西120mに原田山B1号墳（円墳）[15]、その西180mに原田山A1号墳（円墳）がある[16]。この地域では、首長層の墳墓に前方後方墳と円墳が採用される。

八重田古墳群発掘調査報告書に「南勢地方の大形古墳」が載せられ、A地域（中村川流域）、B地域（坂内川左岸地域）、C地域（坂内川右岸地域）、D地域（金剛川流域）、E地域（櫛田川右岸地域）、F地域（宮川右岸地域）として論考されている[17]。4世紀代にA地域における前方後方墳の採用、D地域における円墳の採用、B地区における八重田1号墳の築造に注目している。5世紀前半C地域における宝塚1号墳出現をもって、広域盟主権の確立ととらえている。5世紀後半におけるE・F地域にも大型古墳が現れるとしている。

前記の研究史に沿って深長古墳及び、最近の古墳発掘成果をもとにA～F地域の位置づけを再考したい。A地域では、前方後方墳が首長墓として採用される。しかしながら西野3号墳、7号墳が発掘され、二重口縁壺、円筒埴輪をもつ大型円墳が同地域に4世紀後半代に存在したことも明らかとなった。

B地域では、布留古段階で八重田1号墳が築造され次いで、布留新段階で、相前後して深長古墳、八重田10号墳、8号墳（円墳）、が築造された。宝塚1号墳出現前後におけるB地域は、これらの古墳の被葬者を首長とする一大勢力を有していたと考えられる。また焼成前穿孔の完成された形を持つ壺を多量に墳丘裾に巡らす深長古墳の存在は特筆される。また、田高田遺跡[18]、川井町遺跡[19]など弥生時代中期以後の遺跡もあり、良好な水田可耕地もあること、深長古墳の西溝に低墳丘墓ＳＸ41が検出されていることから在地勢力の継続的な発展がうかがえる。

C地区では、清生町茶臼山古墳を仮に前方後円墳と考えると約90m級の大古墳となり、4世紀後半に定型化した首長墓が築造され、次いで宝塚1号墳[20]が築造されたことになる。あるいは径55mの円墳であるとしてもその副葬品の豪華さから、C地域下流域における首長墓が存在したといえよう。宝塚1号墳の出現が、C地域のみならず、他の地域を含む一大勢力の首長権の確立である点は異論なかろう。

D地域では、久保古墳（円墳径52m）が単独であり、4世紀後半紀の首長墓と考えられる。立地からも、方形周溝墓28基を持つ大集落草山遺跡[21]があることから、B地域と同様の系譜を導ける。久保古墳

は墳形から、深長古墳、八重田10号墳と類似する。ただ、この地域で特筆されることは、金剛川の支流で久保古墳とは、丘陵を隔てて南側の谷の両側に坊山1号墳、高田1号墳、2号墳があり三角形の透孔をもつ古式の円筒埴輪を持つ高田1号墳は、4世紀末葉に比定されている。この密接する2つの古墳群は同一グループとみなせるが、他の4世紀後半の古墳群に比べて異質である。この群の後に宝塚1号墳が出現したことは、C、D地域の比較的内陸部の密接な関連性をうかがわせるものではなかろうか。

E地区では、前述のように、弥生時代後期の大方形周溝墓群（金剛坂遺跡㉒・寺垣内遺跡㉓）が存在することから、櫛田川の支流である祓川の西岸を生産基盤とした古墳時代前期における首長層の存在は予想できよう。松阪市域では4世紀における、首長墓とされる古墳群が2～4km程度の距離を置いて点在することが明かになった。E地域では玉城丘陵南西部の権現山古墳群㉔を中心とした外城田川を臨む集団、大塚古墳群㉕、神前山古墳群㉖のある丘陵上に造墓している祓川を臨む集団と斎宮池古墳群㉗・高塚古墳群㉘のある丘陵に造墓している玉城丘陵北部の小谷水田を生産基盤にする集団に分け得る仮説も成立する余地はある。なお斎宮池西岸の丘陵において弥生時代後期の土器が出土していること、中池村樋口遺跡㉙で水田面下約2mの所で古式土師器（壺・S字状口縁台付甕）が出土していることから、小谷水田の開田は比較的早くから進んでいたと考えられる。

F地区においても、近年隠岡遺跡が発掘され㉚、また倉田山丘陵麓の二ッ池遺跡㉛で弥生時代前期壺片が表採される等、新たな知見を得た。当流域における初期農耕文化について再考を促す資料である。弥生時代後期～古墳時代初期の方形周溝墓は、宮川左岸の野垣内遺跡㉜、中楽山遺跡㉝、大藪遺跡㉞がある。これらの事実から、F地域では、宮川左岸の開発が進んでおり、外城田川やその他の水河川を制御して可耕地を拡大していったと考えられる。方形周溝墓が庄内併行期まで連続していることから古墳時代前期の低墳丘墓は発見される可能性があろう。しかしながら大型古墳は築造されていない。

2．遺物について

深長古墳の二重口縁壺を、A～E類に分類したが、出土量はA～C類がその大半を占める。これらの二重口縁壺と県内外の二重口縁壺との比較検討を行ってみたい。

1．三重県内の二重口縁壺

三重県は、東海地方の西部に位置し、畿内に属する伊賀地方と伊勢湾に面し尾張、三河とともに伊勢湾文化圏を形成する伊勢地方に大別される。伊勢地方は、地理的に北勢、中勢、南勢地域に区分されている。

（1）北勢地方

北勢地方で発掘資料が比較的多いのは、鈴鹿川流域である。古墳出土の二重口縁壺としては、八野2号墳出土遺物がある。共伴遺物は高杯、坩である㉟。前Ⅱ期古段階に属する。鈴鹿川下流に神大寺遺跡があり、包含層から口縁部に刺突綾杉文を施す柳ヶ坪系の二重口縁壺、上胴部に線鋸歯文を施す二重口縁壺、二重目口縁部の長い壺等が出土している㊱。中流域左岸に位置する亀山市山城遺跡竪穴住居1では前Ⅱ期古段階（布留古段階）の高杯、二重口縁壺、小型丸底壺、S字状口縁壺が出土している㊲。これらに後出する二重口縁壺は、亀山市地蔵僧遺跡SB22出土壺があり、S字状口縁台付甕D類と、小型丸底壺が共伴する㊳。鈴鹿市天ノ宮遺跡SK2も同時期であり、櫛描刺突文を口縁部内面に施す二重縁壺が、S字状口縁台付甕、小型丸底壺と共伴している㊴。

（2）中勢地方

津市坂本山6号墳の墳裾で二重口縁壺が出土している㊵。深長古墳の壺に比べて小型である。器台と山陰型壺が共伴する。前Ⅱ期に属し、深長古墳の壺に比べてやや古い様相を示す。坂本山6号墳の位置する岩田川流域に新畑遺跡がある。SB2から二重口縁壺と器台が出土している㊶。前Ⅱ期新段階である。SB7からは、一重目口縁と二重目の屈曲がゆるやかな二重口縁壺が小型丸底壺と共伴しており、前Ⅲ期初段階である。他に津市北部の志登茂川流域では、中嶌遺跡があり、茶臼山型二重口縁壺が出土している㊷。口縁部に刺突文を施す二重口縁壺もあ

り、これらは前Ⅱ期古段階である。弥生時代後期に川北城跡方形周溝墓[43]、高松弥生墳墓[44]、安濃町前田遺跡[45]を構築していた基盤の上に、坂本山6号墳のような小型の古墳を築いた小首長層の出現をみることができる地域である。

（3）南勢地方

嬉野町雲出川以南を南勢地方と呼称する。

雲出川にそそぐ支流中村川流域では前述のように前方後方墳が多い。二重口縁壺は、向山古墳で表採されており、前Ⅱ期のものである。西野7号墳においても底部穿孔二重口縁壺が発掘されており、円筒埴輪と共伴する[46]。西野3号墳（直径30m円墳）の周溝から二重口縁壺が出土している。深長古墳に後出する二重口縁壺である。

集落遺跡では、深長古墳のある松阪市西部の坂内川流域では、杉垣内遺跡旧河道でていねいなタテ方向のミガキを施す欠山期の二重口縁壺が出土している。堂ノ後遺跡包含層出土二重口縁壺（256）は、二重口縁部が斜め上方に長く引き出されるもので、先端が先細る。布留古段階に属する。杉垣内遺跡SX41は、深長古墳の西隣りにある方形周溝墓であり、周溝南西隅から二重口縁壺が出土した。深長古墳とほぼ同時期の前Ⅱ期新段階である。川井町粥鍋遺跡から、二重口縁部が強く外反し、先端が上下に拡張される二重口縁壺が出土しており[47]、これも深長古墳とほぼ同時期であろう。また同遺跡から小型二重口縁壺が出土しており、前Ⅲ期のものである。

櫛田川流域では、松阪市閑浄寺遺跡溝2から二重口縁壺が出土している[48]。布留古段階である。この流域では、二重口縁壺をめぐらす古墳は未確認である。

宮川流域においても二重口縁壺を廻す古墳は未確認である。左岸の伊勢市野垣内遺跡の方形周溝墓から高杯、S字状口縁台付甕とともに二重口縁壺が出土している。庄内併行期である。

鳥羽市答志町大畑遺跡では、口縁部内面に綾杉文を持つ柳ケ坪型二重口縁壺と無文の二重口縁壺が共伴している[49]。

（4）伊賀地方

名張市域、上野市木津川流域、柘植川流域で二重口縁壺が発見されている。いずれも弥生時代以降集落跡が連続するところである。名張市域屋敷遺跡SB6からは、布留古段階の二重口縁壺が器台、小型丸底壺と共に出土した[50]。

木津川沿岸では、下郡遺跡2号竪穴住居からは、布留甕、器台と共伴して二重口縁壺が出土した[51]。布留古段階のものである。

柘植川流域では、上野市宮ノ森遺跡SB4から庄内併行期の甕と共伴して先端部が先細る二重口縁壺が出土した[52]。北側の丘陵上に阿山町東山遺跡があり布留最古段階の器台高杯が出土している[53]。同町北中溝遺跡大溝でも小型丸底壺、S字状口縁台付甕と二重口縁壺が出土した[54]。

2．全国出土の二重口縁壺

群馬県元島名将軍塚古墳[55]の二重口縁壺との差は、口縁部内外面のミガキ、頸部の突帯、上胴部の櫛描横線と波状文、体部外面の細いミガキ、焼成後穿孔とがある。この差は、元島名将軍塚古墳のⅢ期とⅣ期の差であり、布留古段階と布留中段階の差である。元島名将軍塚はじめ二重口縁壺の出土例の多い群馬県を例にあげ、伊勢湾西部域における古式土師器の編年観を援用しつつ、深長古墳と同時期と思われる古墳の考察を試みる。元島名将軍塚出土の二重口縁壺は明らかに、畿内の桜井茶臼山型二重口縁壺の[56]影響を受けている。倉賀野万福寺遺跡第4号方形周溝墓出土二重口縁壺も茶臼山型のもので、体部外面をヘラミガキしている[57]。

茶臼型二重口縁壺を後円部墳頂に囲繞する前橋天神山古墳の二重口縁壺は、直立頸部を持つこと、一重目口縁部が水平に引き出される[58]。前方後円墳であり、墳頂に据えられていることから、関東地方における最も典型的な、茶臼山型の配列及び祭祀形態を踏襲している古墳であり、二重口縁壺である。同古墳の二重口縁壺は、深長古墳の二重口縁壺に先行する。

掘之内遺跡群CK2号墓では、二重口縁壺、単口縁壺が大量に出土している[59]。周溝からの遺物出土状況が深長古墳と類似している。時期的にも近似している。DK2号墳出土二重口縁壺は、体部が長胴化しており後出のものである。

屋敷内B遺跡[60]の前方後方形周溝墓出土二重口縁壺も掘之内遺跡群CK2号墳墓出土の二重口縁壺と

ほぼ同時期であろう。

富岡市北山西古墳は、前方後方墳で周溝から底部穿孔二重口縁壺が出土している[61]。墳丘出土小型鉢は、布留中段階のものである。北山茶臼山古墳は、径40mの円墳とされ長胴化した底部穿孔二重口縁壺が出土している[62]。石田川式新段階とされている。

埼玉県では、鷺山古墳[63]→諏訪山29号墳[64]→熊野神社古墳[65]→三度神社古墳[66]の順に編年されており、三度稲荷神社古墳の二重口縁壺は、体部が長胴化するものである。

栃木県では、湯津上村下侍塚古墳で、焼成前底部穿孔、丹塗の二重口縁壺が出土している[67]。また足利市藤本観音山古墳の周溝で二重口縁壺が出土している[68]。いずれの古墳も前方後方墳である。時期は、布留中段階であろう。茨木県では、玉造町勅使塚古墳[69]→八郷町佐自塚古墳[70]の順に編年されており、佐自塚には、円筒型器台が出土している[71]。

千葉県では、市原市根田6号墳[72]、同市諏訪台8号墳[73]が深長古墳と同じく円墳であり、二重口縁壺が出土している。根田6号墳出土二重口縁壺は[74]、口縁壺の形態が各種あり、深長古墳と対比されよう。市原市新皇塚古墳の二重口縁壺は、周溝で発見されており、五領Ⅲ式に比定されている[75]。内外面丹塗が施されている。体部は長胴化していない。

東海地方、中部・北陸地方をまとめて概観する。

長野県松本市弘法山古墳では、竪穴式石室の本体部直上より30個ばかりの二重口縁壺が検出された[76]。手焙型土器、器台等も出土しており、庄内併行期のものである。

石川県押水町宿東山1号墳では、二重口縁壺、壺高杯が出土している[77]。時期は、桜町8群土器併行期とされ、布留古段階である。二重口縁壺は、周溝、及び墳丘から出土している。一部に焼成後穿孔のものを含む。深長古墳出土二重口縁壺に先行する。

愛知県豊橋市市杵嶋神社古墳墳丘から、二重口縁壺が出土しており[78]、元屋敷期の古段階に属する。犬山市青塚茶臼山では、埴輪とともに二重口縁壺が出土している[79]。5世紀前半のものと考えられている。

近畿地方では、箸墓古墳で前方部における祭祀に用いられた特殊円筒埴輪と二重口縁壺が出土しており、布留最古段階である。都出編年のⅠ期に相当する古墳である。桜井市茶臼山古墳では、特殊円筒埴輪が無く墳頂部を方形に区画して二重口縁壺が巡る。大型で、頸部が直立する二重口縁壺である。天理市東殿塚[80]、京都府向日市元稲荷山古墳では、特殊円筒型埴輪と二重口縁壺が出土している[81]。元稲荷山古墳は、都出編年の前Ⅰ期である。桜井市茶臼山古墳は、前Ⅱ期に入るとされる。

大阪府羽曳野市御旅山古墳は、体部が長胴化した二重口縁壺が、円筒埴輪とともに墳丘墓底部から出土しており[82]、前Ⅲ期に比定される。

中国地方では、岡山県岡山市都月坂1号墳出土二重口縁壺がある[83]。特殊円筒埴輪と共伴しており、儀器化した壺を用いる祭祀形態の初期のものである。前Ⅱ期では、広島県筒賀村横路小谷第1号墳があり墳丘斜面で二重口縁壺が出土している[84]。日本海側では、鳥取県鳥取市面影山74号墳で加飾壺の系譜を引く二重口縁壺が出土している[85]。倉吉市上神猫山遺跡では、方形周溝墓、方墳・円墳が発掘されており、第3号墳墓からは、山陰型壺とともに、頸部に突帯を廻らし、上胴部を櫛描横線、刺突文で飾る底部穿孔の二重口縁壺が出土している[86]。

四国地方では、愛媛県今治市国分古墳（前方後円墳）から茶臼山型二重口縁壺が出土している[87]。香川県高松市石船塚古墳（前方後円墳）で、埴輪とともに、二重口縁壺破片が出土している[88]。

九州地方では、佐賀県本川原遺跡1号方形周溝墓で庄内併行期の二重口縁壺が出土している[89]。福岡県小郡市津古生掛古墳でもこの時期の二重口縁壺が出土している[90]。前Ⅰ期では、大分県大分市浜遺跡3号石棺があり二重口縁壺が出土している[91]。前Ⅱ期古段階には、浜遺跡D－O$_2$第1集石の二重口縁壺、佐賀県唐津市羽水柴山2号墳（前方後円墳）の第2主体から茶臼山型二重口縁壺がある[92]。前Ⅱ期新段階には、福岡県小郡市三国ノ鼻1号墳（前方後円墳）があり、茶臼山型二重口縁壺で頸部が外開きになる退化傾向の認められる壺が出土している。一部体部が長胴になるものを含む。

三国ノ鼻1号墳に続く後出の二重口縁壺は、体部が長胴化する。佐賀県佐賀市銚子塚古墳（前方後円墳）[93]、福岡県福岡市老司古墳[94]等があげられる。

3．深長古墳出土二重口縁壺をめぐる諸問題

以上、三重県下及び全国の二重口縁壺を概観してきたが、それらの帰納するところから深長古墳出土二重口縁壺の位置づけを試みたい。

まず弥生時代の墓制である方形周溝墓が、加美遺跡のように巨大化し特定の集団を葬る空間となる状況があげられる。全国的に弥生時代後期になると大規模な小田開発が行われる。また草山遺跡の発掘例に見るように石器から鉄器使用への転換等生産手段の質的、量的変化がみられる。吉備地方にみられる墳丘墓への器台、壺型埴輪の祭祀がある。弥生時代から継続する方形周溝墓を持つ地域の中に古墳時代初期以降、他と際立った差を持つ低墳丘墓・古墳を築造し得る首長層を出現するのは、小地域に次第に首長層が生まれ、小地域の抗争の後により大きい地域を統括する首長層が登場してくる事実を示している。また吉備系祭祀の影響を受けた大前方後円墳等墓古墳を築造し得た勢力は、その影響を直接的、間接的に全国に及ぼしていった。芝ケ原古墳、神門4号墳、峠山1号墳の出現がそれである。次いで前Ⅰ期とされる元稲荷山古墳では、墳頂で二重口縁壺、器台を用い、墳丘の形態は、前方後方墳である。この前方後方墳は、北陸、東海、関東地方に拡散していく。しかも当該地方において前方後円墳に先行して前方後方墳が採用されるという。次に前Ⅱ期も古相とされる桜井茶臼山があり、二重口縁壺のみを用いて墳丘上を方形に囲繞している。墳形は、前方後円墳である。この二重口縁壺による囲繞を前方後円墳（又は円墳）を用いる祭祀形態の地方拡散として王国ノ鼻1号墳、宿東山古墳、前橋天神山古墳、深長古墳等がある。前Ⅱ期で茶臼山に後出する前方後円墳メスリ山古墳では、二重口縁壺は無く墳丘を数段にわたり円筒埴輪で囲繞する。こうした埴輪を持つ前方後円墳は、前Ⅲ期に各地により大きな地域を統括する首長層の墳墓として畿内政権との結びつそのもとに採用された。茶臼山型の二重口縁壺を用いる祭祀を受容した地域首長の古墳も、こうした埴輪を墳丘にめぐらす形態を取り入れ墳裾に廻すようになる。また御旅山古墳や、青塚古墳では、壺型埴輪としてより埴輪に近似したものになる。

三重県下で、前期古墳の発掘例の多い伊勢地方では、中勢地方の坂本山6号墳のように小地域の首長層の20m弱の円墳に供献されたもの、南勢地方の深長古墳や西野3号墳のように30～50m級の円墳で墳丘裾に二重口縁壺を廻すもの等が発掘例として知られる。また南勢地方における中村川流域の前方後方墳の採用（近年の発掘成果で西野3号墳のような円墳の混在も知られる）と深長古墳、松阪市久保古墳、同八重田10号墳に代表される円墳との対比は、興味深い。しかしながらいずれも、在地色が強い点で共通している。

深長古墳の二重口縁壺は、前述のように茶臼山型二重口縁壺の影響を受けたものである。しかし山城遺跡竪穴住居や、下郡遺跡2号竪穴住居出土二重口縁壺と比べて頸部が外反する点に差異があり、一段階新しいものと考えている。地蔵僧遺跡ＳＢ22出土遺物、西野3号墳出土遺物よりは古相を帯びる。

（増田安生）

〔註〕

① 河瀬信幸・増田安生　『前沖遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1986

② 下村登良男　『八重田古墳群発掘調査報告』　松阪市教育委員会　1981

③ 『松阪市史　第2巻　史料篇　考古』　松阪市教育委員会、P61～P63、1978

④ 『加美遺跡現地説明会資料』　大阪市教育委員会、㈱大阪市文化財協会　1985

⑤ ③文献　P361～P362

⑥ ③文献　P365～P366

⑦ ③文献　P372～P373

⑧ ③文献　P374～P375

⑨ ③文献　P193～P203

⑩ ③文献　P203～P204

⑪ 『三重県埋蔵文化財年報17』　三重県教育委員会　1987

⑫ 嬉野町教育委員会の御教示による

⑬ ③文献

⑭ ⑪文献　P39

⑮ ③文献　P206

⑯ ③文献　P206

⑰ ②文献

⑱ ③文献　P61～P63

⑲ ③文献　P121～P125

⑳ ③文献　P334～P338

㉑ 『草山遺跡月報№1～№10』　松阪市教育委員会、1982～1985

㉒ （1）谷本鋭次・山澤義貴 「金剛坂遺跡発掘調査報告」 明和町教育委員会 1971
（2）田村陽一・宮田勝功・浅尾悟 「金剛坂遺跡」『昭和59年度農業基盤事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1985

㉓ 中野敦夫・田中久生 「寺垣内遺跡」『三重県埋蔵文化財年報16、17』 1986・1987

㉔ 下村登良男 『河田古墳群発掘調査報告』 多気町教育委員会 1986

㉕ ㉔ 文献 P153～158

㉖ 下村登良男 『神前山1号墳発掘調査報告』 明和町教育委員会 1973

㉗ ㉔ 文献P127～P130明和町在住の谷口金吾氏が、斎宮池西の丘陵で弥生時代後期後半の高杯脚を表採されている。

㉘ ㉔ 文献 P142～145

㉙ 川口和弘・森田幸伸他 『郷土史研究部文集』 明和中学校 1983

㉚ 岩中淳之 「隠岡遺跡発掘調査報告」 伊勢市教育委員会 1987

㉛ 皇学館大学生の森田幸伸氏が分布調査時に表採された。

㉜ 下村登良男 「野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1979

㉝ 下村登良男 「中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1973

㉞ 吉水康男 「大藪遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1973

㉟ 『鈴鹿市史』 鈴鹿市教育委員会 1980

㊱ 高見宣雄 「神大寺遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1981

㊲ 『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ 谷山古墳・山城遺跡 第一次調査』 三重県教育委員会 1985

㊳ 倉田直純 『地蔵僧遺跡発掘調査報告』 亀山市教育委員会 1978

㊴ 増田安生 「天ノ宮遺跡」 『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1981

㊵ 小玉道明・浅生悦生他 『坂本山古墳群・坂本山中世墓群発掘調査報告』 津市教育委員会 1970

㊶ 吉村利男 『新畑遺跡発掘調査報告』 新畑遺跡発掘調査団 1973

㊷ 萱室康光 『中禹遺跡発掘調査報告』 津市教育委員会 1977

㊸ 萱室康光 「川北城跡・川北遺跡」『三重県埋蔵文化財年報15』 三重県教育委員会 1985

㊹ 谷本鋭次他 『高松弥生墳墓発掘調査報告』 津市教育委員会 1970

㊺ 山田猛 「前田遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1983

㊻ 山崎恒哉 「西野7号墳」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概要Ⅴ』 三重県教育委員会 1989
西野3号墳については、『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 埋蔵文化財研究会 1989参照

㊼ 前川嘉宏『粥鍋遺跡発掘調査報告』 松坂市教育委員会 1987

㊽ 「閑浄寺遺跡」『三重県埋蔵文化財年報18』 三重県教育委員会 1988

㊾ 下村登良男・村上喜雄 『おばたけ遺跡発掘調査報告－第4次－』 鳥羽市教育委員会 1972

㊿ 門田了三 『城屋敷遺跡』 名張市教育委員会 1985

(51) 『下郡遺跡発掘調査報告』 上野市教育委員会 1978

(52) 『宮ノ森遺跡発掘調査概要』 上野市教育委員会、上野市遺跡調査会 1979

(53) 仁保晋作 『第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 1988

(54) 『北中溝遺跡発掘調査ニュース』 三重県教育委員会 1987

(55) 田口一郎他 『元島名将軍塚古墳』 高崎市教育委員会 1980

(56) 上田宏範・中村春寿 『桜井茶臼山古墳 附 櫛山古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告19冊 1961

(57) 大賀鍵 『倉賀野万福寺遺跡』 高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 1983

(58) 松島栄治 『前橋天神山古墳』『群馬県史』資料編3 1981

(59) 志村哲他 『堀ノ内遺跡群』 藤岡市教育委員会 1982

(60) 『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』 千曲川水系古代文化研究会他 1984

(61) 田口正美他 『大島上越遺跡・北山茶臼山古墳』（関越自動車道上越線地域埋蔵文化財発掘調査報告第1集） 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988

(62) 梅沢重昭 「北山茶臼山古墳」『群馬県史』 資料編3 1981

(63) 坂本和俊 「鷲山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室 1986

(64) 坂本和俊 「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室 1986

(65) 坂本和俊 「熊野神社古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室 1986

(66) 『川越市史』 第1巻 原始・古代編 1972

(67) 山越茂 「下侍塚古墳」『栃木県史 資料編・考古1』 1976

(68) 前澤輝政・大澤伸啓他 「藤本観音山古墳第1次発掘調査」『昭和59年度埋蔵文化財発掘調査概報』 足利市教育委員会・足利市遺跡調査団 1985

(69) 大塚初重他 「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊2－3』 1964

(70) 斉藤忠 「佐自塚古墳」『茨木県史料 考古資料編 古墳時代』 1974

(71) 半月形の透孔を持つ

(72) 米田耕之助 「根田遺跡」『（財）市原市文化財センター年報』 昭和60年度（財）市原市文化財センター 1985

(73) 臼井久美子他 「諏訪台古墳群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』 昭和55年度 上総国分寺台遺跡調査団 1981

(74) 根田6号墳には一重口縁壺が目立つ。口縁部外面に4条の棒条浮文を持つものは、堂ノ後遺跡SB34で出土している。

(75) 斎木勝・種田斉吾他 『市原市菊間遺跡』（財）千葉県都市公社 1974

(76) 『長野県史－考古資料編一』 長野県史刊行会 1983

(77) 『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987

(78) 『愛知県埋蔵文化財情報2』 1987

(79) 赤塚次郎 「青塚茶臼山古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告』 1981

(80) 東湖・関川尚功『磯城・磐余の前方後円墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告42冊 1981

⑧① 都出比呂志『向日市史』上巻　1983
⑧② 田代克美『南河内石川流域における古墳の調査』大阪府教育委員会　1971
⑧③ 『岡山県史』　1986
⑧④ 『横路小谷古墳群』広島県教育委員会　1982
⑧⑤ 『面影山古墳群・吉岡山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』　鳥取県教育委員会　1987
⑧⑥ 『上神猫山遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1980
⑧⑦ 八木武弘　「国分古墳」『愛媛県史資料編考古』　愛媛県　1986
⑧⑧ 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』　京都帝国大学文学部考古学研究報告　第12冊　1933
⑧⑨ 「本川原遺跡－第1次調査－」『佐賀県文化財調査報告書第32集』　1975
⑨⓪ 『津古生掛遺跡』　小郡教育委員会　1987
⑨① 渋谷忠章他　『浜遺跡』　大分県文化財調査報告書第48輯　大分県教育委員会　1980
⑨② 『双水柴山遺跡』　唐津市教育委員会　1987
⑨③ 木下之治他　『銚子塚』　佐賀市教育委員会　1976
⑨④ 『老司古墳』　福岡市教育委員会　1989

VI. 松阪市深長町　本堂（ほんどう）遺跡

1．位置と地形

本堂遺跡は、松阪市深長町字本堂に所在し、東の杉垣内遺跡、西の堂ノ後遺跡の間に位置する遺跡である。これらの遺跡群は、縄文時代以降近世に至るまで連綿として続く複合遺跡であり、各々が独立したものではなく、巨視的にみれば各時代においても一つの遺跡として捉えられるものである。

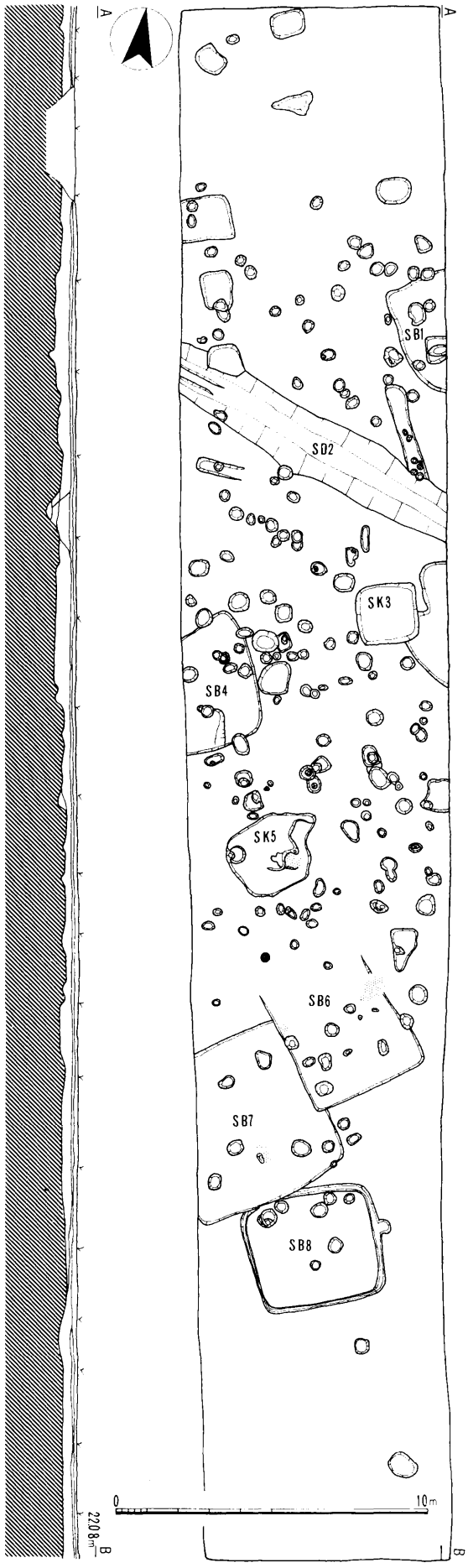
本堂遺跡は、標高21～23mの東へ緩く傾斜する洪積台地上に位置する。発掘調査は、南北方向に計画された道路部分（A地区）とこれに直交する排水路部分（B地区）で実施した。

道路部分での基本的層序は、第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；灰褐色砂質土（床土）、第Ⅲ層；黒茶褐色粘質土（遺物包含層）、第Ⅳ層；黄茶色粘土（地山）となる。排水路部分での基本的層序は、第Ⅰ層；耕作土、第Ⅱ層；褐色砂質土（地山）となり、この地山層には部分的に砂礫層が認められる。

2．遺　　構

道路部分で検出された遺構には、古墳時代の竪穴住居、平安時代の溝・土坑がある。遺構埋土の状況としては、古墳時代の遺構では、第Ⅲ層の黒茶褐色粘質土である。平安時代の遺構では、やや砂質度が

第6－1図　遺跡地形図（1：2,000）



第６－２図　A地区遺構平面図（１：200）

強くなるという区別がみられる。

排水路部分で検出された遺構では、古墳時代の土坑１基のみで、他の遺構は検出されず、遺物包含層もない。

以下、検出された主要な遺構について時代別に個々概述してゆきたい。

１．古墳時代

１．竪穴住居

ＳＢ１　竪穴住居の西側部分と推定でき、主柱穴は不明である。出土遺物は細片が多い。

ＳＢ４　竪穴住居の北側部分であり、北辺が４ｍ余である。主柱穴は不明である。平安時代の遺物が混入しており、撹乱されている。

ＳＢ６　竪穴住居の西壁は削平され、西半の壁が確認されない。東辺が４ｍで、北壁に焼土が残り、カマドを茶褐色粘質土でつくっている。南壁の下にも焼土が確認できる。床には茶黄褐色砂質土を部分的に貼っている。

ＳＢ７　北辺５ｍ×東辺５ｍ、北西隅と東側中央に焼土が残る。主柱穴は４本柱が考えられる。出土遺物は高杯、甕等の土師器が出土している。

ＳＢ８　北辺3.5ｍ×４ｍ、周溝が確認できる。削平され、壁の深さが３㎝程しか確認されない。主柱穴は不明である。

２．土坑

ＳＫ９　浅い不整円形状の土坑である。埋土は黒茶褐色土で上層からも遺物が破棄させた状態で出土した。甕（21）と高杯（16）は地山直上で完形であったと考えられ、他の出土遺物では高杯の脚部が多く出土した。

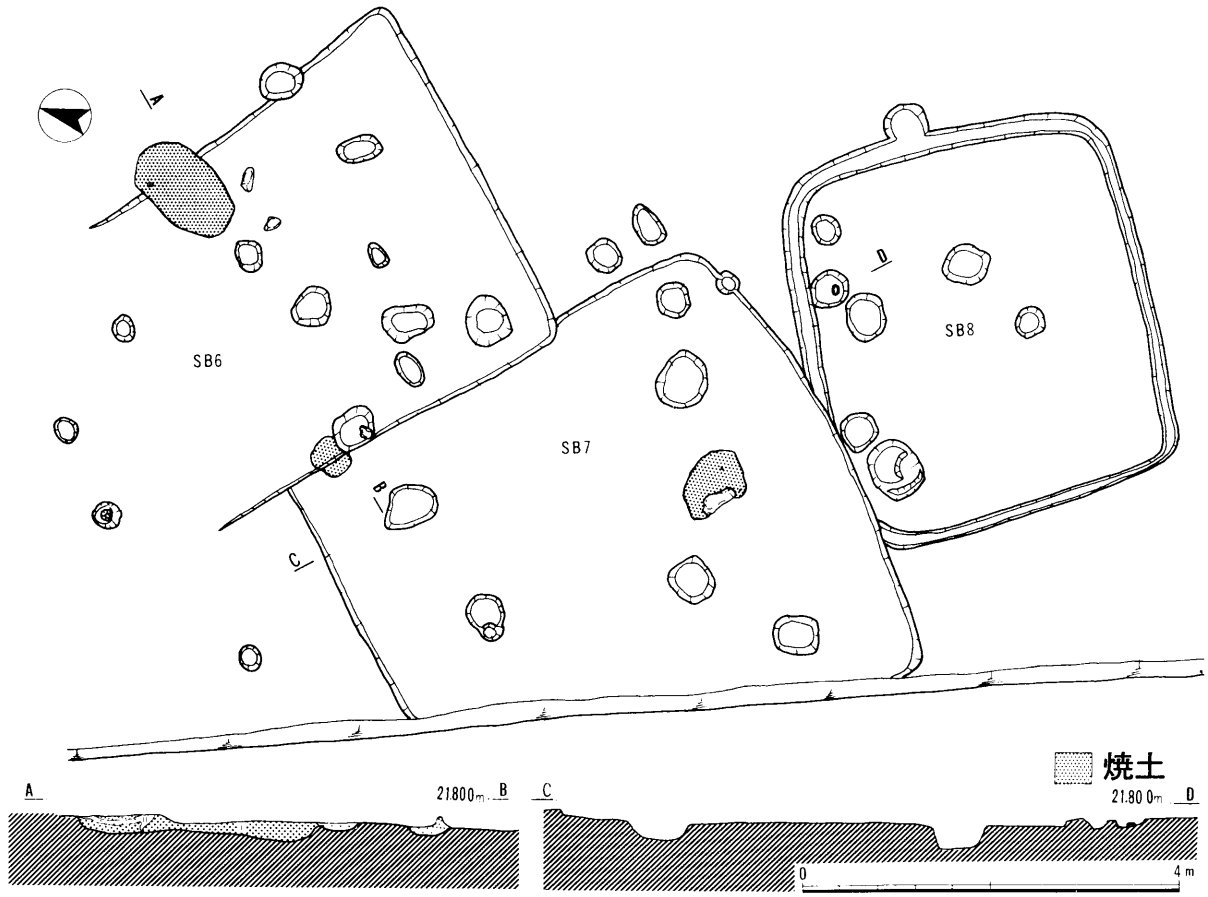
２．平安時代

１．溝

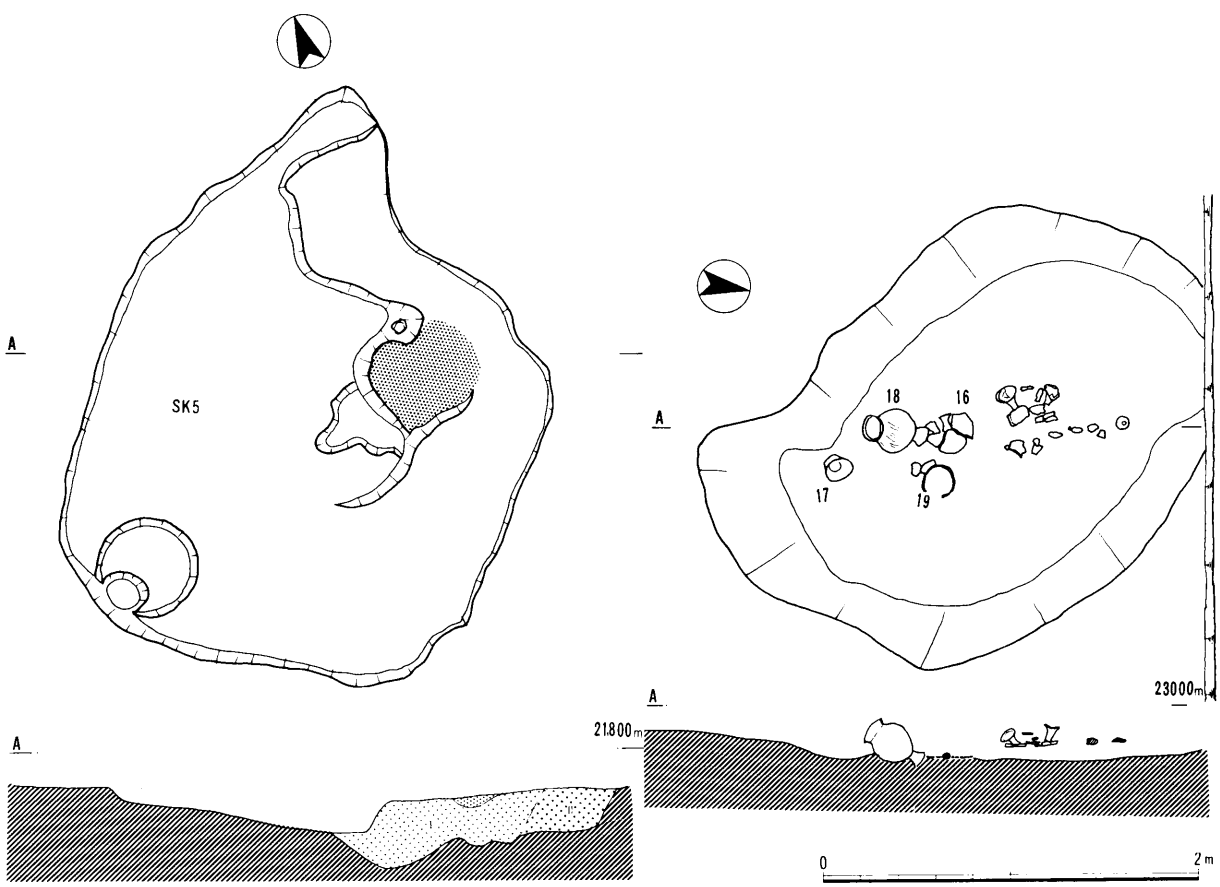
ＳＤ２　約1.5ｍ～２ｍの幅をもち、深さは0.5ｍである。埋土は２層で上層；暗茶褐色砂質土、下層；灰褐色砂層である。断面形は上端が広くなるが「U」字形を呈している。出土遺物は数点で出土量が少ない。東西に走る溝である。

２．土坑

ＳＫ３　１辺約0.4ｍの正方形の土坑である。深さ



第６－３図　SB６・７・８実測図（１：80　Ⅰ茶黄褐砂質土　Ⅱ茶褐色粘質土）



第６－４図　SK５・７・実測図（１：40　Ⅰ茶褐色粘質土　Ⅱ茶黄褐砂質土）

は0.4m程である。出土遺物は土師器片が多く、中には古墳時代の遺物が混じる。

ＳＫ５　円形状の土坑で中にカマドをもつ。埋土は茶黒褐色である。カマドはⅠ；茶褐色粘質土でつくられ、奥壁をⅡ；茶黄褐色砂質土でつくっている。カマドの焼土面に皿がかさなって出土している。

3．遺　　物

時代的には縄文時代晩期、古墳時代、平安時代の遺物が出土している。以下、遺構伴出の主な土器を中心として概述してゆきたい。

1．縄文時代晩期

縄文時代の明確な遺構は確認されないが、縄文時代晩期の遺物が出土している。２～５は刻目突帯を有し、口縁部端面に刻目を施している。ともに胎土中には２㎜～３㎜の砂粒を含み、暗褐色から茶褐色を呈している。２・３は突帯下に横位の条痕を残している。器壁は脆弱で荒い。１は突帯がなく、横位の条痕を明確に残している。内面を丁寧に磨いている。口縁部端面に同じく刻目を施す。茶黒褐色を呈し、焼きはかたい。６は底部であり、５と同一個体と考えられる。暗褐色を呈し、胎土中に２㎜～３㎜の砂粒を含み焼きはかたい。７～９は茶褐色を呈し、１㎜程の砂粒、雲母片を含む。７・８は貼り付け突帯を巡らし、突帯に押し引き文が施される。外面に横位、斜位の条痕が残る。

2．古墳時代

１．ＳＢ７（10～12）

土師器高杯（10）　杯部はわずかに内弯しながら直線的にのび、端部は尖り気味に丸くおさまる。内面は丁寧にナデられ外面はヘラミガキされる。高杯の杯部のみ出土し、黄褐色を呈し胎土は精良である。

土師器甕（11・12）　Ｓ字口縁甕である。11は口縁部のみで残りは悪い。12は内面にユビオサエの圧痕が認められ、外面にはハケメが残る。端部を折りかえしている。淡黄褐色を呈し残りは悪い。

２．ＳＫ９（13～21）

土師器高杯（13～18）　13は黄褐色を呈し、わずかに砂粒を含む。杯底部から口縁部にかけての内面は、ナデツケ痕、粘土の貼り付け状態が明確に残り不調整である。口縁部は内弯しながら外反する。14、15は茶褐色を呈し、砂粒を含む。14は器高13.5cmである。杯底部は平担で、口縁部は外反しながら直線的にのびる。口縁部、脚裾部は横ナデされ、杯部内面

第６－５図　縄文土器拓影・実測図（１：２）

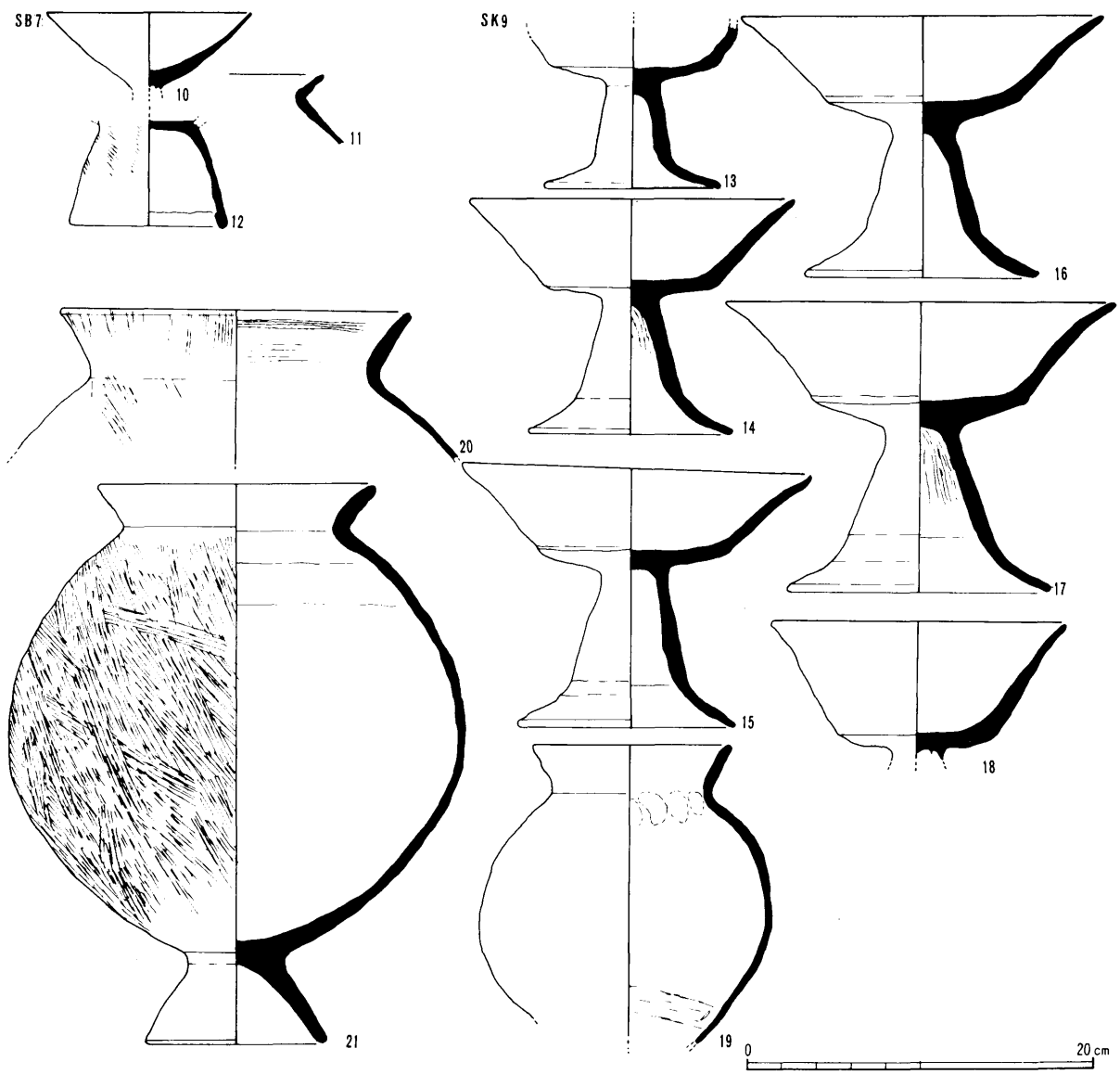
はナデられている。脚部内面は指頭圧痕が認められる。15は器高15cm、杯部口径29cmである。杯口縁部は外反し、端部では内弯し尖り気味におさまる。口縁部は横ナデされ、外面に黒斑が残る。16、17は口径20.7cm、22.5cm、器高15cm、16.5cmである。ともに赤味をおびた茶褐色を呈し、砂粒を含む。杯口縁部、脚裾部は横ナデされる。口縁部は外反しながら端部は尖り気味におさまる。18は茶褐色を呈し、砂粒を含む。杯底部の底径は他に比べて小さく、口縁部下半は直線的にのび、上半は外反しておさまる。杯部のみの破片である。

土師器甕（19～21）　19は口径11cm、灰茶褐色を呈する。胴部下半に煤が付着する。口縁部は横ナデされ、頸部内外面はユビオサエで指頭圧痕が残る。内面は未調整である。胴部内面下半にはヘラケズリが認められる。底部は欠損している。20は「く」の字形に外反する口縁部をもつ。器壁の保存状態が悪いが、わずかに、口縁部内面に横位、外面には縦位のハケメが残る。黄褐色を呈し砂粒を含む。21は口縁部が「く」の字形に外反し、端部は丸くおさまる。口径16cm、器高32.1cmである。茶褐色を呈し砂粒を含む。外面は口縁部下、体部下半に至るまで粗いハケメが施される。内面は丁寧にナデられている。胴部中央外面と口縁部外面に煤が付着している。

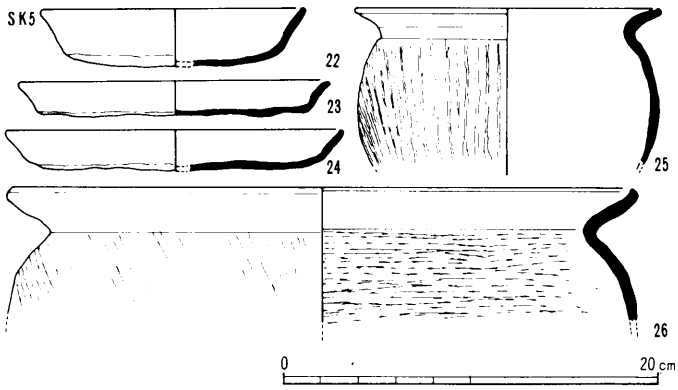
3．平安時代

1．SK5　（22～26）

土師器杯（22）　口縁部を横ナデし底部外面はユビオサエで不調整、内面はナデられる。口縁部は外反し端部は内側に軽く巻き込む。



第6－6図　SB7，SK9遺物実測図（1：4）



第６－７図　SK５遺物実測図（１：４）

土師器皿（23・24）　口縁部は横ナデされ、底部外面はユビオサエで不調整である。内面はナデ調整されている。23は茶赤褐色、24は暗赤褐色を呈し胎土は精良である。

土師器甕（25・26）　口縁部端部が上方にわずかに肥厚し口縁部を横ナデしている。25は、口縁部から胴部にかけて屈曲し、胴部外面に縦位の荒いハケメが認められる。暗茶褐色を呈し焼きはかたい。26は内面横位のハケメ、外面斜位のハケメを施している。黄褐色を呈し、残りは悪い。

４．結　　語

今回発掘調査を実施した部分は、幅８ｍ長さ49ｍの道路部分と幅３ｍ長さ132ｍの排水路部分である。道路部分では遺構密度も高く、東西に遺構が広がる。南側は礫層となる。排水路部分では、検出された遺構は土坑１基のみで土坑の東側から礫層が一部認められ、乱流した小河川の流路跡である。この区域の南側には遺跡は広がらないと考えられる。

道路部分での発掘区から検出された遺構でＳＢ６、７、８は出土遺物から古墳時代前期、ＳＫ５は平安時代前半の土坑と考えられる。古墳時代の竪穴住居は削平されていて、遺存状況は悪い。ＳＫ５は内形状の土坑で、なかにカマドをもち、焼土面に皿がかさなった状態で出土し、他に土師器の甕が出土している。厨房的な要素が考えられる。排水路部分のＳＫ９は浅い土坑で、道路部分の竪穴住居より新しい時期と考えられる。出土遺物では高杯が多く出土し、どのような目的で使用されたものか詳細な検討は今後の調査例を待ちたい。

遺物では、わずかだが縄文時代晩期の遺物が出土している。口縁部下に貼り付け突帯を有し、口縁部端面と突帯に刻目を施す小型の土器は道路部分から出土し、貼り付け突帯に押し引き文を施す大型の土器は排水路部分から出土している。道路部分では細片が多いのに対して、排水路部分のＳＫ９の出土遺物は残りが良い。

（小林直人）

Ⅶ. 松阪市深長町　堂ノ後（どうのしろ）遺跡

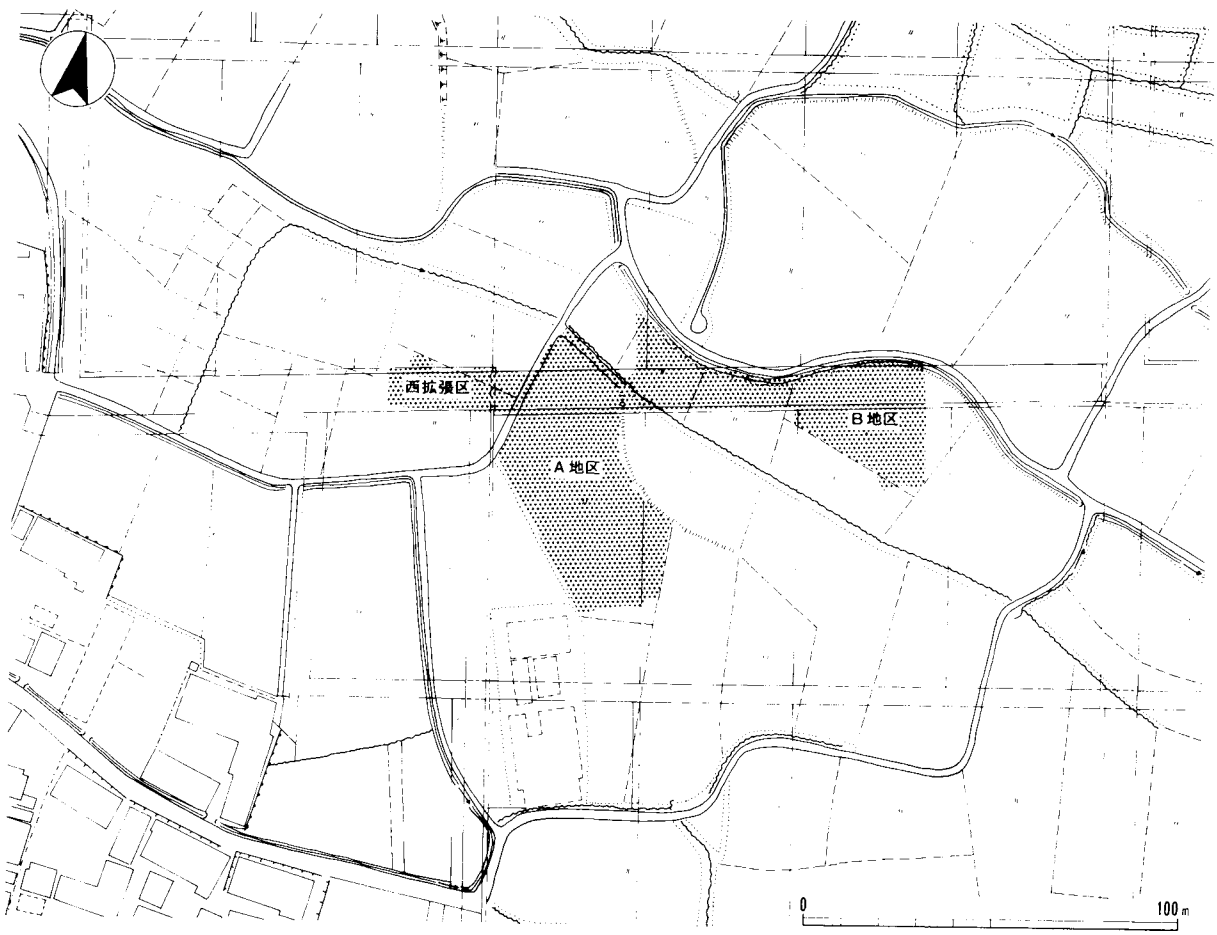
1．位置と環境

堂ノ後遺跡は、深長の集落の北東に位置し、標高23～25mの東へ張り出す微高地に立地しており現況は水田である。遺跡の北側は、谷線部分になっており、やや低湿な空間になっている。堀坂山山麓の扇端部分にあたり、上記のような谷部分には、降雨時の出水により土砂が運ばれ、小自然流水路が堆積に伴い流路を変更している。近年、近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査、アクセス道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査等により、発掘調査例が増加し、松阪市西部域の各時代にわたる様相が次第に明らかになってきた。前述のように堆積を繰り返し複雑な谷と丘陵が交互する地形の丘陵部分に遺跡が点在している。

縄文時代では、早期の平林遺跡[1]、高山寺式深鉢が出土した横尾墳墓群[2]、中期末～後期の藪ノ下遺跡[3]、新田遺跡[4]、前沖遺跡[5]Ｂ・Ｄ地区等がある。弥生時代では、中期後葉の土器が多数表採された田高田遺跡[6]、中期の川井町遺跡[7]（低地の遺跡）等があり、堂ノ後遺跡から深長古墳にかけての微高地は、谷筋や下段の沖積地を水田可耕地とする集団の良好な居住空間となっている。

古墳時代では、前期の遺物を多数出土した貝塚遺跡[8]、粥鍋遺跡[9]がある。発掘された古墳群には、八重田古墳群[10]、横尾古墳群[11]、平林古墳群、大神山古墳群[12]、垣内田古墳群[13]がある。

飛鳥・奈良時代では、竪穴住居、掘立柱建物を多



第７－１図　調査区位置図（１：2,000）

数検出した榎長遺跡[14]、掘立柱建物が多数検出された前沖遺跡がある。寺院跡には、伊勢寺廃寺[15]がある。

平安・鎌倉時代では、曲遺跡[16]、上相田遺跡[17]、北小麦遺跡[18]がある。

堂ノ後遺跡は、西側の上段水田部分と西側に拡張した道路部分をA地区、東側道路部分と耕土直下で遺構が露出しており拡張した部分をB地区とし、A地区（1800㎡）、B地区（2200㎡）について本発掘調査を実施した。

発掘調査は、11月上旬から開始し、途中、赤城遺跡、本堂遺跡の調査と併行しながら継続し、12月26日に終了した。

A地区東壁北側における基本的層序は、1層（灰黒褐色土）耕土、2層（黄褐色土）床土、3層（灰褐色土）旧耕土、4層（黒褐色土）包含層、5層黒褐色土混じり黄褐色土、6層黄褐色砂質土である。7層黄褐色砂礫層である。A地区の東半分には、4層の包含層が20cm前後残っているが、西側では薄くなり、場所によっては、黄褐色砂礫層が露出している。

B地区の基本的層序はⅠ層（灰黒褐色土）耕土、Ⅱ層（黄褐色粘質土）床土、Ⅲ層（黒褐色土）包含層、Ⅳ層黄褐色砂質土である。B地区の北東側では、丘陵地の低い箇所であるため黒褐色土が比較的厚く堆積しているが、西側及び、南西側では、包含層が既に削平されており、耕土の直下にⅣ層黄褐色砂質土となる。

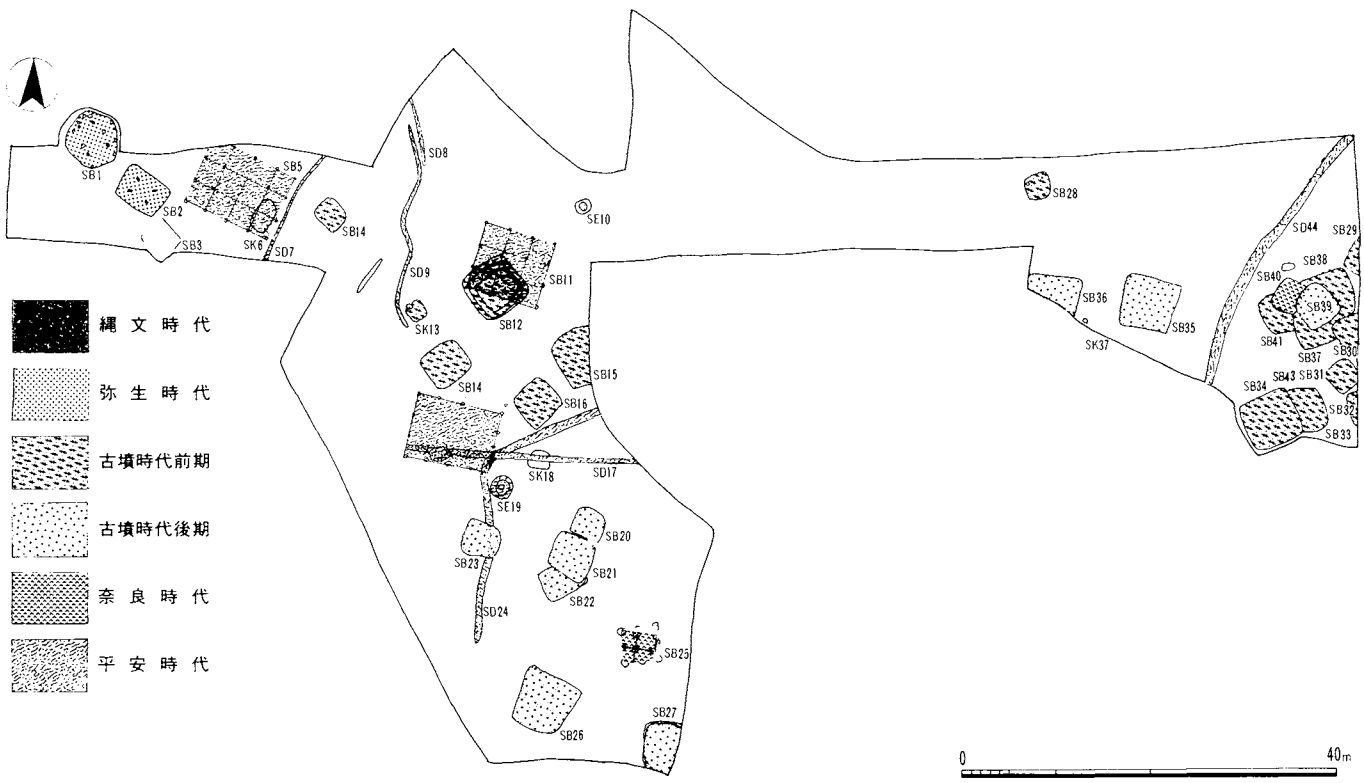
2．遺　構

1．縄文時代

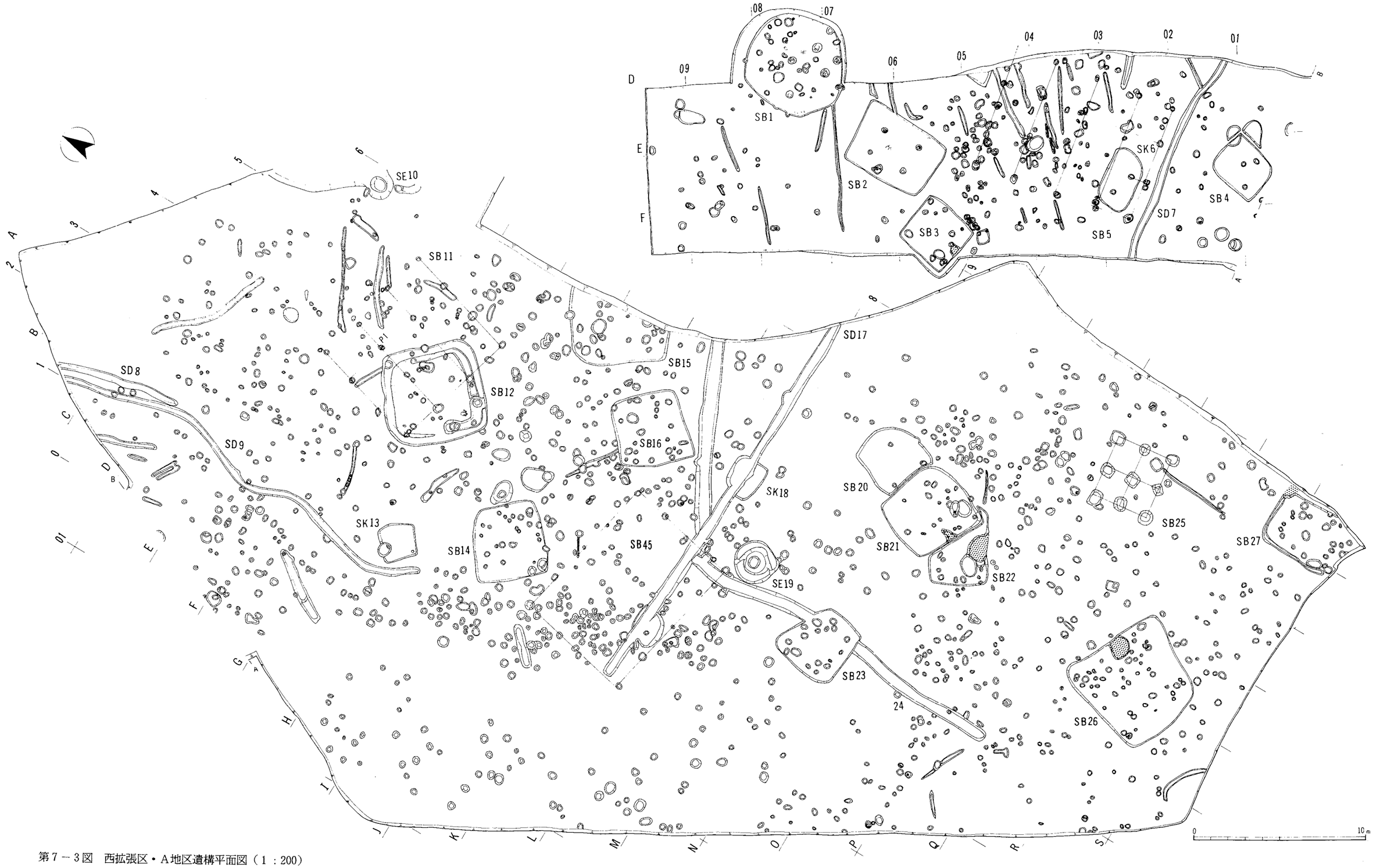
（1）土拡

縄文時代の遺構には、ＳＫ29がある。縄文時代中期の深鉢（20）が耕作により上胴部を欠損されており、下胴部のみを検出した。埋土は、Ⅰ層炭混濁黄褐色土で、Ⅱ層が焼土である。煮炊き用に使われた焼土坑である。

他に縄文時代の土器を伴う pit 38、pit 39、土器集中40等がある。



第７－２図　主要遺構配置図（１：800）



第７－３図　西拡張区・Ａ地区遺構平面図（１：200）

2．弥生時代

A地区道路拡張部で検出されたＳＢ１、ＳＢ２がある。石鏃の出土した地点もA地区北半であり、弥生時代の遺構の拡りは、北半及び、西側に拡張した道路部分に限られる。

（１）竪穴住居

ＳＢ１　東西5.6m×南北5.9mの円型プランの竪穴住居である。深さは0.15mである。埋土は、黄褐色土混り黒褐色土である。遺構は、黄褐色砂礫層の上で検出されており、後世の削平を受けているため深さは浅い。壁際に壁柱穴痕と思われる柱穴が５個残っている。柱穴の直径は20～30cmで、深さは15～20cmである。主柱穴は、５個確認された。弥生時代中期に属する。

ＳＢ２　東西5.1m、南北3.85mの方形プランの竪穴住居である。深さは12cm前後である。主柱穴の大きさは径28cm前後で、柱痕跡と思われる直径は20cmである。主柱穴の東西柱間間隔は、2.23m、南北は1.60mである。遺構埋土は、黒褐色土である。弥生時代中期後葉に属する。

3．古墳時代前期

（１）竪穴住居

ＳＢ12　東西5.6m、南北5.6mで、幅0.5～0.6mのベッド状のテラスを持つ。

ＳＢ14　東西4.4m、南北4.2m、深さ0.15mである。周溝を持たない。

ＳＢ15　A地区調査区東にかかり検出。東西5.6m、南北４m以上である。周溝を持たない。

ＳＢ16　東西4.4m、南北4.2mである。深さ0.15mである。

ＳＢ28　B地区西側で検出。東西2.86m、南北2.5m、深さ0.1mである。土器の出土量が多い。

ＳＢ29　B地区東壁にかかって検出された。東西2.2m以上、南北2.8m以上、深さ0.2mである。周溝を持たない。埋土は黒褐色土である。

ＳＢ31　東西3.3m、南北2.9m、深さ0.15m前後である。ＳＢ42と切り合うが、新旧関係は不明である。

ＳＢ32　B地区東南端で検出。東西1.0m以上、南北4.0m以上である。深さ0.25m前後である。

ＳＢ33　B地区東南端の南壁にかかり確認された。東西3.0m以上、南北3.3mである。深さ0.12m前後である。中央部に炉を持つ。ＳＢ34・ＳＢ43と切り合いを持ちＳＢ34より古い。ＳＢ43との切り合い関係は不明である。埋土は暗褐色土である。古墳時代前期も後半に属する。

ＳＢ34　B地区東西隅南壁にかかり確認された。東西5.2m×南北5.3mである。深さ0.25m前後である。中央部に炉を持つ。S字状口縁台付甕、小型丸底壺、高杯等が出土した。

ＳＢ38　B地区東側で検出。南北5.2m。深さ0.2m前後である。

ＳＢ42　ＳＢ31の南西で確認された。南北2.7m以上である。深さは0.1m前後である。

ＳＢ43　ＳＢ33の北辺と切り合う。東西3.0m以上、深さ0.07m前後。

（２）土拡

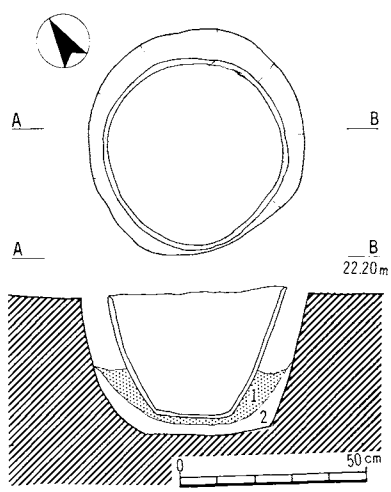
ＳＫ13　ＳＢ14の西3.4mで検出された。東西辺2.6m、南北辺2.4m、深さ0.15mである。埋土は２層に分かれ、Ⅰ層暗褐色土、Ⅱ層黒褐色土混黄褐色土である。

4．古墳時代後期

（１）竪穴住居

ＳＢ23　A地区中央部で検出。東西4.0m、南北3.6m、深さ0.25m前後である。埋土は、黄褐色土混黒褐色土である。後期も末葉に属する。

ＳＢ26　A地区南半で検出。東西2.4m、南北6.1m、



第７－４図　SK29実測図（１：20）

深さ0.1m前後である。北辺にカマドを持つ。埋土は、暗黒褐色土である。

ＳＢ27　Ａ地区南東隅で検出。東西3.8m前後、南北5.5m以上、幅0.2m前後の周溝を持つ。北辺中央にカマドを持つ。

ＳＢ35　Ｂ地区西側でＳＢ36と近接して検出された。東西5.6m、南北5.5m、深さ0.13mである。

ＳＢ36　Ｂ地区南西隅にかかり検出された。東西5.9m以上、南北4.10m以上である。

ＳＢ38　Ｂ地区東側で検出。南北5.2m、深さ0.2m前後である。

ＳＢ41　Ｂ地区東側で検出された。東西4.9m、南北4.8m、深さ0.35m前後である。南辺にカマドを持つ。埋土は、黄褐色土混り暗褐色土である。

5．飛鳥時代～奈良時代

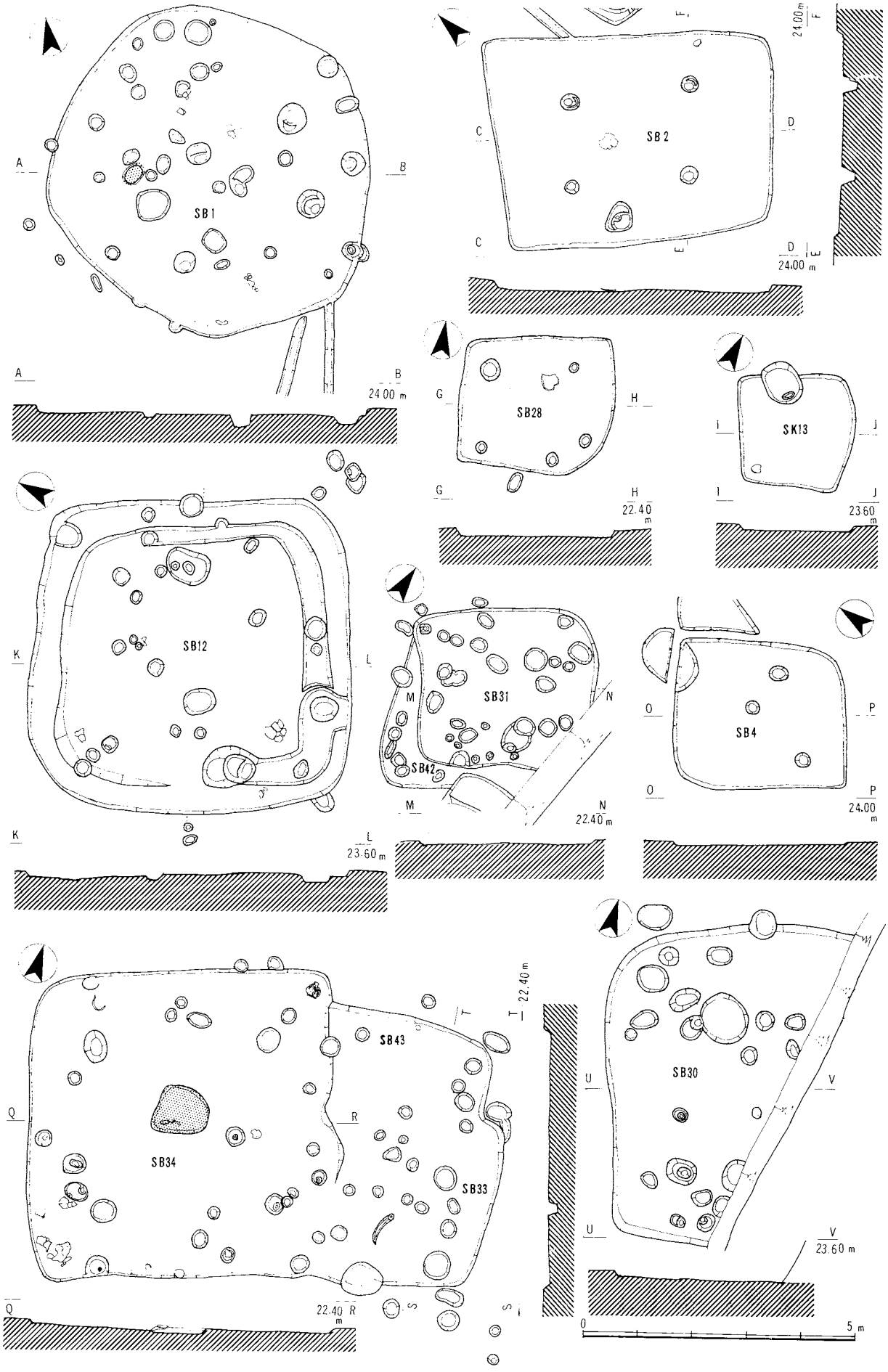
（1）竪穴住居

ＳＢ3　西拡張区南端で検出。東西3.4m、南北3.2m、深さ0.15m前後である。東辺にカマドを持つ。

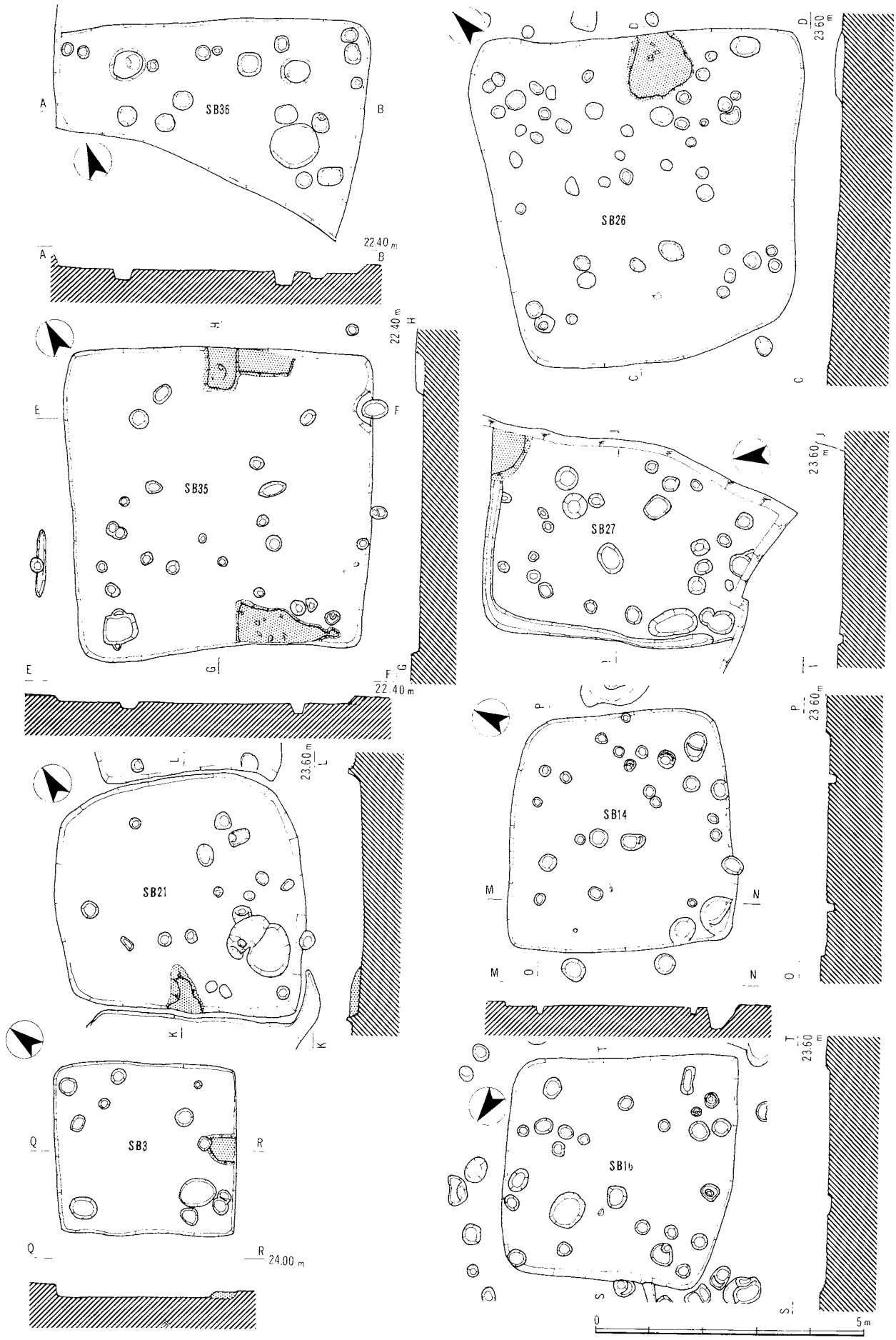
ＳＢ20　東西3.2m、南北3.1m以上、南側をＳＢ21に切られる。

ＳＢ21　東西4.7m、南北4.3m、深さ0.3m前後で

第７－５図　Ｂ地区遺構平面図（１：200）



第7－6図　SB1・2・4・12・28・30・31・33・34，SK13実測図（1：100）



第7－7図　SB3・14・16・21・26・27・35・36実測図（1：100）

ある。南辺中央にカマドを持つ。

ＳＢ22　Ａ地区中央で、ＳＢ21と切り合いを持って検出された。ＳＢ21より古い。東西4.6m、南北3.3m、深さ0.3m前後である。南辺にカマドを持ち、長方形プランである。埋土は黒色粘質土である。

ＳＢ30　Ｂ地区東壁で検出された。東西3.2m以上、南北3.1m、深さ0.2m～0.3mである。北東隅にカマドを持つ。埋土は黒褐色土である。

ＳＢ39　東西3.0m、南北4.0m、深さ0.2m、ＳＢ40と切り会いを持ちＳＢ40より新しい。

ＳＢ40　東西2.5m以上、南北3.4m、深さ0.3mである。南辺にカマドを持つ。埋土は、暗褐色土である。カマドは、両側に石を配置して袖にしている。

（２）掘立柱建物

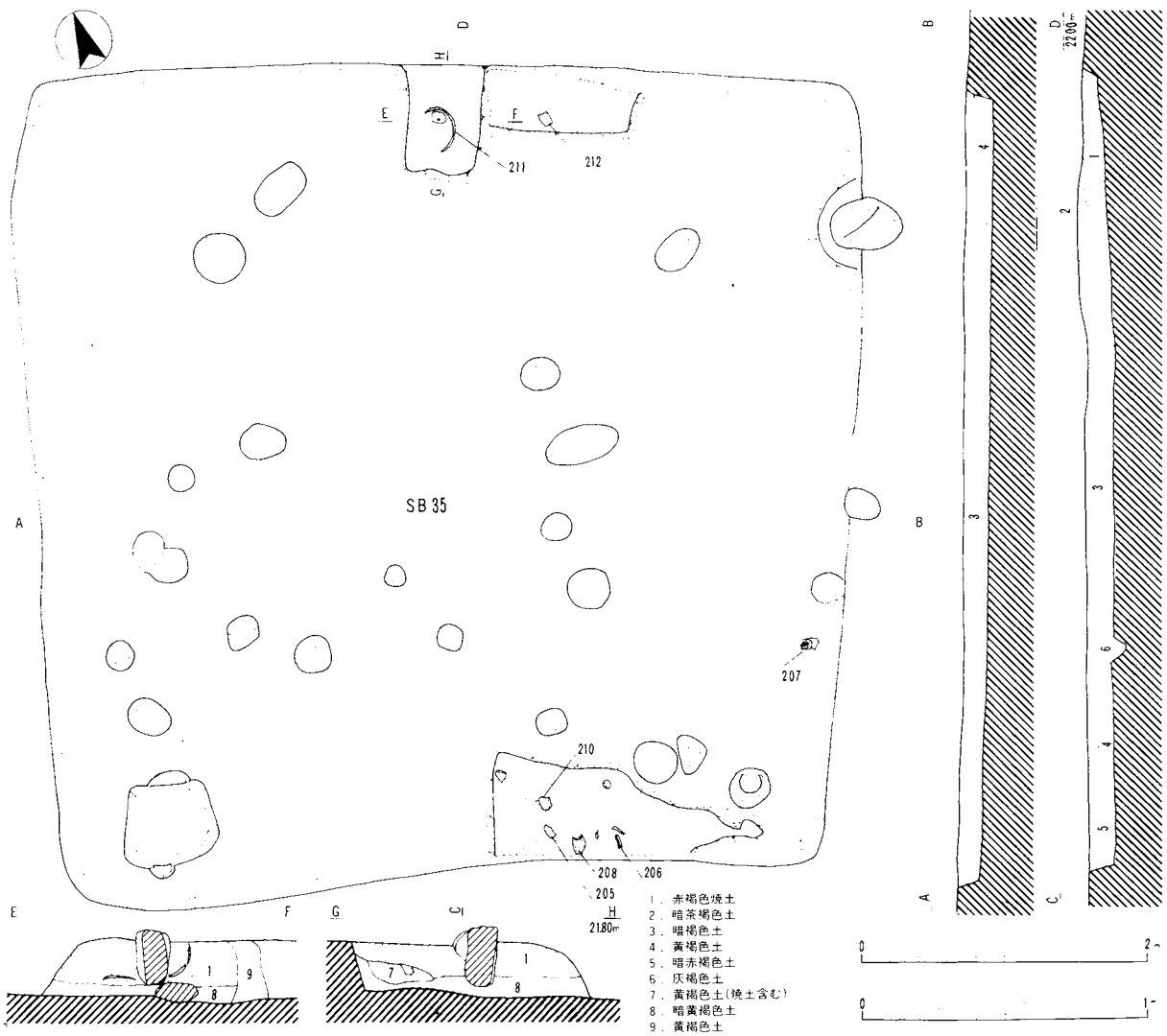
ＳＢ25　東西3.6m（柱間1.8m）、南北3.2m（柱間1.6m）の２間×２間の総柱建物である。柱掘形の一辺は0.7m前後の方形で、深さ0.6mである。

６．平安時代後期

（１）掘立柱建物

ＳＢ５　東西9.6m、南北7.0mの４間×３間の総柱建物である。南東隅１間×２間分に南北に長い土拡ＳＫ５が付設される。桁行の柱間は、西から2.4＋2.6＋2.65＋2.65＋2.0mである。梁間は、南から2.4＋2.4＋2.2mである。柱穴の深さは0.3～0.4mである。

ＳＢ11　Ａ地区北半で検出。東西7.8m、南北9.6m



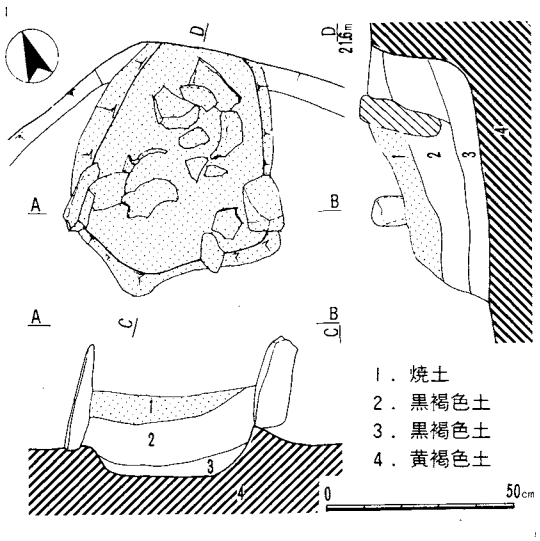
第７－８図　ＳＢ35遺物出土状況（１：50）カマド断面図（１：25）

の３間×３間の総柱建物である。東西棟である。桁行の柱間は、西から2.6+2.6+2.6mである。梁間は、南から2.2+2.2+2.2mである。pit 1から輪花山茶椀（241）が出土している。

ＳＢ45　ＳＢ11の南で検出された。４×３間の側柱建物である。東西棟で桁行の柱間は、2.6+2.6+2.6+2.0mである。梁間は、南から2.2+2.2m+2.4である。棟方向は、N11°Eである。ＳＥ19と関連すると考えられる。

（２）井戸

ＳＥ19　Ａ地区中央部で検出。東西2.3m×南北2.5m、深さ0.82mである。底部の径は0.6mである。両側に0.4～0.6mのテラス状部を残す。素掘りであるが、底には曲物を据えていたと考えられる。Ⅰ属濃褐色土、Ⅱ層暗灰褐色土、Ⅲ層暗黒褐色土、Ⅳ層暗褐色粘質土である。山茶椀、ロクロ土師器皿等が出土した。



第７－10図　ＳＢ40カマド実測図（１：20）

（３）土拡

ＳＫ６　ＳＢ５の南東隅１×２間におさまる。長辺3.4m、短辺2.2mで深さは0.1mである。

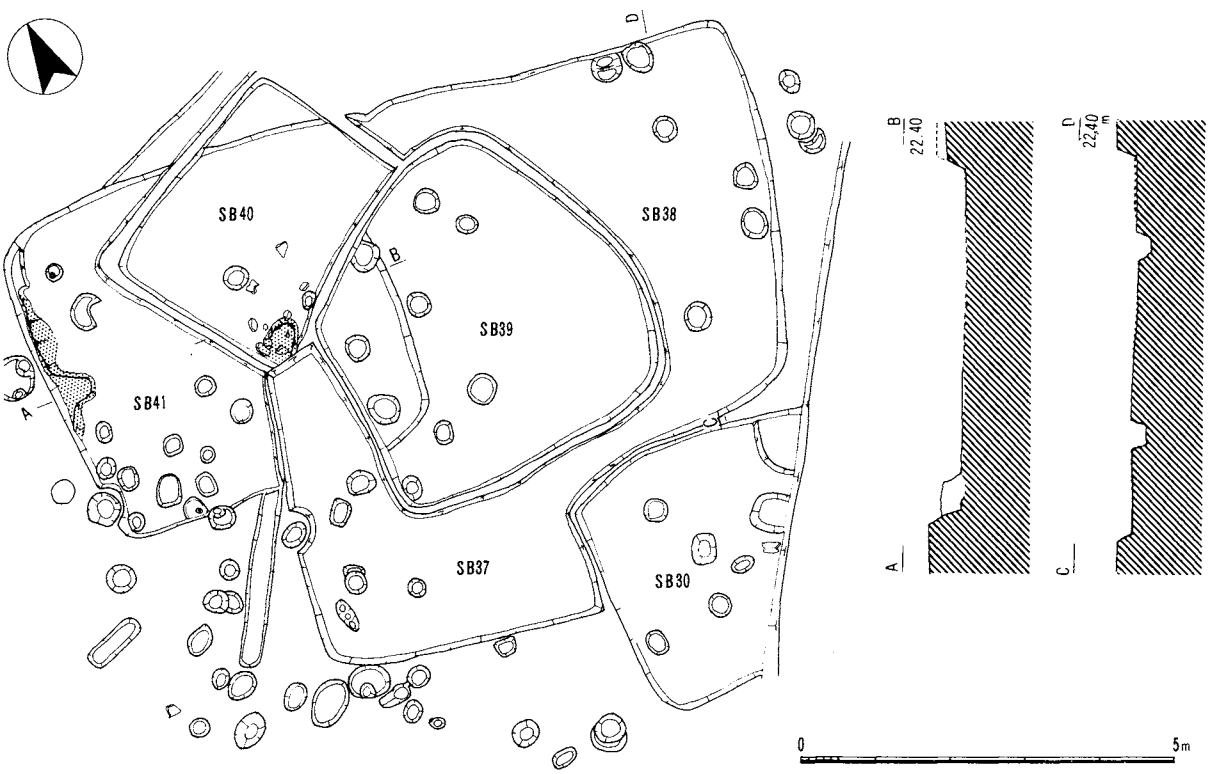
（４）溝

ＳＤ７　西拡張区で検出。N38°Eの方向で北に向かって流れる。ＳＢ５と同時期であり、ＳＢ５に伴い東を区画する溝である。埋土は灰褐色土である。幅0.4m、深さ0.1～0.2mである。

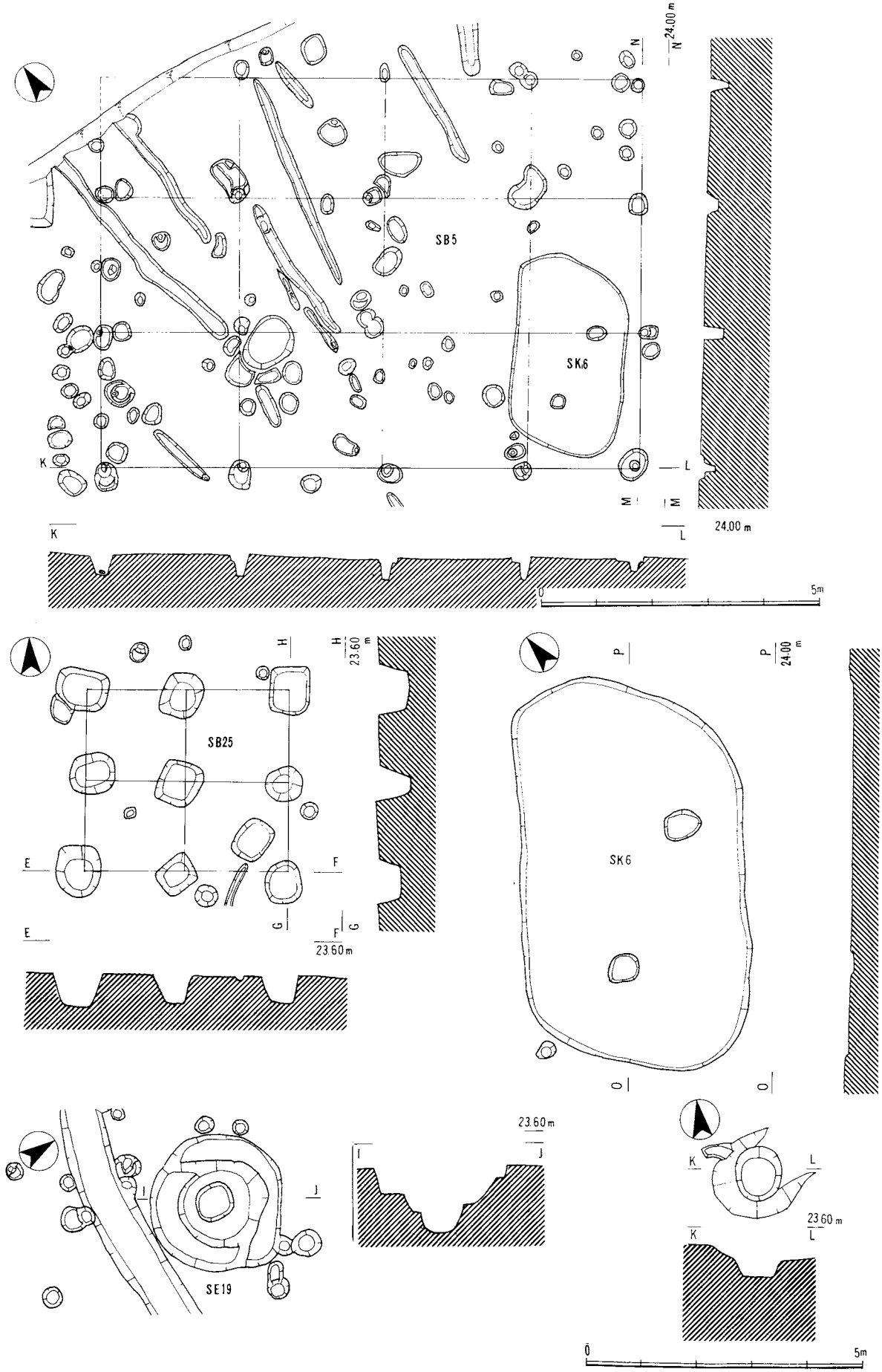
ＳＤ８　Ａ地区北側でＳＤ９と平行し北流し、方向はＮ４°Ｗである。埋土は、灰褐色土である。山茶椀が出土した。

ＳＤ９　Ａ地区北半西側にて検出。長さ約24mである。幅0.4m前後。深さ0.2m前後である。平安時代末葉の掘立柱建物群の西を区画する溝である。山茶椀・ロクロ土師器台付杯、土師器鍋等が出土した。

ＳＤ17　Ａ地区中央部を東へ流れる。方向はN15°Eである。幅0.6m前後、深さ0.3m前後である。埋



第７－９図　ＳＢ30、37～41実測図（１：100）



第７－11図　ＳＢ５･25、ＳＥ19、ＳＫ６実測図（１：100）

土は灰茶褐色土である。切り合い関係はＳＤ24が新しい。

ＳＤ24　Ａ地区南端から北に向かって流れ、約120°屈折して北東方向に流れる。幅0.8m前後、深さ0.2m前後である。

ＳＤ44　Ｂ地区中央を北東に流れる。方位は、N22°Ｅである。幅1.2m前後、深さ0.4m前後である。埋土は、暗褐色である。山茶椀、土師器皿等が出土した。

中世耕作溝　Ｂ地区ＳＤ42の西側に、ほぼＳＤ42の方向に平行に0.6～１mの間隔で20条程の小溝が検出された。これらは、幅0.2m、深さ0.1m前後である。埋土は、灰褐色である。これらは、中世の耕作溝と考えられる。

７．江戸時代

（１）井戸

ＳＥ10　Ａ地区北半の東端で検出。径1.6mの掘形を持ち、底部は径1.0mである。深さ0.5mである。埋土は、明灰褐砂である。近世陶器片が出土した。ＳＥ10が検出された地点は、Ａ地区東端の傾斜地であり、自然の湧水を利用した野井戸と考えられよう。

なお、遺構としては検出されなかったが、Ａ地区北端の傾斜地には、18Ｃ後半～19Ｃ前半の近世陶磁器、土師器片が廃棄されており、道・集落の縁辺が想定させる。

３．遺　物

１．縄文時代

（１）中期後葉～末葉（１～23）

有文土器群の中で明らかに古相を示すものを掲げた。

ＳＫ29

深鉢（20）　体部外面縄文地（ＬＲ）に縦位隆帯を６本施す。各区画に２本１単位の縦位沈線を２単位施し、残された空間を沈線による縦方向矢羽根状文で埋めている。外面の底部に近い部分は、無文でケズリ調整されている。底部は上底状になっており、ケズリ調整されている。東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８出土遺物の（21～26）に沈線による縦位矢羽根状文をもつ深鉢があるが、これと同時期と考えられる。

その他の遺物

１は、波状口縁の深鉢で、縄文地（ＬＲ）の上に、２条１単位の沈線を口縁部に施す。他の土器に比べて濃赤褐色が強い。

２は、平線で凹線による濁巻文が施される。地文は、ＬＲの縄文である。加曽利Ｅ４併行期で、中期後葉に比定できよう。

３・４は、連弧文を持つ土器である。３は、口縁部が波状になると推定される。沈線による連弧文が５条施される。４は、深鉢の体部で連弧文が９条残っている。これらは、醍醐遺跡や咲畑遺跡に類例を求めることができる。

橋状突起付深鉢（５～14）

これらはＦ25地区の検出面でまとまって出土した。同一個体と考えられる。口縁部は、５～７のように波状口縁で、２列に半截竹管状工具による刺突文が施される。くびれ部上段にも半截竹管状工具による刺突文が施され、橋状突帯が４個施される。体部は、２本１単位の縦位沈線と、隆帯で区画された中に沈線による矢羽根状文が施される。東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８と同時期と考えられる。

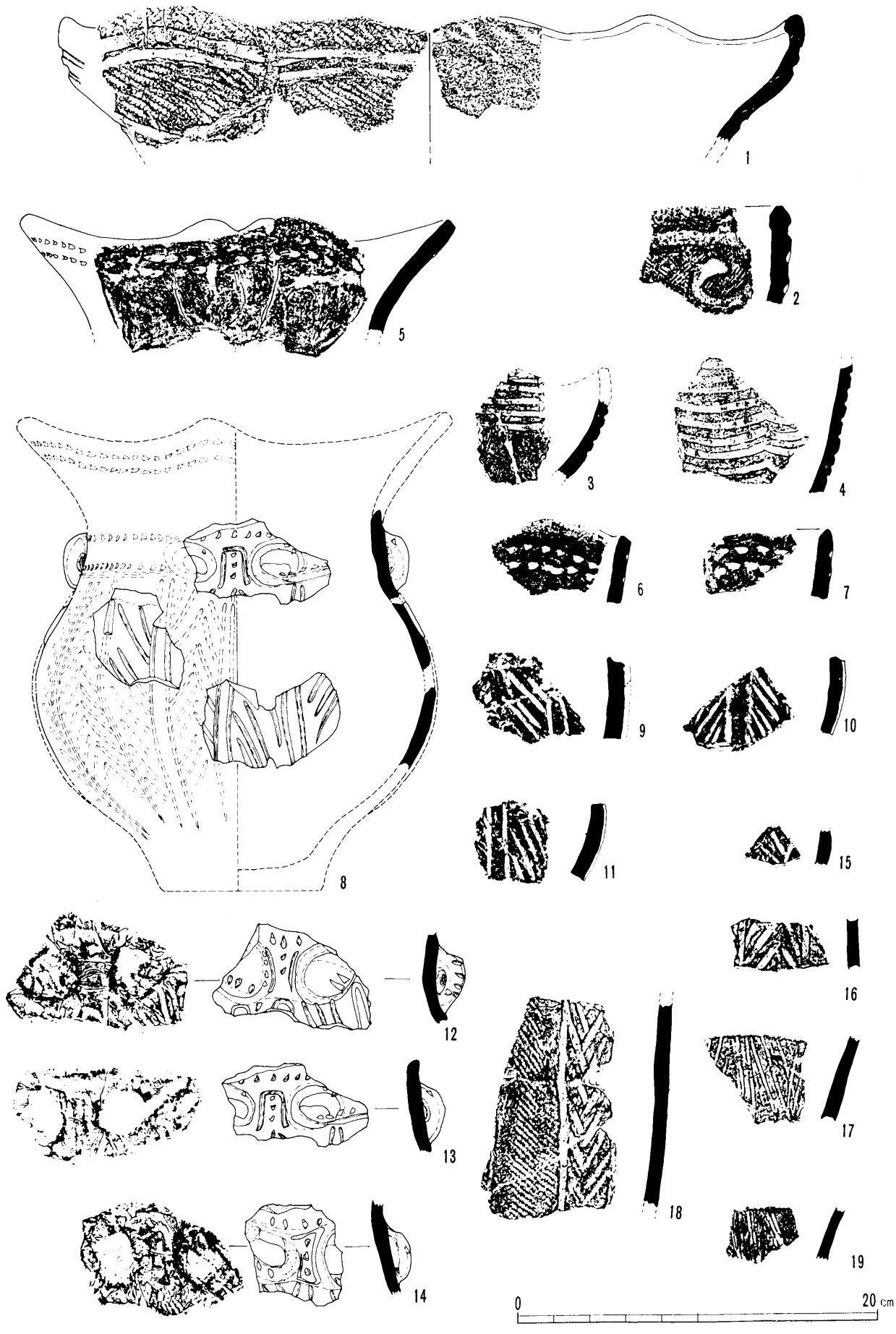
17～19は、その他の沈線による矢羽根状文土器である。17・19は、細線による矢羽根状文である。18は、一条づつの縦位沈線により、矢羽根状沈線を施す部分と縦ころがしのＬＲ縄文施文部分を区画している。

21・22は、山形突起をもつ深鉢である。21は、地文にＬＲの縄文を施文し、山形に沿って２条１単位の沈線文を施す。側縁にも沈線文を施す。22は、地文にＲＬの縄文を施し、山形に沿って２条１単位の沈線文を施す。側縁にも沈線文を施す。

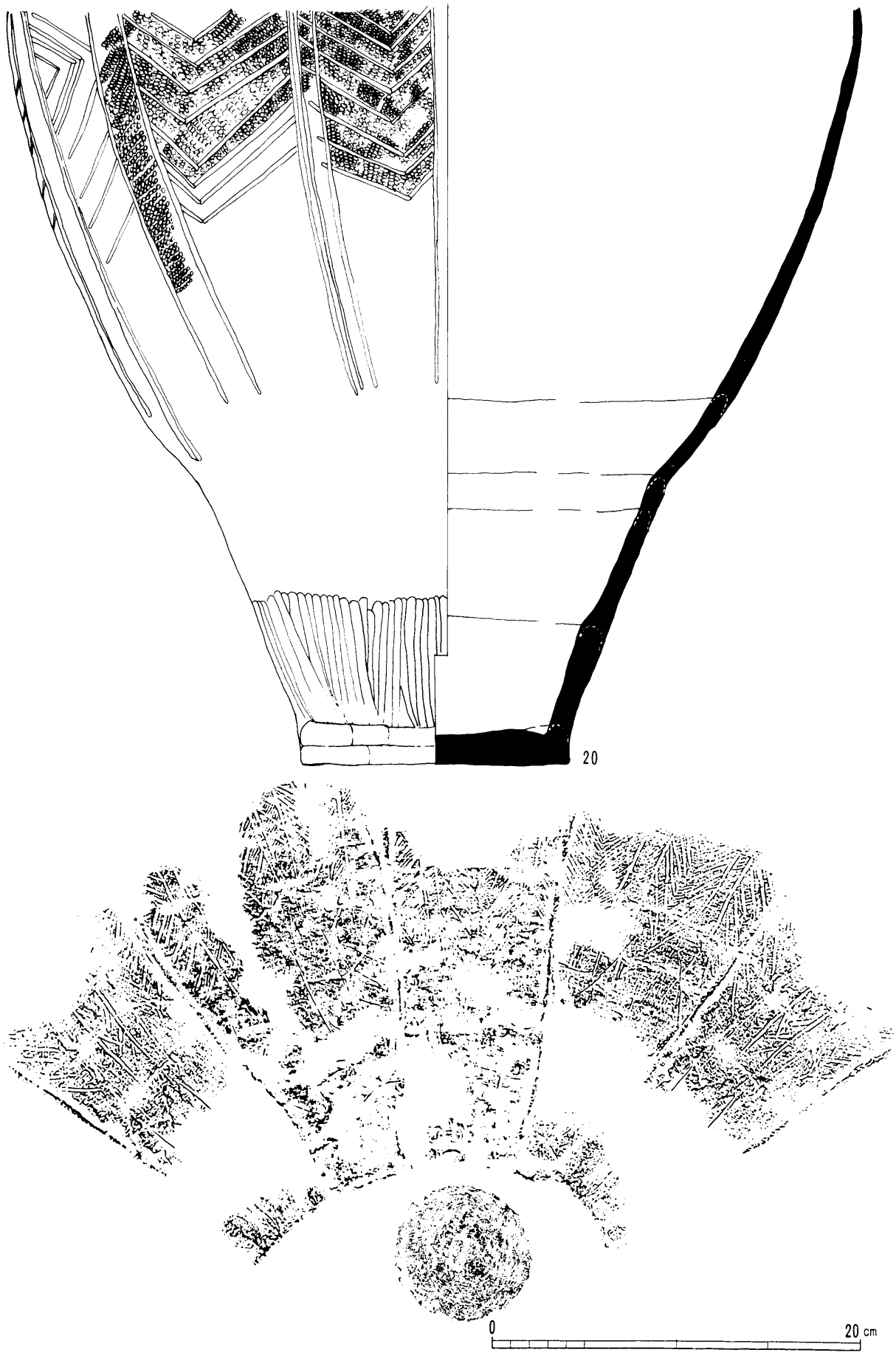
23は、波状口縁の深鉢である。凹縁による、波状口縁部側縁と窓枠状の区画の周縁部の区画がある。

段状肥厚口縁深鉢（24～28・35）

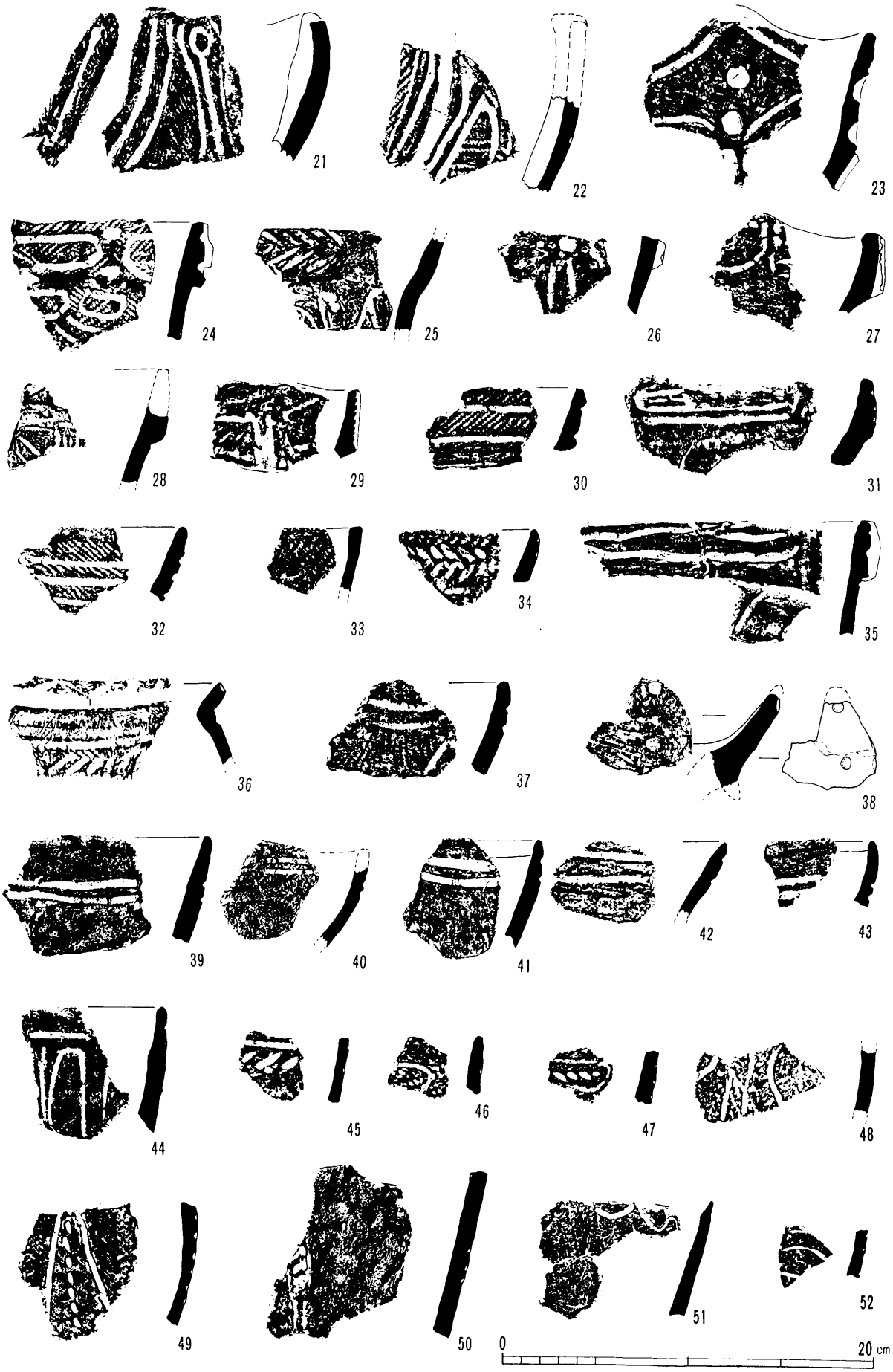
口縁部が段状肥厚する。24は、地文にＬＲの縄文を配し、段状肥厚部を沈線による楕円文で区画する。



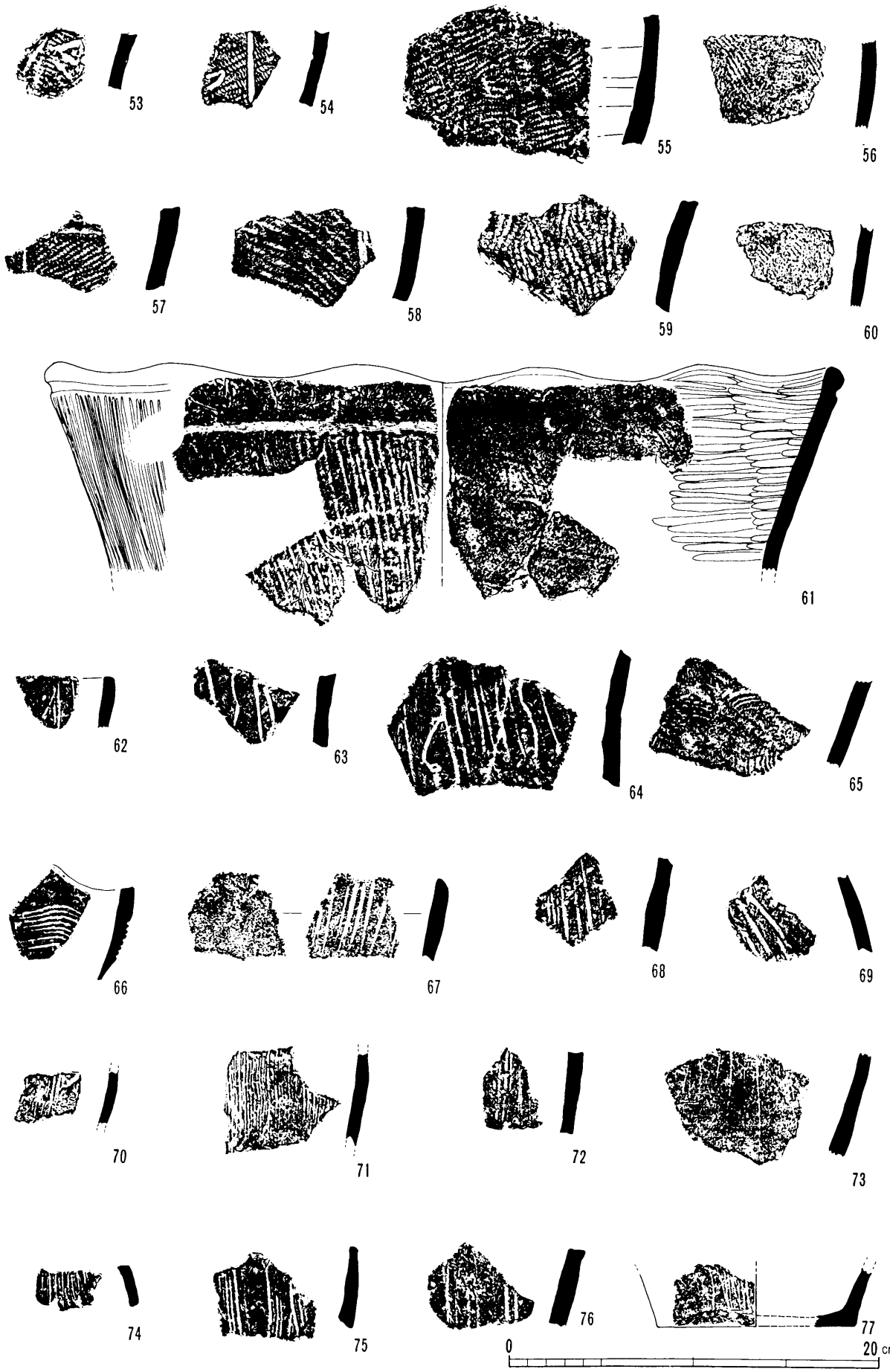
第７－12図　縄文土器拓影実測図(1)（１：３）



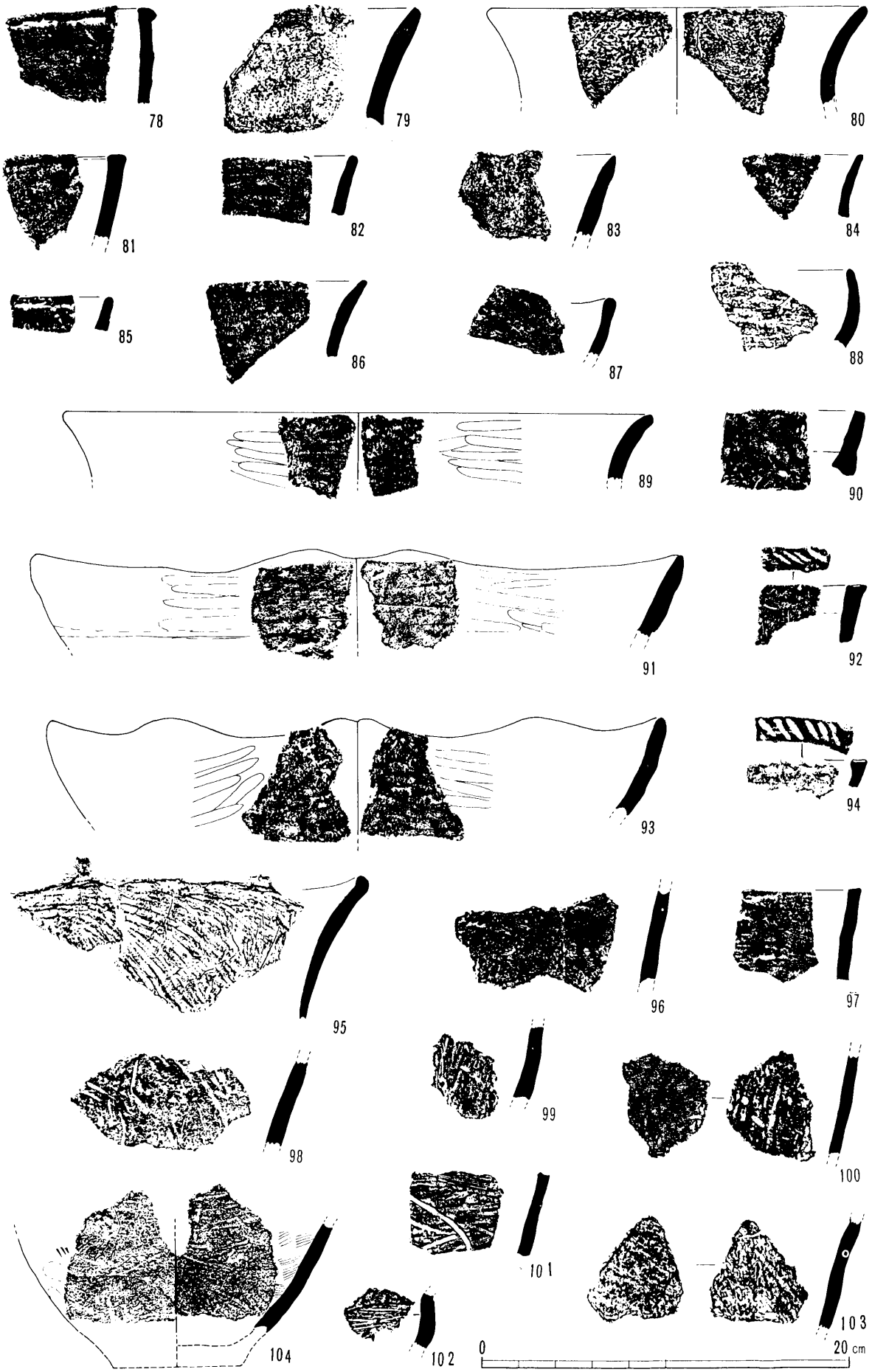
第７－13図　縄文土器実測図(2)（１：３）　拓影（１：６）



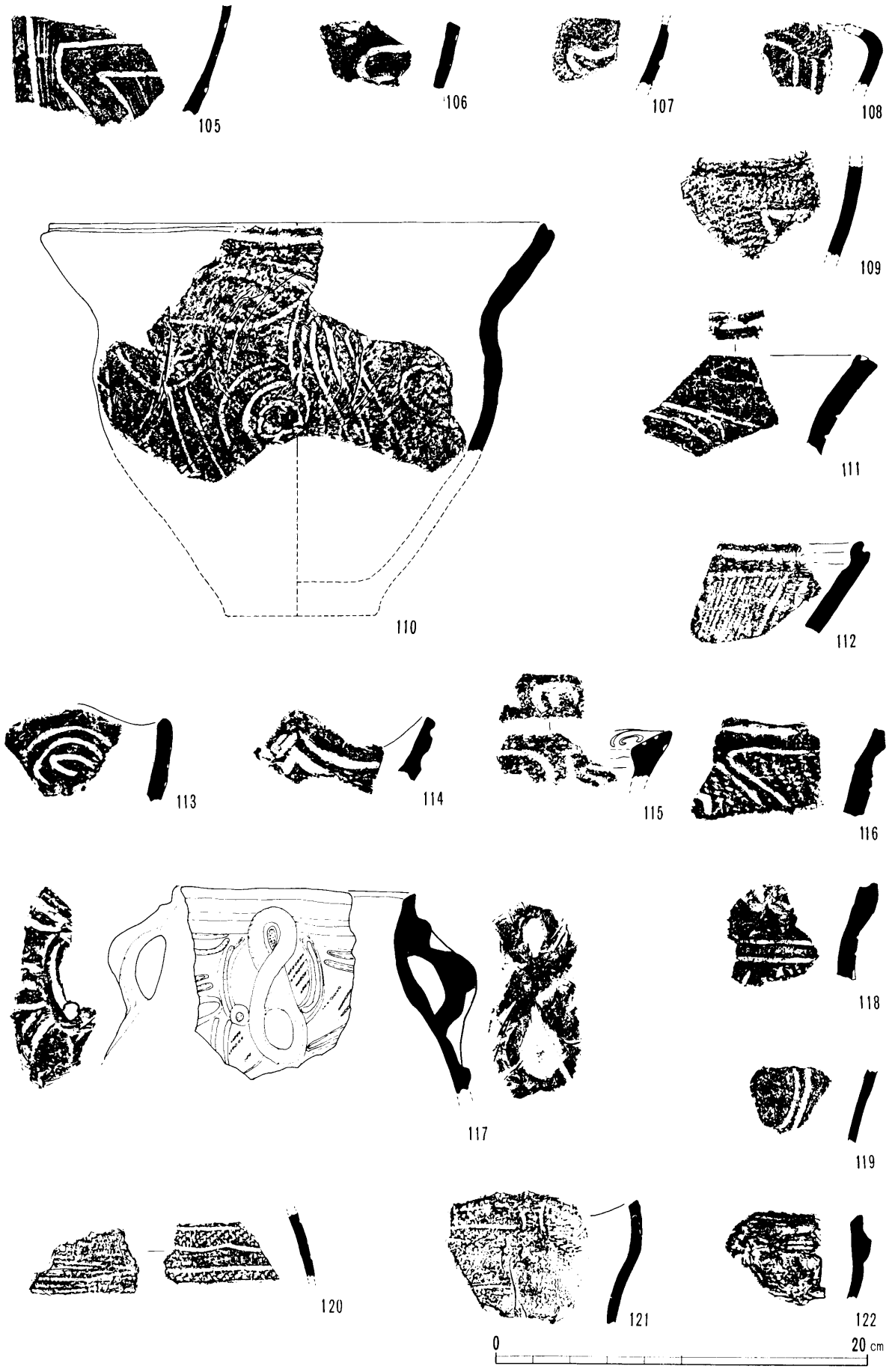
第７－14図　縄文土器拓影・実測図(3)（１：３）



第７－15図　縄文土器拓影・実測図(4)（１：３）



第７－16図　縄文土器拓影・実測図(5)（１：３）



第７－17図　縄文土器拓影・実測図(6)（１：３）

間に凹点を縦方向に2点付加している。体部は、横位楕円文と、2条1単位の沈線文を施文している。

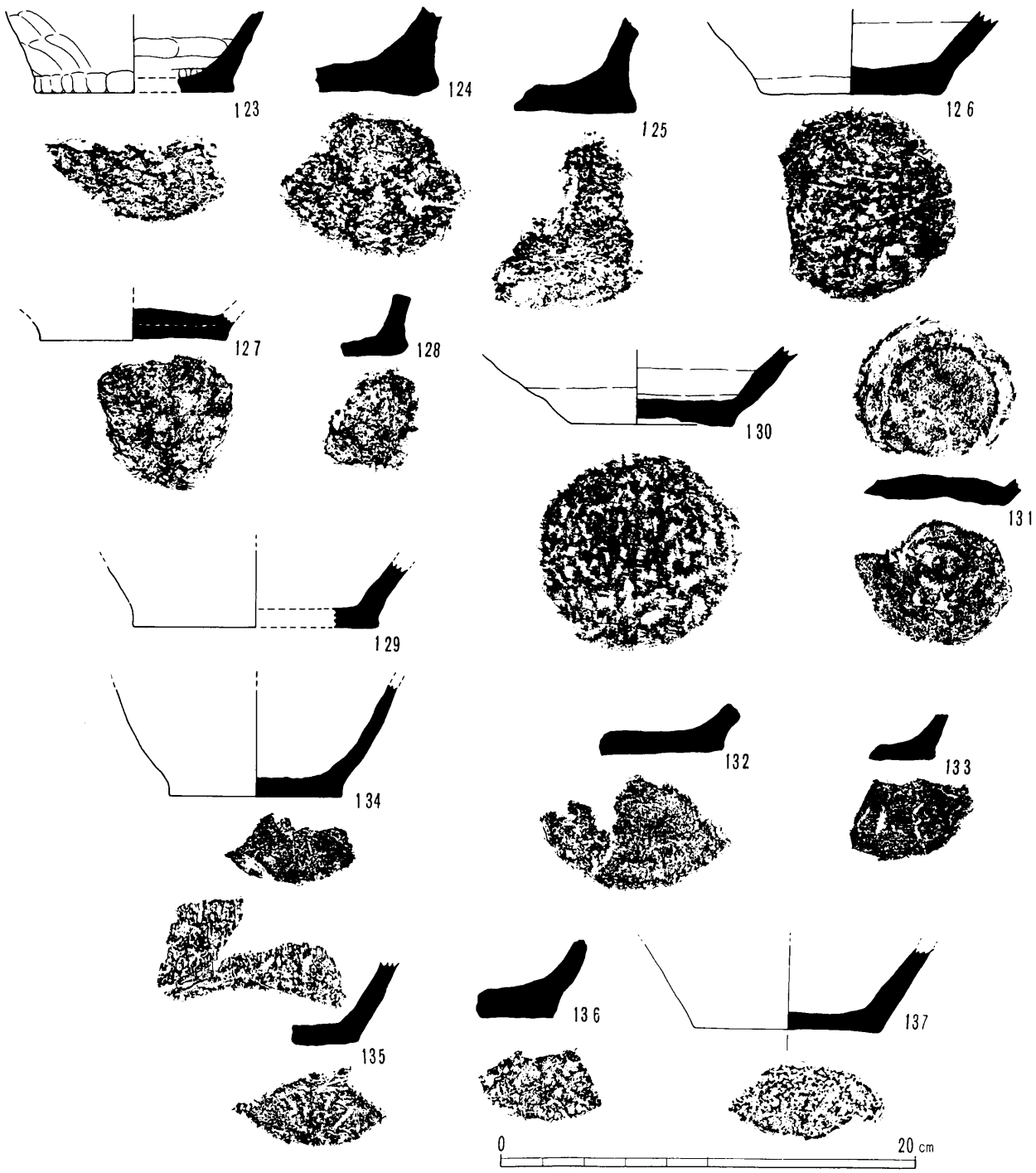
25は、段状肥厚部に横位矢羽根状沈線文を施し、体部に沈線による縦位矢羽根状文を施す。28と同一個体である。26は、隆帯の上に竹管刺突文と凹点がつく。27・29は同一個体で口縁部が波状になる。ヘラ状工具による刺突列点文により区画が作られている。区画の間に円形刺突文が施される。30は、2条の横位凹線が施される。

平縁口縁部深鉢（33・34・44）

33は、口縁部が上端面を持つ。34は、口縁部に横位羽状文を施し、その下に横位沈線が施される。44は、口縁部に横位沈線を施しその下部を逆U字状の沈線文を施す。林ノ峰G層にもみられるものである。

横位凹線施文深鉢（32・37・39～43）

32は、3条の横位凹線が施され、地文はLR縄文である。37は、地文にLR縄文を施し、2条の孤状に下がる凹線を施す。39～43は、無文の深鉢で、い



第7－18図　縄文土器拓影・実測図(7)（1：3）

ずれも２条１単位の凹線が施される。

中期末～後期有文土器・縄文地文土器（45～60）

45は、横位区画凹線と横位一列点文が施される。46・47は、楕円区画を持つ。48は、凹線２条１単位が３方向に展開する。49は、縦方向の凹線による区画の中に刺突列点文が施される。50は、沈線と列点による懸垂文が施される。51・52は、横位蛇行沈線文を持つ。53・54・57は、ＬＲの縄文地に区画の凹線が施される。59は、ＲＬの縄文地に縦位凹線を施す。55・56・59・60は、地文に縄文を施す。56・60は、ＲＬの縄文を縦方向に施すいわゆる帯状施文の土器である。

（２）中期末～後期条線文土器（61～77）

63・64は、縦方向沈線と蛇行沈線で区画される。44と胎土が類似しており同一個体の可能性もある。中期末葉のものか。61は、波状口縁を持ち、口縁部は肥厚する。横位凹線が引かれ、その下は条線が下方に多数引かれる。内面は横方向繊維条痕が施される。62は、口縁端部が面を持つ、後期か。４～５条１単位の条線を縦位に施す。65は、７条１単位の条線を乱方向に施す。北白川上層式併行期か。66は、波状口縁を持つ深鉢で８条１単位の条線を横位に施す。北白川上層式併行期か。67～76は、縦位に条線を施す。77は、平底の底部である。側縁に縦方向に条線を施す。

（３）中期末～後期粗製土器（78～94）

78・81・82・84は、口縁部が左右に拡張される。内外面はナデである。79・80・83・85・86・89は、口縁部が外反し先細る。内外面に繊維質原体による擦痕が残る。87・93は、口縁部が外弯し、波状口縁となる。内外面に繊維質原体による擦痕がみられる。90・91は、口縁部が段状に肥厚する。91は、波状口縁となっている。92・94は、口縁部が左右に肥厚し、ヘラ状工具による刻目が施される。

（４）中期末～後期条痕土師群（95～103）

95は、波状口縁の深鉢であり、波頂部が８個と推定される。体部上半を右下りの反時計廻りで巻貝による条痕が施される。97は、口縁部が端面を持つ。内外面横位条痕を施す。101は、横方向の巻貝条痕の上に入り組んだ弧状文を施す。内面は条痕＋ナデ。104は、深鉢の体部下半部で外面条痕＋ナデ、内面２枚貝条痕が残る。その他は、体部の小片である。

（５）後期初頭の土器（36・38・105～109）

磨消縄文土器（105～109）

105は、区画沈線による逆Ｊ字文が施される。逆Ｊ字文の外側に条線が施される。

106・107・109は、Ｊ字形の沈線区画文が施される。中にＬＲの縄文が施される。

壺型土器（108）　外面に凸形連弧文が施される。区画内にＬＲ縄文が施される。

（６）後期前葉の土器（110～119）

有文深鉢（110～116・118・119）

110・111は、平縁で、口縁部に沈線を持つ。体部には、３条１単位の沈線による渦文が施される。

112は、口縁部がやや肥厚し、先端が外反する。外面上部に横位沈線が施され、横位にＬＲ縄文が施文される。

113は、波状口縁の深鉢である。外面に左廻りの渦文が施文される。

114は、波状口縁の深鉢である。２条の凹線が波頂の曲線と平行に施文される。

115は、縁帯文深鉢である。縁帯部に２条１単位の弧状文が施される。外面には、凹線による区画文が見られ、ＬＲ縄文を施文する。

116は、微隆起し、両側に沈線を持つ。隆帯による区画内にＲＬの縄文を施文する。

（７）後期後葉の土器（120・121）

120は、３条の沈線により横位に区画された空間を３帯持つ。真中が横位に磨研された部分であり、その上と下の区画帯は、ＬＲの縄文が施される。

121は、波状口縁の深鉢である。口縁部外面に沈線による横位長方形区画を持つ区画内は磨研される。区画の外にＬＲ縄文を施す。内外面巻貝による条痕がみられ、外面は、さらにそれをナデ消している。

（８）晩期の土器（122）

122は、突帯を持つ深鉢である。突帯部に２枚貝による押引がみられる。突帯の断面形は台形である。外面上半横位２枚貝条痕、下半ケズリである。内面は、条痕＋ナデである。

（９）中期末～後期底部（123～137）

123～125及び127～129は、底部側縁が外に張り出す。いずれも淡褐色～橙褐色の明るい色調のもので

ある。

123は、底部に網代痕を持つ。

130は、底部外面がやや上底になり、網代痕を持つ。底部側縁は、外に張り出さない。底部側縁の調整は、ユビオサエである。網代の原体の単位幅は長辺0.6cm×短辺0.3cmである。暗茶褐色で、胎土は粗く長石を含む。

126は、底部外面が、わずかに上底になる。上底部に網代痕が残る。網代原体の単位は、長辺0.5cm×短辺0.3cmである。体部外面タテ方向ミガキ、内面ケズリ＋ナデである。淡褐色、胎土に長石を含む。

131は、底部外面が指圧により上底になる。内面に指圧痕が残る。

132～137は、平底の底部である。底径11～12cm。底部外面ケズリ、内面に指圧痕が残る。内外面繊維擦痕＋ナデである。

2．弥生時代

1．ＳＢ1（138～145・155～157）

口縁部が垂下し、口縁部内面に2列にわたり刺突文が施される壺Ａ－ｂ類（139）、口縁部が肥厚し側縁に波状文を持つ壺Ａ－ｃ類（140）、口縁部側縁に斜格子文を施す受口状口縁壺Ｂ類（141）、口縁部内面に突起を持つ壺Ｃ類（138）が出土した。壺の体部、底部の破片に（142～145）があり、底部では平底が多い。

155～157は、有文の体部片で、156は、簾状文＋櫛描直線文、155・157は、櫛描直線文を持つ。甕には、Ｂ類（146～148）がある。

149は、台付鉢脚部である。中期後葉のものである。

2．ＳＢ2（150～153）

口縁部に突起を持つ壺Ｃ類（151）、頸部に突帯をめぐらせる壺Ｄ類（150）、口縁部外面に円形浮文を持つ受口状口縁壺Ｄ類（152）が出土した。甕では、頸部が「く」の字に屈曲する甕Ｅ類（153）が出土した。

3．Ｆ3地区（154）

口縁部側縁下端に刺突文を持つ細頸壺Ａ類（154）が出土した。

3．古墳時代前期

1．ＳＢ28（158～167）

壺には、上胴部に貝殻腹縁による連孤文を施すもの（159）、上胴部に鋸歯文、櫛描直線文、刺突列点文をめぐらすもの（160）、口縁部が短く外反する壺（158）が出土した。底部には、平底のもの（161）とやや上底になる（162）がある。甕は、Ｓ字状口縁台付甕（163・164）が出土した。器台には、165・166がある。

2．ＳＢ12（168・169）

壺底部（168）・高杯脚部（169）がある。高杯は脚部が「ハ」の字状にふくらむ。

3．ＳＢ16（170・171）

薄手で口縁部が外反する壺（170）、上底の底部（171）がある。

4．ＳＫ13（177）

口縁部が先細り、底部が上底になる鉢（177）が出土した。

5．ＳＢ15（175）

透孔を持ち、接地面が丸味を持つ高杯（175）が出土した。

6．ＳＢ4（174）

174は、Ｓ字状口縁台付甕脚台部である。接地面の折り返しは無い。台部外面下半はヨコナデされる。

7．ＳＢ34（178～201）

壺Ａ・Ｂ類、直口壺、小形丸底壺Ａ・Ｂ類、高杯Ａ・Ｂ類、器台、Ｓ字状口縁台付甕が一括出土した。

壺Ａ類（178）　体部扁平球状になり、口縁部は短く外反する。体部外面をハケ調整する。

壺Ｂ類（181）　口縁部が外反し、2～3条1単位の棒状浮文がつく。頸部外面をハケ調整する。

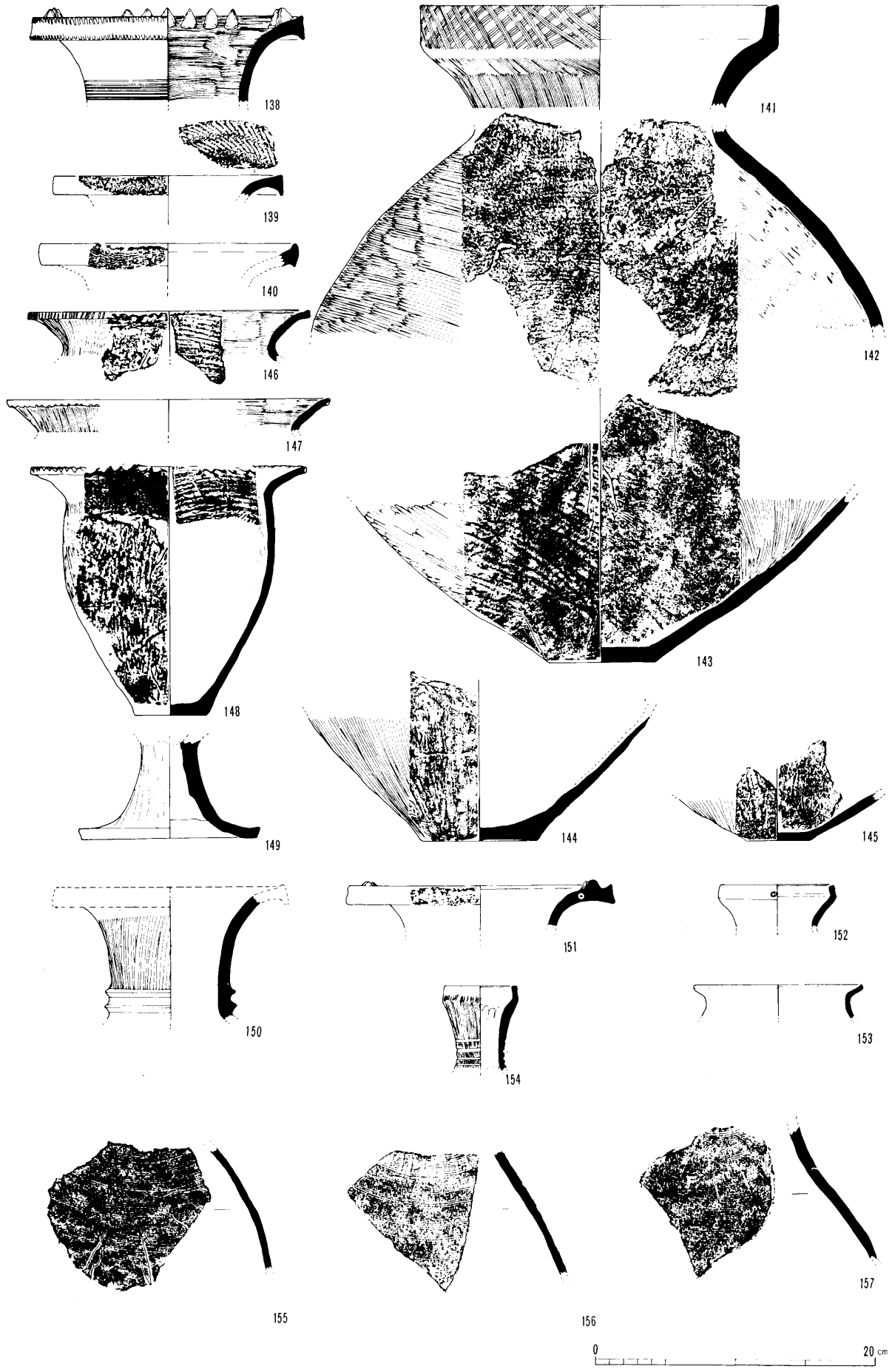
直口壺（179・180）　薄手で口縁端部が外反する。

壺底部（184・185）　いずれも上底である。

器台（186・187）　口縁部が外反する。口縁部先端はやや丸い。

高杯Ａ類（189）　いわゆる欠山期の高杯の系譜を引くものであり、杯部が次第に低くなったものである。

高杯Ｂ類（188）　精製土器で、杯部がやや外反する。口縁端部に刻み目を持つ。杯部下部の屈折部



第７－19図　弥生土器実測図（１：４）

に突帯を持つ。突帯部に刻目を持つ。

S字状口縁台付甕（190～201）　190は、完形で頸部に櫛状工具による横方向のハケ調整がなされる。脚台は折り返される。192～197は、口縁部が外反し上方を向く。外面タテハケ、内面板状工具によるナデである。脚台部には、折り返しを持つ（198～201）と折り返しを持たない（191）がある。

8．SB33（202～204）

S字状口縁台付甕（202）　口縁部が外反し、先端が上方を向く。体部外面上半横方向のハケ調整がなされる。

高杯C類（203）　薄手で、口縁部が外弯する。内面にミガキが施される。

壺底部（204）　上底になる。

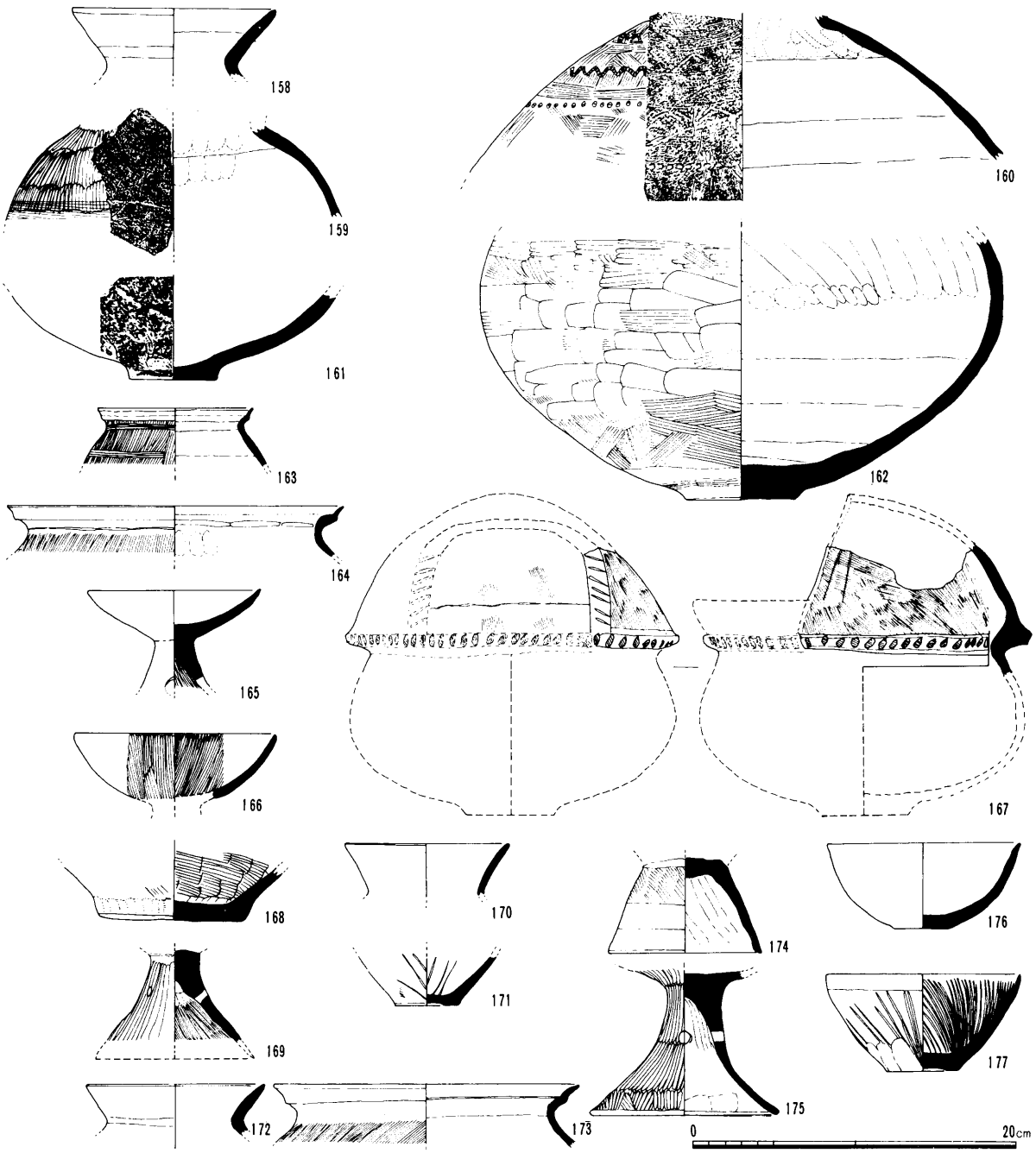
9．SB38（182）

小型丸底壺A類（182）　口縁部が内弯して立ち上る。体部はやや縦長の球状である。内面は板状工具によるナデあり。

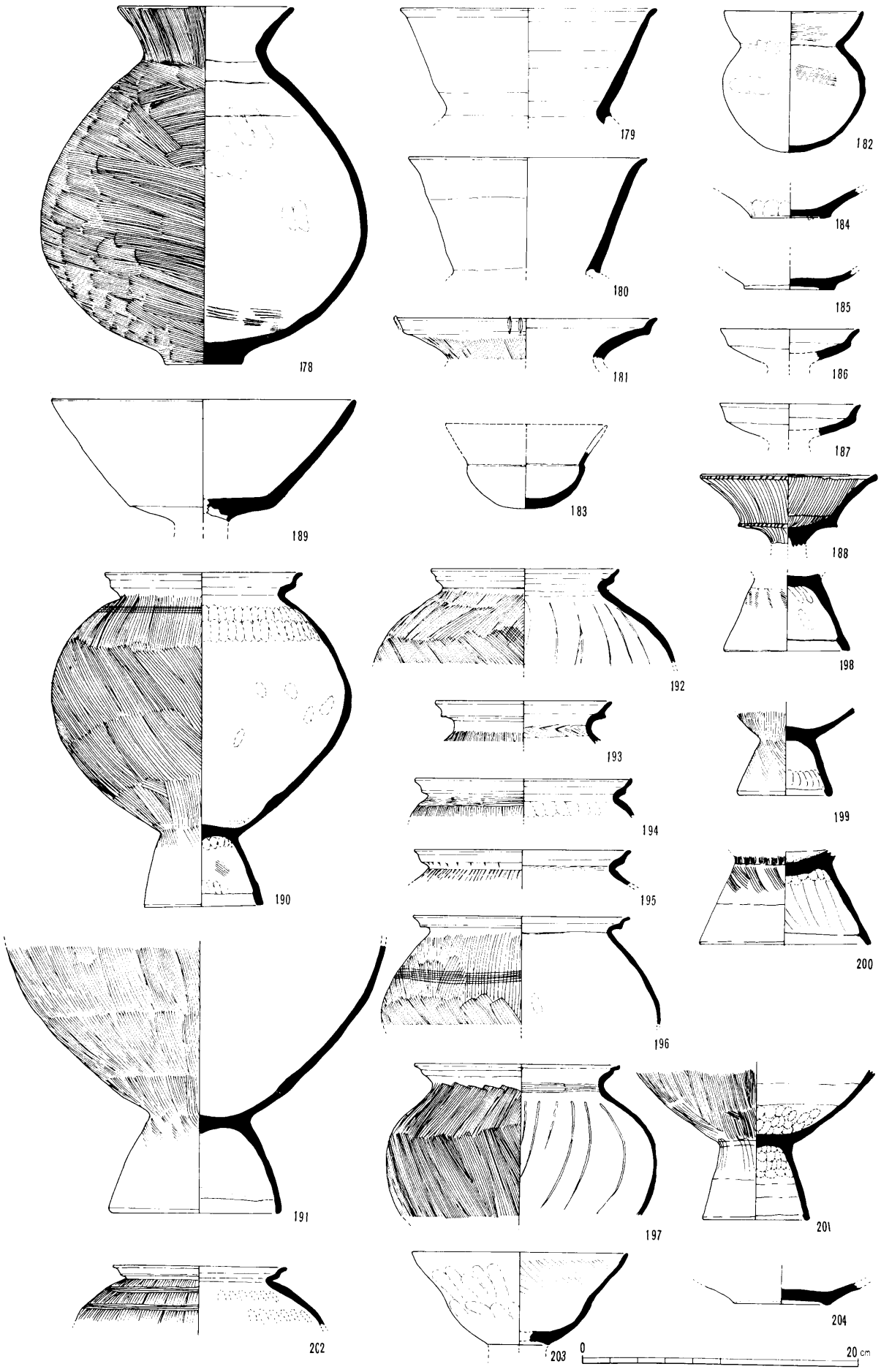
4．古墳時代後期

1．SB35（205～212）

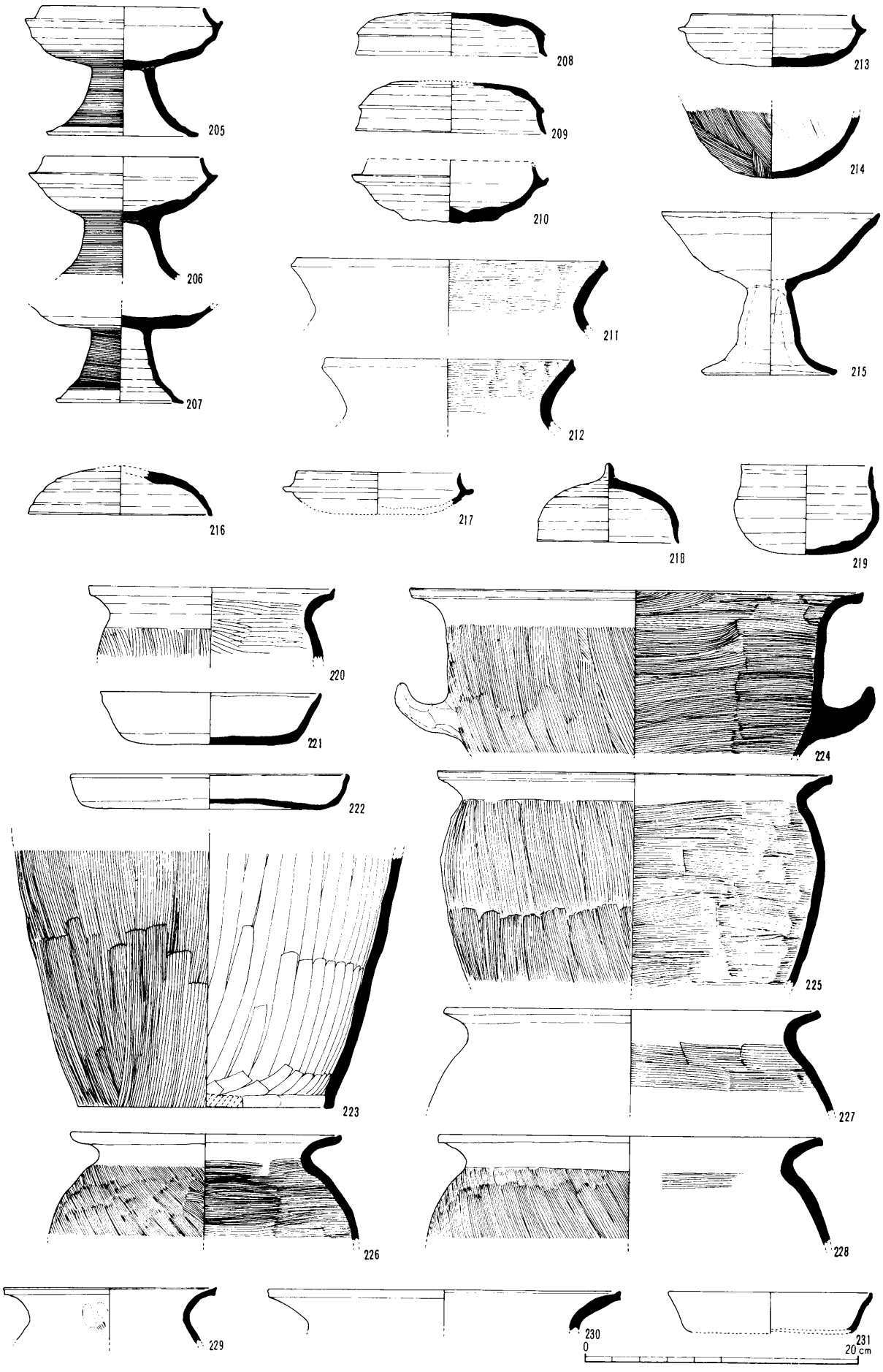
須恵器高杯（205～207）　台部接地部が外反する。



第7－20図　古墳時代土器実測図(1)（1：4）



第７－21図　古墳時代土器実測図(2)（１：４）



第７－22図　古墳時代・奈良時代土器実測図（１：４）

口縁部は、内傾する。脚部にカキ目を持つ。

須恵器蓋杯（208～210）　208は、蓋で器高が低い。209は、蓋で口縁端部が外反する。210は、杯身である。

土師器甕（211～212）　頸部が長く、外反する。口縁部内外面ヨコナデ、口縁部内面にヨコ方向のハケ調整がのこる。

2．ＳＢ36（213～215）

須恵器杯（213）　底部ヘラケズリ、口縁部が内傾する。

土師器甕（214）　体部外面ハケ調整、内面ナデである。底部は丸い。

土師器高杯（215）　杯部が外反しながら立上る。口縁部先端は先細る。

3．ＳＢ26（216）

須恵器杯（216）　杯蓋である。器高が低く、口縁部がやや外反する。

4．ＳＢ11（217）

須恵器杯（217）　薄手で口縁部が外反する。

5．ＳＢ23（218）

須恵器杯（218）　蓋である。宝珠つまみがつき、口縁部が外反する。

6．Ｎ７地区　pit 3

須恵器椀（219）　扁平球状の体部と直立する口縁部を持つ。

5．奈良時代

1．ＳＢ40（220～228）

土師器杯（221）　口縁部内面に沈線を持つ。口縁部ヨコナデ。

土師器皿（222）　器高が低い。底部外面ヘラケズリ。

土師器甕（220）　口縁部外反した後、口縁部先端が上方に引き出される。体部外面タテハケ、内面ヨコハケである。

広口甕（224・225）　口縁部が外反し端面を持つ。224は把手を持つ。225も把手がつくと思われる。

長胴甕（226～228）　口縁部外反し端面を持つ。口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ。

甑（223）　体部下半のみ残存、外面タテハケ、内面タテ方向ケズリ。

2．ＳＢ15（229・230）

土師器甕（229～230）　口縁部が外反し、先端がやや上方に引き出される小型の甕（229）と口縁部が外反し端面を持つ（230）とがある。

3．ＳＢ39（231）

土師器杯（231）　やや薄手で口縁部が外反した後内側を向く。口縁部ヨコナデ。

6．平安時代末葉

1．ＳＤ９（232～234）

山茶椀（232）　高台が高く、口縁部が外反する。

土師器台付杯（233）　ロクロ成形で、直線的に斜上方に引出される。高台は外開する。

土師器鍋（234）　口縁部がわらび手状に折り返される。口縁部ヨコナデ。

2．ＳＢＰ１（235～237・241）

山茶椀（235）　腰部の張りが強く口縁部が外反する。

山皿（236）　高台は断面形三角形で口縁部が外反する。

土師器鍋（237）　口縁部がわらび手状に折り返される。口縁部ヨコナデ、体部内外面指圧痕が残る。

輪花山茶椀（241）　高台断面形三角形、器高が低く口縁部が外反する。

3．ＳＥ19（238・239・240）

山茶椀（238）　高台断面形三角形、口縁部外反する。

山皿（239）　高台断面形三角形、口縁部が外反する。

ロクロ土師器杯（240）　平底で、腰部の立上りが急。

4．ＳＤ８（242～244）

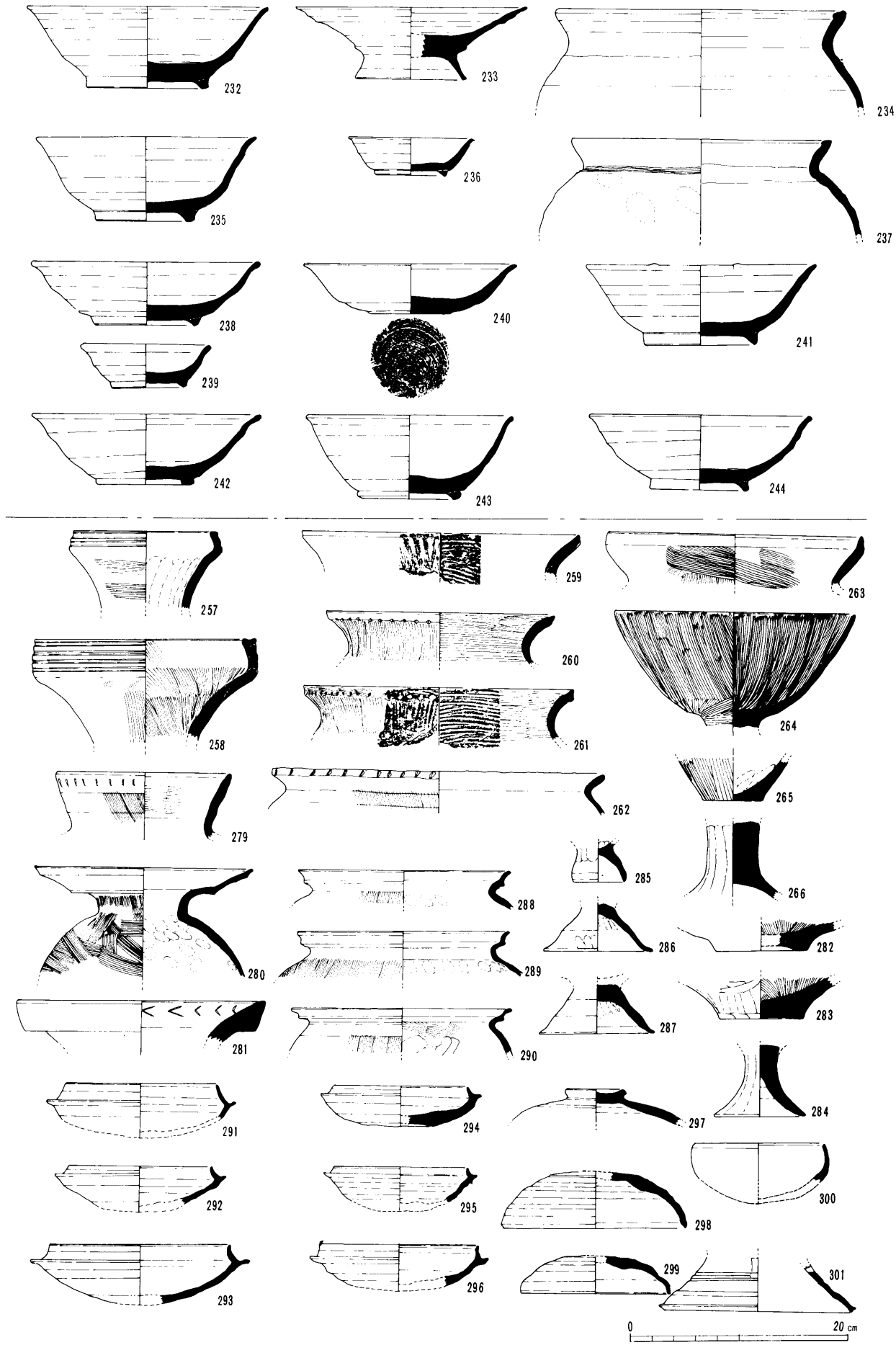
山茶椀（242～244）　高台の断面四角形で口縁部の外反が強いもの（242）高台の断面四角形で、器高が高く、口縁部が外反するもの（243）高台が外開し、口縁部が外反するもの（244）がある。

7．包含層の遺物

1．弥生時代

（１）石製品（245～253）

不定形刃器（245）　側面に二次調整を行い刃部を



第７－23図　平安時代，包含層土器実測図（１：４）

つくり出している。ＳＢ１出土。

扁平片刃石斧（246）　上端部欠損。両側を縁研磨している。緑色片石製。

石庖丁（247・248・249）　247は刃部が凹型になる。緑色片石製。248・249は、やや小型で刃部が平らである。いずれも緑色片岩製である。

敲石（250・251）　250は、扁平な円形のもので両面に使用痕がある。251は、球形で一部に敲痕が残る。いずれも砂岩製である。

打製石斧（252・253）　長さ15cm前後で、両側縁を二次調整し薄くしている。穴掘工具か。

（２）中期の土器（257～262・265・276・289～289）

壺には、口縁部側縁に凹線を持つ受口口縁壺Ａ類（257・258）、第７－24図に拓影を掲載した櫛描直線文を持つ壺（267～274）、ハケ調整の上に横方向沈線を施す壺（275・276・278）、がある。

甕には、口縁部がゆるやかに外反するＢ類（Ｂ類の中で口縁部丸味を持つものをＢ－ａ類、口縁端が稜を持つものをＢ－ｂ類、口縁部が上下に肥厚するＢ－ｃ類に細分する）と口縁部が「く」の字状に短く外反するＥ類が出土している。259・260は、Ｂ－ｂ類で外面タテハケ、内面ヨコハケ調整がなされ、口縁部側縁下部に刻目が施される。261は、Ｂ－ｃ類であり、外面タテハケ、内面ヨコハケである。262は、Ｅ類で口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ調整がなされる。265は、甕底部でありやや上底になる。高杯には（266）があり、台部が中空にならず、裾部が「ハ」の字状に開く。これらは中期後葉に属する。

（３）後期の土器

東海編年の欠山期のものには、高杯（264）、台付甕（263）、直口壺（279）がある。

２．古墳時代前期（256～266）

（１）石製品

紡錘車（345）　滑石製でやや扁平なものである。

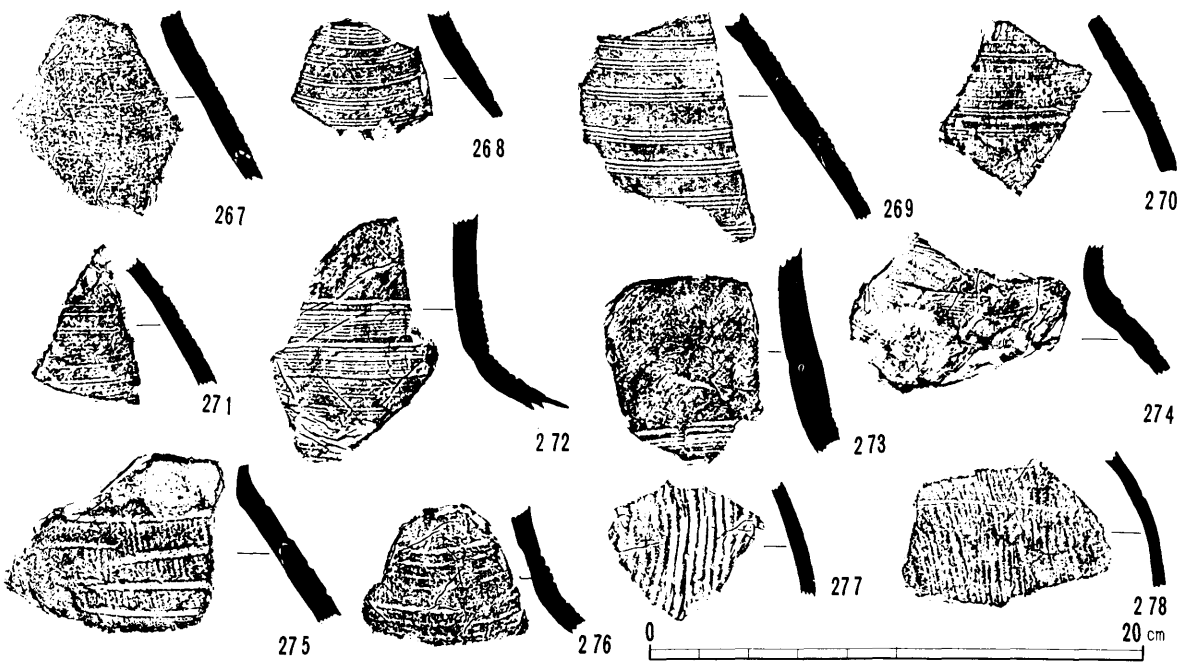
据付砥石（254）　玉等の研磨用に用いられたものか。２条の溝状研磨痕がみられる。砂岩製。Ｂ地区出土。

砥石（255・256）　扁平な砂岩を用いた砥石である。255は、全長17.3cm、幅17.2cm、厚さ5.3cm、重さ217ｇである。256は、全長16.5cm、幅6.8cm、厚さ3.4cm、重さ658ｇである。ともに砂岩製である。

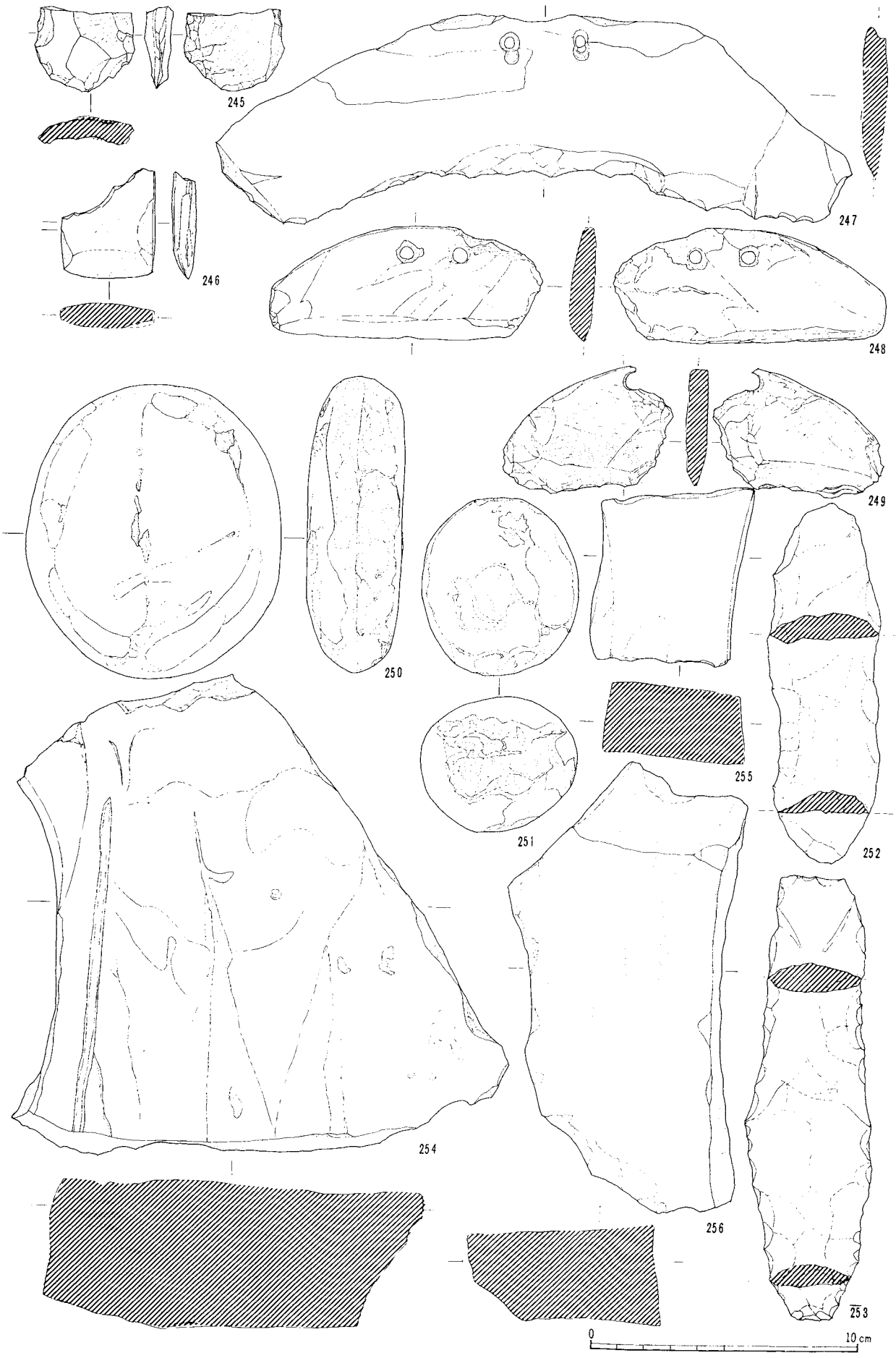
（２）土器

壺には、薄手の二重口縁壺（280）、羽状文を口縁部内面に施す壺（281）がある。壺底部には、上底の（282・283）がある。

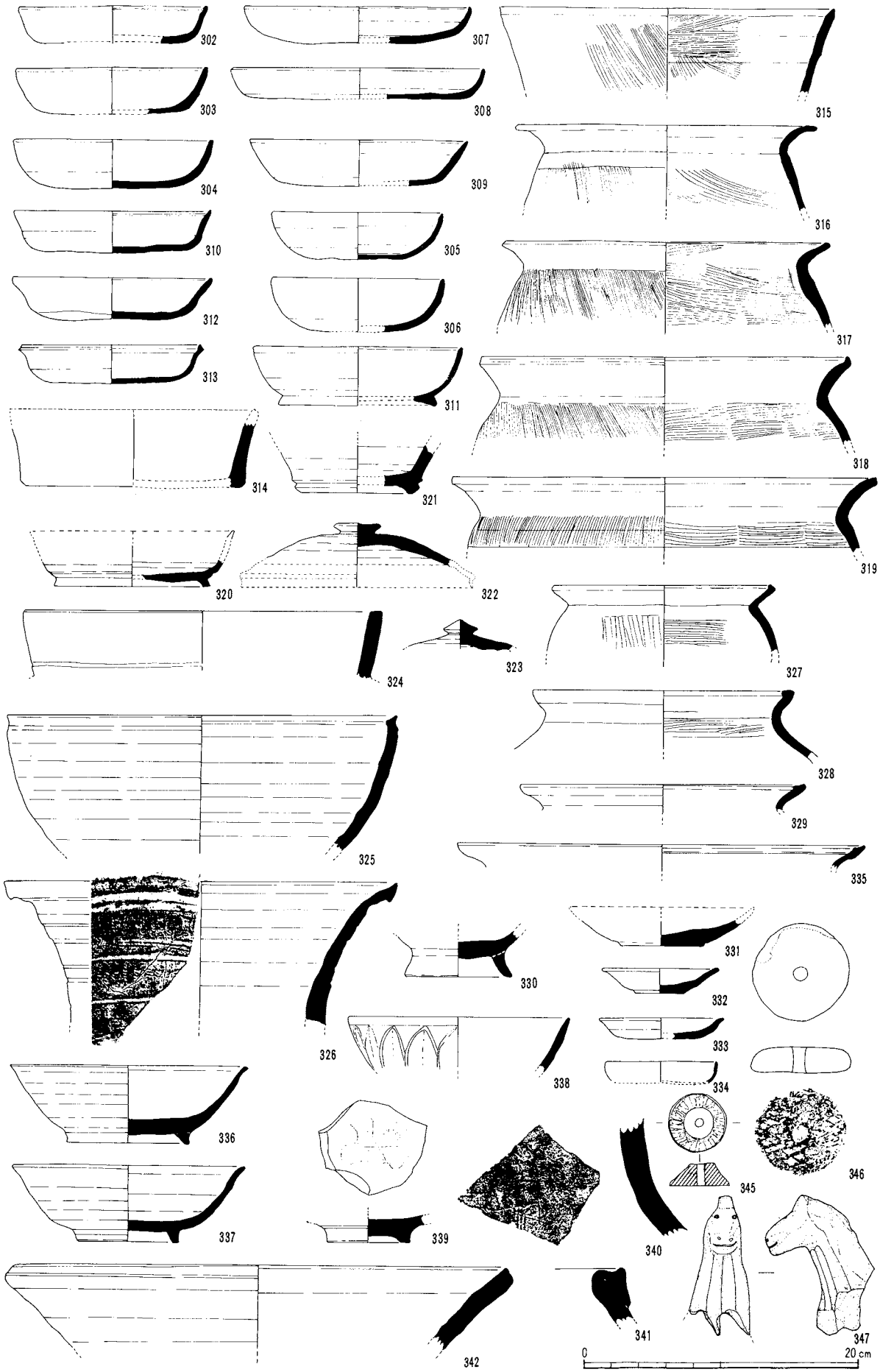
甕にはＳ字状口縁台付甕Ｂ類（288～290）、台付甕脚台部（285）、高杯の脚部（284・286・287）がある。



第７－24図　弥生土器拓影・実測図（１：３）



第７－25図　石器実測図（１：２）



第７－26図　平安時代～鎌倉時，包含層遺物実測図(5)（１：４）

3．古墳時代後期（291～299）

須恵器杯（291～296）　杯身には、径の大きい（291・293・296）がある。つまみを持つ杯蓋（297）、杯蓋（298・299）

須恵器脚台（301）　接地面が上下に肥厚する。透孔を持つ。

土師器では、口縁が内弯する杯（300）がある。

4．奈良時代の遺物（302～326）

土師器杯には、やや厚手で口縁部内面に沈線を持つ杯A（302～307・310）、高台を持つ杯B（311）、やや器高の高い杯C（305・306）がある。土師器皿には、口縁部が先細る皿A（307）、大型の皿B（308）がある。煮沸形態には甑（315）、甕（316～319）がある。

須恵器には、高台を持つ杯B（320）、宝珠つまみを持つ杯蓋（322・323）、口縁部が短く直立する壺（324）、鉢（325）、甕（326）がある。瓦製品では、格子叩平瓦を転用した紡錘車（346）がある。

5．平安時代（313・314・327・330～333・336・337）

土師器では、薄手で口縁部が内側を向く杯（313）、製塩土器（314）、口縁部の先端が上方につまみ出される甕（327）、土馬（347）があり、前期に属する。

後・末期では、土師器鍋（329・335）、土師器椀（330）、やや大型のロクロ土師器杯（331）、ロクロ杯（332）、口縁部が外反する皿（333）、山茶椀（336・337）がある。

6．鎌倉時代～室町時代（334・338・340～342）

鎌倉時代では、鎬蓮弁青磁椀（338）、内面にスタンプの唐草文を持つ青磁椀（339）、肩部にスタンプ文を持つ常滑産甕（340）がある。

室町時代では、薄手で口縁部が弯曲する土師器小皿（334）、常滑産陶器捏鉢（342）、常滑産陶器甕（341）がある。

7．江戸時代の遺物（348～366）

（i）肥前産磁器

くらわんか椀（348・350）　348は、外面に草木文を染付している。350は、椀の腰部に草木文を染付し、内面にこんにやく版による文様が押されている。

皿（353）　外面に飛雲文、内面に草木文を染付し、内面見込にこんにやく版による花型の文様を施す。

筒型椀（354～357）　円筒形で口縁部が鋭く立ち上り内面に面を持つ。354は、外面菊花文、口縁部内面に菱文を施す。355は、外面に若松文を施す。356は、外面に菱文を施す。357は、外面に菊花文を施し、口縁部内面に横方向の細線を施す。いずれも染付である。

仏銅具（363）　脚部のみ残存。青磁釉を施す。

花瓶（367）　体部が丸味を持つ。灰緑色の青磁釉を施す。

（ii）肥前産陶器

三島唐津刷毛目椀（361）　体部丸味を持つ。外面に刷毛により白釉を施す。

（iii）瀬戸、美濃産陶器

つまみ付蓋（358）　つまみがつく鉄釉の蓋である。

蓋（359）　扁平で灰緑色の釉がかかる。

丸皿（360・364）　360は、見込に鉄釉の刷絵を施す。364は、志野釉を施す。

鉄釉皿（365・366）　366は小型の皿である。365は、内面に反りを持つ灯明皿である。

猪口（362）　凹底で、直立する体部を持つ。釉は、灰緑色である。

擂鉢A類（371）　硬質で口縁部が上下に肥厚し縁帯になる。擂目は密になっている。鉄釉が施される。

擂鉢B類（372・373）　体部がゆるやかに立ち上る。口縁部が幅広く縁帯になる。幅広い擂目が密に施される。373は、内面に「大」の印刻が2つ押印されている。勝川遺跡SX22に類例があり18C後～19C前半とされている。いずれも鉄釉が施される。

建水（375・376）　志野釉を施す小型の375と鉄釉を施す大型の376がある。

（iV）瀬戸・美濃産半陶半磁器（349・352）

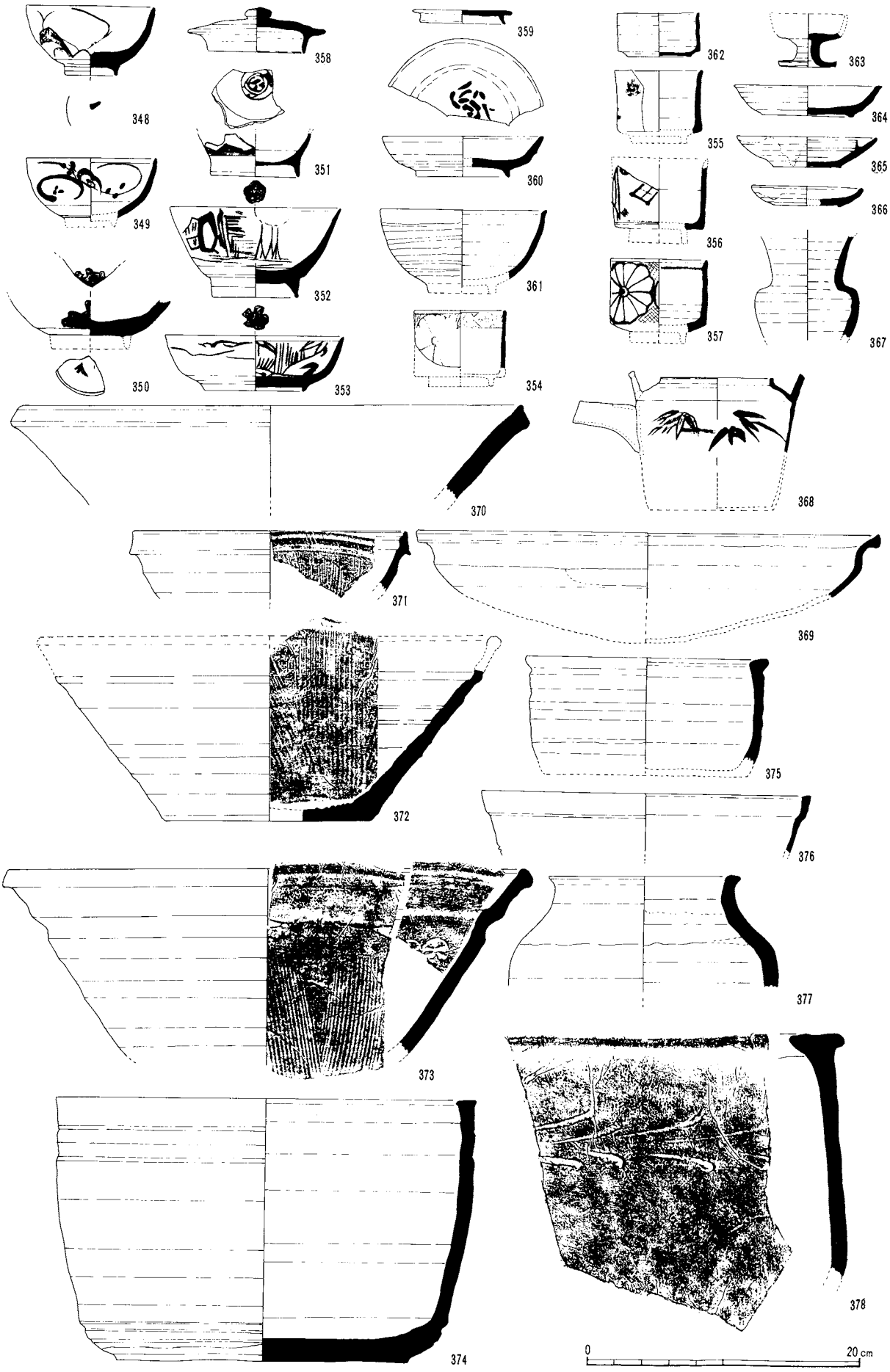
349は、くわらんか椀を模したものである。やや小型で、体部の立上りが丸味を持つ。太い筆で梅花文を描く。352は、広東椀を模したものである。外面と水辺の風景を描いている。

（v）常滑産陶器（370・378・379）

口縁部が上方に引き出される捏鉢（370）、口縁部上端面を持つ壺（378）、鉢（379）がある。

（Vi）京都産陶器

いわゆる清水焼で、外面に鉄絵の竹模様を描く水



第７－27図　江戸時代土器実測図（１：４）

指である。

（Vii）土師器炮烙（369）

口縁部の断面形が三角形で、器高が低い炮烙(369)がある。

（Viii）瓦質土器鍋（377）

口縁部が、外弯し上端面を持つ鍋（377）がある。

これらの江戸時代遺物は、A地区北端でまとまって出土しており、包含層とはいえ道沿いあるいは、傾斜地に廃棄されたものであろう。時期的には、18世紀後半から19世紀前半におさまるものである。なおこの地区からは、土師器片口付土釜、瀬戸・美濃産錆釉丸椀等も出土している。

4．結　語

1．遺構について

1．縄文時代の遺構

ＳＫ27のファイアーピットは、松阪西部域における藪ノ下遺跡についで２例目の資料となった。Ａ地区においては北半、Ｂ地区においては、ＳＫ27から北側の舌状台地部に遺物の出土が多く占地は、２地点に分かれる。近年の調査により、前沖遺跡Ｄ地区、杉垣内遺跡Ｃ地区等、水田開発により改変された堀坂川沿岸の扇状地における占地状況が次第に明らかになってきた。前述のように谷地形と河岸段丘が複雑に入り組む地形の段丘部の先端に占地している例を堂ノ後遺跡においても確認できた。

2．弥生時代中期の竪穴住居

円形竪穴住居ＳＢ１と、略方形プランの竪穴住居ＳＢ２が西拡張区において検出された。ＳＢ１は中期後葉Ⅲ様式新段階、ＳＢ２は中期後葉Ⅳ様式土器を伴う時期のものである。櫛田川流域の多気町鍬形花ノ木遺跡で中期中葉の円形竪穴住居が検出されており、堂ノ後遺跡ＳＢ１に先行する。貝田町期には、円形竪穴住居が通有であり、堂ノ後遺跡のようにⅢ様式新段階～Ⅳ様式の土器を伴う遺跡では円形竪穴住居と方形竪穴住居の混在がみられる。一方、杉垣内遺跡Ｃ地区（深長古墳下層）では、東海地方編年高蔵期に該当する典形的な第Ⅳ様式の土器を伴う方形プランの竪穴住居が４棟検出されている。今回松阪市西部域において、堂ノ後遺跡の混在型と杉垣内遺跡Ｃ地区の方形プラン単一型を抽出し得た意義は大きい。

3．古墳時代前期の竪穴住居

古墳時代初頭いわゆる庄内併行期のベッド状テラスを持つＳＢ12があり周囲に小土坑がある。Ｂ地区西側のＳＢ28は、小竪穴住居でありＳＢ12と２グループに分かれる。

古墳時代前期後半では、方形プランで中央に炉を持つＳＢ34が注目される。ＳＢ38と棟方向・規模が類似しておりこの２棟、あるいはＳＢ32を含めて３棟が単位集団を構成するものと思われる。

4．古墳時代後期の竪穴住居

後期も後葉の須恵器編年のＴＫ10併行期では、Ａ地区南端で検出されたＳＢ26・ＳＢ27、Ｂ地区西半で検出されたＳＢ35・ＳＢ36がそれぞれ対をなす。一辺5.5m～６mの方形プランで北辺にカマドを持つ。

5．奈良時代の遺構

掘立柱建物ＳＢ25は、倉庫と考えられる。松阪市西部域では、前沖遺跡Ｂ地区で、２間×２間の総柱建物とそれを囲むように規格性を持って配置された竪穴住居が検出されている。前沖遺跡Ｃ地区においても２棟の２間×２間の総柱建物が検出されている。これらとの対比が今後の課題である。

竪穴住居では、東辺にカマドを持つ一辺3.4m前後の小型竪穴住居ＳＢ３・ＳＢ40がある。最低２～３棟で単位集団を構成すると考えられるが、ＳＢ３・ＳＢ40ともに発掘区端のため１棟づつ検出された。これらは、奈良時代中葉に属し、特にＳＢ40は出土遺物も多く一典型である。

6．平安時代後半期掘立柱建物

ＳＢ５は、４間×３間の掘立柱建物である。東辺に東西１間×南北２間分の土坑を持つ。近年、斎宮跡、草山遺跡、中垣外遺跡等で南東隅土拡が検出され、馬屋説、厨房空間説が出されている。この中でも４間×３間で東辺に土坑を持つ掘立柱建物は、松阪市曲町曲遺跡ＳＢ６（桁行8.3m×梁間6.0m）、

斎宮跡第37－４次調査ＳＢ2443（桁行9.9m×梁間6.2m、一面廂）がある。当遺跡のＳＢ５（桁行9.6m×梁間7.0m）の平面形は、曲遺跡のＳＢ６に類似する。時期は、12世紀前半であり、曲遺跡のＳＢ６も12世紀のものである。なお曲遺跡ＳＢ１は、西側に１×２間の張り出し部を持つが基本的には４×３間の掘立柱建物である。東一間の桁方向の柱間が約2.4mと広い。一方堂ノ後遺跡ＳＢ５では、2.0mと狭い。このことは、東辺の一間分が、付帯施設の空間であることを意味する。またＳＫ６からは山茶椀が出土している。また屋敷地の東を限ると思われるＳＤ７に近接してあることから、副屋的なものであり、ＳＫ６も厨房施設かと推定する。

土坑の性格については、出土状況図の充実とその集成を待ち検討していくことが必要である。

２．遺物について

１．縄文土器について

（１）中期後葉深鉢

平縁でＪ字状に凹線が下垂する。縄文はＬＲである。加曽利Ｅ４併行期と考えている。

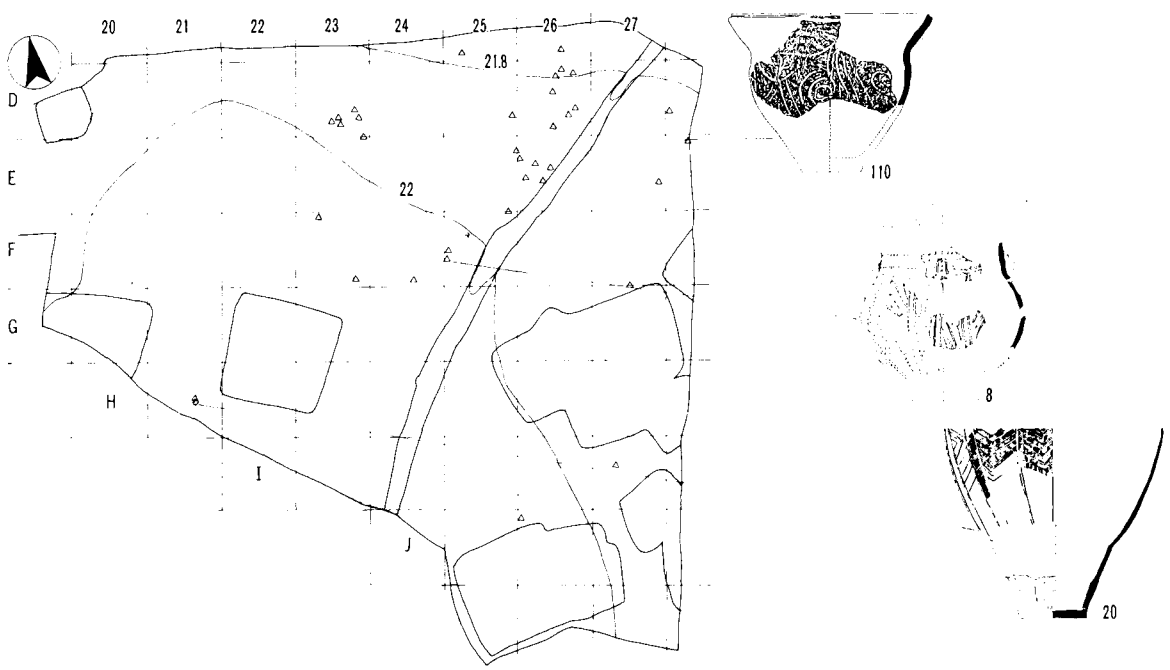
（２）中期末葉土器について

深鉢には、波状口縁で沈線で２重に楕円区画する深鉢（１）があり、北白川Ｃ式Ａ類の模様が沈線化したものと考えている。東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８（44）口縁部を欠くが、やはり東庄内ＳＢ８併行の土器である。また連弧文を持つ醍醐遺跡、咲畑遺跡にみられる深鉢で北白川Ｃ式Ａ類とみられる土器片（３）・（４）もみられる。北白川Ｃ式Ｃ類には、（21）・（22）がある。

壺には、縦位隆帯で区画された中に矢羽根状沈線文を施す頸部に橋状把手がつく。これは、形態的に東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８出土壺（58）に類似する。これらの土器群は、三重県南勢地方における、北白川Ｃ式３期併行期の好資料であり、北勢地方の東庄内Ｂ遺跡ＳＢ８とも併行すると考えられよう。東庄内Ｂとともに南勢地方における当遺跡中期末葉土器群も加曽利式的な要素を含んでいる。

（３）中期末葉～後期初期の土器群

中期最終末とされる有段口縁を持つ土器群を一括した。沈線で楕円文を区画しＬＲ縄文を施す（24）、有段部に横位矢羽根状沈線をめぐる（25・28）、有段で沈線による区画を持つ（26・27・29・31）、有段部に横方向沈線にＬＲ縄文を施すもの（30）、無段の中にも、縄文を施す（32・33）、横位矢羽根状沈線を持つ（34）、横位沈線を持つもの、林ノ峰Ｇ層に類例をみる凸形放物線状の凹弧文を持つ（44）等がある。今後良好な一括資料・分層資料が出土すれば細分が可能となろう。



第７－28図　縄文土器出土分布図

（4）後期初頭の土器群

中津併行期のものを一括した。この時期のものは少量である。磨消縄文の代りに条線を施す（105）、ＬＲ縄文を施す（109）、壺（106）がある。条線をもつ平縁の深鉢（61）がある。

（5）後期前葉の土器群

北白川上層式土器と併行する。渦文を持つもの（110）・（113）、波状口縁（114）、縁帯部に円孤文を持つもの（115）、注口土器（117）がある。

（6）後期後葉土器

２点のみ出土した。元住吉山期のものである。

（7）晩期末葉土器

突帯文をもつもので松阪西部域で、他に前沖遺跡Ｂ地区、小野遺跡で出土している。

2．弥生時代の中期土器

（1）ＳＢ１出土遺物

円形竪穴住居出土遺物である。壺Ａ－ｂ類（139）、壺Ａ－ｃ類（140）、受口状口縁壺Ｂ類（141）、壺Ｃ（138）、甕Ｂ類（146～148）が出土した。壺Ｃ（138）の口縁部が上下に肥厚すること、突起が大きいこと、ハケ調整が細いこと、また受口状口縁壺（141）の口縁部側縁斜格子文を持つこと等から、中期中葉段階と考えた。なおこのＳＢ１出土土器には、凹線文を伴わない。甕は、大和型甕Ｂ類である。唐古遺跡ＳＫ105上層出土遺物に併行する。三重県下では、中期中葉も古い段階とされる花ノ木遺跡ＳＢ14より新しい。

（2）ＳＢ２出土遺物

壺Ｃ（151）、壺Ｄ（150）、受口状口縁壺Ｄ類（152）、口縁部が「く」の字に屈曲する甕Ｅ類（153）が出土した、方形竪穴住居出土遺物である。受口状口縁壺の形状から、凹線文初現期と考えられる。唐古遺跡ＳＫ105併行期と考えられる。

石製品、石庖丁は、半月形直線刃（248・249）、半月刃（247）がある。（247）は、刃を二次的に加工している可能性もある。いずれも納所遺跡に類例がある。

3．古墳時代前期の遺物について

（1）ＳＢ28出土遺物

高杯、手焙型土器、貝殻刺突を持つ壺、鋸歯文を持つ壺、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類が出土した。これらは庄内併行期であり、東海編年廻間１式に併行する。

三重県内では、蔵持・黒田遺跡１区ＳＢ１、中楽山遺跡ＳＸ１と同時期である。

（2）ＳＢ34出土遺跡

床面の良好な資料である。壺Ａ、壺Ｂ、直口壺、小型丸型壺Ａ類、Ｂ類、高杯Ａ、Ｂ類、Ｓ字状口縁台付甕Ｂ類が出土した。これらは、伊勢湾岸西部、南伊勢地方の典型であり、大畑ＳＸ１に併行する当該地方の布留古段階のものである。東海編年廻間Ⅱ式の新段階に相当する。深長古墳二重口縁壺の時期に先行する。

4．古墳時代後期の遺物

（1）ＳＢ35・36出土遺物

須恵器杯、台付杯、土師器甕が出土した。これらの遺物は、ＴＫ10併行期と考えられる。薄手でカキ目を残すのは、この地方の特色であろう。

5．飛鳥～奈良時代の遺物

（1）ＳＢ40出土遺物

甕・長胴甕・杯が出土した。平城Ⅲに併行する土器群であり、斎宮編年のＳＫ1098併行期である。松阪西部地区では、前沖遺跡Ｃ地区ＳＤ39に先行し、榎長遺跡ＳＢ23出土遺物に後出する。

（2）瓦製紡錘車　凹面叩目・凸面格目タタキの平瓦を転用したものである。伊勢寺廃寺に格子タタキの瓦がありそれとの関連が考えられよう。

6．平安時代の遺物

（1）土馬　頸部が中空になる。目、鼻、口は、ヘラ状工具の刺突により描かれる。平安時代前半期のものか。

（2）ＳＤ42・ＳＥ19出土遺物

平安時代末葉の資料である。山茶椀はいずれも高台が高く、口縁部が外反する。藤澤編年Ⅱ－３段階併行期である。

7．江戸時代の遺物

包含層ではあるが、Ａ地区北端で集中して出土した。肥前産磁器、瀬戸、美濃産擂鉢、常滑産壺があり、19世紀前半の好資料である。

（増田安生）

（註）

1 河北秀夫　新田洋　「平林古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　三重県教育委員会　1987

2 田阪仁・宮田勝功　「横尾墳墓群」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』　三重県教育委員会　1986

3 田村陽一　「藪ノ下遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　三重県教育委員会　1987

4 野原宏司　「新田遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』　三重県教育委員会　1986

5 河瀬信幸　増田安生　『前沖遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財調査報告74　三重県教育委員会　1986

6 下村登良男他　『松阪市史　第2巻　史料篇考古』　P61～64　松阪市教育委員会　1978

7 6前掲書　P121～125

8 伊藤克幸　「貝塚遺跡」『昭和51年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1977

9 前川嘉宏　『粥鍋遺跡発掘調査報告』　松阪市教育委員会　1987年

10 下村登良男　『八重田古墳群発掘調査報告』　松阪市教育委員会　1981

11 2前掲書

12 新田洋　「天神山古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　三重県教育委員会　1987

13 吉水康夫　「垣内田遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　三重県教育委員会　1987

14 河北秀美　「榎長遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』　三重県教育委員会　1987

15 6前掲書　P54～57

16 河北秀美・服部久志・浅尾悟・宮田勝功　「曲遺跡」『昭和59年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　P47～92　三重県教育委員会　1985

17 『三重県埋蔵文化財年報17』　三重県教育委員会　1987

18 『三重県埋蔵文化財年報16』　三重県教育委員会　1986

Ⅷ. 松阪市野村町　赤城（あかじょう）遺跡

1．位置と地形

赤城遺跡は、堀坂山山麓にひろがる扇状地の扇端部に位置する。微地形的には、岩内川右岸の河岸段丘上に立地する。行政上は、松阪市野村町字赤城に位置する。現況畑地で標高21m前後を測る。当遺跡は、杉垣内遺跡・深長古墳の西北約800mに位置し、南隣には、奈良～平安時代の集落跡である前沖遺跡[1]がある。堀坂川と岩内川に挟まれる扇状地には、小丘陵と谷筋が八手状に交互に凹凸を繰り返しており、丘陵面は、良好な居住空間を提供している。前沖遺跡もこうした中の１つである。また岩内川左岸の出口遺跡においても、奈良・平安時代の遺物が表採されている[2]。

2．遺　　構

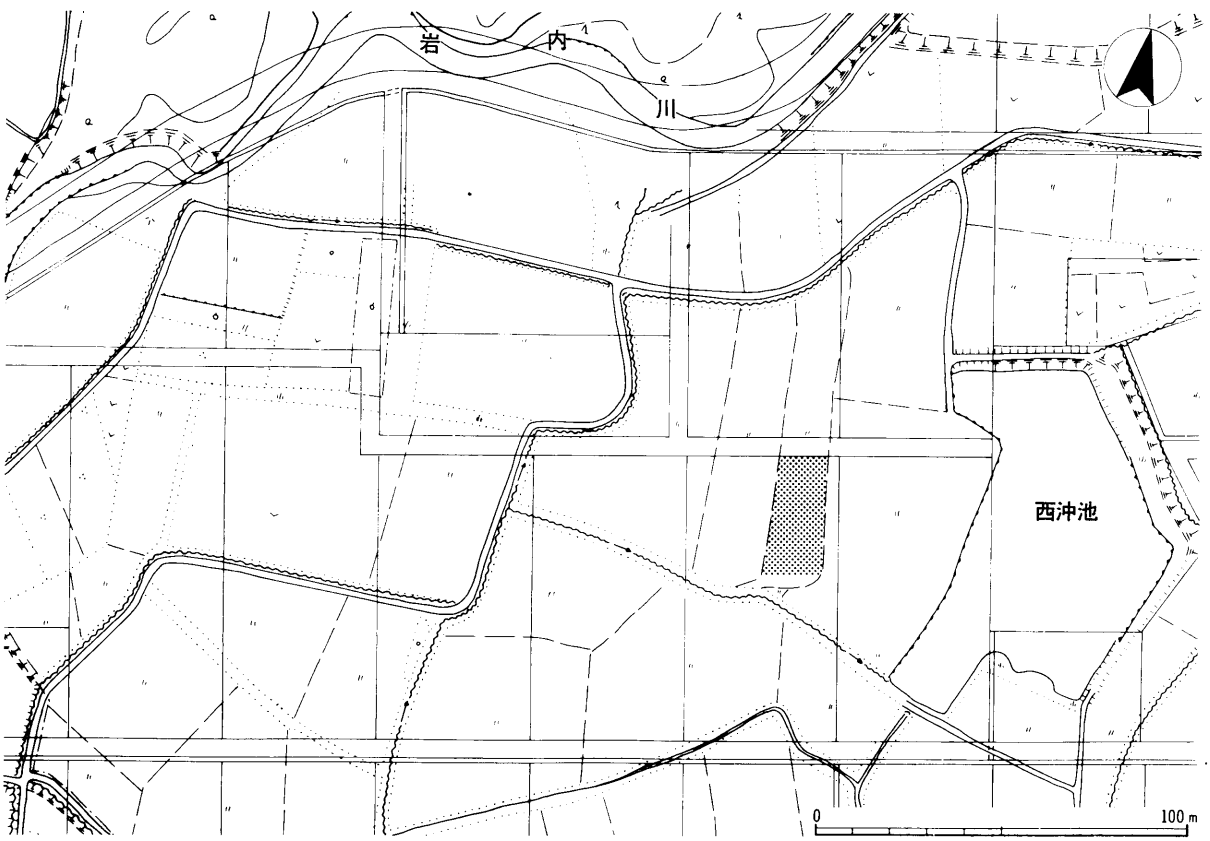
基本的層序は、Ⅰ層耕作土、Ⅱ層暗茶褐色土（包含層）、Ⅲ層黒褐色土（遺構検出面）である。

遺構には、平安時代初期の溝ＳＤ１、平安時代前半の掘立柱建物ＳＢ２～ＳＢ５、溝ＳＤ６・７、その他のpit群がある。

１．平安時代初期

ＳＤ１　発掘区中央を北東へ流れる。幅1.0m・残存深さ0.4mである。埋土は、暗茶褐色土である。

２．平安時代前半



第８－１図　遺跡地形図（１：2,000）

1．掘立柱建物

ＳＢ２　発掘区中央東側で検出された、桁行２間以上で、梁行２間である。桁行の柱間は、西から2.2ｍ＋2.2ｍである。梁間は、2.4ｍの等間である。

ＳＢ３　北西端において検出された。南北２間以上、東西２間以上の掘立柱建物である。柱間は1.8ｍである。

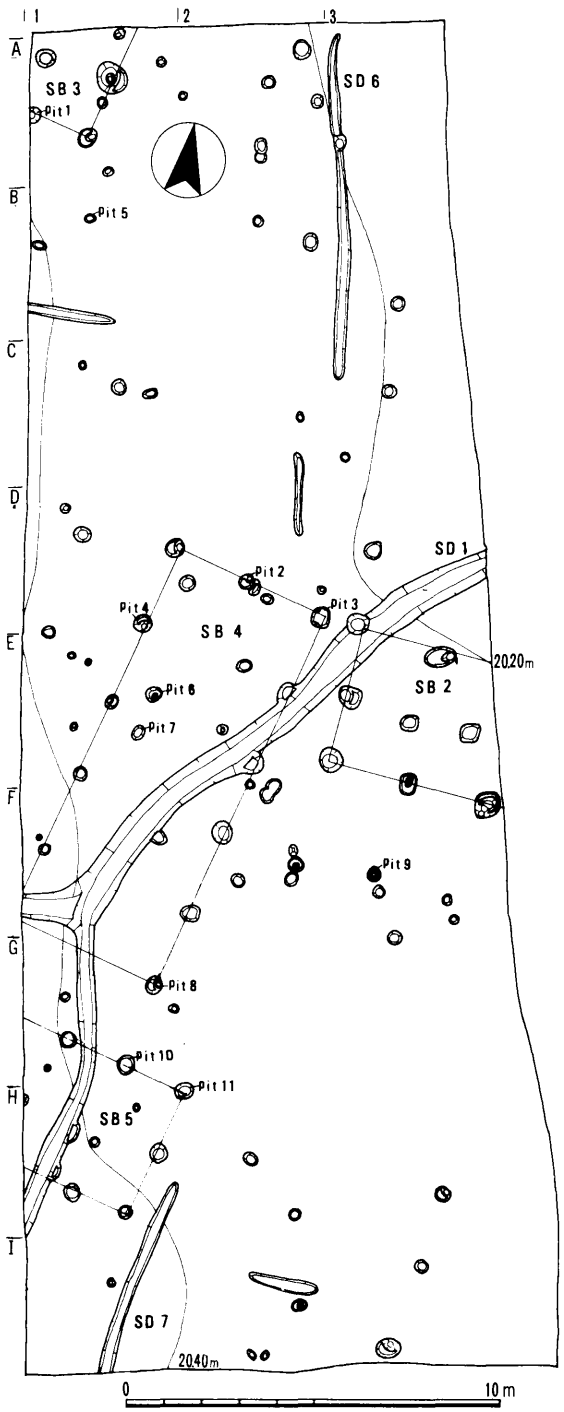
ＳＢ４　桁行５間×梁行２間の東西棟である。柱間は、桁行2.1ｍ、梁間2.1ｍの等間である。南北10.5ｍ×東西4.2ｍを測る。ＳＤ１の埋土を切って作られている。

ＳＢ５　桁行３間以上×梁行２間の東西棟である。柱間は、桁行1.8ｍ×梁行1.8ｍの等間である。

２．溝

ＳＤ６　発掘区北東部を南北に流れる。検出長９ｍ、幅40cmである。

ＳＤ７　ＳＢ５の棟方向に平行に南北方向に流れる。検出長5.4ｍ、幅40cmである。



第８－２図　遺構平面図（１：200）

3．遺　　物

遺物は、平安時代前期が主体である。他に平安時代後期の灰釉陶器、平安時代末期の山茶椀等がある。

１．平安時代初期

ＳＤ１

土師器皿（１）　口径17.2cm、器高2.0cm。橙褐色を呈し、口縁部をヨコナデする。

土師器甑（２）　口径28.2cm。淡褐色。体部外面タテハケ。内面にヨコハケを施す。

２．平安時代前半

ＳＢ３

土師器甕（７）　口径20.6cm。口縁部は、外反した後その端部が上方に引き出される。淡橙褐色である。

ＳＢ４

土師器杯（３・４）　３は、口径13.4cm、器高2.4cm。４は、口径15.8cm、器高2.6cm。ともに口縁部が外反するが、４はゆるやかである。橙褐色を呈し、口縁部をヨコナデする。

土師器甕（５）　口径18.4cm。口縁部が上方に立ち上がる。口縁部ヨコナデ。体部外面タテハケ、内面ヨコハケ。濁橙褐色である。

製塩土器（６）　口径17.0cm。薄手で、口縁端部が丸みを持つ。体部外面に指圧痕を持つ。

ＳＢ５

土師器甕（９）　口径29.0cm。厚手で口縁端部が斜め上方に引き出され先細る。

土師器杯（８）　口径13.2cm。やや厚手で口縁部が

外反する。濁褐色を呈する。

Pit 5

土師器杯（10）　口径14.0cm。薄手で口縁部が外反しつつ斜め上方に立ち上がる。橙褐色を呈する。

Pit 7

土師器杯（11）　口径13.0cm。口縁部が先細る。口縁部ヨコナデ。体部外面に指圧痕を残す。橙褐色である。

Pit 9

土師器皿（12）　口径15.6cm。口縁部が斜め上方に立ち上がる。濁褐色を呈する。

土師器甕（13）　口径15.6cm。薄手で口縁部が上方に引き出される。淡橙褐色を呈する。

Pit 6

土師器高杯（14）　口径27.0cm。扁平な杯部は、その外面をハケ調整する。淡赤褐色を呈する。

土師器甕（15）　口縁部が、「く」の字状に外反し端部が上方に引き出される。口縁部は、ハケ調整の後ヨコナデされる。体部外面をタテ方向に調整し、内面をヨコ方向にハケ調整している。

3．包含層の遺物

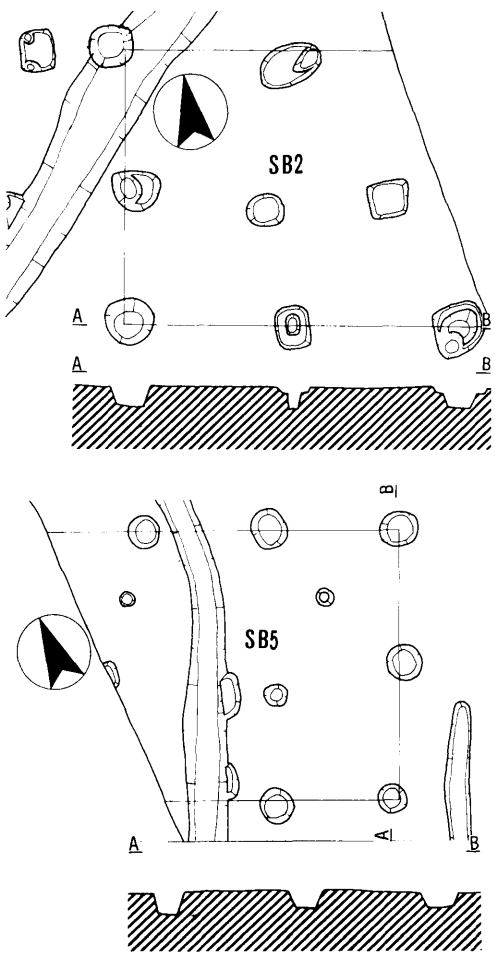
包含層出土の遺物の多くは、平安時代前半を中心とするものであるが、少量ながら古墳時代以降の遺物も含まれる。以下、土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器、山茶椀等について触れたい。

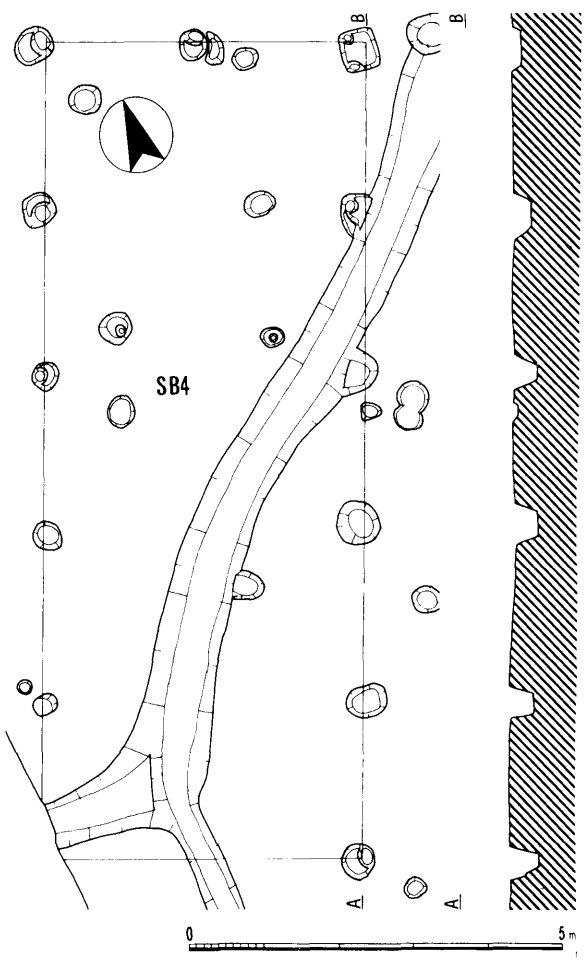
1．土師器

杯（16～19）　16は、やや厚手で口縁部が外反する。口径15.6cm。口縁部をヨコナデする。17は、口縁部がゆるやかに外反する。口径15.0cm。橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。18は、薄手で口縁部が外反する。口径15.2cm。口縁部ヨコナデ。橙褐色を呈する。19は、薄手で口縁部の外反が強い。口径15.0cm。橙褐色を呈する。

椀（21）　高台の断面形が三角形になる。高台部は、はりつけである。赤褐色を呈する。

皿（20・22・23）　20は、口縁部が外反するやや小ぶりの皿である。口径13.0cm。口縁部ヨコナデ。橙



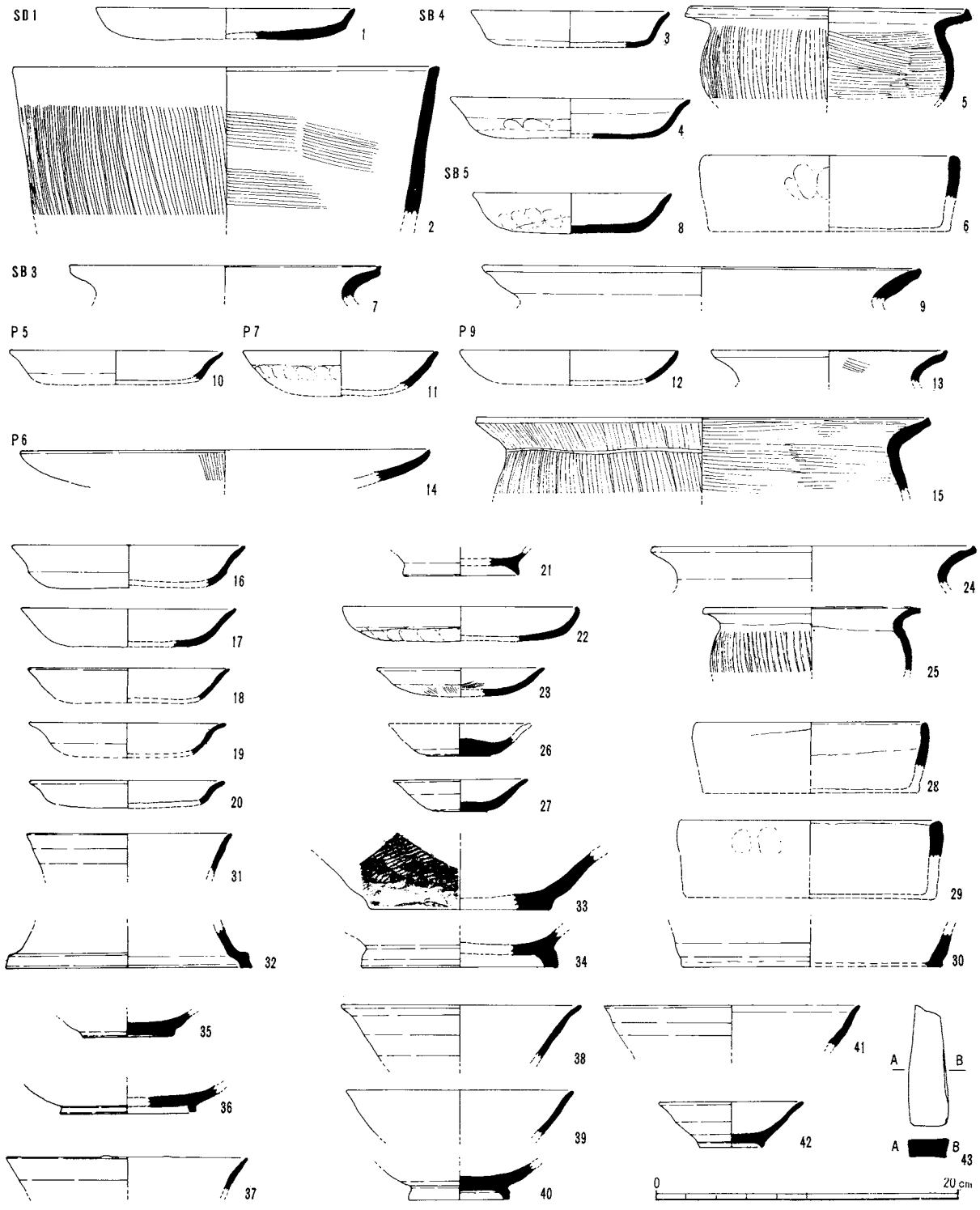


第8－3図　SB2・4・5実測図（1：100）

褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。22は、口縁部をヨコナデする厚手の皿である。口縁端部はわずかに内側につまみ出される。口径16.0cm。底部外面乱ナデ。橙褐色を呈する。23は、底部が丸みを帯び、口縁部がやや外反する小皿である。口径11.2cm。淡褐色を呈し、胎土・焼成は良好。

甕（24・25）　24は、大型で口縁部が上方につまみ出されるものである。口径21.4cm。口縁部をヨコナデする。橙褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。25は、小型の甕である。口径14.4cm。口縁部がやや上方に引き出される。口縁部ヨコナデ、体部外面をタテ方向にハケ調整する。

製塩土器（28・29・39）　28は、薄手のものである。口径15.0cm。濃橙褐色を呈し、胎土にチャート等の砂粒を多く含む。焼成は良好である。29は、器壁がやや厚い。口径は、19.0cmである。口縁部をヨコナ



第８－４図　遺物実測図（１：４）

デする。濃赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。30は、平底の底部のみ残存する。底部外面に指圧痕が残る。橙褐色を呈し、胎土は並、焼成は良好である。

ロクロ土師器皿（26・27）　平底で、底部外面に糸切痕を残すものである。26は、底径4.4cmで、底部の器壁が厚い。淡橙褐色を呈し、胎土は良好で、石英・長英、赤色土を含む。焼成は良好である。27は、平底でやや器壁が薄い。口縁部は、外反する。口縁部ヨコナデである。

2．須恵器

杯B（31）　高台を持つ杯を杯Bとする。口縁部のみ残存する。薄手で口縁部が外反する。淡灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

器台（32）　脚部のみ残存する。脚部の接地面が角ばる。明灰色を呈し、胎土は良である。

甕（33）　底部平底である。体部外面にタタキがみられる。青灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

長頸壺（34）　底部のみ残存。底径13.0cmである。高台部が外反する。底部はヘラケズリされる。灰色を呈し、胎土は良好である。

3．緑釉・灰釉陶器

緑釉陶器椀（35）　平底で、底径5.9cmである。淡黄緑色を呈し、胎土は良好、焼成も良い。

灰釉陶器椀（36）　高台部が角ばるもので、底径9cmを測る。糸切痕をナデ消している。灰白色を呈する。釉の色調は、灰緑色である。

4．山茶椀・山皿

山茶椀（37～41）　37は、口径16.0cm。口縁部をわずかにひねり輪花としている。薄手で口縁部が外反する。明灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。38は、口径16.0cm。口縁部が外反する。灰色を呈し、胎土・焼成ともに良である。39は、口径15.0cm。口縁部がやや外反し、先細る。灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。40は、底径7.0cm。山茶椀底部で、高台が外傾する。底部外面に糸切痕が残る。41は、口径17.0cm。口縁部がやや外反し、先細る。明灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

山皿（42）　口径9.5cm。高台部が断面形三角形をなし、口縁部が外反する。明灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

5．石製品

砥石（43）　黒灰色の泥岩製である。断面長方形である。残存長7.8cm・最大幅2.7cm・厚さ1.1cmである。

4．結　　語

1．遺構について

当遺跡の掘立柱建物群は、5間×2間の南北棟であるＳＢ4を代表例に、部分的に発掘されたＳＢ2・ＳＢ3・ＳＢ5の4棟である。いずれも平安時代前期のものと考えられる。ＳＢ4とＳＢ5は、ＳＢ5の東辺が一間分東へ出ているものの柱の並行関係があり、同時期の同一規格の平面プランであろう。松阪西部地域において、ＳＢ4のような5間×2間の掘立柱建物は、曲町曲Ａ遺跡ＳＢ28がある[3]。この建物も5間以上×2間の南北棟であり、他の東西棟の建物とセットになっている。また前沖遺跡Ｃ地区では、奈良時代末～平安時代初期の5間×3間の東西棟を中心にした掘立柱建物の群構成がみられる。そして若干の時期差はあるものの、40～50m離れて3間×2間、4間×2間などの掘立柱建物や屋外のカマド空間と思われる土坑等が検出されている。このような周辺の類例と比較すると、ＳＢ4の同規模の東西棟とセットをなし、「L」字状あるいは「コ」の字状の配置が想定できよう。

2．遺物について

遺物では、切り合いからもＳＤ1が古く、土師器皿、甑は平安時代初期のものであろう。前沖遺跡ＳＤ39より後出する要素を持つ。

ＳＢ4からは、製塩土器・土師器甕・杯等が出土している。これらは、斎宮編年ＳＫ1045併行期であり、平安時代前期に位置づく[4]。

製塩土器は、4片出土しているが、いずれも小片である。

緑釉陶器椀は、平底のものである。これは、斎宮においても少量しか出土していないタイプであり、京都方面のものかと考えている。

（増田安生）

（註）

1　河瀬信幸・増田安生　『前沖遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1986　円面硯・掘立柱建物の柱穴に多数製塩土器出土。コウヤマキ材柱根等柱材多数残存。

2　昭和62年度圃場整備事業地であり、試掘を本年度実施し、土坑・柱穴を確認。平安時代前期中心の遺跡と考えられる。

3　河北秀実・服部久士・浅尾悟・宮田勝功　「曲遺跡」　『昭和59年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1985

4　『三重県斎宮跡調査事務所年報　1984』　三重県教育委員会　1985

Ⅸ. 名張市赤目町　中戸（なかと）遺跡

1．位置と環境

中戸遺跡（1）・下垣内遺跡（2）は、名張盆地の南西部に位置し、行政的には、名張市赤目町相楽地内にはいる。盆地南部には、室生山中に源を発する宇陀川が伊賀大断層に沿って北東に緩やかに流れ、名張市街において、西流する名張川と合流し北へと向かう。そして、奈良県山添村をぬけ、木津川へと続く。

宇陀川には、滝川、釜石川などの小河川がいくつも流れ込み、南西部に広がる第四紀洪積世の段丘を複雑に分割し、尾根状に細くのびた段丘とそれに挟まれた扇状地状の谷合地形を作り出している。段丘は、礫の風化状態および段丘の高度などから見て、高位・中位・低位段丘と分類され、下垣内遺跡は水田面との比高15m、標高218mの中位段丘上に、また、中戸遺跡は、低位段丘端部に接する低地に営まれる。

近年、この名張盆地南部は、圃場整備事業や宅地開発により、発掘調査が数多く行われ多くの考古学的な知見が得られている。

縄文時代では、前山丘陵上の白早稲遺跡（3）から草創期の石器、有舌尖頭器が出土し、名張市内最古の遺物となっている。早期・前期では、檀・柏原

第9－1図　遺跡位置図（1：50,000）

遺跡（４）から、大川式に類似する市松文のネガティブな押形文土器が出土し、砥口遺跡（５）からは凹基無茎式の長脚が、そのほか加添遺跡（６）・貝増遺跡（７）などからもこの時期の土器が採集されている。

中期に入ると遺跡の数は多くなる。特に、滝川沿いの洪積段丘上では場所を移動しながら集落が営まれていたようである。それは、前述の檀・柏原遺跡が早期に始まり中期まで継続し、これに引き続いて滝川左岸の辻垣内遺跡（８）が中期から後期にかけての遺物を多数出土していることからもわかる①。

後期では、沢代遺跡（９）、下川原遺跡（10）などのように従来、集落の立地が困難であった低地にも、遺跡が認められるようになる。下川原遺跡では、竪穴住居が検出され、後期前半の一括性の高い土器群として把握されている。また、北西約10kmの名張川下流域には、後期前葉の土器の変遷を考える上で貴重な資料を提供している奈良県広瀬遺跡②・早期の指標となっている大川遺跡などが位置している。

晩期末の遺跡としては、滝野氏城跡（11）・宇陀川左岸の辻堂遺跡（12）・丘陵の奥まった所に営まれた土山遺跡（13）などから、条痕系の土器が弥生時代前期の土器と混在して出土している。しかし、その在り方は遺跡によって異なり、縄文時代から弥生時代の移行の様相については、土山遺跡で縄文晩期長原式併行の土器を主体として弥生前期後半の土器が伴うことが確認されているにとどまる③。

弥生時代中期では、円形竪穴住居を検出した辻垣内遺跡や御所垣内遺跡（14）をはじめ、浦遺跡（15）・川尻遺跡（16）などからも多くの遺物を出土している。前出の下川原遺跡からは、４棟の竪穴住居が検出され、その知見から、住居跡の平面形が円形から方形へと移行する時期が弥生中期後半であることも明らかにされている④。

後期にはいると、前半では、わずかに観音寺遺跡（17）が知られるだけで、後期後半から古式土師器に続く遺跡が急激に増加し大規模となる。井出城屋敷遺跡（18）・東野遺跡（19）などからおびただしい量の土器が出土しその編年的位置付けも精力的に試みられている⑤。

古墳時代にはいっても集落の拡大は続くが、古墳の築造は前・中期を通じて見られず、盆地北東部の美旗古墳群の傘下の中での集団の在り方を大きく反映し、盆地南部の古墳の築造は後期の群集墳盛行期をまたなくてはならない。この中にあって、横穴式石室をもつ鹿高神社１号墳（20）や琴平山古墳（21）などの前方後円墳はその盟主的なものと考えられる。

飛鳥・奈良時代の遺跡は、中村の観音寺遺跡・浦遺跡、夏見の鴻之巣遺跡（22）、蔵持の丈間谷遺跡（23）などの官衛的な性格の強い建物群をもつ遺跡が古代の主要道に沿って所在している。また、名張川と宇陀川の合流地点を見下ろす丘陵上には、白鳳時代創建の夏見廃寺があり、多数の専仏が出土している。

平安時代の遺跡については明らかなものはないが、黒色土器が散布するものも多い。

次に、名張の中世については、ここが長く東大寺領黒田庄という荘園であったことから、その胎動は文献史学の立場からあきらかにされている。黒田庄の歴史については、他書に詳しいが、承安４年（1174年）後白河院庁下文により名張郡の一円不輸寺領化が完成し、同時にいわゆる黒田の悪党の活動の舞台もうまれたのである。そして南北朝時代以後、在地領主層の台頭に伴い寺領支配は衰え、伊賀独特の国衆による自主的な在地支配が織田信長の伊賀侵攻まで続いて行く。

（仁保晋作）

（註）
① 門田了三　『下川原遺跡』　名張市遺跡調査会　1986
② 松田真一　「広瀬遺跡発掘調査概報」　奈良県立橿原考古学研究所　1982
③ 水口昌也・門田了三「土山遺跡」『名張市遺跡調査概要Ⅲ』1979
④ 註①に同じ
⑤ 門田了三　「前山遺跡群における弥生式土器から土師器への一考察」『名張市遺跡調査概要Ⅳ』　1979
水口昌也・門田了三「蔵持黒田遺跡」名張市遺跡調査会 1978
中村信裕「上東野遺跡」『昭和57年度農業基盤整備地域調査報告』三重県教育委員会　1989
仁保晋作「観音寺遺跡」『昭和58年度農業基盤整備地域調査報告』三重県教育委員会　1985

第９－２図　中戸遺跡・下垣内遺跡地形図（１：5,000）

2．遺　　構

土層の基本的層序は、上から第Ⅰ層：耕作土（20～25cm）、第Ⅱ層：灰褐色砂質土、第Ⅲ層：茶灰色砂質土、第Ⅳ層：茶褐色砂質土、第Ⅴ層：茶褐色礫層、第Ⅵ層：黄灰色粘質土（粘性が強く、地山と考えられる。）である。

地山までの深さは、最も地形の高い東端で25cmと浅く、西に向かって暫時深くなり、西端では、110cmとゆるやかな傾斜をもつ。

各層の堆積状況を見ると、Ⅰ・Ⅱ層は地山の形状にあわせて遺跡全体に広がるが、Ⅲ層は西端では認められない。しかし、これとは逆にⅣ・Ⅴ層は、遺跡中央部では認められず西側の斜面に深く堆積し、とくにⅣ層は40～50cmと極めて厚い。

遺物は、いずれの層にも包含されており、Ⅳ・Ⅴ両層は、弥生土器を含まない縄文時代の包含層である。しかし、後述するように、この両層を土器形式から分層することは出来なかった。遺構は、Ⅲ層除去後に平安時代と弥生時代の遺構を、そしてⅤ層除去後地山直上で縄文時代の遺構を検出した。

検出された遺構としは、縄文時代の竪穴住居・土坑・配石、弥生時代の方形周溝墓、平安時代の掘立柱建物の3時期のものがある。

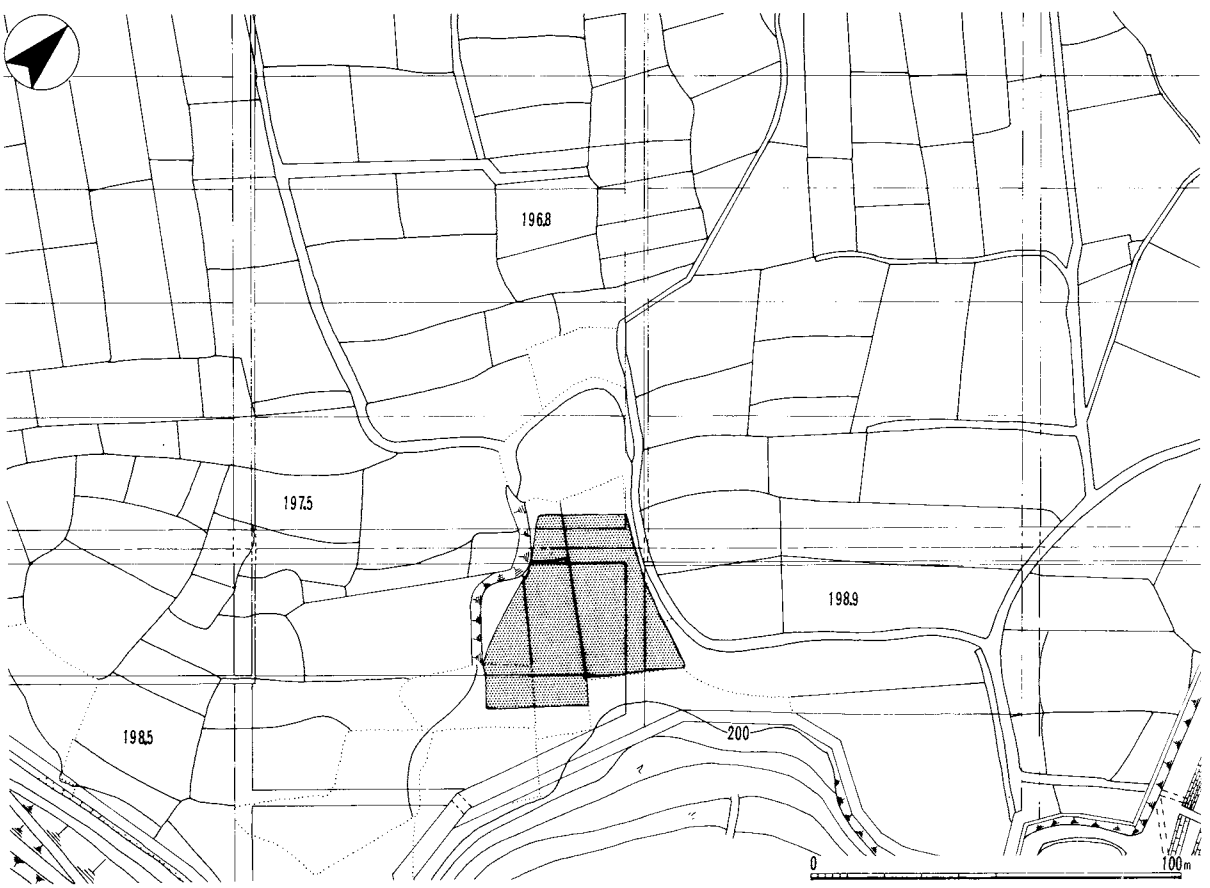
以下に遺構番号を付した主なものについて概述していく。

1．縄文時代

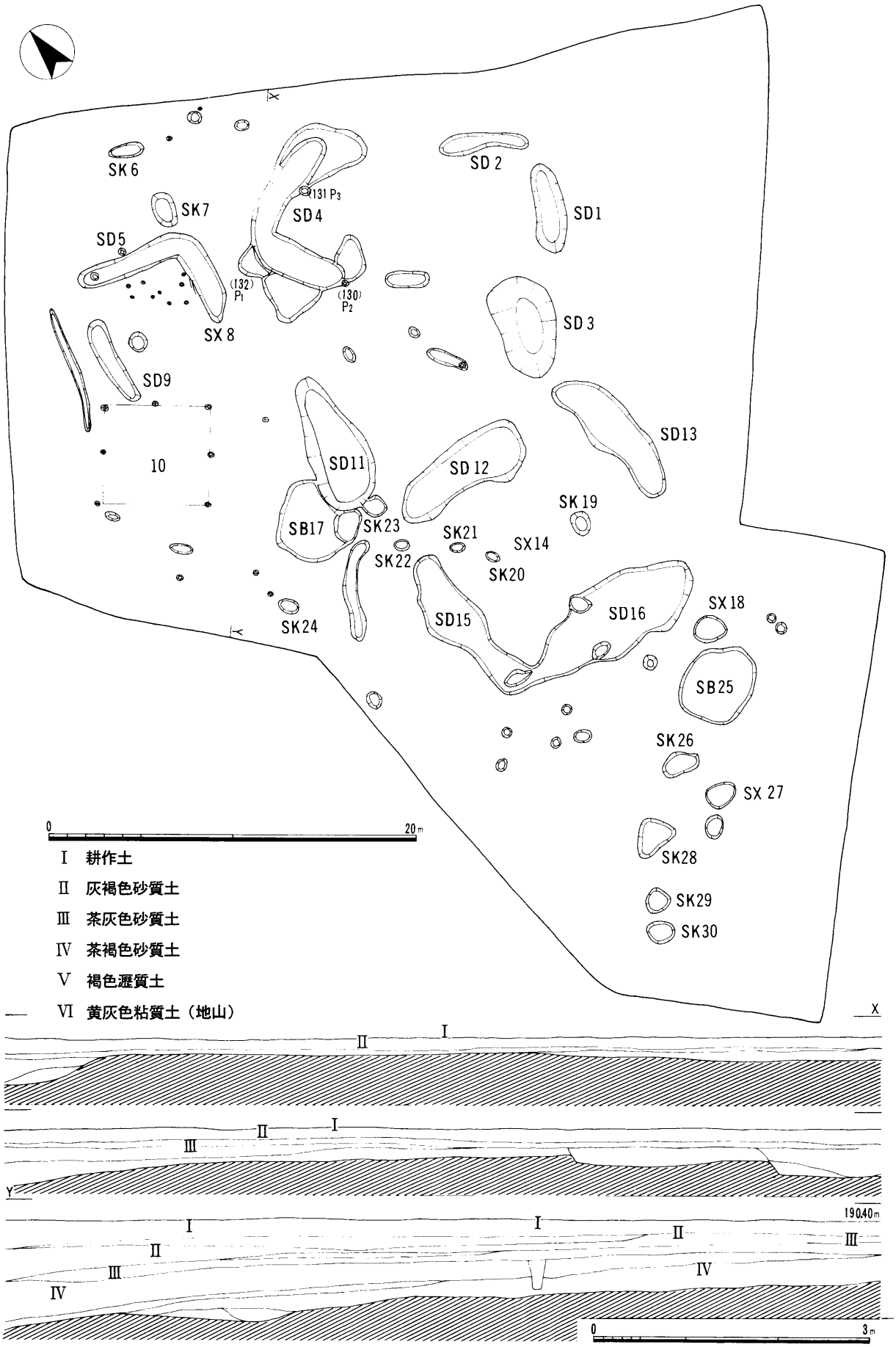
1．竪穴住居

ＳＢ25　平面形は不整円形を呈し、長径5.6m・短径5.2mを測る。竪穴内には、炉・柱穴などの付属施設は認められなかったが、北西側に集中して、3つの土器群が出土した。いずれも、住居外の土坑群と同様に、径50～100cmの楕円坑を掘って置かれたと考えられ、とくに、東の壁近くから出土したもの（4）は、口縁部を上に向け、上半を欠損するが低部から体部にかけて現状を留どめていた。

遺物は、後期前葉を中心とするものである。また、



第9－3図　発掘調査区位置図（1：2,000）



第9－4図　遺構平面図（1：300）・土層断面図（1：60）

この竪穴住居の回りには、配石遺構としたＳＸ18・ＳＸ27、すり石を伴うＳＫ26を初めとして、多くの土坑が集中する。

ＳＢ17　径4.0m前後の円形を呈する。遺物をまったく含まず、住居とするには疑問の残るところである。

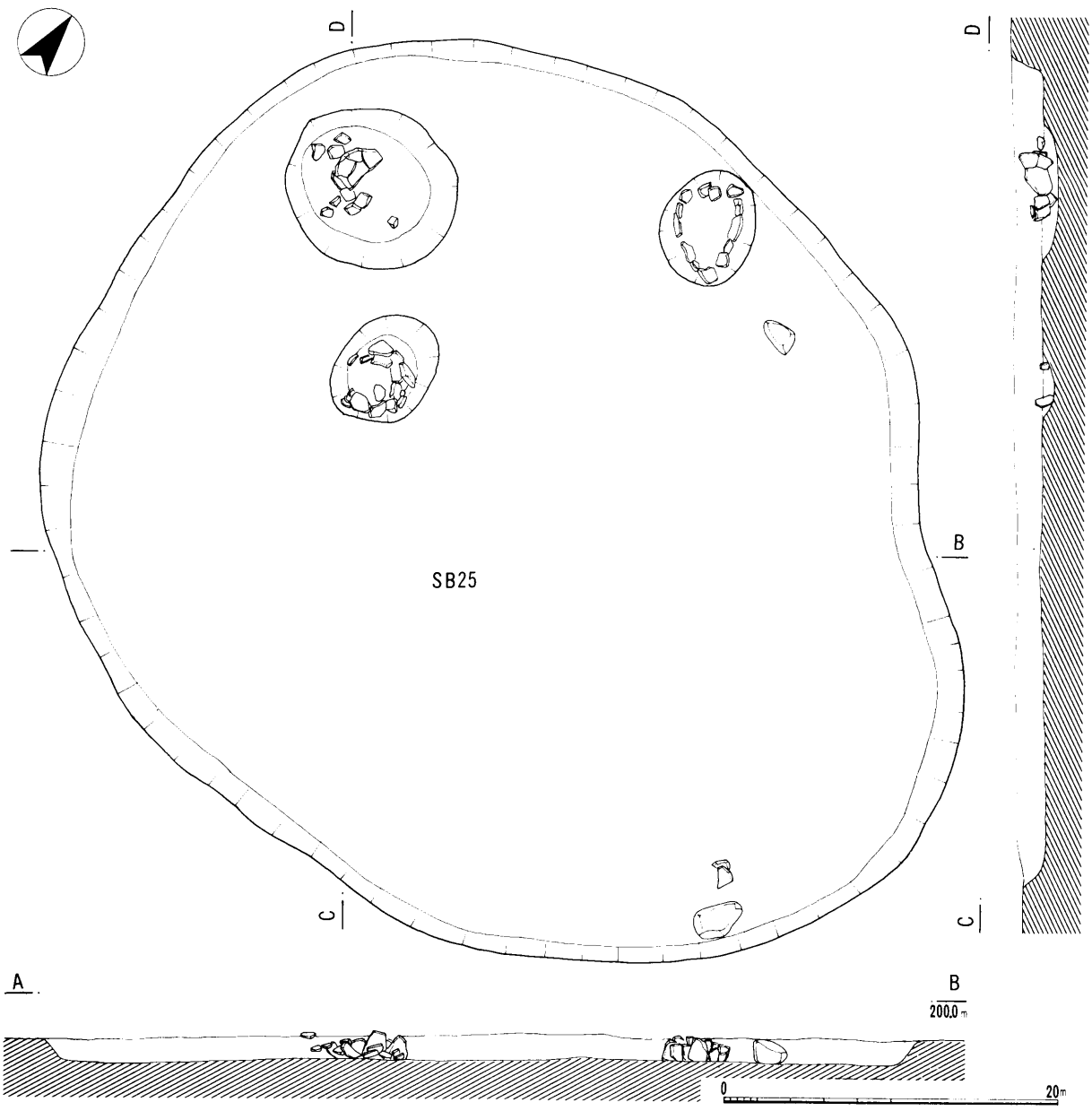
2．土坑

発掘区全域で、とくにＳＢ25を中心としたところで、径１m前後の土坑を多数検出した。そのうち、遺構番号を付したものについて述べていく。

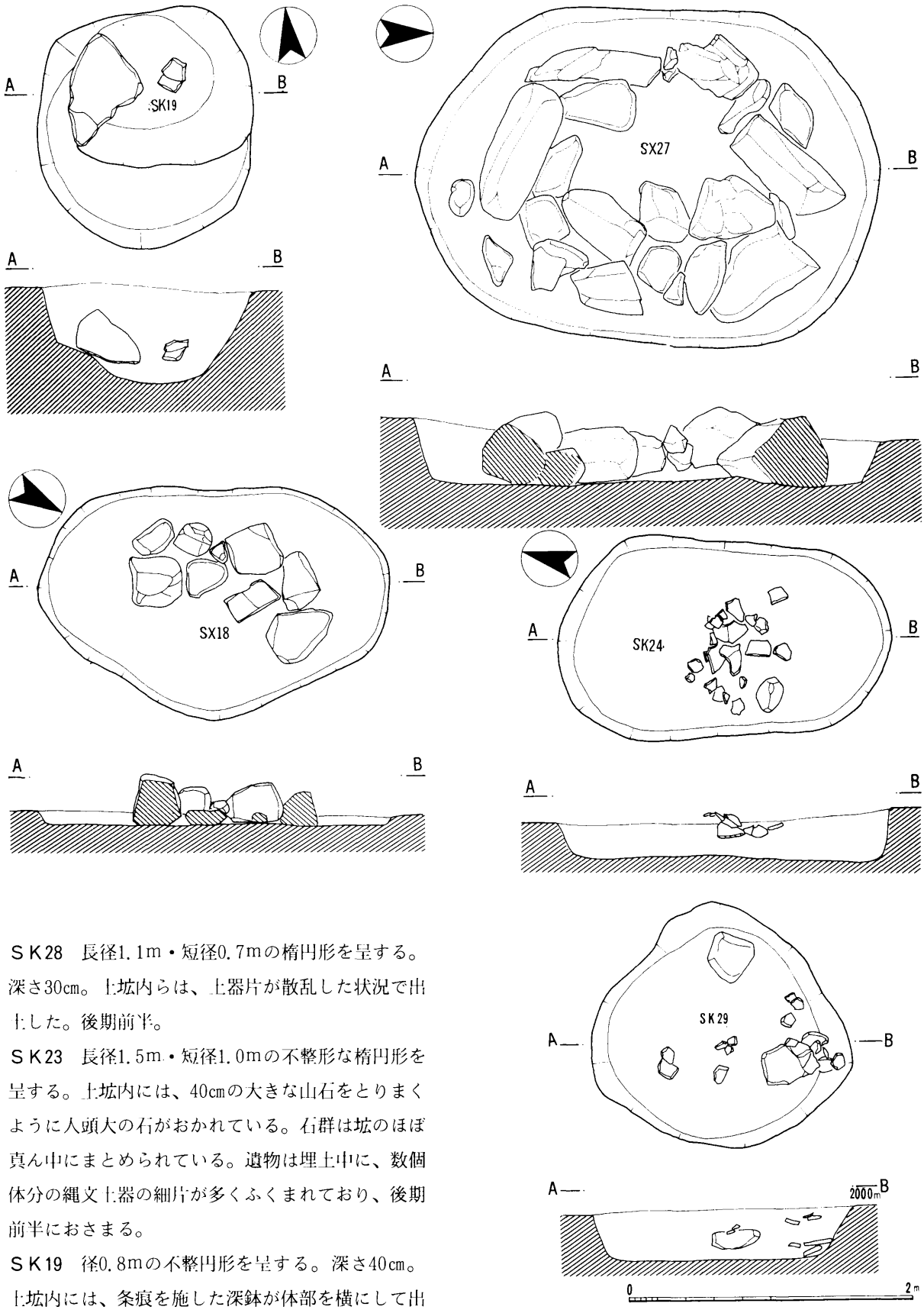
ＳＫ29　径0.9mの不整形な円形を呈する。深さ35cmで底は平らである。埋土には、茶褐色の砂質土がはいる。土坑内には、人頭大の河原石が１つと縄文土器片が底から遊離し散乱していた。土器は有文深鉢・浅鉢など後期前葉に属するもので、同一時期、同一個体ではない。しかし、他の土坑に比べて福田Ｋ２式（古）の土器を多く含む。

ＳＫ26　長径0.9m・短径0.6mの楕円形を呈する。深さ30cm。土坑内のほぼ中央で底から遊離しているが、人頭大の河原石を内包するように有文深鉢が、また底に接して条痕を施した深鉢が出土した。他の土坑に比べて土器の量が多い。縄文後期前葉を中心としたものである。

ＳＫ22　長径0.9m・短径0.7mの楕円形を呈する。深さ30cm。土坑底に接して条痕を施した縄文土器の口縁が出土した。大半を欠損するが同一個体と考えられる。また、埋土には、人頭大の山石が含まれている。後期前半。



第９－５図　SB25実測図（１：40）



第9－6図　SK 3 ・18・24・27・29実測図（1 ：40）

ＳＫ28　長径1.1m・短径0.7mの楕円形を呈する。深さ30cm。土坑内らは、土器片が散乱した状況で出土した。後期前半。

ＳＫ23　長径1.5m・短径1.0mの不整形な楕円形を呈する。土坑内には、40cmの大きな山石をとりまくように人頭大の石がおかれている。石群は坑のほぼ真ん中にまとめられている。遺物は埋土中に、数個体分の縄文土器の細片が多くふくまれており、後期前半におさまる。

ＳＫ19　径0.8mの不整円形を呈する。深さ40cm。土坑内には、条痕を施した深鉢が体部を横にして出土したが、大半を欠損する。後期前葉。

ＳＫ24　長径1.1m・短径0.7mの隅丸の方形を呈す

る。深さ15cmと浅い。土坑中央に集中して土器片が認められたが同一個体のものではなく、口縁に沈線の巡る有文の土器と、粗製深鉢が混在していた。後期初頭におさまる。

3．配石遺構

ＳＸ18　ＳＢ１の東壁より約1.0m離れた地点で検出された。長径1.2m・短径0.7m・深さ0.05mの浅い土坑の東半分に弧状を描いて人頭大の河原石を並べ、その中央に、摩耗痕が残り、すり石とも見られる２個の扁平な石を置いている。火を受けた痕跡は認められない。石材に交じって、縄文土器片が数点出土し、後期初頭～後期前葉に属する。

ＳＸ27　長径1.9m・短径1.2mのやや大きな土坑内に、20cm～40cmの河原石と扁平な山石とを楕円状に配している。石材は、ＳＸ18と同様に火を受けた痕跡は認められない。石材に交じって縄文土器がわずかに出土した。後期前葉のものでＳＢ１と同一時期に属する。

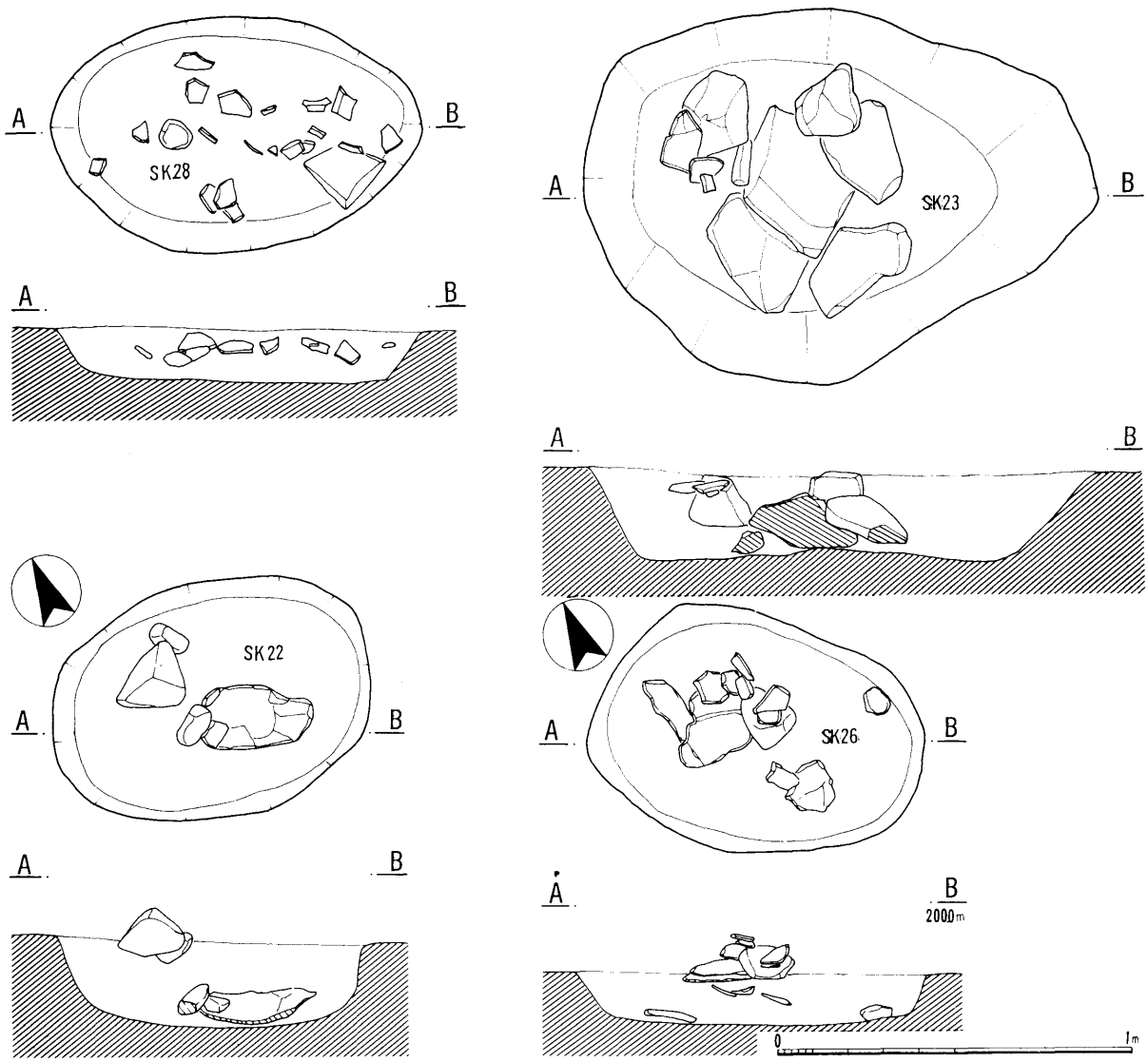
ＳＫ30　径1.2mの不整円形を呈する。埋土中に縄文土器片を含む。後期前半。

ＳＫ６　長径1.5m・短径1.8mの楕円形を呈する。埋土に若干の縄文土器片を含む。

4．埋設土器

Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３

発掘区東側の３地点において、土器が土中に口縁部を上にして埋設された状態で出土した。この３地点相互の距離は５mで平面的には三角形をなす。発掘区の東から北にかけては地形の最も高いところにあたり、第Ⅱ層除去後すぐに検出された。いずれも上半分を欠損する。埋設のための掘り方の検出に努めたが、明確にすることはできなかった。



第９－７図　SK６・23・26・28 実測図（１：20）

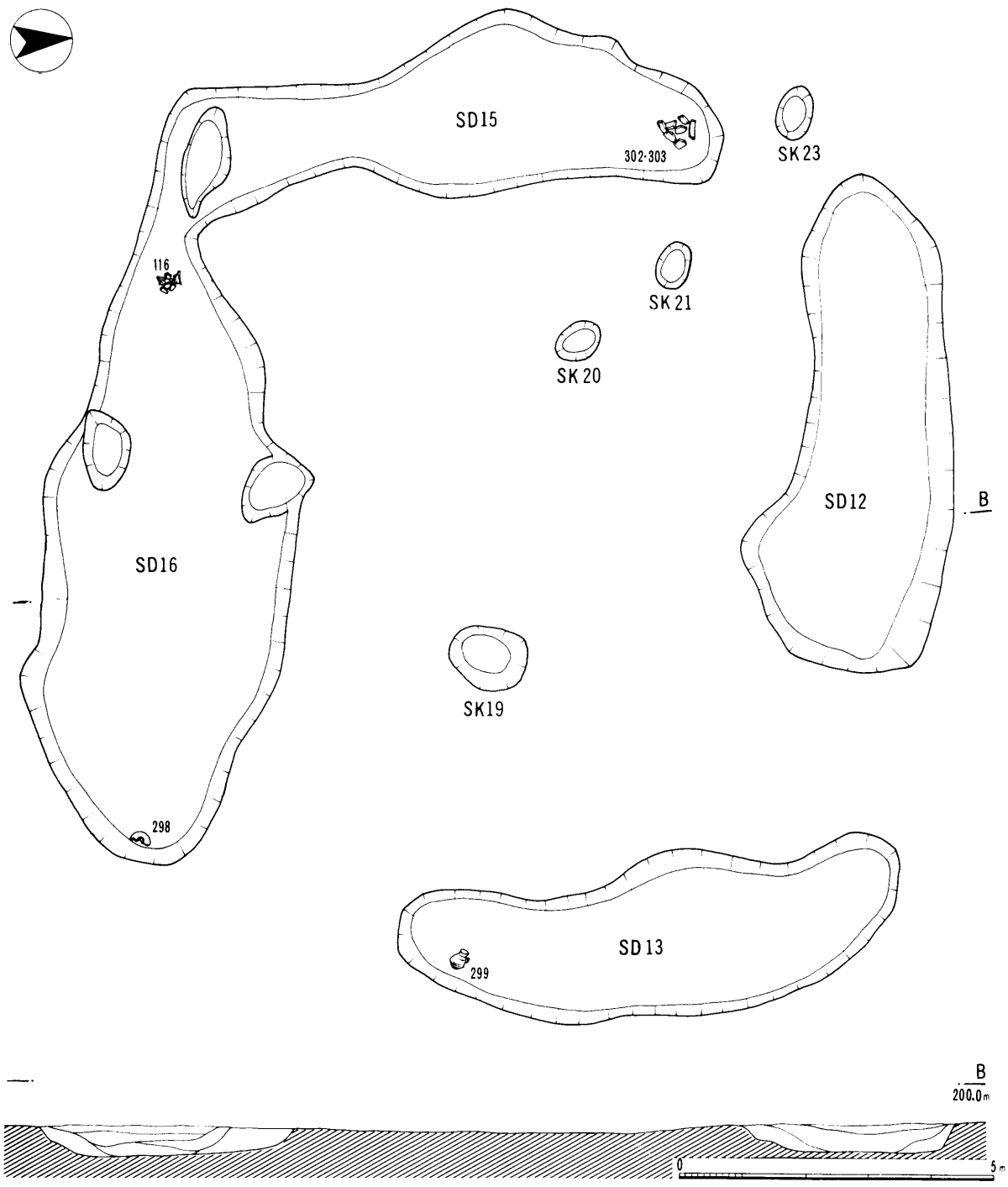
2．弥生時代

1．方形周溝墓

ＳＸ14　ＳＤ12・ＳＤ13・ＳＤ15・ＳＤ16の４条の溝状遺構によって画されたものを方形周溝墓と考えた。四隅のうち、ＳＤ15とＳＤ16は南西隅で連結するが、他の三方はつながらない。南北長16.0m・東西長15.0mでほぼ正方形である。四方を囲む溝の形状は、従来の、方形周溝墓と考えられているものに比して、極めて不整形で、長さ・幅ともに大きい。とくに、南側のＳＤ16では、最大幅5.0m、最も小さいＳＤ13でも3.0mを測る。溝内埋土からは、縄文土器片も多く出土したが、埋土最下層の粘質茶褐色土中より出土した広口壺・水差し形土器などが遺構に伴うものである。

2．溝

ＳＤ１　長さ5.0m・最大幅3.0mの楕円状を呈するものである。深さ0.5m。埋土は上下２層に分かれ、



第９－８図　SX14 実測図（１•100）

下層に弥生土器片を含む。

SD2　SD1に直交し、東西に伸びる溝である。長さ5.0m・幅1.5m。埋土中に弥生土器片を含む。

SD3　長さ6.2m・幅3.0m。土坑ともすべきような形状をなす。SD11とほぼ平行し、SD12と直交することから、この3条の溝を関係づけて考えることもできるかもしれない。弥生土器片を含む。

SD11　長さ7.0m・最大幅3.0mの溝である。方形周溝墓を画するとしたSD16などに良く似た形状をしており、またSD12と直交し、SD15の延長線上にあることから、先にも述べたように、SD3とともに方形周溝の一辺と考えられないこともない。

SD14　「L」字状に大きく曲がった溝である。底から接してほぼ完形に近い2個体の広口壺が出土した。

3．平安時代

1．掘立柱建物

SB　発掘区北西端で検出した2×2の建物である。柱間は2.6m等間である。柱穴埋土中に黒色土器片を含む。　（仁保晋作）

3．遺　物

出土した遺物の多くは、第Ⅱ層～第Ⅴ層に包含された縄文土器・弥生土器である。とくに縄文土器は後期前半の様相を知るうえでの良好の資料となりうるものと考える。以下に時代別、遺構別に概述していきたい。

1．縄文土器

1．出土縄文土器の概略

調査で出土した縄文土器は、整理箱10箱に達した。時期は、中期初頭から晩期末葉にわたるが、後期初頭～前葉の土器が主体を占める。これらのうち、有文土器を中心に整理を行ない、時期判別の可能な資料に関しては、そのほとんどすべてを図化し、295点の資料を掲載した。

土器の出土状況は、次のように3大別できる。住居跡・土坑・配石跡・溝の埋土あるいは底面より出土したもの――遺構出土土器、旧地表面上にあるいは穴を掘って、土器を設置・埋置した状況で出土したもの――埋設土器、包含層より出土したもの――包含層出土土器であり、この順序で出土土器の説明を行うこととする。

遺存状況は全体に悪く、表面の劣化が進み、荒れた器肌を呈し、脆弱なものが多い。これは遺構出土の土器についてもあてはまり、移動による二次堆積の結果生じたものとは考えられない。土器の劣化がどの様に進行するかについては、十分わかっているとはいえないが、焼成された土器そのものの焼き上がり方、その後の使用状況というような廃棄されるまでの土器の状況と土器が廃棄され、埋蔵される包含土壌の性質が大きく作用していると考えられる。中ノ耳遺跡出土土器の場合、弥生土器では劣化があまり進んだものはないので、前者の可能性が高いと考えている。

2．遺構出土の縄文土器

（a）住居跡出土土器（第9－9図4、第9－10図）

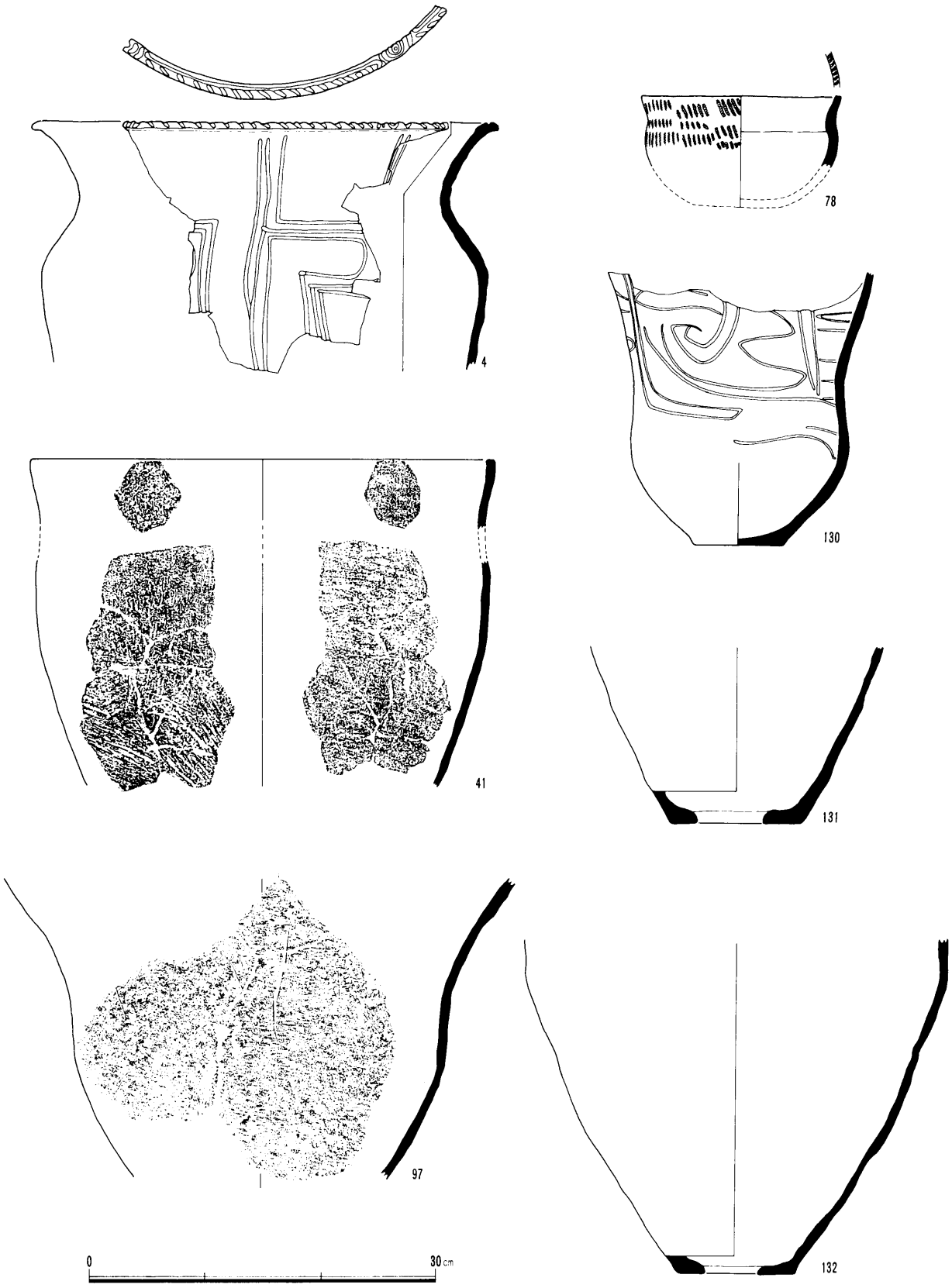
住居跡は2棟検出されたが、SB17からは図化しうる縄文土器は出土しなかった。SB25からは、後期初頭の土器が少量混在していたが、後期前葉の土器がまとまって出土した。

1は口縁部に沈線をめぐらし、縄文を施す。後期初頭、中津式に比定できよう。2～7は沈線文を施した有文深鉢。2は口縁部内面を肥厚させ、口辺に細い沈線を横走させる。3は突起部。正面に円形の孔を穿つ。突起部以外の口唇部には1条の沈線をめぐらせる。4は復元可能な資料で頸部が大きく外反する形態を呈する。口径40cm、胴部最大径38.5cmをはかる。内外に肥厚した口唇部に沈線を横走させ、外側端部との間に刻みを施す。文様集約部に円形刺突とそれをとり囲む弧線文を配す。頸胴部には、3条1組の沈線でクランク状の文様を描く。6・7は、有文深鉢の頸胴部。

8～20は沈線文、条線文を施した深鉢。頸胴部全体にわたって、縦方向に沈線、条線を施し、明確な文様帯をもたない点に特徴を有する。形態は、頸部が外反ないし外傾し、口縁部が外反ないし外傾するもの、内湾するものがあり、口縁端部も丸く仕上げ

たもの、面取りを施したもの等、多様である。沈線、条線は、頸胴部全面にわたって蛇行状、格子状、直線的に垂下する。21～23は底部。いずれも平底である。

（b）**土坑出土土器**（第9－9図41・78・97・第9



第9－9図　遺構出土の縄文土器（1）（4－SB1,41－SK7,78－SK16,97－SK3,130～132－埋設土器）

－11図～第９－13図）

24～27はＳＫ７出土。24・25は有文深鉢。24は波状口縁で、波頂部には前面に４条の弧線文を施している。口辺には２条の沈線による縄文帯が横走し、そこから垂下する沈線の一部が残存している。25は胴部で、２条の沈線による縄文帯が横走する。26は底部、27は胴下部～底部でいずれも平底である。後期初頭、中津式に比定できる。

28～32はＳＫ24出土。28～30は有文深鉢。28は３条１組の沈線帯が口辺を横走し、そこから斜位に展開する。29は斜行する２条の沈線間に条線文を充填する。30は口縁下に一条沈線が横走し、条線文を充填している。29・30は同一個体と考えられる。31は逆Ｌ字形の文様を描く。器面の劣化が著しく、縄文施文の有無等は不明である。浅鉢形を呈するであろう。32は無文粗製深鉢で、口縁部は外傾気味に立ち上がり、頸部のほとんどくびれない形態を呈する。外面全体に密に「細密条痕」を横位に施している。29～31は後期初頭、中津式、28は３条沈線で口縁部文様帯が口唇上にあがらない点から福田Ｋ２式（古相）の特徴を有している。32も後期初頭におさまる資料であろう。

33～41はＳＫ29出土。33・34は同一個体と考えられ、３条の沈線文による縄文帯を口辺に横走させる。口縁部は内側へやや肥厚する。35は２条の沈線を口辺に横走させる浅鉢。劣化のため縄文の有無は不明である。37は突起部。上下に貫孔させ、筒状の突起とし、さらに前面に孔を穿ち、その両側に弧線文を配している。口縁部には数条の沈線が横走する。38・39は有文深鉢の頸部。40も頸部で、全面に粗雑な沈線文を垂下させている。33・34は福田Ｋ２式（古相）に属し、35・36もほぼ同一時期の資料であろう。37～40は後期前葉に属する。41は無文粗製深鉢。頸部がくびれて口縁部がほぼ直立する。外面は口縁部～胴上部に縦方向の箆削り、胴下半は右下がりの箆削りを施す。内面は横方向の箆撫でで仕上げている。

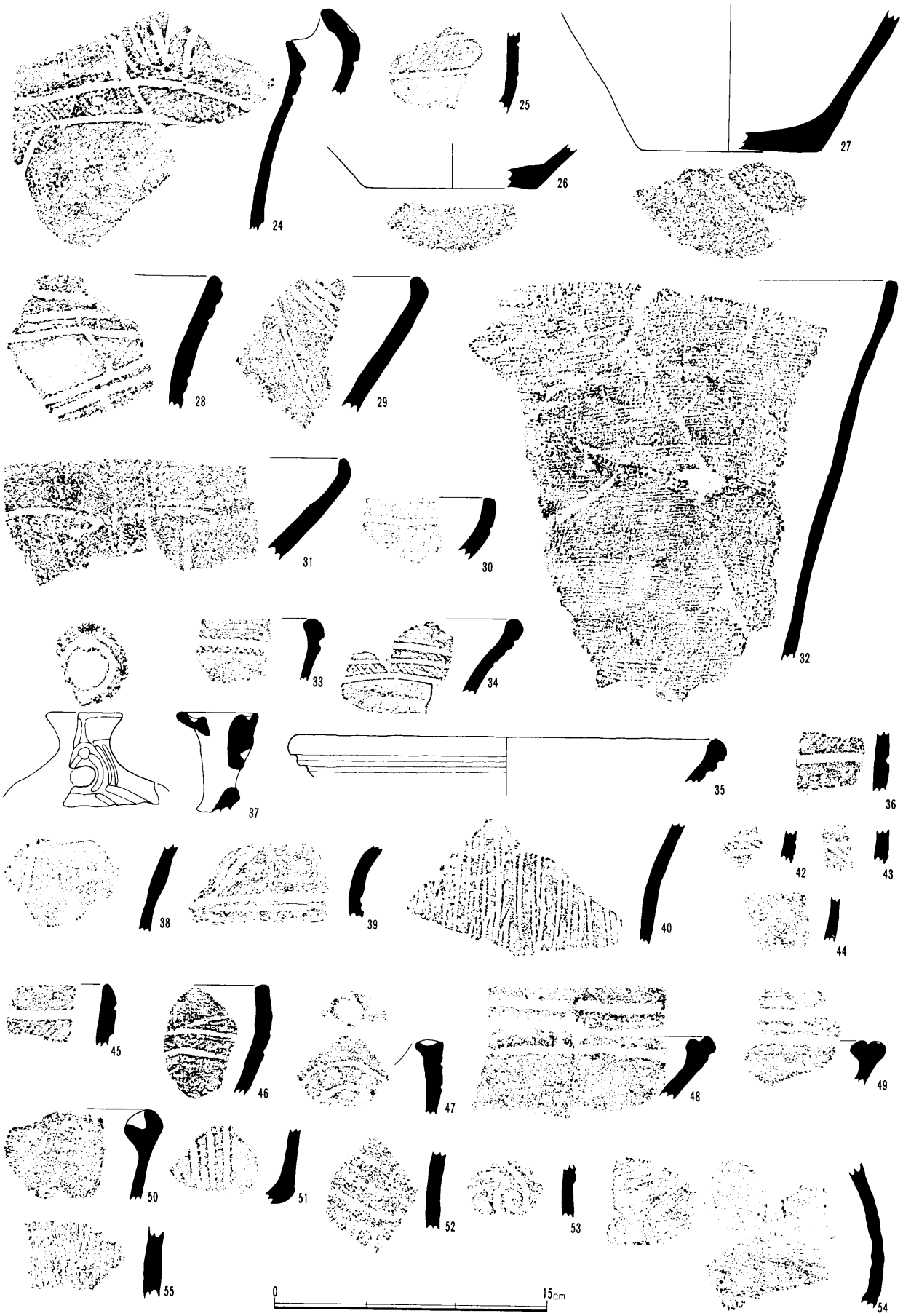
42～44はＳＫ６出土。42・43は横位に沈線をめぐらした後、縄文を施す。44は条線地深鉢の胴部。中期末葉～後期初頭に属すると考える。

45～55はＳＫ23出土。45は口辺に沈線を横走させ、縄文を充填する。46・47は２条の沈線帯を横位に展開する。47は波状口縁波頂部で、頂部に円形刺突をほどこす。48は口縁部内面を肥厚させ、口唇部と口縁部外側直下に沈線をめぐらす。福田Ｋ２式の口縁部の特徴に通じる。49は内側を肥厚させた口唇上に沈線を１条めぐらし、外側端部に刻みを施す。50は突起部で、突起頂部には内側から円形刺突を加えている。51～53は有文胴部。51は胴下部で、３条沈線が垂下し、53は入り組み状の文様をつくる。54・55は条線文をもつ深鉢の胴部。45～47は後期初頭の中津式48・53は後期初頭、福田Ｋ２式に比定され、他の資料は後期前葉に位置づけることができよう。

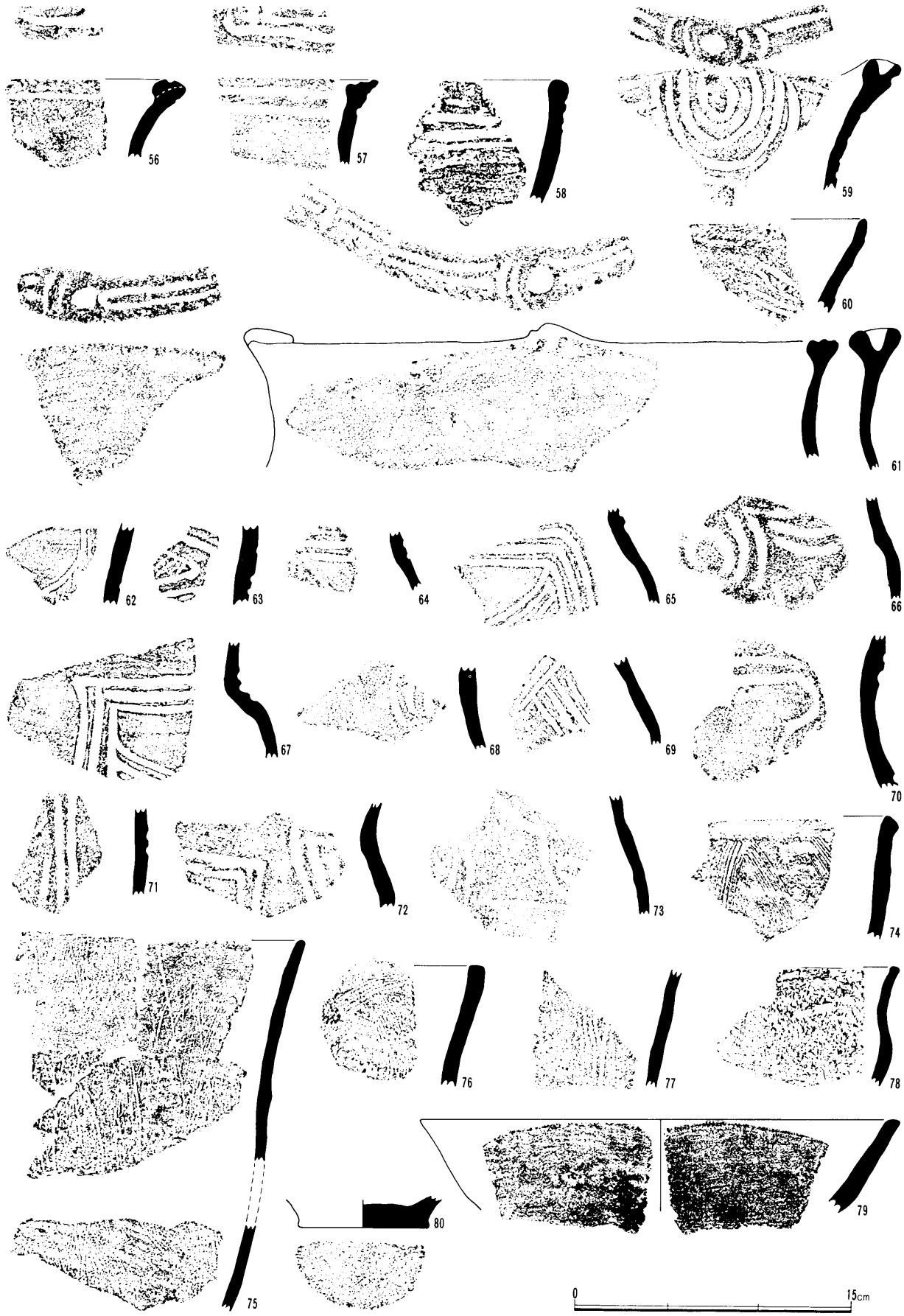
56～80はＳＫ26出土。56～61は有文深鉢の口縁部。口唇を内外に肥厚させて、そこに１、２条の沈線を巡らしたものが多いが、58は口辺に３条の沈線を横走させ、60は口縁外側端部に刻みをめぐらし、その下方に斜行する沈線を施している。口縁部直下に56は１条、57は２条の沈線を横走させる。56は沈線間にＲＬ縄文を施文し、口唇も内外に丸く肥厚している点から、後期初頭、福田Ｋ２式の口縁部形態に近く、出土土器の中で古い様相を呈している。61は口唇上の沈線と外側端部の間に刻みを施す。頸部は無文となる例が多いが、59は同心円状の半円文を配している。62～74は有文深鉢の頸胴部資料。62・63は沈線間に縄文を充填する。65～72は３、４条の沈線束でクランク状の直線文や同心円・弧線状の曲線文様を描く。74～77は条線文を施した深鉢。直線的、曲線的に条線を垂下させる。78は外面全体に縄文を施した小型の鉢。径17cmをはかる。口唇にも縄文を施す。79は無文浅鉢。内外面ともに、磨いて仕上げる。80は底部、平底。56～80は後期前葉に位置づけられる。

81～90はＳＫ28出土。82・84は有文深鉢の口縁部。82は肥厚した口唇部に円形刺突列を配する。84は突起状波頂部。内外に肥厚した口唇部に２条の沈線をめぐらし、波頂部は橋状把手とする。波頂部前面に円形刺突を加える。拓本下端に１条の沈線が横走する。85は有文深鉢の胴部。弧線文を施す。83・86～90は沈線文、条線文を施した深鉢。86は口唇部に刻みを加える。87～89は同一個体と推定できる資料で、87・88は波状口縁につくり、波頂部に円形刺突を87は４個以上、88は１個加えている。横方向の条線文

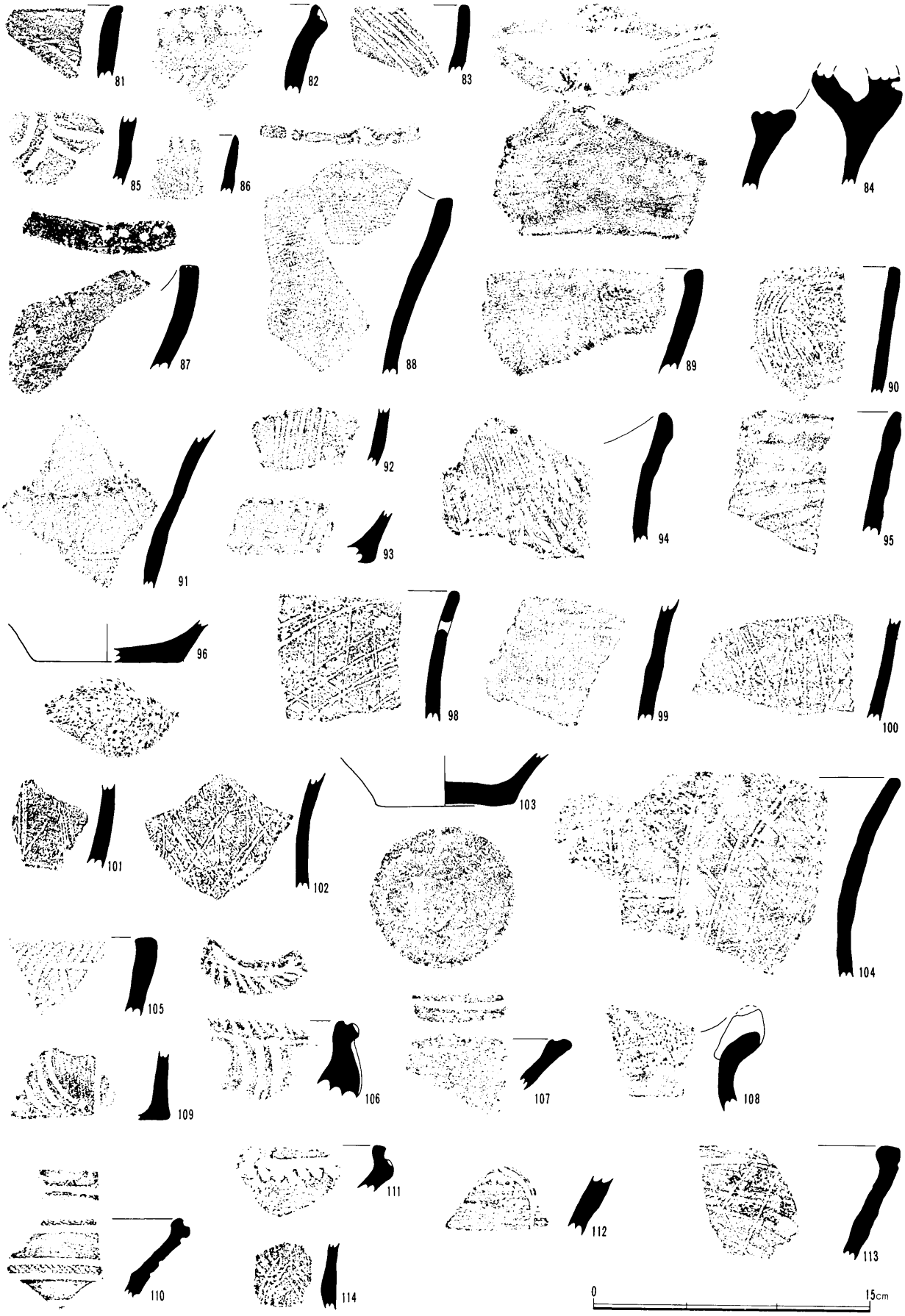
第９－10図　遺構出土の縄文土器（２）（１～23－SB１）



第９－11図　遺構出土の縄文土器（３）（24～27－SK13,28～32－SK21,33～40－SK７,42～44－SK４,45～55－SK15）



第９－12図　遺構出土の縄文土器（４）（56～80－SK16）



第９－13図　遺構出土の縄文土器（５）（81～90－SK17,91～96－SK３,98～103－SK６,104－SK10,
105～109－SX２,110～114－SX１）

を口辺に施しているが、横に展開する条線文は条線地深鉢の中では量的に少ない。81は無文粗製深鉢。81～90は後期前葉に属する資料であろう。

91～96はＳＫ19出土。91は有文深鉢頸部。曲線文様を描く。92・93は有文深鉢胴部。92は５条、93は２条以上の沈線を垂下させる。97は条線文を施した深鉢。頸部が大きく外傾する。外面は右下がりの条線文を施す。器面の劣化が著しい。94・95は無文粗製深鉢。94は波状口縁を呈し、巻貝によると思われる条痕で器面を仕上げている。96は底部、91～97は平底。後期前葉に属する。

98～103はＳＫ22出土。98～102は沈線文、条線文を全面に施した深鉢。99は条線文を垂下させ、98・100～102は格子状に配している。103は底部、わずかに中央部が凹む平底。条線文を斜格子状に配する手法はＳＢ25出土のものにも認められ、後期前葉に属する資料であると考える。

104はＳＫ７出土。条線文を斜格子状に配する深鉢。後期前葉に位置づけられる。

（ｃ）配石跡出土土器（第９－13図）

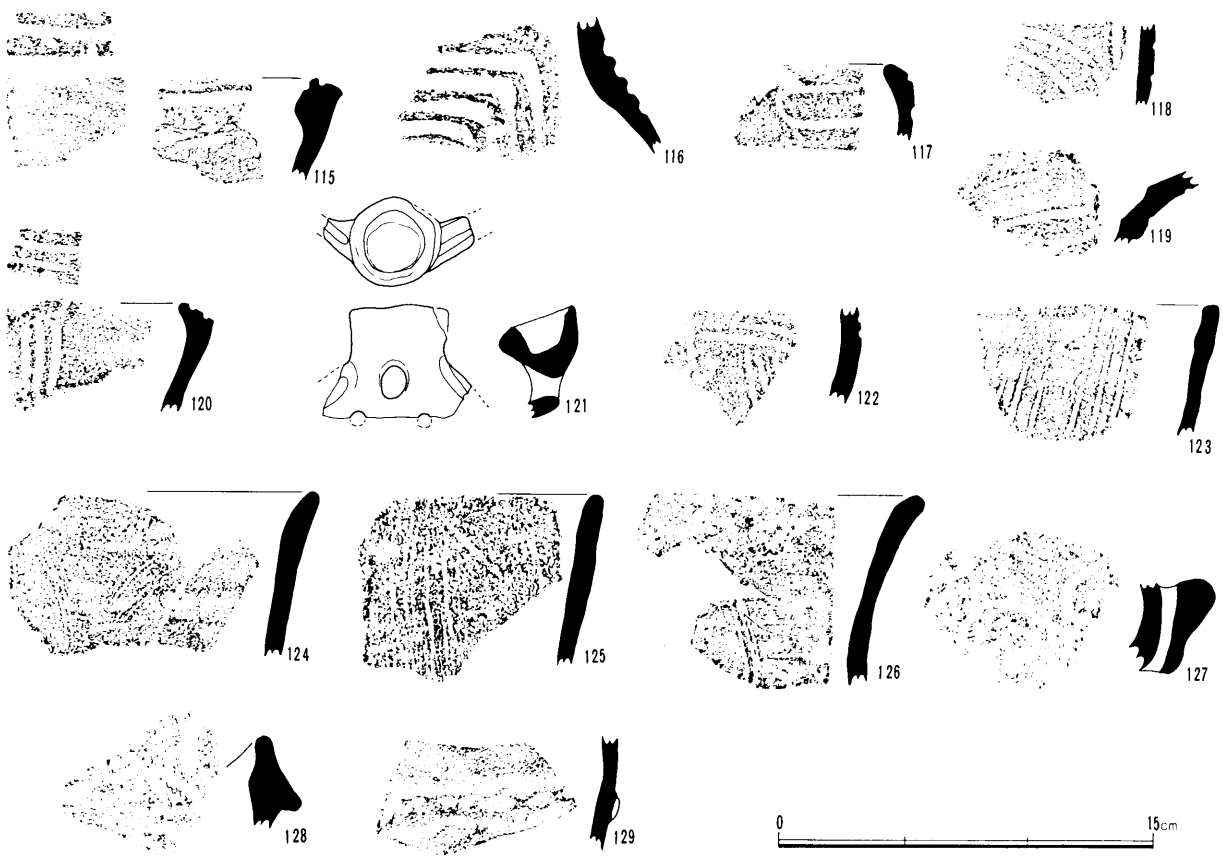
105～109はＳＸ27出土。105は口縁部の縄文帯から下方に縄文帯が垂下する。後期初頭、中津式に属する。106～108は後期前葉、有文深鉢の口縁部。106は突起部、前面を貫孔し、弧線文を加え、頂部に沈線１条と刻みを施す。107は口唇に沈線を１条めぐらす。108は突起部。弧状沈線を施す。109は有文鉢胴下部。磨いて仕上げている。３条１組の沈線が垂下する。後期初頭、福田Ｋ２式に比定できる。

110～114はＳＸ18出土。110は福田Ｋ２式の有文鉢。口唇部と口縁直下に沈線を施し、その間に縄文を施す。体部には２条１組の幅の狭い縄文帯が横位にめぐる。内面に断面三角の稜がはしる。111～114は後期前葉。111は有文深鉢の口縁部。内折した口縁部に沈線をめぐらし、刻みを加える。112は有文深鉢の頸部。113・114は沈線文、条線文を全面に施した深鉢。113は口縁直下に沈線を横走させ、下方に沈線を格子状に施している。

（ｄ）溝出土土器（第９－14図）

弥生時代中期の方形周溝墓の溝より弥生土器とともに縄文土器が少量出土している。

115・116はＳＤ１出土。115・116ともに後期前葉の有文深鉢。115は口縁部内面を肥厚させる。口唇



第９－14図　遺構出土の縄文土器（６）（115・116－SD１,117～126－SD４,127～129－SD８）

上と内面肥厚部に沈線を横走させ、口唇外側端部に刻みを加えている。116は胴部資料で、4条の沈線が下方に折れ曲がる。

117～126はＳＤ4出土。117は内湾する口縁部に区画文をもつ鉢。118は胴部で2条の沈線帯を配する。117・118は後期初頭、中津式に属する。119は口縁部が大きく外傾する鉢で、2条以上の沈線による縄文帯が施される。内面には2ケ所に段がつく。後期初頭、福田Ｋ2式。120～122は後期前葉の有文深鉢。120は口唇部に2条の沈線をめぐらし、頸部に3条の沈線を垂下させる。121は突起。頂部は酒杯状につくり、前面には3ケ所、円孔を穿つ。口唇部には末端を刺突した沈線が1条めぐる。122は胴部。頸部との境に2条の沈線が横走し、3条1組の沈線が垂下する。123～126は条線地の深鉢。後期前葉に位置付けられよう。

127～129はＳＤ13出土。127は中津式に特徴的な器種である双耳壺の把手部。垂直方向に貫孔させる。128は波状を呈し、口唇部が内外に肥厚する。頂部に末端を刺突したノ字状沈線を施している。129は頸胴部の境にO字状刻みを施した凸帯文を貼付けた深鉢。晩期終末、船橋式～長原式に属する。

3．埋設土器（第9－9図－130～132）

土器のおさまる坑を掘って、埋置された状況で出土した土器が3基発見されている。いずれも土器が納まるだけの大きさの穴を掘って正位に埋設していた。

130（Ｐ2地点）は、口縁部が後世の削平等により欠失している。現状の最大径22.6cm、胴部最大径18.6cm、現存器高23.2cmをはかる。頸部が長くのび、胴最大部が下方にあって、下ぶくれ形の形態を呈する。頸部～胴最大部分までを文様帯とし、2条の沈線帯によるＪ字文やＬ字文を配して、そのあいだを曲線的な沈線帯で埋めている。沈線は完全に閉じずに末端が開放されている部分もある。器面の劣化が著しく、縄文施文の有無は不明である。中津式の新しい段階に位置づけられよう。

131（Ｐ3地点）は、後世の削平等により胴下半部のみ残存している。深鉢で、132とほぼ同様の形態を呈すると推定される。内外面とも撫でて仕上げる。内面には煤が付着している。器面の劣化が著しい。底部には一辺4.5cmの正方形に近い穿孔が施されている。

132（Ｐ1地点）は、口縁部～胴上部が後世の削平等により欠失している。深鉢で胴部が膨らみ、頸部がややくびれる形態を呈するものと思われる。現存の最大径は36cmをはかる。内外面とも撫でて仕上げているが器面の劣化が著しい。底部には、径4.5cmの穿孔を施している。

131・132は胴上半部以上に文様を有する可能性もあり、帰属年代については後期初頭～前葉の時間幅で捉えておきたい。

4．包含層出土の縄文土器（第9－15図～19図）

（a）中期初頭　1点だけ出土した。133は頸部で鋭く外傾する深鉢。口唇部にC字状の刻みを加え、口縁直下には低い断面三角形状隆帯を貼付けてC字状の刻みを施す。下方にも、もう一段、C字状の刻み列を加える。口縁部内面には縄文を施している。口頸部内面は撫でて仕上げる。中期初頭、鷹島式に比定される。

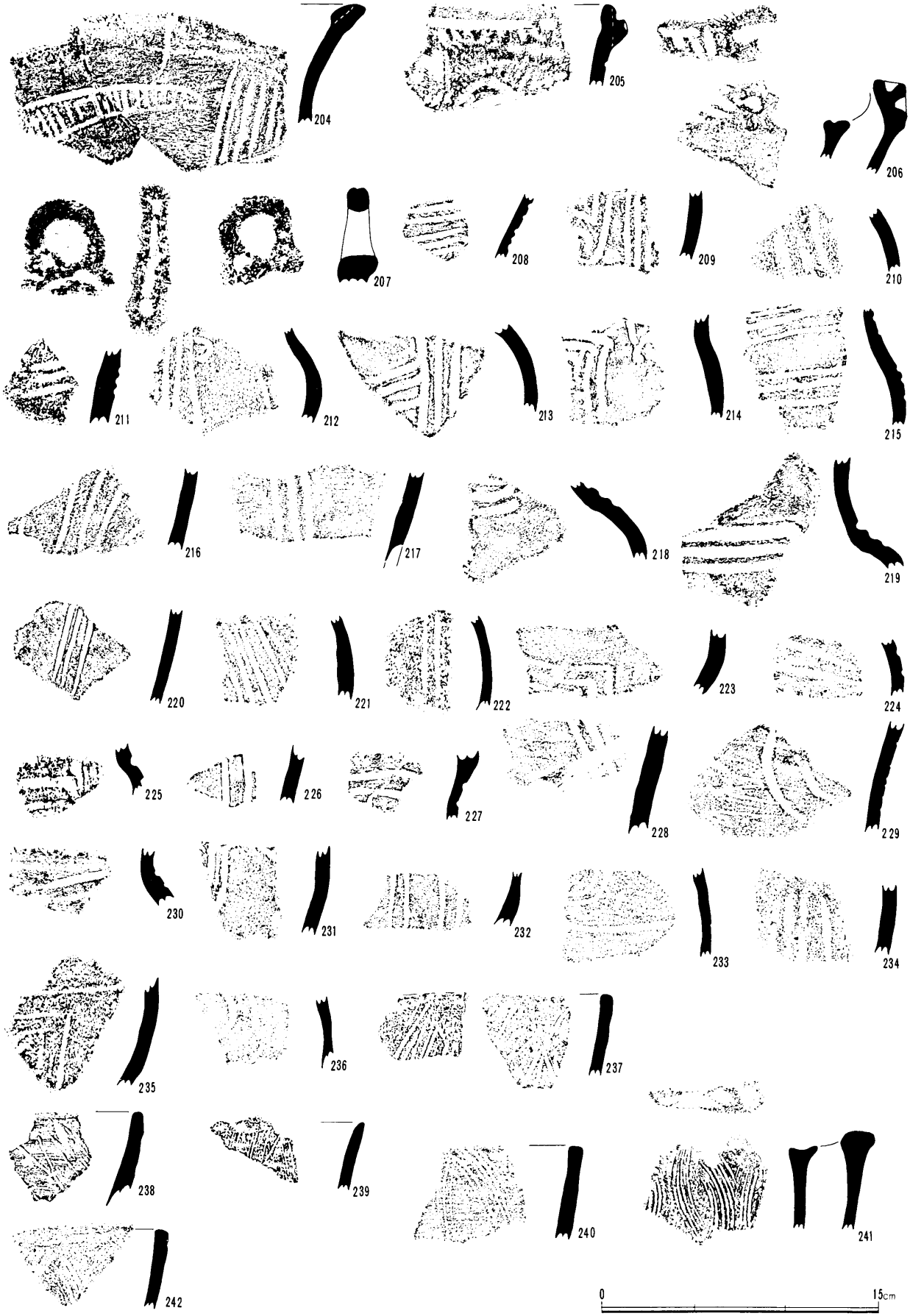
（b）中期後葉　134は器壁10mmと厚く、全面に節の大きな縄文を施している点から中期後葉の土器と判断した。

（c）後期初頭　135～182は2条の沈線による縄文帯を基調とした土器で、後期初頭、中津式に位置づけられる。135～152は深鉢の口縁部。内湾気味ないし直線的に立ち上がる形態のものが多い。135～140は波状口縁あるいは突起状口縁になるもの。136は沈線間を条線で埋めている。139は波頂部を肥厚させて、環状突起とし、拓本右側の口唇上には円形刺突を加えている。こうした突起は、東日本の称名寺式に類例が多く、同式に系譜を辿ることができるであろう。140は上からみると弧状の断面形態をとる。151は縄文の代わりに条線文を充填している。153～182は頸胴部の資料。181・182は双耳壺の把手部。頸胴部の境に粘土を貼付け、垂直方向に穿孔して釣り手の機能をもたせ、さらに前面に螺旋状沈線（181）や円形刺突（182）を施している。179も壺形の形態を呈するものと思われる。

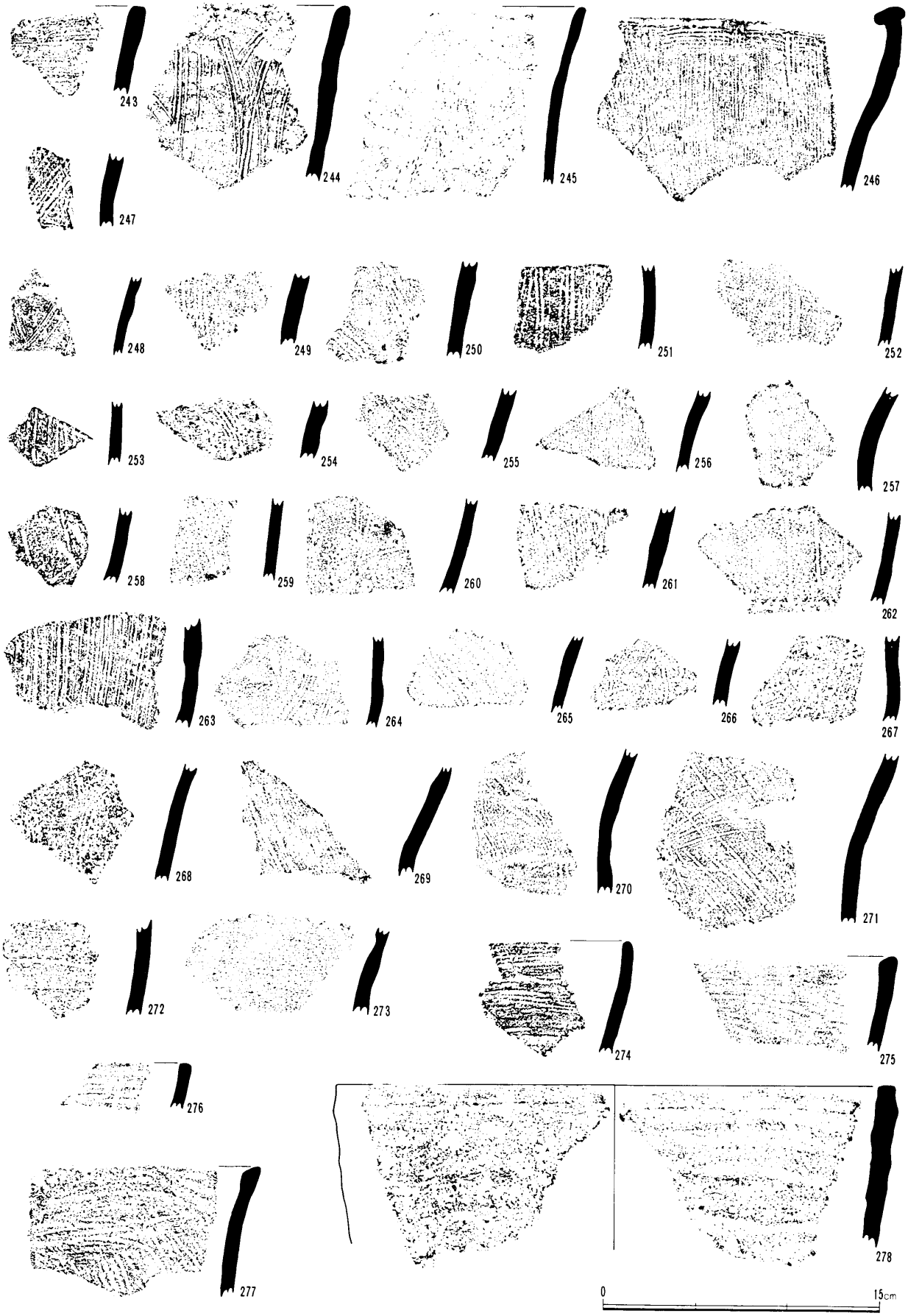
183～189・208・209は2、3条の幅の狭い沈線帯、縄文帯で文様を描く土器。185～187は口唇上と口縁直下に沈線が横走し、口唇に縄文を施す点で共通す

第９－15図　包含層出土の縄文土器（１）

第９－16図　包含層出土の縄文土器（２）



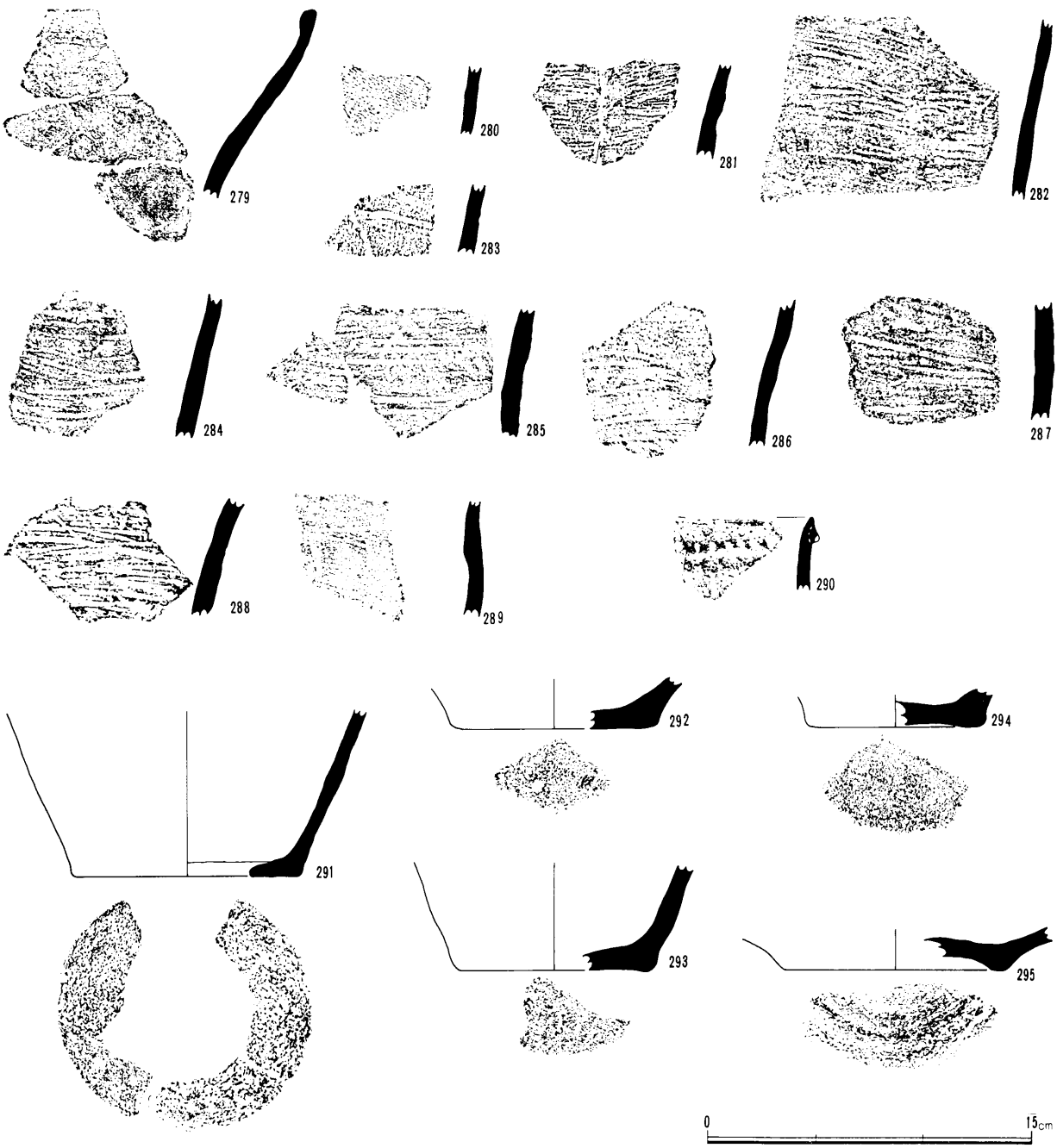
第９－17図　包含層出土の縄文土器（３）



第９－18図　包含層出土の縄文土器（４）

るが、185・186が口唇を内外に丸く肥厚させているのに対して187は口縁部が内側に肥厚し、口縁部直下の沈線もやや下がった位置であるという相違が認められる。188は口辺に隆帯を横走させ、その上下に沈線を配す。内面に段を有する。184～186・188は後期初頭、福田Ｋ２式としてよい特徴を有するが、183・189は後期前葉に下る可能性もある。208・209は福田Ｋ２式の胴部。３本沈線による文様は、後続する後期前葉の文様に継承されるが、縄文を充填している点、沈線末端の入り組みがきちんと巻き込んでいる点、縄文充填後、沈線の端部を丁寧に再調整している点で区別できる。208は鉢ないし浅鉢、209は深鉢の胴部であろう。

（ｄ）後期前葉　190～207は有文深鉢の口頸部資料。頸部の外反が強い深鉢で、口縁部が肥厚し、口唇上に１、２条の沈線や刻みが加えられるのが特徴的である。口唇の肥厚は、粘土紐を口唇内側に貼付け内外に肥厚させ、上面が文様帯となるものが多いが、200・205は外面に粘土紐を貼付けて肥厚させ、前面が文様帯となる。口縁部の文様は口唇中央をめぐる１条の沈線と沈線＋外側端部の間に加えられた刻みの組合せが最も多いが、２条沈線＋刻み（198・201）



第９－19図　包含層出土の縄文土器（５）

・刺突（200）、２条沈線のみ（202・203）、刻みのみ（190）のものもみられる。部分的に、上方へ肥厚させて突起状にし、沈線末端に円形刺突を加えたり（193・194・196・201・205）、弧状沈線を配する（195・202）。頸部には２条の沈線帯による斜行する文様（197）や多条沈線による垂下文様が描かれる（204）ものがあるが、無文となる例も多い。205は地文に縄文を施してから弧状に曲がる沈線を描いている。206・207は突起。206は穿孔と刺突を加え、上部には沈線を施している。突起部以外の口唇上には沈線が横走し、刻みを施す。207は逆Ｕ字形の大きな突起で中央を穿孔する。外面からみて右側面に末端を刺突した沈線を加えている。

210～236は有文深鉢の胴部資料。数条の沈線帯で文様を描く。頸胴部の境は横走し、胴部を直線的に垂下、斜行するものが多いが曲線的なモチーフをとるものもある。214は沈線の末端が入り組み状となるがきちんと巻き込んではいない。器面が劣化していることもあって判別しにくいものもあるが縄文が加えられている例はない。

（ｅ）後期初頭～後期前葉　237～273は、地文に条線文・沈線文を施した深鉢。形態は頸部がややくびれるか、ほとんどくびれない単純な形態の深鉢になると思われる。口縁部の立ち上がりでは、内湾気味になるものが多いが、外反気味になるものもある。口縁端部は丸く仕上げるか面取りを施すものが多いが、241・246は口唇を内外に肥厚させている。条線文・沈線文は直線的に垂下、斜行、あるいは蛇行するが271のように斜格子状に配するものも少量みられる。条線地深鉢は中期末～後期初頭にも伴出する器種であり、編年的位置づけについては、口唇が内外に肥厚するタイプや格子状に条線を配するものについては後期前葉としてほぼ間違いないと考えるが、他の資料については後期初頭～前葉の時間幅の中で捉えておきたい。

274～289は無文粗製土器。調整は、撫でて仕上げているものや巻貝条痕（275、286、287）、二枚貝条痕（274、282、284）、「細密条痕」（280）仕上げのものがあり、多様である。

291～295は底部。291は径６㎝の人為的と判断される穿孔を有する。埋設土器の可能性が高いと考えられるが、出土状況の所見が不明なので除外した。295は底縁が低い高台状を呈し、中央へ向かって立ち上がる凹底。291～294は深鉢、295は浅鉢の底部であろう。

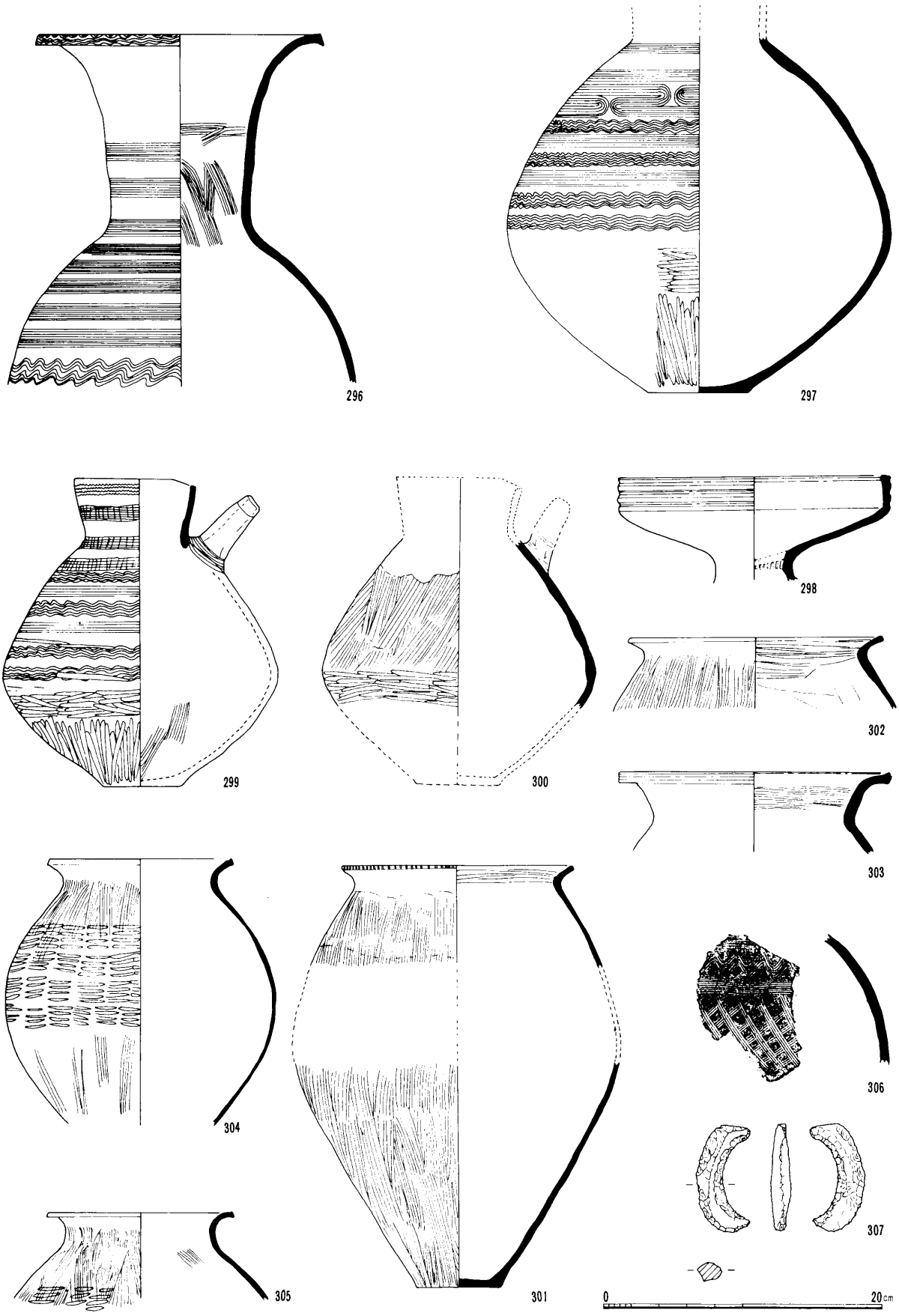
（ｆ）晩期終末　１点のみ出土した。290は突帯文深鉢。口縁部に突帯を貼付けて、軽い刻みを加えている。突帯上部と口縁部内面を同時に撫でて仕上げている。長原式の特徴を有している。（千葉　豊）

２．弥生土器

１．ＳＸ14出土遺物

遺物は、包含層からも、わずかに出土しているが、主に方形周溝墓ＳＸ14を画する四つの溝とＬ字状に曲がるＳＤ４の埋土中から検出されている。ＳＤ４は、深さ40㎝ほどの溝で、底面に接して、広口壺が二個体分、破片が散乱した状況で出土した。そのうち、復元可能な（２）は、流水紋をはじめ各種の櫛描横線を多用する土器である。

次に、ＳＸ14では、四方の溝のうち、ＳＤ12を除く、三つの溝ＳＤ13・ＳＤ15・ＳＤ16から遺物が出土している。ＳＤ13からは、肩部に横位の半環状の肥手をつけた水差し形土器が二個体出土した。（４）は、底面から約５㎝遊離しているが口縁部を上にして、ほぼ完全な形で検出されている。外面は簾状紋、波状紋など同一の櫛状工具によって体部上半を飾っている。これに対して、（５）は、櫛描紋は一切見られず、ハケとヘラミガキによって調整されただけの粗雑なものであり、埋土中層から出土した体部の３分の１ほどの破片である。このように二つの水差し形土器には出土状況、調整などの点で大きく趣を異にし、出土状況からすれば、（４）のほうがより古いものと考えることができる。ＳＤ16からは、広口壺（１）と高坏（３）が出土した。（１）は、底部を欠損するが、肩部から長い頸部にかけて、櫛描横線紋を多用する土器で、底面にほぼ接して検出された。これに対して、高坏は坏部外面に三条の凹線を巡らせるもので、溝の東端で、底面より15㎝ほど遊離した状況で検出され、両者には時間的な経過を認めることが出来る。ＳＤ15からは、くの字状に外反する短い口縁部をもち、体部外面に細かい縦位のハケを、口縁部内面に粗いハケを施す同一の手法に



第９－20図　弥生土器・石器実測図（１～11は１：４,12は１：２）

よる甕が二個体出土している。いわゆる大和型と呼ばれるものである。

このように、ＳＸ14からは、総計６点の土器が出土しており、うち櫛描横線紋を多用する広口壺、水差し形土器と大和型の甕は、溝の底面にほぼ接する状況で検出されていることから、方形周溝墓築造時に供献された土器としてとらえることができる。しかし、凹線の巡る高坏や粗雑な水差し形の土器については、溝内埋土の状況から上記の４点の土器群とは時間的な経過を認めることができるようである。

（仁保晋作）

4．結　　語

中戸遺跡は宇陀川右岸に形成された低位段丘と低地とが接する地点の岩かげに、縄文時代から平安時代にかけて断続的に営まれた複合遺跡である。

立地は水田面との比高差が２ｍと低地よりもわずかに高く、北側は通称高塚と呼ばれる高さ５ｍほどの小丘によって画されている。

主な遺構としては、縄文時代後期の竪穴住居２棟・小土坑21基・弥生時代中期の方形周溝墓１基・平安時代の掘立柱建物１棟などがある。

以下に調査で得た遺構・遺物について若干の考察と問題点を提起して結語としたい。

１．遺構について

（１）縄文時代後期の小土坑について

中戸遺跡からは、竪穴住居を中心として発掘区全域から0.9m～1.2mの楕円形を呈する小さな土坑が21基検出された。土坑内の在り方は、埋土中に縄文土器片だけを含むもの、土器片と拳大から人頭大の石と混在して土器が出土するもの、全く土器を含まないものと様々である。しかも、土坑内から出土する土器は細片が多く、それも数個体の破片が混在していることから、完形品を埋置したものが散乱したというものでもない。

これと同様の小土坑については、すでに、鈴鹿市東庄内Ａ遺跡の報告の中で次のように述べられている。『土器を伴った楕円形や円形の土坑は恐らく人為的なものであろうが、その性格については不明である。・・中略・・ただこれら土坑から出土した土器は総て後期に属するものであり、この時期に土坑があったことは確かである。』として、性格は今後の課題としながらも、その時期については後期に特有のものであると指摘している。東庄内Ａ遺跡の土坑群の時期は後期初頭（中津式併行）とされている①。

また、名張市下川原遺跡でも同様の土坑が17基検出されている。時期は北白川上層式２期に比定され本遺跡よりやや後出ではあるが後期前半におさまるものである②。さらに奈良県広瀬遺跡においても同様の土坑が認められており[3]、東庄内遺跡で示された指摘を補強する資料が確実に増加している。今後、これらの土坑が何の目的で掘られたのか、また、土坑内に少量含まれる土器や石にどのような意味があるのか類例をまって検討していくことが必要であろう。

（２）弥生時代中期の方形周溝墓について

中戸遺跡からは、方形周溝墓が一基検出された築造の時期については、簾状文・流水文などの櫛状工具を多様することから、弥生中期中葉（畿内第Ⅲ様式平行）の範中にはいるものと考えられる。しかし、高杯の口縁部外面は凹線文で飾られており、中葉の中でも凹線文出現以降ととらえることができる。

伊賀地方での方形周溝墓の検出例は、大山田村北切Ａ・Ｂ遺跡（中期）[4]・名張市観音寺遺跡（後期）[5]についで４例目となり、名張盆地においてもこのような墓制が中期の段階から採用されていたことがあきらかとなった。

しかし、本遺跡の方形周溝墓は、上述の２つのものと比較すれば大きくその趣を異にする。というのは、遺構のところでも述べたように、４方を区画する溝の両端が袋状にすぼまり、溝中央部の幅が極めて広いという特徴をもっている。

数値を挙げれば、最も大きいＳＤ16では最大幅5.0m、最も小さいＳＤ13でも3.0mを測り観音寺検出例が幅1.2m～1.5m、北切遺跡検出例が2.7m

～3.6mとその差は大きく、形状についても他の二つは長方形を呈している。

このような不定形な長大な土坑状の溝は、すでに名張盆地の、同時期の浦遺跡[6]や下川原遺跡でも検出されており、その性格については、完形の土器を埋置することなどから墓として理解されてきた。しかし、これらの遺跡では、それに対になるような溝は認められず、この地域における在地性の強い墓制の一つの在り方としてとらえられてきた。

このような点から中戸遺跡の4方を画するひとつひとつの溝を見れば、まさにこの地域色の強い墓そのものであり、弥生時代中期中葉に4方を区画するという墓制と不定形で長大な土坑に葬るという在地の墓制とが互いに実現した姿を本遺跡の方形周溝墓の形状にみることはできないだろうか。

（仁保晋作）

2．埋設土器について

中戸遺跡からは、なんらかの意図をもって土中に埋設された縄文土器が3個検出された。1つは有文深鉢であり、残りの2つは胴上半以上を欠失しており、深鉢であると判断できるのみである。3個の土器は相互の距離が5m内外という近接した距離を保っており、有機的な関連を有していると想定すれば、埋設土器の時期は有文深鉢で示される後期初頭となろう。ただし、他の深鉢は上半部を欠失しており、形態上の特徴を十分把握できないので、ここでは断定は避けて2つの深鉢の時期については後期初頭～前葉の時間幅の中で捉えておきたい。埋設の仕方は土器がちょうどはいる大きさの穴を掘って正位で埋めている。無文深鉢は2個とも底部に穿孔が施されている。中から遺物は出土しなかった。

一般に、こうした出土状態を示す土器については「甕棺」あるいは「埋甕」と呼称されることが多い[7]。しかし、甕棺という用語は明らかに、埋葬にかかわる容器として、埋設土器を規定した用語であり、埋甕は、もともと住居内の入口部における埋設土器をさす用語として使用されはじめ、現在では、屋内埋甕、屋外埋甕といった使われ方をするがその性格をめぐって見解の相違がみられ、また、屋外埋甕と甕棺の区別も曖昧で、問題を含んだ用語法であることは否定できない。そこで、本報告では、人がなんらかの意図をもって土中に埋設した土器を埋設土器と呼称することにした。類例の多い東日本の事例を参考にすると乳幼児を埋葬した甕棺としての性格が強い[8]と考えられるが内容物が検出されていないので無論断定はできない。なお、近年、近畿地方でも縄文遺跡の発掘例が増えるとともに、埋設土器の事例も報告例が目立ってきている。近畿地方の埋設土器については付篇1で検討を加えたので参照していただければ幸いである。

（千葉　豊）

3．縄文土器について

先述したように、中戸遺跡からは中期初頭、中期後葉、後期初頭、後期前葉、晩期末葉の土器が出土している。このうち、まとまった量が出土しているのは後期初頭～前葉の土器である。

後期初頭の土器は2条の沈線で構成された幅広の縄文帯による曲線文様で特徴づけられる中津式と、後続する3本沈線で構成された縄文帯による曲線文様で特徴づけられる福田Ｋ２式がみとめられる。

中津式は包含層よりまとまって出土しているほか、埋設土器130（Ｐ２）やＳＫ７出土土器がこの型式に属し、ＳＫ24・ＳＫ23、ＳＸ27、ＳＤ４・ＳＤ13からも他の型式の土器と混在して見つかっている。口縁部が窓枠状の縄文帯になる例はわずかであり、口縁端部はそのままおさまるもののほか、内側へ肥厚したり拡張する例が多い。玉田芳英氏の分類による1様式（新）～Ⅱ様式のものが主体を占めていると考えられる[9]。器種としては深鉢が多く、他に浅鉢、双耳壺がみとめられる。

双耳壺（127・181・182）は、垂直方向に貫通した紐かけ用と推測される小孔をもつ把手が2個つく壺形土器で、類例は近畿（滋賀県琵琶湖湖底[10]・今安楽寺[11]、和歌山県下尾井[12]、大阪府小阪[13]・恩智[14]・仏並[15]）、瀬戸内（岡山県高島黒土[16]）、山陰（鳥取県島[17]・栗谷[18]、島根県築廻[19]）、四国南西部（愛媛県道後城北ＲＮＢ[20]、高知県仕出原[21]）、北部九州（福岡県大神山[22]・長野宮ノ前[23]）というように中津式の分布する西日本全域で認められ、1遺跡での出土数はけっして多くはないものの構成器種として安定した存在を示し、福田Ｋ２式まで存続

する。

中津式の縄文原体の撚りは単節ＬＲ26点、単節ＲＬ19点を数え、ＬＲが優勢である。比較的まとまった出土量があり、中津式期の縄文原体の撚りの傾向がわかる例を検討すると三重県東庄内Ａ㉑・数ノ下㉕、和歌山県下尾井㉖ではＬＲ優勢、大阪府馬場川㉗ではＬＲ、ＲＬほぼ同数、大阪府森の宮㉘ではＲＬやや優勢、大阪府恩智㉙、兵庫県片吹㉚、岡山県福田㉛、広島県洗谷㉜、鳥取県栗谷㉝ではＲＬ優勢という傾向を示す。ほぼ大阪湾沿岸部を境にして以東ではＬＲ縄文、以西ではＲＬ縄文が優勢であるという地域差をみてとることができよう㉞。

福田Ｋ２式に比定される土器は、ＳＫ24・ＳＫ29・ＳＫ23・ＳＸ18、ＳＤ４より他型式と混在して見つかっているほか、包含層から出土しているが量的には少量である。口縁部をめぐる沈線帯が口縁下の位置を占めるものと一部が口唇上に上がるものがあり、前者が古い様相を示していると考えている。器種としては、有文深鉢、福田Ｋ２式特有の有文鉢がある。

後期前葉の土器は包含層よりまとまって出土しているほか、ＳＢ25、ＳＫ26・ＳＫ28・ＳＫ22・ＳＫ19・ＳＫ30出土土器がこの時期に属し、また、ＳＫ29・ＳＫ23、ＳＸ27・ＳＸ18、ＳＤ１・ＳＤ４からも他の型式と混在する状況で出土している。出土量はもっとも多い。

土器は、頸部の外反の強い有文深鉢が特徴的である。口縁部は口唇が内外に拡張して、１、２条の沈線が横走する。沈線と外側端部の間には刻みが加えられる例もある。頸部は無文になる例も多いほか胴部文様と連結する形で２～４条の沈線帯が垂下したり、多重半円文が描かれる。胴部文様は２～４条の沈線帯でクランク文や曲線文を描いている。文様に縄文を加える例は僅かである。

このような特徴を有する土器は、近畿では大阪府四ツ池Ｆ地点㉟や奈良県広瀬土壙40㊱などでまとまって出土していて、泉拓良・玉田芳英両氏は「四ツ池式」㊲、また筆者は広瀬土壙40段階㊳と仮称している。口縁部の形態や文様の多くは福田Ｋ２式からの変化で型式学的に説明でき、また、北白川上層式１期に継承される要素も出現していて福田Ｋ２式と北白川上層式１期の間をつなぐ資料と考えることができよう㊴。

この段階の時間的独立性は広瀬土壙40で示されてきたがＳＢ25やＳＫ26から、他の型式の土器を混じえずにまとまった出土をみたことはこの段階が年代的に独立した時期を示していることを一層確実にした点で重要な資料となろう。

器種としては、上記した有文深鉢のほかに条線地深鉢、無文深鉢、縄文地鉢がみとめられる。このうち、ＳＢ25やＳＫ26でみられるように条線地深鉢が安定した組成を示しており、無文深鉢の少なさを補なっている状況をみてとれる。　　（千葉　豊）

<註>

① 谷本鋭二　「東庄内遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟　1970

② 門田了三　『下川原遺跡』　名張市遺跡調査会　1986

③ 松田真一　『広瀬遺跡発掘調査概報』　奈良県立橿原考古学研究所　1982

④ 田中喜久雄　「北切遺跡」『昭和58年度農業基盤整備地域調査報告』　三重県教育委員会　1984

⑤ 仁保晋作　「観音寺遺跡」『昭和59年度農業基盤整備地域調査報告』　三重県教育委員会　1985

⑥ 『三重県文化財年報16』　1986

⑦ 菊池実「甕棺葬」・桐原健「埋甕」　いずれも、『縄文文化の研究９』　1983年

⑧ 前掲注⑦菊池文献

⑨ 玉田芳英「中津・福田ＫⅡ式土器様式」『縄文土器大観４』　1989

⑩ 野口義磨編『縄文土器大成』第３巻後期　1981

⑪ 調査担当者、植田文雄氏のご厚意により、実見させていただいた。

⑫ 小野山節・清水芳裕編『和歌山県北山村下尾井遺跡』　1985

⑬ 合田幸美ほか『小阪遺跡（その６－３）－調査の概要－』　1989

⑭ 泉拓良・網谷克彦ほか『恩智遺跡』　1980

⑮ 岩崎次郎編『仏並遺跡』㈱大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第５輯　1986

⑯ 坪井清足『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』　1956

⑰ 久保穣二朗ほか『島遺跡発掘調査報告書』第１集　北条町埋蔵文化財調査報告書２　1983

⑱ 中原斉ほか『栗谷遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　福部村埋蔵文化財調査報告書第５集　1989

⑲ 前掲注⑩文献

⑳ 西尾幸則「道後城北ＲＮＢ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ　昭和62～63年度』　1989

㉑ 前掲注⑩文献

㉒ 前川威洋・木村幾多郎『天神山貝塚』　1974

㉓ 川崎保ほか『長野川流域の遺跡群』Ⅰ　前原町文化財調査報

告書第31集　1989

㉔ 谷本鋭一「東庄内Ａ遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告』5　1970

㉕ 田村陽一「藪ノ下遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ　1987

㉖ 前掲注㉒文献

㉗ 下村晴文『馬場川遺跡発掘調査概要』Ⅳ　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16　1976

㉘ 八木久栄編『森の宮遺跡第二次・四次発掘調査報告書』1978

㉙ 前掲㉔文献

㉚ 市村高規ほか『片吹遺跡』龍野市文化財調査報告書Ⅵ　1985

㉛ 泉拓良・松井章『福田貝塚資料』奈良国立文化財研究所史料第32冊　1989

㉜ 小都隆編『洗谷貝塚』　1976

㉝ 中原斉ほか『栗谷遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　福部村埋蔵文化財調査報告書第６集　1989

㉞ 中期末葉段階では、近畿および山陰でＬＲ縄文が卓越していることがすでに指摘されている。（泉拓良・家根祥多「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　1985）近畿西半部以西の地域において、どの段階でＬＲ縄文とＲＬ縄文の比率が逆転し、ＲＬ縄文が優勢になったかが問題となり、中津式の細別型式に照らして検討することが必要となろう。しかし、現状では、そこまで明らかにしうる資料が少ないので、中津式として一括して傾向をみてみた。中戸や藪ノ下、栗谷では，中津式の新しい段階も含んでいるので、ＬＲ縄文とＲＬ縄文の比率の差が地域差をも反映していることは明らかであろう。

㉟ 第二阪和国道遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』16・17　1971

㊱ 松田真一「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1981年度』　1983

㊲ 泉拓良・玉田芳英「文様系統論－縁帯文土器－」　季刊考古学　第17号　1986

㊳ 千葉豊「縁帯文系土器群の成立と展開」　史林72－６　1989

㊴ 詳細については、前掲注㊳文献を参照していただければ幸いである。

X．名張市赤目町　下垣内（しもがいとう）遺跡

1．位置と地形

中戸遺跡の南東700ｍの地点に広がる遺跡である。遺跡の立地する段丘は、水田面との比高15ｍを測り、全面を一望することが出来る。段丘の両側には浅い開析谷が入り込み、南から緩やかに傾斜する。発掘区はこの段丘のほぼ中央部の1,000㎡であるが、遺跡のひろがりは10,000㎡に及ぶと思われる。

2．遺　　構

1．古墳時代後期

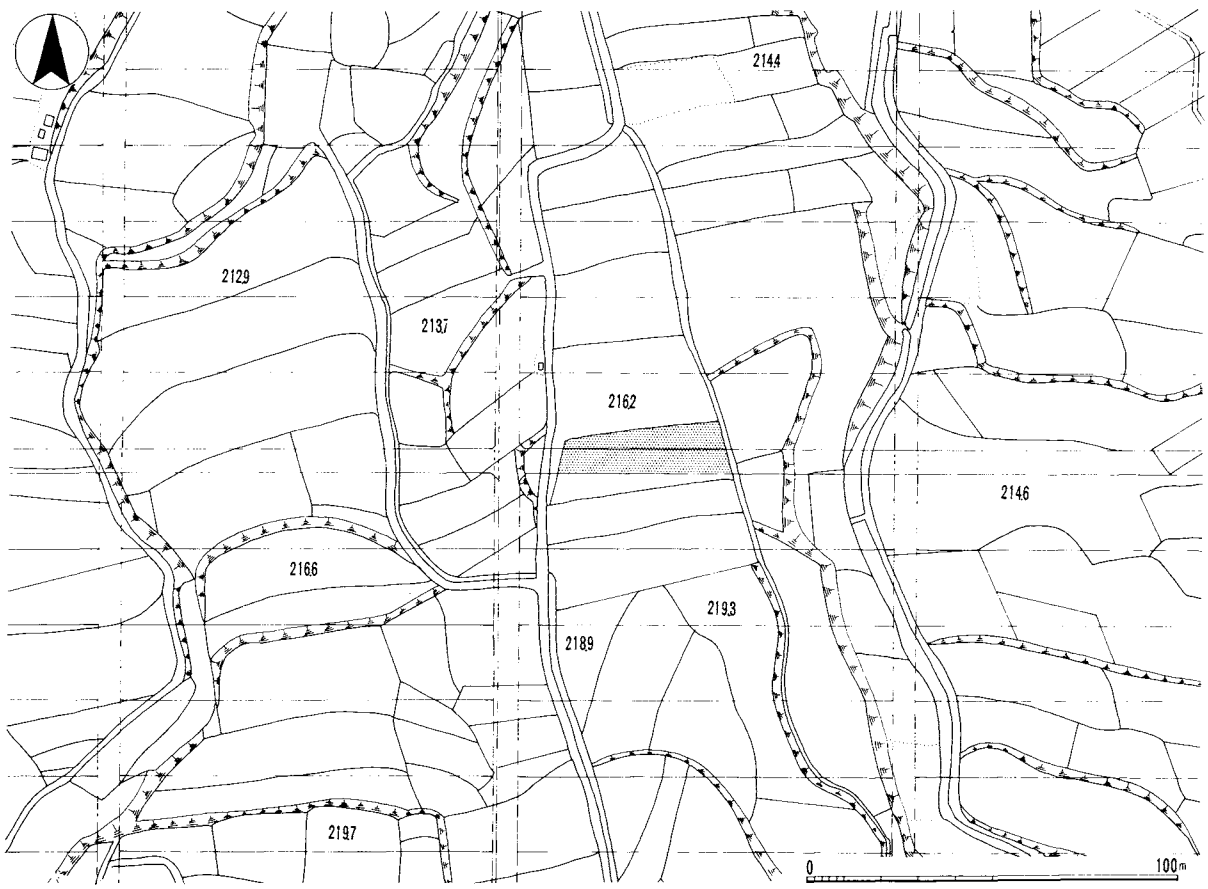
1．竪穴住居

ＳＢ５　発掘区南西端で検出された。南側は後世の畦畔構築の際に失われている。一辺4.7ｍの正方形を呈し、一部周溝が巡る。主柱穴はあきらかではない。遺物は南東溝内から小形壷などの土師器がかたまって出土した。

2．鎌倉時代

1．掘立柱建物

ＳＢ２　桁行４間（8.0ｍ）×梁行２間（2.9ｍ）の南北棟（Ｎ３°Ｅ）の建物である。柱穴掘形は一辺50㎝前後の方形を基本とするが、南側は極めて浅く、中央の一穴を欠損する。埋土中に瓦器片をわずかに含むことからこの時期のものと考えた。



第10－１図　調査区位置図（１：2,000）

また、この建物の東側にも同様の掘形が多数検出されたが、建物のとして復元しえなかった。

ＳＢ３・４　発掘区西側で主軸を南北に向けた建物２棟を検出した。ＳＢ３は桁行４間（8.9m）×梁行４間（8.8m）。ＳＢ４は桁行３間（6.1m）×梁行４間（9.8m）である。いずれの建物にも南西隅の柱穴がなく、北側に一間分の張り出しをもつ建物とも推定出来る。

２．溝

ＳＤ１　幅1.0m・深さ0.3mの浅い東西に走る溝である。弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物を包含するが、掘立柱建物と棟方向が同じことからこの時期のものとした。

3．遺　　物

遺物は、表土中や溝ＳＤ１埋土から弥生時代後期の高杯の細片なども出土しているが摩耗がひどく上域からの混入品と考えられるものであった。

ＳＤ５（１～７）

１～７の土師器は溝内に転落した状況で出土し、８は埋土に包含されていたものである。

広口壺（１・２）　ラッパ状に開く長い口縁部をもつ丸底の壺である。１は口径8.8cm、器高12.6cmを測る。内外面ともになでられ、茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。２は口径12.8cm、体部下半を欠損する。

小形丸底壺（３～５）　球状の体部に「八」の字状に開く口縁部をつけた小形の壺である。内外面の調整はなでられただけの粗雑なものである。茶褐色を呈して、胎土に砂粒を多く含む。３は内弯ぎみにのびる口縁部をもち、口径9.0cm、器高8.9cm。４は、垂直に上方にのびる短い口縁部をもち、口径7.4cm、器高8.0cm。５は、大きく開く口縁部をもち体部最大径を凌駕する口径をもつ。口径9.9cm、器高7.9cm。

高杯（６）　脚接合部から直線的に外上方へのびる杯部をもつ高杯である。口径15.1cm。内外面ともに雑になでられる。

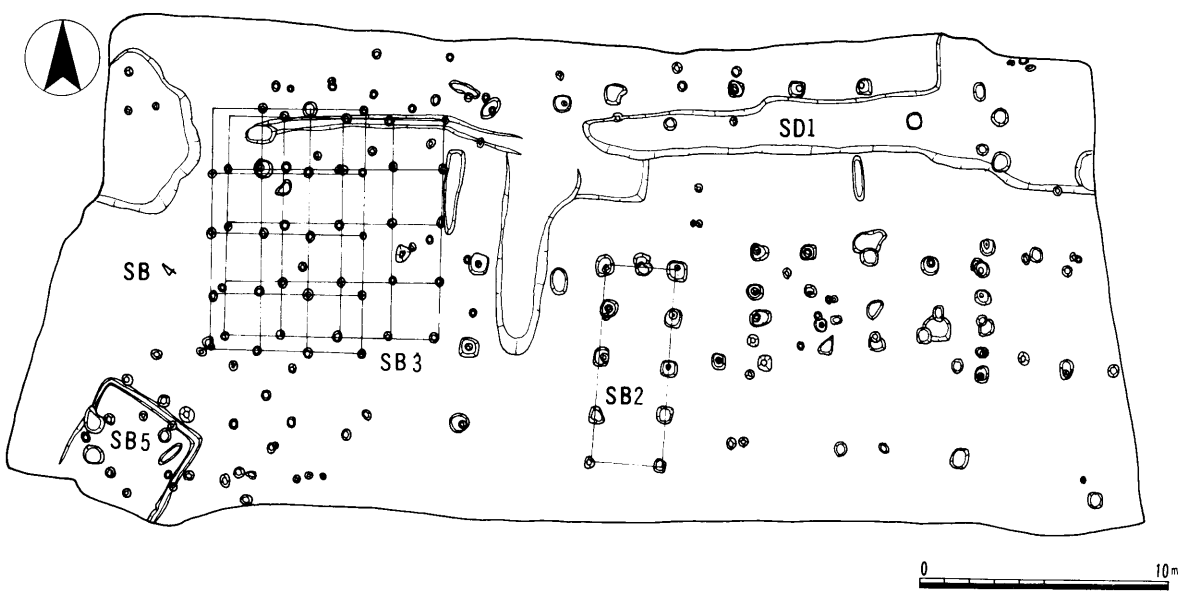
須恵器広口壺（７）　口頸部のみの出土である。口径には疑問が残るが、推定24.5cm。口縁端部に鋭い稜を作り出し、断面三角形の凸帯と櫛描波状文を交互に口頸部に配する。

包含層の遺物

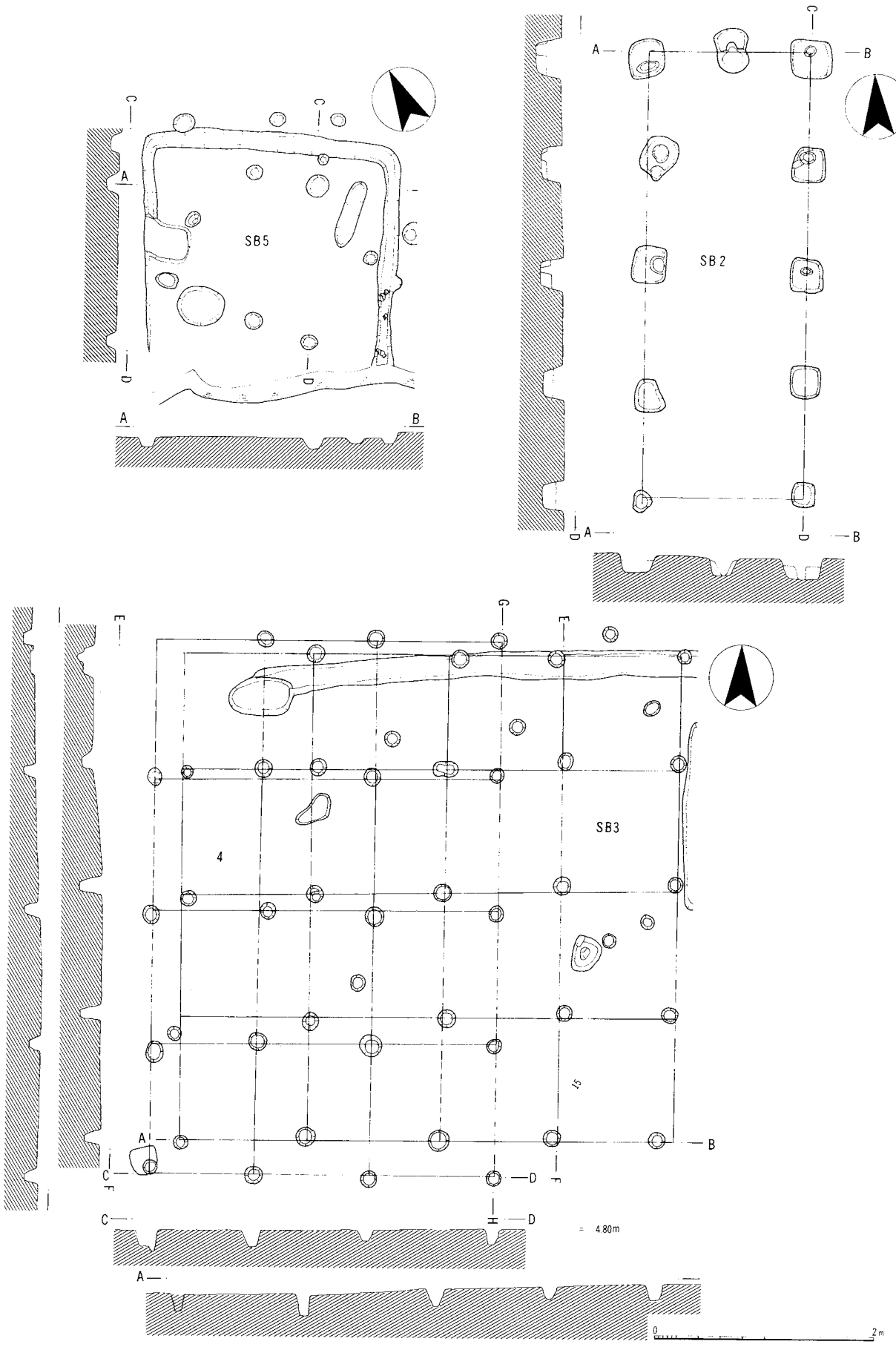
瓦器椀（８・９）　ともに口径15.0cm前後、器高５cm前後の椀である。丸味をもった体部からゆるやかに口縁部へ移行し、端部内面に沈線が巡る。外面にはヘラミガキは施されない。

土師器皿（10～12・15）　口径10cm前後の大形のもの、口径8.5cmの小形のもの、脚台のつくものがある。いずれも粗雑な作りであるが、10は胎土に精良な粘土を使用した白色系の土器である。

他は茶褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。



第10－２図　遺構平面図（１：300）



第10－3図　SB2・3・4・5実測図（1：100

羽釜（13）　推定口径30cm以上。水平に引き出された断面三角形の鍔が巡る。口縁端部は上方に肥厚する。

鍋（14）　推定口径25cm以上。「く」の字状に短く外折する口縁部はつまみあげられ、断面三角形を呈する。

4．結　　語

下垣内遺跡は、宇陀川右岸に形成された中位段丘上に営まれた、古墳時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。

ＳＤ５とした竪穴住居は、その出土遺物に小形丸底壺に近い形状の小形壺を多く出土し、また、高杯の口縁の形状などから５世紀中葉の時期を想定することが出来る。また、床面より10cmほど高い地点で、須恵器の広口壺の口頸部片が出土している。これは、口縁端部に鋭い稜をもち、頸部の形状、施文は、波状文が雑であることを除けば、古式の様相が強く、ＳＢ５出土の土師器群に須恵器が伴うことも考えられる。

名張盆地では、これと同時期の住居跡の検出例はたいへん少ない。弥生後期から古式土師器の時期に集落が激増、大規模化するのとは対照的で、古墳時代後半の集落の展開を知る上で貴重な資料を追加することが出来た。

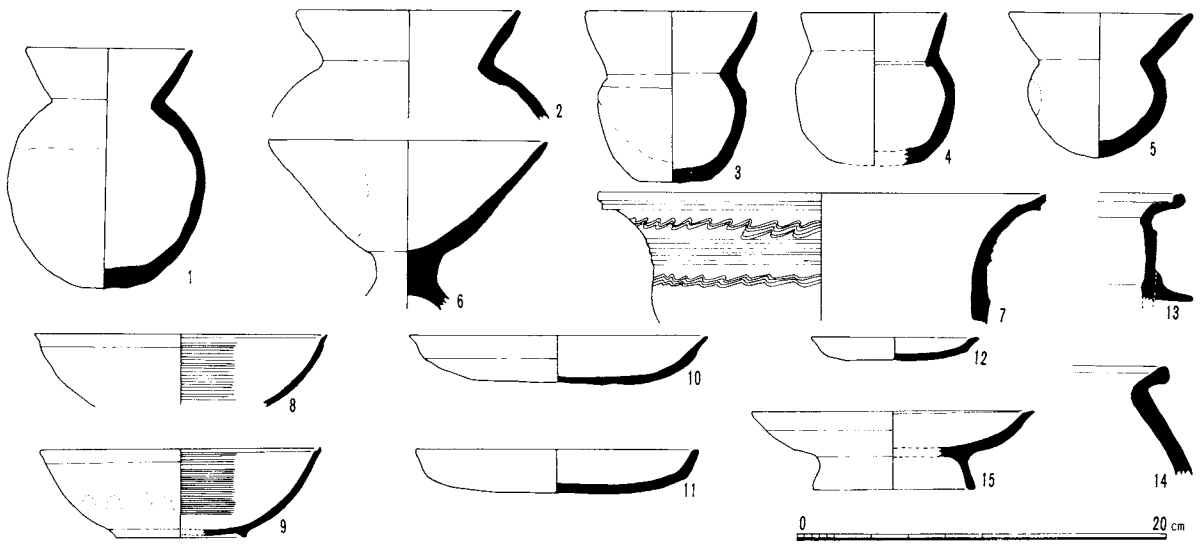
次に、鎌倉時代とした建物の時期は、包含層から出土した瓦器の形状から13世紀前半代に収まるものととらえたい。この時期の遺物として他に、乳白色をした土師器皿がある。胎土は極めて精良で、水簸された瓦器の胎土と同じで燻がかかっていないものである。いわゆる白色系の土器と呼ばれるもので、で、伊賀地方では、まとまった量がとらえられるのは、同じく名張盆地の浦遺跡だけである①。しかし、浦遺跡では、口径が７～８cmの白色の小皿が瓦器椀と瓦器小皿に伴い出土するだけで、口径が10cmをこえるものは出土していない。しかし、法量には違いはあっても口縁部を強くなでる手法には共通したものが認められ、またその量的な割合は１割にもみたず、主要雑器としての役割をはたしていないことなど、今後、類例の増加をまってその流通について検討していく必要があろう。

次に、掘立柱建物ＳＢ３、ＳＢ４に共通してとらえられることは、ともに、北西隅の柱穴が検出されないことである。後世の攪乱などによって欠損したものではなく、検出状況からすれば、建物の構造自体が北側に一間分の張り出しをもっていたものと考えられる。同様の柱並びをもつ建物としては、上野市青ノ代遺跡で北西隅の一穴を欠損する４間×４間の掘立柱建物が検出されている。時期としては、外面にヘラミガキを施した瓦器椀が柱穴から出土したことから、平安時代末から鎌倉時代初めと考えられている②。このようなことから、瓦器を伴う時代の掘立柱建物の一例として、北西隅に柱穴をもたない建物の構造を認めることが出来るのではないだろうか。　　（仁保晋作）

<註>

① 『三重県文化財年報16』 三重県教育委員会　1986

② 田坂　仁・稲垣良二「青ノ代遺跡」『昭和59年度農業基盤整備地域調査報告』 三重県教育委員会　1985



第10－４図　遺物実測図（１：３）

付　　篇

付 篇 目 次

付篇１．
近畿地方出土の埋設土器について……1

付篇２．
名張市赤目　辻垣内遺跡出土の縄文土器……7

付 篇 1 挿 図 目 次

図１　近畿地方における埋設土器遺跡分布図
図２　京都府北白川追分町（京都大学植物園）遺跡における埋設土器の出土状況

付 篇 1 表 目 次

表１　近畿における中・後期の埋設土器

付 篇 2 挿 図 目 次

図１　辻 垣 内 遺 跡　包含層出土の縄文土器（１），ＳＫ２出土の縄文土器（１）
図２　〃　包含層出土の縄文土器（２），ＳＫ２出土の縄文土器（２）
図３　〃　包含層出土の縄文土器（３）
図４　〃　包含層出土の縄文土器（４）
図５　〃　包含層出土の縄文土器（５）
図６　〃　包含層出土の縄文土器（６）
図７　〃　包含層出土の縄文土器（７）
図８　〃　横に流れる入り組み文を持つ土器
図９　〃　名張盆地の縄文時代遺跡

付 篇 2 表 目 次

表１　辻 垣 内 遺 跡　縄文土器観察表

付 篇 2 図 版 目 次

ＰＬ １　辻 垣 内 遺 跡　縄文土器（１）
ＰＬ ２　〃　縄文土器（２）
ＰＬ ３　〃　縄文土器（３）
ＰＬ ４　〃　縄文土器（４）
ＰＬ ５　〃　縄文土器（５）

付篇1

近畿地方出土の埋設土器について

京都大学埋蔵文化財研究センター　千葉　豊

1．はじめに

さきに報告したように（本報告書、Ⅸ章参照）、中戸遺跡からは縄文人がなんらかの意図をもって土中に埋設した土器が3基発見された。一般に、「甕棺」あるいは「埋甕」と呼ばれる、このような出土状態を示す土器は東日本では数多くの事例が報告され、中部高地や関東では中期後半に盛行する屋内埋甕の検討を中心として多くの研究がなされている[1]。一方、西日本では晩期の人骨出土甕棺などの一部の集成的検討[2]を除くと、事例数が少なかったこともあって、具体的な検討はほとんどなされてこなかったといえるであろう。

ところで、近年、近畿地方においては縄文遺跡の調査・報告が進むにつれて、埋設土器の事例の報告が増加してきており、その時期的変遷や分布・系譜・用途といった諸問題に一定程度、接近できる資料が蓄積されつつある。

本稿では、以上のような現状の理解にたって、まず、近畿地方出土の埋設土器を集成し、そのあり方の検討を通じて、埋設土器風習の実態を明らかにするという基礎資料の整備を課題とする。その上で、上記した諸問題について考察を及ぼし、現段階での理解を述べておきたいと思う。

なお、筆者は人がなんらかの意図をもって土中に埋設した土器を埋設土器と総称し、その用語自体に性格や時代を限定するような意味付けを与えていないが、本稿では中戸出土の埋設土器と直接的な関連を有すると思われる縄文中・後期の資料を検討の対象とした。晩期の埋設土器については機会を改めて検討することとしたい。

2．検討の視点

数多くの先行研究では、様々な点が検討対象とされており、検討すべき視点はほぼ出尽くしているといえる。最初に、問題とすべき視点について簡単にふれておこう。検討すべき点は次のように大きく4つにまとめることができるであろう。

（1）埋設土器そのものの検討
　a）器種（有文、無文など／深鉢、壺など）
　b）型式、系譜の問題（在地か異系統か）
　c）埋設前の用途の検討（炭化物の付着など）
　d）法量
（2）埋設法に関する検討
　a）使用個体数、複数時の組合せ方（単独、合わせ口、合わせ蓋／合わせ目への別土器の被覆）
　b）埋設状態（正位、斜位、逆位、横位）
　c）欠損状態、人為的な打ち欠き・穿孔
　d）掘り方の規模・形態
　e）配石等の附属施設（上部の構築物＝標識、支え石など）
（3）空間的位置の検討
　a）屋外／屋内（どの位置か）
　b）他の遺構との関連性
（4）内容物の検討

3．事例の検討

土器の分布圏等より、福井県、三重県から兵庫県の範囲までを近畿とし、対象範囲とした。また、時期別に変遷を把握するために、大きく、中期後葉以前、中期後葉、後期初頭、後期前葉、後期後葉の時期に大別した[3]。集成の結果を表1に、遺跡の分布を図1に示す[4]。管見では、26遺跡60例を集成することができた。中期後葉以前および後期後葉に属するものについては寡聞にして類例を捜すことができなかった。時期別に、そのあり方について、上記した視点ごとにみていくことにしよう。

＜中期後葉＞　近畿における埋設土器の初見期である。三重県地蔵僧・東野B、福井県右近次郎・後野という近畿東部、北部および近畿中央部の奈良県宮滝で資料がみられるが例数は少ない。

（1）器種はすべて深鉢で有文が多い。
（2）すべて単独埋設である（晩期の埋設土器と異

なり、滋賀県今安楽寺の１例を除いて、中・後期例はすべて単独土器埋設である）。右近次郎では検出された２例とも底部を打ち欠いている。すべて正位に埋設している。

（３）屋外、屋内ともにあり、全体数は少ないが屋内例が多い。右近次郎例の１基は、炉と向き合う位置で、壁ぎわに近い位置にあり、入口付近に位置すると想定することができる。

（４）内容物のわかる例はない。

この時期は中部高地から西関東では屋内埋設土器が普遍的に存在する時期であり、隣接地域である岐阜県の牧野小山[5]、阿曽田[6]では屋内埋設土器をもつ住居が複数発見されている。福井県角野前坂[7]で発見されている屋内埋設土器も詳細は不明であるが、この時期に属するものであろう。今後、近畿中央部でも類例が増加することも予測されるが、現状の分布・例数から判断して、中期後葉の段階では、近畿では埋設土器はまだ安定した普及状態を示しているとは言えず、分布の中心も近畿東部・北部といった東日本の影響をより強く受け得た地域にあったと考える。

＜後期初頭＞　例数は急増し、12遺跡19例以上が

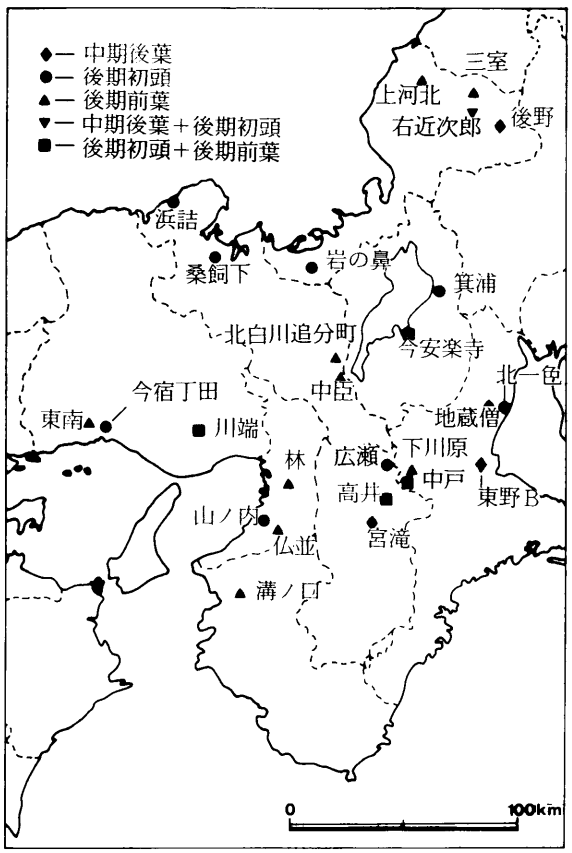


図１　近畿地方における埋設土器遺跡分布図

確認できる。京都府桑飼下・浜詰、大阪府山ノ内、兵庫県今宿丁田といった事例から、さらに西に進出し、ほぼ近畿全域に分布する状況をみてとれる。さらに西に位置する九州の福岡県長野宮ノ前でも、底部を打ち欠き、正位にすえられた埋設土器が検出されており、後期初頭に位置付けられている[8]。この段階で、急速に西に伝播していったと理解することができるであろう。

（１）使用されている土器は深鉢が多いが有文、条線地、縄文地といった多様な器種が使用されている。口縁部から胴部が遺存している例で、無文になるものは確実な例をみとめることができない。

（２）埋設形態は滋賀県今安楽寺の１例を除いて、単独埋設である。今安楽例は大型の有文深鉢の内部に縄文地深鉢が入っていたもので、内部の土器は蓋として機能していたとも想定できる。ただし、他の土器で蓋をしていた例は中・後期の例では類例がなく、むしろ、内部出土の土器は埋納物と考えた方がよいのかもしれない。

埋設状態は正位が多いが、逆位、横位もある。底部に穿孔を施す例、底部を打ち欠く例が多い。右近次郎では、ひとつの住居跡より２基の埋設土器が検出されており、そのうちの１基は逆位に埋設されたのち、床面上に川原石３個を用いて配石が施されていた。

（３）屋外、屋内ともに認められるが、屋外例が多い。福井県岩の鼻、奈良県高井では同時期の住居跡・土坑が、滋賀県箕浦や奈良県広瀬では同時期の土坑が近接する。岩の鼻例について、報告者は埋設土器を小児用甕棺と考え、近接する成人用土壙墓、住居跡との有機的関係を想定している。

（４）滋賀県今安楽寺で１例中より動物の牙？が出土している。

＜後期前葉＞　10遺跡26例以上が確認でき、前段階よりさらに増加し、ほぼ近畿全域で資料がみとめられる。

（１）器種はすべて深鉢で、有文、縄文地、無文がみとめられるが、無文のものが卓越する点で前段階との差異をみせる。

（２）正位例が多いが、前段階では１例のみみられた横位例がやや増加の傾向を示し、一方、逆位の埋

時期	遺跡名	所在地	位置	埋設形態	出土数	器種・型式	埋設状態					欠損状況	他の遺構、備考
							正	斜	逆	横	不明		
中期後葉	地蔵僧	三重県亀山市川崎町	屋外	単独	1	有深・醍醐式	1						住居跡、土坑
〃	東野B	三重県一志郡嬉野町	屋外	単独	1	有深・醍醐式	1						
〃	石近次郎	福井県大野市	屋内	単独	2	有深・大杉谷式	2					底部打ち欠き	時期不明がもう1基ある
〃	後野	福井県大野郡和泉村	屋内	単独	1	条深・大杉谷式					1		住居跡、土坑
〃	宮滝	奈良県吉野郡吉野町	屋外	単独	1	有深・北白川C式	1						
後期初頭	北一色	三重県鈴鹿市	屋外	単独	1	有鉢・中津式			1			底部穿孔	
〃	中戸	三重県名張市	屋外	単独	1	有深・中津Ⅱ式	1						土坑
〃	岩の鼻	福井県遠敷郡名田庄村	屋外	単独	2	有深・ 深・	1 1					底部穿孔	土坑墓、住居跡
〃	石近次郎	（前出）	屋内	単独	2	？・ 有深・中津Ⅰ式			1		1	底部打ち欠き	上部に配石 同一住居跡より出土
〃	笠浦	滋賀県坂田郡近江町	屋外	単独	4	有深・中津式 深・	2 1				1	1基に底部穿孔 底部穿孔	土坑
〃	今安楽寺	滋賀県神崎郡能登川町	屋外	合葬？	1	有深 縄深 中津式	1					両者とも底部穿孔	大型の有深内部に、縄深が入っていた。
〃	〃	〃	屋外	単独	1	条深・中津式	1					底部穿孔	
〃	桑飼下	京都府舞鶴市	屋内？	単独	1	有深・	1						
〃	浜詰	京都府竹野郡網野町	屋内	単独	1	有深・中津Ⅱ式			1				
〃	高井	奈良県榛原郡榛原町	屋外	単独	2	有深 北白川C式4期 縄深 ～中津Ⅰ式	2					底部打ち欠き	住居跡、土坑
〃	広瀬	奈良県山辺郡山添村	屋外	単独	1	有深・中津式	1？					底部打ち欠き	
〃	山ノ内	大阪府岸和田市田治米	屋外	単独	1	縄深・中津式				1			
〃	今宿丁田	兵庫県姫路市		単独	1	有深・					1		
後期初頭～前葉	中戸	（前出）	屋外	単独	2	深・	2					底部穿孔	土坑、前葉の住居跡
〃	今安楽寺	（前出）	屋外	単独	6	条深・ 深・	2 4					1基に底部穿孔 底部穿孔3、打ち欠き1	
〃	川端	兵庫県三田市木野	屋外	単独	1	深・	1						
後期前葉	下川原	三重県名張市夏見	屋外	単独	2	無深・北白川上層式	2					底部穿孔	住居跡、土坑
〃	三室	福井県勝山市遅羽町	屋内？	単独	1	縄深・	1						内部に礫の埋納これ以外に時期不詳の屋内3基
〃	上河北	福井県福井市上河北	屋外	単独	1	無深・北白川上層式2期か					1	底部穿孔	
〃	北白川追分町	京都府京都市左京区	屋外	単独	7	縄深・北白川上層式 無深・1期	 4			1 2		底部打ち欠き 底部穿孔1、打ち欠き5	配石遺構、上部に配石のあるものあり
〃	中臣	京都府京都市山科区	屋外	単独	2	無深・北白川上層式2・3期	1				1	底部穿孔1、打ち欠き1	
〃	高井	（前出）	屋外	単独	2	有深 広瀬土坑 無深 40段階	2					底部穿孔	
〃	溝ノ口	和歌山県海南市	屋外	単独	1	無深・北白川上層式2期				1		底部一部打ち欠き (他の底部片をかぶせる)	配石・集石遺構
〃	〃	〃	屋内？	単独	1	無深・北白川上層式1～2期	1					底部穿孔	住居跡、土坑
〃	仏並	大阪府和泉市	屋外	単独	2	無深・北白川上層式2期	2					1基に底部穿孔	住居跡、土坑
〃	〃	〃	屋内	単独	2	無深・北白川上層式1期	2					底部穿孔1、打ち欠き1	1基は最大径付近に礫をおいて支える
〃	林	大阪府藤井寺市	屋外	単独	1	有深・北白川上層式1期	1					底部穿孔	南約1.5mに住居跡
〃	東南	兵庫県揖保郡太子町	屋外	単独	4	無深・北白川上層式併行	4					底部打ち欠き	住居跡、配石遺構

表1　近畿における中・後期の埋設土器

器種の略称は次のとおり。有深－有文深鉢、有鉢－有文鉢、縄深－縄文地深鉢、条深－条線地深鉢、無深－無文深鉢、深－胴下半部のみ残存で、深鉢とのみ判定できるもの。

設はみられなくなる。

（3）屋内例もみとめられるが屋外例が圧倒的である。同時期の住居や土坑が近接して存在する例として三重県下川原、和歌山県溝ノ口、大阪府仏並・林、兵庫県東南がある。溝ノ口や東南では配石遺構も見つかっている。複数検出した遺跡でも埋設土器が集中して分布するといった偏りはみとめられず、集落の一画に住居や土坑あるいは配石遺構と近接して、散在的に存在するあり方が一般的といえる。

これに対して、京都府北白川追分町では9基の配石遺構とともに、7基の埋設土器が狭い地区に密集して見つかっている（図2）。配石は調査区の南側に、埋設土器は北側にかたよる傾向にあるが、配石と埋設土器が一体となっているものも2例あり（IV号配石と5号埋設土器およびIX号配石と7号埋設土器）、両者の密接な関連が伺える。報告者は、配石は配石墓、埋設土器は甕棺と考えている。住居は存在せず、祭域・墓域的性格が強いと考えられる。周囲に住居域が存在する可能性も高いが、密集したあり方や埋設状態における横位例が多い点など、他の遺跡のあり方とはやや異質であるといえよう。

（4）北白川追分町の1例から骨片、福井県三室で礫が出土している。

4．小　結

以上、近畿出土の縄文中・後期の埋設土器について具体的なあり方についてみてきた。ここでは、以上の具体例に基づき、さらに周辺地域のあり方を参照しながら、近畿地方出土の埋設土器の系譜・時期的変遷・性格・用途といった問題を整理しておきたい。

＜埋設土器の系譜・時期的変遷＞

近畿地方の埋設土器は、その初見は中期後葉であり、それ以前から存在し、展開している東日本からの風習の伝播で捉えるべきものであろう。東日本の事例を検討した山本暉久氏によると埋設土器は、まず、屋外例については前期に遡るものが最も古く、後期前葉まで増加の方向をたどっている。一方、屋

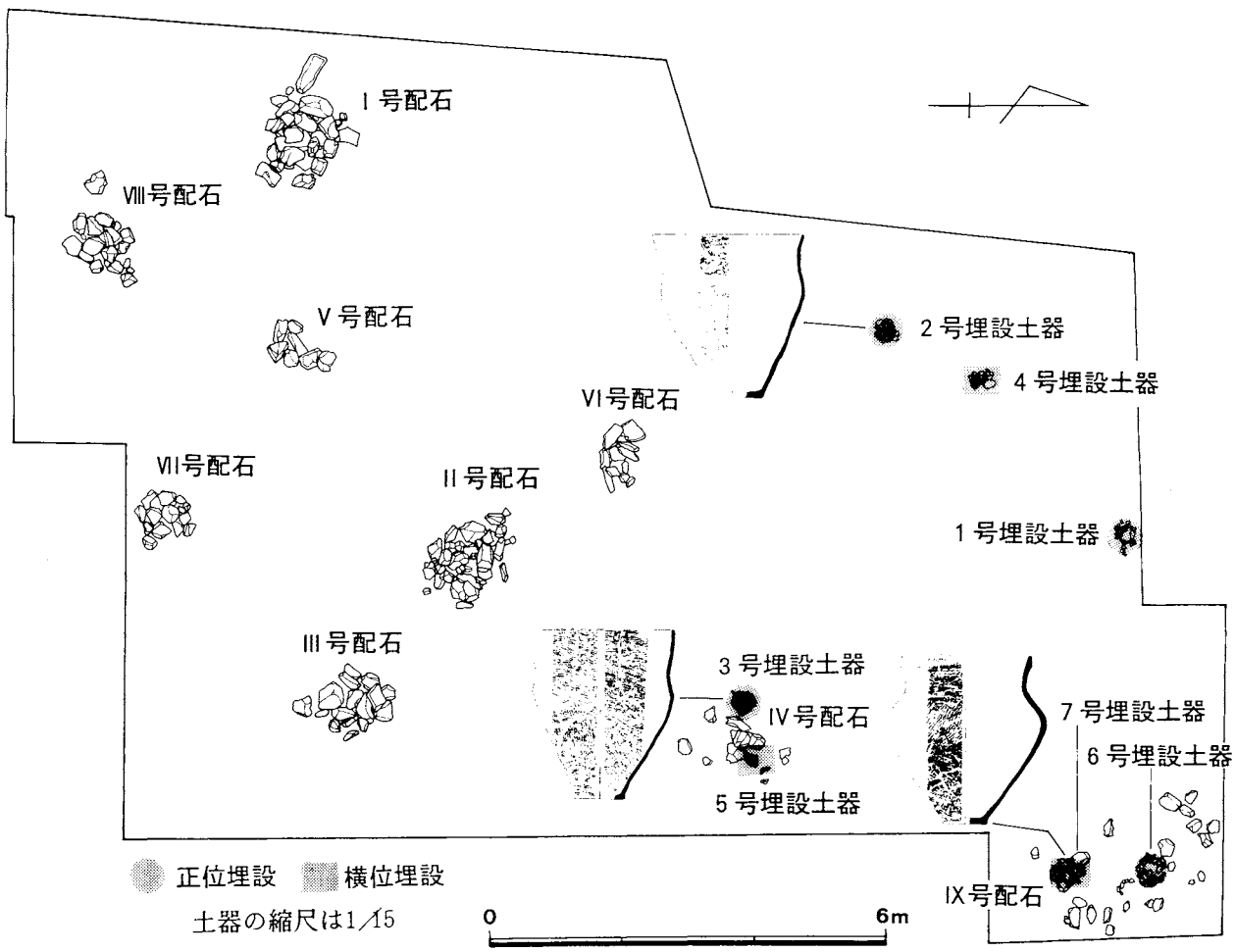


図2　京都府北白川追分町（京都大学植物園）遺跡における埋設土器の出土状況（中村74文献をもとに作図，埋設土器の番号は泉77文献に拠る）

内例は中期中葉、勝坂式に始まり、中期後葉には普遍的なものとなり、中期末～後期初頭までこの傾向は継続するものの、後期前葉には急激に減少するという[9]。

これに対して、近畿地方では中期後葉では屋内例が多く、後期初頭では屋外・屋内例ともにみられるが、屋外例が優勢となり、後期前葉に至って屋内例も見られるものの屋外例が圧倒的に多くなり、後期中葉には屋内・屋外例ともに消滅してしまうという変遷を示している。これは東日本のあり方とほぼ相似的な展開を示しているといえ、近畿における土器埋設の風習の成立、展開が東日本からの風習の伝播によって起ったと理解できる。

中期後葉以降、後期前葉にいたる時期は土器や石器などの生活用具あるいは耳飾りや配石などの祭祀的宗教的用具・施設が新たに東日本から流入してくる時期と考えられており[10]、埋設土器風習もこの見解を支持するひとつの資料とすることができるであろう。

＜埋設土器の性格・用途＞

埋設土器の用途を考える上で、もっとも重要なのは内容物の検討である。内容物のわかる例は晩期以前では少なく、骨片が出土した北白川追分町、礫が出土した三室、動物の牙？が出土した今安楽寺がある程度で、手がかりは少ない。そこで、類例の多い東日本の事例を参照してみよう。この時期には、屋内の埋設土器と屋外の埋設土器の２者がある。屋内の埋設土器の用途については、幼児の埋葬棺、胎盤の収納施設あるいは供儀埋納の施設といった見解がある[11]が、根拠となるべき内容物が検出された事例はまだないようである。

一方、屋外の埋設土器については、人骨のみつかっている例がかなりある[12]。そのうち、後期のものについてみてみると後期初頭の青森県で集中的に見つかっている成人再葬墓をのぞくと胎児、新生児、幼児といった未成人期の人骨が圧倒的に多く、屋外埋設土器の重要な用途として未成人甕棺があったことは間違いないと思われる。先に述べたように、近畿の埋設土器は東日本の風習の伝播によって成立、展開すると考えるので、この時期の屋外埋設土器の主要な用途として、未成人を対象とした埋葬用容器＝甕棺を想定することができよう。

ただし、すべての埋設土器を甕棺とすることは、現状では早急であろう。すでに述べたように、他の遺構との関連において、埋設土器のあり方に多様性がみとめられることや瀬戸内地方の岡山県岡山大学大学院自然科学研究科棟新営予定地でみつかった後期中葉（彦崎Ｋ２式）の埋設土器には、堅果類が貯蔵されていた[13]ことからも推定されるように、埋設土器が多様な役割・用途をもっていたことも否定できない。近畿・瀬戸内でみつかっている貯蔵穴の立地条件や埋設土器の多くが意図的に底部を破壊されている点から、近畿の埋設土器の大半について、貯蔵用容器である可能性は乏しいと考えているが、用途・性格を一層明らかにしていくためには、内容物について脂肪酸分析等の化学的分析を積極的に進めていく必要があろう。

なお、近畿の埋設土器風習は後期前葉でいったんすたれるようであり、再び、みられるようになるのは晩期前葉以降である。晩期例は土壙墓とともに群集して、明瞭な墓域を構成するものが多く、人骨出土例もあり、甕棺としての性格が明瞭である。後期の埋設土器と系統的な関連性を有するかどうかについては、今のところ年代的な隔たりが大きいので今後の研究課題としておきたいと思う。

以上、埋設土器を検討する上で、２・３問題となる点について考察を加えた。最初にも記したように、本稿は基礎資料の整備を主要な課題とし、問題点については若干の整理を行えたにすぎない。今後、他の地域や晩期の事例との比較検討などを行いながら、さらに検討を加えていきたいと考えている。

また、今回集成した資料の大部分は最近10年間ほどの調査の成果によるものである。現状の調査状況を考慮すれば、今後、関連資料が急増していくことも予測できよう。そしてまた、埋設土器としての認定やその性格の解明には、まず第１に、発掘現場での検討が不可欠であることは言うまでもないことである。本稿が、従来あまり関心をもたれることの少なかった西日本縄文時代の埋設土器について、目を向けていただくきっかけとなれば、本稿の目的の一端は達せられたものとなろう。

（謝辞）　資料の収集・観察にあたっては、植田文雄、門田了三、川崎保、田村陽一、中村健二、服部芳人、菱田哲郎、藤田憲司、穂積裕昌、三村修司、柳沢一宏、吉田昇の各氏に大変お世話になり、有益な御教示をいただいた。末尾ながら記して、深甚なる感謝の意を表します。

＜注＞

① 総括的に論じているものとして，木下忠『埋甕――古代の出産習俗』，1981年，菊池実「甕棺葬」・桐原健「埋甕」　縄文文化の研究９，1983年を参照。

② 坂詰秀一「縄文文化における甕棺葬の基礎的研究」　立正大学文学部論叢９，1958年，　渡辺誠「縄文時代甕棺の基礎的研究」１　考古学論叢，1974年。

③ 胴下半部～底部のみ遺存しているもので，後期初頭か後期前葉か，時期判別の困難な資料については，後期初頭～前葉とした。また，後期初頭とした時期には，一部，中期最末期と考えられるものも含めている。

④ 埋設土器としての認定や具体的なあり方については，報告書の記述を尊重したが，型式認定や埋設状態の判定で独自の判断を下した部分がある。また，底部穿孔等の観察にもとづき，筆者が埋設土器として認定したもの（三重県下川原例）もある。また，欠損状況については，埋設時の人為的な破壊と認定できるもののみ記述した。

⑤ 増子康真ほか『牧野小山遺跡』　県道七宝弥児線道路工事埋蔵文化財調査報告書，1973年。

⑥ 中津川市教育委員会『阿曽田遺跡』，1985年。

⑦ 南洋一郎「角野前坂遺跡」　福井県史　資料編13，1986年。

⑧ 川崎保ほか『長野川流域の遺跡群』Ⅰ　前原町文化財調査報告書第31集，1989年。

⑨ 山本暉久「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について」信濃29－11・12，1977年。

⑩ 泉拓良「京都大学植物園遺跡」　佛教藝術　115号，1977年，泉拓良「後期の土器－－近畿地方の土器」　縄文文化の研究４，1981年。

⑪ 前掲注①桐原文献。

⑫ 前掲注①菊池文献。

⑬ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「大学院自然科学研究科棟予定地」　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第２号，1989年。

図表出典

遺　跡　　名　　文　　献

地蔵僧――亀山市教育委員会『地蔵僧遺跡発掘調査報告』　亀山市埋蔵文化財調査報告Ⅰ，1978年。

東野Ｂ――1987年度，三重県教育委員会発掘資料。服部芳人氏，田村陽一氏の御教示による。

右近次郎――中司照世・工藤俊樹『右近次郎遺跡』Ⅰ　大野市文化財調査報告書　第２冊，1982年，木下哲夫・工藤俊樹「右近次郎遺跡」　福井県史　資料編13，1986年。

後　野――橋本幹雄ほか『後野遺跡』，1978年。

宮　滝――末永雅雄『宮滝の遺跡』　奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告　第15冊，1944年。

北一色――鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市史』第１巻，1980年。

岩の鼻――網谷克彦・畠中清隆編『岩の鼻遺跡』Ⅱ，1987年。

箕　浦――滋賀県埋蔵文化財センター「縄文後期の埋甕群を発見」　滋賀県埋文ニュース　第112号，1989年および調査担当者，中村健二氏の御教示による。

今安楽寺――植田文雄「琵琶湖東岸部における縄文後期集落の調査――今安楽寺遺跡――」　第７回近畿地方埋蔵文化財研究会資料，1989年，および調査担当者，植田文雄氏の御教示による。

桑飼下――渡辺誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』，1975年。

浜　詰――岡田茂弘「京都府浜詰遺跡発見の竪穴住居趾」　先史学研究　第１号，1959年。

高　井――柳沢一宏『榛原町分布調査概報』　榛原町文化財調査概要２，1987年，および調査担当者，柳沢一宏氏の御教示による。

広　瀬――松田真一「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」　奈良県遺跡調査概報（第１分冊）1981年度，1983年。

山ノ内――（財）大阪府埋蔵文化財調査協会，藤田憲司氏の御教示による。

今宿丁田――兵庫県立歴史博物館編『発掘が語る兵庫の歴史――10年の成果――』，1986年。

川　端――吉田昇・岸本一宏『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（２）』　兵庫県文化財調査報告書　第62冊，1988年および吉田昇氏の御教示による。

下川原――門田了三『下川原遺跡』，1986年。

三　室――仁科章『三室遺跡』　勝山市文化財調査報告　第４集，1982年，仁科章・工藤俊樹『三室遺跡』Ⅱ　勝山市文化財調査報告　第５集，1983年。

上河北――木下哲夫「上河北遺跡」福井県史資料編13，1986年。

北白川追分町――中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』，1974年および泉拓良「京都大学植物園遺跡」佛教藝術　115号，1977年。

中　臣――（財）京都市埋蔵文化財研究所編『中臣遺跡発掘調査概報』昭和56年度，1982年。

溝ノ口――中尾憲市・前田敬彦『溝ノ口遺跡』Ⅰ，1984年および同『溝ノ口遺跡』Ⅱ，1988年。

仏　並――松尾信裕ほか『仏並遺跡』，1986年。

林　――大阪府教育委員会『林遺跡発掘調査概要・Ⅲ』，1981年。

東　南――調査担当者，三村修次氏の御教示による。

付篇 2

名張市赤目　辻垣内遺跡出土の縄文土器

京都大学埋蔵文化財研究センター　千葉　豊

1．はじめに

辻垣内（つじがいと）遺跡は三重県名張市赤目町に所在する。ほ場整備事業にともない、三重県教育委員会によって1982年に発掘調査が行われた。この時の調査結果は、『昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』（1983年）に掲載済みである。しかし、この報告書では縄文土器に関していえば、出土していることが記述されているものの図や写真はなく、出土縄文土器の具体相を知る上では不十分な報告であったことは否めないであろう。

第Ⅸ章で報告した中戸遺跡と辻垣内遺跡は直線距離にして約1.6kmと至近距離にあり、後で詳しく述べるように、時期的にも後期前葉を中心にしている点等、共通点が多くみとめられ、両遺跡の位置する名張盆地あるいは名張川・宇陀川水系というひとつの小地域における縄文遺跡の変遷や縄文土器の様相を把握するうえで、ともに欠かすことのできない重要な遺跡になると考える。

筆者は、中戸遺跡出土縄文土器の整理を進行する過程で辻垣内遺跡よりまとまった縄文土器が出土していること、また、大部分が未整理のままになっていることを教示されたおりに、その重要性について指摘して、中戸とともに出土土器の整理を進めることを許可していただいた。付論として、辻垣内遺跡出土の縄文土器を掲載できたのはこうした経緯による。

2．出土縄文土器の概略

今回、整理を終了し、報告する資料は、縄文土器としてまとめられて整理箱５箱に納められていたものである。辻垣内遺跡からは、他の時期の遺物も含めて約30箱の資料が出土しており、その中にも縄文土器が入っている可能性があるので、辻垣内で出土した縄文土器のすべてに目を通して今回整理したわけではないことを最初に断わっておきたい。ただし、縄文土器としてまとめられていた資料については、時期判別の可能な資料を中心に、ごく小片を除いてほとんどすべてを掲載することができたので今回掲載した資料をもとに出土縄文土器の大まかな傾向を捉えることは可能であろう。

土器はほとんど大部分が包含層出土であり、一部、土坑より出土したものがある。遺存状況は中戸出土のものと比較して良好なものが多い。また、辻垣内遺跡は遺物が約10万㎡にもわたって散布する広大な遺跡でそのうちの約7,280㎡が調査の対象となり、７ケ所の調査区に分けて実施されている。縄文土器は大部分がＤ区とされた約480㎡の面積を有する調査区より出土しているがＣ区とされた調査区からもややまとまった量出土しており、Ｂ区からも少量出土している。遺構出土のものはごくわずかであり、地点による土器のまとまりはとくにみとめられないので、ここではすべての資料を一括して、従来の編年的成果にしたがって時期別に記述していくことにした。

3．縄文土器の分類

縄文前期末葉（図２－１）　確認したのは１の１点のみである。口縁部が大きく外傾する深鉢で山の低い波状口縁を呈する。口辺に、Σ状原体で刻みを施した低い三角隆帯を横走させる。口唇部にも同様の原体で刻みを加え、内面にも縄文を施す。大歳山式に比定できる。

縄文中期前葉（図１－３、図２－２）　２は船元式前半期に特徴的な撚りのゆるい縄文を縦走させる。器壁の厚さから判断して船元Ⅱないし Ⅲ式に属するであろう。３はほぼ完形に復元できた有文深鉢。頸部がくびれて口縁部は内湾しながら立ち上がり、７山の波状口縁を呈する。底部は、底縁から中央へ向かって立ち上がる凹底である。器高48.0cm、口縁部径33.5cm、胴部最大径30.8cmをはかる。半截竹管文で頸部に横走する界線を施し、口縁部と胴上部を文様帯とする。外面全体に地文として深浅深となる縄巻縄文を縦走させ、原体の異なる縄文を用いて、口

唇部と口縁部内面に斜行縄文を施している。

口縁部文様は波頂部と波底部からそれぞれ半截竹管文を垂下させ、山形文と逆山形文を描く。描き方は一筆状に続けずに左右それぞれ下方へ描きおろしている。7つある波底部直下の空間のうち、4つの空間のみ山形文で埋めている。胴部には逆山形文を8単位描く。逆山形文の頂部が波底部の位置に対応するように配しているが、波頂部に対応する位置に1単位描いているため口縁部文様の単位数よりも1単位多くなっている（巻首図版1展開写真参照）。以上の文様の施文順序を沈線の切り合い関係をもとに復元すると以下のようになる。

縄文施文→頸部に横走する沈線（界線）→

（A）→波頂部逆山形文→波頂部山形文→界線の追加→波底部山形文

（B）→胴部の逆山形文→界線の追加

この切り合い関係からは、（A）口縁部文様と（B）胴部文様の先後関係は不明であるが、胴部と口縁部の文様が基本的に対応していることを考慮すると、まず口縁部文様を山形波状口縁を目安に描いたのち、口縁部文様を基準に胴部文様を描いたと推測しうる。また、波頂部が均等に割付けられていないという器形上の歪みを口縁部では波底部に山形文を描くことで解消しようとした（幅広の空間のみに描かれている点に注目）のに対して、胴部ではこの部分で口縁部文様との対応にズレが生じたために1単位多く描く結果となったのであろう。

縄文中期後葉～末葉（図1－7、図2－4～9）

4～6は沈線を施してから縄文を加えている深鉢の口縁部。4は口縁部に3本の粘土紐を斜めに貼付け、突起状に作り出す。頸部には綾杉状に沈線を配す。6は口唇上にも縄文を加えている。7～9は縄

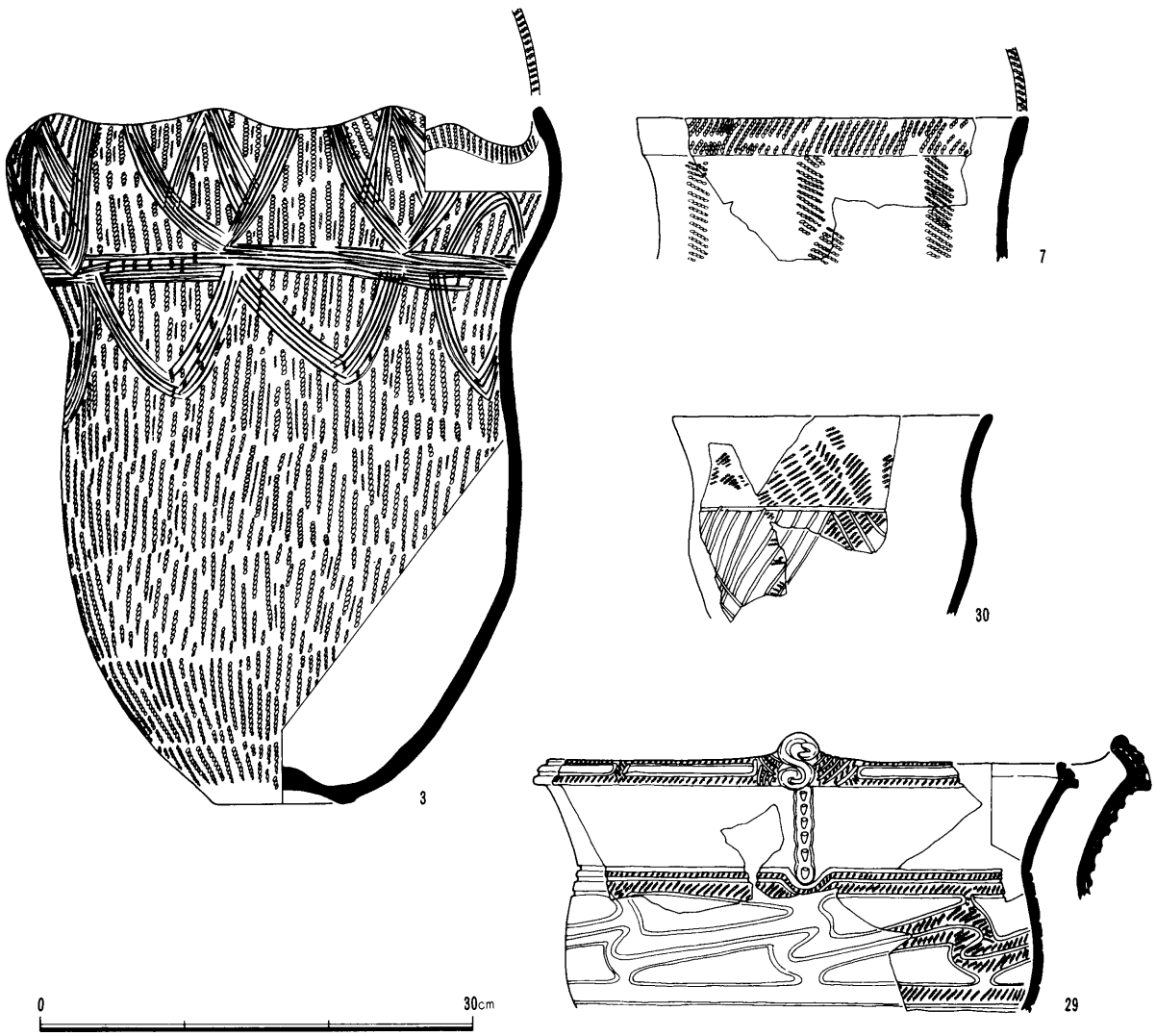


図1　包含層出土の縄文土器（1）（3・29・30），SK2出土の縄文土器（1）（7）

図2　包含層出土の縄文土器（2）（1・2・4～6・10～28），SK 2 出土の縄文土器（2）（7～9）

図3　包含層出土の縄文土器（3）

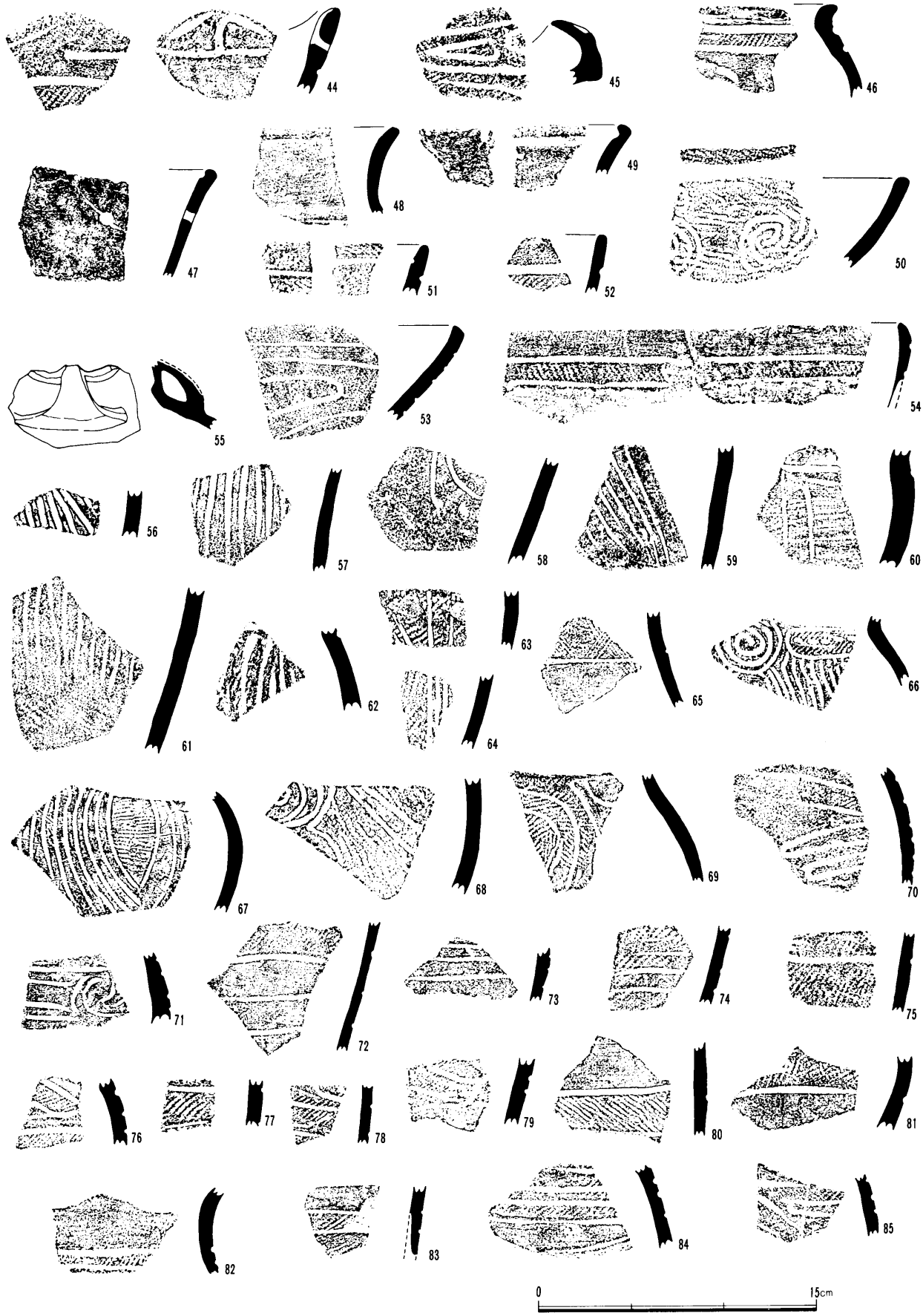


図4　包含層出土の縄文土器（4）

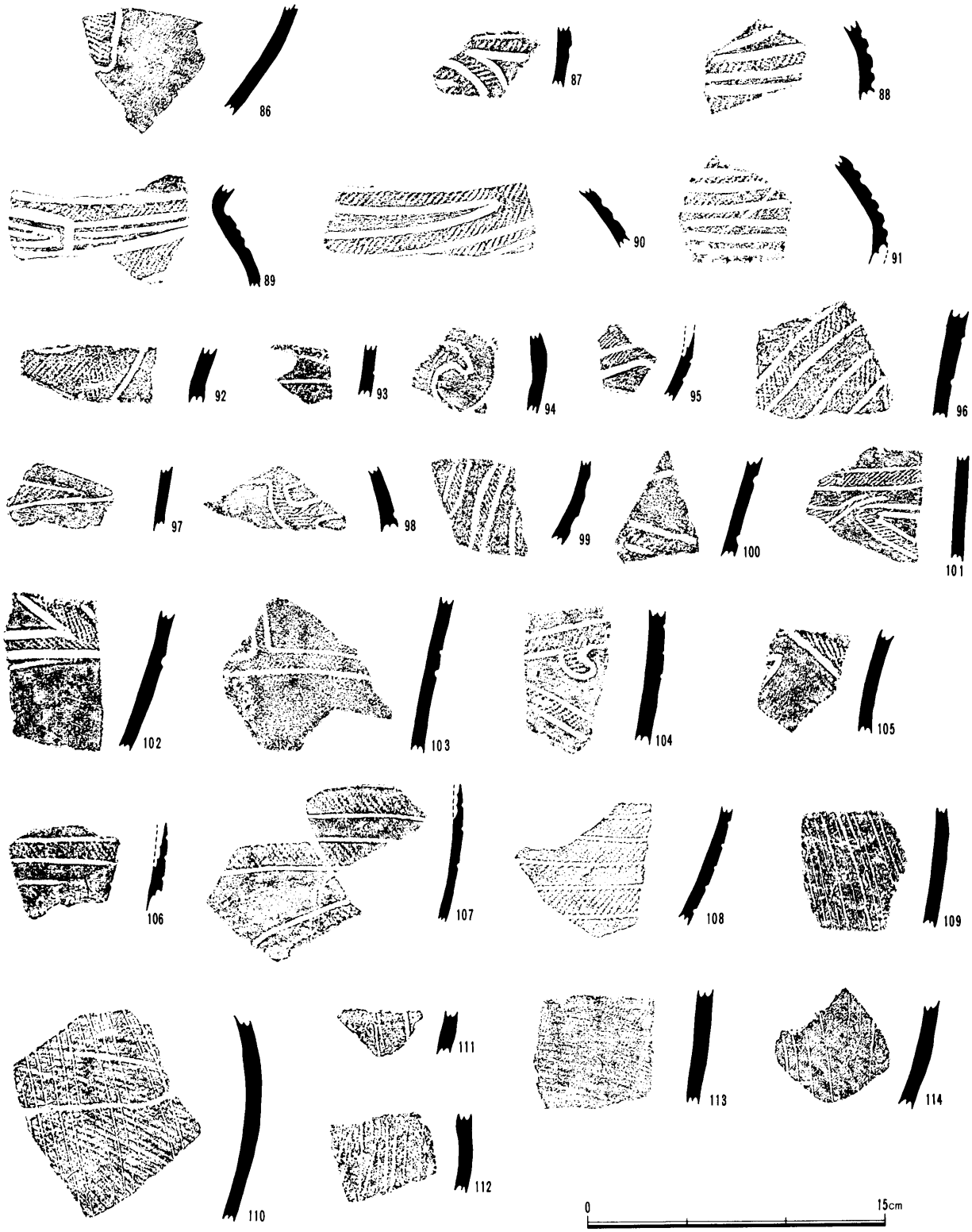


図5　包含層出土の縄文土器（5）

図6　包含層出土の縄文土器（6）

文地深鉢。同一個体で、ＳＫ２より出土した。口縁部外面を幅広く肥厚させ、口唇上と口縁部に横位に縄文を施し、頸部以下には間隔をあけて縦位に縄文を施す。

後期初頭（図２－10）　10は口縁部直下に沈線が１条横走し、頸部には３条１組と推定させる縄文帯が斜行する。後期初頭～前葉の時間幅の中で捉えられよう。

後期前葉（図１－29・30、図２－11～28、図３～図７）　もっともまとまって出土した。器形や文様帯・文様の構成の差異等をもとに細別して説明しよう。

ａ類（11～29）　屈曲や肥厚によって区別した口縁部に文様帯を有する縁帯文土器。頸部がくびれる深鉢形を呈し、頸部・胴部にもそれぞれ文様帯（あるいは無文帯）を有するが、全体のわかる例は少ない。口縁部の作出の差異によって次のように細別できる。

ａ$_1$類（11～17・27）は口縁部前面を段状に肥厚させるもの。突起部には弧線文や渦巻文、円形刺突、三角形文を配する。文様帯の幅が広く、肥厚もしっかりしているもの（11～14）と肥厚が痕跡的で文様帯の幅が狭いもの（15～17・27）に分離できる。

ａ$_2$類（18～26・29）は、口縁部を屈曲あるいは「Ｔ」字状に肥厚させて区別しているもの。口縁部は、部分的に突起状に作り出すか、波状を呈する。29は口縁部～胴部まで器形復元できる資料。頸部がわずかにくびれ、口唇部を内外に肥厚させ「Ｔ」字状につくる。肥厚した口唇部には「Ｓ」字状隆帯を貼付け、突起部とし弧線文を配す。突起間には長方形の区画文を描き、外側に縄文を充填している。頸部には、突起に対応する位置に、隆帯を垂下させ、斜め下方から刺突を加えている。胴部は３条の沈線帯を基本とし、縄文を充填した縄文帯で横に流れる波状の文様意匠を描いている。調整は内外面とも篦で丁寧に研磨して仕上げている。接合しない同一個体の破片があり、頸部に隆帯のはがれた痕跡を有している。突起が何単位になるか厳密に決定することは困難であるが入り組み部が突起下と突起間の中央に配されていると考えると４単位となる可能性がもっとも高い。23・25は突起部で、23は「Ｓ」字状隆帯を横位に、25は縦に２個中央を刺突した円形浮文を貼付ける。25は両側を沈線で画した隆帯が口唇上をめぐっており、頸部に垂下条線文を施している。26は波頂部。波頂部には直線化した弧線文を配し、長方形区画文が口唇上をめぐる。ａ$_3$類（28）は口縁

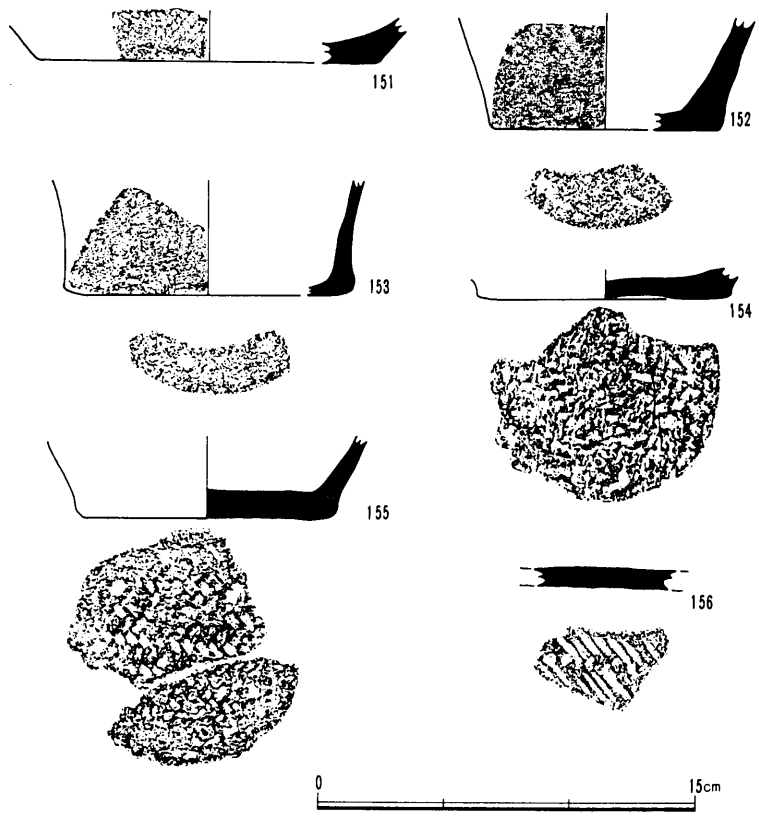


図７　包含層出土の縄文土器（７）

部が内側にシャープに折れ曲がるもの。口唇外側端部が張り出さない点でａ₂類と区別できる。山の高い波状を呈する。波頂部には直線化した弧線文を配し、波頂間を縄文を充填した長方形区画文でつないでいる。

ｂ類（40～42）　口縁部文様帯が内面にあるもの。肥厚しない点でもａ類と異なっている。２条の沈線を横走させ、41・42は縄文を充填する。41はゆるやかな波状を呈する波頂部で円形刺突を加えている。口縁外面にも幅狭く縄文を加えている。

ｃ類（30）　口縁部文様帯を省略した深鉢。口頸部は外反する。頸、胴部ともに、地に縄文を施し、頸胴部の境に沈線を一条横走させて界線とする。胴部には多条沈線を複合鋸歯文状に配している。

ｄ類（31～39）　東日本に系譜を求められる有文深鉢。バケツ形の単純な形態を呈する。口辺の隆帯の有無で２細別する。ｄ₁類（31～38）は口辺に隆帯を横位にめぐらし、部分的に「8'」字状浮文を貼付ける。体部には２条ないし３条の沈線による縄文帯で、三角形を基調とした文様を描く。36は口唇上にも縄文を施す。隆帯には刻みを加える例が多いが32は刻みを加えない隆帯を横走させている。ｄ₂類（38・39）は３条沈線による縄文帯が口辺を横走するもの。39は沈線の末端がクランク状に折れ曲がり、縄文帯を区切っている。

ｅ類（43～49）　鉢形の形態を呈するものを一括した。従って、文様構成等でさらに細分しうるものをまとめている。44・45は波頂部。44は口辺を縄文帯が横走し、波頂部前面を貫孔し、口縁部内外に沈線をめぐらしている。45は大きな三角形文の中に小さな三角形文を２個対向させ、縄文を充填している。46は胴部が大きく張り出し、２条沈線による縄文帯を胴上部に横走させる。口頸部は短く、外方へつまみ上げている。47～49は口頸部が無文となるもの。47・49は口縁部内側に凹線がめぐる。

ｆ類（50～54）　浅鉢形を呈するものを一括した。50は口唇および体部に縄文を施し、数条の沈線で「Ｊ」字文を描く。51～53は口辺に縄文帯が横走する。51は口縁部内面にも沈線を横走させ、口唇との間に縄文を加えている。53は３条１組の沈線で、横に流れる文様を描く。54は器壁が５㎜と薄く、内外丁寧な研磨で仕上げている。

ｇ類（55）　１点確認したのみである。口縁部が大きく、内傾する球形の形態を呈し、口縁部より橋状把手がつく。注口土器であろう。

ｈ類（115～139）　頸部が無文となる縄文地の土器。ほとんどは深鉢形の形態を呈するが、131・132は頸部が短く、鉢形の形態を呈するであろう。口縁部縄文帯のあり方で次のように細別する。

ｈ₁類（116～118・120～126）は口縁部前面に縄文を施すもの。口縁部はわずかに肥厚するものとほとんど肥厚しないものがある。124は疑似縄文を施している。125は口縁部に縄文を施文し、条線文を頸部に垂下させる。ｈ₂類（115・119・127）は口唇上に縄文を施すもの。127は粘土塊を貼付けて、突起状に隆起させている。ｈ₃類（128・129）は口縁部内面に縄文を施すもの。ｂ類と類似するが沈線１条のものをｈ₃類に分類した。128は穿孔を加え、その部分で沈線が半円状となる。ｈ₄類（130）は口縁部内外および口唇上に縄文を施すもの。口縁部外面はわずかに肥厚し、内面には１条沈線をめぐらしている。ｈ₄類（131・132）は鉢型を呈し、口頸部には縄文を施さないもの。

133～139は胴部。133は頸胴部の境に沈線を横走させる。

ｉ類（140～150）　無文深鉢を一括した。頸部がわずかにくびれるかほとんどくびれのない単純な形態の深鉢である。

有文土器胴部（56～114）　ａ類～ｇ類に分類した土器の胴部資料となるものを一括した。56～69は多条沈線が縦位に展開するのを特徴とするもの。63・64は縄文を施してから沈線を施文するが他の縄文をもつ例は沈線→縄文の充填手法で施されている。65は横位に沈線をめぐらし、条線文を斜行させる。71は沈線帯を横位に配し、集約部で渦巻状にする。70・72～108は縄文を充填した縄文帯で横位あるいは斜位に文様を展開したもの。92～105は文様構成が斜位に展開するものが主体を占めるもので器形から判断してｄ類の胴部となろう。109～114は垂下条線文をもつ一群。この時期には頸胴部全面に条線文を施す深鉢が器種を構成するが本資料中では条線地深鉢の口縁部資料を確認していないので、ａ類を中心と

した深鉢の胴部資料となるものが主体を占めるものと考えられる。一部はh類とした口縁部に縄文をもつ深鉢の頸胴部となるものもあろう。

底部（151～156）　底部の資料は多くなく、6点確認した。いずれも平底で154～156は網代底である。151は胴下部まで縄文を施している。151は縄文中期、他は後期に位置づけられよう。

4．出土縄文土器の位置づけ

以上、説明したように辻垣内遺跡からは前期末葉～後期前葉の土器が出土している。ここでは、大別した時期ごとに細別時期や系譜等について検討しておきたい。

中期前葉　ほぼ完形復元できた3は、地文に縄巻縄文をもち、間壁編年の船元Ⅳ式に比定できる[1]。また、泉拓良氏は西日本の中期の土器を再整理し、「船元・里木式土器様式」を6様式の変遷で捉え直し、その第4様式に本資料を位置付けている[2]。縄巻縄文を船元Ⅳ式の型式特徴とする間壁編年にしたがって船元Ⅳ式の範疇で捉えておきたいが山形文、逆山形文の文様意匠や口縁部内面の肥厚帯は船元Ⅲ式につながる古い特徴を有しており、Ⅳ式の古い段階に位置づけられると考える。

中期末葉　ＳＫ2から出土した縄文地の深鉢（7）は中期末葉～後期初頭に近畿から東海西部の地域にかけて型式を構成する器種である。本資料のように、口縁部のやや下がった位置に粘土紐を加えて口縁部を段帯状に区別するタイプと口縁部と頸部が形態上、区別されないタイプがある。前者は、大阪府西浦橋[3]・仏並[4]・小阪[5]等で中期末葉の土器に伴なっており、後者は三重県東庄内Ａ[6]で後期初頭の土器に伴なって出土していて、前者から後者への時期的変遷が捉えられる。本資料は、口縁部が段帯状に肥厚するタイプで、中期末葉に位置づけられる。

後期前葉　量的にまとまっており類別して説明を加えた。ａ類はいわゆる縁帯文土器で口縁部形態の差異で細分した。a_1類の口縁部前面に文様帯を有するもののうち、文様帯の幅が広く、肥厚もしっかりしているもの（11～14）は北白川上層式1期（後文では北白川上層式を省略し、1期、2期、3期と呼ぶ）[7]、肥厚が退化しているもの（15～17・27）は2期に比定できよう。a_2類（18～26・29）は口唇上施文タイプでＴ字状の口縁部形態、Ｓ字・円形の浮文、直線化した弧線文等、2期に特徴的な要素を有している。

29は頸胴部まで統一的に把握できる資料であり、詳しく検討してみよう[8]。まず、頸部には刻み目隆帯を垂下させる。これは関東の堀之内式にみられる垂下隆帯に系譜を求められるもので縁帯文土器の頸部に取り入れられたものとしてはＶ字状に隆帯を垂下させている、大阪府縄手第10次出土の例[9]（2期）がある。胴部の文様は横に流れる縄文帯で、35・54・95も類似した文様構成をとると推定される。

横に流れる曲線文様と三角文様の組合せは、後期前葉期に東北から九州地方という広範囲な地域で採用されており、地域的な系譜を保ちながら多くの文様意匠が生み出されている。本資料の胴部文様と同一の系譜として捉えうる資料は、南東北・関東から東海・近畿・瀬戸内という広域でみとめられる。南東北・関東例は堀之内2式の文様意匠のひとつとしてバケツ形深鉢や鉢に採用されており、西日本では縁帯文土器、東日本に系譜を求められるバケツ形深鉢、鉢、浅鉢、注口土器というように多様な器種で採用されている。

東海・近畿の事例を検討してみよう（図8）[10]。横に流れる入り組み文様を描き、あいた空間に三角文様を配している点で共通するが、入り組み部や沈線の数等の細部で差異が生じていることがわかるだろう。まず、入り組み部が2条の沈線帯の入り組みで描かれる1～3（仮にａ型とする）と1条の沈線が入り組む4～9（仮にｂ型とする）に大別できよう。ｂ型はさらに沈線の末端が入り組む5・6（b_1型）と末端どおしがつながって一筆描き状になっている7（b_2型）、入り組み部が直線化していたり、入り組み部に三角状の突出部が新たに加えられる8・9（b_3型）に細分できる。4の和歌山県下尾井例は変則的な例であるがb_1型に含めておきたい。このような細部での差異は、一系譜上で捉えられる時間差として理解できよう。ａ型は、基本的に2条の縄文帯で表現され、三角文を多重にする例があるなど、ｂ型よりも古く位置づけることが可能であろう。下尾井例はａ型からｂ型への変遷過程を示

していると考えることもできよう。b型内でも型式学的な時間差は明瞭である。沈線末端が集約部で入り組むb$_1$型が古く、末端がつながって一筆描きになったb$_2$型が続き、さらに直線化し、新たな突出文様が加えられるb$_3$型が新しくなろう。b$_3$型では横走する3本沈線の中央の沈線が入り組み部で、V字形の文様となるがこれは、本資料にみられるような隆帯や8字浮文に規制された半円文に由来し、独立化したと考えられるので、この点でもb$_2$型→b$_3$型という時間的変遷が想定しうるのである。

以上、みてきたように本資料の胴部文様はb$_2$型として位置づけられるが、b$_2$型の7と比較すれば、入り組み部がさらに直線的になっていることがわかりb$_2$型の中でも型式学的に新しい様相であることを示している。a型、b$_1$型、b$_2$型は2期および併行する東海西部の蜆塚I式[11]の文様意匠として捉えられる。これに対して、b$_3$型は、近畿には分布せず、東海西部の八王子式[12]の文様意匠のひとつとして採用される。本資料は、広域に分布した文様意匠から八王子式特有の文様意匠が生みだされる過程を物語る資料として重要であろう。

a$_3$類は口縁部がく字型に屈曲するタイプで、京都大学教養部出土例[13]に類例があり、3期に属する。

b類（40～42）も縁帯文土器の一類型であるが口縁部内面に文様帯を有するもの。いずれも内面の文様帯は肥厚せず、2期～3期の時間幅の中で捉えられる。

c類（30）は口縁部文様帯を省略しているタイプ。本例のように頸部にも縄文を施している例は少ない。複合鋸歯状の胴部文様から2期に含めうる。

d類は関東に系譜を求められる深鉢。口辺に隆帯を横走させるd$_1$類（31～37）は堀之内2式そのもので2期を構成する器種のひとつである。d$_2$類（38・39）は沈線の末端がクランク状に折れ曲がる特徴から加曽利B1式に対比できる。

e類（43～49）は鉢形土器を一括したので、文様帯や細部の形態の異なるものを含んでいる。44～46は横走する縄文帯を有し、2期に位置づけられる。47～49も胴部に帯状の縄文帯を有すると推定される資料で、2期～3期の幅で捉えられよう。

浅鉢形を一括したf類のうち、50は全面に縄文を加えており、1期的な特徴を保っているが、他は、2期に位置づけられよう。

g類とした注口土器は把手部が1例確認できただけである。

a～g類に分類した有文土器の胴部資料は、56～114にまとめた。このうち、多条沈線が縦位に展開する56～69は1期から2期に、他の縄文帯が横位、斜位に展開する資料は2期に位置づけられる資料が中心となり、91のような沈線が多条化しているものは3期に下がる可能性も有している。109～114の垂下条線をもつ一群は、条線地深鉢となる可能性も有しているが本資料中には口縁部の資料が存在しないので有文深鉢の胴部となる例が中心を占めると想定する。1期では条線文を胴部文様とする例は少ないので、2期の資料が主体を占めるのであろう。

h類とした縄文地土器は、東海西部から近畿・中国・四国地方の縁帯文系土器群に伴出する基本的な器種のひとつである。口縁部に着目すると、肥厚が顕著で前面に縄文帯をもつものから、肥厚が痕跡的となり、器形の外反化を伴いながら、内面や口唇上に縄文帯をもつものへという変化が辿れるが、変化は漸移的で明確な指標をもって区別しうるに至っていない。さしあたって、大きな変化である外面の縄文帯の内面や口唇上への移行がいつ起こっているのかが問題となろう。この点については、2期の基準資料となりうる大阪府縄手第10次[14]、三重県下川原

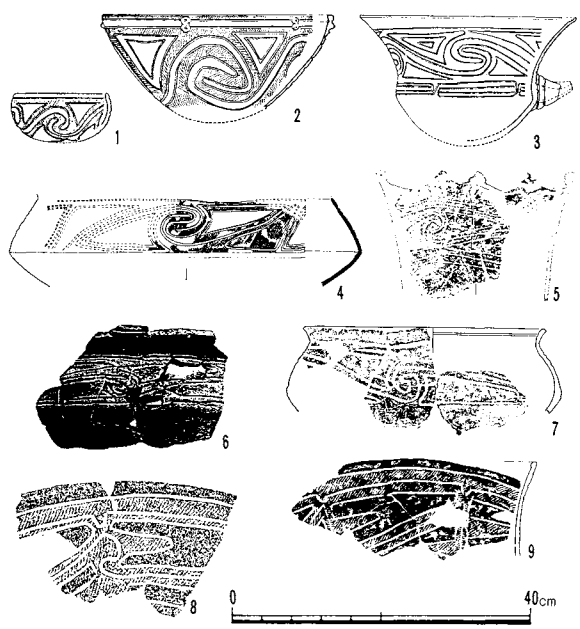


図8　横に流れる入り組み文をもつ土器

ＳＢ９[15]、京都府北白川小倉町[16]では内面縄文帯や口唇上縄文帯は確認されておらず、３期の初期的特徴を有する京都府京都大学教養部[17]では内面に１本沈線で画された縄文帯をもつ例が存在するので、２期から３期への変遷過程において内面や口唇上縄文帯への移行が起こっていると想定し得よう。ただし、奈良県竹之内[18]にみられるように外面の縄文帯も３期まで残存しているので、外面縄文帯を２期以前に限定することはできない。このような観点からｈ類を検討すると、117・118は１期～２期、115・116・119～127は２期～３期、128～130は３期として把握することが可能となろう。

最後に、縄文の撚りの方向について述べる。細別した類のうち、ｃ類（ＲＬ１点）、ｆ類（ＬＲ１点、ＲＬ３点）と有文胴部（ＬＲ２点、ＲＬ３点）については、ＲＬ縄文がＬＲ縄文をしのいでいたが、他はＬＲ縄文が優勢を示していた。全体では、ＬＲ37点、ＲＬ18点、Ｌｒ２点を数え、ＬＲ縄文が優勢な状況を読みとることができるであろう。

５．辻垣内、中戸遺跡と周辺の縄文遺跡

以上、述べたように辻垣内遺跡は後期前葉を中心とし、そのうちでも北白川上層式２期の土器が主体を占めている遺跡であることが明らかとなった。これを第Ⅸ章で報告した中戸遺跡と比較してみると、同じ後期に遺跡の中心を有しながら中戸では後期初頭の中津式および後期前葉の広瀬土壙40段階の土器が主体を占めており、遺跡の繁栄している時期に差があることがわかるであろう。

もう少し、目を広げて検討してみよう。中戸、辻垣内の位置する名張盆地は名張川、宇陀川によって形成されている小盆地で地形的にひとまとまりの地域となっている。この地域の縄文遺跡は名張川左岸（中川原、下川原、奥出、白早稲）、宇陀川右岸（中戸、沢代、赤目壇、垣添、辻垣内、滝野氏城址下層）、宇陀川左岸（城屋敷、辻堂）に群在しており[19]（図９参照）、３つのまとまりで捉えることができる。これらの遺跡群の動向を簡単に眺めてみよ

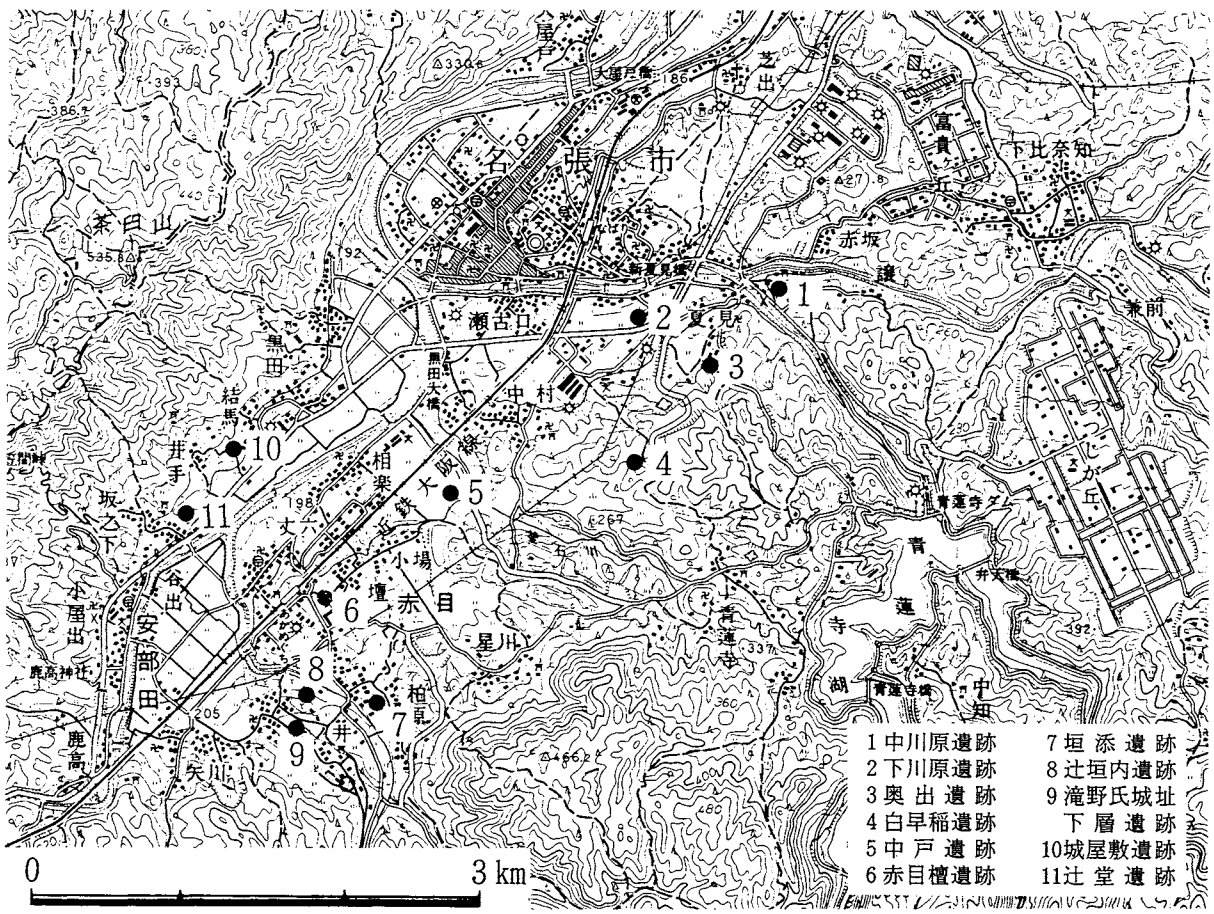


図９　名張盆地の縄文時代遺跡　縮尺１／５万

う。

名張川左岸の遺跡ではやや奥まった丘陵上に立地する白亀稲で有茎尖頭器、自然堤防上に立地する中川原、下川原では前者から中期末～後期初頭の土器、後者から後期前葉の土器・石器が出土している。下川原からは北白川上層式2期の住居跡も検出されており、拠点的な集落であったことがわかる。また、丘陵先端の奥出からは晩期終末の土器が出土している。

これに対して、宇陀川右岸の遺跡群では中位段丘面から沖積低地の微高地・自然堤防上に遺跡は立地している。垣添でみつかった早期の押型文土器が最古で、前期・中期は中戸、赤目檀、垣添、辻垣内でそれぞれ異なる型式の土器が少量出土している。後期は中戸、沢代、垣添、辻垣内でみとめられ、中戸では住居跡や埋設土器遺構なども検出されており、拠点集落の様相を示している。晩期は城屋敷で土坑より、終末の東海系突帯文深鉢が出土している。また、中戸、赤目檀、沢代でも晩期終末の突帯文土器がみられるが量は多くない。一方、宇陀川左岸では城屋敷で後期前葉と晩期終末の土器・石器が出土しており、辻堂では晩期終末の土器がまとまってみとめられている。

以上、概観したところをまとめると名張川左岸、宇陀川右岸の遺跡群では縄文早期以降に遺跡の形成が始まり、前・中期には断続的な足跡を残し、後期前半期に繁栄のピークを迎え、晩期終末期に痕跡が認められ、また、宇陀川左岸では後期前葉にわずかな足跡がみられ、晩期終末には安定した遺跡形成がうかがわれるということになろう。また、名張川左岸と宇陀川右岸の遺跡群では出土土器は型式を異にして重複する部分は少なく、下川原と辻垣内では両者とも北白川上層式2期を中心としながらも下川原の住居跡出土の土器が1期の特徴を残した古い様相を示しているのに対し、辻垣内出土のものは3期につながる新しい様相をもったものが主体をしめるなど、細かな存続年代では微妙な時間差を有していると考えられる一方、宇陀川左岸では、城屋敷出土後期土器（北白川上層式2期）や辻堂出土の晩期土器（長原式併行）は、前者は辻垣内・下川原、後者は奥出や滝野城址下層と時期的に重複しており、同時に存在した遺跡と予想できる。

このように考えることが許されれば、名張川左岸の遺跡群と宇陀川右岸の遺跡群は相互に補完的な関係にあり、縄文早期以降、同一の集団によって選択・移動が繰り返し行われた結果、残されたひとつの遺跡群であり、これに対して宇陀川左岸の遺跡群については間を貫流する宇陀川をはさんで別の集団によって形成された遺跡群として解釈することも可能となろう。ただし現状では、早期末～前期前葉、後期後葉～晩期中葉という大きな空白期間が存在する。この状況を同一地域内で地点を変えて存続していると解釈するのか、あるいは別の地域へ移動していると解釈するのかで遺跡群形成や生活領域の範囲の理解も変わってくるであろう。この問題については今後の調査の進展に待つべき部分が大きく、後日の課題としたいと思う。

（謝辞）　辻垣内遺跡出土の縄文土器の整理および報告書への掲載にあたっては、駒田利治氏、山田猛氏に種々御配慮いただき、駒田氏には写真撮影もしていただいた。川崎保氏、穂積裕昌氏には整理作業を共同しておこなっていただいた。また、森下千鶴子氏には前期・中期の土器について、門田了三氏には名張盆地の縄文遺跡について御教示いただいた。

とくに、以上の方々の御援助がなければ本稿をなすことはできなかったであろう。紙幅を借りて、深甚なる感謝の意を申し述べます。

<注>

① 間壁忠彦ほか『里木貝塚』　倉敷考古館研究集報　第7号，1971年。

② 泉拓良「船元・里木式土器様式」　縄文土器大観　中期Ⅱ，1988年。

③ 大野薫ほか『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』，1984年。

④ 松尾信裕ほか『仏並遺跡』　（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第5輯，1986年。

⑤ 合田幸美ほか『小阪遺跡（その6－3）－調査の概要－』，1989年。

⑥ 谷本鋭一「東庄内A遺跡」　三重県埋蔵文化財調査報告5，1970年。

⑦ 泉拓良「後期の土器 近畿地方の土器」　縄文文化の研究4，1981年。

⑧ 本資料については、すでに土肥孝氏による言及がある（「堀之内Ⅰ・Ⅱ（1・2）式土器について」　帝塚山大学縄文文化研究部会研究紀要2、1988年）が、編年的位置づけについて見解を異にする。

⑨ 芋本隆裕「縄手遺跡第10次調査」　東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28，1987年。

⑩ 図8に掲載した資料の遺跡名と出典は次の通り。

1～3　大阪府縄手：原田修『縄手遺跡』1，1971年。

4－和歌山県下尾井：小野山節・清水芳裕編『和歌山県北山村下尾井遺跡』，1985年。

5－和歌山県溝ノ口：中尾憲市編『溝ノ口遺跡』Ⅰ，1984年。

6－岐阜県禅昌寺：紅村弘編『東海先史文化の初段階（資料編Ⅱ）』，1978年。

7－大阪府淡輪：藤永正明『淡輪遺跡発掘調査概要報告書』Ⅶ，1987年。

8－愛知県八王子：池上年「三河國幡豆郡西尾町貝塚に就きて」　考古学雑誌11－4，1920年。

9－静岡県半場：向坂鋼二ほか『半場遺跡1978年度発掘調査報告書』，1982年。

⑪ 麻生優「土器」　蜆塚遺跡　総括篇，1962年。

⑫ 久永春男「縄文後期文化　中部地方」　新版考古学講座3，1969年。

⑬ 泉拓良「北白川上層式土器の細分」　京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度、1980年

⑭ 前掲注9文献。

⑮ 門田了三『下川原遺跡』，1986年。

⑯ 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」　京都府史跡名勝天然記念物調査報告　第16冊，1935年。

⑰ 前掲注13文献。

⑱ 松田真一「当麻町竹内遺跡試掘調査概報」　奈良県遺跡、調査概報（第2分冊）1984年度、1985年

⑲ 以下の文献を参照した。また、名張市遺跡調査会の門田了三氏から種々、御教示いただくとともに、未報告の遺跡（奥出・辻堂）への言及を許可していただいた。

・田阪仁「名張市赤目　檜・柏原遺跡」　三重県埋蔵文化財調査報告63、1984年。

・水口昌也・門田了三『沢代遺跡』、1985年。

・門田了三『名張市井出　城屋敷遺跡』、1985年。

・門田了三『下川原遺跡』、1986年。

・門田了三『滝野氏城址』、1986年。

なお、滝野氏城址で検出された縄文遺跡については、城址と区別するため、仮に滝野氏城址下層と呼んだ。

表1　辻垣内遺跡縄文土器観察表

土器番号	挿図	図版	地区	層位／遺構	時期	器種	色調	胎土中の砂粒の種類	調整	縄文原体	備考
1	2		D区 e－9	黒褐色砂質土	前期末葉	有文深鉢	灰褐色	石英・長石・雲母	撫で（B）	RL	
2	〃		G－49	——	中期前葉	〃	淡白橙色	〃	〃（〃）	〃	試掘
3	1		D区	5層下部	〃	〃	淡褐色	〃	〃（〃）	RL 縄層	
4	2		D区 e－7	5層 黒褐砂	中期末葉	〃	明淡褐色	石英・長石 雲母・チャート	二枚貝 条痕(B)	RL	
5	〃		D区	排土	〃	〃	黒褐色（F） 明褐色（B）	石英・長石・雲母	撫で	——	
6	〃		D区 r－9	——	〃	〃	淡褐色	〃	〃	LRか	
7	1・2		D区 r－10	SK2	〃	縄文地深鉢	灰褐色	〃	〃	LR	
8	2		〃	〃	〃	〃	暗黄褐色	〃	〃	〃	
9	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	7～9は同一個体
10	〃		D区 e－10	5層 黒褐砂	後期初頭～前葉	有文深鉢	暗黄灰色	〃	撫で(F) 箆削り(B)	RL	
11	〃		D区 e－6	黒褐色土	後期前葉	〃	灰褐色	〃	撫で	——	
12	〃		D区 d－8	暗茶褐色土	〃	〃	淡褐色	〃	研磨	——	
13	〃		D区 e－7	5層 黒褐砂	〃	〃	黄灰色	〃	丁寧な撫で	——	
14	〃		——	——	〃	〃	淡茶褐色	〃	撫で	RL	
15	〃		D区 e－8	5層 黒褐砂	〃	〃	にぶい褐色	石英・長石・くさり礫	不明	——	
16	〃		D区 d－8	暗茶褐色土	〃	〃	明褐色（F） 赤褐色（B）	石英・長石・雲母	撫で	——	
17	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	灰褐色	〃	〃	RL	
18	〃		D区 e－6	〃	〃	〃	黒褐色（F） 灰褐色（B）	〃	研磨（F） 撫で（B）	LR	
19	〃		D区 e－6	〃	〃	〃	暗褐色	〃	撫で	〃	
20	〃		C区	1号墳玄室最下層	〃	〃	赤褐色	〃	〃	〃	
21	〃		D区 e－10	5層 黒褐砂	〃	〃	灰黄色	〃	研磨	〃	
22	〃		D区	7層 暗茶褐色土	後期前葉	有文深鉢	淡褐色	石英・長石・雲母	研磨（F） 撫で（B）	LR	
23	〃		D区 y－6	暗褐色土	〃	〃	淡褐灰色	〃	不明	——	
24	〃		D区	7層 暗茶褐色土	〃	〃	にぶい黄褐色	〃	粗い研磨(F) 研磨（B）	——	
25	〃		D区 e－7	5層 黒褐砂	〃	〃	暗黄褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨(F) 不明(B)	——	
26	〃		D区 e－6	黒褐色土	〃	〃	淡褐色	石英・長石・雲母	研磨	LR	

表1（つづき）

27	2		――	――	後期前葉	有文深鉢	暗褐色（F） 淡白橙色（B）	石英・長石・雲母	LR	研磨	
28	〃		――	――	〃	〃	暗褐色	〃	〃	RL	
29	1・3		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	〃	〃	〃	LR	
30	〃		D区	7層 暗茶褐色土	〃	〃	淡褐色	〃	丁寧な 撫で(B)	RL	
31	3		D区 g－7	4層 灰黒色土	〃	〃	〃	〃	丁寧な 撫で	LR	
32	〃		D区 e－8	5層	〃	〃	明黒褐色(F) 明淡褐色(B)	石英・長石・雲母 雲母・くさり礫	研磨（F） 撫で（B）	――	
33	〃		D区 f－9	5層 黒褐砂	〃	〃	淡褐色	石英・長石・雲母	不明（F） 研磨か（B）	――	
34	〃		D区 e－7	〃	〃	〃	灰褐色	〃	撫で	RL	
35	〃		――	――	〃	〃	暗褐色	石英・長石 雲母・角閃石	〃	LR	
36	〃		C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	〃	
37	〃		D区 d－8	暗茶褐色土	〃	〃	〃	石英・長石・雲母	不明（F） 撫でか（B）	――	
38	〃		D区 f－10	5層 黒褐砂直	〃	〃	にぶい褐色（F） 褐色（B）	〃	撫で	LR	
39	〃		〃	黒褐砂	〃	〃	赤褐色	〃	撫で（F） 研磨（B）	〃	38と 同一個体
40	〃		D区 g－7	4層 灰黒色土	〃	〃	淡赤灰色	〃	研磨（F） 撫で（B）	――	
41	〃		――	――	〃	〃	淡橙色（F） 暗褐色（B）	〃	研磨	LR	
42	〃		――	――	〃	有文鉢	赤褐色	〃	丁寧な 撫で	〃	
43	〃		G－44	――	〃	〃	暗褐色	〃	研磨（F） 撫で（B）	Lr	試掘
44	4		D区 d－6	黒褐色土	〃	〃	明淡褐色	〃	研磨か	LR	
45	〃		D区 d－7	暗褐砂	〃	〃	赤褐色	〃	撫で	〃	
46	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	後期前葉	有文鉢	灰褐色	〃	研磨	〃	
47	〃		G－4	――	〃	〃	淡灰褐色	〃	〃	――	試掘
48	〃		D区 d－8	暗茶褐色土	〃	〃	褐色（F） 暗褐色(B)	石英・長石・角閃石	〃	――	
49	〃		D区	7層 暗茶褐色土	〃	有文浅鉢	淡橙色	石英・長石・雲母	研磨(F) 撫で(B)	――	
50	〃		C区 x－7	暗褐色土	〃	〃	淡褐色	〃	撫で(B)	RL	
51	〃		――	――	〃	〃	暗灰褐色	〃	研磨	〃	
52	〃		C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	褐色	石英・雲母・角閃石	撫で	LR	
53	〃		D区	7層 暗茶褐色土	〃	〃	暗黄灰色	石英・長石・雲母	撫で(F) 研磨(B)	RL	
54	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	注口土器	淡橙色(F) 灰褐色(B)	〃	研磨	――	

表1（つづき）

55	4		D区 e－7	5層 黒褐砂	後期前葉	有文深鉢	黄灰色	石英・長石・雲母	撫で	―	
56	〃		D区 e－6	黒褐色土	〃	〃	黒褐色	〃	〃	―	
57	〃		D区 e－7	5層 黒褐砂	〃	〃	灰褐色	〃	不明	―	
58	〃		D区 e－6	黒褐色土	〃	〃	灰褐色	〃	撫で	―	
59	〃		D区 e－7	4層 黒色土	〃	〃	暗褐色	〃	撫で(F) 削り(B)	―	
60	〃		G－44	―	〃	〃	暗褐灰色(F) 淡白褐色(B)	〃	研磨(F) 撫で(B)	―	試掘
61	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	灰褐色	〃	撫で	RL	
62	〃		D区 e－6	〃	〃	〃	〃	長石・石英 雲母・角閃石	丁寧な 撫で(B)	不明	
63	〃		D区 e－8	5層 黒褐砂	〃	〃	淡褐色（F） 褐色（B）	〃	不明	RL	
64	〃		B区	暗褐色土	〃	〃	灰褐色	石英・長石・雲母	撫で(B)		
65	〃		D区	排土	〃	〃	明淡褐色	〃	撫で	―	
66	〃		D区 e－7	5層 黒褐砂質	〃	〃	淡茶褐色	〃	〃	LR	
67	〃		〃	〃	〃	〃	暗褐色	〃	〃	〃	
68	〃		〃	4層 黒色土	〃	〃	淡褐色	石英・長石・くさり礫	研磨(B)	RL	
69	4		C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	暗濃褐色	石英・長石 雲母・角閃石	撫で(B)	LR	
70	〃		D区 e－7	5層 黒褐色砂	〃	〃	褐色	石英・長石・雲母	不明	〃	
71	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	灰褐色	〃	研磨	―	
72	〃		D区 北壁	―	〃	〃	暗褐色	〃	不明	LR	
73	〃		C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	暗褐色（F） 明淡褐色(B)	石英・長石 雲母・角閃石	撫で	―	
74	〃		D区 g－7	4層 灰黒色土	〃	〃	黄褐色	石英・長石・雲母	〃	LR	
75	〃		―	―	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
76	〃		―	―	〃	〃	暗褐色（F） 黄褐色（B）	〃	〃	〃	
77	〃		―	―	〃	〃	淡灰褐色	〃	不明	〃	
78	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	暗灰褐色	〃	撫で	〃	
79	〃		G－49	―	〃	〃	黄褐色	〃	研磨(F) 撫で(B)	〃	試掘
80	〃		D区 e－8	5層 黒褐色砂	〃	〃	〃	〃	研磨	RL	
81	〃		D区 e－6	黒褐色土	〃	〃	灰黄褐色	〃	〃	LR	
82	〃		D区 e－10	5層 黒褐色砂	〃	〃	黄褐色	〃	〃	〃	

表1（つづき）

83	4	D区 g 7	4層 灰褐色土	後期前葉	有文深鉢	褐色	石英・長石・雲母	撫で	L R		
84	〃	D区 d・e 9	黒褐色土	〃	〃	灰褐色（F） 黄褐色（B）	〃	丁寧な撫で	〃		
85	〃	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃	〃		
86	5	D区 f 7	5層 黒褐色砂	〃	〃	暗褐色（F） 灰褐色（B）	〃	研磨	〃		
87	〃	D区	7層 暗茶褐色土	〃	〃	にぶい褐色	〃	研磨	〃		
88	〃	D区 f 7	5層 黒褐色砂	〃	〃	灰褐色	〃	撫で（F） 細密条痕B	〃		
89	〃	C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	明淡褐色	〃	研磨	〃		
90	〃	D区 d 8	暗茶褐色土	〃	〃	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	L r		
91	〃	D区 e 8	5層 黒褐色砂	〃	〃	淡褐色	石英・長石・雲母	研磨（B）	L R		
92	〃	〃	〃	〃	〃	赤褐色	〃	撫で	〃		
93	〃	〃	〃	〃	〃	黒褐色（F） 明淡褐色（B）	石英・長石 雲母・くさり礫	研磨（F） 撫で（B）	〃		
94	〃	D区 e－10	〃	〃	〃	黄褐色	石英・長石 雲母・角閃石	撫で	〃		
95	〃	D区 g－7	4層 灰褐色土	〃	〃	〃	石英・長石・雲母	研磨	〃		
96	〃	D区 d－6	黒褐色土	〃	〃	にぶい淡褐色	〃	研磨（F） 撫で（B）	〃		
97	〃	C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	〃	〃	研磨	〃		
98	〃	——	——	〃	〃	灰褐色	〃	〃	〃		
99	〃	D区 f－9	5層 黒褐色砂	〃	〃	にぶい淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	〃	〃		
100	〃	D区 f－7	〃	〃	〃	赤褐色	石英・長石・雲母	撫で	〃		
101	〃	D区 e 8	〃	〃	〃	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	〃		
102	〃	D区	7層 暗茶褐色	〃	〃	淡橙色	石英・長石・雲母	〃	〃		
103	〃	D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	褐色～赤褐色	〃	撫でか	〃		
104	〃	D区	7層 暗茶褐色	〃	〃	白褐色	〃	丁寧な撫で	〃		
105	〃	D区 e 7	4層 黒色土	〃	〃	赤褐色	〃	撫で	R L		
106	〃	D区	7層 暗茶褐色	〃	〃	暗黄褐色	〃	研磨	〃		
107	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	106と同一個体	
108	〃	G 4	——	〃	〃	褐色	石英・長石 雲母・角閃石	〃	L R	試掘	
109	〃	D区 e－7	4層 黒色土	〃	〃	黒褐色（F） 灰褐色（B）	石英・長石・雲母	撫で		条線地深鉢になる可能性もあり	
110	〃	D区 e－10	5層 黒褐色砂	〃	〃	暗褐色	石英・長石・雲母	巻貝条痕	-	〃	

表1（つづき）

111	5	G 49		後期前葉	有文深鉢	淡灰褐色	石英・長石・雲母	撫で	―	条線地深鉢になる可能性もあり，試掘
112	〃	C区 w 8	暗褐色土	〃	〃	淡褐色	〃	不明		〃
113	〃	D区 d 8	暗茶褐色	〃	〃	にぶい褐色	石英・長石 雲母・角閃石	撫で		〃
114	〃	G 49		〃	〃	暗褐色	石英・長石・雲母	撫で		〃
115	6	D区	7層 暗茶褐色	〃	縄文地深鉢	暗黄褐色(F) 暗褐色（B）	〃	〃	LR	
116	〃	―	―	〃	〃	黄褐色	〃	削り後撫で 削り後研磨	〃	
117	〃			〃	〃	暗黄灰色	〃	丁寧な撫で	RL	
118	〃	D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	淡灰褐色	石英・長石 雲母・角閃石	撫で	Lr	
119	〃	D区 北壁	―	〃	〃	淡灰褐色	石英・長石・雲母	撫で	LR	120と同一個体
120	〃	D区 f 7	5層 黒褐色砂	〃	〃	暗褐色	石英・長石 雲母・角閃石	〃	〃	
121	〃	D区 d－7	暗褐色砂	〃	〃	淡褐色	石英・長石・雲母	〃	〃	
122	〃	D区 d・e 9	黒褐色土	〃	〃	灰褐色	石英・長石 雲母・角閃石	〃	〃	
123	〃	G 49		〃	〃	淡褐色	石英・長石・雲母	〃	RL	試掘
124	〃	D区	7層 暗茶褐色	〃	〃	暗褐色	〃	〃	巻貝擬縄文	
125	〃	C区	1号墳玄室最下層	〃	〃	にぶい淡褐色	〃	〃	RL	
126	〃	D区 北壁	―	〃	〃	暗黄褐色	〃	〃	〃	
127	〃	D区 d－6	黒褐色土	〃	〃	にぶい淡褐色	〃	〃	LR	
128	〃	D区 e 8	5層 黒褐色砂	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
129	〃	〃	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃	〃	128と同一個体か
130	〃	B区	暗褐色土	〃	〃	黄褐色	〃	〃	RL	
131	〃	G 3	―	〃	縄文地鉢	淡褐色	石英・長石 雲母・角閃石	研磨	LR	試掘
132	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	131と同一個体
133	〃	D区 d・e－9	黒褐色土	〃	縄文地深鉢	淡赤褐色(F) 黄褐色（B）	石英・長石・雲母	撫で	RL	
134	6	D区	7層 暗茶褐色	後期前葉	〃	暗黄褐色	石英・長石・雲母	〃	LR	
135	〃	〃	〃	〃	〃	淡灰褐色	石英・長石 雲母・くさり礫	〃	〃	
136	〃	C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	明淡褐色	石英・長石・雲母	〃	〃	
137	〃	D区 e 10	5層 黒褐色砂	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	RL	
138	〃	C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	明淡褐色	石英・長石 雲母・くさり礫	〃	LR	

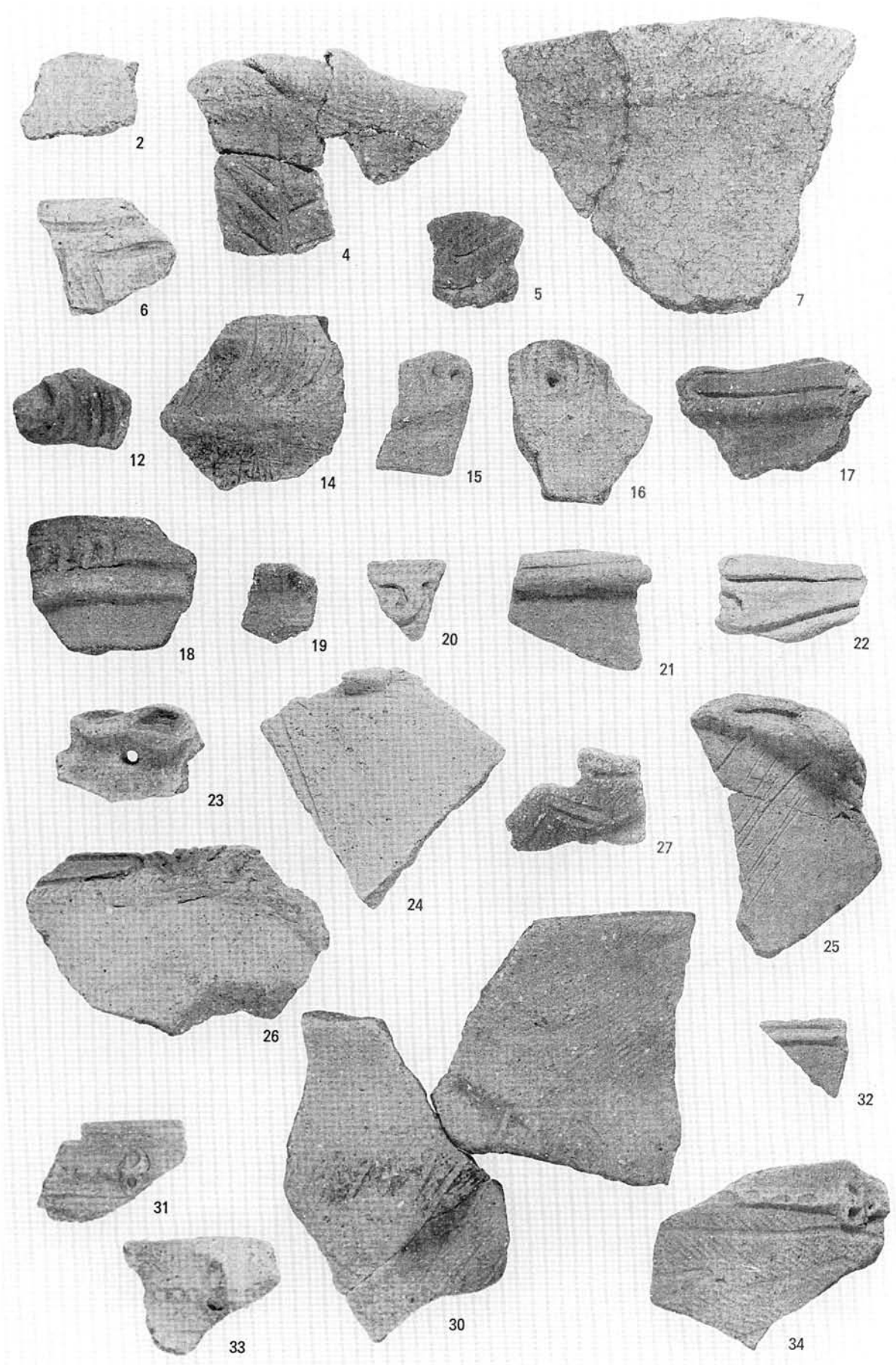
表1（つづき）

139	6		C区 w－7	暗褐色土	後期前葉	縄文地深鉢	にぶい淡褐色	石英・長石・雲母	撫で	L R	
			〃	〃	〃	〃		石英・長石・	〃	〃	
140	〃		D区	7層 暗茶褐色	〃	無文深鉢	淡褐色	〃	箆撫で	——	
141	〃		G－47	——	〃	〃	暗褐灰色(F) 淡白灰色	〃	丁寧な 撫で	——	試掘
142	〃		——	——	〃	〃	灰褐色	〃	撫で	——	
143	〃		D区	7層 暗茶褐色	〃	〃	にぶい黄褐色	石英・長石 雲母・くさり礫	〃	——	
144	〃		D区 e－8	5層 黒褐色砂	〃	〃	暗赤褐色	石英・長石 雲母・角閃石	〃	——	
145	〃		〃	〃	〃	〃	黄褐色	石英・長石・雲母	〃	——	
146	〃		D区	7層 暗茶褐色	〃	〃	淡茶褐色	〃	板撫で(F) 撫で(B)	——	
147	〃		〃	排土	〃	〃	暗黄褐色	〃	条痕(F) 削り(B)	——	
148	〃		——	——	〃	〃	褐灰色	石英・長石 雲母・角閃石	巻貝条痕(F) 不明(B)	——	
149	〃		C区 w－7	暗褐色土	〃	〃	にぶい褐色	石英・長石・雲母	巻貝条痕(F) 撫で(B)	——	
150	〃		G－4	——	〃	〃	淡灰黄色	〃	条痕(F) 削り後撫で(B)	——	試掘
151	7		C区 w－7	暗褐色土	中期？	深鉢	淡褐色	〃	撫で	L R	平底，内面煤付着
152	〃		——	——	後期	〃	褐色（F） 灰褐色（B）	〃	研磨	——	〃
153	〃		——	——	〃	〃	灰褐色	〃	撫で	——	〃
154	〃		D区 d・e－9	黒褐色土	〃	〃	淡橙褐色	石英・長石 雲母・くさり礫	〃	——	網代底
155	〃		〃	〃	〃	〃	淡黄灰色	〃	〃	——	〃
156	〃		——	——	〃	〃	暗黄灰色	石英・長石・雲母	〃	——	〃

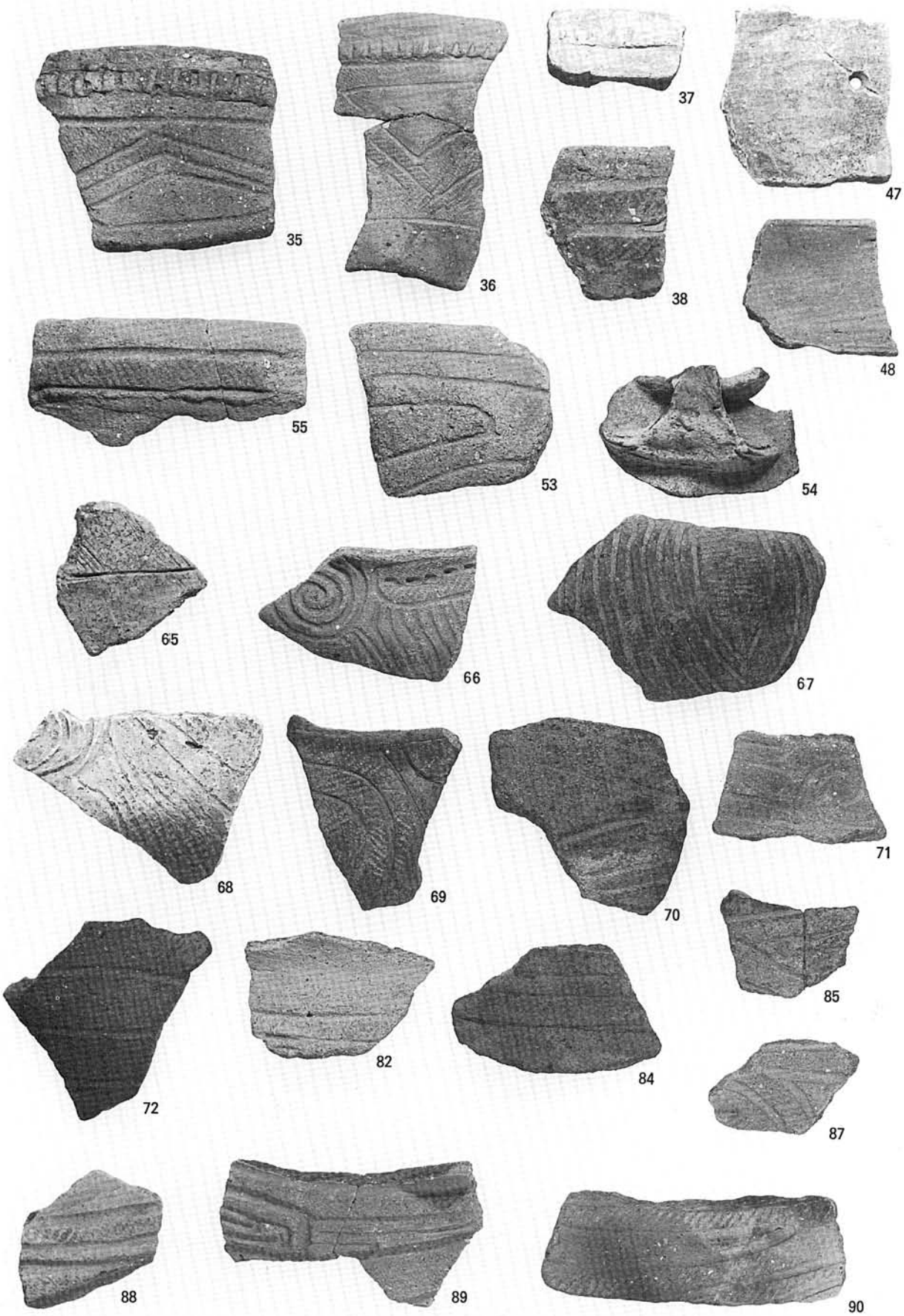
凡例　①胎土中の砂粒の種類は肉眼で識別できたものを示す。

②色調・調整のFは外面、Bは内面をさす。

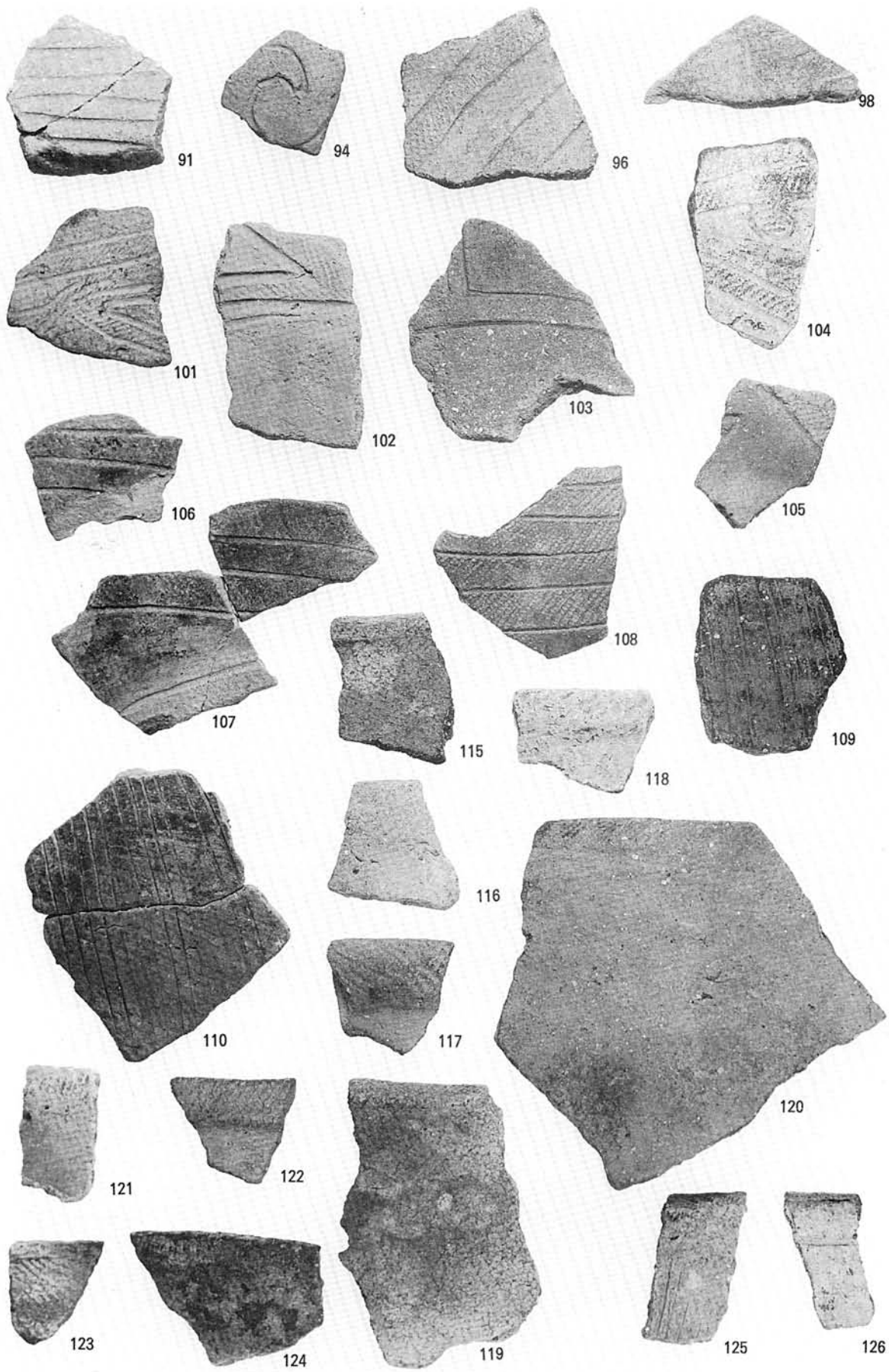
表示のないものは内外同一である。



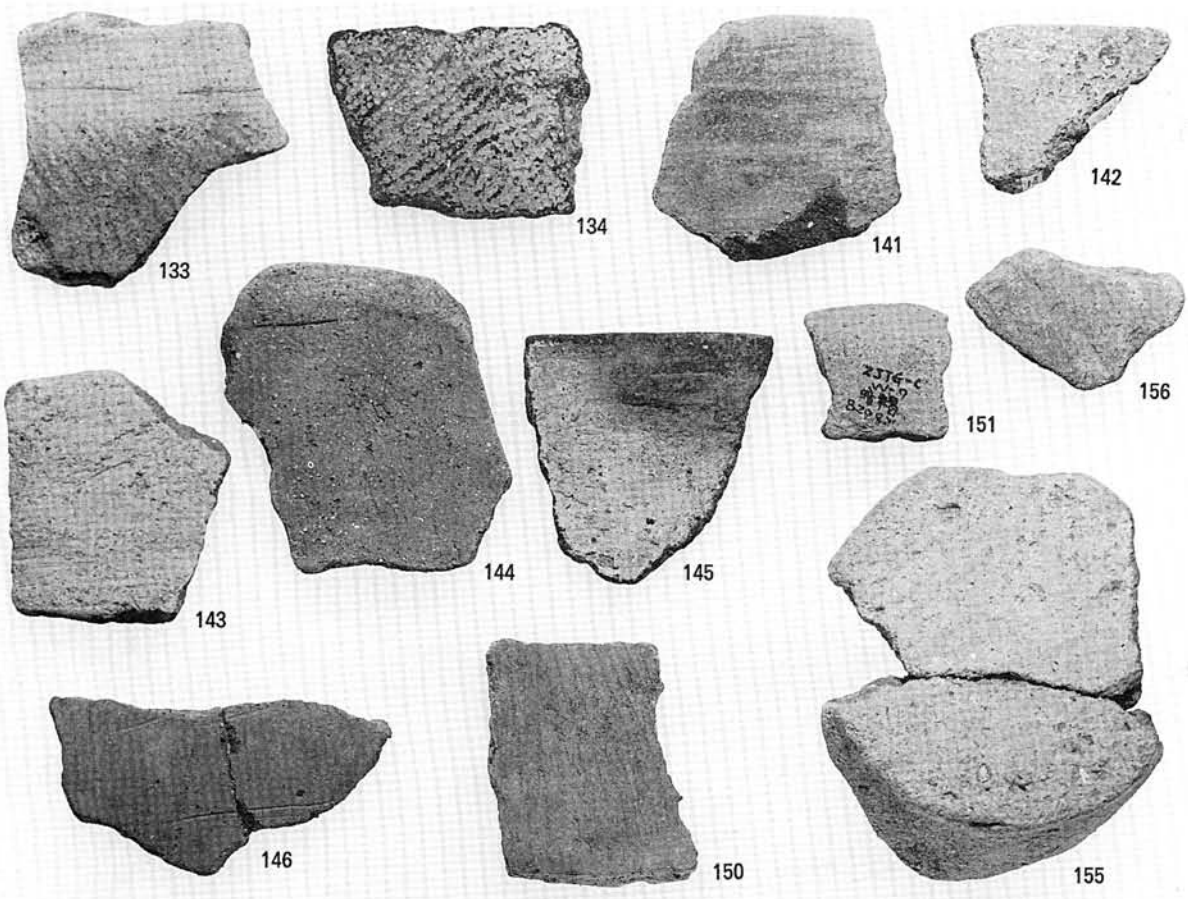
辻垣内遺跡縄文土器（1）

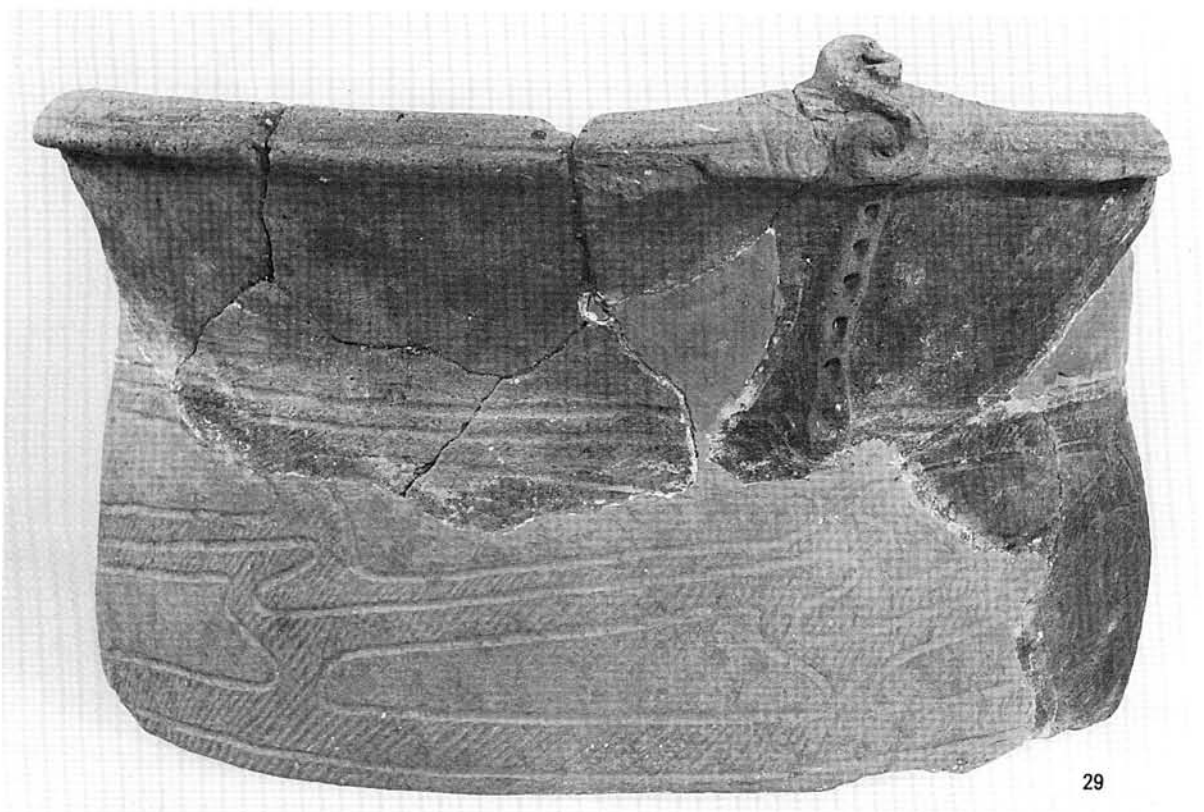


辻垣内遺跡縄文土器（２）

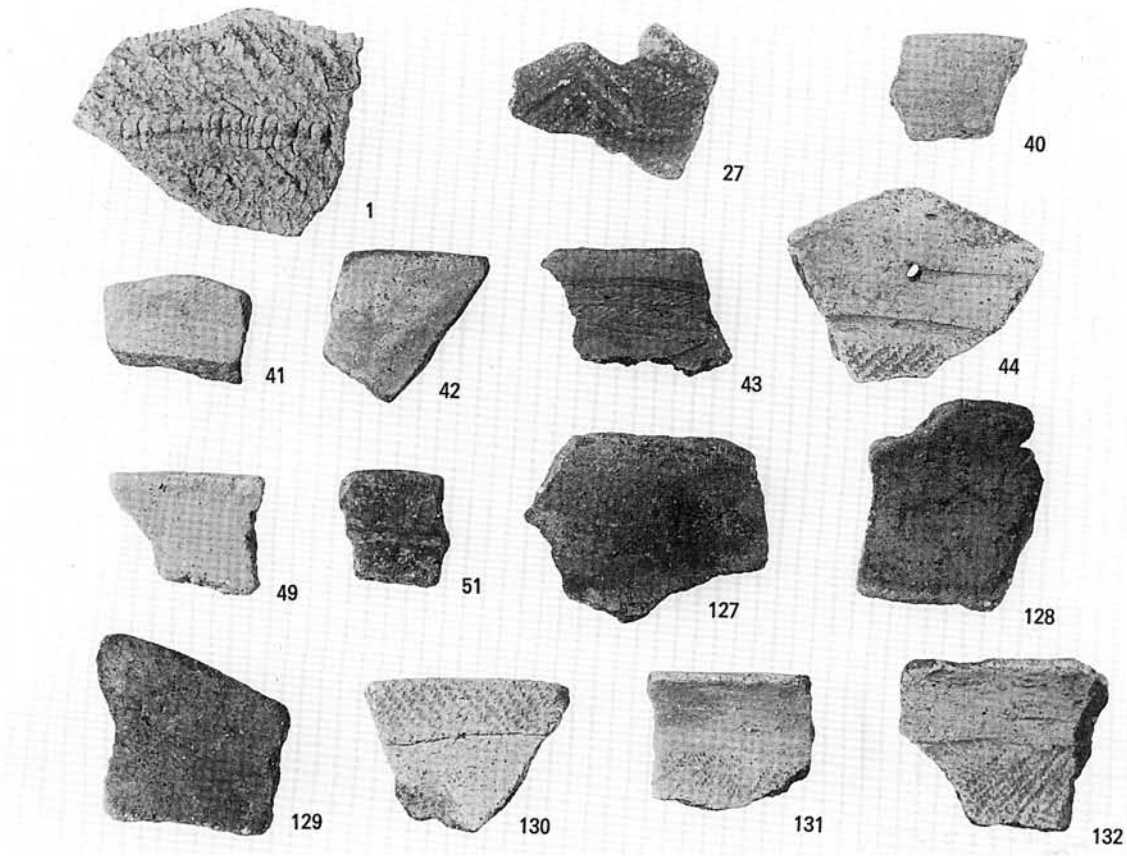

91
94
96
98
101
102
103
104
106
105
107
108
115
109
118
116
110
117
120
121
122
123
124
119
125
126

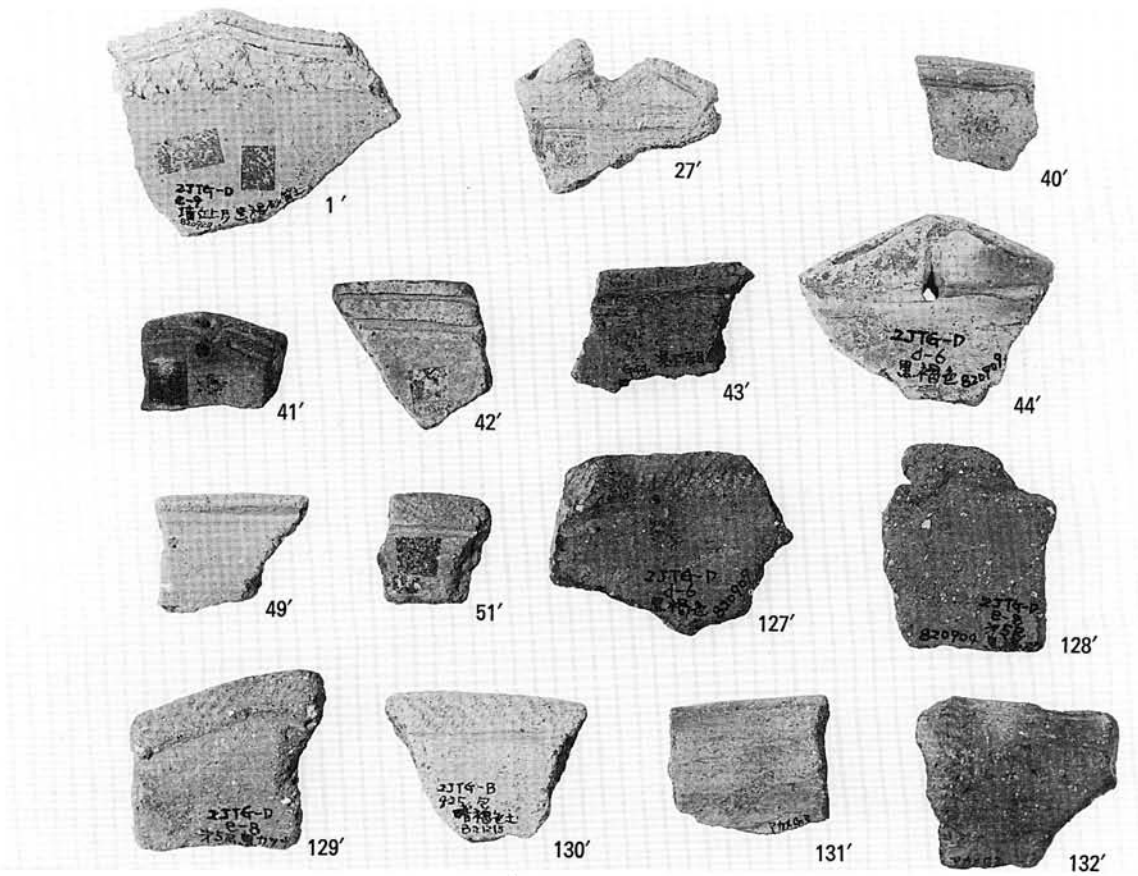
辻垣内遺跡縄文土器（３）





辻垣内遺跡縄文土器（４）


1
27
40
41
42
43
44
49
51
127
128
129
130
131
132


1′
27′
40′
41′
42′
43′
44′
49′
51′
127′
128′
129′
130′
131′
132′

辻垣内遺跡縄文土器（5）

平成元(1989)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 79

昭和61年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告 I

── 本 文 編 ──

平成元年 3 月31日

編 集　三重県教育委員会
発 行　三重県教育委員会
印 刷　有限会社第一プリント社